國譯大藏經

經部

第十一巻

目次

漢譯原文

以上

大唐三藏沙門義淨奉制譯

金光明最勝王經解題

【一、本經の名義】 金光明最勝王經は梵語に蘇跋那婆羅婆娑鬱多摩囉闍蘇怛覽Suvarṇaprabhāsottamarāja-sūtramといふ。或は囉闍卽ち王字の前に、更に帝(因陀羅Indra)の一字を加へ、金光明最勝帝王經と題する本あり。支那に於ては此經北凉より唐に至りて數譯あり。今回の國譯は流通の廣くして文義の最も備はれるに依り、其中最新の譯本たる唐代義淨三藏の十卷本を取れり。經題の解釋に就きては古來眞諦・天台等、諸名匠詳細の說あり。特に天台はその金光明玄義の中數紙に互りて、之を反覆審釋せり。今其概要を擧ぐれば、金光明の三字は、本經明かす所の大宗眼目たる佛陀の三身及三德を表示するものにして、金體の本有卽ち本來清淨尊貴なるは法身を示し、其燦爛の光は以て報身の慈光遍照と大智普照とを語るに足り、其萬人に與ふる寶貨鐶釧、所有彰明の鴻益は以て化身が類に應じて、普く億兆を利樂する大活用と其解脫の勝德とを說くものなり。帝王の二字は更に此の黄金の尊貴最勝なるを强めんが爲に添へたる譬喩にして、此經の最上を表徵す。卽ち王者統治の大權を假り來り

て、本經が諸經貫通の主經なることを示す。曰く、法身を詳說することは是れ華嚴の精要を攝するなり。智慧の不可思議を縱橫獅子吼するは、方に般若一經の大旨を貫けり。而して涅槃の妙諦を敎ふる、慇懃懇切にして、其の四德を闡顯することの雄大なる、實に涅槃大經の眞髓を收むるにあらずや。今案ずるに經に曰く『金光明妙法。諸經最勝王。』と、十字經題を解し得て餘蘊なし。

唐の慧沼は更に敎・理・行・果の四點よりして、頗る周到の經題解釋をその大著、金光明最勝王經疏の中に試みぬ。敎義の點より觀れば、本經の最勝・難得・本來尊貴淸淨にして王者の表示たる金輪に等しき、方に金光明の三字之を示すべく、之に大權大能至尊なる王字を加へ來りて、本經の面目益躍動すべし。理義の側より論ずれば、本經黃金の譬喩を以て佛陀三身の深義を說き(三身品を見よ)、黃金の本性淸淨と鎔銷冶鍊を以て、巧に法報化の妙義を開闡し、而して其妙義の中心たる眞如の理、尊勝なるを以て之を王に譬へたり。修行の邊に就きて見んか、本經演ぶる所の斷惑證理は、一に眞金の鎔銷せられ、冶鍊せられて、本來無垢の大光明を發するを譬とす。其菩薩の佛位繼承を說き、又王子を以て譬喩を說く。是れ金光明最勝王の名ある所以なり。更に之を最後の大果に當てて考へんに、三身三德の妙理之を金光明の三字に當てて巧に其解釋を得る、實に眞諦・天台等諸大師の說く所の如し。

本經經題は斯の如く經中の深理よりして名けたるも、又た經中示す所の諸般の事例に依りて、其命名を得たるが如し。第四品中、金光明赫奕たる一大鼓、妙音聲を發して、遍く滅罪救苦・廣宣佛敎

の大能をなすを說き、授記品中には、銀光大士、未來金光明世界に於て成佛し、金光明如來と號するを明し、其の他譬喩事例金光を用ふる頗る繁く、經中擧ぐる所の佛陀聖者の如き、多く金光明に關係ある名號を具せり。二三の例を摘出せば光輝幢（妙幢）といひ、師子相無礙光といひ、金寶山王、金幢光諸如來といひ、銀幢銀光兩大士といひ、悉く金光に關せざるなし。則ち知る、本經は終始金光明を以て理義を說き、金光明を以て事例を設け、字字句句、唯金光明の煌煌爛爛として全篇を貫きて、十方を照曜するを見るのみ。滔滔たる世俗、黃金を渴愛するの人、何ぞ一度頭を廻らし來りて、本經に就き、この本來清淨無垢の眞金の光輝に接せざる。

【二、本經の原文】 本經の原文は、他の諸大乘經の梵本と共に、幸にも尼波羅國に保存せられ、現に九大法寶（般若・法華・楞伽・十地・華嚴行願品・普曜・悲華・如來三業祕密・金光明）の一として同國佛敎徒の崇奉極めて厚く、寫經の殘存せる多し。ホッヂソン、ライト、ベンドール諸氏が此等古聖典を蒐集せる已來、本經の古寫本は現に歐洲諸大都の圖書館に藏せられ、巴里に二部、倫敦の皇立亞細亞協會、印度局に各一部、ケムブリッヂに二部、ペトログラードに數部、印度カルカッタに一部を珍藏し、吾國に於ては、東京帝大は河口慧海師の將來に依り、京都帝大は榊教授の蒐集に依り、各一部乃至二部の梵筴を寶什となすに至れり。

已上各國祕藏の諸梵本中、ケムブリッヂ及び亞細亞協會所藏の二部を除きては、何れも西曆十九世

紀前後の紙本新寫に屬し、古寫經として價あるもの少し。獨り除外としたるケムブリッヂ本は尼波羅紀元九百十四年（西暦一千七百九十四年）に書せられたる紺紙金泥の逸品なり。亞細亞協會本は時代更に古く溯り、凡十三世紀を示すべき貝葉寫經なり。唯だその完璧ならざるを惜むべしとなす。

現在梵語佛典中、本經原文の引用を見るは、大乘集菩薩學論 Sikṣā-samuccaya の第八章とす。懺悔を論ずるに當り、本經第四品の頌文二十七頌を引き、又第十二章は慈悲を説き、同品の偈二十三頌を證とせり。本書は西暦八世紀頃、印度那爛陀の大學匠を以て鳴りし、寂天 Śantideva の著す所、現在梵本と照合して、研究上頗る重要の資料たり。

輓近、于闐及び、高昌の故地より發掘せられたる古經中には、往往にして晉唐時代に屬すべき本經古寫經の斷片を發見す。亦た唐時の版本梵文斷片を出だすことあり。此等の斷簡零墨、僅かに鳳翼の片羽に過ぎずと雖も、本經研究の上に於ては、實に悉く至貴至重の資料たらざるはなし。

印度佛典出版會は、十數年前カルカッタの藏本に依りて、本經梵本約三分の二を公刊したり。第十五鬼神品に終る。此刊本は惜むべし、對校極めて粗雜にして、脱文錯置實に少からず、且つ異本の對照及び批評的の校訂全く之を缺くを以て、研究資料として、安んじて之に依るを得ず。學人をして甚しく不便多きを感ぜしむ。

現在の梵本は、大體に於て曇無讖の古譯と合す。但し經文の起首、韻文・散文交錯紛雜して、整齊

を缺くものあり、末尾亦た脱落あるが如し。中間の各品に於ても往往にして、原體を失へるものあるを思はしむ。蓋し寫傳の久しき、散脱錯亂免るる能はざるに依らんか。その各品の漢譯諸本との比較は、次節の梵漢品目比較表に徵して、其大概を見よ。

【三、本經の飜譯】 本經の支那に於ける最初の飜譯は、北涼の元始元年より同十年に至る間（西、四一二―四二一） 曇無讖(Dharmaraksa)の金光明經四卷本とす。次で梁の承聖元年(西、五五二)に至り眞諦三藏(Paramartha)の七卷二十二品本出で、續いて、北周武帝の代(西、五六一―五七八)、耶舍崛多(Yasogupta)の金光明更廣大辯才陀羅尼經五卷二十品就れり。隋の開皇十七年(西、五九七)沙門寶貴本經の諸譯を合採して、完璧となさんと欲し、大集等諸大乘の合部に準じ、沙門彥琮、學士費長房等と力を協せ、古譯を統合して合部金光明經七卷を成し、曇無讖の古譯缺く所は眞諦・耶舍の兩譯に照らし、主として眞諦の譯より之を補ひたり。眞諦譯の現に存するものは、唯この補綴の部分に於て之を見るのみ。全體として今傳らざるは甚だ惜むべし。また印度の三藏闍那崛多(Jayagupta)あり、寶貴等が、金光明合部の纂輯事業に關與し、梵本對照に就き頗る功あり、且つ銀主、囑累の二品を譯出して之に添加し、二十四品を成す。百年を隔てて、唐の則天長安三年(西、七〇三)、義淨親く將來したる新梵本に依りて、十卷の金光明最勝王經を譯す。是れ實に今回の國譯に用ひし所なり。

支那譯の外、最重要なるは西藏譯とす。西藏大藏經部甘殊の第七、祕密部(Rgyud-sde)の第十二那

Na字函中、二部の金光明經 Hphags-pa' gser-hod-dam-pa' mdo-sdehi-dvang-pohi-rgyal-pojes' bya-va' theg-pa' chen-pohi' mdo を收む。一は尊者チョールブ (Bande Chos-grub) の飜する所にして、義淨の支那譯を重譯したるもの、大本二百〇八紙あり。他の勝友 (Jinamitra)、戒帝覺 (Śilaindra-bodhi) の兩印度僧、西藏尊者エーセーデー (Bande Ye-śes-sde) と共に譯出する所百七十七紙に亙る。現在の梵本と全く別本に依れることは、其の品數著く異れるに依りて之を知るべし。滿洲及び蒙古語の金光明經は、この西藏語の譯經を底本となせり。

西域に於て近時發見せられし諸種の古典逸書の中、本經の回鶻語の譯本、高昌の遺跡より出で、伯林のミューラー (F. W. K. Müller) 博士、之を研究公刊したり。此譯本は、西藏譯と同じく義淨の漢譯を重譯したるもの也。回鶻語の諸經、特に本經が、一時高昌を中心として盛に行はれしことは、支那佛教史傳の記載する所なりと雖も、其之あるを現證したるは、實にミューラー博士の功を推さざるを得ず。回鶻語の外、于闐を中心とせる西域古語の本經譯本ありしことは、予、ストラスブルク大學教授ロイマン博士と共に、ペトログラード大學所藏の于闐發掘古經斷片を證定したる際之を確めたり。斷片は、唯だ除病品と流水長者品の一部なりと雖も、之に依りて本經の西域の流傳は、推して全豹を窺ふに足れり。本譯又頗る義淨の新譯に近きを見る。

下に支那諸譯と現在梵本との品目對照を掲ぐ。

梵本	曇讖四卷本	合部八卷本	義淨十卷本
Parivarta.	品	品	品
1 Nidāna.	1 序	1 序	1 序
2 Tathāgatāyuṣpramāṇa-nirdeśa.	2 壽量	2 壽量	2 如來壽量
—	—	3 三身分別	3 分別三身
3 Svapna.—4 Deṣana.	3 懺悔	4 懺悔	4 夢見金鼓懺悔
—	—	5 業障滅	5 滅業障
—	—	6 陀羅尼最淨地	6 淨地陀羅尼
5 Kamalākara.	4 讚歎	7 讚歎	7 蓮華喩讚
—	—	—	8 金勝陀羅尼
6 Śūnyatā.	5 空	8 空	9 重顯空性
—	—	9 依空滿願	10 依空滿願
7 Catur-mahārāja.	6 四天王	10 四天王	11 四天王觀察人天
” ”	” ”	”	12 四天王護國
—	—	〔11 銀主〕	13 無染著陀羅尼
—	—	—	14 如意寶珠
8 Sarasvatī-devī.	7 大辯天	—	15 大辯才天女
9 Śri-mahādevī.	8 功德天	12 大辯天	16 大吉祥天女
10 Sarvabuddha-bodhisattva-sandhāraṇī.	”	13 功德天	17 大吉祥天女增長財物
11 Dhḍā-pṛthivī-devatā.	9 堅牢地神	14 堅牢地神	18 堅牢地神
12 Sañjaya.	10 散脂鬼神	15 散脂鬼神	19 僧愼爾耶藥叉大將
13 Devendra-samaya.	11 正論	16 正論	20 王法正論
14 Susaṃbhava.	12 善集	17 善集	21 善生王
15 Yakṣa.	13 鬼神	18 鬼神	22 諸天藥叉護持
16 Vyākaraṇa.	14 授記	19 授記	23 授記
17 Vyādhipraśamana	15 除病	20 除病	24 除病
18 Mātsya-vaineya.	16 流水長者子	21 流水長者子	25 長者子流水
19 Vyāghrī.	17 捨身	22 捨身	26 捨身
20 Sarva-tathāgatastava.	18 讚佛	23 讚佛	27 十方菩薩讚歎
”	”	”	28 妙幢菩薩讚歎
21 品目なし。	”	”	29 菩提樹神讚歎
—	—	—	30 大辯才天女讚歎
—	〔19 囑累〕	〔24 付囑〕	31 付囑
21	18〔19〕	24	31

曇無讖譯の第十九囑累品は、高麗本に之あり、縮刷藏經之に從ふも、明本には全く之を缺けり。古序に依るに、曇譯は唯十八品あるを明記せるを以て、之なきを正しとすべし。今現本に就き精査するに、後人合部中の同品を持ち來りて添加したるの跡歴歴たり、故に明本を正しとす。表中の第十九品括弧は之を示せり。

合部の中、眞諦譯に缺くる所は第十一銀主と第二十四囑累にして、此二品は闍耶崛多の譯し加ふる所、故に眞諦譯は二十二品あるのみ、表中の括弧せる二品は之を示す。

梵本の内容概説に就きてはビユルヌーフ「印度佛教史緒論」ラージエントラミトラ「尼波羅佛教文學」其他を見よ。

西藏譯底本の梵經は、全く漢譯と異り、品數二十九卷を具へ、一瞥著く義淨譯と大同なるを認む。但し宗教大學藏本、此部分將來の際、濕潤浸蝕を受くる甚しく、後半部は紙紙密著、字字磨滅して殆ど讀むべからず。善本を借り得て、之が對照を公にする閑暇なかりしは、切に遺憾とする所也。

【四、本經が教理史上の位置】 本經は開卷直ちに、佛陀法身の常住不滅を獅子吼し、如來の滅度は唯だ是れ愚劣の衆生の誤り見る所、如來の壽量は無邊際を盡し、無量劫を極むるも、之を數へ知るを得ざるを極說し、佛陀永遠に靈鷲山に在りて、大法を宣傳するを示す。深義、實に法華と符を合するが若し。經に曰く、

我常住靈山。宣說此經寶。成就衆生故。示現般涅槃。凡夫起邪見。不信我所說。爲成就彼故。示現般涅槃。

又た曰く、

佛不般涅槃。正法亦不滅。爲利衆生故。示現有滅盡。世尊不思議。妙體無異相。爲利衆生故。現種種莊嚴。

と。之を夫の法華壽量品の自我偈二十餘頌と照らし來れ。誰か其の間に軒輊を認むるを得んや。造構の上に於ても夫の寶塔涌出は、彼の寶塔品と此の捨身品と雙鳳聯飛の同工をなし。彼に龍女成男の一齣あれば(提婆品)、此に天女轉丈夫の出場あり(依空滿願品)。彼の陀羅尼の一品はこの第十一品已下八品の廣說と對す。法華と本經と酷似斯の如し。その廣宣流布を勸むるの慇懃を極むる二者亦相類す。矧んや其の豐麗爛絢の詩句、雄大瑰麗の記述、辭を極め、想を盡くして、佛壽の難思議を歌ひ、涅槃常住の妙理を詠歎するは、自ら本經の特色、明快比すべきなく、深廣例すべきなきをや。次で廣說する所の涅槃の眞詮、三身の妙諦の如きも、精細詳密、實に諸經中の宏範として推すべく、懺悔の法を說くの懇切周到、菩薩十地の修行を敎ふるの徹底せる、他に之が類例を求むること甚だ易からず。

本經は、既に此の如く大乘諸聖典の模範として、大乘敎理闡顯の上極めて重要なる敎旨に富む。故に、古來疏を製し釋を造りて、玄義を闡暢し、幽旨を發揮せるもの少からず。梁の眞諦三藏は、其の譯經の後、大清三年、十五卷の疏を製したり。此の大著、惜むらくは今傳はらず。僅に諸家の釋中に於て、其引文を見るのみ。隋の吉藏法師の疏一卷、現に行はる。天台大師の玄義兩卷、及び文句六卷は、相傳へて學者の研究を怠らざる所、宋に至り四明の知禮は、玄義に拾遺記五卷を製し、文句に記六卷を作り、永嘉の從義は、前者に顯正記三卷、後者に文句新記七卷を述作したり。この天台の本疏及び知禮の註疏を合璧とせる明の明得の分科及び會本は最も研究に便也。宋の四明沙門宗曉の照解

二卷は簡にして要を得、最も力を音訓の是正に用ひたり。是等皆舊譯經を釋せり。義淨新譯の註解に至りては、唐の慧沼の金光明最勝王經疏十卷最も指南となすに足る。日本に於ける撰述は今略す。

本經の諸大乘經中、樞要の位置を占むる上の如く、後代註經述作の諸家、此の經を依用尊重する、盛ならざるにあらずと雖、而も教理史に於ては、法華・般若・華嚴・涅槃に比して、甚しく振はざるの觀あり。又た勝鬘・維摩・楞伽諸經の如き特殊の地歩を占むるを見ず。蓋し一奇といふべきなり。謂ふに、斯の如きは本經が下に述ぶるが如く、教會史上の勢力、甚だ隆昌を極め、鎮護國家・滅罪禳災の實際信仰としての崇奉、熾盛を盡くしたるの極、其の高遠深妙の理論方面は、自ら高閣に束ねられ、祕龕に藏せられて、儀式供養、禮懺呪法の前に、偶其の闡明開發の機を逸したるにあらざるなきか。

諸家本經の大乘教理上の位置を判ずる中、天台は之を第三の方等部に屬し、別圓二教を兼ぬる通教の攝となせり。蓋し本經の玄旨法華と同じと雖も、彼が唯有一乘を力說するに對し、本經が猶三乘同懺を許し、人天四果の果報を示すを以てなり。而も是台門一家の私釋、嚴格の聖典批評と教理剖判より見ば、更に大に論ずべき餘地なきにあらざるべし。三論の吉藏は之を大乘菩薩藏頓教の攝屬とす。若し夫れ眞諦が本經說時を、法華已後涅槃已前と釋せるを斥けて、玄義の疏主が、大に論辯を費したるが如きは、今甚しく切要ならざるを認む。

【五、本經が教會史上の位置】 本經の教理史に於ける勢威は、法華に遜り華嚴に下るの觀あるも、實

際信仰に至りては、經の流布する所、至深至大の感化を與へ、其の崇奉の隆盛は、自ら諸經に冠たるの狀あり。是れ經中に說く所の懺悔滅罪の淸軌が、大乘敎徒の實修要求上切要なるものありしと共に、其の王法正論品に說ける、一國の元首に對する敎訓、及び國家が被るべき特別の冥益が、大に佛敎諸國に歡迎せらるべき性質を有するに依り、且つ散脂大將・辯才天・吉祥天女等の禳災致福の利益は、一般佛徒に甚大の慰藉と信賴とを與へたるが爲なり、斯の如くして本經は、國家的にも、宗敎的にも、個人的にも、中世佛敎徒の切實なる實際の要求に應じ得たる最上最大のものなりき。此の經が、實際信仰界の霸權を握れるもの、決して偶爾ならざるなり。

唐代の記錄に依れば、佛敎を初めて漢土に傳へたる、摩騰三藏の傳中、印度に於て本經が護國安民の要法として、既に盛に行はれしを見るべし。摩騰が印度にあるや、一小國本經を講宣したるが爲めに、その護國安民の功力に依りて、敵國の侵迫、自ら止みたるを傳ふ。支那に流傳するや、天台は懺法を製して、此の經の讀誦を勸說し、且つ經中の流水長者品に依りて、放生の淸規を始め、後代に至るまで盛に行はれたり。宋代に至り、補助儀・最勝懺儀の如き、金光明讀誦に關する方則書稱述せられ、本經が廣く僧俗の間に行はれしを證す。宗曉の金光明照解に曰く、「斯の經、部は方等に屬し、醍醐の比にあらずと雖も、而も受持するものの衆きは乃ち法華と侔し」と。以て當時流傳の旺昌を見るべし。又た曰く、「此經、北涼より始めて、今に至る千有餘載、披誦の盛なる、感驗惟れ多し」と。

元の時代に於ても、朝旨を以て金光明を書寫せしめしこと、誌傳に見ゆ。明代に於ても此經の誦持益盛にして、以て清朝に及べり。

西域諸國に於ては、四天王、特に毘沙門天王の信仰と共に、本經の熾に行はれしは近時發掘の資料に徵して、之を窺ふに難からず。于闐・高昌諸地に於て、前に述べたるが如く、現に西域諸國語の本經斷片を發見する多く、其の梵語の刊本すら、唐時既に同地に存したるを見れば、其の流布の廣くして、且つ昌なる推斷すべきなり。且つ西藏及び回鶻の諸族、大抵支那の譯本を重譯したる、本經が國家民族鎭護の至寶として、如何に諸民族の間に重きをなしたるやを證するに足れり。

吾國は佛教諸國中、恐く最も此の經の崇奉を極めたる所ならんか。佛教渡來の當時、聖德太子の四天王寺は本經に依りて創建せられ、爾來鎭護國家三部大經の隨一として、特に尊重せられたり。天武朝に於て本經の講說漸く盛に、護法善神の信仰、及び吉祥天女の崇拜は、益本經の讀誦を以て國家安泰の至要となすに至り、國家平安の祈禱として、諸國に於て之が讀誦を奬勵し、爾來恒例となれり。聖武帝卽位するや、舊譯を改めて、義淨新譯の十卷本を用ひ、之を勅寫して諸國に頒布すると共に、諸國に國分寺を造り、法華滅罪寺と對して、特に金光明護國寺を立て、必ず一部の最勝王經を備へしめ、宮中及び諸寺に於て、盛に本經の講說を行へり。稱德の朝、衆僧を宮中に入れ、大極殿に於て一七日間、晝は最勝王經を講じて國家の平安を祈り、夜は吉祥懺悔を修して五穀の豐登を禱れり。

是れ卽ち宮中御齋會の始にして、延いて桓武帝の朝に至りて恒例となれり。下りて淳和帝の天長年間藥師寺の最勝會始まり、後代三會の一として、講説莊嚴を極む。其の後圓宗寺に於ても亦最勝會行はる。一條院の御宇、東大・興福・延暦・園城四大寺の學僧を簡撰して、講師を命じ、清涼殿に於て、最勝王經を講ず。之を最勝講と稱し、南北朝時代に於ても猶其の嚴儀を見たり。後野山に於ても、弘法大師親筆の本經を以て講經となし、天下安全のために、十囘十講の論場を開きたり。

古代に於ける本經の崇奉は、實に此の如く至盛至大を極め、凡そ佛教法會の重大なるものは、實に本經講説を以て、第一となせり。故に現時殘存の古寫經中、金光明は特に其の優秀なるものを留め、名山大刹・搢紳富豪にして、現に千年の古筆を祕藏するもの少からず。

民間に於ても、鎭國護法の諸天善神、就中、毘沙門天及び辯才天女の信仰は、本經の讀誦を普及せしめ、特に後の女神の崇敬は、德川幕政の時代より今日に至るまで、猶ほ一方に勢力を占め、本經の尊奉、また隨つて頗る深きものあるを見る。

【六、本經の分文】 義淨新譯の經典は三十一品より就る。各品の分類に就きては、古來の釋家通途大小乘諸經の解剖に用ふる序・正・流通の三分法を適用す。眞諦の意に依るに、同譯二十二品中、初の一品は序分、中の十九品は正宗分とし、後の二品を流通分とす。天台等の諸家之に反す。且つ新譯本に就いて云はば、第一品の序分たるや古今同じ。第二壽量品より、第十の依空滿願品に至るを正宗分と

なし、第十一の四天王觀察人天品已下、悉く之を流通分となす。舊經之に例して知るべし、蓋し本經の正說たる、菩提涅槃の因果・斷惡修善・得道證果の精要は、第十品に至りて既に盡く。第十一品已下は、唯本經の持讀流通・守護利益を勸說するを主となすに過ぎざればなり。

今是等諸家の判釋を基礎と爲し、試に私見に依りて、左に本經の分科表を作る。必しも古師に依らず、唯だ大體に於て通解し易きを主とす。

- 一 通序……第一品
- 二 本文
  - 基礎的理論部分　＝本經の大宗＝
    - 哲學方面(理)
      - 本體(自性)……第二品
      - 顯象(敎化)……第三品
    - 道德方面(行)
      - 正行
        - 淺行……第四、第五品
        - 深行……第六品
      - 助行
        - 讚歎……第七品
        - 持呪……第八品
      - 行理
        - 空果……第九品
        - 空因……第十品
  - 應用的實際部分　＝本經の奉持＝
    - 神明としての奉持……第十一品至第十九品
    - 國家としての奉持
      - 正說……第二十品
      - 緣由……第二十一品
      - 護持……第二十二品
    - 團體としての奉持
      - 總說……第二十三品
      - 緣因
        - 除病……第二十四品
        - 救生……第二十五品
    - 個人としての奉持——捨身……第二十六品

本經の大觀略ぼ斯の如し。其の哲學方面は、實に法華・涅槃、究竟圓頓の大宗を說く。道德方面は、般若の妙慧を根柢とし、方等諸經修行の精要を敎ふ。最後に其の空性と、依空滿願の二品を說く所以は、實に正行正修の基礎にして、平等の行、斷常の二邊を離れしむ。大乘の修行、此の空法ありて始めて完し。蓋し維摩・首楞嚴・勝鬘等と響を同うす。應用方面に入り、諸天善神の護持九品は、祕密諸經の初門を代表すべし。此の間、第十三の無染著陀羅尼品を、四天王と他の諸大神女との間に挿めるものは、空性・滿願の二品を、修行方面の强力なる殿軍となしたると同一筆法にして、神呪が方處を超え、時間を離れ、一切の事理緣行を越踰せる、諸佛の祕意般若なるを說き、之に名くるに無染著の名を以てせり。謂ふに此一品の中堅ありて、四王・辯才・地神・藥叉等諸品の呪法、悉く正見・正思の大用たるを明にするを得べし。若しこの畫龍點睛あらずんば、或は恐る、諸品の祕呪巫蠱左道の毒蛇たるの弊に陷らざるなきを。經意甚だ深重、讀者輕忽に看過し去る勿れ。

王法正論の一品は、本經の國家に對する深義の應用を說けるもの、緣由護持相待ちて、治國の要、唯だ大敎興隆にあるを論ずる實に至れり。第二十三品已下の三品は、妙幢及び其の二子の授記を主とすと雖も、兼て十千の天子得道證果の因緣を明す。是れ實に團體として、社會として、本經の受持を

說くもの、其の因緣として、疾病の救療と生物の救濟との二編を出だし、一面印度古醫學の綱要を說きて、疾疫窮苦の民衆に濟生の恩を與へ、以て救療慈善の本旨を明にすると共に、他面には、生物愛護の仁慈を開演して、大慈方便十千の窮魚を、涸渇の池に救ふの實例を擧ぐ。是れ實に救濟事業の模範にして、現今急を訴ふる社會問題の解決、實に此の經の奉持に依りて、其の光明を認むべきを示せり。是後に、個人の本經奉持の實例として、佛陀親ら其の本生を開示し、玆に餓虎の爲に身を捨つる難行苦行を說述し來り、文辭亦た雄大・富贍を極め、詩偈光彩燦爛として、一場の大悲劇は、覺えず讀者をして身毛竪立・嗚咽啼泣せしむ。而して此の最後の捨身は前の救療・濟生と相應じ、淺深次第に進み、一巒は一巒より靑く、一谿は一谿より幽なる、重層の法をなす所、文辭意匠の妙、崇高雄大の信念と相待ちて、實に天下聖典の奇觀を極む。

【六、本經の內容概說】 一　序品　佛陀、王舍城の靈鷲山にありて、諸大菩薩・羅漢衆・天龍八部・神仙・諸大國王・淨信善男女の禮敬を受け、晡時に禪定より起ちて、金光明の妙法・最勝の諸經王を宣說し、又た吉祥懺悔の要法を演べて諸の罪業を淨除せんとす。四方の四佛來りて證明加護す。佛陀また本經の威力を說き、護世四天王、大辯才天女等、天神地祇の衛護あるべきを敎ふ。

二　如來壽量品、妙幢菩薩、佛陀が不殺施食の福德に依り、其の他の獻身慈惠の果報の爲めに、壽命長遠なるべきに、短促、唯だ八十年なるやを疑ふ。佛陀其の念を知り、神力を以て莊嚴の妙土を現じ、

四方の四佛、光明を放ちて來り臨み、妙幢に對して佛壽の齊限なきを敎へ、頌を説きて海水滴數を知り、高山塵量を數ふべくも、佛壽到底測り知るべからざるを説き、更に妙幢が何故に釋尊が短促の壽命を示現するやとの問に對して、信解微薄、善根下劣の衆生、惡見邪思の外道のための故に短促の壽を示して、難遭別離の想を生ぜしめ、之を化導することを述ぶ。時に會中に法師授記婆羅門あり。世尊滅度の近きを哀泣して佛舍利を得んことを請ふ。一切衆生喜見童子之を聞き、天地轉覆するも佛の遺身得べからざるを説きて巧妙の頌を歌ふ。佛陀終に妙幢其他の爲に三種の十法及び十如來希有行を説述して、重重に涅槃の深義を説く。文義廣大、精細に研尋すべし。

三　三身品　佛陀虛空藏菩薩の請に應じ、法應化の三身を詳説す。蓋し前品菩提・涅槃の二果を説き如來常住法身寂靜の玄旨を説くと雖も、菩提智果の大用に至りては未だ之を説くこと明ならず。卽ち本章ある所以なり。此品あり如來の大悲方便利樂有情の本懷方めて顯はる。

四　夢見懺悔品　妙幢菩薩夢中に一人大金鼓を打ちて妙響十方に至りて懺悔の法を説くを見、佛前に至りて之を説く。自己罪業の告白發露の至痛至切にして、悔過懺罪最も殷重を極む。

五　滅業障品　前品の悔過と關連し、正しく懺悔の要法を説く。中に事理の兩懺あり、事懺は晝夜六時十方諸佛に至心禮敬して誠實に造罪を懺悔し、理懺は一切諸法の皆空なるを觀じ、生滅因緣の不可説なるを了知する時、所有業障悉く除滅するをいふ。次で大乘菩薩の通法たる隨喜・勸請・迴向を明せ

り、禮佛・懺悔と合せ之を大乘の五悔といふ。

六　淨地陀羅尼品　前來の二品は地前凡夫二乘の淺行を明かし、今品は菩薩十地の深行を示す。大體十波羅蜜に依りて十地の行を說き、次で十障の斷除を細釋す。

七　蓮華喩品　金龍王常に蓮華喩を以て諸佛を讃ずるを明かし、佛身の微妙嚴淨を讃歎す。是一面には佛果讃美と共に他面には此咏歎の勝善よく懺悔の大法を聞くを得るを示す。卽ち昔日の金龍王は會上の妙幢にして、佛身の美より入れる信念、詩に現はれし宗敎味は遂に彼岸に達すべき勝善なるを示す。本經中味甚だ深し。

八　金勝陀羅尼品　滅罪除障淨地修行の助業として持咒禮敬の法を說く。蓋し表徵と祕密とは宗敎信念に於て必らず附隨すべきものなり。

九　重顯空性品　大乘諸經の眞髓一空字にあり、前來懺悔淨地等の諸品中に於て、其の根柢空にあるを說かざるにあらず。而も行に專なるの極、有に滯り事に執して我法二執除き難きを恐れて、重ねて此品を說き、四大五蘊體性倶に空にして、六根六境妄に繫縛を生ずるを了達せしむ。

十　依空滿願品　前品の空を明かすや、唯所觀の境として、空果を說けり。今二空修行の空因を示し如意寶光耀天女を拉し來りて、菩提の正行は平等の行なり、是れ生滅相を離れ、有無二邊に著せず、一異の二數に墮せず、法界卽ち五蘊と觀じ、終始寂靜、本來自ら空なる上に、萬善を修め、萬德を行

ずるを云ふ。末段天女と大梵天王との問答の間、天女の轉成男子の一場あり。諸法の平等・眞如の不異を論じ得て甚だ痛快を極む。理路窮まる所一點の紅を添へて、間曲情趣饒き、また本經の文藝に於ける餘技の生動を見るべし。

十一　四天王觀察人天品　四天王人天を觀察し、正法の修行、卽ち本經奉持の國王及び人民僧俗等あるときは、二十八部の神將を率ゐて之を護衞し、恭敬尊重を受けしめ、安隱豐樂にして、諸の災患を離れしむべきを說く。

十二　四天王護國品　特に四大天王の正法護持を力說し、本經傳持の國王を守護して、其國福民安を得しむるを述ぶ。本經の流通奉持を勸說する甚だ至れり。四大天王の咒出づ。

十三　無染著陀羅尼品　陀羅尼は方處非方處・法非法・三世・事緣・生滅を超絕せるを本義とし、菩薩利益のために假にその功用正道勢力を安立するを說く。之を大乘の信解となし、尊重となす。此品の重要は、前項既に一言を費せり、また贅せず。

十四　如意寶珠品　四方電王離怖の呪、觀音・執金剛・梵天・帝釋等の諸咒を擧げ、其威力を說く。

十五　大辯才天女品　天女が本經讀誦講說の行者に對し、聰慧を增長し聰明大智・博綜の奇才・自在辯才を與ふるを說き。また咒藥洗浴の法を明し、以て病疫闘諍蠱毒等の障難を除滅す。品末に讚文あり、天女の威德功力を讚す。

十六　大吉祥天女品　前品辯才天が主として智慧辯才を賦與するに對し、本品の女神は飮食・衣服・臥具・醫藥其他の資財を本經奉持の行者に授て乏少する所なく、又五穀百果をして滋榮せしめ、所有苗稼悉く長育するを得しむ。謂ふに佛道の修行、本經の傳持流通に就ては、福智の二者具備せざれば功を收むること難し。前品主として智慧才藝の冥助を述べ、今品と次品とは專ら福德富榮の天祐を示す。

十七　大吉祥天女增上財物品　吉祥天女、常に毘沙門居城の庭苑中に、七寶所成の宮殿を構へて、之に住む。若し人諸佛の名號及び本經の名號を稱揚して、天女を供養請召せば、財穀を增長せしめ、希求の諸願皆成就せん。

十八　堅牢地神品　本經奉持者に對する地神の守護利益を說く。神呪數篇あり。

十九　僧愼爾耶大將品　僧愼爾耶は夜叉鬼神の統領なり。二十八部の夜叉諸神と共に、本經奉持者を擁護救攝し、一切の災横厄難なからしめ、福德智慧を授く、神呪及び壇法あり。

二十　王法正論品　世尊堅牢地神の請に應じ、王法正論治國の要を演說し、國憲國法の嚴正、造惡遮止の大本よりして、自利利他、偏黨なく、正法を以て民衆を統御し、純善億兆に臨み、正法法寶を尊重すべき王道を說き。其非法惡政を行ひ、正法を遵奉する能はざる國君の被るべき災横厄難、國家の喪亂滅亡を痛言する剴切深酷を極む。心地觀經報恩品及び薩遮尼乾子經等と對比して王道の至訓、眞に範を千載に垂る。この王道を行ひ正法に依り、一切の民衆をして十善を行ぜしむる、君主の享くべ

き國土の昌平豐樂、諸天善神の尊重守護に至りては、惡政亡國の痛誡と反映し、本品特に力を極めて之を述べたり。

二十一　善生王品　前の王法正論の實例として、世尊往昔善生轉輪聖王として、惠施・仁愛・正法を以て民を治め、特に金光明最勝の寶典を聽受護持して、其說法者を尊敬するの因緣を擧ぐ。

二十二　諸天藥叉護持品　普く天界の諸神夜叉鬼神の名を列擧し、此等が本經奉持者を擁護するを說き、特に國土の安寧・國賊怨敵の退散を明かす。

二十三　授記品　佛陀、妙幢菩薩及び其兩子銀幢、銀光に當來成佛の記莂を授くると共に、來會せる最勝光明已下十千の天子の爲に未來大菩提の妙果を獲得すべき證明を與ふ。

二十四　除病品　今品後品と共に前品に當來得佛の授記を得たる、妙幢父子及び十千の天子、往昔の淨因を述ぶ。此品先づ流水長者子、其父持水よりして醫術の奥妙を學び、疾疫に惱める無量の衆生を救療して、大力醫王の名稱遠近に遍きを說く。持水長者其の愛子の爲に古仙療病の秘法を授くる所、印度古醫學の大要を擧げ、古醫學史資料として頗る珍となすに足る。

二十五　長者子流水品　流水長者子救療濟生の後、更に池水の涸渇の爲に死に瀕せる十千の魚の命を救ひ、また僧をして大乘經典を讀誦し佛名を聞かしめて解脫の結緣をなし、財法の二施を行ひ、十千の魚此勝緣に依り、死後生天の因緣を說き、當時の流水は即ち釋尊にして、其父は妙幢、其二子は銀

幢、銀光の兩子、十千の天子は夫の池魚の後身なりと結ぶ。

二十六　捨身品　佛陀往昔大車王の愛子摩訶薩埵王子として生れ、大慈大悲、餓虎の爲に一身を犧牲として菩薩の難行を修せるを說く。此說話は六度集經・修行本起經・菩薩本行經・賢愚經等に出で、又寶積諸經に散見するも、本經最も詳密を極め、且つ文辭光彩に富む。後代印度論師の諸著亦之を援引し、法顯玄奘の遊竺旅行記其靈跡を記し、中世佛敎徒の最も感激せる說話の一なり。現に國寶法隆寺の玉蟲廚子また此畫圖あり。

二十七　十方菩薩讚歎品　十方來集の諸菩薩妙偈を以て佛陀を讚ず。

二十八　妙幢菩薩讚歎品　妙幢續きて麗辭を以て如來の德相を讚ず。

二十九　菩提樹神讚歎品　來會の菩提樹神また伽陀を以て如來を讚美す。

三十　大辯才天女讚歎品　最後に大辯才天女の讚歎あり、修辭詩歌の女神として必らずこの一事なかるべからず。

三十一　付囑品　世尊既に大法を說き了りて、無量の菩薩一切の人天に對して、懇に此經寶を付囑し、其廣宣流布、久住長留を命じ、凡聖悉く身命を惜まず佛勅に從ふべきを誓ひ、妙偈を說きて讚歎し、天帝釋等また伽陀を結びて擁護を約し、魔王魔子すら降伏信敬を表して、經寶奉持を妨げざるべきを盟ひ、一切來會の大衆の歡喜信受を以て、本經を終ふ。

凡例

一　本經國譯に對校したる梵本は印度佛典出版會の刊本、及び英國ケムブリッヂ大學所藏の紺紙金泥本を手寫したる私藏と、獨國ハイデルベルク大學教授、マックス・ワレサー博士が親く映寫して予に贈れるケムブリッヂ大學藏の紙本全部のロオトグラフ寫眞を用ひたり。

二　本經に出づる梵本缺くる所の多數の陀羅尼、及び經中固有名辭の梵語は、宗教大學所藏の金光明經の西藏譯本を對照せり。但し西藏譯本は大體梵語を音寫する極めて精確なりと雖、其間亦多少の錯誤なきにあらず。是等は精攻の後、正しきに從へり。

三　本文の註を作る精粗等しからず、前後の權衡特に甚しく均齊を缺くを恥づ。其必らず註すべきを註せず、一般の讀者に對し、寧ろ不用なるものに力を費せし傾、亦之なきにあらず。蓋し譯者百忙、一貫して此の事に當る能はず、前品後章、起艸屢〻時を隔て、通觀對照の暇なかりし罪のみ。卷末音義及び索引を付して之を補ふの企なりしも、亦病を得て之を果すを得ず。讀者諸賢、願くは之を諒せよ。

四　本經の印度文學史に於ける地位、其本文批評、及び經典發達の研究の如きは、學術上要なきにあらざるも、今稍廣繁に過ぐるを怕れて一切之を節畧せり。

五　本經出す所の、神呪陀羅尼の釋義に就きては稍考究する所なきにあらず、而も是自ら特殊の研究に屬するを以て、また且く之を他日に讓れり。

六　解說各項の典據の如きも亦煩を避けて、篇末に其書目を列擧するを畧せり。

譯者　渡邊海旭識

國譯金光明最勝王經

卷の第一

序品第一

是の如く我聞く。一時(一)薄伽梵、王舍城の(二)鷲峰山の頂に在しき。(三)最清淨・甚深の法界・諸佛の境・如來の居す所に於てなりき。大(四)苾芻衆九萬八千人と與なりき。皆是(五)阿羅漢なり。(六)能く善く調伏すること、大象王の如く、(七)諸漏已に除き、復た煩惱なく、心善く解脫し、慧善く解脫し、所作已に畢り、諸の重擔を捨て、己利を逮得し、諸の(八)有結を盡くし、大自在を得て、清淨の戒に住し、善巧・方便・智慧もて莊嚴し、

【一】薄伽梵(Bhagavān)。世尊と譯す。佛陀尊號の一。

【二】又靈鷲山と呼ぶ。(Gṛdhrakūṭa.)

【三】已下靈鷲山の德勝を舉ぐ。

【四】普通比丘と呼ぶ。Bhikṣu の音譯、具足戒を受けたる佛弟子の稱。

【五】聲聞衆中の最高位、Arhan 應供或は無學と譯す。

【六】已下十六句、羅漢の德を讚す。諸大乘經の例文なり。般若其他を見よ。

【七】罪業煩惱の異名。

【八】三有に結縛せらるる煩惱。

【九】又八背捨とも云ふ。欲界の五欲を背棄して、執著を斷じ、解脫を得て羅漢果を證する觀法なり。

(一)內有色想觀外色解脫
(二)內無色想觀外色解脫
(三)淨解脫身作證具足住
(四)空無邊處解脫
(五)識無邊處解脫
(六)無所有處解脫

(九)八解脫を證し、已に彼岸に到る。其名を　(一〇)具壽阿若憍陳如・具壽阿說侍多・具壽婆濕波・具壽摩訶那摩・具壽婆帝利迦・大迦葉波・優樓頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・舍利子・大目乾連と曰へり。唯　(一一)阿難陀の學地に住するを除く。各晡時に於て定より起ちて、往て佛の所に詣り、佛足を頂禮し、右に繞ること三帀し、退きて一面に坐す。

復菩薩摩訶薩、百千萬億人と共なりき。(一二)大威德あること、大龍王の如く、名稱普く聞えて、衆に知識せられ、施戒淸淨にして、常に奉持を樂ひ、忍・行・精勤・無量劫を經へ、諸の　(一三)淨慮を超え、繫念現前し、慧門を開闡し、善く方便を修す。自在に微妙の神通に遊戲し、總持を逮得し、辯才盡くるなし。諸の煩惱を斷じ、(一四)累染皆な亡び、久しからずして當に　(一五)一切種智を成ずべし。魔軍の衆を降し、法鼓を擊ち、諸の外道を制し、淨心を起さしむ。妙法輪を轉じ、人天の衆を度し、(一六)十方の佛土、悉く已に莊嚴し、(一七)六趣の有情、益を蒙らざるなく、大智を成就し、大忍を具足し、大慈悲心に住し、大堅固力あり、諸佛に歷事し、(一八)般涅槃せず、弘誓の心を發し、未來際を盡し、廣く佛所に於て、淨因を種ゑ、三世の法に於て無

(七)非想非非想處解脫
(八)滅受想定身作證具住

【一〇】普通長老と呼ぶ Āyuṣman の譯、壽命を具足したる先輩の意。梵文にはこの列名なし。

【一一】聲聞衆に學地と無學地とあり、無學地は羅漢果の學者をいふ。阿難陀は佛陀に隨侍する忠實の弟子にして特に自ら羅漢を證せず。侍者の賤職に居れり。

【一二】已下二十五句を以て菩薩の德を稱す。

【一三】四靜慮等の禪定。

【一四】積累したる染汙、卽ち煩惱の義なり。

【一五】如來の智慧。

【一六】四方四維上下。

【一七】天・人・阿修羅・畜生・餓鬼・地獄の六道。

【一八】般涅槃は Parinirvāṇa の略稱。文意は菩薩衆生攝化の爲六道に往來し涅槃に入らず。

生忍を悟り、(一九)二乘所行の境界を逾え、大善巧を以て世間を化し、(二〇)大師の敎に於て、能く敷演し、祕密の法の甚深の空性、皆已に了知し、復疑惑なし。其名を(二一)無障礙轉法輪菩薩・常發心轉法輪菩薩・常精進菩薩・不休息菩薩・慈氏菩薩・妙吉祥菩薩・觀自在菩薩。總持自在王菩薩・大辯莊嚴王菩薩・妙高山王菩薩・大海深王菩薩・寶幢菩薩・大寶幢菩薩・地藏菩薩・虛空藏菩薩・寶手自在菩薩・金剛手菩薩・歡喜力菩薩・大法力菩薩・大莊嚴光菩薩・大金光莊嚴菩薩・淨戒菩薩・常定菩薩・極淸淨慧菩薩・堅固精進菩薩・心如虛空菩薩・不斷大願菩薩・施藥菩薩・療諸煩惱菩薩・醫王菩薩・歡喜高王菩薩・得上授記菩薩・大雲淨光菩薩・大雲持法菩薩・大雲名稱喜樂菩薩・大雲現無邊稱菩薩・大雲師子吼菩薩・大雲牛王吼菩薩・大雲吉祥菩薩・大雲寶德菩薩・大雲日藏菩薩・大雲月藏菩薩・大雲星光菩薩・大雲火光菩薩・大雲電光菩薩・大雲雷音菩薩・大雲慧雨充遍菩薩・大雲淸淨雨王菩薩・大雲花樹王菩薩・大雲青蓮花香菩薩・大雲寶栴檀香淸涼身菩薩・大雲除闇菩薩・大雲破翳菩薩と曰へり。是の如き等の無量の大菩薩衆あり、各晡時に於て定より起ちて、往いて佛の所に詣り、佛足を頂禮し、右に繞ること三帀して、退きて一面に坐しき。復(二二)梨車毘童子五億八千ありき。其名を師子光童子・師子慧童子・法授童子・因陀羅授童子・大光童子・大猛童子・佛護童子・法護童子・僧護童子・金剛護童子・虛空護童子・虛空吼童子・寶藏童子・吉祥妙藏童子と曰へり。

【一九】聲聞、緣覺共に自利の證果にして利他の大用なし。

【二〇】佛を云ふ。Mahāśāstṛ.

【二一】已下菩薩の列名、梵文之を缺く。

【二二】梨車毘(Licchavi)。毘舍離(Vaiśālī)國に共和制を布ける一民族にして、佛在世當時、宗敎及哲學に深き趣味を有せる國民として有名なり。

是の如き等の人を上首とし、悉く皆無上菩提に安住し、大乘の中に於て、深信歡喜す。各哺時に於て往いて佛の所に詣り、佛足を頂禮し、右に繞ること三帀して退きて一面に坐しぬ。

復四萬二千の(二三)天子あり。其名を喜見天子・喜悅天子・日光天子・月髻天子・明慧天子・虛空淨慧天子・除煩惱天子・吉祥天子と曰へり。是の如き等の天子を上首とし、皆弘願を發し、大乘を護持し、正法を紹隆してよく絕えざらしむ。各哺時に於て、往いて佛の所に詣り、佛足を頂禮し、右に繞ること三帀、退きて一面に坐しぬ。

復二萬八千の龍王あり。蓮華龍王・(二四)翳羅葉龍王・大力龍王・大吼龍王・小波龍王・持駃水龍王・金面龍王・如意龍王なりき。是の如き等の龍王を上首とす。大乘の法に於て、常に樂うて受持し、深く信心を發し、稱揚し擁護す。各哺時に於て、往いて佛の所に詣り、佛足を頂禮し、右に繞ること三帀し、退きて一面に坐しぬ。

復三萬六千の諸の(二五)藥叉衆あり。毘沙門天王を上首とす。其名を庵婆藥叉・持庵婆藥叉・蓮華光藏藥叉・蓮花面藥叉・顰眉藥叉・現大怖藥叉・動地藥叉・呑食藥叉と曰へり。是等の藥叉、悉く皆如來の正法を愛樂し、深心に護持して、疲懈を生ぜず、各哺時に於て、往いて佛の所に詣り、佛足を頂禮し、右に繞ること三帀、退きて一面に坐しぬ。

【二三】天子(Devaputra)。天上界に於ける人人。
【二四】Airāvata.
【二五】Yakṣa. 鬼神の一種、勇健暴惡等の義あり。八部衆の一。

復四萬九千の（二六）揭路茶王あり。香象勢力王を上首とす。及び餘の（二七）健闥婆・（二八）阿蘇羅・（二九）緊那羅・（三〇）莫呼洛伽等・山林河海一切の神仙、幷に諸の大國の、所有王衆・中宮・后妃・淨信の男・女・人・天、悉く皆雲集せり。咸く願うて無上の大乘を擁護し、讀誦し、受持し、書寫し、流布す。各晡時に於て、往いて佛所に詣り、佛足を頂禮し、退いて一面に坐しぬ。

是の如き等の聲聞・菩薩・人・天・大衆・龍神・八部、既に雲の如く集り已り各各至心に合掌し、恭敬し、尊容を瞻仰し、目未だ曾て捨てず、願樂して殊勝の妙法を聞かんことを欲す。

爾時薄伽梵、日の晡時に於て、定より起ち、大衆を觀察して、（三一）頌を說いて曰はく、

（三二）『金光明の妙法、最勝諸經の王は、甚深にして聞くを得べきこと難し、諸佛の境界なり。

我當に大衆のために、是の如きの經を宣說せんとし、幷に（三三）四方の四佛、威神共に加護す。

東方の阿閦尊、南方の寶相佛、西方の無量壽・北方の天鼓音。

【二六】 Garuḍa 金翅鳥と譯す。或は迦樓羅、迦留羅等の對譯を用ふ、龍を捕へ食する大鳥、八部衆の一。

【二七】 Gandharva 天の樂神。

【二八】 Asura 普通阿修羅と書す非天と譯す、一種の魔神。

【二九】 Kiṃnara 天の歌舞神。

【三〇】 Mahoraga 大腹行即ち大蛇にして、共に八部衆の一。

【三一】 頌は讚美の詩。

【三二】 已下五言の頌。

【三三】 Akṣobhya 東方阿閦佛（不動）。平等性智。Patraketa 南方寶相大圓鏡智。Amitābha 西方阿彌陀（無量壽）妙觀察智。Dundubhisvara 北方天鼓音。成所作智。此四方四佛は密教の金胎曼荼羅に於ける大日四隅の四佛にして、佛の四智を代表す。

我復妙法吉祥懺の中の勝れたるを演べて、能く一切の罪を滅じ、諸の惡業を淨除せん。
及び衆の苦患を消し、常に無量の樂、一切智の根本、諸の功德莊嚴を與へん。
衆生身不具にして、壽命損減せんとし、諸の惡相現前し、天神皆捨離し、
親友瞋恨を懷き。眷屬悉く分離し、彼此共に乖き違ひ、珍財皆散失し、
惡星變怪を爲し、或は邪蠱に侵され、若復憂愁多く、衆苦に逼られ、
睡眠に惡夢を見、此に因りて煩惱を生ぜんに、是人當に澡浴し、鮮潔の衣を著し、
此妙經王の甚深なる、佛の讚ずる所に於て、專注に心亂るるなく、讀誦受持すべし。
此經の威力に由りて、能く諸の災橫を離れ、及び餘の衆の苦難、皆除滅せざるなし。
（三四）護世の四王衆、及び大臣眷屬、無量の諸藥叉、一心に皆擁衞し、
大辯才天女、（三五）尼連河水神、訶利底母神、堅牢地神衆、
梵王と帝釋王と、龍王・緊那羅、及び金翅鳥王、阿蘇羅と天衆、
是の如きの天神等、幷に其眷屬を將ゐて、皆來りて是人を護り、晝夜
常に離れず。
我當に是經、甚深なる佛の行處を說くべし、諸佛の祕密敎は、千萬劫にも逢ひ難し。
若是の經を聞きて、能く他のために演說し、若は心に隨喜を生じ、或は供養を設くるものあらば、

【三四】卽ち持國・增長・廣目・多聞の四天王、護國品を見よ。
【三五】第十五品已下を見よ。尼連河神は世尊滅度の尼連禪河(Nairañjanā)河の女神、訶利底(Hārītī)は鬼子母神なり。堅牢地神は下の地神品を見よ。

是の如き諸人等、無量劫に於て、常に諸の天人、龍神に恭敬せらるべし、
此福聚の無量なる、數恒沙に過ぎん。是の經を讀誦するものは、當に斯の功德を獲べし。
亦十方の尊、深行諸菩薩、持經者を擁護するが爲めに、諸の苦難を離れしむ。
是の經を供養するものは、前の如く身を澡浴し、飲食及香華に、恒に慈悲の意を起せ。
若是の經を聽かんと欲せば、心淨くして垢なからしめ、常に歡喜の念を生ぜよ。能く諸の功德を
長ぜん。
若し尊重の心を以て、是の經を聽聞せば、善く人趣に生じ、諸の苦難を遠離せん。
彼の人善根熟し、諸佛に讚せられて、方に是の經、及び懺悔の法を聞くことを得ん。』

如來壽量品第二

爾時に、王舍大城に、一の菩薩摩訶薩あり、名けて(一)妙幢と曰へり。已に過去の無量(二)倶胝・那庾多百千の佛所に於て、承事し供養し、諸の善根を植ゑたり。是の時に妙幢菩薩、獨り靜處に於て、是の思惟をなしぬ、『何の因緣を以て釋迦牟尼如來の壽命短促にして、唯八十年なるや』と。復是の念を作しぬ、『佛の說き給ふ所の如く、二の因緣ありて壽命長きを得。云何が二とする、一には生命を害せず、二には他に飲食を施す。然るに釋迦牟尼以來、曾て無量百千萬億・無數の大劫に於て、生命を害し給はず、十善道を行ひ、常に飲食を以て、一切飢餓の衆生に施與し、乃至己が身の血肉骨髓、亦持つて施與して飽滿することを得しめたまへり。況や餘の飲食をや』と。

時に彼の菩薩世尊の所に於て、是の念を作す時、佛の威力を以て、其の室忽然として廣博嚴淨に、帝青・瑠璃種種の衆寶、雜彩間り飾り、佛の淨土の如し。妙高の氣ありて、諸天の香に過ぎ、芬馥として充滿せり。其の四面に於て、各上妙の師子の座あり、四寶もて成ずる所、天の寶衣を以て其の上に敷く。復此の座に於て、妙蓮華あり、種種の珍寶を嚴飾とす。量如來に等しく、自然に顯現せり。蓮華の上に於て(三)四の如來あり、東方に不動、南方に寶相、西方に無量壽、北方に天鼓音。是の四の如來、各其の座に於

【一】原語 Ruciraketu.
【二】Koti-ayuta 倶胝は億、阿庾多は兆。
【三】第一品を見よ。

て跏趺して坐し給へり。大光明を放ちて、王舍大城及び、此の三千大千世界乃至十方恒沙等の諸佛の國土を周遍照曜し、諸の天華を雨らし、諸の天樂を奏しぬ。

爾時此㊃贍部洲中、及び三千大千世界に於て、所有衆生、佛の威力を以て、勝妙の樂を受け、乏少あることなし。若し身の具せざるは具足を蒙り、盲ひたるものは能く視、聾したるものは聞くを得、瘂者は能く言ひ、愚者は智を得、若し心亂るるものは本心を得、若し衣なきものは衣服を得、惡み賤しまるる者は人に敬せられ、垢穢あるものは身清潔なり。此の世間に於いて、所有利益、未曾有の事、悉く皆顯現せり。

爾時妙幢菩薩、四如來及び希有の事を見、歡喜踊躍し、合掌して一心に諸佛殊勝の相を瞻仰し、亦復釋迦牟尼如來の無量の功德を思惟し、唯壽命に於て疑惑の心を生じぬ、『云何ぞ如來の功德無量なるに、壽命短促して、唯八十年なるや』と。

爾時四如來、妙幢菩薩に告げて言はく『善男子、汝今如來壽命の長短を思惟すべからず。何を以ての故に。善男子、我等諸天、世間梵・魔・沙門・婆羅門等、人及び非人、能く佛の壽量を算知して、其齊限を知るものあるなし、唯無上正徧知者を除く。』

時に四如來、釋迦牟尼佛の所有の壽量を說かんと欲し、佛の威力を以て、欲色界の天・諸龍・鬼神・健

【四】Jambudvipa. 此人界を指す、須彌山の南方に位すとなすが故に、また南贍部州、南閻浮州ともいふ。

闥婆・阿蘇羅・揭路茶・緊那羅・莫呼洛伽、及び無量百千億那庾多の菩薩摩訶薩をして、悉く來り集會し、妙幢菩薩の淨妙の室中に入らしむ。

爾時、四佛、大衆の中に於て、釋迦牟尼如來の、所有の壽量を顯はさんと欲し、頌を說きて曰はく、

（五）『一切諸海の水、其滴數を知るべし、能く釋迦の壽量を、數へ知るものあるなし。

諸の妙高山を析き、芥の如くして數を知るべきも、能く釋迦の壽量を、算知するあるなし。

一切大地の土、其塵の數を知るべし、能く釋迦の壽量を、算知するあるなし。

假令虛空を量り、邊際を盡すを得べきも、能く釋迦の壽量を、數へ知るものあるなし。

若人住すること億劫、力を盡して常に算數するも、亦復世尊の壽量を、知る能はず。

衆生の命を害せざると、及び飮食を施こすと、斯二種の因に由り、壽命長遠なるを得たり。

是故に大覺尊の、壽命は數を知り難し。劫の邊際なきが如く、壽量亦是の如し。

妙幢汝當に知るべし、疑惑を起すべからず。最勝の壽は量りなし、能く數を知るものなし。』

爾時妙幢菩薩、四如來の釋迦牟尼佛の壽量の限なきを說くを聞きて、白して言さく、『世尊、如何が如來は是の如き短促の壽量を示現するや』と。

時に四世尊、妙幢菩薩に告げて言はく、『善男子、彼釋迦牟尼佛、五濁の世に於て出現の時、人の壽百

【五】已下五言の偈八頌。

年にして、性を禀る下劣、善根微薄にして、復信解なし。此の諸の衆生、多く㈥我見・人見・衆生・壽者・養育の邪見、我我所見、斷・常見等あり。此の諸の異生、及諸の外道是の如き等の類を利益し、正解を生ぜしめて、速に無上菩提を成就するを得しめんと欲するが爲に、是の故に、釋迦牟尼如來是の如き短促の壽命を示現す。善男子、然も彼の如來、衆生に涅槃を見し已り、難遭の想、憂苦等の想を生ぜしめ、佛世尊說く所の經教に於て、速に受持し、讀誦し、通利し、人の爲に解說して、謗毀を生ぜず、是の故に如來斯の短壽を現ず。何を以ての故に、彼諸の衆生、如來の般涅槃せざるを見て、恭敬難遭の想を生ぜず、如來說く所の甚深の經典を受持し、讀誦し、通利し、人の爲に宣說せず。所以は如何、常に佛を見るを以て、尊重せざるが故に。善男子、譬へば人あり。其父母多く財産ありて、珍寶豐に盈つるを見て便ち財物に於て、希有難遭の想を生ぜず。所以は如何、父の財物に於て常想を生ずるが故なり。善男子、彼の諸の衆生亦復此の如し。若し如來涅槃に入らざるを見ては、希有難遭の想を生ぜず。所以はいかん、常見に由るが故なり。善男子、譬へば人あり、父母貧窮にして資財乏少せんに、然るに彼の貧人或は王家或は大臣の舍に詣り、其倉庫に種種の珍財悉皆盈滿するを見て、希有の心、難遭の想を生ず。時に彼の貧人財を求めんと欲するが爲に、廣く方便を設け、策勤して怠ることなし。所以はいかん、貧

【六】已下正見に反する諸種の誤れる哲學的見解。我見は我の實在を執するもの、人見は人格ありと執するもの、衆生(生物)、壽者(生命)養育(發育)は、共に是等を實體と執じ、我我所は我の所依を執じ、斷見は意識の斷滅を執じ、常見は其の常住不變を執す。

窮を捨て、安樂を受けんが爲の故なり。善男子、彼の諸の衆生も亦復是の如し。若し如來、涅槃に入ると見ては、難遭の想乃至憂苦等の想を生ず。復是の念を作さん、『無量劫に於て、諸佛如來の世に出現する、烏曇跋華の時ありて乃一たび現ずるが如し』と。彼諸の衆生、希有の心を生じ、難遭の想を起し、若し如來に遇はば、心に敬信を生ぜん。正法を説くを聞きて、實語の想を生じ、所有經典悉く皆受持し、毀謗を生ぜず。善男子、是の因緣を以て、彼の佛世尊、久しく世に住せずして、速に涅槃に入る。善男子、是の諸の如來、是の如き等の善巧方便を以て、衆生を成就す。』

爾時に四佛、是の語を說き已り、忽然として現ぜず。

爾の時に妙幢菩薩摩訶薩、無量百千の菩薩及び無量億那庾多百千の衆生と與に、共に往て鷲峰山中、釋迦牟尼如來・正徧知の所に詣り、佛足を頂禮して、一面にありて立ちぬ。

時に妙幢菩薩、上の如き事を以て具に世尊に白す。

時に四如來、亦鷲峰に詣りて釋迦牟尼佛の所に至り、各本方に隨ひて座に就きて坐し、侍者の菩薩に告げて言はく、『善男子、汝今釋迦牟尼佛の所に詣り、我がために少病・少惱・起居輕利、安樂行なりや不やを問へ』と。復是言を作し給ふ、『善哉善哉、釋迦牟尼如來、今金光明經甚深の法要を演說すべし。一切の衆生を饒益して、饑饉を除去し、安樂を得しめんと欲するが爲の故に、我當に隨喜すべし』と。

時に彼侍者、各釋迦牟尼佛の所に詣り、雙足を頂禮し、却て一面に住し、倶に佛に白して言さく、

『彼の天人師、問を致すこと無量なり、「少病・少惱・起居輕利にして、安樂行なりや、不や」と。復た是の言を作し給はく「釋迦牟尼如來、今金光明經、甚深の法要を演說すべし。一切衆生を利益し、饑饉を除去し、安樂を得しめんがためなり」と。』

爾時に、釋迦牟尼如來應正等覺、彼の侍者の諸菩薩に告げて言はく、『善哉、善哉、彼の四如來、乃ち能く諸の衆生のために、饒益・安樂「を與へ」、我を勸請して正法を宣揚せしむ』と。爾時に世尊、而も頌を說きて曰はく、

(七)『我常に鷲山にあり、此經寶を宣說す。衆生を成就するが故に。般涅槃を示現す。
凡夫邪見を起し、我が說く所を信ぜず。彼を成就する爲の故に。般涅槃を示現す。』

時に大會の中、婆羅門あり。姓は憍陳如、名を(八)法師授記と曰ふ。無量百千の婆羅門衆と、佛を供養し已り、世尊般涅槃に入ると說くを聞きて、涕淚交も流れ、前みて佛の足を禮し、白して言さく、『世尊、若し實に如來は諸の衆生に於て、大慈悲あり、憐愍し利益して安樂を得しむること、猶父母の如く、餘に等しきものなく、能く世間のために、歸依處となること、淨滿月の如く、大智慧を以て、能く照明を爲すこと、日の初めて出づるが如く、普く衆生を觀て、愛すること偏黨なきこと、(九)羅怙羅の如し。惟願くは世尊、我に一願を施せ。』

【七】五言二頌、法華經の常在靈鷲山の文と同じ。彼の經壽量品を見よ。

【八】Ācāryavyākaraṇa.（アーチャールヤギャーカラナ）

【九】Rāhula（ラーフラ） 佛陀の子。又羅護羅とも書す。此譬又涅槃經にも出づ。佛陀が一切衆生を見る己が子の如きをいふ。

爾時に世尊、默然として止む。佛の威力の故に、此の衆中に於て、(一〇)梨車毗童子の一切衆生喜見と名くるあり。婆羅門憍陳如に語りて言く、『大婆羅門、汝今佛よりして、何の願を乞はんと欲するや、我能く汝に與へん』と。

婆羅門言く、『童子、我無上世尊を供養せんと欲す。今如來より、(一一)舍利の芥子許りの如きを求め請はんと欲す。何を以ての故に、我嘗て說くを聞く、若善男子、善女人、佛舍利の芥子許なるを得て、恭敬供養せば、是人常に三十三天に生じて帝釋となるべしと。』

是の時に童子、婆羅門に語りて曰く、『若し三十三天に生じ、勝報を受けんことを願ひ欲せば、應に至心に是の金光明最勝王經を聽くべし。諸經の中に於て最も殊勝たり。解し難く入り難し。聲聞獨覺の知る能はざる所、此の經よく無量無邊の福德の果報を生じ、乃至無上菩提を成辦す、我今汝の爲に略して其事を說かん。』

婆羅門言く、『善哉、童子、此金光明經は甚深最上にして、解し難く、入り難し、聲聞獨覺尚知ること能はず。況や我等邊鄙の人、智慧微賤にして、而も能く解了せんや。是故に我今佛舍利の芥子許の如きを求めて、持ちて本處に還り、寶函の中に置き、恭敬供養し、命終るの後、帝釋となりて、常に安樂を受くるを得んとす。云何ぞ汝今我が爲に明行足よりして斯一願を求むる能はざるや。』

【一〇】 Sarvasattva priya darśana Litsavikumāra.

【一一】 舍利（Sarīra骨身）は佛陀を火葬したる骨をいふ、全身碎身等の別あるも要するに如來の遺骨なり。靈妙の德ありと信ぜらる。

是の語を作し已るや、爾時童子、即ち婆羅門のために、頌を說いて曰く、

(二二)『恒河の駛流の水に、白蓮花を生ずべく、黃鳥白き形となり、黑鳥變じて赤となり、

假令贍部樹に、多羅の果を生ずべく、(二三)朅樹羅の枝の中に、能く(二四)菴羅の葉を出さん。

斯等希有のものには、或は轉變すべきも、世尊の舍利は、畢竟得べからず。

假令龜毛を以て、織りて上妙の服を成じて、寒時に被著すべくんば、方めて佛舍利を求めん。

假令兎角を持して、用て梯蹬を成じ、上天の宮に昇るべくんば、方めて佛舍利を求めん。

鼠此梯上に緣りて、(二五)阿蘇羅の、能く空中の月を障ふるを除去せば、方めて佛舍利を求めん。

假令蚊蚋の足、樓觀を成さしめて、堅固にして搖動せざるべくんば、方めて佛舍利を求めん。

假令水蛭蟲、口中に白齒を生じ、長大にして利きこと鋒の如くば、方めて佛舍利を求めん。

若し蠅酒を飲みて醉ひ、周く村邑の中を行きて、廣く舍宅を造らば、方めて佛舍利を求めん。

若し驢唇の色をして、赤きこと頻婆果の如くならしめ、善く歌舞を作さば、方めて佛舍利を求めん。

【二二】 五言十四偈、極めて出來得べからざることを極說し舍利の得がたきを云ふ。

【二三】 Kharjūra (Phoenix Sylvestris.)

【二四】 Āmra マンゴーの果。

【二五】 月蝕をいふ。印度にては月蝕は阿蘇羅神が大手を擧げて月を蔽ふとなす。

烏と鵂鶹鳥と、同く共に一處に遊び、彼此相順從せば、方めて佛舍利を求めん。
假令（二六）波羅葉、傘蓋を成して、能く大雨を遮らしむべくんば、方めて佛舍利を求めん。
假令大船舶、諸の財寶を盛滿し、能く陸地に行かしむべくんば、方めて佛舍利を求めん。
假令鶺鴒鳥、嘴を以て（二七）香山を銜み、隨所に任に遊行せば、方めて佛舍利を求めん。』

爾時に、法師授記婆羅門、此頌を聞き已り、亦た伽陀を以て、一切衆生喜見童子に答へて曰く。

（二八）『善哉大童子、此衆生中の吉祥なり、善巧方便の心あり、佛の（二九）無上記を得たり。
如來の大威德、能く世間を救護し給ふ。仁者よ至心に聽くべし、我今次第に說かん。
諸佛の境は難思なり、世間與に等しきものなし、法身の性は常住なり、修行に差別なし。
諸佛の體は皆同じ、所說の法も亦爾り。諸佛には作者なし、爾また本より無生なり。
世尊金剛の體は、權に化身を現ず、是の故に佛舍利の、芥子許りの如きすらなし。
佛は血肉の身にあらず、云何が舍利あらん。方便して身骨を留むるは、諸の衆生を益せんが爲めなり。

【二六】 Palāśa 細小の葉を有す。
【二七】 香山(Gandhamadha)。或は香醉山とも書す、神話的の巨大の山嶽。
【二八】 五言七頌。
【二九】 無上記。無上菩提卽ち成佛を得べき豫言。

法身は是正覺、法界は卽如來なり。此は是佛の眞身なり。亦是の如き法を說く。」

爾時會中、三萬二千の天子、如來の壽命長遠なるを說くを聞きて、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發し・歡喜踊躍して未曾有を得、異口同音に頌を說きて曰く、

〔二〇〕「佛般涅槃せず。正法亦た滅せず。衆生を利せんが爲の故に、方に滅盡することを示現す。

世尊は不思議なり。妙體に異相なし。衆生を利せんが爲の故に、種種の莊嚴を現し給ふ。」

爾時妙幢菩薩、親しく佛前及四如來并に〔二一〕一大士諸天子の所に於て、釋迦牟尼如來壽量の事を說くを聞き已り、復座より起ちて、合掌恭敬して、佛に白して言さく、「世尊、若實に是の如く、諸佛如來般涅槃せず、舍利なくんば、云何が經の中に、涅槃及び佛舍利ありと說きて、諸の人天をして、恭敬供養せしむるや。過去の諸佛、現に身骨あり。世に流布し、人天供養し、福を得ること邊なし。今復無しといふ。疑惑を生ずるを致す。惟願くは世尊、我等を哀愍して、廣く爲に分別し給へ。」

爾時佛、妙幢菩薩、及び諸の大衆に告たまはく、「汝等當に知るべし。般涅槃して舍利ありと云ふは、是密意の說なり。是の如きの義、當に一心に聽くべし。善男子、菩薩摩訶薩は是の如く應に知るべし。其十法あり、能く如來應正等覺、眞實の理趣、究竟大般涅槃ありと說く。云何が十とする。〔二二〕一には諸佛如來究竟じ

〔二〇〕五言の頌二偈、此雄大の思想亦法華に在り、同經の壽量品と併せ讀め。

〔二一〕前の婆羅門及び童子を指す。已下涅槃の深義を示す。梵本之を缺く。

〔二二〕罪業消滅の邊より見る。

て諸の煩惱障・所知障を斷盡するが故に、名けて涅槃とす。(二三)二には諸佛如來、善く有情の無性及び法の無性を解了するが故に、名けて涅槃とす。(二四)三には能く身依及び法依を轉ずるが故に、名けて涅槃とす。(二五)四には諸の有情に於て、任運に化の因緣を休息するが故に、名けて涅槃とす。(二六)五には眞實にして、差別の相なき、平等の法身を證得するが故に、名けて涅槃とす。(二七)六には生死及び涅槃二性なしと了知するが故に、名けて涅槃とす。(二八)七には一切の法に於て、其根本を了じ、淸淨を證するが故に、名けて涅槃とす。(二九)八には一切の法に於て、生もなく滅もなく、善く修行するが故に、名けて涅槃とす。(三〇)九には眞如法界、實際平等にして、正智を得るが故に、名けて涅槃とす。(三一)十には諸法の性と、及び涅槃性とに於て、差別なきを得るが故に、名けて涅槃とす。是を十法に涅槃ありと說くといふ。

復次に善男子、菩薩摩訶薩、是の如く當に知るべし。復十法あり、能く如來應正等覺の、眞實の理趣を解し、究竟大般涅槃ありと說く。云何が十とする。一には一切の煩惱樂欲を本とし、樂欲より生ず。諸佛世尊、樂欲を斷ずるが故に、名けて涅槃とす。二には諸の如來、諸の樂欲を斷じ、一法を取らず。取らざるを以ての故に、去なく、來なく、所取なし、故に名けて涅槃とす。三には去來及び所取なきを以て、是則法身は不生不滅なり。生滅なきを以ての故に、名けて涅槃

【二三】有情と法との空性を了する點より見る。
【二四】身と法との依卽顯象を轉じて實體界に住する點より。
【二五】任運に化を施すも、本體は寂然。
【二六】平等法身の證得。
【二七】迷悟一如。
【二八】根本淸淨。
【二九】不生不滅。
【三〇】眞如界の平等。
【三一】諸法と涅槃との一如。

とす。四には此の無生滅は、言の宣る所にあらず、言語斷ずる故に、名けて涅槃とす。五には我人あるなく、唯法の生滅に轉依を得る故に、名けて涅槃とす。六には煩惱・隨惑・皆是客塵にして、法性是主なり。來もなく、去もなく、佛了知するが故に、名けて涅槃とす。七には眞如のみ是實にして、餘は皆虚妄なり。實性の體は、卽是眞如にして、眞如の性は、卽是如來なり。名けて涅槃とす。八には實際の性、戲論あることなし。唯獨り如來、實際の法を證して、戲論永く斷ず。名けて涅槃とす。九には無生は是實にして、生は是虚妄なり。愚痴の人生死に漂溺す。如來の體實に虚妄あることなきを名けて涅槃とす。十には不實の法是緣より生ず。眞實の法は緣より起らず。如來法身の體は、是眞實なるを名けて涅槃とす。善男子是を十法に涅槃ありと說くと謂ふ。

復次に善男子、菩薩摩訶薩是の如く應に知るべし。復十法あり、能く如來應正等覺の眞實の理趣を解し、究竟大涅槃ありと說く。云何が〔三〕十とする。一には如來善く施、及び施の果が、我と我所なきを知る。此の施及び果の不正の分別、永く除滅するが故に、名けて涅槃とす。二には如來善く戒及び戒の果が我と我所となきを知る。此の戒及び果の不正の分別永く除滅するが故に涅槃とす。三には如來善く忍及び忍の果が我と我所となきを知る。此の忍及び忍の果の不正の分別永く除滅するが故に、名けて涅槃とす。四には如來よく、勤及び勤の果が、我と我所となきを知る。此の勤及び果の不正の分別永く除滅するが故に、名けて涅槃とす。五には如來よ

【三】下施戒等の六度等にて修行上より涅槃の深義を說く。

く定及び定の果が我と我所となきを知る。此の定及び果の不正の分別永く除滅するが故に名けて涅槃とす。六には如來よく慧及び慧の果が我と我所となきを知る。此の慧及び果の不正の分別永く除滅するが故に名けて涅槃とす。七には諸佛如來善く一切有情・非有情の一切諸法は皆無性なりと了知し、不正の分別永く除滅するが故に、名けて涅槃とす。八には若し自ら愛するものは、便ち追求を起す。追求に由るが故に、衆の苦惱を受く。諸佛如來、自愛を除くが故に、永く追求を絶つ。追求なきが故に名けて涅槃とす。九には有爲の法、皆數量あり。無爲法は數量みな除く。佛は有爲を離れ、無爲法の無數量を證す。故に名けて涅槃とす。十には如來、有情及法の體性は、皆空なり、空を離れて、有にあらず、空性は卽是眞法身なりと了知するが故に、名けて涅槃とす。善男子、是を十法に涅槃ありと說くと謂ふ。

復次に善男子、豈惟如來の般涅槃せざること、是れ希有なりとせんや。復十種希有の法あり。是如來の行なり。云何が十とする。一には生死の過失、涅槃の寂靜(とに於て)生死及び涅槃の平等を證するに由るが故に、流轉に處せず、涅槃に任せず。諸の有情に於て、厭背を生ぜず。是如來の行なり。二には佛衆生に於て、是の念を作さず、此諸の愚夫顚倒の見を行じ、諸の煩惱のために纏迫せらる。我今開悟して、解脫を得しめんと。然るに往昔の慈善根力に由り、彼の有情に於て其の根性・意業・勝解に隨ひて分別を起さず、任運に濟度し・示敎し・利喜し、未來際を盡くして、窮盡あることなし。是

如來の行なり。三には佛是の念なし、我今【三二】十二分教を演説し、有情を利益せんと。然るに往昔の慈善根力に由り、彼の有情に於て、廣説乃至未來際を盡し窮盡あるなし。是如來の行なり。四には佛是の念なし、我今彼の城・邑・聚落・王及び大臣・【三三】婆羅門・刹帝利・薜舍・戍達羅等の舍に往きて、其より食を乞はんと。然るに往昔身語意行の慣習力に由るが故に、任運に彼に詣りて。利益の事をなして乞食を行ず。是如來の行なり。五には、如來の身饑渇あることなし。亦便利羸憊の相なし。乞取を行ずと雖も、食する所なし。また分別なし。然るに任運に有情を利益せんが爲に、食相あるを示す。是如來の行なり。六には佛是の念なし、此の諸の衆生上中下あり。彼の機性に隨ひて、爲に説法せんと。然るに佛世尊分別あることなし。其器量に隨ひて、善く機緣に應じ、彼がために説法す。是如來の行なり。七には佛是の念なし、此の類の有情、我を恭敬せず、常に我が所に於て、訶罵の言を出す、彼と與に言論を爲す能はず。彼の類の有情、我を恭敬す、常に我が所に於て共に相讃嘆す、我彼と共に言説をなすべしと。然るに如來慈悲心を起し、平等にして無二なり。是如來の行なり。八には諸佛如來、愛・憎・憍慢・貪惜及諸の煩惱あるなし。然るに如來、常に寂靜を樂ひ、少欲を讃嘆し、諸の諠閙を離る。是如來の行なり。九には如來は一法として知らず善く通達せざるなし。一切處に於て境智現前し、分別あるなし。然るに如來彼の有情の所作の事業を見、彼の意に隨ひ轉た方便して、誘引し出離を得しむ。是如來の行な

【三二】或は十二部經とも云ふ、契經等。

【三三】印度の四姓。

り。十には如來若し。一分の有情の富盛を得るを見る時、歡喜を生ぜず、其衰損を見て、憂戚を起さず。然るに如來、彼の有情正行を修習するを見ては、無礙の大慈もて、自然に救攝し、若し有情邪行を修習するを見ては、無礙の大悲もて、自然に救護す。是如來の行なり。

善男子、是の如く、當に知るべし、如來應正等覺、是の如く無邊の正行ありと說く。汝等當に知るべし、是を涅槃眞實の相といふ。

或時は般涅槃ありと見るは、是權方便なり。及び舍利を留め、諸の有情をして恭敬供養せしむるは、皆是如來慈善根の力なり。若し供養するものは、未來世に於て、八難を遠離し、諸佛に逢値し、善知識に遇ひ、善心を失はず、福報無邊にして、速に出離すべく、生死に纏縛せられず。是の如きの妙行、汝等勤修して、放逸なる勿れ。』

爾時、妙幢菩薩、佛の親しく般涅槃せず、及甚深の行を說くを聞きて、合掌恭敬し白して言さく、『我今始めて如來大師般涅槃せず、及び舍利を留めて普く衆生を益することを知り、身心踊悅して未曾有なりと歎ず。』

是の如來壽量品を說き給ふ時、無量無數無邊の衆生、皆無等等阿耨多羅三藐三菩提の心を發したりき。

時に四如來忽然として現せず。妙幢菩薩、佛の足を禮し已り、座より起ちて、其の本處に還りぬ。

巻の第二

分別三身品第三

爾時に虚空藏菩薩摩訶薩、大衆の中にありて、座より起ちて偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著けて、合掌し恭敬して、佛の足を頂禮し、上微妙の金寶の華・寶幡・幢蓋を以て、供養をなして、佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩、諸の如來甚深の秘密に於て、如法に修行するや。』

佛の言はく『善男子諦に聽け、諦に聽け。善く之を思念せよ。吾當に汝が爲に、分別解説すべし。

善男子一切の如來に、三種の身あり。云何が三とする。(一)一には化身。二には應身。三には法身。是の如きの三身具足して、阿耨多羅三藐三菩提を攝受す。若し正に了知せば、速に生死を出でん。

云何が菩薩、化身を了知する。善男子、如來昔修行地の中にあり、一切衆生のために、種種の法を修す。是の如く修習して、修行滿つるに至る。修行力の故に。大自在を得。自在力の故に、衆生の意に隨ひ、衆生の行に隨ひ、衆生の界に隨ひ、悉く皆了知す。時を待たず、時を過ぎず、處相應し、

【一】普通は法報應の三身といふ。此經は報身を應身と譯し、應身に化身の名を當てたり、混同することなかれ。次の表を見よ。

原語	他經譯	此經譯
Dharmakāya（ダルマカーヤ）	法身	法身
Sambhogakāya（サムボーガカーヤ）	報身	應身
Nirmāṇakāya（ニルマーナカーヤ）	應身	化身

時相應し、行相應し、說法相應し、種種の身を現ず、是を化身と名づく。

善男子、云何が菩薩應身を了知する。謂く諸の如來、諸の菩薩の通達を得んがための故に、眞諦を說く。生死涅槃是一味なるを了知せしめんが爲の故なり。身見の衆生の怖畏と歡喜とを除かんが爲の故に、無邊の佛法の爲に本と作るが故に、如實に㈢如如と如如の智とに相應し本願力の故に、是の身現ずることを得、三十二相・八十種好を具へ、項背の圓光を具す。是を應身と名づく。

善男子、云何が菩薩摩訶薩、法身を了知する。諸の煩惱等の障を除かんがための故に、諸の善法を具せんが爲の故に、唯如如と如如の智とのみあるを、是を法身と名づく。

前の二種の身は是假名なり。此の第三の身のみありて、是眞實の有なり。前の二身のために根本となる。何を以ての故に、法の如如を離れ、無分別智を離れて、一切の諸佛に別法あることとなし。一切の諸佛智慧を具足し、一切の煩惱、究竟じて滅盡し、清淨の佛地を得。是故に法の如如と如如の智とは、一切の佛法を攝す。

復次に善男子、一切の諸佛は、自他を利益して究竟に至る。自を利益するは是法の如如、他を利益するは是如如の智なり。能く自他利益の事に於て自在を得、種種無邊の用を成就するが故に、是の故に一切の佛法を分別するに、無量無邊種種の差別あり。善男子、譬へば妄想に依止し、思惟して、種種の煩惱を說き種種の業用、種種の果報を說くが如し。是の如く、法の如如に

【三】如如―客觀的に法の平等を說く―法界眞如。
如如の智―主觀的に證の平等を說く―菩提佛智。

依り、如如の智に依りて、種種の佛法を說き、種種の獨覺の法を說き、種種の聲聞の法を說く。法の如如に依り、如如の智に依り、一切の佛法自在に成就す。之を第一不可思議と爲す。譬へば空に畫きて、莊嚴の具を作るは、是思議し難きが如し。是の如く、法の如如に依り、如如の智に依りて、佛法を成就することも亦思議し難し。善男子、云何が法の如如と如如の智との二、分別なくして、自在を得、事業成就するや。善男子、譬へば如來涅槃に入り、願自在の故に、種種の事業皆成就を得るが如し。法の如如、如如の智の、自在事を成すことも、亦復是の如し。

復次に菩薩摩訶薩、無心定に入り、前の願力に依り、禪定より起ちて、衆の事業を作す。是の如く二法、分別あることなく、自在に事成ず。善男子、譬へば日月の分別有るなく、また水鏡の分別あるなく、光明亦分別なく、三種和合して影生ずることあるを得るが如し、是の如く法の如如と、如如の智と、亦分別なく、願自在を以ての故に、衆生應化身を現ずと感ずることあり。日月の影和合して出現するが如し。

復次に善男子、譬へば無量無邊の水鏡、光に依るが故に、空影、種種の異相を現ずることを得。空とは卽ち是無相なり。善男子、是の如く、化を受くる諸弟子等は、是れ法身の影なり。願力を以ての故に、二種の身に於て種種の相を現ず。法身地に於て異相あることなし。善男子、此の二身に依り、一切諸佛・有餘涅槃を說く。此の法身に依りて、無餘涅槃を說く。何を以ての故に。一切の餘法究竟

じて盡くるが故に、此の三身に依りて、一切諸佛無住處涅槃を説く、二身の爲の故に、涅槃に住せず。法身を離れて、別の佛あるなし。何を以ての故に。二身涅槃に住せず。二身は假名不實にして、念念に生滅し、定住せざるが故に、數數出現し、定まらざるが故に。法身は爾らず。是の故に二身は涅槃に住せず、法身は二ならず、是の故に涅槃に住せず。故に三身に依りて、無住涅槃を説く。

善男子、一切の凡夫、三相のための故に、縛あり障あり。三身を遠離し三身に至らず。何者をか三となす。（三）一には遍計所執相、二には依他起性、三には成就相、是の如き諸相解する能はざるが故に、滅する能はざるが故に、淨むる能はざるが故に、是故に三身に至るを得ず。是の如きの三相、能く解し、能く滅し、能く淨むるが故に、是の故に、諸佛三身を具足す。

善男子、諸の凡夫人、未だ此三心を遣除すること能はざるが故に、三身を遠離して至ることを得る能はず。何者をか三となす。（四）一には起事心、二には依根本心、三には根本心なり。諸の伏道に依り、起事心盡き、法斷道に依り、依根本心盡き、最勝道に依りて、根本心盡く。起事心滅するが故に化身を現ずるを得。依根本心滅するが故に應身を顯はすことを得。根本心滅するが故に、法身に至る

【三】是れ唯識論に説く所の三性なり。第三は普通圓成實性と云ふ。無法に執著して自ら結縛するを第一とす、繩を見て蛇となし畏るるが如し。第二は諸法の假合に成れるもの、繩これなり、麻布等の絲にて成る。第三は、其諸法の體にて麻之なり。

迷妄の諸法―第一（解―化）
心心所等諸法第二（滅―應）
眞如――――第三（淨―法）

【四】
起事心―前六識（皮）
依根本心―第七識（肉）
根本心―第八識（骨）
｝諸業を造作す

ことを得。是の故に、一切如來、三身を具足す。

善男子、〔五〕一切諸佛第一身に於て、諸佛と事を同うし、第二身に於て、諸佛と意を同うし。第三身に於て、諸佛と體を同うす。善男子、最初の佛身は、衆生の意多種あるに隨ふが故に、種種の相を現ず。是故に多と說く。第二佛身は弟子一意の故に、一相を現ず。是故に一と說く。第三佛身は、一切種の相を過ぎて、執相の境界にあらず。是故に說て不一不二と名く。

善男子、是第一身は、應身に依りて顯現を得るが故に、是第二身は法身に依り顯現を得るが故に、是法身は眞實有にして依處なきが故に。

善男子、是の如き三身は、義あるを以ての故に、常と說き、義あるを以ての故に、無常と說く。化身は恒に法輪を轉じ、處處緣に隨ひ、方便して相續斷絕せざるが故に、常と說く。是本にあらざるが故に、大用を具足し、〔六〕顯現せざるが故に、說て無常となす。應身は無始より來、相續して斷せず、一切諸佛不共の法、能く攝持するが故に、衆生盡くるなくば、用もまた盡くるなし。是故に常と說く。是本にあらざるが故に、用を具足し。顯現せざるを以て、說て無常とす。法身とは是行法にあらず、異相あることなし、是根本なるが故に、猶し虛空の如し。是故に常と說く。

【五】事を同くするは衆生化導の大事同じきなり、意同じきは平等の願行同じきなり、第三は本體の平等、知り易し。

前六識の活動作用—對象生（現種種相）多 ┐
第六識の平等意業—對理者（現一相）一 ┘顯象
第八識轉化の平等證悟—（佛相）不一不二—本體

【六】法身の如く自體に自由顯現の用なし、緣ありて初めて起る。應化二身は常無常の二面あるも、法身は絕待常住なり。

善男子、無分別智を離れて、更に勝智なし。法如如を離れて、勝境界なし。（七）是の法如如と慧如如と是二種の如如、一ならず異ならず。是故に法身は（八）慧清淨の故に、滅清淨の故に、是二清淨なり。是故に法身は清淨を具足す。

復次に善男子、三身を分別するに、四種の異あり、化身の應身にあらざるあり。應身の化身にあらざるあり。化身にしてまた應身なるあり。化身にもあらず、應身にもあらざるあり。何者か（九）化身にして應身にあらざる。謂く諸の如來般涅槃の後、願自在を以ての故に、緣に隨ひ利益する、是を化身と名く。何者か（一〇）應身にして化身にあらざる。是地前の身なり。何者か（一一）化身にして亦應身なる。謂く有餘涅槃に住する身なり。何者か（一二）化身にもあらず、應身にもあらざる。謂く是法身なり。（一三）善男子是法身は二無所有にして、顯現する所なるが故に。何者か二無所有となす。此法身に於て、相及相處二皆是無なればなり。有にあらず、無にあらず。一にあらず、異にあらず。數にあらず、非數にあらず。明にあらず、暗にあらず。是の如き、如如の智は、相及び相處を見ず。非有・非無を見ず。非一・非異を見ず。非數・非非數を見ず。非明・非暗を見ず。是故に當に知るべし。境界清淨、智慧清淨、分別すべからず、中間あることなし。滅道の本となるが故に、此法身に

【七】前の如如の法と如如の智と同意。
【八】前は慧清淨證悟の方面より見たる清淨、後は滅清淨斷惑の方面より見たる清淨、一は菩提にして他は涅槃なり。
【九】化身非應身。（隨緣化導）
【一〇】應身非化身。（他受用身）
【一一】化身亦應身。（二乘所見）
【一二】非化身非應身。（法　身）
【一三】法身の消極遮情の說明。本體はカントの云へる如く、超絕的なり、時空因果の律する所にあらず、維摩の一默ある所以なり。

於て、能く如來種種の事業を顯はす。善男子、是身の因緣・境界・處所・果・本に依る、思議し難きが故に。若し此義を了せば、是身は卽是大乘、是如來の性、是如來藏なり。此身に依り、初心修行地の心を發するを得て、不退地心を顯現することを得。また一生補處、金剛の心を現ずることを得。如來の心悉く顯現し、無量無邊の如來の妙法、皆悉く顯現す。此法身に依りて、不可思議の摩訶三昧顯現を得。此法身に依りて、一切の大智を現ずることを得。是故に二身は三昧に依り、智慧に依りて、顯現を得。此の如く、(四)法身は自體に依り常と說き、我と說く。大三昧に依り樂と說き、大智に依りて清淨と說く。是故に如來は、常住にして、自在・安樂・清淨なり。大三昧に依りて一切の禪定首楞嚴等、一切の念處、大法念等、大慈・大悲・一切の陀羅尼、一切の神通、一切の自在、一切法の平等攝受、是の如きの佛法、悉く皆出現す。此大智に依りて、十力・四無所畏・四無礙辯・一百八十不共の法・一切の希有不可思議の法、悉く皆顯現す。譬へば如意寶珠に依りて、無量無邊の種種の珍寶、悉く皆現ずることを得るが如し。是の如く、大三昧の寶に依り、大智慧の寶に依り、能く種種無量無邊の諸佛の妙法を出す。善男子、是の如きは、法身の三昧と智慧なり。一切の相を過ぎ、相に著せず、分別すべからず。常にあらず、斷にあらず、是を中道と名く。分別ありと雖も、體に分別なし。三數ありと雖も、三體なし。增せず減せず、猶夢幻のごとし。亦所執なく、亦能執なし。法體如如、是解脫生死の境を過ぎ、生死の暗を越ゆ。一切の衆生修行する能はず、

【四】法身の積極說明。表德門に依る。

至る能はざる所、一切諸佛菩薩の住處なり。善男子、譬へば人あり、願うて金を得んと欲し、處に求覓し、遂に金鑛を得、既に鑛を得已り、便ち之を碎き、精者を擇取し、爐中に銷錬して淸淨の金を得、意に隨ひて廻轉して、諸の鐶釧、種種の嚴具を作る。諸用ありと雖も、金性改らざるが如し。復次に善男子善女人、勝解脫を求め、世善を修行す。如來及び弟子衆を見るを得て、親近を得已り、佛に白して言さく、「世尊何等をか善とし、何等をか不善とし、何等をか正く修して、淸淨の行を得るや」と。諸佛如來及び弟子衆、彼問を見る時、是の如く思惟す。「是善男子善女人、淸淨を求めんと欲し、正法を聽かんと欲す。便ち爲に說きて其をして開悟せしめん」と。彼既に聞き已り、正念に憶持し發心修行して精進力を得、嬾惰の障を除き、一切の罪を滅し、諸の學處に於て、不尊重を離れ、掉悔の心を息めて、初地に入る。初地の心に依り、利有情の障を除き二地に入ることを得。此地中に於て不逼惱障を除き、三地に入る。此地中に於て、心輭淨の障を除き、四地に入る。此地中に於て、善方便の障を除き、五地に入る。此地中に於て、見眞俗の障を除き、六地に入る。此地中に於て、見行相の障を除き、七地に入る。此地中に於て、不見滅相の障を除き、八地に入る。此地中に於て、不見生相の障を除き、九地に入る。此地中に於て、六通の障を除き、十地に入る。此地中に於て、所知障を除き、根本心を除き、如來地に入る。如來地とは三淨に由るが故に、極淸淨と名く。云何が三となす。一には煩惱淨、二には苦淨、三には相淨なり。譬へば眞金の鎔消冶錬し、既に燒打し已り、復塵

垢なきが若し。金性本清淨なることを顯さん爲の故に、金體清淨とす。金なしと謂ふにはあらず。譬へば濁水の澄渟して、清淨に復滓穢なし、水性本清淨なるを顯はさんが爲なるが故に。水なしと謂ふにはあらず。是の如く法身煩惱と雜はる。苦集除き已りて、復餘習なし。佛性本清淨なるを顯はさんが爲の故に。體なしと謂ふにあらず。譬へば虚空の煙・雲・塵・霧に障蔽せらるるが如し。若し屏を除き已れば、是空界淨し。空なしと謂ふにあらず。是の如く法身に一切の衆苦、悉く皆盡くるが故に、說いて清淨とす。體なしと謂ふにはあらず。譬へば人ありて、睡夢の中に於て、大河水の其中を漂泛するを見る。手を運らし、足を動かし、流を截りて渡り、彼岸に至ることを得、彼の身心懈退せざるが故に。夢より覺め已りて、水彼此岸の別あるを見ず。心なしと謂ふにあらず。生死妄想既に滅盡し已れば、是清淨を覺す。覺なしと謂ふにあらず。是の如く法界一切の妄想復生ぜざるが故に、說いて清淨とす。是諸佛其實體なきにあらず。

復次に善男子、是法身の(一五)惑障清淨、能く應身を現ず。業障清淨、よく化身を現ず。智障清淨、よく法身を現ず。譬へば空に依て電を出し、電に依て光を出すが如し。是の如く、法身に依るが故に、能く應身を現じ、應身に依るが故によく化身を現ず。(一六)性の淨に由るが故に、能く法身を現

【一五】惑は煩惱そのものにして無明を本とす。業は此惑に依りて生じたる善惡の諸業をいふ。この二者、質に精粗あり、事に本末あり。

【一六】普通說く佛の三德なり、左の如し。

性清淨―法身(本體)
智慧清淨―般若(智慧)
三昧清淨―解脫(大用)

【一七】已下決定深信を說く、佛法の修行必ず之あるを要す。

じ、智慧清淨、よく應身を現じ、三昧清淨よく化身を現ず。此三の清淨は是法の如如・不異如如・一味如如・解脱如如・究竟如如なり。是故に諸佛の體は、異あることなし。

(一七)善男子、若し善男子善女人ありて、如來は是我大師なりと說き、若し是の如き決定の信をなさば、此人深心に如來の身、別異あることなきを解すべし。善男子、是義を以ての故に、諸の境界に於ける不正の思惟、悉く皆除斷し、卽ち知る、彼法二相あることなく、亦分別なく聖の修行する所なりと。如如に彼に於て二相あるなし。正修行の故に、是の如く是の如く、一切の諸障悉く皆除滅す。如如に一切の障滅す。是の如く是の如く、法如如、如如の智、最清淨を得。如如に法界の正智清淨なれば、是の如く是の如く、一切の自在具足し、攝受皆成就を得、一切の諸障悉く皆除滅す。一切の諸障清淨を得るが故に、是を眞如の正智・眞實の相と名く。是の如く見るもの、是を聖見と名く。是を則ち名けて眞實の見佛と爲す。何を以ての故に。實の如く法の眞如を見ることを得るが故なり。是故に諸佛は悉く能く普く一切の如來を見る。何を以ての故に。聲聞獨覺は已に三界を出で、眞實の境を求むるも知見すること能はず。是の如く聖人知見せざる所、一切の凡夫皆疑惑・顚倒・分別を生じて、得度すること能はず。兎の海に浮び必らず過ぐること能はざるが如し。所以はいかん、力微劣なるが故なり。凡夫の人亦復是の如し。法の如如に通達する能はざるが故に。然るに諸の如來分別の心なし。一切の法に於て大自在を得、清淨深智慧を具足するが故に、是の自境界は他と共にせざるが故に、是故に諸佛

如來、無量無邊阿僧祇劫に於て、身命を惜まず、難行苦行し、方に此身を得、最上にして、比なく、思議すべからず、言說の境を過ぐ。是妙に寂靜にして諸の怖畏を離る。

善男子、是の如く、法眞如を知見するものは、生老死なく、壽命限りなく、睡眠あるなく、また饑渇なし。心常に定にあつて、散動あることなし。若如來に於て諍論の心を起さば、是れ則如來を見ること能はず。諸佛の所說は皆能利益あり、聽聞することあるものは、解脱せざるなし。諸の惡禽獸・惡人・惡鬼・相逢値せず。法を聞くに由るが故に、果報盡くることなし。然るに諸の如來に、無記の事なし。一切の境界に、欲知の心なし。生死涅槃異想あるなし。如來の記する所、決定せざるなし。諸佛如來は(一八)四威儀の中に、智の攝にあらざるなし。一切の諸法爲さざることなし。慈悲の攝する所爲さざるあることなし、諸の衆生を利益し安樂にす。

善男子、若し善男子善女人ありて、此金光明經に於て、聽聞信解せば、地獄・餓鬼・傍生・阿修羅道に墮せず。常に人天に處し、下賤に生せず、恒に諸佛如來に親近し、正法を聽受し、常に諸佛清淨の國土に生ず。所以はいかに、此甚深の法を聞くことを得るに由れり。是善男子善女人、則ち如來のために、已に知られ、已に記せられ、當に阿耨多羅三藐三菩提を退せざるを得べし。若善男子善女人、此甚深微妙の法に於て、一たび耳を經ば、當に知るべし、此人如來を謗せず、正法を毀らず、聖衆を輕んぜず、一切の衆生未だ善根を種ゑざるものに、種うるを得しむるが故

【一八】行住坐臥。

に、已に善根を種うるものには、增長成熟せしむるが故に、一切の世界の所有衆生、皆勸めて、六波羅蜜多を修行せしむ。』

爾時に虚空藏菩薩、梵・釋・四天王等、即座より起ちて、偏に右肩を袒ぎ、合掌恭敬して佛足を頂禮し、佛に白して言さく、『世尊若し所在の處に、是の如き金光明王微妙の經典を講說せば、其國土に於て、四種の利益あり。一には國王の軍衆强盛にして、諸の怨敵なく、疾病を離れ、壽命長く、吉祥安樂にして、正法興顯せん。二には中宮・妃后・王子・諸臣和悅して、諍ふことなく、諂佞を離れて、王に愛重せられん。三には沙門・婆羅門及諸の國人、正法を修行して、病なく安樂にして枉死者なく、諸の福田に於て、悉く皆修立せん。四には三時の中に於て、四大調適し、常に諸天に增加守護せられ、慈悲平等にして、傷害の心なく、諸の衆生をして、三寶に歸敬し、皆願うて菩提の行を修習せしめん。是を四種利益の事となす。世尊、我等また常に經を弘めんが爲に、是の如き持經の人、所在の住處に隨逐して利益を作さん。』

佛言く、『善哉善哉、善男子、是の如し、是の如し。汝等當に勤心に此妙經王を流布すべし。則ち正法をして久しく世に住せしめん。』

夢見金鼓懺悔品第四

爾時に妙幢菩薩、親しく佛前に於て妙法を聞き已りて、歡喜踊躍し一心に思惟して、還りて本處に至りしに、夜夢中に於て大金鼓を見たり。光明晃曜として猶日輪のごとし。此光の中に於て十方無量の諸佛、寶樹の下に於て瑠璃座に坐して、百千の大衆に圍繞せられて說法をなすを見るを得たり。(又)一の婆羅門ありて金鼓を桴擊し大音聲を出すを見たり。(その)聲の中に微妙の〔一〕伽陀を演說して、懺悔の法を明かす。妙幢聞き已り皆悉く憶持し〔二〕繫念して住す。天曉くるに至り、無量百千の大衆に圍繞せられ、諸の供具を〔三〕將ちて王舍城を出で、鷲峯山に詣で、世尊の所に至り、佛足を禮し已り、香花を布き設け、右に遶ること三帀し、退きて一面に坐し、合掌恭敬し、尊顏を瞻仰して、佛に白して言さく、

『世尊、我夢中に於て、婆羅門手に桴を執りて、妙金鼓を擊ち、大音聲を出し、その聲の中に微妙の伽陀を演說して、懺悔の法を明かすを見て、我皆憶持しぬ。惟願くは世尊、大慈悲を降し、我が所說を聽き給へ』と。卽ち佛前に於て、頌を說きて曰く、

〔四〕『我昨夜の中に於て、夢に大金鼓を見たり。其形極めて姝妙にして、周遍金光あり。

〔一〕梵語(Gāthā)の對譯、讚美歌。

〔二〕精神の集中。

〔三〕或刊本には持ちてに作る。

〔四〕已下五言の頌四偈。梵本と一致す。

猶盛なる日輪の如く、光明皆普く輝きて、十方界に充滿し、
咸く諸佛、寶樹の下にありて、各琉璃座に處し、無量百千の衆、恭敬して圍繞するを見たり、
一の婆羅門あり、杖もて金鼓を擊ち、其聲の内に於て、此妙伽陀を說けり。

(五)金光明の鼓・妙聲を出し、徧く三千大千界に至り、能く(六)三塗極重の罪と、及び人中の諸の苦厄を滅す。
此金鼓の聲の威力に由りて、永く一切煩惱の障を滅し、怖畏を斷除して安隱ならしむ。譬へば(七)自在牟尼尊の如し。
佛は生死大海の中に於て、行を積みて一切智を修め成じ、能く衆生の(八)覺品を具せしめ、究竟じて咸く功德の海に歸せしむ。
此金鼓妙聲を出すに由りて、普く聞者をして梵響を獲て、無上菩提の果を證得せしめ、常に淸淨の妙法輪を轉じ、
壽を住むる不可思議劫にして、機に隨ひ法を說きて群生を利し、能く煩惱衆苦の流を斷じ、貪・瞋・癡等皆除滅せしむ。
若衆生ありて惡趣に處し、大火猛焰身に周遍せんに、若是妙鼓の音を聞くを得ば、即能く苦を離れて佛に歸依し、

【五】已下七言の偈十一頌。梵本と一致す。
【六】火・血・刀の三塗。
【七】一切の法に於て自在を得たるもの、卽ち如來を指す。
【八】覺品は三十七の菩提分法をいふ。四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七菩提分・八聖道これなり。

皆(九)宿命智を成就することを得て、能く過去の百千生を憶し、悉く皆牟尼尊を正念して、如來甚深の敎を聞くことを得ん。

金鼓の勝妙音を聞くに由りて、常に諸佛に親近し、悉く能く諸の惡業を捨離し、純ら淸淨の諸善品を修することを得ん。

一切天人有情の類、殷重至誠に願ふ所の者は、金鼓の妙音聲を聞くことを得て、能く求むる所をして皆滿足せしめん。

衆生(一〇)無間獄に墮在し、猛火炎の熾なる苦身を焚きて、救護あるなく輪廻に處らんも、聞くものは能く苦をして除滅せしめん。

人天餓鬼(一一)傍生の中の、所有現に受くる諸の苦難も、金鼓の妙響を發するを聞くを得ば、皆苦を離れ解脱を得ん。

(一二)現在十方界の、常住の兩足尊、願くは大悲心を以て、哀愍して我を憶念し給へ、

衆生歸依なく、まだ救護あるなき、是の如き類のために、能く大歸依となり給へ。

我先に作る所の罪、極重の諸の惡業、今(一三)十力の前に對し、至心に皆懺悔す。

【九】宿命智とは前世の事を確知する能力、六通の一なり。

【一〇】八大地獄中最重最極の地獄(Avīci)。

【一一】傍生とは畜生道をいふ。

【一二】已下五言の偈三十八頌。梵經と一致す。

【一三】十力(Daśa-bala)。即ち處非處智力、業異熟智力、種種勝解智力、種種界智力、根上下智力、徧趣行智力、一切靜慮解脱三昧地、三摩鉢底出離雜染清淨智力、宿住隨念智力、死生智力及漏盡智力の十種の智力にして之を具足したるもの即ち佛世尊なり。

我諸佛を信ぜず、また尊親を敬せず、務めて衆善を修せず、常に諸の惡業を造り、
或は自ら尊高と、種姓と及び財位と、盛年とを恃み放逸を行ひ、常に諸の惡業を造り、
心恒に邪念を起し、口に惡言を陳べ、過罪を見ず、常に諸の惡業を造り、
恒に愚夫の行をなし、無明の闇心を覆ひ、不善の友に隨順し、常に諸の惡業を造り、
或は諸の戲樂に因り、或は復憂惱を懷き、貪瞋のために纏(縛)せらる、故に我諸惡を造りぬ。
不善人に親近し、及び慳嫉の意に由り、貧窮にして諂誑を行ふ、故に我諸惡を造りぬ。
衆過を樂はずと雖も、怖畏するが故と、自在を得ざるとに由りての故に、我諸惡を造りぬ。
或は躁動心のために、或は瞋恚と恨と、及び飢渇の惱に由るが故に、我諸惡を造りぬ。
飲食と衣服と、及び女人を貪愛するに由り、煩惱の火に燒かるが故に、我諸惡を造りぬ。
佛・法・僧衆に於て、恭敬心を生ぜず、是の如き衆罪を造りぬ。我今悉く懺悔す。
(一四)獨覺と菩薩とに於ても、亦恭敬心なく、是の如き衆罪を造りぬ。我今皆懺悔す。
無知にして正法を謗り、父母に孝せず、是の如き衆罪を造りぬ。我今皆懺悔す。
愚痴と憍慢と、及び貪と瞋との力に由りて、是の如き衆罪を造りぬ。我今悉く懺悔す。
我十方界に於て、無數の佛を供養し、當に衆生を(一五)拔きて、諸の苦難を離れしめんと願ふべし。

【一四】獨覺は又緣覺ともいふ。
【一五】拔濟するの義、生死輪廻

願くは一切の有情をして、皆(二六)十地に住せしめ、福智圓滿し已りて、成佛して群迷を導かん。

我諸の衆生のために、苦行すること百千劫、大智慧力を以て、皆苦海を出でしめん。

我諸の(二七)含識のために、甚深の經、最勝金光明を演說し、能く諸の惡業を除かん。

若人百千劫に、諸の極重罪を造らんも、暫時に能く(二八)發露せば、衆惡盡く消除せん。

此金光明(經)に依りて、是の如く懺悔をなす。斯に由りて能く速に、一切諸の苦業を盡さん。

勝定百千種、不思議の總持、(二九)根・力・覺・道支を修習して、常に倦むことなけん。

我當に十地に至り、珍寶處を具足し、圓かに佛の功德を滿し、生死の流を濟度せん。

我が諸佛海、甚深の功德藏、妙智の思議し難きに於て、皆具足を得しめん。

唯願くは十方佛、觀察して我を護念し、皆大悲心を以て、哀みて我懺悔を受けたまへ。

我多劫の中に於て、造れる諸の惡業、斯に由りて苦惱を生ぜり、哀愍して願くは消除し給へ。

我諸の惡業を造り、常に憂怖の心を生じ、(三〇)四威儀の中に於て、曾て歡樂の想なし。

の泥中より衆生を拔き濟ふ。

【二六】菩薩最高の階級にして其名義は下の淨地陀羅尼品を見よ

【二七】生物を云ふ、六識を含有するもの。

【二八】告白すること。

【二九】前に注したる五根・五力・七覺・八聖道支也。

【三〇】行・住・坐・臥。

諸佛大悲を具へて、能く衆生の怖を除きたまふ。願くは我懺悔を受けて、憂苦を離るることを得しめたまへ。

我煩惱障、及び諸の報業あり。願くは大悲の水を以て、洗濯して淸淨ならしめ給へ。

我先に諸の罪を作り、及び現に惡業を造りぬ、至心に皆發露す、咸く願くは蠲除することを得ん。

未來の諸の惡業は、防護して起らざらしめん。假令違ふものあるも、終に覆藏せじ。

〔二二〕身の三と語の四種と、意業に復三あり、諸の有情を繫縛し、無始に恒に相續す。

斯三種の行に由りて、十惡業を造作す、是の如き衆多の罪、我今皆懺悔す。

我諸の惡業を造り、苦報當に自ら受くべし、今諸佛の前に於て、至誠に皆懺悔す。

〔二三〕此贍部州、及び他方世界の、所有諸の善業、今我皆隨喜せん。

願くは十惡業を離れて、十善道を修行し、十地の中に安住し、常に十方佛を見ん。

我身と語と意とを以て、修する所の福智の業、願くは此善根を以て、速に無上慧を成ぜん。

【二二】殺生・偸盜・邪婬……身三 ｝十惡業
妄語・綺語・兩舌・惡言……語四
慳貪・瞋恚・邪見……意三
身語意三種の惡行なり。

【二三】此贍部州は南贍部州(Jambu-Dvipa)卽ち吾吾の人界なり。須彌山の南方に位す。懺悔に次ぎて、一切の善業を隨喜するは大乘の通法なり。

(二三)我今親しく十力の前に對し、衆多の苦難事を發露す。凡愚三有に迷惑する難、恒に極重惡業を造る難、
我が積集する所の欲邪の難、常に貪愛を起し流轉する難、此世間に於て耽著する難、一切の愚夫煩惱の難、
狂心・散亂・顚倒の難、及び惡友に親近する難、生死の中に於て貪染する難、瞋癡闇鈍にして罪を造る難、
(二四)八無暇の惡處に生ずる難、未だ曾て功德を積集せざる難、我今皆(二五)最勝の前に於て、無邊の罪・惡業を懺悔す。
我今諸の善逝に歸依す。我が德海の無上尊、大金山の十方を照らすが如きを禮したてまつる。唯願くは慈悲哀みて攝受し給へ。
身色は金光にして淨くして無垢にして目は清淨の紺琉璃の如く、吉祥・威德・名稱の尊、大悲の慧日衆闇を除く。
佛日の光明常に普遍に、善淨無垢にして諸の塵を離る、牟尼の月は照らして極めて清涼なり、能く衆生煩惱の熱を除く、
三十二相遍く莊嚴し、八十の隨好皆圓滿し、福德難思にしてともに等しきものなし、日の光を流

【二三】已下七言の偈、四十六頌あり、梵本と符合す。
【二四】八無暇は八難の異名。八難處は佛道を修する間暇なき故に無暇と云ふ。八難處とは一地獄、二餓鬼、三畜生、四鬱單越、五長壽天、六聾盲瘖啞、七世智辯聰、八佛前佛後。
【二五】最勝。(Jina)の譯語。佛陀の異名。

ちて世間を照らすが如し。

色は琉璃の如く淨くして無垢、猶滿月の虚空に處するが如し、妙玻瓈の網は金軀に映じ、種種の光明を以て嚴飾す。

生死の苦しき瀑流の內に於て、老病と憂愁との水に漂はさる。是の如き苦海堪へ忍び難し、佛日光を舒べて永く竭きしむ。

我今一切智、三千世界希有の尊を稽首す、光明晃耀の紫金身、種種の妙好皆嚴飾し、

大海水の量り知り難く、大地の微塵數ふべからざるが如く、(二六)妙高山の稱量し叵きが如く、亦虛空の際あるなきが如し。

諸佛の功德も亦是の如し、一切有情知る能はず、無量劫に於て諦に思惟せんも、能く德海の岸を知るものあるなし。

此大地と諸の山嶽とを盡し、(二七)柝きて微塵の如きを能く算知し、毛端の渧滴尚量るべきも、佛の功德能く數ふるなし。

一切の有情皆共に、世尊の名稱諸の功德を讚ず。淸淨の相好の妙莊嚴は、稱量して分齊を知るべからず。

我が所有衆善の業、願くは速に無上尊を成ずることを得て、廣く正法を說きて群生を利し、悉く

【二六】須彌、Sumeruの音譯。
【二七】析と同字。

衆苦を解脱せしめん。

大力の魔軍衆を降伏し、當に無上の正法輪を轉せん、久しく劫數に住する思議し難く、衆生の甘露味を充足すること、尙過去の諸の最勝の如くならん。

【二八】六波羅蜜皆圓滿し、諸の貪欲と瞋と癡とを滅し、煩惱を降伏し衆苦を除かん。

【二八】布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧。

願くは我常に宿命智を得て、能く過去の百千生を憶ひ、亦當に常に牟尼尊を憶念し、諸佛甚深の法を聽くことを得ん。

願くは我斯諸の善業を以て、無邊の最勝尊に奉事せん、一切不善の因を遠離し、恒に眞妙の法を修行することを得ん。

一切世界の諸の衆生、悉く皆苦を離れて安樂を得しめん、所有諸根具足せざるもの、彼をして身相皆圓滿せしめん。

若衆生ありて病苦に遭ひ、身形羸瘦して所依なからんに、咸く病苦をして消除することを得しめ、諸根色力皆充滿せしめん。

若し王法を犯して刑戮せらるべく、衆苦逼迫して憂惱を生ぜんに、彼斯の如く極苦を受る時、歸依して能く救護するものあるなし。

若し鞭・杖・枷・鎖の繫を受け、種種の苦具其身に切に、無量百千憂惱する時、身心を逼迫して暫くも樂無らんに、
皆繫縛、及び鞭杖苦楚の事を免るるを得しめん。將に刑に臨まんとするものには命全きを得しめ、衆苦皆永く除盡せしめん。
若衆生ありて飢渴に逼めらるるものには、種種殊勝の味を得しめん。盲者は視ることを得聾者は聞え、跛者は能く行き瘂は能く語らしめん。
貧窮の衆生は寶藏を得て、倉庫盈ち溢れて乏くる所なく、皆上妙の樂を受けて、一衆生として苦惱を受くるものなからん。
一切の人天皆樂み、容儀溫雅にして甚端嚴なるを見、悉く皆現に無量の樂を受けて、受用豐饒に福德具はらん。
彼衆生の伎樂を念ずるに隨ひて、衆妙の音樂皆現前し、水を念ぜんには淸涼の池を現じて、金色の蓮花其上に汎ばん。
彼衆生の心の念ずる所に隨ひて、飮食衣服及び牀敷、金・銀・珍寶・妙琉璃、瓔珞・莊嚴皆具足せん。
衆生をして惡響を聞かしむるなからん。亦また相違あるを見ずして、受くる所の容貌悉く端嚴に、各各慈心もて相ひ愛樂せん。

世間の資生諸の樂具、心に隨ひて念ずるとき皆滿足し、得る所の珍財に悋惜なく、諸の衆生に分布し施與せん。

燒香と末香と及び塗香と、衆妙の雜花一色に非ざる、毎日三時に(自ら)樹より墮ちて、心に隨ひ受用して歡喜を生ぜん。

普く願くは衆生咸く、十方[二九]一切の最勝尊と、三乘清淨の妙法門と、菩薩・獨覺・聲聞衆に供養せん。

常に願くは卑賤に處するなく、無暇八難の中に墮せず、生れて有暇人中の尊となり、恒に十方佛に親承するを得ん。

願くは常に富貴の家に生れ、財寶・倉庫皆盈滿することを得、顏貌も名稱も與に等しきものなく、壽命延長して劫數を經ん。

悉く願くは女人變じて男となり、勇健聰明にして智慧多く、一切常に菩薩の道を行じ、六度を勤修して彼岸に到らん。

常に十方無量の佛、寶王樹下に安處し、妙琉璃師子の座に處するを見て、恒に法輪を轉じたまふに親承するを得ん。

若過去及び現在に於て、三有に輪廻して造れる諸業の、能く厭ふべき不善趣を招くべきものは、

【二九】一切の最勝尊は佛法僧の三寶なり。三乘は聲聞・緣覺・菩薩にして、この道を說くを三種の法門とす。

願くは消滅して永く餘すことなからん。

一切の衆生有海に於て、生死の羂網もて堅牢に縛せらるるを、願くは智劍を以て斷除し、苦を離れて速に菩提處を證せしめん。

衆生此贍部の內に於て、若くは他方世界の中に於て、作す所の種種の勝福田、我今皆悉く隨喜を生ぜん。

此福德を隨喜する事、及び身・語・意に造れる諸善を以て、願くは此勝業常に增長し、速に無上の大菩提を證せん。

所有佛の功德を禮讃する、深心清淨にして瑕穢なく、廻向・發願福邊りなく、當に惡趣を超ゆる六十劫ならん。

若善男子及女人、婆羅門等の諸の勝族ありて、合掌して一心に佛を讃嘆せば、生生に常に宿世の事を憶し、

諸根淸淨にして身圓滿し、殊勝の功德皆成就せん。願くは未來所生の處に於て、常に人天に共に瞻仰せられん。

一佛十佛の所に於て諸の善根を修して、今聞くことを得るにあらず、百千佛の所に於て種うる所の善根に(由りて)、方に斯の懺悔の法を聞くことを得ん。』

爾時に世尊、此說を聞き已り、妙幢菩薩を讃じて言はく、『善哉、善哉、善男子よ。汝が夢みし所の金鼓聲を出して、如來の眞實功德幷に懺悔の法を讃嘆したるが如き、若し聞くことあらんものは、福を獲ること甚だ多し。廣く有情を利して罪障を除滅せん。汝今應に知るべし、此勝業は皆是過去に讃嘆發願せる宿習の因緣と、及び諸佛威力の加護とに由るを。この因緣常に汝が爲に說きぬ。』時に諸の大衆此法を聞き已り、咸く皆歡喜して信受し奉行しき。

卷の第三

滅業障品第五

(一)爾時に世尊正分別に住し、甚深微妙の靜慮に入り、身の毛孔より大光明を放ち給ふ。無量百千種の色あり、諸佛の刹土悉く光の中に現ず。(二)十方恒河沙の校量譬喩も及ぶこと能はざる所なり。(三)五濁の惡世光に照らされ、この諸の衆生、十惡業・(四)五無間罪を作り、三寶を誹謗し、尊親に孝せず、師長婆羅門を輕慢し、地獄・餓鬼・傍生に墮すべきもの、彼(等)各光の所住處に至るを蒙る。この諸の有情、斯光を見已りて、光の力に由るが故に、皆安樂を得、端正姝妙にして色相具足し、福智もて莊嚴し、諸佛を見ることを得たり。

是時に(五)帝釋と一切の天衆、及び恒河女神并に諸の大衆光の希有なるを蒙りて、皆佛の所に至り、右に繞ること三帀し、退きて一面に坐しぬ。

爾時に天帝釋佛の威力を承け、卽ち座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、佛に白して言さく、

【一】此品梵本之を缺く。

【二】十方に於ける恒河の沙數にして、恒河沙の十倍。

【三】劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁の五を五濁と云ふ、十惡業は前を見よ。

【四】殺父母・破和合僧・出佛身血・殺阿羅漢・破羯磨僧の五。下の經文を見よ。

【五】三十三天の主因陀羅(Indra)是なり、其名をSakraといふ。帝釋は此二語を譯したるもの。

『世尊、云何が善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提を願求し、大乘を修行し、一切邪倒の有情を攝取せんに、曾て造作する所の業障罪、云何が懺悔して除滅することを得べき。』

佛天帝釋に告げ給はく、『善哉、善哉、善男子、汝今修行し、無量無邊の衆生のために、淸淨の解脫安樂を得しめ、世間を哀愍し一切を福利せんと欲す。若衆生ありて、業障に由るが故に諸罪を造るものは、當に策勵して晝夜六時に偏に右肩を袒ぬぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬し、一心專念に口に自ら說きて言へ、「現在十方一切の諸佛、已に阿耨多羅三藐三菩提を得たまへるものに歸命頂禮したてまつる。（六）妙法輪を轉じ、照法輪を持し、大法雨をふらし、大法鼓を擊ち、大法螺を吹き、大法幢を建て、大法炬を乘り給ふ。諸の衆生を利益し、安樂にせんと欲するが爲の故に、常に法施を行じ、群迷を誘進し、大果を得て常樂を證することを得しめんが故に、是の如き等の諸佛世尊、身・語・意を以て稽首し、歸誠し、至心に禮敬す。彼の諸の世尊（七）眞實慧を以て眞實眼・眞實證明・眞實平等を以て、悉く一切衆生善惡の業を知り悉く之を見給ふ。我無始の生死より以來、惡に隨ひて流轉し、諸の衆生と共に業障罪を造りぬ。貪・瞋・癡のために纏縛せられ、未だ佛を識らざる時、未だ法を識らざる時、未だ僧を識らざる時、未だ善惡を識らず、身語意に由りて（八）無間罪

【六】　妙法輪。照法輪。共に佛陀の說法を指すも、妙法輪は見道の理を示し、照法輪は修道の要を說くと釋するを常とす。

【七】　皆佛の功德。眞實慧は眞俗二智を具するを云ひ、眞實眼は肉・天・慧・法・佛の五種の眼あるを云ひ、眞實證明は前の二智を實證したるを云ひ、眞實平等は眞如平等の理を證得したるをいふ。

を造りぬ。(一)惡心もて佛身より血を出し、(二)正法を誹謗し、(三)和合僧を破り、(四)阿羅漢を殺し、(五)父母を殺害す。身の三と、語の四と、意の三種との行に十惡業を造り、自ら作し、他を敎へ、作すを見て隨喜し、諸の善人に於て横に毀謗を生じ、斗秤を欺誑し、僞を以て眞となし、不淨の飲食を一切に施與し、六道の中に於て所有父母更に相惱害しぬ。或は窣堵波物・四方僧物・現前僧物を盜み、自在にして用ひ、世尊の法律は奉行することを樂はず。師長の敎示は相隨順せず、聲聞・獨覺・大乘の行を行ふものを見ては、喜んで罵辱を生じ、諸の行人をして心に悔惱を生ぜしむ。己に勝るものあるを見ては、便ち嫉妬を懷き、法施と財施とに常に慳惜を生じ、無明に覆はれ、邪見、心を惑はす。善因を修せず、惡をして增長せしめ、諸佛に於て誹謗を起し、法に非法を說き、非法に法を說く。是の如きの衆罪、佛、眞實慧・眞實眼・眞實證明・眞實平等を以て悉く知り、悉く見給ふ。我今歸命して諸佛の前に對し、皆悉く發露して敢て覆藏せず。未作の罪は更に復た作らず。已作の罪は今皆懺悔せん。所作の業障は惡道・地獄・傍生・餓鬼の中、(九)阿蘇羅衆及び八難處に墮つべし。願くは我が此生の所有業障皆消滅することを得て、所有惡報は未來受けざらん。また過去の諸大菩薩の、所有業障悉く已に懺悔するが如く、我が業障、今亦懺悔し、皆悉く發露し、敢て覆藏せず、已作の罪は、願はくは除滅するを得、未來の惡は、更に敢て作らざらん。また未來の諸大菩薩、菩提の行を修し、所有業障悉く皆懺悔す

【八】五逆罪と同じ。五逆罪は無間獄に墮すべき罪なるが故に、無間罪といふ。已下其名を列ぬ。

【九】普通、阿修羅といふ。

るが如く、我業障今また懺悔し、咸な悉く發露して敢て覆藏せず。已作の罪、願くは除滅することを得て、未來の惡更に敢て造らじ。また現在十方世界の諸大菩薩菩提の行を修し、所有業障悉くまた懺悔するが如く、我業障今また懺悔し、皆悉く發露して敢て覆藏せず。已に作れる罪、願くは除滅することを得て、未來の惡更に敢て造らじ。善男子この因緣を以て、若し罪を造るあらば一刹那の中も覆藏するを得ざれ。何に況んや一日一夜乃至多時をや。若し犯罪ありて淸淨を求めんと欲せば心に愧恥を懷き、未來に於て必ず惡報あるを信じ、大恐怖を生じ、是の如く懺悔すべし。人の火に頭を燒かれ、衣を燒かるれば、救うて速に滅せしむるが如し。火未だ滅せざれば心に安きを得ず。若し人罪を犯すも亦復是の如し。即懺悔して速に除滅せしむべし。若富樂の家に生じ、多饒の財寶を願ふあらば、復意を發して大乘を修習し、亦懺悔して業障を滅除すべし。豪貴の(一〇)婆羅門種・利帝利家及び轉輪王に生れ七寶具足せんと欲せば、亦懺悔して業障を除滅すべし。善男子、若し(一一)四天王衆・三十三天・夜摩天・都史多天・樂變化天・他化自在天に生れんと欲するあらば、亦應に懺悔して業障を滅除すべし。若し(一二)梵衆・梵輔・大梵天・少光・無量光・極光淨天・少淨・無量淨・徧淨天・無雲・福生・廣果・無煩・無熱・善現天・善見・色究竟天に生ぜんと欲せば、また應に懺悔して業障を滅除すべし。若し(一三)預流果・一來果・

【一〇】婆羅門 Brahman. 及刹帝利 Kṣatriya の兩族は印度四姓中の豪貴族なり。轉輪王 Cakravarti-rāja は世界的皇帝の意にして、勢力至大の統治者なり。

【一一】已下欲界の六天なり。三十三天は帝釋所居の天にして或は忉利天ともいふ。

【一二】已下色界の十七天なり。

【一三】已下小乘の四果。

不還果・阿羅漢果を求めんと欲せば、また應に懺悔して業障を滅除すべし。若し三明・六通・聲聞・獨覺自在菩提を願求し、(一四)一切智智・淨智・不思議智・不動智・三藐三菩提正徧智を求んと欲せば、應に懺悔して業障を滅すべし。何を以ての故に、善男子、一切の諸法は因緣より生ず、如來說き給ふ所の異相の生と異相の滅と、因緣異なるが故に、是の如く過去の諸法皆已に滅盡し、所有業障また遺餘あることなし。(一五)是諸の行法未だ現に生ずるを得ざりしに、今生ずるを得て、未來の業障更に復起らず。何を以ての故に、善男子、一切の法は空なり。如來所說の法には我・人・衆生・壽者あることなく、また生滅なく、また行法なし。(一六)善男子、一切の諸法皆本に依る亦不可說なり。何を以ての故に、一切の相を過ぐるが故に。若善男子善女人ありて(一七)是の如く微妙の眞理に入り信敬の心を生ずるあらば、是を衆生なくして本に依ると名く。是義を以ての故に、懺悔業障を滅除すと說く。

善男子、若し人四法を成就せば、能く業障を除き、永く清淨を得ん。云何が四となす。一には邪心を起さず、正念成就す。二には甚深の理に於て、誹謗を生ぜず。三には初行の菩薩に於て、一切智の心を起す。四には諸の衆生に於て、慈無量を起す。是を四となすと謂ふ。』

【一四】已下佛果の智慧を明す。此五智を總別に別ち四智に配する左の如し。

一切智智――惣じて四智に通す。
淨　智――妙觀察智。
不思議智――成所作智。
不動智――大圓鏡智。
正徧智――平等性智。

【一五】已下懺悔より發する善心の發起を說く。

【一六】一切の諸法の本性本體卽眞如に依る。言說を以て說くべからず。本體は一切の法に超越す。

【一七】之を理の懺悔といふ。卽諸法皆空、本來清淨の觀法なり。

爾時に世尊頌を説いて曰く、

（一八）『專心に三業を護り、深法を誹謗せず、一切智の想を作し、慈心もて業障を淨めよ。』

『善男子、四の業障あり、滅除すべきこと難し。云何が四となす。一には菩薩の律儀に於て極重惡を犯す。二には大乘經に於て心に誹謗を生ず。三には自の善根に於て增長すること能はず。四には三有に貪著し、出離の心なし。復四種あり業障を對治す。云何が四となす。（一九）一には十方世界の一切如來に於て、至心に親近し、一切の罪を說く。二には一切衆生の爲に諸佛を勸請し深妙の法を說かしむ。三には一切衆生の所有功德を隨喜す。四には所有一切の功德善根、悉く皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。』

爾時に天帝釋、佛に白して言さく、『世尊、世間の所有男子女人、大乘行に於て能く行ずるものあり、行ぜざるものあり。云何がよく一切衆生の功德善根を隨喜することを得ん。』

佛の言はく、「善男子若衆生ありて大乘に於て未だ修習すること能はずと雖、然も晝夜六時に於て、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬し一心專念に隨喜をなす時は、福を得ること量なし。應に是言を作すべし、「十方世界の一切衆生、現在に施・戒・心慧を修行する、我今皆悉く深く隨喜を生ぜん」と。是の如き隨喜をなす福に出るが故に、必ず當に尊重・殊勝・無上・無等・最妙の果を獲得すべし。

【一八】五言の頌一偈。

【一九】大乘五悔の中、懺悔、勸請、隨喜、廻向の四なり、第一の供養禮拜は一切に通ずるが故に畧せり。下順次に之を說く。

是の如く過去未來一切の衆生の所有善根皆悉く隨喜す。また現在に於ける（三〇）初行の菩薩、發菩提心の所有功德と、百大劫を過ぎて菩薩行を行ずる大功德あると、無生忍を獲たると、不退轉に至れると、一生補處と、是の如く一切功德の蘊、皆悉く至心に隨喜讃嘆す。過去と未來との一切菩薩の所有功德を隨喜讃嘆すること亦復是の如し。また現在十方世界に於ける一切の諸佛應正徧知の、妙菩提を證し、無邊の諸衆生を度せんがための故に、無上の法輪を轉じ・無礙の法施を行じ、法鼓を擊ち、法螺を吹き、法幢を建て、法雨をふらし、一切の衆生を勸化して咸く信受せしめ、皆法施を蒙りて、悉く無盡の安樂を充足することを得、また復所有菩薩・聲聞・獨覺の功德善根を積集するに、若し衆生ありて未だ是の如き諸功德を具せざるものに、悉く具足せしむる、我皆隨喜せん。是の如く過去未來の諸佛・菩薩・聲聞・獨覺の所有功德亦皆至心に隨喜讃嘆せん。善男子、是の如く隨喜は無量功德の聚・恒河沙の如きを得べし。三千大千世界の所有衆生、皆煩惱を斷じ、阿羅漢を成ぜんに、若し善男子善女人ありて、其形壽を盡くし、常に上妙の衣服・飮食・臥具・醫藥を以て供養をなさんとも、是の如きの功德は前の如き隨喜の功德の千分の一に及ばず。何を以ての故に、供養の功德は數あり量ありて、一切の諸の功德を攝せざるが故に、隨喜の功德は無量無數にしてよく三世一切の功德を攝すればなり。是故に若し人勝善根を增長せんことを欲求せば、應に是の如く隨喜の功德を修すべし。若し

【三〇】菩薩の初行即ち初めて菩提心を起すより始め其最上位即佛の位を繼ぐべき一生補處まで菩薩の五階を列擧す。

女人ありて女身を轉じて男子たらんことを願ふものは、亦應に隨喜の功德を修すべし。必ず心に隨ひて現に男子となるを得べし。』

爾の時天帝釋佛に白して言さく、『世尊、已に隨喜の功德を知れり。勸請の功德唯願くは說き給へ。未來一切の菩薩をして法輪を轉せしめ、現在の菩薩をして正く修行せしめんと欲するが故に。』

佛帝釋に告げ給はく、『若善男子善女人ありて、阿耨多羅三藐三菩提を願求するもの、應に聲聞・獨覺・大乘の道を修行すべきもの、是人晝夜六時に於て、〔二〕前の威儀の如く一心專念に是の如き言を作すべし。我今十方一切の諸佛世尊の已に阿耨多羅三藐三菩提を得たまへるもの、未だ無上の法輪を轉じ給はざるもの、〔三〕報身を捨て涅槃に入らんと欲し給ふもの、我今至誠に頂禮して、大法輪を轉じ、大法雨を雨らし、大法燈を然し、理趣を照明し、無礙の法を施して、般涅槃するなく、久く世に住し、一切の衆生を度脫し安樂ならしめ、前の所說の如く乃至無盡の安樂を得しめんことを勸請す。我今此勸請の功德を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、過去・未來・現在の諸大菩薩が勸請の功德を菩提に廻向するが如く、我亦是の如く勸請の功德を無上正等菩提に廻向せん。善男子、假使人ありて三千大千世界の中に滿ちたる七寶を以て如來に供養せんに、若復人ありて如來の大法輪を轉ぜんことを勸請せば、得る所の功德、其福彼に勝れたり。何を以て

〔二〕偏袒右肩等なり。前の懺悔の下を見よ。

〔三〕此處は三身の中の報身の意にあらずして、普通の現身といふ樣なる輕き意味、三身中の報應二身に通す。

の故に、彼は是財施、此は是法施なればなり。

善男子、且く三千大千世界の七寶の布施を置き、若人恒河沙數の大千世界に滿てる七寶を以て一切の諸佛を供養せんに、勸請の功德また彼よりも勝れたり。其法施には五の勝利あるに由れり。云何が五となす。一には法施は自他を利することを兼ぬ。財施は爾らず。二には法施は能く衆生をして三界を出でしむ。財施の福は欲界を出でず。三には法施は能く法身を淨む。財施は唯色を增長す。四には法施は窮りなし。財施は盡くることあり。五には法施はよく無明を斷ず。財施は唯貪愛を伏す。是故に善男子、勸請の功德は無量無邊にして譬喩すべきこと難し。

我が如きは昔菩薩道を行ぜし時、諸佛に大法輪を轉ぜんことを勸請しぬ。彼の善根に由るが故に、今日一切の帝釋・諸梵王等我に大法輪を轉ぜんことを勸請す。善男子、轉法輪を請ずるは諸の衆生を度脫し安樂ならしめんが爲なり。故に我往昔に於て菩提行のために、如來の久しく世に住して涅槃に入るなからんことを勸請しぬ。此善根に依りて我十力・四無所畏・四無礙辯・大慈・大悲を得、無數不共の法を證得したり。我無餘涅槃に入るべきも我が正法は久しく世に住せん。我が法身は淸淨無比にして種種の妙相・無量の智慧・無量の自在・無量の功德・思議すべきこと難し。一切の衆生、皆利益を蒙り、百千萬劫に說くも盡す能はず。法身は一切の諸法を攝藏す。一切の諸法は法身を攝せず。法身は常住なるも、常見に墮せず。復斷滅すと雖、また斷見にあらず。能く衆生種種の異見を破し、能く衆

生の種種の眞見を生ず。能く一切衆生の縛を解きて(自)縛の解くべきなし。能く衆生諸善の根本を植ゑ、未だ成熟せざるものは成熟せしめ、已に成熟するものは解脫せしむ。作なく動なく、憒閙を遠離し、寂靜・無爲・自在・安樂なり。三世を過ぎて能く三世を現じ、聲聞・獨覺の境を出で諸大菩薩の修行する所なり。一切如來の體、異あることなし。此等皆勸請の功德善根力に由るが故なり。是の如き法身、我今已に得たり。是故に若し阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲するものあらば、諸經の中に於て、一句一頌人のために解說するも、功德善根尙限量なし。何に況や如來に大法輪を轉じ久しく世に住して般涅槃するなからんことを勸請するをや。』

時に天帝釋復佛に白して言さく、『世尊、若善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提を求めんがための故に、三乘道の所有善根を修して、云何が一切智智に廻向するや。』

【三】戒法の條目。

佛天帝釋に告げ給はく『善男子、若衆生ありて、菩提を求め三乘の道を修して、所有善根願うて廻向せんと欲するものは、晝夜六時に於て、慇重至心に是の如き說を作すべし、「我無始の生死より以來、三寶の所に於て修行し成就せる所有善根、乃至傍生に一摶の食を施與し、或は善言を以て諍訟を和解し、或は三歸及び諸の(三)學處を受け、或は復懺悔・隨喜・勸請・所有善根我今作意し、悉く皆攝受して、一切衆生に廻施し、悔悋の心なし。是解脫分の善根の攝する所なればなり。佛世尊の知見する

所、稱量すべからず、無礙にして清淨なるが如く、是の如く所有功德善根悉く以て一切衆生に廻施し。(二四)不住想心・不捨想心あり。我亦是の如く功德善根悉く以て一切衆生に廻施せん。願くは如意の手を獲得し、空を搊りて寶を出し、衆生の願を滿し、富樂盡くるなく、智慧窮りなく、妙法辯才悉く皆滯りなからん。諸の衆生と共に同く阿耨多羅三藐三菩提を證し、一切智を得ん。此善根に因り、更に復無量の善法を生ずる、亦皆無上菩提に廻向せん。又過去諸大菩薩修行の時の如き、功德善根悉く皆一切種智に廻向せん。現在未來も亦また是の如し。然るに我所有功德善根亦皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向せん。

是諸の善根もて、願くは一切衆生と倶に正覺を成じ、餘の諸佛が道場菩提樹の下に坐し、不可思議・無礙・清淨にして無盡の法藏陀羅尼・首楞嚴定に住し、(二五)魔波旬が無量の兵衆を破り、見覺知すべく通達すべきもの、是の如き一切は一刹那の中に於て、悉く皆照了し、後夜の中に於て、(二六)甘露の法を獲、甘露の義を證するが如く、我及び衆生願くは皆是の如き妙覺を證せんこと、猶(二七)無量壽佛・勝光佛・妙光佛・阿閦佛・功德善光佛・師子光明佛・日光佛・網光明佛・寶相佛・寶燄佛・燄明佛・燄盛光明佛・吉祥上王佛・微妙聲佛・妙莊嚴佛・法幢佛・上勝身佛・可愛色身佛・光明遍照佛・梵淨王佛・上性佛の如くならん。

【二四】不住想は自身及報恩果報等に執著せざること。不捨想は空見に住せず、斷滅の想なきをいふ。

【二五】天魔をいふ。

【二六】甘露法は菩提にして、甘露の義は涅槃をいふ。

【二七】西方の諸佛なり。西方の三佛、東方の五佛、南方の五佛、北方の八佛を擧ぐ。

是の如き等の如來應正徧智は過去未來及現在に應化を示現し、阿耨多羅三藐三菩提を得て無上の法輪を轉じぬ。衆生を度せんが爲に我亦是の如くならん」と。廣說上の如し。

善男子、若し淨信の男子女人ありて、此金光明最勝王經滅業障品を受持し、讀誦し憶念して忘れず、他の爲に廣く說かば、無量無邊の大功德聚を得ん。譬へば三千大千世界の所有衆生、一時に皆人身を成就することを得、人身を得已りて、獨覺の道を成せんに、若し男子女人ありて、其形壽を盡して恭敬尊重し、(二八)四事もて供養し、一一の獨覺に、各七寶を施す須彌山の如く、此獨覺涅槃に入りたる後は皆珍寶を以て塔を起し、供養し、其塔高廣十二(二九)踰繕那、諸の華・香・寶幢・幡・蓋を以て常に供養をなすが如し。善男子意に於て云何。是人獲る所の功德寧ろ多しとなすや不や。」天帝釋曰く、「甚だ多し、世尊。」「善男子若復人あり、此金光明微妙の經典衆經の王たる滅業障品を受持し・讀誦し、憶念して忘れず、他の爲に廣說せば、獲る所の功德に對し、前に說く所の供養の功德は百分一に及ばず、百千萬億分乃至校量譬喩の能く及ぶ能はざる所なり。何を以ての故に、是善男子善女人、正行の中に住し、十方一切の諸佛に無上法輪を轉せんことを勸請せば、皆諸佛に歡喜讚歎せらるればなり。善男子、我が所說の如き、一切の施中に法施を勝れたりとすればなり。是故に善男子、三寶の所に於て諸の供養を設けんも比となすべからず。勸めて(三〇)三歸を受けしめ、一切の戒を持して毀犯あるな

【二八】飮食・衣服・臥具・醫藥。
【二九】舊譯には由旬とす。Yojana 凡そ九英里に當る
【三〇】佛・法・僧に歸依する書式、三歸戒と稱す。

く、三業空しからざるも比となすべからず。一切の世界の一切の衆生、力に隨ひ、能に隨ひ、願樂する所に隨ひて、三乘の中に於て菩提心を勸發するも比となすべからず。三世の中に於て一切世界のあらゆる衆生皆無礙を得て、速に無量の功德を成就せしめんも、比となすべからず。三世の刹土、一切の衆生障礙なく、三菩提を得しめんも比となすべからず。三世の刹土、一切の衆生勸めて速に〔三一〕四惡道の苦を出でしめんも比となすべからず。三世の刹土、一切の衆生勸めて極重の惡業を除滅せしめんも比と爲すべからず。一切の苦惱、勸めて解脫せしめんも、比となすべからず。一切の怖畏・苦惱・逼切皆解くを得しめんも、比となすべからず。三世佛の前の一切衆生の所有功德、勸めて隨喜して菩提の願を發さしめんも、比となすべからず。勸めて惡行罵辱の業を除き、一切の功德皆成就を願ひ、所在の生中、一切の三寶を勸請・供養・尊重・讃嘆し、衆生を勸請して、福行を淨修し菩提を成滿せしめんも比となすべからず。是故に應に知るべし、一切世界・三世の三寶を勸請し、六波羅蜜を滿足せんことを勸請し、無上法輪を轉せんことを勸請し、世に住する無量劫を經て、無量甚深の妙法を演說せんことを勸請するは、功德甚深にして能く比するものなし。

爾時、天帝釋及び恒河女神・無量の梵王・四大天衆座より起ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、合掌頂禮し、佛に白して言さく、「世尊、我等皆是金光明最勝王經を聞くを得て、今悉く受持し、

【三一】地獄餓鬼畜生の三惡道の上に修羅道を加ふ。

讀誦し、通利し、他の爲に廣說し、此法に依りて住せん。何を以ての故に、世尊、我等阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲し、此義種種の勝相に隨順し、如法に行ずるが故なり。』

爾時、梵王及天帝釋等、說法の處に於て、皆種種の（三二）曼陀羅華を以て佛の上に散ず。三千大千世界の地、皆大に動き、一切の天鼓及び諸の音樂鼓たざるに自ら鳴り、金色の光を放ち、世界に徧滿して妙音聲を出す。

時に天帝釋、佛に白して言さく、『世尊、此等皆是金光明經威神の力なり。慈悲普く救ひ、種種の利益あり、種種に菩薩の善根を增長し、諸の業障を滅す。』佛の言はく、『是の如し、是の如し。汝の所說の如し。何を以ての故に、善男子、我往昔を念ふに、無量百千阿僧祇劫を過ぎて佛あり、寶王大光照如來應正徧知と名けたりき。世に出現し、世に住する六百八十億劫なり。爾時寶王大光照如來、人・天・釋・梵・沙門・婆羅門・一切衆生を度脫して安樂ならしめんと欲するが爲の故に、出現の時に當り、初會の說法に、百千億億萬の衆を度して、皆阿羅漢を得しめ、諸漏已に盡き、三明六通、自在無礙なり。第二會に於て、復九十千億億萬衆を度し、皆阿羅漢を得しめ、諸漏已に盡き、三明・六通、自在無礙なり。第三會に於て、復九十八千億億萬衆を度し、皆阿羅漢を得しむ。圓滿なること上の如し。善男子、我爾時に於て女人の身となり、福寶光明と名けたりき。第三會に於て、世尊に親近し、是金光明經を受持し、讀誦し、他のために廣く說き

【三二】 Mandārava.

て、阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。この故に時に彼世尊我ために〔三三〕授記す、「此福寶光明女、未來世に於て佛となりて、釋迦牟尼如來〔三四〕應・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號すべし」と。女身を捨て後、是より已來、〔三五〕四惡道を越え人天の中に生じて、上妙の樂を受け、八十四百千生、轉輪王となり、今日に至り正覺を成ずることを得て、名稱普く聞えて世界に徧滿す。』

時に會の大衆、忽然として皆寶王大光照如來、無上の法輪を轉じて、微妙の法を說くを見る。

『善男子、〔三六〕此索訶世界を去りて、東方百千恒河沙數の佛土を過ぎて世界あり、寶莊嚴と名づく。其寶王大光照如來、今現に彼に在し、未だ般涅槃せず、微妙の法を說きて、廣く群生を化す。汝等見るもの卽是彼の佛なり。善男子、若し善男子善女人ありて、此寶王大光照如來の名號を聞くものは、菩薩地に於て不退轉を得、大涅槃に至らん。若し女人ありて是佛名を聞くものは、命終に臨む時、彼佛其所に來至するを見るを得ん。既に佛を見已らば、究竟じて復更に女身を受けじ。

善男子、是金光明微妙の經典は種種の利益あり、種種に菩薩の善根を增長し、諸の業障を滅す。善男子、若し〔三七〕苾芻・苾芻尼・鄔波索迦・鄔波斯迦あり、隨て何の處にあらんも、人の爲に此金光明微

〔三三〕授記は將來の成佛決定せるを豫言す。
〔三四〕如來の十號。
〔三五〕地獄餓鬼畜生に修羅を加ふ。
〔三六〕普通いふ娑婆世界 Sahā-lokadhātu。
〔三七〕四衆、比丘比丘尼（出家の男女二衆）優婆塞優婆夷（在家の男女二衆）の音譯の異のみ。

妙經を講說せば、其國土に於て皆四種の福利善根を獲ん。云何が四となす。一には國王病なく、諸の災厄を離る。二には壽命長遠にして障礙あるなし。三には諸の怨敵なく、兵衆勇健なり。四には安隱豐樂にして、正法流通す。何を以ての故に、是の如き人王は、釋・梵・四王・藥叉の衆に、共に守護せらるるが故なり。

爾時に世尊、天衆に告げて曰く、『善男子、是事實なりや不や。』是時無量の釋・梵・四王及藥叉衆倶時に聲を同うし、世尊に答へて言さく、『是の如し、是の如し。若國王ありて、此妙經王を講宣・讀誦せば、是諸の國王を、我等四王常に來りて擁護し、行住共に其王と倶にせん。若一切の災障及び諸の怨敵あらば、我等四王皆消殄せしめ、憂愁・疾疫亦除差せしめ、壽命を增益し、禎祥を感應せしめ、所願、心遂げて、恒に歡喜を生ぜん。我等亦能く其國中の所有軍兵をして、悉く皆勇健ならしめん。』佛の言はく、『善哉、善哉、善男子、汝が所說の如く、汝當に修行すべし。何を以ての故に、是の諸の國王如法に行ずる時、一切の人民王に隨ひて如法の行を修習せん。(斯の如きときは)汝等皆色・力・勝利を蒙り、宮殿・光明・眷屬強盛ならん。』時に釋梵等、佛に白して言さく、『是の如し、世尊。』佛の言はく『若此妙經典を講誦するあらば、流通の處、其國中に於て、大臣輔相四種の益あり。云何が四となす。一には更に相親睦・尊重・愛念せん。二には常に人王に愛重せられん。亦沙門・婆羅門・大國・小國に遵敬せられん。三には財を輕じ法を重じ、世利を求めず、嘉名普く暨び衆に欽仰せられん。四には壽命延長し、

安隱快樂ならん。是を四益と名く。若國土ありて、是經を宣說せば、沙門・婆羅門、四種の勝利を得ん、云何が四となす。一には衣服・飲食・臥具・醫藥乏少する所なし。二には皆安心を得て、思惟讀誦せん。三には山林に依り、安樂住を得ん。四には心の所願に隨ひて皆滿足を得ん。是を四種の勝利と名く。若し國土ありて、是經を宣說せば、一切の人民皆豐樂を得、諸の疾疫なく、商估は往還に多くの寶貨を得て、勝福を具足せん。是を種種の功德利益と名く。』

爾時、釋・梵・四天王及諸の大衆、佛に白して言さく、『世尊、是の如き經典甚深の義、若現在せば、當に知るべし、如來〔三八〕三十七種の助菩提法、世に住して未だ滅せずと。若是經典滅盡の時は、正法も亦滅せん。』佛の言はく、『是の如し、是の如し。善男子、是故に汝等此金光明經の一句・一頌・一品・一部に於て、皆當に一心に、正しく讀誦し、正しく聞持し、正しく思惟し、正しく修習し、諸の衆生のために、廣宣流布せば、長夜に安樂にして福利邊りなかるべし。』

時に諸の大衆、佛の說を聞き已りて、咸く勝益を蒙り、歡喜受持しき。

〔三八〕 前を見よ。

卷の第四

浄地陀羅尼品第六

爾時師子相無碍光焔菩薩、無量億衆と共に、座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬して、佛足を頂禮し、種種の華・香・寶幢・旛・蓋を以て供養し已り、佛に白して言さく、(一)『世尊、幾の因縁を以て菩提心を得る。何者か是菩提心なる。世尊、即菩提に於て、現在心も得べからず、未來心も得べからず、過去心も得べからず。菩提を離れて、菩提心また得べからず。菩提とは言說すべからず。心また色なく相なく、事業あるなく、造作すべきにあらず。衆生亦得べからず、亦知るべからず。世尊、云何が諸法甚深の義、知ることを得べき。』

佛言はく、『善男子、是の如し、是の如し。菩提は微妙なり。事業・造作皆得べからず。若菩提を離れて菩提心も亦得べからず。菩提は說くべからず。心また說くべからず。色相なく事業なし。一切衆生また得べからず。何を以ての故に、(二)菩提と心とは眞如に同じきが故に、能證所證皆平等なるが故に。諸法は了知すべきなきにあらず。善男子、菩薩

【一】諸法の本性平等實相の側より見て、差別修行の菩提心を問ふ。維摩、首楞嚴等の玄旨と響應す。佛教甚深の理熟思すべし。

【二】左圖の如し、

菩提—佛(果)—所證 ┐
心——衆生(因)—能證 ┘ 眞如平等

摩訶薩、是の如く知るものは、乃ち諸法に通達して、善く菩提及菩提心を說くと名くることを得。菩提心は過去にあらず、未來にあらず、現在にあらず。心もまた是の如し。衆生も亦是の如し。中に於て二相實に得べからず。何を以ての故に、一切の法は皆無生なるが故なり。菩提得べからず。菩提の名また得べからず。衆生と衆生の名も得べからず。聲聞と聲聞の名も得べからず。獨覺と獨覺の名も得べからず。菩薩と菩薩の名も得べからず。佛と佛の名も得べからず。行と非行も得べからず。行と非行の名も得べからず。不可得を以ての故に、一切寂靜法の中に於て安住を得。㈢此一切の功德善根によりて生起することを得。善男子、譬へば寶須彌山王の一切を饒益するが如く、此菩提心衆生を利するが故に是を第一布施波羅蜜の因と名く。善男子㈣譬へば大地の衆物を持するが如きが故に是を第二持戒波羅蜜の因と名く。㈤譬へば師子の大威力あり獨步して畏るるなく、驚恐を離るる如きが故に是を第三忍辱波羅蜜の因と名く。㈥譬へば風輪の那羅延力勇壯速疾なるが如く、心退せざるが故に是を第四勤策波羅蜜の因と名く。㈦譬へば七寶の樓觀に四階の道ありて、清涼の風來りて、四門より吹きて、安隱の樂を受くるが如く、靜慮の法藏、求めて滿足

【三】眞諦よりすれば一切諸法は假立なり。今其假立の俗諦の道理より、一切功德善根に由りて菩提の生起を得るを說くなり。其義下の十波羅蜜の說に就て見よ。

【四】戒は萬善の所依にして萬德を生ずるに譬ふ。

【五】罵詈毀辱等の違逆に對し心の不動にして泰然たるに譬ふ。

【六】勤策は普通、精進と譯す。風力の强烈は向上努力の熱烈を表はすに足れり。

【七】靜慮また禪定。四道は離生喜樂、定生喜樂、離喜妙樂、捨念清淨の四禪を表し。或は苦・集・滅・道の四諦を顯はし。四門は常・樂・我・淨の四德を示す。

するが故に是を第五靜慮波羅蜜の因と名く。譬へば日輪の光耀熾盛なるが如く、此心速に能く生死無明の闇を破るが故に、是を第六智慧波羅蜜の因と名く。譬へば商主のよく一切の心願をして滿足せしむるが如く、此心よく生死の險道を度り、功德の寶を獲るが故に是を第七方便波羅蜜の因と名づく。譬へば淨月圓滿にして翳なきが如く、此心よく一切の境界に於て淸淨具足するが故に、第八願波羅蜜の因と名く。譬へば轉輪聖王、(八)主兵の寶臣意に隨て自在なるが如く、此心善く莊嚴して、佛國土を淨め、無量の功德もて廣く羣生を利す、故に是を第九力波羅蜜の因と名く。譬へば虛空及轉輪聖王の如く、此心能く一切の境界に於て障礙あるなく、一切處に於て皆自在を得て(九)灌頂位に至る、故に是を第十智波羅蜜の因と名く。善男子、之を菩薩摩訶薩十種の菩提心の因と名く。是の如き十因、汝當に修學すべし。

善男子、五種の法に依りて菩薩摩訶薩布施波羅蜜を成就す。云何が五となす。一には信根。二には慈悲。三には求欲の心なし。四には一切衆生を攝受す。五には一切智智を願求す。善男子、是を菩薩摩訶薩布施波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩持戒波羅蜜を成就す。云何が五となす。一には三業淸淨。二には一切衆生の爲に煩惱の因緣を作さず。三には諸の惡道を閉ぢて善趣の門を開く。四には聲聞・獨覺の地を過ぐ。五には一切の功德皆悉く滿足す。善男

【八】轉輪聖王が七種の寶の一にして、善謀勇猛の將軍をいふ。力波羅蜜の譬として甚適當なり。

【九】佛位を繼ぐべき至高位の菩薩階級、卽所謂一生補處の位。

子、是を菩薩摩訶薩、持戒波羅蜜を成就すと名く。善男子、復た五法に依りて、菩薩摩訶薩、忍辱波羅蜜を成就す。云何が五となす。一には能く貪瞋煩惱を伏す。二には身命を惜まず、安樂思息の想を求めず。三には往業を思惟し、苦に遭うて能く忍ぶ。四には慈悲心を發し、衆生の諸善根を成就するが故に。五には甚深無生法忍を得と爲す。善男子、是を菩薩摩訶薩、忍辱波羅蜜を成就すと爲す。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩勤策波羅蜜を成就す。云何が五となす。一には諸の煩惱と共に住するを樂はず。二には福德未だ具せざれば安樂を受けず。三には諸の難行苦行の事に於て厭心を生ぜず。四には大慈悲を以て一切衆生を攝受し、利益し、方便成熟す。五には不退轉地を願求す。是を菩薩摩訶薩勤策波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩靜慮波羅蜜を成就す。云何が五となす。一には諸善法に於て攝して散せざらしむるが故に。二には常に解脱を願ひ(一〇)二邊に著せざるが故に。三には神通を得て衆生の諸の善根を成就することを願ふが故に。四には淨法界のために(一一)心垢を蠲除するが故に。五には衆生煩惱の根本を斷ずる爲の故に。是を菩薩摩訶薩靜慮波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩智慧波羅蜜を成就す。云何が五となす。一には一切諸佛菩薩及明智の者に於て供養親近して厭背を生ぜず。二には諸佛如來甚深の法を說くに、心常に樂み聞きて、

【一〇】有と無とに關する考察卽常見と斷見との二極端に偏執せず。

【一一】心垢は貪・瞋・癡の三毒にて三垢とも稱す。

【一二】煩惱に見惑と修惑の別あり、見惑は四諦の理卽眞俗一切の理に惑ふ惑にて、身見・邊見・邪見・見取見・戒禁取見の五利使及び貪・瞋・癡・慢・疑の

厭足あるなし。三には眞俗の勝智、樂うて善く分別す。四には(二二)見修の煩惱咸く速に斷除す。五には世間の技術・(二三)五明の法皆悉く通達す。善男子、是を菩薩摩訶薩智慧波羅蜜を成就すと名く。善男子、また五法に依りて菩薩摩訶薩方便波羅蜜を成就す。云何が五となす。一には一切衆生の意樂・煩惱・心行の差別に於て悉く皆通達す。二には無量の諸法對治の門、心に皆曉了す。三には大慈悲定、出入自在なり。四には諸の波羅蜜多に於て、皆修行し、成熟し滿足せんことを願ふ。五には一切の佛法皆了達・攝受して遺なからんことを願ふ。善男子、是を菩薩摩訶薩、方便勝智波羅蜜を成就すと名く。善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩願波羅蜜を成ず。云何が五となす。一には一切法、本より已來・不生不滅にして有にあらず無にあらずとして、心に安住を得。二には一切法最妙の理趣は垢を離れて清淨なりと觀じて、心に安住を得。三には一切の相を過ぐる心の本なる眞如は、作なく行なく、異ならず動かずと、心に安住を得。四には諸の衆生を利益することを欲するが爲の故に俗諦の中に於て心に安住を得。五には(二四)奢摩他と毗婆舍那と同時に運行することに於て、心に安住を得。善男子、是を菩薩摩訶薩願波羅蜜を成就すと名く。善男子、また五法に依りて菩薩摩訶薩力波羅蜜を成就す。云何が五とな

五鈍使ありて、三界の四諦に不明なる故に、八十四使の惑となる。修惑(或は思惑)は五根五塵の事に對して惑ふ惑にて其體は貪・瞋・癡・慢の四なるも、三界合して八十一品の惑なり。

【二三】 五明は印度學術の總稱にて、聲明(文法修辭等)工巧明(美術工藝)醫方明(醫學)因明(論理)内明(宗教學特に佛教)是也。

【二四】 Śamatha シャマタ 止——精神の靜寂止住の狀。Vipaśyanā ヴィパーシャナー 觀——正見正觀の用。

【二五】 上中下、利中鈍の三根。

す。一には正智の力を以て、能く一切衆生心行の善惡を了す。二には能く一切衆生をして甚深微妙の法に入らしむ。三には一切衆生の輪廻生死、其縁業に從ひて、實の如く了知す。四には諸の衆生（二五）三種の根性に於て、正智の力を以て能く分別して知る。五には諸の衆生に於て理の如く爲に說き、善根を植ゑて成熟度脫せしむ。皆是智力の故なり。善男子、是を菩薩摩訶薩力波羅蜜を成就すと名く。

善男子、復五法に依りて菩薩摩訶薩、智波羅蜜を成就す。云何が五となす。一には能く諸法に於て善惡を分別す。二には（二六）黑白の法に於て遠離し攝受す。三には能く生死涅槃に於て厭はず喜ばず。四には福・智の行を具して究竟處に至る。五には（二七）勝灌頂を受け、能く諸佛の不共法等と一切智智とを得。是を菩薩摩訶薩智波羅蜜を成就すと名く。

善男子、何者か是波羅蜜の義なる。所謂勝利を修習する是波羅蜜の義。無量の大甚深の智を滿足する是波羅蜜の義。行と非行との法に心執著せざる是波羅蜜の義。生死の過失と涅槃の功德と正く覺り正く觀ずる、是波羅蜜の義。愚人も智人も皆悉く攝受する、是波羅蜜の義。能く種種珍妙の法寶を現ずる、是波羅蜜の義。無礙の解脫の智慧滿足する、是波羅蜜の義。法界・衆生界を正しく分別して知る、是波羅蜜の義。（二八）施等と及び智と能く不退轉に至らしむる、是波

【二六】黑白は善惡二法なり、惡法を遠離し善法を攝受す。

【二七】佛陀たるべき勝位、定まること。元來灌頂は頂上に聖水を注ぎて王位に登る際の印度の重大の式なり、之を轉用して、佛陀たるべき位定まれるを灌頂位と呼ぶ。

【二八】是れ十波羅蜜なり、前を見よ。

【二九】苦・集・滅・道の四諦の法を、三たび復演す。之を三轉十二法輪といふ。

羅蜜の義。無生法忍能く滿足せしむる、是波羅蜜の義。一切衆生の功德・善根よく成熟せしむる、是波羅蜜の義。能く菩提に於て、佛の十力・四無所畏・不共法等を成じ、皆悉く成就する、是波羅蜜の義。生死と涅槃と二相なきを了ずる、是波羅蜜の義。一切衆生を濟度する、是波羅蜜の義。一切の外道來りて相詰難せんも、善く解釋して其をして降伏せしむる、是波羅蜜の義。能く（一九）十二妙行の法輪を轉ずる、是波羅蜜の義。著する所なく、見る所なく、患累なき、是波羅蜜の義なり。

（二〇）善男子、初地の菩薩は是相先づ現ず。三千大千世界、無量無邊の種種の寶藏、盈滿せざるなきを菩薩悉く見る。善男子、二地の菩薩・是相先づ現ず。三千大千世界、平にして掌の如く、無量無邊種種の妙色・淸淨の珍寶・莊嚴の具、菩薩悉く見る。善男子、三地の菩薩是相先づ現ず。自身勇健にして、甲仗もて莊嚴し、一切の怨賊皆能く摧伏するを菩薩悉く見る。善男子、四地の菩薩是相先づ現ず。四方の風輪、種種の妙華、悉く皆散じ灑ぎて地上に充布するを菩薩悉く見る。善男子、五地の菩薩に、是相先づ現ず。妙寶女あり、衆寶の瓔珞もて、周徧して身を嚴り、首に名華を冠とし、以て其飾とするを、菩薩悉く見る。善男子、六地の菩薩に、是相先づ現ず。七寶の華池に（二一）四階の道あり、金砂徧く布きて、淸淨にして穢なし、八功德水、皆悉く盈滿し、（二二）嗢鉢羅華・拘物頭華・芬陀利華

【二〇】已下勝行ゐ修して十地を證する瑞兆を說く。

【二一】八功德は澄淨・淸冷・甘美・輕軟、潤澤、安和、除飢渴、養諸根四大の八種の德、四階道は加行、無間、解脫、勝進を表す。

【二二】次の如く青蓮華（Utpala）赤蓮華（Kumuda）白蓮華（Puṇḍarīka）

【二三】世界統一の理想的帝王、Cakravarti といふ。白蓋は印度帝王に局り用ふるもの、支那の黃羅傘の如し。

隨所に莊嚴し・華池の所に於て遊戲快樂するに清涼比なきを菩薩悉く見る。善男子、七地の菩薩に此相先づ現ず。菩薩の前に於て諸の衆生あり、地獄に墮すべきを、菩薩の力を以て便ち墮せざるを得て、損傷あるなく、亦恐怖なきを菩薩悉く見る。善男子、八地の菩薩に是相先づ現ず。身の兩邊に於て師子王ありて衞護をなし、一切の衆獸、悉く皆怖畏するを菩薩悉く見る。善男子、九地の菩薩に是相先づ現ず。(二三)轉輪聖王、無量億衆に圍繞し、供養せられ、頂上の白蓋は無量衆寶の莊嚴する所なるを菩薩悉く見る。善男子、十地の菩薩に是相先づ現ず。如來の身、金色晃耀して、無量の淨光悉く皆圓滿し、無量億の梵王に圍繞し、恭敬し、供養せられ、無上微妙の法輪を轉ずるを菩薩悉く見る。

善男子、云何が(二四)初地を名けて歡喜となす。謂く初めて出世の心を證得し、昔し未だ得ざる所、今始めて得、大事用に於て其願ふ所を知り、悉く皆成就して極喜樂を生ず。是故に最初を名けて歡喜となす。諸の微細の垢と犯戒の過失と皆清淨を得。是故に(二五)二地を名けて無垢となす。無量の智慧三昧の光明傾動すべからず、能く摧伏するものなく、聞持陀羅尼を以て根本とす。是故に三地を名けて(二六)明地とす。智慧の火を以て、諸の煩惱を燒き、光明を增長し・覺品を修行す。是故に四地を名けて(二七)燄地とす。方便を修行し勝智自在極めて得難きが故に見修の煩惱伏し難きを能く

【二四】初地。Pramuditā 已下十地の説明に就きては、華嚴經中、十地品に廣説あり、參照すべし。

【二五】二地。Vimalā. 或は離垢地。

【二六】三地。明地 Prabhākarī (或は發光地)

【二七】四地。燄 Arciṣmatī. (或は燄慧地)

伏す。是故に五地を名けて(二八)難勝とす。行法相續して、了了として顯現し、無相に思惟し、皆悉く現前す。是故に六地を名けて(二九)現前とす。無漏を無間無相に思惟し、解脫三昧遠く修行する故に、是の地淸淨にして障礙あるなし。是故に七地を名けて(三〇)遠行とす。無相に思惟し、修得自在にして、諸の煩惱の行、動かしむる能はず。是故に八地を名けて(三一)不動とす。一切の法種種の差別を說くに、皆自在を得、患なく累なく、智慧を增長し、自在無礙なり。是故に(三二)九地を善慧とす。法身は虛空の如く、智慧は大雲の如く、皆能く遍滿して一切を覆ふが故に、是故に(三三)第十を名けて法雲とす。

善男子、有相の我法に執著する無明、生死惡趣を怖畏する無明、この二の無明は初地を障ふ。微細の學處誤りて犯す無明、種種の業行を發起する無明、此二の無明は二地を障ふ。未だ得ざるを得たりと愛著する無明、能く殊勝の總持を障ふる無明、この二の無明は三地を障ふ。(三四)味著等の至喜悅の無明、微妙の淨法愛樂の無明、此二の無明は四地を障ふ。(三五)生死に背かんと欲する無明、涅槃を希趣する無明、此二の無明は五地を障ふ。(三六)觀行流轉の無明、麤相現前の無明、此二の無明は五地を障ふ。微細の諸相現行する無明、作意して無相を欣樂する無明、

【二八】五地。Sudurjayā.（スヅルジヤヤー）
【二九】六地。Abhimuktī.（アビムツクティー）
【三〇】七地。Dūraṅgamā.（ヅーランガマー）
【三一】八地。Acalā.（アチャラー）
【三二】九地、Sādhumatī.（サーヅマティー）
【三三】十地。Dharmameghā.（ダルマメーガー）
【三四】味著は下劣禪定の樂味を執するもの、菩提分法に著するは第二の法愛の無明なり。
【三五】生死涅槃眞體別なきを知らず一偏に執して厭欣を生ずるもの是又無明なり。
【三六】觀行流轉は苦集二諦の上に起る無明、麤相現前は滅道二諦の上に起る無明。

此二の無明は八地を障ふ。無相觀に於て功用する無明、相を執る自在の無明、此二の無明は七地を障ふ。所說の義と及び名・句・文と此二の無量に於て、未だ善巧を得ざる無明、詞と辯才とに於て隨意ならざる無明、この二の無明は九地を障ふ。大神通に於て、未だ自在に變現するを得ざる無明、微細の祕密あり、未だ事業を悟る能はざる無明、此二の無明は十地を障ふ。一切の境に於て微細の（三七）所知障疑の無明、極細の煩惱麤重なる無明、此二の無明は佛地を障ふ。

善男子、菩薩摩訶薩初地の中に於て施波羅蜜を行ず。第二地に於て戒波羅蜜を行ず。第三地に於て忍波羅蜜を行ず。第四地に於て勤波羅蜜を行ず。第五地に於て定波羅蜜を行ず。第六地に於て慧波羅蜜を行ず。第七地に於て方便勝智波羅蜜を行ず。第八地に於て願波羅蜜を行ず。第九地に於て力波羅蜜を行ず。第十地に於て智波羅蜜を行ず。

（三八）善男子、菩薩摩訶薩最初發心の攝受は能妙寶三摩地を生ず。第二發心の攝受は能く可愛樂三摩地を生ず。第三發心の攝受はよく難動三摩地を生ず。第四發心の攝受はよく不退轉三摩地を生ず。第五發心の攝受はよく寶華三摩地を生ず。第六發心の攝受はよく日圓光燄三摩地を生ず。第七發心の攝受はよく一切願如意成就三摩地を生ず。第八發心の攝受はよく現前證住三摩地を生ず。第九發心の攝受は智藏三昧を生ず。第十發心の攝受は能く勇進三摩地を生ず。善男子是を菩薩摩訶薩十種の發心と名く。

【三七】是れ二障にして一は極めて微細の所知障と他は煩惱障の種子なり、是れ特に最後に殘存して異彩なる故に麤重と名く。

【三八】十地に於ける修行禪定を明す。

善男子、菩薩摩訶薩此初地に於て陀羅尼を得。依功德力と名く。」爾時世尊、即ち呪を說いて曰く、

〔三九〕「怛姪他。哺嘽尼。曼奴喇剃。獨虎・獨虎・獨虎。郎跋蘇利瑜。阿婆婆薩底。耶跋旃達羅。調恒底。多跋達洛叉漫。憚茶鉢利訶嚂。矩嚕。莎訶」

善男子、此陀羅尼は是一恒河沙數を過ぐる諸佛の說く所。初地の菩薩を護らんがための故なり。若此陀羅尼呪を誦持するあらば、一切の怖畏、所謂虎・狼・獅子・惡獸の類、一切の惡鬼、人・非人等、怨賊・災橫及 諸 の苦惱を脫するを得て〔四〇〕五障を解脫し、初地を念ずることを忘れじ。

善男子、第二地に於て陀羅尼を得、善安樂住と名く。

〔四一〕「怛姪他。嗢篅里。質里・質里。嗢篅里。篅羅哺。繕覩・繕覩・嗢篅里。虎嚕。莎訶。」

善男子、此陀羅尼は是二恒河沙數を過ぐる諸佛の說く所、二地の菩薩を護らんが爲の故なり。若此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏・惡獸・惡鬼・人・非人等の怨賊・災橫及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫し、二地を念ずることを忘れじ。

善男子、菩薩摩訶薩第三地に於て陀羅尼を得。難勝力と名く。

〔四二〕「怛姪宅。憚宅枳。般宅枳。羯喇檄。高喇檄。鷄由哩。憚檄里。莎訶。」

【三九】Tadyathā pūrṇi mantra'e tuhu tuhu tuhu ś bhasūrya avabhāsati yava-candra caku-ti tavata rakṣa maṃ caṇḍa pariharaṃ kuru svāhā.

【四〇】欺、怠、瞋、恨、怨にして序の如く信、進、念、定、慧の五根を障礙する煩惱なり。

【四一】Tadyathā untali śiri śiri untali tannaṃ jantu jantu untali huru svāhā

此二の無明は七地を障ふ。無相觀に於て功用する無明、相を執る自在の無明、此二の無明は八地を障ふ。所說の義と及び名・句・文と此二の無量に於て、未だ善巧を得ざる無明、詞と辯才とに於て隨意ならざる無明、この二の無明は九地を障ふ。大神通に於て、未だ自在に變現するを得ざる無明、微細の祕密あり、未だ事業を悟る能はざる無明、此二の無明は十地を障ふ。一切の境に於て微細の(三七)所知障礙の無明、極細の煩惱麤重なる無明、此二の無明は佛地を障ふ。

善男子、菩薩摩訶薩初地の中に於て施波羅蜜を行ず。第二地に於て我波羅蜜を行ず。第三地に於て忍波羅蜜を行ず。第四地に於て勤波羅蜜を行ず。第五地に於て定波羅蜜を行ず。第六地に於て慧波羅蜜を行ず。第七地に於て方便勝智波羅蜜を行ず。第八地に於て願波羅蜜を行ず。第九地に於て力波羅蜜を行ず。第十地に於て智波羅蜜を行ず。

(三八)善男子、菩薩摩訶薩最初發心の攝受は能妙寶三摩地を生ず。第二發心の攝受は能く可愛樂三摩地を生ず。第三發心の攝受はよく難動三摩地を生ず。第四發心の攝受はよく不退轉三摩地を生ず。第五發心の攝受はよく寶華三摩地を生ず。第六發心の攝受はよく日圓光燄三摩地を生ず。第七發心の攝受はよく一切願如意成就三摩地を生ず。第八發心の攝受はよく現前證住三摩地を生ず。第九發心の攝受は智藏三昧を生ず。第十發心の攝受は能く勇進三摩地を生ず。善男子是を菩薩摩訶薩十種の發心と名く。

【三七】是れ二障にして一は極めて微細の所知障と他は煩惱障の種子なり、是れ特に最後に殘存して異彩なる故に麤重と名く。

【三八】十地に於ける修行禪定を明す。

善男子、菩薩摩訶薩此初地に於て陀羅尼を得。依功德力と名く。』爾時世尊、卽ち呪を說いて曰く、

(三九)「怛姪他。哺啤尼。曼奴喇剃。獨虎・獨虎・獨虎。卽跋蘇利瑜。阿婆婆薩底。耶跋旃達羅。調恒底。多跋達洛叉漫。憚茶鉢利訶嚂。矩嚕。莎訶」

善男子、此陀羅尼は是一恒河沙數を過ぐる諸佛の說く所。初地の菩薩を護らんがための故なり。若此陀羅尼呪を誦持するあらば、一切の怖畏、所謂虎・狼・獅子・惡獸の類、一切の惡鬼、人・非人等、怨賊・災橫及 諸 の苦惱を脫するを得て (四〇)五障を解脫し、初地を念ずることを忘れじ。

善男子、第二地に於て陀羅尼を得、善安樂住と名く。

(四一)「怛姪他。嗢篅里。質里・質里。嗢篅里。篅羅哺。繕覩・繕覩・嗢篅里。虎嚕。莎訶。」

善男子、此陀羅尼は是二恒河沙數を過ぐる諸佛の說く所、二地の菩薩を護らんが爲の故なり。若此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏・惡獸・惡鬼・人・非人等の怨賊・災橫及び 諸 の苦惱を脫し、五障を解脫し、二地を念ずることを忘れじ。

善男子、菩薩摩訶薩第三地に於て陀羅尼を得。難勝力と名く。

(四二)「怛姪宅。憚宅枳。般宅枳。羯喇檄。高喇檄。鷄由哩。憚檄里。莎訶。」

【三九】 Tadyathā pūrṇi mantra'e tuhu tuhu tuhu ś bhasūrya avabhāsati yava-cantra cuku-ti tavata rakṣa mam caṇḍa pariharam kuru svāhā.

【四〇】 欺・怠・瞋・恨・怨にして序の如く信、進、念、定、慧の五根を障礙する煩惱なり。

【四一】 Tadyathā untali śiri śiri untali tannam jantu jantu untali huru svāhā

善男子、此陀羅尼是三恒河沙數を過ぐる諸佛の說く所なり。三地の菩薩を護らんが爲の故なり。若此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏・惡獸・惡鬼・人・非人等の怨賊・災橫、及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫し、三地を念ずるを忘れじ。

善男子、菩薩摩訶薩第四地に於て陀羅尼を得、大利益と名く。

（四三）「怛姪他。室利・室利・陀弭儞。陀弭儞。陀哩陀哩儞。室利。室利儞。毗舍羅。波始波始娜・畔陀弭帝。莎訶。」

善男子、此陀羅尼は、是四恒河沙數を過ぐる諸佛の說く所なり。四地の菩薩を護らんが爲の故なり。若此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏・惡獸・惡鬼・人・非人等の怨賊・災橫及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫し、四地を念ずるを忘れじ。

善男子、菩薩摩訶薩、第五地に於て陀羅尼を得、種種功德莊嚴と名く。

（四四）「怛姪他。訶哩・訶哩儞。遮哩・遮哩儞。羯喇摩儞。僧羯喇摩儞。三婆山儞。瞻跋儞。悉耶婆儞。謨漢儞。碎闍步陛。莎訶。」

善男子、此陀羅尼は是五恒河沙數を過ぐる諸佛の說く所なり。五地の菩薩摩訶薩を護らんが爲の故なり。若し人此陀羅尼呪を誦するあらば、諸の怖畏・惡獸・惡鬼・人・非人等の怨賊災橫及び諸の苦惱

【四二】 Tadyathā tantaki pantaki karati karati keyari tantili svāhā.

【四三】 Tadyathā śiri śiri damini damini dari-darini siri-śirini vicara paś-paśina pandamite svāhā.

【四四】 Tadyathā hari harini cari carini karamaṇi saṃkramaṇi sambhaṇi cambhaṇi stavani mohani śijabhe svāhā.

を脱し、五障を解脱し、五地を念ずることを忘れじ。

善男子、菩薩摩訶薩第六地に於て陀羅尼を得。圓滿智と名く。

(四五)「怛姪他。毗徒嚟・毗徒嚟。摩嚟儞。迦里・迦里。毗度漢底。嚕・嚕・嚕・嚕。主嚕・主嚕。杜嚕婆。捨・捨設者。婆里灑。莎悉底。薩婆薩埵喃。悉甸覩。曼覩囉鉢陀儞。莎訶。」

善男子、此陀羅尼は是六恒河沙數を過ぐる諸佛の說く所なり。若此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏・惡獸・惡鬼・人・非人等の怨賊・災横、及び諸の苦惱を脫し五障を解脫し六地を念ずるを忘れじ。

善男子菩薩摩訶薩第七地に於て陀羅尼を得。法勝行と名く。

(四六)「怛姪他。句訶。句訶。句訶嚕。句訶。句訶嚕。鞞陸枳。鞞陸枳。阿密栗多唬漢儞。勃里山儞。鞞嚕勅枳。婆嚕伐底。鞞提哩枳。頻陀鞞哩儞。阿密哩底枳。薄虎主愈。薄虎主愈。莎訶。」

善男子、此陀羅尼は、是七恒河沙數を過ぐる、諸佛の說く所なり。七地の菩薩を護らんが爲の故なり。若此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏・惡獸・惡鬼・人・非人等の怨賊・災横及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫し、七地を念ずることを忘れじ。

善男子、菩薩摩訶薩第八地に於て陀羅尼を得。無盡藏と名く。

【四五】 Tadyathā vitori vitori mariṇi mariṇi kiri kiri vitohanti ru uraru curu curu durva durava śaśa śaśha varśā sv asti sarva-sattvānāṃ siddhyantu maya mantra padāni svāhā.

【四六】 Tadyathā jaha jaha u jaha jahara vid[illegible]ke viduke amṛta khrṇi vrṣaṇi vairāṇi v. iruciko varavatti vidh b'ke bhandin var'ṇi amṛitike bahujaja bahujayu svāhā

(四七)「怛姪他。室唎・室唎。室唎儞。密底・羯哩羯哩。醯嚕・醯嚕。主嚕・主嚕。畔陀。莎訶。」

善男子、此陀羅尼は是八恒河沙數を過ぐる諸佛の說く所なり。八地の菩薩を護らんが爲の故なり。若此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏・惡獸・惡鬼・人・非人等の怨賊・災橫、及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫し、八地を念ずるを忘れじ。

善男子、菩薩摩訶薩第九地に於て陀羅尼を得。無量門と名づく。

(四八)「怛姪他。訶哩・旃茶哩枳。俱藍婆喇體。覩刺死。拔吒咙吒死。室唎室唎。迦室哩。迦必室唎。莎悉底。薩婆薩埵南。莎訶。」

善男子、此陀羅尼は是九恒河沙數を過ぐる諸佛の說く所なり。九地の菩薩を護らんがための故なり。若此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏・惡獸・惡鬼・人・非人等の怨賊災橫、及び諸の苦惱を脫し、五障を解脫し、九地を念ずるを忘れじ。

善男子菩薩摩訶薩第十地に於て陀羅尼を得。破金剛山と名く。

(四九)「怛姪他。悉提。蘇悉提。謨折儞。木窣儞。毗木底。菴末麗。毗末麗。涅末麗。忙揭麗。咽喇若揭鞞。曷喇怛娜揭鞞。三曼多跛姪囇。薩婆頞他娑單儞。摩捺斯。頞步底。頞室步底。阿喇誓。毗喇誓。頞主底。菴蜜栗底。阿喇誓。毗喇

【四七】 Tadyathā śiri śiri śiriṇi mite mite kari kari hera heru hera curu curu vandni svāhā.

【四八】 Tadyathā huri caṇḍalike kulamābhate torisi bata batasi śiri śiri kaśiri kapiśiri svasti sarva-sattvānān svāhā.

【四九】 Tadyathā sidhe susidhe mocani mokṣaṇi vimukti amale vimale nirmale mogale hiraṇyagarbhe ratnagarbhe samantabhadre sarvānte sthāni manasi anbuti antibuti acare virase arṇti amṛtaarare virase lralmalralmhane pūrṇi purṇā mantrate svāhā

誓。吱嚂迷。跛羅甜麼。莎囉。哺喇儞。哺喇娜。曼奴喇剃。莎訶。」

善男子、此陀羅尼灌頂吉祥句は、是十恒河沙數を過ぐる諸佛の說く所、十地の菩薩を護らんが爲なり。若此陀羅尼呪を誦持するあらば、諸の怖畏・惡獸・惡鬼・人・非人等の怨賊、災橫、一切の毒害を脫し、皆悉く除滅し、五障を解脫し、十地を念ずることを忘れじ。』

爾時に師子無礙光燄菩薩、佛の此不可思議の陀羅尼を說き給ふを聞き已りて、卽座より起ちて、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬して、佛足を頂禮し、頌を以て佛を讃じたてまつる。

(五〇)『譬喩なき甚深の、無相の法を敬禮す。衆生正知を失するを、唯佛能く濟度す。

(五一)如來の明慧眼は、一法の相を見ず。復正法眼を以て、普く照らすこと不思議なり。

一法を生ぜず、又一法を滅せず。此平等の見に由り、無上處に至ることを得。

(五二)生死を壞せず、また涅槃に住せず。二邊に著せず、是故に圓寂を證す。

淨不淨品に於て、世尊一味を知る。分別せざるに由るが故に、最淸淨を獲得す。

(五三)世尊の無邊身、一字を說かざるも、諸の弟子衆をして、法雨皆充滿

【五〇】已下五言の頌、如來の德相を讃じ、佛敎甚深の理を歎美する至れり盡せり、深く味ふべし。

【五一】無差別平等の慧眼、黠塵の微細をも、照らして洩すなし、明鏡執相なし、而も萬象歷歷たり。

【五二】迷悟に著せざる所、大圓寂あり、染淨に執せざる時、最淸淨を見る。

せしむ。

（五四）佛衆生の相を觀ずるに、一切種皆無し。然も苦惱者に於て、常に救護を興す。

苦・樂・常・無常、有我・無我等、一ならず又異ならず。生ぜず又滅せず。是の如き衆多の義、說くに隨ひて差別あり。譬へば空谷の響の如し、唯佛能く了知す。

法界分別なし、是故に異乘なし。（五五）衆生を度せんが爲に、分別して三ありと說く。』

爾時に大自在梵天王亦座より起ちて、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬して、佛足を頂禮し、佛に白して言さく、

『世尊、この金光明最勝王經は、希有にして量り難し。初・中・後善く、文義究竟し、皆能く一切の佛法を成就す。若受持せば、是人卽佛恩を報ずとす。』

佛の言はく、『善男子、是の如し。是の如し。汝が所說の如し。善男子、若此經を聽聞するを得ば皆阿耨多羅三藐三菩提を退せじ。何を以ての故に。善男子、是能く不退地の菩薩の殊勝の善根を成熟す。是第一法印、是衆經の王なるが故に、應に聽聞・受持・讀誦すべし。何を以ての故に。善男子、若

【五三】一字不說・法雨洒ぎて道芽增長す、皇天言はずして、萬物育す。

【五四】是佛陀無緣の大慈悲ある所以、大乘經說く所の三十二の大慈悲亦此至理を其根本とす。

【五五】聲聞・緣覺・菩薩の三乘は衆生の機根に隨ひて設けたるに過ぎずして其實は唯一乘あるのみ。法華經に「唯有二一乘法一、無レ二亦無レ三」と說けるも同意なり。

し一切の衆生、未だ善根を種ゑず、未だ善根を成熟せず、未だ諸佛に親近せざるものは、是微妙の法を聽聞すること能はず。若し善男子・善女人、能く聽受するものは、一切の罪障、皆悉く消滅し、最清淨を得て、常に佛を見、諸佛及善知識、勝行の人を離れず、恒に妙法を聞き不退地に住し、是の如き(五六)勝陀羅尼門を獲得し、盡くるなく滅ずるなし。所謂(五七)海印出妙功德陀羅尼、盡くるなく滅ずるなし。通達衆生意行言語陀羅尼、盡くるなく滅ずるなし。日圓無垢相光陀羅尼盡くるなし滅ずるなし。滿月相光陀羅尼盡くるなく滅ずるなし。能伏諸惑演功德陀羅尼、盡くるなく滅ずるなし。金剛山陀羅尼盡くるなく滅ずるなし。說不可說因緣藏陀羅尼盡くるなく滅ずるなし。通達實語法則音聲陀羅尼盡くるなく滅ずるなし。虛空無垢心行印陀羅尼盡くるなく滅ずるなし。無邊佛身皆能顯現陀羅尼盡くるなく滅ずるなし。善男子、是の如き等の無盡無滅の諸陀羅尼門の成就を得るが故に、是菩薩摩訶薩、十方一切の佛土に於て、佛身を化作し、無上種種の正法を演說し、法眞如に於て動せず、住せず、來らず、去らず。(五八)善く一切衆生の善根を成熟して、亦一衆生の成熟すべきものを見ず。種種の諸法を說くと雖、言詞の中に於て、動せず、住せず、去らず、來らず。能く生滅に於て、無生滅を證す。何の因緣を以て、諸の行法去來あるなしと說くや。一切の法

【五六】一法を以て一切の佛陀を攝すべき勝妙の法門。陀羅尼は總持と譯す。

【五七】已下の十陀羅尼は次の如く十地菩薩の獲得すべき妙法なり。

【五八】一切の衆生を濟度するも善惡邪正の差別見あるなし、諸の妙法を演說するも、淺深大小の思あるなし、蓋し一味平等の眞理なるが故なり。碧空の月輪湛然常寂にして影萬水に映ずるに似たり。

體異なるなきに由るが故なり。』

是法を説くとき、三萬億の菩薩摩訶薩、無生法忍を得、無量の諸菩薩は菩提心を退せず、無量無邊の苾芻・苾芻尼、法眼淨を得・無量の衆生、菩提心を發す。

爾時に世尊、頌を説きて曰く、

(五九)『勝法は能く生死の流に逆ふ。甚深微妙にして見るを得べきこと難し。
有情は盲冥にして貪欲覆ひ、(勝法を)見ざるが故に衆苦を受く。』

爾時に大衆倶に座より起ちて、佛の足を頂禮し、而して佛に白して言さく、『世尊、若し所在の處に、此の金光明最勝王經を講宣し、讀誦せば、我等大衆、皆悉く彼に往きて、爲に聽衆とならん。是の説法師に利益を得て、安樂障りなく、身意泰然たらしめ、我等當に心を盡くして供養すべし。亦聽衆をして、安隱快樂に、所住の國土に、諸の怨賊・恐怖・厄難・飢饉の苦なく、人民熾盛ならしめん。此の法を説く所、道場の地、一切の諸天・人・非人等、一切の衆生、履踐及び汙穢すべからず。何を以ての故に、説法の所、即是(六〇)制底なり。當に香・華・繒綵・旛蓋を以て供養をなすべし。我等常に守護を爲し、衰損を離れしめん。』

佛大衆に告げ給はく、『善男子、汝等應に精勤して、此の妙經典を修習すべし。是(の如くなれば)則正法久しく世に住せん。』

【五九】七言の偈一頌。
【六〇】梵語 Caitya. 佛寺塔廟。

巻の第五

蓮華喩讃品第七

爾時に佛、菩提樹神善女天に告げたまはく、『汝今應に知るべし、妙幢夜夢に妙金鼓の大音聲を出して、佛の功德幷に懺悔の法を讃ずるを見る。此の因緣我汝等のために廣く其事を說かん。應に諦聽して善く之を思念すべし。

過去に王ありき。(一)金龍王と名づく。常に蓮華喩の讃を以て、十方三世の諸佛を稱歎す。即大衆のために其讃を說き給ふ。曰く、

(二)「過去未來現在の佛、十方世界の中に安住し給ふ。我今至誠に稽首して禮し、一心に諸の最勝を讃歎す。

無上淸淨の牟尼尊、身光照耀して金色の如し。一切の聲中最も上となす。大梵響は震雷の音の如し。

髮彩喩へば黑蜂王の若し、宛轉の旋文・紺靑色なり。齒は白くして齊密なること珂雪の如し、平正に顯現して光明あり。

【一】Suvarṇabhujendra.

【二】已下七言の頌三十五偈あり。主として如來の三十二相を讃美す。

目は淨く無垢にして妙に端嚴なり、猶廣大の靑蓮葉の如し。舌相廣長にして極めて柔軟なり、譬へば紅蓮の水中より出たるが如し。

眉間常に白毫の光あり、右に旋りて宛轉し玻璃の色あり。眉は細く纖長にして初月に類す、其の色光耀蜂王に比ぶべし。

鼻は高く脩直にして金鋌の如し。淨妙の光潤ひて相虧くることなし。一切世間の殊妙の香、聞くとき悉く其所在を知る。

世尊の最勝身は金色なり。一一の毛端相異ならず。紺青柔軟にして右旋の文あり。微妙の光彩喩をなすこと難し。

初誕の身すら妙光明あり、普く一切十方界を照らし、能く三有の衆生の苦を滅し、彼(等)をして悉く安隱の樂を蒙らしむ。

地獄・傍生・鬼道の中、阿蘇羅天及人趣、彼(等)をして衆苦を除滅せしめ、常に自然安隱の樂を受けしむ。

身色光明常に普く照らし、譬へば鎔金の妙にして比なきが如し。面貌は圓明にして滿月の如く、脣の赤好は〔三〕頻婆に喩ふべし。

行步・威儀・師子に類し、身光明耀にして初日に同じ。臂肘纖長にして立てば膝を過ぐ。狀は下

【三】Bimbha (Momordica monadelpha)。其果熟せるとき美はしき紅色をなすを以て名あり。

に垂るること、㊃娑羅の枝に等し。

圓光一尋照らすこと邊りなく、赫奕として猶百千の日の如く、悉く能く徧く諸佛刹に至り、緣の在る所に隨ひて群迷を覺す。

淨光明の網は倫比なし、輝を流して百千界に徧滿す。普く十方を照して障礙なし、一切の冥暗悉く皆除く。

善逝の慈光は能く樂を與へ、妙色映徹して金山に等し。光を流して悉く百千の土に至り、衆生遇ふものは皆出離す。

佛身は無量の福を成就し、一切の功德共に莊嚴し、三界を超過して獨り尊と稱し、世間の殊勝にして與に等しきものなし。

所有過去一切の佛數は、大地の諸の微塵に等し。未來・現在十方の尊、亦大地微塵の如き衆なり。

我至誠の身語意を以て、稽首して三世佛に歸依し奉り、無邊の功德海を讚嘆して、種種の香華皆供養す。

設ひ我口中に千舌あり・無量劫を經て如來を讚せんも、世尊の功德は思議すべからず。最勝甚深にして說くべきこと難し。

假令我が舌百千ありて、一佛の一功德を讚嘆せんも、中に於て少分すら尚知り難し。況んや諸佛

【四】Sāla(Vatica robusta)。極めて脊直なる樹。

の德邊際なきをや。

假令大地及諸天、乃至有頂を海水となさんに、毛端の滴の數は知るべきも、佛の一功德甚だ量り難し。

我至誠の身語意を以て、諸佛の德の無邊なるを禮讃し奉る。所有勝福の果・難思なるを、衆生に廻施して、速に成佛せしめん。

㊄彼王如來を讃嘆し已り、倍また深心に弘願を發す。

願くは我當に未來世に於て、生れて無量無數劫にあつて、夢中常に大金鼓を見、懺悔を顯說する音を聞くことを得て、佛の功德を讃ずるに蓮華もて喩へん。

願くは無生を證し正覺を成ぜん。諸佛の出世は時に一たび現ず、百千劫に於て甚だ逢ひ難し。

夜は夢に常に妙鼓の音を聞きて、晝は則ち應に隨ひて懺悔せん。

我當に圓滿して六度を修し、衆生を拔濟し苦海を出でしめ、然る後に無上覺を成ずるを得、佛土清淨不思議にして、

妙金鼓を以て如來に奉り、幷に諸佛の實功德を讃じ、斯に因りて釋迦佛を見て、㊅我が人中の尊を紹がんことを記したまはん。

【五】是また偈文なり。
【六】佛位繼紹、成佛の授記を受くること。

(七)金龍と金光とは是我が子なり。過去に曾て善知識となる。世世願くは吾家に生れて、共に無上菩提の記を受けん。

若し衆生ありて救護なく、長夜輪廻して衆苦を受けんに、我來世に於て歸依となり、彼(等)をして常に安隱の樂を得しめん。

三有の衆苦願くは除滅し、悉く心に隨ひて安樂處を得、未來世に於て菩提を修し、皆過去成佛の者の如くならん。

願くは此金光懺悔の福、永く苦海を竭くして罪消除し、業障・煩惱悉く皆亡じ、我をして速に清淨の果を招かしめん。

福智の大海は量邊りなく、清淨に苦を離れて深くして底なし。願くは我此の功德海を獲て、速に無上大菩提を成ぜん。

此の金光懺悔の力を以て、當に福德の淨光明を獲べし。既に清淨の妙光明を得て、常に智光を以て一切を照さん。

願くは我が身光・諸佛に等しく、福德・智慧亦復然く、一切世界に獨り尊と稱し、威力自在にして倫匹なからん。

有漏の苦海願くは超越し、無爲の樂海願くは常に遊び、現在の福海願くは恒に盈ち・當來の智海

【七】金龍(Kananendra)。金光(Kanakaprābha)。

願くは圓滿せん。
願くは我が刹土三界に超え、殊勝の功德量邊りなく、諸の有緣のもの悉く同生して、皆速に清淨智を成ずることを得ん。
〔八〕妙幢汝當に知るべし。國王金龍王は曾て是の如き願を發しき。彼は卽ち是汝が身なり。
往時二子あり。金龍と金光は、卽ち〔九〕銀相と銀光となり。當に我が記を受くべし。大衆是說を聞きて、皆菩提心を發す。願くは現在未來、常に此に依りて懺悔せん。

【八】已下五言三頌、梵文之を缺く。
【九】下の授記品を見よ。

金勝陀羅尼品第八

(一)爾の時世尊、復衆中に於て、(二)善住菩薩摩訶薩に告げ給はく、『善男子、陀羅尼あり、名けて金勝といふ。若善男子・善女人ありて、親く過去未來現在の諸佛を見て、恭敬供養せんことを欲せば、應に此の陀羅尼を受持すべし。何を以ての故に、此陀羅尼は、乃ち是過(去)現(在)未來の諸佛の母なればなり。是の故に應に知るべし、此陀羅尼を持するものは、大福德を具し、已に過去無量の佛の所に於て、諸の善本を植ゑて、今受持することを得たり。戒に於て淸淨にして毀たず、缺かず、障礙あることなし。決定して能く甚深の法門に入る。』

世尊卽ち爲に持咒の法を說き給ふ。『先づ諸佛及菩薩の名を稱し、至心に禮敬して、然して後に咒を誦せよ。

「南謨十方一切諸佛。南謨諸大菩薩摩訶薩。南謨聲聞緣覺一切賢聖。南謨釋迦牟尼佛。南謨東方不動佛。南謨南方寶幢佛。南謨西方阿彌陀佛。南謨北方天鼓音王佛。南謨上方廣衆德佛。南謨下方明德佛。南謨寶藏佛。南謨普光佛。南無普明佛。南謨香積王佛。南謨蓮華勝佛。南謨王等見佛。南謨寶髻佛。南謨寶上佛。南謨寶光佛。南謨無垢光明佛。南謨辨才莊嚴思惟佛。南謨淨月光稱相王佛。南謨華嚴光佛。南謨光明王佛。南謨善光無垢稱王佛。南謨觀察無畏自在佛。南謨無畏名

【一】此品梵文之を缺く。但し慧沼の疏其梵號を擧ぐ。Hiraṇyavatī-dhāraṇī（ヒランニヤヴァティダーラニー）
【二】Supratiṣṭhita（スプラテイスティタ）

稱佛。南謨最勝王佛。南謨寶相佛。南謨觀自在菩薩摩訶薩。南謨地藏菩薩摩訶薩。南謨虛空藏菩薩摩訶薩。南謨妙吉祥菩薩摩訶薩。南謨金剛手菩薩摩訶薩。南謨普賢菩薩摩訶薩。南謨無盡意菩薩摩訶薩。南謨大勢至菩薩摩訶薩。南謨慈氏菩薩摩訶薩。南謨善思惟菩薩摩訶薩。」

陀羅尼に曰く

(三)「南謨。曷喇怛娜・怛喇夜也。怛姪他。君睇君睇。矩折囇・矩折囇。壹窒哩。密窒哩。莎訶。」』

佛善住菩薩に告げ給はく、『此陀羅尼は是三世諸佛の母なり。若善男子善女人ありて此呪を持せば能く無量無邊の福德の聚を生ぜん。卽ち是無數の諸佛を供養し・恭敬し・尊重し・讚嘆するなり。是の如き諸佛、皆此人に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けん。善住、若人ありて能く此呪を持せば、其欲する所に隨て衣・食・財寶・多聞・聰慧・無病・長壽、福を獲ること甚だ多く、願求する所に隨ひて、意を遂げざるなし。善住、此呪を持せば、乃至未だ無上菩提を證せざるに、常に金城山菩薩・慈氏菩薩・大海菩薩・觀自在菩薩・妙吉祥菩薩・(四)大氷伽羅菩薩等と共に居止し、諸の菩薩のために攝護せらる。善住、當に知るべし、此呪を持する時は、是の如き法を作すべし。

先つ應に誦持して、一萬八遍を滿じて、前方便と爲すべし。次に暗室に於て、道場を莊嚴し、(五)黑月

【三】 Namo ratna-trayāya tad-yathā kunte kunte kuśale kuśale iechili mitili svāha.

【四】 大氷伽羅は Mahāpiṅga'a の譯。

【五】 月の虧け始めたる一日、大陰暦の下半第一日。

一日清淨に洗浴して鮮潔の衣を著し、燒香・散華・種種の供養と、幷に諸の飲食もて道場の中に入り、當に先に說く所の如く、諸佛菩薩を稱禮すべし。至心慇重に先罪を悔い已り、右膝を地に著けて、前呪を誦し、一千八遍を滿ずべし。端坐思惟して、其所願を念ひ、日未だ出でざるとき、道場の中に於て、(六)淨黑食を食へ。日に唯一食、十五日に至り、方に道場を出でよ。能く此人をして、福德・威力不可思議に、願求する所に隨ひて、圓滿せざるなからしめん。若し意を遂げずんば、重ねて道場に入れ。既に心に稱ひ已らば、常に持して忘るる勿れ。』

【六】黑色の食物、印度古仙に屢噉黑色者の名見ゆ。

重顯空性品第九

爾時に世尊、此呪を說き已り、菩薩摩訶薩・人・天・大衆を利益し、甚深眞實の第一義を悟解するを得しめんと欲するがために、重ねて空性を明にし、頌を說きて曰はく、

〔一〕『我已に餘の甚深の經に於て、廣く眞空微妙の法を說きぬ。今復此經王の內に於て、略して空法の不思議を說かん。

諸の廣大甚深の法に於て、有情無智にして解すること能はず。故に我斯に於て重ねて敷演し、空法に於て開悟するを得しめん。

大悲もて有情を哀愍するが故に、善方便の勝因緣を以て、我今此大衆の中に於て、演說して彼をして空の義を明にせしむ。

當に知るべし此身は空聚の如し、〔二〕六賊依止して相知らず。六塵の諸賊別に根に依り、各相知らざること亦是の如し。

眼根は常に色處を觀じ、耳根は聲を聽いて斷絕せず、鼻根は恒に香境を齅ぎ、舌根は鎮に美味を嘗め、身根は輕軟の觸を受け、意根は法を了じて厭くことを知らず。此等の

〔一〕七言三十三頌、一切皆空の甚深妙理を說き、六根六識四大五蘊十二因緣の體性空なるを說破す、高く眼を著けて、空法の不可思議を觀よ。理趣大體般若と同じ、大品を參照するを要す。大體梵本と合す。

〔二〕六賊は眼耳鼻舌身意の六根が罪業を生起して功德善法を害するに譬ふ。下の說明を見よ。六塵は色、聲、香、味、觸、法。

六根事に隨ひて起り、各自境に於て分別を生ず。

(三)識は幻化の如く眞實にあらず。根處に依止して妄に貪り求む。人の空聚の中に奔走するが如し。六識の根に依るも亦是の如し。

心遍く馳求して隨處に轉ず。根に託し境を緣じて諸事を了ず。(四)常に色・聲・香・味・觸を受し、法に於て尋思し暫も停まることなし。

緣に隨ひて六根に徧行す、鳥の空を飛ぶに障礙なきが如し。此諸根を藉りて依處と作し、方に能く外境を了別す。

(五)此身は知なく作者なし、體堅固ならず緣に託して成る。皆虛妄分別より生ず。譬へば機關の業に由りて轉ずるが如し。

地・水・火・風共に身を成ず。彼因緣に隨つて異果を招く。同じく一處にありて相違して害す、(六)四の毒蛇の一篋に居るが如し。

此四毒蛇の性各異なり。一處に居ると雖昇沈あり。或は上に或は下に身に徧ず。斯等終に滅法に歸す。

此四種の毒蛇の中に於て、地・水の二蛇は多く沈下し、風・火の二蛇は性輕く擧る。此の乖違に由りて衆病生ず。

【三】十八空の中の内空。
【四】同じく外空。
【五】同じく内外空。
【六】四蛇の譬、諸大乘經に多く出づ。

心識は此身に依止し、種種の善惡の業を造作し、當に八天三惡趣に往きて、其業力に隨ひて身形を受くべし。

諸の疾病に遭ひて身死するの後、大小の便利悉く盈ち流れ、膿爛蟲蛆樂むべからず。棄てて屍林にありて朽木の如し。

(七)汝等常に法を觀ずる是の如くなるべし。云何が我・衆生ありと執ずる。一切の諸法は盡く無常なり、悉く無明の緣力より起る。

(八)彼諸の(九)大種咸く虛妄なり。本實有にあらず體無生なり。故に大種の性は皆空と說く。此緣虛にして實有にあらざることを知る。無明の自性は本是無なり。衆緣の力を藉りて和合して有り。一切の時に於て正念を失せしむ。故に我彼を說きて(一〇)無明とす。

行・識を緣として名色あり。六處及び觸受隨ひて生ず。愛・取・有の緣老・死を生ず。憂悲苦惱恒に隨逐す。

衆苦惡業恒に纏迫し、生死轉廻息む時なし。本來有にあらず體是空なり。理の如く分別を生ぜざるに由る。

(一一)我一切の諸の煩惱を斷じ、常に正智を以て現前に行じ、五蘊の宅は悉く皆空なりと了じ、求

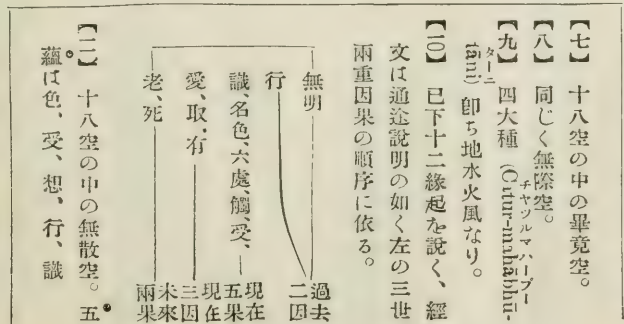
【七】十八空の中の畢竟空。

【八】同じく無際空。

【九】四大種（Catur-mahābhūtāni）卽ち地水火風なり。

【一〇】已下十二緣起を說く、經文は通途說明の如く左の三世兩重因果の順序に依る。

無明、行	過去二因
識、名色、六處、觸、受	現在五果
愛、取、有	現在三因
老、死	未來兩果

【一一】十八空の中の無散空。五蘊は色、受、想、行、識

めて菩提眞實處を證す。

(一二)我甘露の大城門を開き、甘露微妙の器を示現す。既に甘露眞實の味を得て、常に甘露を以て群生に施す。

(一三)我最勝の大法鼓を撃ち、我最勝の大法螺を吹き、我最勝の大明燈を然し、我最勝の大法雨を降らし、

煩惱の諸の怨結を降伏し、無上の大法幢を建立す。生死の海に於て羣迷を濟ふ。我當に三惡趣を關閉すべし。

煩惱の熾火衆生を燒き。救護あるなく依止なし。清涼の甘露彼を充足し、身心の熱惱普く皆除く。

是我が無量劫に於て、諸の如來を恭敬し供養せるに由れり、(一四)堅く禁戒を持し菩提に趣き、求めて法身安樂處を證し、

他に眼・耳及び手・足・妻・子・僮・僕を施し心に悋むなく、財寶と七珍莊嚴の具、來り求むる者に隨ひて咸く供給し、

(一五)忍等の諸度皆な遍く修し、十地圓滿して正覺を成ず。故に我一切智と稱することを得、衆生の度量するものあるなし。

【一二】同じく本性空。

【一三】同じく一切法空、已上十八空中、八種の空を擧げ、餘を例す、十八空中前六空體にして餘は空用に攝すればなり。

【一四】六度の中戒と布施の二。

【一五】已下六度中忍辱已下の四度を諸度といふ。

假令三千大千界の、此土地に生長するものを盡くし、所有る叢林・諸樹木、稻・麻・竹・葦及枝條、此等の諸物皆伐りて取り、並に悉く細末にして微塵として、隨處に積集して量知り難く、乃至虚空界に充滿し、

一切十方の諸刹土、所有三千大千界の、地土皆悉く末して塵となす、此微塵の量數ふべからず。

假令一切衆生の智、此智慧を以て一人に與へ、是の如き智者の量無邊にして、彼微塵の數を知る容けんも、

牟尼世尊一念の智は、彼智人をして共に度量せしめんに、〔一六〕多倶底劫の數の中に於て、其少分すら算知すること能はじ。』

時に諸の大衆・佛の此甚深の空性を說き給ふを聞き、無量の衆生悉く能く四大・五蘊、體性倶に空にして、六根・六境妄に繫縛を生ずることを了達し、輪廻を捨て、正く出離を修せんことを願ひ、深心に慶喜し、如說に奉持しき。

【一六】倶底　Koṭi　億

(一)依空滿願品第十

時に如意寶光耀天女、大衆の中に於て深法を説くを聞き、歡喜踊躍し、座より起ちて偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬し、佛に白して言さく、『世尊、唯願くは、爲に甚深の理に於て、修行する法を説き給へ』と。而も頌を説きて曰く、

(二)『我世界を照らす、(三)兩足の最勝尊に問ひ奉つる。菩薩正行の法、唯願くは慈もて聽許し給へ。』

佛の言く、『善女天、若し疑惑あらば汝が意に隨ひて問へ、吾當に分別して説くべし。』

是時に天女、世尊に請うて曰く、

(四)『云何が諸菩薩、菩提の正行を行じ、生死涅槃を離れん。自他を饒益するが故に。』

佛告げたまはく、『善女天、法界に依りて、菩薩の法を行じ、平等の行を修す。云何が法界に依りて、菩提の法を行じ、平等の行を修する。謂く、(五)五蘊に於て、能く法界を現ず。法界即ち是五蘊。五蘊は不可説なり。非五蘊もまた不可説なり。(六)何を以ての故に。若法界是五蘊なれば即ち是斷見なり。若し五蘊を離るれば卽ち是常見なり。二相を離れ、二邊に著せず、

【一】此一品梵經之を見ず。
【二】五言一頌。
【三】兩足尊は人中至尊の義。
【四】五言二頌。
【五】五蘊(現象)と法界(實體)との不即不離を説く。
【六】實體に執して顯象を見ざるものは斷見、現象に著して實體を知らざるものは常見なり。此二邊を離れ、有無の二相に著せざるを説く。

不可見にして、所見を過ぐ。名なく相なし。是則ち名けて法界を說くと爲す。

善女天、云何が五蘊能く法界を現ずるや。是の如きの五蘊は、因緣より生ぜず。何を以ての故に、若し因緣より生ぜば已生なるが故なり。生は未生の爲の故に生ず。若し已生ならば、生者は何ぞ因緣を用ひん。若し未生ならば生者は生ずることを得べからず。何を以ての故に、未生の諸法は、卽ち是非有なり。名なく相なく、校量譬喩の能く及ぶ所にあらず。是因緣の所生にあらざるが故に。善女天、譬へば鼓聲の木に依り、皮に依り、及桴手等の故に聲を出すことを得るが如し。是の如く、鼓聲の過去亦空、未來また空、現在もまた空なり。何を以ての故に、是鼓音聲は木より生ぜず、皮乃至桴手より生ぜず。三世に於て生ぜず、是則不生なり。若生ずべからざれば、則滅すべからず。若し滅すべからざれば、從來する所なし。若し從來する所なくば、亦去る所なし。若去る所なくば、則ち常にあらず、斷にあらず。(七)若し常にあらず、斷にあらざれば、一ならず、異ならず。何を以ての故に、此若是れ一ならば、則ち法界に異らず。若是の如くならば、凡夫の人、應に眞諦を見、無上安樂涅槃を得べし。既に是の如くならず、故に知る一にあらず。若し異なりと言はば、一切諸佛菩薩の行相は、卽ち是執著にして、未だ煩惱の繫縛を解脫することを得ず。卽ち阿耨多羅三藐三菩提を證せず。何を以ての故に、一切の聖人、行と非行とに於て、同眞實性なり。是故に異ならず。故に知る五蘊有にあらず、無にあらず、因緣より生ぜず、因緣なくして

【七】五蘊と法界との不一不異が說く、一ならば別に顯象あるべき理なし、異ならば同一眞理に契合し難し。

生ずるにあらず。是聖の知る所、餘の境にあらざるが故に亦言說の能く及ぶ所にあらず。名なく、相なく、因なく、緣なく、亦譬喩なし。始終寂靜にして、本來自ら空なり。是故に五蘊より法界を現ず。善女天、若善男子、善女人、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲せば、眞に異り、俗に異り、思量すべきこと難し。凡聖の境に於て、體、一異にあらず。〔八〕俗を捨てず眞を離れず。法界に依り、菩提の行を行ず。』

爾時に世尊、此語をなし已るとき、善女天、踊躍歡喜し、卽ち座より起ちて、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬し、一心に頂禮し、佛に白して言さく『世尊、上の所說の如き、菩提の正行、我今當に學すべし。』と。是時〔九〕索訶世界主大梵天王、大衆の中に於て、如意寶光耀善女天に問うて曰く、『此菩提行、修行すべきこと難し。汝今云何が、菩提行に於て、自在を得たる』と。爾時善女天、梵王に答へて曰く、『大梵王よ、佛の說く所の如きは、實に是甚深なり。一切の異生、其義を解せず。是の聖境界は微妙にして知り難し。若我をして、此法に於て安樂住を得しめ、是實語ならば、願くは一切五濁惡世の無量無數無邊の衆生をして、皆金色三十二相を得て、男にあらず、女にあらず、寶蓮花に坐し、無量の樂を受け、天の妙華を雨らし、諸天の音樂を鼓たざるに自ら鳴り、一切の供養皆悉く具足せん。』時に善女天、是語を說き已れば、一切五濁惡世の所有衆生、皆悉く金色にして、大人の

【八】佛教修行の要旨實に爰にあり深く味ふべし。
【九】索訶(Saha)。普通の娑婆世界。

相を具し、男にあらず女にあらず、寶蓮華に坐して、無量の樂を受くること、猶(一〇)他化自在天宮の如く、諸の惡道なく、寶樹行列し、七寶の蓮華世界に徧滿し、又七寶上妙の天華を雨らし、天の伎樂をなす。如意寶光耀善女天、即ち女身を轉じて、梵天の身と作る。

時に大梵王、如意寶光耀菩薩に問うて曰く、『仁者如何が菩提行を行ずる。』答て曰く、『梵王、水中の月の菩提行を行ずる若く、我亦菩提行を行ず。夢中菩提行を行ずる如く、我亦菩提行を行ず。陽燄菩提行を行ずる若く、我亦菩提行を行ず。谷響菩提行を行ずる若く、我亦菩提行を行ず。』

時に大梵王此說を聞き已り、菩薩に白して言く、『仁者何の義に依りて此語を說く。』答て言く、『梵王よ、一法として是實相あるものなし。但因緣に因りて成ずることを得るが故なり。』梵王言く、『若し是の如くならば、諸の凡夫人皆悉く阿耨多羅三藐三菩提を得べし。』答て言く、『仁者何の意を以て是說を作すや。(一一)愚癡人異に智慧人異に、菩提異に非菩提異に、解脫異に非解脫異なり。

梵王、是の如き諸法は、平等にして異なし。此法の異に於て、眞如は異らず、中間に執ずべきものあるなし、增なく減なし。梵王、譬へば幻師及幻の弟子、善く幻術を解し、四衢の道に於て、諸の沙土草木の葉等を取り聚めて一處にあり、諸の幻術を作し、人をして象衆・馬衆・車兵等の衆、七寶の聚、種種の倉庫を覩せしむ。若し衆生ありて、愚癡無

【一〇】欲界の至高處にして、官欲享樂の至上境とす。

【一一】三種の相待を擧げて一切平等なるを示す、即賢愚・迷悟、繫縛解脫也、皆實相の上の假相なることを明にす。即世俗に隨ふなり。下の譬を見よ。

智にして思惟すること能はず、幻本を知らず、若は見、若は聞きて、是思惟を作さん。我が見聞する所の象馬等の衆・此は是實有にして、餘は皆虚妄なりと。後に於て更に審察思惟せず。有智の人は是の如くならず、幻本を了ず。若くは見、若くは聞きて是の如き念を作さん。我が見る所の象馬等の衆の如き、是眞實にあらず、唯幻事の人の眼耳を惑はすありて、妄に象等及諸の倉庫と謂ふ。名ありて實なし。我見聞の如きは執して實と爲さず、後時に思惟して其虚妄なるを知る。是故に智者は一切の法皆實體なしと了じ、但世俗に隨ひて、見るが如く聞くが如く、其事を表宣す。諦理を思惟するは則ち是の如くならず、復た假説に由りて實義を顯はすが故に。梵王、愚癡の異生、未だ出世聖慧の眼を得ず、未だ一切諸法眞如の不可説を知らざるが故に。是の諸の凡夫・若は非行の法を行ずるを見、若は聞きて、是の如く思惟して、便ち執著を生じ、謂うて以て實とす。第一義に於て諸法の眞如は是不可説なることを了知すること能はず。是諸の聖人は、若は非行の法を行ずるを見、若は聞きて、其力能に隨ひて執著を生じて實有となさず。一切實なく行法實なく、非行の法は但妄思量なり。行と非行との相は、唯名字ありて實體有ることなしと了知す。是諸の聖人、世俗に隨ひて説く。他をして眞實義を知らしめんが爲なり。是の如く、梵王より是諸の聖人、聖智見を以て法の眞如不可説を了ずるが故に、行と非行の法、亦また是の如し。他をして證知せしめんが故に、種種世俗の名言を説く。』

時に大梵王、如意寶光耀菩薩に問うて言く、『幾の衆生ありて、能く是の如き甚深の正法を解する。』答へて言く、『梵王よ、衆幻人の〔三〕心、心數法あり、能く是の如く甚深の正法を解す。』梵王曰く、『此幻化人の體是有にあらず、此の心數、何よりして生ぜる。』答へて曰く、『若し法界の有ならず無ならざるを知らば、是の如きの衆生、能く深義を解す。』

爾時に梵王、佛に白して言さく、『世尊、是の如意寶光耀菩薩は思議すべからず、是の如き甚深の義に通達す。』

佛言はく、『是の如し、是の如し。梵王汝が言ふ所の如し。此如意寶光耀、已に汝等を敎へて發心せしめ、無生法忍を修學せしむ。』

是時に大梵天王諸の梵衆と座より起ちて、偏に右肩を袒ぎ、合掌恭敬して、如意寶光耀菩薩の足を頂禮し、是の如き言を作す『希有なり、希有なり、我等今日幸に大士に遇ひ、正法を聞くことを得たり。』

爾の時世尊、梵王に告げて言はく、『是如意寶光耀、未來の世に於て、當に佛となるを得べし。寶燄吉祥藏如來・〔三〕應・正徧知・明行足圓滿・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號せん。』

是品を說く時三千億の菩薩あり、阿耨多羅三藐三菩提に於て、不退轉を得たり。八千億の天子・無

【三】心は常の如し、心數は或は心所法といふ、心の上の種子作用。
【三】佛の十號之を十號具足といふ、前を見よ。

量無數の國王・臣民・塵に遠かり垢を離れて、法眼淨を得たり。

爾時會中に五十億の苾芻あり、菩薩の行を行じて菩提心を退せんと欲しぬ。如意寶光耀菩薩の是法を說くを聞く時、皆堅固不可思議を得、上願を滿足し、更に復た菩提の心を發起し、各自衣を脫して菩薩に供養し、重て無上勝進の心を發し、是の如き願を作す、「願くは我等が功德、善根悉く退せざらしめて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せん」と。『梵王、是諸の苾芻、此功德に依りて說の如く修行し、九十大劫を過ぎて、當に解悟を得、生死を出離すべし。』

爾時世尊、卽ち爲に記を授け給ふ、『汝諸の苾芻、三十阿僧祇劫を過ぎて、當に作佛を得べし。劫を難勝光王と名け、國を無垢光と名けん。同時に皆阿耨多羅三藐三菩提を得て、皆同一號に願莊嚴間飾王と名け、〔四〕十號具足せん。

梵王、是金光明微妙の經典は、若正しく聞持せば大威力あり。假令人あり、百千大劫に於て六波羅蜜を行ぜんも、方便あるなし。若善男子善女人ありて、是の如き金光明經を書寫し、半月半月に專心に讀誦せば、是功德聚は、前の功德に於て百分一に及ばず、乃至算數譬喩の及ぶ能はざる所なり。梵王、是故に我今汝をして、修學し、憶念し、受持し、他のために廣說せしむ。何を以ての故に、我往昔に於て菩薩の行を行ぜるとき、猶勇士の戰陣に入るがごとし。身命を惜まず、是の如く微妙の經王を流通し、受持し、讀誦し、他のために解說す。梵王、譬へば轉輪聖王の若王世に

【四】前を見よ。

在らば、七寶滅せず、王若し命終すれば、所有七寶自然に滅盡するがごとし。梵王、是金光明經微妙の經王若し世に現在せば、無上の法寶悉く皆滅せず。若此經なくんば隨處に隱沒せん。是故に應に此經王に於て、專心に聽聞し・受持し・讀誦し、他のために解說し、勸めて書寫せしめ、精進波羅蜜を行じ、身命を惜まず、疲勞を憚らざれば、諸の功德の中に勝れん。我が諸の弟子、應に是の如く精勤修學すべし。』

爾時大梵天王、無量の梵衆・帝釋・四王及び諸の藥叉とともに、座より起ちて偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け合掌恭敬し、而して佛に白して言さく、『我等皆願くは、是金光明微妙の經典を守護流通せん。及び說法の師、若諸難あらば我當に除遣し、衆善を具せしめ、色力充足し、辯才無礙にして、身意泰然ならしめん。時會に聽くものは皆安樂を受けしめん。所在の國土に若し饑饉・怨賊・非人に惱害せらるものあらば、我等天衆皆擁護をなし、其人民をして、安隱豐樂にして諸の枉橫なからしめん。皆是我等天衆の力なり。若是經典を供養するものあらば、我等亦當に恭敬し供養する、佛の如く異らざらん。』

爾時佛、大梵天王及び諸の梵衆乃至四王・諸の藥叉等に告げたまはく、『善哉、善哉、汝等甚深の妙法を聞くことを得たり。復能く此微妙の經王に於て、發心し擁護し、及び經を持するものは、當に無邊殊勝の福を獲て、速に無上正等菩提を成ずべし。』

時に梵王等、佛語を聞き已り、歡喜し頂受せり。

四天王觀察人天品第十一

爾時に多聞天王、持國天王、增長天王、廣目天王倶に座より起ちて、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、佛足を頂禮し已り、白して言さく、『世尊、是金光明最勝王經は、一切諸佛の常に念じ觀察する所、一切菩薩の恭敬する所、一切天・龍の常に供養する所、及諸の天衆の常に歡喜を生ずるところ、一切護世の稱揚讃歎するところ、聲聞・獨覺の皆共に受持するところなり。悉く能く明に諸天の宮殿を照らし、能く一切の衆生に殊勝の安樂を與へ、地獄・餓鬼・傍生・諸趣の苦惱を止息し、一切の怖畏、悉く能く除殄し、所有怨敵尋で卽退散し、饑饉の惡時は皆豐稔ならしめ、疾疫病苦皆蠲愈を得しめ、一切の災變、百千の苦惱咸な悉く消滅せん。世尊、是金光明最勝王經は、能く是の如く我等を安隱にし、利樂し饒益す。惟願くは世尊大衆中に於て廣くために宣說し、我等四王幷に諸の眷屬此甘露無上の法味を聞いて、氣力充實し、威光を增益し、精進勇猛神通倍勝れん。世尊、我等四王、正法を修行し常に正法を說き、法を以て世を化せん。我等彼の天・龍・藥叉・健闥婆・阿蘇羅・揭路茶・倶槃茶・緊那羅・莫呼羅伽・及び諸の人王をして、常に正法を以て世を化せしめん。諸惡を遮去し、所有鬼神・人の精氣を吸ふもの、慈悲なきもの悉く遠く去らしめん。世尊、我等四王(一)二十八部の藥叉大將、幷に無量百千の藥叉と與に、淨天眼

【一】下を見よ。

の世間に過るを以て觀察し、此贍部州を擁護せん。世尊この因緣を以て、我等諸王を(三)護世者と名づく。又此洲中に於て若國王あり、他の怨賊に常に來り侵擾せられ、及び多くの饑饉疾疫流行し、無量百千の災厄の事あらんに、世尊、我等四王此金光明最勝王經に於て、恭敬供養し、若し苾芻法師ありて受持讀誦せば、我等四王、共に往きて覺悟し、其人を勸請せん。時に彼法師、我が神通覺悟の力に由るが故に、彼國界に往きて是金光明微妙の經典を廣宣流布せん。此經の力に由るが故に、彼無量百千の衰惱災厄の事をして、悉く皆除遣せしめん。世尊、若諸の人王、其國內に於て是經を持する苾芻法師あり、彼國に至る時、當に知るべし、此經また其國に至らん。世尊、時に彼國王、法師の處に往きて其所說を聽くべし。聞き已りて歡喜し、彼の法師に於て恭敬し供養し、深心に擁護し、憂惱なからしめ、此經を演說し、一切を利益せん。世尊是緣を以ての故に、我等四王、皆共に一心に是人王及び國の人民を護り、災患を離れて常に安隱を得しめん。世尊若し苾芻・苾芻尼・鄔波索迦・鄔波斯迦の是經を持するものあらん時に、彼人王其須むる所に隨ひて、供給供養し乏少なからしめば、我等四王、彼國王及び國人をして、悉く皆安隱にして災患を遠離せしめん。世尊、若し是經典を受持し讀誦するものあらんに、人王此に於て供養し、恭敬し尊重し、讚嘆せば、我等當に彼の王をして、諸王の中に於て、恭敬し尊重して、最第一となし、諸の餘の國王に共に稱歎せしめん。』

大衆聞き已りて、歡喜し受持しき。

【三】 Lokapāla.（ローカパーラ）

卷の第六

四天王護國品第十二

爾時、世尊は四天王の金光明經を恭敬し供養し、及び能く諸の持經者を擁護することを聞き給ひ、讃じて曰く、『善哉、善哉、汝等四王已に過去無量百千萬億の佛の所に於て、恭敬し・供養し・尊重し・讃歎して諸の善根を植ゑ・正法を修行し、常に正法を說き、法を以て世を化す。汝等長夜に、諸の衆生に於て常に利益を思ひ、大慈心を起し、安樂を與へんことを願ふ。此因緣を以て、能く汝等をして現に勝報を受けしむ。若人王ありて、此金光明最勝の經典を恭敬し供養せば、汝等應に勤めて守護を加へ安隱を得しむべし。汝諸の四王及び餘の眷屬、無量無數百千の藥叉、是經を護るものは、卽是(過)去・(未)來・現在の諸佛の正法を護持するなり。汝等四王、及び餘の天衆、幷に諸の藥叉が阿蘇羅と共に闘戰するとき、常に勝利を得ん。汝等若し能く是經を護持せば、經力に由るが故に、能く諸の苦・怨賊・饑饉及び諸の疾疫を除かん。是故に汝等四衆、此經王を受持し讀誦するものを見ては、亦應に勤心に共に守護を加へて、爲に衰惱を除き、安樂を施與すべし。』

爾時に四天王、卽座より起ちて、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌恭敬して佛に白して言さく、

『世尊、此金光明最勝王經の、未來世に於て若し國土ありて城・邑・〔一〕聚落・山・林・曠野、所至の處に隨ひ流布する時、若し彼の國王、此經典に於て至心に聽受し稱嘆し、供養し、幷びに復た此經を受持する〔二〕四部の衆に供給して、深心に擁護し衰惱を離れしめんに、此因緣を以て、我彼の王及び諸人衆を護り、皆安隱にして憂苦を遠離し、壽命を增益し、威德具足せしめん。世尊、若し彼の國王・四衆が、經を受持し、恭敬し守護すること猶父母の如く、一切の須むる所、悉く皆供給せんに、我等四王常に爲に守護し、諸の有情をして尊敬せざるなからしめん。是故に我等幷に無量の藥叉諸神と與に、此經王の流布する處に隨ひて、身を潛めて擁護し、留難なからしめん。亦當に、是の經を聽かん諸の國王等を護念して、其衰患を除きて、悉く安隱ならしめ、他方の怨賊は皆退散せしめん。若人王ありて是の經を聽かん時に、隣國の怨敵、是の如きの念を興さん、當に四兵を具して彼の國土を壞るべしと。世尊此經王の威神力を以ての故に、是時(彼の)隣敵、更に異怨あり、來りて其境界を侵し擾し、諸の災變多く疫病流行せん。時に彼の王見已りて、卽ち四兵を嚴かにし、彼國に發向し、討伐を爲さんと欲す。我等爾時に、眷屬無量無邊の藥叉諸神と各自に形を隱し、爲に援助をなし、彼の怨敵をして、自然に降伏して、尙敢て其國界に來至せざらしめん。豈復兵戈もて相伐つことを得んや。』

爾時佛、四天王に告げたまはく、『善哉、善哉、汝等四王、乃ち能く是の如き經典を擁護す。我過去百

〔一〕聚落は村落と同じ。
〔二〕四衆と同じ、比丘比丘尼優婆塞優婆夷、前の註を見よ。

千倶底那庾多劫に於て、諸の苦行を修し、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切智を證し、今この法を説く。若人王ありて是經を受持し・恭敬し・供養するものは、爲に衰患を消して其をして安隱ならしめん。亦復た城・邑・聚落を擁護し、乃至怨賊悉く退散せしめ、また一切贍部洲内の所有諸王をして、永く衰惱闘諍の事なからしめん。

四王應に知るべし、此贍部洲の八萬四千の城邑聚落、八萬四千の諸の人王等、各其國に於て、諸の快樂を受け、皆自在を得、所有財寶豐足し受用し、相侵し奪はず、彼の宿因に隨ひて其報を受け、惡念を起して他國を貪求せず、咸く少欲利樂の心を生じ、闘戰繫縛等の苦あることなし。其土の人民は自然に樂を受け、上下和穆すること猶水乳のごとく、情相愛重し、歡喜遊戲し、慈悲謙讓にして善根を增長せん。是因緣を以て、此贍部洲安隱豐樂に、人民熾盛に、大地沃壤し、寒暑調和し、時は序に乖かず、日月星宿常度虧くることなく、風雨時に隨ひて諸の災橫を離れ、資產財寶、皆悉く豐盈し、心に慳鄙なく、常に慧施を行じ十善業を具せん。若人命終せば、多くは天上に生じて、天衆を增益せん。

大王、若し未來世に諸の人王ありて是經を聽受し、恭敬し供養し幷に經を受持せば、四部の衆尊重し稱讃せん。復汝等及諸の眷屬無量百千の諸の藥叉衆を安樂にし饒益せんと欲す。この故に彼王常に當に是妙經王を聽受すべし。此を聞くことを得るに由り、正法の水・甘露の上味、汝等の身心の勢力を增益して、精進・勇猛・福德・威光、悉く充滿せしめん。是諸の人王、若し能く至心に、是經を聽受

せば、則ち廣大希有の供養もて、我釋迦牟尼應正等覺を供養すとなす。若し我を供養せば、則是過去・未在・現在の百千俱胝那庾多の佛を供養するなり。若し能く三世の諸佛を供養せば、則ち無量不可思議の功德の聚を得ん。

是因緣を以て、汝等當に彼王の后妃眷屬を擁護して、衰惱なからしむべし。及宮宅の神は常に安樂を受け、功德思ひ難し。是諸の國土の所有人民亦種種の五欲の樂を受け、一切の惡事は皆消殄せん。』

爾時四天王佛に白して言さく、『世尊、未來世に於て若人王ありて、是の如き金光明經を樂ひ聽き、自身と后妃・王子・乃至內宮の諸婇女等（及び城・邑・宮殿を擁護せんと欲せんがためにせば、皆第一・不可思議・最上の歡喜と寂靜と安樂とを得て、現世の中に於ては、王位尊高に、自在に昌盛に、常に增長を得しめん。復無量無邊難思の福聚を攝受せんと欲しなば、自國土に於て怨敵及び諸の憂惱災厄の事なからしめん。

世尊、是の如く人王は放逸にして心散亂せしむべからず、當に恭敬を生じ、至誠慇懃に是の如き最勝の經王を聽受すべし。之を聽かんと欲する時、先づ當に最上の宮室、王の愛重する所の顯敞の處を莊嚴して、香水を地に灑ぎ、衆の名華を散じ、獅子殊勝の法座を安置し、諸の珍寶を以て校飾となし・種種の寶蓋・幢・幡を張り施し、無價の香を燒き、諸の音樂を奏すべし。其王、爾時に淨く澡浴し、香を以て身に塗り、新淨の衣及び諸の瓔珞を著し、小卑座に坐し、高擧を生せず、自在の位を捨て、諸の憍

慢を離れ、端心正念に、是經王を聽き、法師の所に於て大師の想を起すべし、復宮内の后妃・王子・婇女・眷屬に於て、慈愍の心を生じ。喜悅して相見、和顏輭語し、自身の心に於て、大喜充滿して、是の如き念を作すべし、「我今、難思・殊勝・廣大の利益を得たり」と。此經王に於て盛に供養を興し、既に敷設し已りて、法師の至るを見て、當に虔敬渴仰の心を起すべし。』

爾の時佛、四天王に告げたまはく、『是の如くにして法師を迎へざるべからず。時に彼の人王純淨鮮潔の衣を著し、種種の瓔珞もて嚴飾とし、自ら白蓋及び香華を持し、軍儀を備へ整へ、盛に音樂を陳り、步して城闕を出で、彼の法師を迎へ、想を運らして、虔敬に吉祥の事を爲すべし。

四王、何の因緣を以て彼の人王をして、親ら是の如き恭敬供養を作さしむるや。彼の人王の足を擧げ足を下す、步步卽是百千萬億那庾多の諸佛世尊を恭敬し供養し、承事し尊重するに由る。復是の如き劫數の生死の苦を超越することを得、復來世是の如き劫數に於て當に輪王殊勝の尊位を受くべし。其步步に隨ひて、亦現世に於て福德增長し、自在に王となり、感應思ひ難く、衆に欽重せられ、當に無量百千億劫に於て、人天に七寶の宮殿を受用し、所在の生處に、常に王となることを得、壽命を增益し、言詞辯了かに、人天信受し畏懼する所なく、大名稱あり、咸く共に瞻仰し、天上人中に勝妙の樂を受け、大力勢を獲、大威德あり、身相奇妙に、端嚴比なく、天人の師に値ひ、善知識に遇ひ、無量の福聚を成就し具足すべし。

四王當に知るべし、彼諸の人王是の如き等の種種無量の功德利益を見るが故に、自ら往きて法師を奉迎すること、若は一踰繕那、乃至百千踰繕那なるべし。說法の師に於ては當に佛想を生ずべし。還て城に至り已り、是の如き念をなすべし、今日釋迦牟尼如來應正等覺、我が宮中に入り、我が供養を受け、我がために說法し給ふなり。

我法を聞き已らば卽ち阿耨多羅三藐三菩提に於て、復退轉せず、卽是百千萬億那庾多の諸佛世尊に値遇するなり。我今日に於て、卽是種種廣大・殊勝・上妙の樂具もて、過去未來現在の諸佛を供養す。我今日に於て、卽是永く琰魔王界・地獄・餓鬼・傍生の苦を拔き、便ち爲に已に、無量百千萬億の轉輪聖王・釋・梵天主の善根の種子を種ゑ、當に無量百千萬億の衆生をして、生死の苦を出で涅槃の樂を得、無量無邊不可思議の福德の聚を積集すべしと。後宮の眷屬及び諸の人民皆安隱を蒙り、國土淸泰にして、諸の災厄・毒害・惡人なく、他方の怨敵、來りて侵し擾さず、憂患を遠離せん。

四王當に知るべし、時に彼の人王、應に是の如くに正法を尊重すべし。亦是妙經典を受持する、苾芻・苾芻尼・鄔波索迦・鄔波斯迦に於て供養し・恭敬し・尊重し・讚嘆し・獲る所の善根、先づ勝福を以て、汝等及び諸の眷屬に施與すべし。彼の人王、大福德・善業の因緣あり、現世の中に於て大自在を得、威光を增益し、吉祥の妙相、皆悉く莊嚴し、一切の怨敵、能く正法を以て之を摧伏せん。』

爾の時四天王、佛に白して言さく、『世尊、若人王ありて能く是の如きを作し、正法を恭敬して、此經王

を聽き、幷に四衆持經の人に於て、恭敬し供養し尊重し讚歎せん時、彼の人王我等に歡喜を生せしめんが爲の故に、一邊にありて法座に近く。香水を地に灑ぎ、衆の名華を散じ、處所を安置し四王の座を設くべし。我彼の王と共に正法を聽かん。其王の所有自利の善根、亦福分を以て施して我等に及ばん。世尊、時に彼の人王說法者を請ひて座に昇らしむる時、便ち我等のために衆の名香を燒きて是經を供養せん。世尊時にかの香煙一念の頃に於て虛空に上昇し、即我等諸天の宮殿に至り、虛空の中に於て變じて香蓋とならん。我等諸天衆かの妙香を聞くに、香に金光ありて我等居る所の宮殿乃至梵宮及び帝釋・大辯才天・大吉祥天・〔三〕堅牢地神・〔四〕正了知大將・二十八部の諸の藥叉神・大自在天〔五〕金剛密主・〔六〕寶賢大將・〔七〕訶利帝母・五百の眷屬・〔八〕無熱惱池龍王・大海龍王の居所の處を照耀せん。世尊是の如き等の衆、自の宮殿に於て、彼の香煙の一刹那の頃に變じて香蓋となるを見、香の芬馥たるを聞き、色の光明遍く一切諸天の神宮に至るを覩ん。』

佛、四天王に告げたまはく、『是香の光明但に此宮殿に至り、變じて香蓋となりて大光明を放つのみならず、彼の人王手に香爐を執り、衆の名香を燒き、經を供養するに由りて、時に其の香煙の氣、一念の頃に於て、遍く三千大千世界の百億の日月、百億の妙高山王、百億の四洲に至り、此三千大千世界の一切の天龍藥叉健闥婆阿蘇羅揭路茶緊那羅莫呼洛伽の宮殿の所に至

【三】Dṛḍhā-pṛthivī-devatā.
【四】Saṃjaya. 藥叉神の軍將。
【五】Vajrapāṇiguhyakādhipati. 金剛密跡主。
【六】Maṇibhadra. 有名なる藥叉神將の名。
【七】Hārītī. 鬼子母神。
【八】Anavatapta-nāgarājā.

り、虛空の中に於て、充滿して住し、種種の香煙變じて雲蓋となる。其蓋金色にして普く天宮を照らさん。是の如く三千大千世界の所有種種の香雲と香蓋とは、皆是金光明最勝王經の威神の力なり。是諸の人王手に香爐を執りて經を供養するとき、種種の香氣は但に此三千大千世界に遍きのみにあらず、一念の頃に於て、亦十方無量無邊恒河沙等の百千萬億の諸佛の國土に遍く、諸佛の上の虛空の中に於て、變じて香蓋となり、金色にして普く照らさんこと亦復是の如し。時に彼の諸佛此妙香を聞き、斯の雲蓋と及び金色とを視て、十方界に於て恒河沙等の諸佛世尊神變を現じ已り、悉く共に觀察し、異口同音に法師を讃じて曰はん、「善哉、善哉、汝大丈夫能く廣く是の如き甚深微妙の經典を流布す。則無量無邊不可思議の福德の聚を成就すとなす。」と。

若し是の如きの經を聽聞することあらば、獲る所の功德其量甚だ多し。何に況や書寫し受持し讀誦し他のために敷演し說の如く修行せんをや。何を以ての故に、善男子、若衆生ありて此金光明最勝王經を聞くものは、卽阿耨多羅三藐三菩提に於て、復た退轉せず。

爾の時十方に百千俱胝那庾多無量無數恒河沙等の諸佛刹土あり。彼刹土の一切の如來、異口同音に法座の上に於て彼の法師を讃じて言はん、「善哉、善哉、善男子、汝來世に於て、精勤の力を以て當に無量百千の苦行を修し、資糧を具足し、諸の聖衆に超え、三界を出過して最勝尊となるべし。當に菩提樹王の下に坐して、殊勝に莊嚴し、能く三千大千世界の有緣の衆生を救ひ、善く能く畏るべき形儀

の諸の魔軍の衆を摧伏し、諸法の最勝・清淨・甚深・無上の正等菩提を覺了すべし。善男子、汝當に金剛の座に坐して、無上諸佛の讃ずる所の十二妙行、甚深の法輪を轉ずべし。能く無上最大の法鼓を撃ち、能く無上極妙の法螺を吹き、能く無上殊勝の法幢を建て、能く無上極明の法炬を然し、能く無上甘露の法雨を降らし、能く無量の煩惱怨結を斷じ、能く無量百千萬億那庾多の有情をして、涯りなき畏るべき大海を度り、生死際りなき輪廻を解脱し、無量百千萬億那庾多の佛に値遇せしめん。」と。』

爾の時四天王、復佛に白して言さく『世尊、是金光明最勝王經は、能く未來現在に於て、是の如きの無量の功德を成就す。

是故に人王、若し是微妙の經典を聞くことを得ば、卽ち是已に、百千萬億無量の佛の所に於て、諸の善根を種ゑたるなり。我當に彼の人王に於て護念すべし。復無量の福德利を見るが故に、我等四王及び餘の眷屬無量百千萬億の諸神、自が宮殿に於て、是種種の香煙雲蓋の神變を見る時、我當に隱蔽して其身を現はさず、法を聽くがための故に、當に是王清淨嚴飾所止の宮殿講法の處に至るべし。是の如く、乃至梵宮・帝釋・大辯才天・大吉祥天・堅牢地神・正了知大將・二十八部の諸の藥叉神・大自在天・金剛密主寶賢大將・訶利底母と五百の眷屬・無熱惱龍王・大海龍王、無量百千萬億那庾多の諸天藥叉、是の如き等の衆、聽法の爲の故に皆身を現せず、彼の人王殊勝の宮殿、莊嚴の高座說法の所に至らん。世尊、我等四王及び餘の眷屬の藥叉諸神、皆當に一心に彼の人王と共に善知識とならん。是無上大法の施主甘露味を

以て我を充足するに因り、是故に我等是王を擁護し、其衰患を除き、安隱を得しめ、及び其宮殿・城邑・國土の諸の惡災は、變じて悉く消滅せしめん。』

爾時に四天王倶に共に合掌して、佛に白して言さく『世尊、若し人王ありて、其國土に於て此經ありと雖、未だ嘗て流布せず、心に捨離を生じ、聽聞することを樂はず、また供養し尊重し讃歎せず。四部の衆、持經の人を見て、亦復能く尊重し供養せず。遂に我等及び餘の眷屬無量の諸天をして、此甚深の妙法を聞くを得ず。甘露味に乖き、正法の流を失ひ、威光及び勢力あることなく、惡趣を增長し、人天を損減し、生死の河に墜ち、涅槃の路に乖かしむ。世尊、我等四王幷に諸の眷屬、及び藥叉衆等、斯の如きの事を見て、其國土を捨てて擁護の心なし。但に我等が是王を捨棄するのみならず、亦無量の國土を守護する諸大善神あるも、悉く皆捨て去らん。已に捨て離れ已らば、其國當に種種の災禍ありて國位をも喪失すべし。一切の人衆に皆善心なく、唯繫縛殺害ありて瞋り諍ひ、互に相讒諂し、枉無辜に及び、疾疫流行す。彗星數ば出で、兩日並び現れ、薄蝕恒なく、黑白の二虹は不祥の相を示し、星流れ地動き、井内に聲を發し、暴雨惡風時節に依らず、常に饑饉に遭ひ、苗實は成らず、多く他方の怨賊の侵掠あり。國内の人民諸の苦惱を受け、土地に樂むべき處あることなし。世尊、我等四王及び無量百千の天神、幷に國土を護る諸の舊善神、遠く離れ去る時、是の如き等の無量百千の災怪と惡事とを生ぜん。

世尊、若し人王ありて國土を護り、常に快樂を受けんと欲し、衆生をして咸く安隱を蒙らしめんと欲し、一切の外敵を摧伏するを得て、自の國境に於て永く昌盛を得んと欲し、正教をして世間に流布せしめ、苦惱惡法皆な除滅せしめんと欲せば、世尊、是諸の國王必ず當に是妙經王を聽受すべし。亦應に經を讀誦し受持するものを恭敬し供養すべし。我等及び餘の無量の天衆、是法を聽く善根の威力を以て、無上の甘露の法味を服するを得て、我等の所有眷屬を增益し、幷に餘の天神皆勝利を得ん。何を以ての故に、是人王至心に是經典を聽受するが故なり。

世尊、(九)大梵天の如き、諸の有情に於て常に世出世の論を宣說す。帝釋また種種の諸論を說き、五通の神仙もまた諸論を說く。世尊、梵天・帝釋・五通の仙人百千倶胝那庾多の無量の諸論ありと雖、然も佛世尊、慈悲哀愍し、人天衆のために金光明微妙の經典を說き給ふ。前の所說に比するに彼に勝ること百千倶胝那庾多倍にして、喩となすべからず。何を以ての故に、此に由りて能く贍部洲のあらゆる王等をして正法もて世を化し、能く衆生に安樂の事を與へしめ、自身及び諸の眷屬を護りて苦惱なからしむるがためなり。又他方怨賊の侵害なく、所有諸惡悉く皆遠く去り、亦國土の災厄をして屛除せしめ、化するに正法を以てして、諍訟あることなし。是故に人王各其國土に於て當に法炬を然し、明に照らすこと邊りなく、天衆幷に諸の眷屬を增益すべし。

【九】印度吠陀等の古聖典は梵天等神仙の說く所也。

世尊、我等四王、無量の天神藥叉の衆、贍部洲内のあらゆる天神、是の因緣を以て、無上甘露の法味を服するを得、大威德勢力光明を獲て具足せざるなし。一切の衆生皆安隱を得、復た來世無量百千不可思議那庾多劫に於て、常に快樂を受けん。復無量の諸佛に値遇することを得て、諸の善根を種ゑ、然る後に阿耨多羅三藐三菩提を證得せん。是の如き無量無邊の勝利は皆是如來應正等覺、大慈悲を以て諸の梵衆に過ぎ、大智慧を以て帝釋に逾え、諸の苦行を修すること五通仙に勝り、百千萬億那庾多倍にして稱計すべからず。諸の衆生のために、是の如き微妙の經典を演說し、贍部洲一切の國主及び諸の人衆をして、世間のあらゆる式法、國を治め人を化し、勸導の事を明了ならしむ。此經王流通の力に由るが故に、普く安樂を得。此等の福利は、皆是れ釋迦大師この經典に於て、廣く流通をなす慈悲力の故なり。世尊この因緣を以て、諸の人王等、皆應に此妙經王を受持し、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎すべし。何を以ての故に、是の如き等の不可思議殊勝の功德ありて、一切を利益すればなり。是故に名けて最勝經王といふ。』

爾の時に世尊、また四天王に告げたまはく、『汝等四王及び餘の眷屬、無量百千倶胝那庾多の諸天大衆、彼人王を見て、若し至心に是經典を聽き、供養し、恭敬し、尊重し、讚歎せば、當に擁護して其衰患を除くべし。能く汝等をして亦安樂を受けしめん。若し四部の衆、能く廣く是經王を流布せば、人天の中に於て、廣く佛事を作し、普く能く無量の衆生を利益せん。是の如きの人を汝等四王、常に當に擁護すべし。是の如きの四衆、他緣をして共に相侵擾せしむる勿れ。彼をして身心寂靜安樂ならし

め、此經王を廣宣流布して斷絶せざらしめ、有情を利益して未來際を盡さしめよ。』

爾の時、多聞天王座より起ちて、佛に白して言さく、『世尊、我に如意寶珠陀羅尼の法あり。若し衆生ありて、受持を樂ふものは功德無量ならん。我常に擁護して彼衆生をして苦を離れ樂を得て、能く福智二種の資粮を成ぜしめん。受持せんと欲するものは先づ是護身の呪を誦すべし。』卽ち呪を說いて曰く、

〔10〕『南謨薜室羅末拏也。莫訶曷羅闍也。怛姪他。囉・囉、囉、囉。矩怒、矩怒。區怒、區怒。窶怒、窶怒。颯婆、颯婆。羯囉、羯囉。莫訶毗羯喇麼。莫診毗羯喇麼。莫訶曷羅社。曷略叉、曷略叉覩漫。（自ら己が名を稱せよ）。薩婆薩埵難。莎訶。』

『世尊、此呪を誦せんものは、白線を以て之を呪すること、七遍し、一遍に一結して之を肘後に繫ぐべし、其事必らず成らん。應に諸香を取るべし。所謂、安息・栴檀・龍腦・蘇合・多揭羅・薰陸なり。皆須らく等分に一處に和合すべし。手に香爐を執り、香を燒きて供養し、淸淨に澡浴して、鮮潔の衣を著し、一靜室に於て神呪を誦して、我が薜室羅末拏天王を請ずべし。』卽ち呪を說いて曰く、

〔11〕『南謨。薜室囉末拏也。南謨檀那馱也。檀泥說囉也。阿揭擔。阿鉢喇弭多。檀泥說囉。鉢羅麼。

【10】 Namo Vaiśravaṇāya mahārājāya tadyathā ra ra ra ra kunu kunu [bunu bunu] khunu khunu sapa sapa [kara kara vikāraṃ] mahāvikārama [mahā kāla] mahārāja rakṣa rakṣantu māṃ sarva-sattvānāṃ svāhā.

【11】 Namo Vaiśravaṇāya namo Dānadāya Daneśvarāya ākarṣa aparimita daneśvara parama kāruṇika sarva-sattv-ahitacinta mama dāna vard-hapaye svayaṃ ākarṣa svāhā.

迦留尼迦。薩婆多哂哆振多。麼麼（己れの名）檀那。末奴鉢喇拽擔碎闍揭擔。莎訶。』

『此呪を誦すること一七遍を滿じ已りて、次に本呪を誦せよ。呪を誦せんと欲する時、先づ三寶及薜室囉末拏大王を稱名敬禮すべし。能く財物を施し、諸の衆生の求むる所の願をして、悉く能く成就せしめて、それに安樂を與へしめん。是の如く禮し已りて、次に薜室囉末拏王如意末尼寶心神呪を誦せよ。能く衆生の意に隨ひて安樂を施さん。』爾時、多聞天王卽ち佛前に於て、如意末尼寶心呪を說いて曰く、

（二）『南謨。曷喇怛娜怛喇夜也。南謨。薜室囉末拏也。莫訶囉闍也。怛姪他。四弭、四弭。蘇母・蘇母。栴茶、栴茶。折囉、折囉。薩囉、薩囉。羯囉、羯囉。枳哩、枳哩。矩嚕、矩嚕。母嚕、母嚕。主嚕、主嚕。娑大也。頞貪。我名某甲。昵店。頞他。達達覩。莎訶。南謨。薜室羅末拏也。莎訶。檀那馱耶。莎訶。曼奴喇他。鉢喇脯喇迦也。莎訶。』

『呪を受持する時、先づ千遍を誦せよ。然して後、淨室の中に於て、（三）瞿摩を地に塗りて、小壇場を作り、時に隨ひて飲食し、一心に供養し、常に妙香を然して烟をして絕えざらしめ、前の心呪を誦し、晝夜に心に繫け、唯自耳にのみ聞きて、他をして解せしむるなかれ。

【二】 Namo ratnatrayāya namo Vaiśramaṇāya mahārājāya tadyathā śimi śimi sumu sumu caṇḍa caṇḍa care care sara sara kara kara kiri kiri kuru kuru muru muru curu curu sādaya [dharma] ātmanaṃ nityaṃ antara dhātu svāhā; namo vaiśramaṇāya svāhā dhanadāya svāhā manoratha paripūrikāya svāhā.

【三】 瞿摩(Gomaya)牝牛糞。印度婆羅門の修法には皆牛糞を最淨のものとして之を地上に塗るを常とす、今印度修法の習俗に從へり。

時に薜室囉末拏王子あり、其名を（一四）禪膩師と名く、童子形を現じ來りて其所に至り、問うて言はく、「何故に我父を喚ぶことを須ふるや」と。卽ち報へて言へ、「我供養三寶の事の爲に財物を須ふ。願くはまさに施與すべし」と。時に禪膩師この語を聞き已り、卽ち父の所に還り、其父に白して曰く、「今善人あり、至誠心を發し、三寶を供養するも財物少乏をもてこの請召をなす」と。其父報へて曰く、「汝速かに去りて、日日彼に一百（一五）迦利沙波拏を與ふべし」と。其持呪のもの、是相を見已りて、事の成るを知り、當に須く淨室に處し、香を燒きて臥し、牀邊に於て一香篋を置くべし。天曉に至る每に、其篋中を觀て、求むる所の物を獲よ。物を得る時每に、日に卽三寶に香華飮食を供養し、兼て貧乏に施し、皆罄盡せしむべし。停留することを得ざれ。諸の有情に於て慈悲の念を起し、瞋誑諂害の心を生ずること勿れ。若し瞋を起さば卽ち神驗を失せん。常に心を護るべし。瞋恚せしむること勿れ。

又此呪を持するものは每日の中に於て、我が多聞天王及男女の眷屬を憶ひ、稱揚讚歎し、恒に十善を以て共に相資助し、彼の天等をして、福力明を增し、衆善普ねく臻り、菩提處を證せしめん。彼の諸の天衆この事を見已りて、皆大に歡喜し、共に來りて持呪の人を擁衞せん。又呪を持するものは壽命長遠にして無量歲を經、永く三塗を離れて、常に災厄なからん。又如意寶珠及び（一六）伏藏を獲せ

【一四】Sainisi西藏譯に依る、但し此梵名他經に未だ檢せず。梵本此部分存せず。

【一五】Karsapana 印度銅貨、約、一一八グラムの單位ra.ti の八十を指せり。若貝齒貨の單位とせば一千六百の貝齒を一カールシヤパナとす。

しめ、神通自在にして、所願みな成せん。若し官榮を求めば、意に稱はざるなし。亦一切禽獸の語を解せん。

世尊、若し呪を持する時、我が自身の現ずるを見るを得んと欲せば、月の八日、或は十五日に於て、白氎の上に於て、佛の形像を畫き、當に木膠を以て、雜彩莊飾すべし。其の像を畫かん人は、爲に八戒を受けよ。佛の左邊に於て、吉祥天女の像を作り、佛の右邊に於て、我多聞天の像を作り、幷に男女眷屬の類を畫き、坐處に安置し、咸く如法ならしめ、華彩を布列し、衆の名香を燒き、燈を然して明を續くること、晝夜歇むなく、上妙の飮食と種種の珍奇と、殷重の心を發して、時に隨ひ供養せよ。神呪を受持して輕心なることを得ざれ。我を請召せんときは、應に此呪を誦すべし。

(一七)『南謨。室唎健那也。勃陀也。南無薛室囉末拏也。藥叉囉闍也。莫訶囉闍。阿地囉闍也。南麼室利耶裔。莫訶提弊裔。怛姪他。怛羅・怛羅。咄嚕・咄嚕。末囉・末囉。窣率吐・窣率吐。漢娜・漢娜。末尼羯諾迦。跋折囉薜瑠璃也。目底迦楞訖㗚多。設唎囉裔蒲。薩婆薩埵呬哆迦摩。薜室囉末拏。室唎夜提鼻。跋囉婆也。裔呬・裔呬。麼毗藍婆　瞿㗚拏瞿拏拏、秣喇娑秣喇娑。達馱呬麼麼、阿目迦那末寫(自ら其名を稱

【一六】伏藏は地下に埋伏せる無主の寶にして有德者は自ら之を得るの傳說佛經中に多し。

【一七】Namaḥ Śrī-kaṇṇaya buddhāya namo Vaiśramaṇāya yakṣarājāya mahārāja[ya]adhirājaya namaḥ śrīye mahādevye tadyāthā tara tara turu turu bala bala suśudhi hana hana maṇikanaka vajravaiḍūrya muktikalaṃkṛta śarīrāya sarvasattvā [nāṃ] hitakāma Vaiśramaṇa-Śrīya devipradhāya ehy ehi mavilamba ghurṇa ghurṇa prasya prasya dadhahi mama amakanamaya darśana-kāmasya darśānan mama mana pariharadhu [ra]ya svāhā.

せよ）達哩設那迦末寫。達哩設南。麼麼末那。鉢喇曷羅大也。莎訶。』

『世尊、我若しこの誦呪の人を見、復是の如く盛に供養を興すを見ば、卽ち慈愛歡喜の心を生じ、我卽ち身を變じて小兒の形となり、或は老人・苾芻の像となり、手に如意末尼寶珠を持し、幷に金嚢を持ちて道場の內に入り、身に恭敬を現じ、口に佛名を稱へ、持誦者に語りて曰く、「汝が求むる所に隨ひて皆願の如くならしめん」と。或は林藪に隱れ、或は寶珠を造り、或は衆人の愛寵を欲し、或は金銀等の物を求め、諸呪を持せんと欲せんに、皆驗あらしめん。或は神通壽命の長遠、及び勝妙の樂を欲せんに心に稱はざることなけん。我今且らく是の如き事を說くも、若し更に餘を求めば、皆所願に隨ひて、悉く寶藏の無盡と功德の無窮とを成就することを得ん。假令日月は地に墜墮し、或は大地時ありて移轉すべきも、我がこの實語は終に虛然ならず、常に安隱を得て、心に隨ひて快樂ならん。世尊、若人ありて、能く是の經王を受持讀誦するものは、此呪を誦するとき、疲勞を假らず、法速かに成就せん。世尊、我今彼の貧窮困厄苦惱の衆生の爲に、此神呪を說き、大利を獲て、皆富樂自在にして患なからしめん。乃至形を盡くして、我當に是人を擁護隨逐し、爲めに災厄を除くべし。亦復、此金光明最勝王經を持して之を流通せしむるもの、及び持呪の人は、百步の內に於て、光明照燭し、我があらゆる千の藥叉神亦常に侍し衞り隨ひ、驅使せんと欲せば、心に遂げざるなけん。我實語を說く、虛誑あることなし、唯佛證知し給へ。』

時に多聞天王此呪を說き已るや、佛言く、『善哉、大王、汝よく一切衆生の貧窮の苦網を破裂し、富樂を得しめ、是神呪を說き、復此經をして廣く世に行はれしむ。』

時に四天王倶に座より起ち、偏に一肩を袒ぎ、雙足を頂禮し、右膝を地に著け、合掌恭敬し、妙伽陀を以て佛の功德を讚ずらく、

(一八)『(一)佛面は猶淨滿月の如し、亦千日の光明を放つが如し。目は淨く修廣なる青蓮の若し、齒は白く齊密にして珂雪のごとし。

(二)佛德無邊にして大海の如く、無限の妙寶其中に積む。智慧の德水は鎭りて恒に盈ち、百千の勝定咸く充滿す。

(一九)(三)足下の輪相皆な嚴飾し、轂輞千輻悉く齊平に、手足の縵網徧く莊嚴し、猶鵝王の相具足するが如し。

(四)佛身の光耀金山に等しく、清淨殊特にして倫匹なく、また妙高の功德滿つるが如し。故に我佛山王を稽首したてまつる。

(五)相好は空の如く測るべからず、千日の光明を放つにも逾え、皆焔と幻との如く不思議なり、故に我心無著を稽首したてまつる。』

爾の時四天王佛を讚歎し已るや、世尊伽陀を以て之に答へて曰はく、

【一八】 惣じて五頌あり、初の四頌は別して佛陀の莊嚴なる相好を歎じ、後の一頌は總結の讃にして三身を合せ頌す。又ある釋家は、此頌を左の如く解す。

第一頌――化身
第二頌――報身
第三・四頌――報化二身
第五頌――法身
（以上）讃

【一九】 佛陀足底の勝相は夫の佛足石等に刻する所の如し。

（二〇）（一）この金光明最勝の經は、無上十力の說く所なり。汝等四王常に擁衞して、勇猛不退の心を生ずべし。

（二）此妙なる經寶は極めて甚深なり。能く一切の有情に樂を與ふ。彼の有情安樂なるに由るが故に、常に（二一）贍部洲に流通することを得。

（三）この大千世界の中に於ける、所有一切の有情の類、餓鬼と傍生と及び地獄と、是の如き苦趣は悉く皆除き、

（四）この南洲に住する諸の國王、及び餘の一切の有情の類、經の威力に由りて常に歡喜し、皆擁護を蒙りて安寧を得ん。

（五）また此中の諸の有情をして、衆の病苦を除き賊盜なからしめん。この國土經を弘むるに賴るが故に、安隱豐樂にして違惱なからん。

（六）もし人此經王を聽受し、尊貴及び財利を求めんと欲せば、國土豐樂にして違諍なく、心に隨ひて所願悉く皆な從ひ、

（七）能く他方の賊をして退散せしめ、自國界に於て常に安隱ならん。この最勝經王の力に由りて、諸の苦惱を離れて憂怖なからん。

（二二）（八）寶樹王の宅內にあるが如く、能く一切の諸の樂具を生ず、最勝經王も亦復然り、能く人王

【二〇】十五頌あり、初の五頌は總じて經を讚じ、次の五頌は人の受持得益を明かし、次の二頌は諸天善神の冥祐を說き、最後の三頌は結文とす。文知り易し。

【二一】Jambu-dvîpa 即此人界を指す。第四頌の南洲亦同じ。

【二二】印度の寶物資具を出す、福德樹ありとの俗信あり、今是を譬とす。

に勝功徳を與ふ。

(九)譬へば澄潔清冷の水の、能く饑渴諸の熱惱を除くが如し、最勝經王も亦復然り、樂福者をして心滿足せしむ。

(一〇)人の室に妙寶の篋あれば、受用する所に隨ひて悉く心に從ふが如し、最勝經王も亦復然り、福德心に隨ひて乏くる所なし。

(一一)汝等天主及天衆、應に此經王を供養すべし。若し能く敎に依りて經を奉持せば、智慧威神みな具足せん。

(一二)現在十方の一切の佛、咸く共に此經王を護念し、讀誦及び受持するものあるを見たまひて、善哉甚だ希有なりと稱歎せん。

(一三)若し人あり能く此經を聽きて、身心踴躍して歡喜を生ぜば、常に百千の藥叉衆ありて、所住の處に隨ひて斯の人を護らん。

(一四)此世界に於ける諸の天衆、其數無量にして不思議なり。悉く共に此經王を聽受し、歡喜護持して退轉なからん。

(一五)若人この經王を聽受せば、威德勇猛常に自在に、一切の人天衆を增益して、衰惱を離れて光明を增さしめん。』

爾の時四天王この頌を聞き已りて、歡喜踴躍し、佛に白して言さく、『世尊、我昔より來、未だ曾て是の如き甚深微妙の音を聞くを得ざりき』と。心に悲喜を生じ、涕涙交流れ、擧身戰動して不思議希有の事を證し、天の曼陀羅華・摩訶曼陀羅華を以て、佛の上に散ず。是殊勝の供養を作し已り、佛に白して言さく、『世尊、我等四王、各五百の藥叉の眷屬あり。常に處處に是經、及び說法の師を擁護し、智光明を以て助衛をなすべし。此經のあらゆる句義に於て忘失の所あらば、我今彼をして憶念して忘れざらしめ、幷に陀羅尼殊勝の法門を與へて、具足することを得しめん。復この最勝王經所在の處をして、諸の衆生のために、廣宣流布して速かに隱沒せざらしめん。』

爾の時世尊大衆の中に於て、この法を說きたまふ時、無量の衆生みな大智聰睿辯才を得、無量なる福德の聚を攝受し、諸の憂惱を離れ、喜樂の心を發し、善く衆論を明かにし、出離の道に登り、復退轉せず、速に菩提を證しき。

無染著陀羅尼品第十三

爾の時世尊、具壽舍利子に告げたまはく、『今法門あり、無染著陀羅尼と名づく。是諸菩薩の修行する所の法なり、過去菩薩の受持する所なり、是菩薩の母なり。』

この語を說き已るや、具壽舍利子、佛に白して言さく（一）『世尊、陀羅尼とは是れ何の句義ぞや。世尊、陀羅尼とは方處にあらず、非方處にあらず。』

この語を說き已るや、佛舍利子に告げたまはく、（二）『善哉善哉、舍利子よ、汝大乘に於て已に能く發趣し、大乘を信解し、大乘を尊重す。汝が說く所の如く陀羅尼は方處にあらず、非方處にあらず。法にあらす、非法にあらず。過去にあらず、未來にあらず、現在にあらず。事にあらず、非事にあらず。緣にあらず、非緣にあらず。行にあらず、非行にあらず。法生するあるなく、亦法滅するなし。然も諸菩薩を利益せんが爲の故に、是の如きの說を作し、（三）此陀羅尼に於て、功用・正道・理趣・勢力・安立す。卽ち是諸佛の功德、諸佛の禁戒、諸佛の所學、諸佛の祕意、諸佛の生處なり。故に無染著陀羅尼最妙の法門と名づく。』

【一】 辭字言詮の神咒は、實義門より見れば方處非方處を超絕す、是一品の宗旨なり。

【二】 佛陀、舍利子の問に應じ更に廣く神咒の眞義を開示するを見よ、舍利子の空間超絕に加ふるに更に時間、存在關係の各方面より、眞體超絕の奧旨を說き來る。

【三】 眞諦門より云へば、陀羅尼は言詮已外にあるも、俗諦門より見れば、言辭を假り、四種の義に於て安立施設す。
一、功用―得果の力用。
二、正道―正理を證すべき道。
三、理趣―正智の境界、眞如法等。

是語を作し已り給ふや、舍利子、佛に白して言さく、『世尊唯願くは善逝、我が爲に此陀羅尼の法を說きたまへ。若し諸の菩薩能く安住するものは、㈣無上菩提に於て復た退轉せず、正願を成就し、無所依を得、自性辯才あり、希有の事を獲て、聖道に安住す。皆此陀羅尼を得るに由る故なり。』

佛、舍利子に告げたまはく、「善哉善哉、是の如し、是の如し、汝の所說の如し。若し菩薩ありて此陀羅尼を得るものは應に知るべし、是人佛と異なることなし。若し此菩薩を供養し・尊重し・承事し・供給するあらば、應に知るべし、卽ち是佛を供養するなり。舍利子若し餘人ありて、この陀羅尼を聞き、受持し讀誦し信解を生ずるものは、亦た是の如く恭敬供養すること、佛と異なることなかるべし。是因緣を以て無上果を獲ん。』

爾の時に世尊、卽ち爲めに陀羅尼を演說して曰はく、

㈤『怛姪他。珊陀喇儞。嗢多喇儞。蘇三鉢囉底瑟恥哆。蘇那麼。蘇鉢喇底瑟恥哆。鼻逝也跋羅。薩底也　鉢喇底愼若。蘇阿嚧訶。愼若那末底。嗢波彈儞。阿伐那末儞。阿毗師彈儞。阿鞞毗耶訶羅。輸婆伐底。蘇尼室多喇。薄虎。群社。阿毗婆駄。莎訶。』

四、勢力－滅惡生善・證理得果の力。

【四】 已下六種の利益を擧ぐ。(一)不退轉－菩薩修行の階段を退轉なく進む(二)正願－十種の大願等を滿了す。(三)無所依－卽ち無住所涅槃にして生死に住せず、圓寂に入らざる妙境を得(四)自性辯才－所謂四無礙辯を得るなり、自性は無師自發の謂なり。(五)希有の事－瑜伽に菩薩衆生濟度に就きての五種希有の事を擧ぐる是なり（瑜伽四十六）。(六)聖道安住は十聖位－卽ち菩薩至高の階級たる十地に入るを云ふ。

【五】 Tadyathā sandhāraṇi apadhāraṇi susampratiṣṭhita sunāma supratiṣṭhita vijaya-bala satya teja pratiśiñjā suroha śiñjanamati (jñānprati) upadhani abanāmani abhiśig ṇi

佛、舍利子に告げたまはく、『此無染著陀羅尼の句は、若し菩薩ありて、善く安住し、能く正しく受持せば、當に知るべし是人若くは一劫、若くは百劫若くは千劫、若くは百千劫に於て、發す所の正願窮盡あることなく、身、また刀・杖・毒薬・水・火・猛獸に損害せられじ。何を以ての故に、舍利子、この無染著陀羅尼は、是過去諸佛の母なり、未來諸佛の母なり、現在諸佛の母なればなり。

舍利子よ、若し復た人ありて十阿僧企耶三千大千世界の中に滿ちたる七寶を以て、諸佛に奉施し、及び上妙の衣服飮食を以て種種に供養して、無數劫を經んに、若し復た人ありて、此陀羅尼の乃至一句を能く受持するものは、生ずる所の福倍して彼より多し。何を以ての故に、舍利子、此無染著陀羅尼甚深の法門は、是諸佛の母なるが故なり。』

時に具壽舍利子、及び諸の大衆、是法を聞き已りて、皆大に歡喜し、咸受持せんことを願ふ。

abhivyākara śubhapati suniśitā bahūṃ guṇja (guṃbha) abhipāla svāhā.

如意寶珠品第十四

爾の時世尊、大衆の中に於て阿難陀に告げて曰はく、『汝等當に知るべし、陀羅尼あり、如意寶珠と名づく。一切の災厄を遠離し、亦能く諸の惡雷電を遮止す。過去の如來應正等覺の共に宣說する所なり。我今時に此經中に於て亦汝等大衆の爲に宣說し、能く人天に於て大利益をなし、世間を哀愍し、一切を擁護し、安樂を得しめん。』

時に諸の大衆及び阿難陀、佛の語を聞きて、各各至誠に世尊を瞻仰し、神呪を聽受す。

佛言はく、『汝等諦聽せよ。(一)此東方に於て光明電王あり、阿揭多と名づく。南方に光明電王あり、設羝嚕と名づく。西方に光明電王あり、主多光と名づく。北方に光明電王あり、蘇多末尼と名づく。若し善男子善女人ありて、是の如き電王の名字及び方處を知るものあらば、卽ち一切怖畏の事を遠離せん。及び諸の災横悉く皆消殄せん。若し住處に於てこの四方電王の名を書するものは、所住の處に於て雷電の怖なく、及び諸の

【一】此四種電王の名は起世經其他にも出づ但し多少の異同あり、宋代の譯になれる消除一切閃電障難隨求如意陀羅尼經は詳悉を極めたるものにて同じく四電王を擧ぐるも梵語に出入あるを免れず、蓋し寫傳の際何れか寫誤に出でしなるべし。

今經	宋譯
アーガタ Agata	アガナ Aghana 無原
シヤテール Sateru(!)	シヤタドル Satadru 順流
チユタプラバ Cyutaprabha	チユタプラバ Cyutaprabha 放光明
スタマニ Sutamani	サンダーマニー Sandāmanī 百生樹

今經の梵名は西藏譯に依れるも、無論宋譯を正しとすべし。

障惱非時の枉死、悉く皆遠離せん。』

爾の時、世尊卽ち呪を說きて曰く、

(二)『怛姪他。儞彌儞。儞彌儞。尼民達哩。窒哩盧迦盧羯儞。窒哩輸攞波儞　曷略叉。曷略叉。我某甲及此住處。一切の恐怖、所有苦惱・雷電・霹靂・乃至枉死皆悉く遠離せん。莎訶。』

爾の時觀自在菩薩摩訶薩、大衆の中にありて、卽ち座より起ちて、偏に右肩を袒ぬぎ、合掌恭敬して佛に白して言さく、『世尊、我今また佛の前に於て、略して如意寶珠神呪を說かん。諸の人天に於て大利益を爲し、世間を哀愍し、一切を擁護し、安樂を得しめ、大威力ありて、求むる所願の如くならん。』卽ち呪を說きて曰く、

(三)『怛姪他。喝帝。毗喝帝。儞喝帝。鉢喇窒體雞。鉢喇底蜜窒囇。戍提。目羝。毗末麗。鉢喇婆莎囇。安茶囇。般茶囇。稅帝。般茶囉婆死儞。曷囇。羯茶麗。劫畢麗。氷揭羅惡綺。達地目企。曷略叉。曷略叉。我某甲及び此の住所一切の恐怖所有苦惱、乃至枉死悉く皆遠離せん。願くは我罪惡の事を見ることなく、常に觀自在菩薩大悲威光に護念せられん。莎訶。』

【二】 Tadyathā nimini nimini nimiṅdharī trailokya lokāni triśūrapāṇi rakṣa rakṣa .... svāhā.
西藏本多少咒語の出入あり、今對照を略す。

【三】 Tadyathā gate vigate nigate pratyarthake pratimitre śudhe mukte vimale prabhāsvare aṇḍari paṇḍari śvete paṇḍaravāsini hari kaṇḍari kapiri piṅgalākṣi dadhimukhi rakṣa rakṣa .... svāhā.

爾の時に執金剛祕密主菩薩、卽ち座より起ちて、合掌恭敬し、佛に白して言さく、『世尊、我今陀羅尼呪の、名づけて無勝といふを説かん。諸の人天に於て大利益をなし、世間を哀愍し、一切を擁護し、大威力ありて、求むる所願の如くならん。』卽ち呪を説いて曰く、

㈣『「怛姪他。母儞。母儞。母尼(寧。訶)囇。末底。末底。蘇末底。莫訶末底。訶訶訶訶。磨婆。以那悉底帝波跛。跛折囉波儞、亞甜姪嘌茶。莎訶。」

世尊、我が此の神呪を名けて無勝擁護といふ。若し男女ありて一心に受持し書寫し、讀誦し憶念して忘れずんば、我晝夜に於て、常に是人を護り、一切の恐怖乃至枉死に於て皆悉く遠離せん。』

爾の時に索訶世界主梵天王、卽ち座より起ちて、合掌恭敬し、佛に白して言さく、『世尊、我亦陀羅尼微妙の法門あり、諸の人天に於て大利益をなし、世間を哀愍し、一切を擁護し、大威力ありて、求むる所願の如くならん。』卽ち呪を説いて曰く、

㈤『「怛姪他。醯里。弭里。地里。莎訶。跛囉蚶魔布麗。跛囉蚶魘末尼。跛囉蚶魔揭鞞。補澀跛僧悉怛囇。莎訶。」

世尊、我がこの神呪を名づけて梵治といふ。悉く能く擁護す。是呪を持するものは憂惱を離れしめ、

【四】 Tadyathā muni muni muni muni ne hare mati mati sumati mahāmati ha ha ha ha mabhaina (?) sthite pāpa vajrapāṇi amitri ca svāhā (番譯 ahaṃ ciri ca svāhā. に作る。)

【五】 Tadyathā hili mili dhili svāhā Brahmapure Brahmamaṇi Brahmagarbhe puṣpa saṃsthire svāhā. 第七句已下番本大に異なる點あり、今之を略す。

及び諸の罪業乃至枉死悉く皆遠離せん。』

爾の時に帝釋天王、卽ち座より起ちて合掌恭敬して、佛に白して言さく、『世尊、我亦陀羅尼あり、(六)跋折羅扇儞と名づく。此の大神呪は能く一切の恐怖と厄難とを除く。乃至枉死悉くみな遠離し、苦を拔き樂を與へ、人天を利益せん。』卽ち呪を說いて曰く、

(七)『怛姪他。毗儞。婆唎儞。畔陀弭滯。磨膩儞撥儞　瞿哩。揵陀哩。旃荼哩。摩登耆。十羯死。薩羅跋喇鞞。呬娜末住。答磨。嗢多喇儞。莫呼剌儞。達剌儞計。斫羯羅婆枳。捨伐哩。奢伐哩。莎訶。』

爾の時、多聞天王、持國天王、增長天王、廣目天王、倶に座より起ちて合掌恭敬して、佛に白して言さく、『世尊、我今また神呪あり、施一切衆生無畏と名づく。諸の苦惱に於て常に擁護をなし、安樂を得しめ、壽命を增益し諸の患苦なく、乃至枉死悉く皆遠離せん。』卽ち呪を說きて曰く、

(八)『怛姪他　補澁閉。蘇補澁閉。度麼鉢喇訶囇。阿囇耶鉢喇設悉帝。扇帝。涅目帝。忙揭例。窣都帝。悉哆鼻帝。莎訶。』

爾の時復た諸大龍王あり。所謂(九)末那斯龍王、電光龍王、無熱池龍王、電舌龍王、妙光龍王なり。倶に座より起ちて合掌恭敬し、佛に白して言さく、『世尊我亦如意寶珠陀羅尼あり、能く惡電を遮ぎ

【六】Vajrśani 金剛士星の呪。
【七】Tadyathā vini variṇi vandhamadaṇḍe maṇinetini gauri caṇḍali mātaṅgi pukkasi saraprabha hinamatya tama uttaraṇi mahāraṇi dhāraṇiku cakravāke śavari śavari svāhā.
【八】Tadyathā puṣpe supuṣpe duma panihare āryapariśasiddhe śānti ninimukte maṅgalye surute siddhavite svāhā.
【九】Manasi.

り、諸の恐怖を除き、能く人天に於て大利益を爲し、世間を哀愍し、一切を擁護し、大威力ありて、求むる所、願の如く、乃至枉死悉く皆遠離し、一切の毒藥皆止息せしめ、一切造作の蠱道・呪術・不吉祥の事、悉く除滅せしむ。我今此神呪を以て世尊に獻じたてまつる。唯願くは哀愍し慈悲もて納受し給へ。我等をして此龍趣を離れしめ、永く慳貪を捨てしむべし。何を以ての故に、此慳貪に由りて、生死の中に於て諸の苦惱を受くればなり。我等願くは慳貪の種子を斷せん。』即ち呪を説いて曰く、

〔10〕『怛姪他。阿折囇。阿末囇。阿蜜㗚帝。惡叉褱。阿弊褱。奔尼鉢喇耶法帝。薩婆波跛。鉢喇苫摩尼褱。阿離褱。般豆。蘇波尼褱、莎訶。』

世尊若し善男子善女人ありて、口の中に此の陀羅尼明呪を説き、或は經卷に書して、受持し・讀誦し・恭敬し供養せば、終に雷電霹靂及び諸の恐怖苦惱憂患なく、乃至枉死皆悉く遠離し、所有の毒藥・蠱魅・厭禱・人を害する虎・狼・師子・毒蛇の類、乃至蚊虻も悉く毒を爲さじ。』

爾の時世尊、普く大衆に告げたまはく、『善哉善哉、此等の神呪皆大力あり。能く衆生の心に隨ひて求むる所の事悉く圓滿ならしめ、大利益を爲す。至心ならざるを除く。汝等疑ふこと勿れ。』

時に諸の大衆、佛語を聞き已りて、歡喜信受しぬ。

【10】 Tadyathā acale amale amṛte akṣaye abhaye puṇya paryāpte sarvapāpa-praśama-niye aliye pāṇḍu suparṇiye svāhā.

大辯才天女品第十五の一

爾の時大辯才天女、大衆の中に於て卽座より起ちて、佛足を頂禮し、佛に白して言さく、『世尊、若し法師あり、是金光明最勝王經を說くものは、我當にその智慧を益し、言說の辯を具足莊嚴すべし。若し彼の法師この經の中に於て、文字句義を忘失する所あらば、皆な憶持して、能く善く開悟せしめ、復た陀羅尼總持の無礙を與へん。又この金光明最勝王經は、彼の有情の已に百千佛の所に於て、諸の善根を種ゑて、當に受持すべきものの爲に、贍部洲に於て、廣く行はれ流布して、速かに隱沒せざらしめん。復た無量の有情是經典を聞くものをして、皆不可思議の捷利の辯才と無盡の大慧とを得しめ、善く衆論及び諸の技術を解せしめん。能く生死を出て、速に無上正等菩提に趣かしめん。現世の中に於ては、壽命を增益し、資身の具、悉く圓滿ならしめん。

世尊、我當に彼の持經法師及び餘の有情の此經典に於て、樂ひて聽聞するものの爲に、其呪藥洗浴の法を說かん。彼の人の所有、惡星災變、初生時に與へし星屬の相違、疾病の苦、鬪諍・戰陣・惡夢・鬼神・蠱毒・厭魅・呪術・起屍、是の如きの諸惡の障難をなすもの、悉く除滅せしめん。諸の有智のもの、應に是の如き洗浴の法を作すべし。

當に香藥(二)三十二味を取るべし。所謂

(一)菖　蒲(跋者)

(二)牛　黃(瞿盧折那)

(三)苜蓿香(塞畢力迦)

(四)麝　香(莫訶婆伽)

(五)雄　黃(末捺眵羅)

(六)合　昏(尸利灑)

(七)白　及(因陀羅喝悉多)

(八)芎　藭(闍莫訶)

(九)苟杞根(苫弭)

(一〇)松　脂(室利薜瑟得迦)

(一一)桂　皮(咄者)

(一二)香附子(目窣哆)

(一三)沈　香(惡揭嚕)

(一四)栴　檀(栴檀娜)

(一五)零婆香(多揭羅)

(一六)丁　子(索瞿者)

(一七)鬱　金(茶矩麼)

(一八)婆律膏(揭羅婆)

(一九)葦　香(捺剌柁)

(二〇)竹　黃(鶻路戰娜)

(二一)累豆蔻(蘇泣迷羅)

(二二)甘　松(弭苦哆)

(二三)藿　香(鉢怛羅)

(二四)茅根香(嗢尸羅)

(二五)叱　脂(薩洛計)

(二六)艾　納(世黎也)

(二七)安息香(窶具羅)

(二八)芥　子(薩利殺跛)

(二九)馬　芹(葉婆儞)

(三〇)龍華鬚(那伽鷄蘇羅)

【一】括弧中の梵號對譯は義淨譯本に擧ぐる所今研究家の便を圖り玆に梵土の正音を出す、但し梵本は其序次異れるのみならず又其名數頗少なし且つ此藥味の部分は全體韻文なり。隨て本譯に存して梵本に之なきもの少からず。此等今對譯に依りて略正音を擧ぐ。中に譯と名と符合せざるもの一二之あり。他日精攷すべし。

1 Vacā.
2 Gorocanā. (牛の膽石)
3 Sephalikā(Vitex Negnus)
4 Mahābhāgā.
5 Manaśilā.
6 Sīrīṣa.
7 Indrahasta.
8 Śyāmāka (Panicum frumentaraum)
9 Śami.
10 Śri-vibhitaka(Terminalia Bellerica)川練を正とす。今の漢譯稱疑ふべし、松脂は別字なればなり。
11 Tvaca.
12 Musta.
13 Agaru.

(三二)白　膠(薩折羅娑)　(三三)青　木(矩瑟多)皆等分

(三四)布灑星の日を以て一處に擣き篩ひて、其香末を取れ、當に此呪を以て呪すること一百八遍すべし。呪に曰く、

(三五)「怛姪佗。蘇訖栗帝。訖栗帝・訖栗訖栗計。劫摩多里。繕怒羯爛滯。羯羯喇帝。因陀羅闍利膩。鑠羯囒帝。鉢設姪囇。阿伐底。羯細計娜。矩覩。脚迦鼻麗。劫鼻囇。劫鼻囇。劫毗羅末底。尸羅末底。删底度囉末底。波伐矩。畔稚囇。室囇室囇。薩底悉體羝。莎訶。」

若し如法に洗浴せんことを樂ふときは、應に壇場の方、八肘なるを作るべし。寂靜安隱の處に於て、求むる所の事を念じ、心を離れざるべし。

(四)牛糞を塗りて其壇を作り、上に於て普く諸の彩華を散ずべし。當に淨潔の金銀の器を以て、美味幷に乳蜜を盛り滿つべし。彼の壇場に於て、四門の所、四人守護すること、法、常の如く、四童子をして身を好嚴せしめ、各一角に於て瓶水を持せしめよ。此に於て常に安息香を燒き、五音の樂聲絶えず、旛蓋莊嚴し、繒綵を懸けて、壇場の四邊に安在し、復た場內に於て明鏡と利刀と兼ねて箭と各四枚を置き、壇の中心に於て、大盆を埋め、

---

14 Candana.
15 Tagara.
16 丁子は別の梵語あり。此名未だ考へず。
17 Kuṅkuma.
18 Gālava. 刊本娑字は婆字の誤。
19 Naradaṃṣa.
20 可洪音義によれば第四の重出、Gorocanā. 竹黃は牛黃の誤。
21 Sukumārā. 諸種の花の名
22 misi (anta は韻文の都合字附せり)
23 Patna.(葉に香ある植物)
24 Uśīra.
25 Sallaki.
26 Saileya.
27 Guggula.
28 Sarṣapa.
29 Sophaghni (?) 或は婆字娑字とせば Soṣaṇi(Bignonia indica) 最も親し。
30 Nāgakeśala.
31 Sarjarasa.
32 Kuṣṭha.

【三】Puṣya. 鬼宿相値の日、印度人此星日を以て吉辰とす。

漏版を以て其上に安くべし。前の香抹を用ひて湯に和し、壇内に安在すべし。既に斯の如く布置を作し已り、然して後に呪を誦して、其壇を結べ。結界の呪に曰く。

(五)「怛姪他。頞喇計。娜也泥。呬麗。弭麗。祇麗。企企麗。莎訶。」

是の如く結界し已りて、方に壇の内に入り、水を呪すること三七徧。四方に散灑し、次に香湯を呪し、一百八徧を滿ずべし。四邊に幔障を安じ、然る後に、身を洗浴し、水を呪し、湯を呪せよ。呪に曰く、

(六)「怛姪他。索揭智。毗揭智。毗揭荼。伐底。莎訶」

若し洗浴し訖らば、其洗浴の湯、及び壇場中の供養の飲食は河池の内に棄て、餘は皆收め攝せよ。是く如く浴し已りて、方に淨衣を著し、既に壇場より出で、(七)淨室の内に入り、呪師は其をして、弘誓願を發し、永く衆惡を斷じ、常に諸善を修せしめ、諸の有情に於て、大悲心を興さしむべし。此因緣を以て、當に無量隨心の福報を獲べし。』

復た (八)頌を說いて曰く、

『「若し病苦の諸の衆生ありて、種種の方藥もて治するに差えずとも、若し是の如きの洗浴法に依

【三】 Tadyathā sukṛtikṛtia kṛkṛke kāmatale jankarati ukarati indrajali ni śakarante vācacile abanti [ka] kasikena kudu [kudu] …khakavile kapile kapile kapilamati śīlamati sandhiduramati paba-[da]ka bhaṇcile Śire Śile satyasthite svāhā.

【四】 牛糞塗抹は印度祭法の古俗なり。前を見よ。

【五】 Tadyathā anrake nayane hile mile gile kikile svāhā.

【六】 Tadyathā sugati vigati vigaca vade svāhā.

【七】 此れ利他饒益の大精神あり、方めて正法たり得べし、然らずんば呪法渾て古印度の魔術に過ぎず。

【八】 三頌呪法の效驗を說く。

り、幷に復たこの經典を讀誦して、常に日夜に於て念散せず、專想慇懃に信心を生せば、所有の患苦盡く消除し、貧窮を解脫し財寶足り、四方の星辰及び日月、威神もて擁護し延年を得て、吉祥安隱にして福德增し、災變厄難皆除き遣らん。」

次に護身の呪を誦すること三七徧せよ。呪に曰く、

(九)「怛姪他。三謎。毗三謎。莎訶。索揭滯。毗揭滯。莎訶。伐底。莎訶。娑揭囉。三步多也。莎訶。塞建陀。摩多也。莎訶。尼攞建佗也。莎訶。阿鉢囉市哆。毗梨耶也。莎訶。泗摩槃哆。三步多也。莎訶。阿儞蜜羅薄怛囉也。莎訶。南謨薄伽伐都。跋囉蚶摩寫。莎訶。南謨薩囉酸底。莫訶提鼻裔。莎訶。悉甸都。漫。（此云成就我某甲）曼怛囉鉢柁。莎訶。怛喇都。毗姪哆。跋囉蚶摩奴末覩。莎訶。」』

爾の時大辯才天、洗浴法壇場の呪を說き已り、前みて佛足を禮し、佛に白して言さく、『世尊、若し苾芻・苾芻尼・鄔波索伽・鄔波斯迦ありて、この妙經王を受持し讀誦し書寫し流布し、如說に行ぜんものは、若は城邑聚落曠野山林僧尼の住處にあらんに、我この人のために、諸の眷屬を將ゐて、天の伎

【九】 Tadyathā samme visamme svāhā, sugate vigate svāhā, Sāgara-[pamgaci] vati svāhā, Skandi saṃbuddhayā svāhā, nīlakaṇṭāyasvāhā, aparajita viryayasvāhā, mātaya svāhā, himavantāya svāhā, animilavākṭāya svāhā, namo bhagavate Brahmaṇi svāhā, namo Sarasvati mahā devye svāhā, siddyantu māṃ mantrapāda svāhā, d'arata vicito Brahmāni manora [thavrto] svāhā.
梵本また此呪を擧ぐるも頗る異なる所あり、今對照を略す。

樂をなし、その所に來詣して擁護し、諸の病苦・流星・變怪・疾疫・鬪諍・王法の拘ふる所、惡夢・惡神障礙をなすもの、蠱道厭術悉くみな除き殄くし、是等持經の人、苾芻等の衆及び諸の聽者を饒益して、皆速かに生死の大海を度りて菩提を退せざらしめん。』

爾の時世尊、この說を聞き已りて、辯才天女を讃じて言はく、『善哉・善哉・天女、汝能く無量無邊の有情を安樂利益し、この神呪及び香水壇場の法式を說く。果報難思なり。汝當に最勝經王を擁護して隱沒せしむるなく、常に流通することを得しむべし。』

爾の時に大辯才天女、佛の足を禮し已りて本座に還復しぬ。

爾の時に〔10〕法師授記憍陳如婆羅門、佛の威力を承け、大衆の前に於て、辯才天女を讃請して曰く、

『聰明勇進なり辯才天、人天の供養悉く應に受くべし。名は世間に聞えて徧く充徧す。能く一切衆生の願を與ふ。

高山の頂なる勝住處に依り、茅を葺きて室となし中にありて居す。恒に輭草を結びて以て衣とし、在處常に一足を翹ぐ。

諸天大衆皆來集し、咸く同く一心に讃請を伸ぶ。唯願くは智慧辯才天、妙言辭を以て一切に施せ。』

爾の時辯才天女、卽ち請を受けて、爲に呪を說いて曰く、

【10】 Ācārya vyākaraṇa Kauṇḍinya.

〔二〕『怛姪他。慕囇只囇。阿伐帝。阿伐吒伐底。馨遇隸。名具隸。名具羅伐底。鴦具師。末唎只。三末底。毗三末底。毗王末底惡近唎莫唎。怛囉只。怛羅者伐底。質質里。室里密里。末難地。曇末唎只。八囉拏畢唎裔。盧迦逝瑟跐盧迦失囉瑟耶。盧迦畢唎裔。悉馱跋唎帝。毗麼目企。輸只折唎。阿鉢唎底喝帝。阿鉢唎底喝哆勃地。南母只南母只。莫訶提鼻。鉢唎底近唎昏拏。南無塞迦囉。我某甲勃地達哩奢呬。勃地阿鉢唎底喝哆。婆跋覩。市婆謎。輸姪覩。舍悉怛囉輸路迦。曼怛囉畢得迦。迦婢耶地數。恒姪他。莫訶鉢喇婆鼻。呬里。密里密里。毗折喇覩。謎勃地。我某甲勃地輸提。薄伽伐點提毗𤧬。薩羅酸點。羯羅帝。雞由囉。雞由羅末底。呬里密里。呬里密里。阿婆訶耶弭。莫訶提鼻。勃陀薩帝娜。達磨薩帝娜。僧伽薩帝娜。因陀羅薩帝娜。跋嚕拏薩帝娜。裔。路雞。薩底婆地娜。羝釤。薩帝娜。薩底伐者泥那。阿婆訶耶弭。莫訶提鼻。呬里密里。呬里密里。毗折喇覩。我某甲勃地。南謨薄伽伐底。莫訶提鼻。薩囉酸底。悉甸覩。曼怛囉鉢陀彌。莎訶。』

爾の時大辯才天女、この呪を說き已りて、婆羅門に告げて言はく、『善哉、

【二】 Tadyathā miri cyore avaje avajevati hiṅgule miṅgule piṅgalevati ankhuṣa māricye saṃmati visaṃmati[daśamati] agrati makhye taraci taracivati cirsi ciri śirimiri manandhi damakhe mārīcye praṇāpārye lokajyeṣthā loka Śneṣtha lokāvīrye siddha parate bhīmamukhi śuci carī apratihate apratihata buddhi namuci [mahā] namuci mahādevye pratigraha namaskāra mama buddhi darśaki (drasiki) buddhi apratitaha bhavatu siahame viśuddha cito Śastrasleka mantrapiṭaka kapiyadiśo tadyathā mahāprabhava bili mili vicaratu vibuddhi mama buddhi [vi] śuddhi bhagavatye deveyaṃ Sarasvatiṃ karati keyuramati hiri miri hiri miri abhaya me mahādevi

大士、能く衆生のために、妙辯才及び諸の珍寶・神通・智慧を求め、廣く一切を利して速かに菩提を證せしむ。

是の如く應に受持の法式を知るべし。』即ち頌を說いて曰く、

『先づこの陀羅尼を誦して、純熟して謬失なからしむべし。三寶と諸の天衆とに歸敬して、加護を請ひ求め願くは心に隨はんと。

諸佛及び法寶と菩薩と、獨覺と聲聞衆とを禮敬し、次に梵王幷びに帝釋、及び護世者の四天王とを禮せよ。

一切常に梵行を修せん人は、悉く至誠慇重に敬すべし。寂靜の蘭若處に於て、大聲に前の呪讚の法を誦すべし。

佛像と天龍(の像)の前に於て、其所有に隨ひて供養を修すべし。彼一切衆生の類に於て、慈悲哀愍の心を發起すべし。

世尊妙相紫金の身を、想を懸けて正念に心亂るるなかれ。世尊護念して敎法を說き、彼の根機に隨ひて定を習はしむ。

其の句義に於て善く思惟し、(三)復た空性によりて修習し、世尊の形像の前にありて、一心正念に安坐すべし。

buddha-satyena dharma-satyena saṅghasatyena Indrasatyena Varuṇasatyena ye lokye satya satyena teṣāṃ satyena satyavacāniya abhaya me mahādevi hili mili hili mili vicaratu mama buddhi namo bhagavati mahādeve Śarasvatya siddyantu mantra padame svāhā!.

【三】 此空性思念あり、呪術壇法正法たるを失はず。

即ち妙智三摩地を得て、幷びに最勝の陀羅尼を得ん。如來の金口は妙法を演べたまひ、妙響諸の人天を調伏す。
舌相は緣に隨ひて希有を現じ、廣長にして能く三千界を覆ふ。是の如き諸佛の妙音聲、至誠に憶念して心に畏るるなかれ。
諸佛皆弘願を發したまへるに由りて、此舌相の不思議を得たまへり。諸法は皆有にあらずと宣說し、譬へば虛空の著する所なきが如し。
諸佛の音聲と及び舌相と、繫念し思量して圓滿ならんことを願へ。
若し辯才天を供養するを見、或は弟子の師の敎に隨ひて、此祕法を授けて修學せしむるを見て、尊重せば心に隨ひて皆成ずることを得ん。
若人最上智を得んと欲せば、應に一心に此の法を持すべし。福智と諸の功德とを增長し、必定して成就せん、疑を生ずるなかれ。
若し財を求めんものは多財を得、名稱を求むるものは名稱を獲、出離を求むるものは出離を得ん、必定して成就せん、疑を生ずるなかれ。
無量無邊の諸の功德、其内心の所願に隨ひて、若しよく是の如く依行する者は、必ず成就を得ん、疑を生ずるなかれ。

淨處に於て淨衣を著すべし。壇場を作り大小に隨ふべし。四淨瓶を以て美味を盛り、香華の供養時に隨ふべし。

諸の繒綵と幷びに旛蓋をかけ、塗香と抹香もて遍く嚴飾し、佛及び辯才天に供養し、天身を見んことを求めば皆願を遂げん。

三七日前の呪を誦して、大辯天と佛との前に對すべし。若この天神を見ずんば、更に心を用ひて九日を經べし。

後夜の中に於て猶見ずんば、更に淸淨勝妙の處を求めて、如法に辯才天を畫き、供養し誦持し心に捨つるなかるべし。

晝夜に懈怠を生ぜず、自利し利他して窮盡するなく、獲る所の果報を羣生に施せば、求むる所の願に於て皆成就せん。

若し意を遂げずんば、三月・六月・九月・或は一年を經て、慇懃に求め請ひて心移らざれば、天眼と他心と皆悉く得ん。』

【三】二十二頌。大體は大史詩摩訶婆羅多の突伽 Durgā 女神の讚文を取りて敷衍せり。

爾の時憍陳如婆羅門、是說を聞き已りて、歡喜し踴躍し、未曾有なりと歎じ、諸の大衆に告げて、是の如きの言をなす、『汝等人天一切の大衆よ、是の如く應に知るべし。皆一心に聽け。我今更に世諦の法に依りて、彼の勝妙の辯才天女を讚ぜんと欲す。』卽ち（三）頌を說いて曰く、

『世界の中に於て自在を得たる、天女（一四）那羅延を敬禮す。我今彼の尊者を讃歎する、（一五）皆往昔の仙人の説の如くならん。

吉祥成就し心安隱に、聰明に慚愧ありて名聞あり。母となりて能く世間を生じ、勇猛にして常に大精進を行ず。

軍陣の處に於て戰ひて恒に勝ち、長養し調伏して心慈忍なり。現じて（一六）閻羅の長姉となりて、常に青色の野蠶衣を著す。

好醜の容儀皆な具有し、眼目よく見るものをして怖れしむ。無量の勝行世間に超え、歸信の人咸く攝受す。

或は山巖の深險なる處にあり、或は坎窟及び河邊に居り、或は大樹諸の叢林に在り、天女多くは此中に依りて住す。

假使ひ山林野人の輩も、亦常に天女を供養す。孔雀の羽を以て幢旗を作り、一切の時に於て常に世を護る。

師子・虎・狼恒に圍繞し、牛羊雞等亦相依る。大鈴鐸を振ひて音聲を出だし、（一七）頻陀山の衆も皆響を聞く。

（一八）或は三戟を執りて頭に髻を圓くし、左右に恒に日月の旗を持つ。黒月の九日と十一日、この時

【一四】Nārāyaṇī（毘紐天后）
【一五】摩訶婆羅多其他の古典に天女を讃したるを指す。
【一六】Yāma 天の妹。
【一七】Vindya 印度南方の大山脈にして鬼神特に夜叉神の集まる所と信ぜらる。
【一八】此形大自在天の變身なり。

の中に於て當に供養すべし。

或は(二九)婆蘇大天の妹と現じて、闘戦あるを見て心常に愍れむ。一切の有情の中を觀察するに、天女は最勝にして過ぐるものなし。

權に(三〇)牧牛の歡喜女と現じ、天と戰ふとき常に勝つことを得。能く久しく世間に安住し、(三一)亦和忍及び暴惡となる。

大婆羅門(三二)四明の法、幻化の呪等悉く皆な通じ、天仙の中に於て自在を得、能く種子及び大地と爲る。

諸の天女等の集會するときには、大海の潮の如くに必らず來應す。

諸の龍神藥叉衆に於て、或は上首となりて能く調伏す。

諸女の中に於て最も梵行あり、言を出だすこと猶世間の主の如し。王の位處に於いて蓮華の如く、若し河津にあれば橋栰に喩へん。

面貌は猶盛滿月の如く、多聞を具足し依處となり、辯才勝れて出づる高峯のごとく、念ずるものには皆與に洲渚となる。

阿蘇羅等の諸の天衆、咸く共に其功德を稱讚す。乃至千眼帝釋主も、慇重の心を以て而も觀察す。

衆生もし希求の事あれば、悉く能く彼をして速に成することを得しめ、亦聰辯にして聞持を具せ

【二九】Vāsudeva クリシュナの父として史詩及神傳に軍神として有名なる神。

【三〇】Gopinandā

【三一】和忍と暴惡の二形は印度婆羅門密教の右左の二女神形にして、攝取と調和とを代表す。例せば吉祥天と突伽女神との如し。

【三二】四圍陀典を云ふ所謂Rig讃誦、Yajur祭祀、Sāma歌詠、Atharva禳災の四大聖典なり。

しめ、大地を持する中に第一たり。

此十方世界の中に於て、大燈明の如く常に普く照し、乃至神鬼諸の禽獸にも、咸く皆彼の求むる所の心を遂げしむ。

諸女の中に於て山峯の如し、昔の仙人の久しく世に住したるに同じ。少女天の如く常に欲を離れ、實語は猶し(三三)大世主の如し。

普く世間の差別の類、乃至欲界諸の天宮を見るに、唯天女の獨り尊を稱するあり、有情の能く勝るるものを見ず。

若し戰陣恐怖の處に於て、或は火坑の中に墮在するを見、河津の險難と賊盜の時、能く彼をして恐怖を除かしむ。

或は王法に枷縛せられ、或は怨讎のために殺害を行せらるる、若し能く專注に心移らざれば、決定して諸の憂苦を解脱せん。

善惡の人に於て皆擁護し、慈悲愍念して常に現前す。是故に我至誠心を以て、大天女に稽首し歸依す。』

爾の時に婆羅門復た呪讚を以て、天女を讚じて曰く、

『世間の尊を(三四)敬禮し敬禮す。諸母の中に於て最も勝れたり。三種の世間咸く供養し、面貌容儀

【三三】Mahāprajāpati. 刊本の大世王の王字は主に作るを可とす。

【三四】梵語の讚文中この重語の Namo namos の例往往あり。

人觀んことを樂ふ。
種種の妙徳を以て身を嚴り、目は修廣の靑蓮葉の如し。福智と光明と名稱との滿ちたること、譬へば無價の摩尼珠の如し。
我今最勝者を讚歎す、悉く能く所求の心を成辦せよ。眞實の功徳は妙にして吉祥なり、譬へば蓮華の極めて清淨なるが如し。
身色の端嚴は皆見んことを樂ひ、衆相希有にして不思議なり。能く無垢の智光明を放つ。諸念の中に於て最勝たり。
猶師子の獸の中の上たるが如し、常に八臂を以て自ら莊嚴し、各弓と箭と刀と矟と斧と、長杵と鐵輪と幷に羂索とを持す。
端正にして觀るを樂ふ滿月の如し、言詞は滯るなく和音を出す。若し衆生ありて心に願求せば、善士は念に隨ひて圓滿ならしむ。
帝釋と諸天と咸く供養し、皆共に歸依すべしと稱讚す。衆徳よく生ずること不思議なり、一切時の中に恭敬を起こせ。莎訶。
若し辯才天を祈請せんと欲せば、此呪讚の言詞の句に依りて、晨朝に清淨至誠にて誦せよ。求むる所の事に於て悉く心に隨はん。」

爾の時佛婆羅門に告げたまはく、『善哉、善哉、汝能く是の如く衆生を利樂し安樂を施與す。彼天女を讃じて加護を請ひ求めば、福を獲ること邊りなからん。』

巻の第八

大辯才天女品第十五の二

爾の時に憍陳如婆羅門、上の讃歎及び呪讃の法を説き、辯才天女を讃じ已り、諸の大衆に告ぐ、「仁等若し辯才天女の哀愍加護を請ひて、現世の中に於て、無礙の辯と聰明大智巧妙の言辭、博綜の奇才、論議の文飾を得て意に隨ひて成就し、礙滯なからんと欲するものは、應に是の如く至誠殷重に請召して曰ふべし、

「南謨佛陀也。南謨達摩也。南謨僧伽也。南謨諸菩薩衆・獨覺・聲聞・一切賢聖。」

「過去現在十方の諸佛、悉く皆已に眞實の語を習ひ、能く隨順して機に當るの實語を説く、虚誑の語なし。已に無量倶胝大劫に於て、常に實語を説き、實語あるものは悉く皆隨喜せり。不妄語を以ての故に、廣長舌を出だし、能く面を覆ひ贍部洲及四天下を覆ひ、能く一千二千三千世界を覆ひ、普く十方世界を覆ひ、圓滿周遍にして不可思議なり、能く一切煩惱の炎熱を除く。敬禮し敬禮す、一切諸佛、是の如き舌相。願くは我某甲、皆微妙の辯才を成就するを得ん。至心に歸命敬禮す。

(一)諸佛の妙辯才、諸大菩薩の妙辯才、獨覺聖者の妙辯才、四向四果の妙辯才、四聖諦語の妙辯才、正行正見の妙辯才、梵衆諸仙の妙辯才、大天(二)烏摩の妙辯才、

(三)塞建陀天の妙辯才、(四)摩那斯王の妙辯才、(五)聰明夜天の妙辯才、四大天王の妙辯才、

善住天子の妙辯才、金剛密主の妙辯才、(六)吠率怒天の妙辯才、(七)毗摩天女の妙辯才、

(八)侍數天神の妙辯才、室唎天女の妙辯才、(九)室則末多の妙辯才、(一〇)醯哩言詞の妙辯才。

(一一)諸母大母の妙辯才、(一二)訶哩底母の妙辯才、諸藥叉神の妙辯才、十方諸王の妙辯才。

所有の勝業我を資助し、無窮の妙辯才を行ぜしめよ。

欺誑なきを敬禮す、解脱者を敬禮す、離欲人を敬禮す、纏蓋を捨てたるを敬禮す。

心清淨を敬禮す、光明者を敬禮す、眞實語を敬禮す、塵習なきを

【一】已下の讃文、諸佛菩薩諸天の妙辯才を讃す。要は上の歸敬文の如く實語を中心とす。實語は是雄辯の本なり。

【二】Umā 毘紐天后。

【三】Skanda 軍神、觀音經に所謂天大將軍なり。

【四】Manasi 龍王。

【五】Rātridevatā 夜神。

【六】Viṣṇu

【七】Bhīmā 大自在天后の一名亦天女の名

【八】Saṃkhyāyanī 天、尚考ふべし。

【九】Śiśumatā 軍神母、天大將軍母。

【一〇】Heli 天女の名。

【一一】史詩の中、諸母天 Mātṛkā を擧ぐ、其數頗る多し。

【一二】Hāritī 鬼子母神。

敬禮す。
勝義に住するを敬禮す、大衆王を敬禮す、辯才天を敬禮す、我が辭をして無礙ならしめよ。
願くは我が所求の事、皆悉く速に成就せん。病なく常に安隱に、壽命延長を得ん。
善く諸の明呪を解し、菩提の道を勤修せん。廣く群生を饒益し、心に求むるの願早く遂げん。
我眞實の語を說く、我無誑の語を說く。天女の妙辯才、我をして成就を得しめよ。
惟願くは天女來り、我語滯りなく、速かに身口の內に入りて、聰明辯才を足らしめよ。
願くは我舌根をして、如來の辯を得しめよ。彼語の威力に依りて、諸の衆生を調伏せん。
我が語を出す時、事に隨ひ皆成就し、聞くもの恭敬を生じ、所作唐捐ならじ。
若し我辯才を求め。事成就せずば、天女の實話、皆悉く虛妄と成らん。
無間の罪を作るあるも、佛語もて調伏せしめん。及び阿羅漢、所有報恩の語、
〔三〕舍利子と目犍連、世尊衆の第一、斯等眞實の語、願くは我皆成就せん。
我今みな佛の、聲聞大衆を召請す。皆願くは速かに來至し、我求むる心を成就し給へ。
求むる所の眞實語、皆願くは虛誑なからん。〔四〕上は色究竟より、及び淨居天、

【三】佛陀高足の二大弟子。智慧と神通との最勝を以て知らる。
【四】色界二十八の諸天衆。

大梵及び梵輔、一切の梵王衆、乃至三千に遍ねき、(二五)索訶世界の衆、
幷びに及び諸の眷屬、我今皆請召す。惟願くは慈悲を降し、哀憐し同く攝受せよ。
(二六)他化自在天、及以樂變化、慈氏の成佛すべき、覩史多天の衆、
夜摩の諸天衆、及び三十三天、四天王衆の天、一切の諸天衆、
(二七)地水火風の神、(二八)妙高山に依りて住せるもの、七海山に住する神、
所有諸の眷屬、滿財及び五頂、日月と諸の星辰、是の如き諸天衆、世間をして安隱ならしむ。
斯等の諸天神は、罪業を作すを樂はず。鬼子母及び、その最小の愛兒を敬禮す。
諸天藥叉衆、乾闥と阿蘇羅、及び緊那羅、莫呼洛伽等、
我世尊の力を以て、悉く皆請召を申ぶ。願くは慈悲心を降し、我に無礙辯を與へよ。
一切人天の衆、能く他心を了ずるもの、皆願くは神力を加へ、我に妙辯才を與へよ。
乃至虛空を盡し、法界に周遍する、所有含生の類、我に妙辯才を與へよ。』

爾の時に辯才天女、是請を聞き已りて、婆羅門に告げて曰く、『善哉大士、若し男子女人ありて、能く是

【二五】梵天王を指す。
【二六】已下欲界六天を請召す。
【二七】已下諸鬼神を擧ぐ。
【二八】妙高山は須彌。七海山は須彌周圍の七重の山と海。滿財（Pūrṇa bhadra）五頂（Pañcasikhi）共に有名なる鬼神。

の如きの呪及び呪讃に依り、前に說く所の受持の法式の如く、三寶に歸仰し、虔心正念ならば、求むる所の事に於て、皆唐捐ならじ。兼ねて復此金光明微妙の經典を讀誦せば、願求する所のもの果遂せざるなく、速かに成就することを得ん。不至心を除く。』時に婆羅門深心に歡喜し合掌頂受しぬ。

爾の時佛辯才天女に告げたまはく『善哉善哉、善女天、汝能く是妙經王を流布し、所有經を受持するものを擁護し、及び能く一切の衆生を利益し、安樂を得しめ、是の如き法を說きて、辯才の不可思議を施與し、福を獲ること量なく、諸の發心の者は速に菩提に趣かしめん。』(一九)

【一九】 此品、雄辯の祈願をなすに當り諸天鬼神を請召し、多神的の傾向あるも、其中心は眞實語の德を述べ、又離欲、解脫、心清淨、無塵習、住勝義を敬禮の目的とす、一五一頁の歸敬文及び一五二頁の終の禮頌、心を潛めて看破せよ。

大吉祥天女品第十六

爾の時（一）大吉祥天女、即座より起ち、前みて佛足を禮し、合掌恭敬し、佛に白して言さく、『世尊、我若し苾芻・苾芻尼・鄔波索迦・鄔波斯迦ありて、受持し讀誦し、人の爲に是金光明最勝王經を解說するものあるを見ては、我當に專心に此等の法師を恭敬供養すべし。所謂（二）飮食・衣服・臥具・醫藥・及び餘の一切の須ふる所の資具、皆圓滿にして乏少あるなからしめん。若は晝、若は夜、この經王所有の句義に於て觀察思量し安樂に住し、この經典をして、瞻部洲に於て、廣行流布せしめ、彼有情已に無量百千佛の所に於て、善根を種ゑたるものの爲に、常に聞くことを得て、速に隱沒せざらしめん。復た無量百千億劫に於て、人天の種種の勝樂を受け、常に豐稔を得、永く饑饉を除き、一切の有情常に安樂を受けしむべし。亦復た諸佛世尊に値遇し、未來世に於て速に無上大菩提を證して、永く三途輪廻の苦難を絕たん。

世尊、我過去を思ふに、（三）瑠璃金山寶華光照吉祥功德海如來應正等覺十號具足したまふあり。我彼の所に於て諸の善根を種ゑぬ。彼如來の慈悲愍念の威神力に依るが故に、我をして今日念處に隨ひ、所觀の方に隨ひ、所至の國に隨ひ、能く無量百千萬億の衆生をして諸の快樂を受けしむ。乃至須ふる

【一】 Śri-mahādevī（スリーマハーデーヴィー）
【二】 所謂四事の供養なり。
【三】 此の梵名下に出す、一五八頁を見よ。

所の衣服飲食資生の具、金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀・眞珠等の寶、悉く充足せしむ。

若復人ありて、至心にこの金光明最勝王經を讀誦せば、亦當に日日衆の名香を燒き、及び諸の妙華もて、我が爲に彼の瑠璃金山寶華光照吉祥功德海如來應正等覺を供養すべし。復應に毎日三時の中に於て我名を稱念すべし。別に香華及び諸の美食を以て、我を供養すべし。我を供養せば亦當に此妙經王を聽受して、是の如きの福を得べし。』而も頌を說いて曰く、

『是の如く能く經を持つに由るが故に、自身と眷屬と諸衰を離れ、所須の衣食乏しき時なく、威光壽命窮盡し難し。

能く地味をして常に增長せしむ、諸天は雨を降らして時節に隨ひ、諸天衆をして咸く歡悅せしむ、及び園林穀果の神、

叢林果樹竝に滋榮し、所有苗稼咸く成就し、珍財を欲求すれば皆願を滿じ、所念者に隨ひて其心を遂げしむ。』

佛、大吉祥天女に告げたまはく、『善哉、善哉、汝能く是の如く昔因を憶念し、報恩供養、無邊の衆生を利益し安樂ならしめ、是經を流布す。功德盡くるなけん。』

大吉祥天女增長財物品第十七

爾の時に大吉祥天女、復佛に白して曰さく、『世尊よ、北方薜室羅末拏天王の城を(一)有財と名づく。城を去ること遠からずして園あり、(二)妙華福光と曰ふ。中に勝殿あり、七寶の所成なり。世尊、我常に彼に住す。若し復人ありて、五穀日日に增多し、倉庫盈溢せんと欲求するものあらば、應に敬信の心を發起して、一室を淨治し、瞿摩を地に塗るべし。應に我像を畫き種種の瓔珞もて周帀莊嚴すべし。當に身を洗浴して、淨き衣服を著し、塗るに名香を以てし、淨室の内に入り、心を發し、我が爲に、每日三時に彼の佛名、及び此經の名號を稱して禮敬を申ぶべし、(三)「瑠璃金山寶華光照吉祥功德海如來に南謨し、諸の香華及び種種甘美の飲食を以て、至心に奉獻し、亦香華及び諸の飲食を以て、我像に供養し、復た飲食を持して餘方に擲ち、諸の神等に施こし、實言もて大吉祥天を邀へ請じ、所求の願を發し、若し言ふ所の如く是虛しからずんば、我が請ふ所に於て空爾ならしむること勿れ」と。時に大吉祥天女是事を知り已り、便ち愍念を生じ、其宅中の財穀をして增長せしめんとす。卽ち當に呪を誦して我を請召し、先づ佛名及び菩薩の名字を稱すべし。

【一】Alakavatī（阿拏迦嚩帝）。この多聞天王宮城のことは毘沙門天王經の細說を見るべし但し有財は義譯ならん。

【二】Puṣpakusumaprabha.

【三】Ratnakusumaguṇasāgara-vaiḍūryakanakagiri suvarṇa-kāñcanaprabhāsaśrī.

「一心に敬禮す南謨一切十方三世諸佛。㈣南謨寶髻佛。南謨無垢光明寶幢佛」。南謨金幢光佛。南謨百金光藏佛。南謨金蓋寶積佛。南謨金華光幢佛。南謨大燈光佛。南謨大寶幢佛。南謨東方不動佛。南謨南方寶幢佛。南謨西方無量壽佛。南謨北方天鼓音佛。南謨妙幢菩薩。南謨金光菩薩。南謨金藏菩薩。㈤南謨常啼菩薩。南謨法上菩薩。南謨善安菩薩。」

是の如く佛菩薩を敬禮し已り、次に當に呪を誦して、我が大吉祥天女を請召すべし。此呪の力に依りて、求むる所の事、皆成就することを得ん。』

即ち呪を説きて曰く、

㈥『南謨室唎莫訶天女。怛姪他。鉢唎哺喇拏折羅。三曼頞。達唎設泥。莫訶毗訶囉揭帝」三曼哆。毗曇末泥。莫訶迦里也。鉢喇底瑟侘鉢泥。薩婆頞佗娑彈泥　蘇鉢喇底哺囇。痾耶娜達摩多。莫訶毗倶比帝。莫訶迷咄嚕。鄔波僧咽羝。莫訶頡唎使。蘇僧近里咽底。三曼多頞侘。阿奴波喇泥。莎訶。」

世尊若人あり、是の如き神呪を誦持し、我を請召せんとき、我請を聞き已り、即ち其所に至り、願をして遂ぐるを得しめん。世尊、この ㈦灌頂法の句、

【四】梵文は唯八佛四菩薩を擧ぐ。今譯の十二佛六菩薩と異なるも梵名あるもの左の如し。Ratnaśikhi (寶髻) Suvarṇaratnākaracchatra-kūṭa.(金蓋寶積)。Suvarṇapuṣpāñjairaśmiketu.(金華光幢)。Mahāpradīpa.(大燈光)。之に四方四佛を列す、菩薩は Ruciraketu.(妙幢)。Suvarṇaprabhottama.(金光)。Suvarṇagarbha.(金藏)。Dharmodgata.(法上)

寶髻佛の名は諸經に見ゆるも大寶幢佛に至る七佛は未だ其名を檢せず、五佛は常に云ふ所の如し。

【五】常啼・法上の二菩薩は、般若に出づ、特に此二者を出したる般若との關係深きを見るべし。

【六】此咒西藏本と稍異なる所

定成就の句、眞實の句、無虚誑の句、是平等行なり、諸の衆生に於てこれ正善根なり。若し呪を受持し讀誦するあらんものは、七日八夜八支戒を受くべし。晨朝の時に於て先づ齒木を嚼み、淨く澡漱し已り、晡時に及びて、香華もて一切諸佛に供養し、〔八〕自ら其罪を陳じ、己が身及び諸の含識のために、廻向發願し、希求する所をして速かに成就することを得せしめよ。一室を淨治し、或は空閑の阿蘭若處にありて瞿摩を壇とし、栴檀香を燒きて供養をなし、一勝座を置きて、旛蓋もて莊嚴し、諸の名華を以て壇內に布列せよ。當に至心に前の呪を誦持して、我が至るを希望すべし。我爾の時に於て卽便ち是人を護念し、觀察し、來りて其室に入り、座に就きて坐し、其供養を受けん。是より以後當に彼の人をして睡夢の中に於て我を見るを得しめん。求むる所の事に隨ひ、實を以て告知せば、若は〔九〕聚落・空澤及び僧の住處に、求むる所のものに隨ひて皆圓滿せしめ、金・銀・財寶・牛・羊・穀・麥・飲食・衣服、皆心に隨ひ諸の快樂を受くべし。既に是の如き勝妙の果報を得ば、當に上分を以て三寶に供養し、及び我に施し、廣く法會を修し、諸の飲食を設け、香華を布列すべし。既に供養し已れば、所有供養、之を貨して直を取り、復た我に供養せよ。我常に身を

あり。Namo Śrī-mahādevī tadyathā paripūrṇa-cara Samanta darśani mahāvihāragate samanta pitamamati mahākarya pratiṣṭhapani sarvāntharanam-tunu(?) supratipure ayana-dharmata mahābhāgena mahāmitri upasuphate mahākleśa susamgrhite anupurana svāhā.

【七】六句を以て呪を讚す、灌頂法句は呪の最勝を顯はし、定成就、眞實、無虚誑は呪の力を說き、平等行、正善根は其德用を述ぶ、知り易し。

【八】已下大乘修行の通法、供養懺悔發願廻向等の五悔を略說す、上の品を參照せよ。

【九】聚落は村落の義。

終ふるまで、常に此に住して、是人を擁護し闕乏なからしめん。希求する所に隨ひて悉く皆意に稱はん。(一〇) 亦時時に貧乏を給濟すべし。慳惜にして獨り己が身の爲にすべからず。常にこの經を讀みて、供養して絶えざらしめよ。當に此福を以て普く一切に施し、菩提に廻向し、願くは生死を出でて速かに解脱を得べし。』

爾の時世尊讃じて言はく、『善哉、吉祥天女、汝能く是の如く此經を流布し、不可思議に、自他倶に益す。』

【一〇】此最後の教誡あり方めて増長財物品の深旨那點にあるかを知るべし、徒らに自利の爲にし、無上菩提を欣求せず、五欲生死の快樂を目的とせば、此品畢竟邪法に過ぎず。

堅牢地神品第十八

爾の時、(一)堅牢地神、卽ち衆中に於て座より起ちて合掌恭敬して、佛に白して言さく、『世尊、是の金光明最勝王經、若は現在世、若は未來世、若は城邑・聚落・王宮・樓觀、及び阿蘭若・山・澤・空林に在りて、此の經王流布の處有らば、世尊、われ當に其の所に往詣して供養し、恭敬し、擁護し、流通すべし。若し方處有りて說法師の爲に、高座を敷置し經を演說せば、われ神力を以て本身を現ぜずして、座の所に在りて其の足を頂戴し、われ法を聞くことを得て、深心歡喜し、法味を食することを得て、威光を增益し、慶悅無量にして、自身既に是の如きの利益を得、亦大地をして深きこと十六萬八千踰繕那ならしめて、金剛輪際に至り、其の地味をして悉く皆增益せしめ、乃至四海の所有る土地をして、亦肥濃にして、田疇沃壤常の日に倍勝ならしめん。亦復た此の贍部洲の中の江・河・池・沼・所有る諸樹・藥草・叢林・種種の華・果・根・莖・枝・葉、及び諸の苗稼の形相愛すべく、衆の樂ひ觀る色香具足して、皆受用するに堪へしめん。若し諸の有情にして是の如きの勝飲食を受用せば、長命し、色力諸根安隱にして、光暉を增益し、諸の痛惱無く、心慧勇健にして堪能せざる無からん。又此の大地、凡そ須つ所ある百千の事業、悉く皆周く備はらん。世尊、是の因緣を以て、諸の贍部洲は安隱豐樂、人民熾盛にして諸の衰惱無く、所有る衆生皆安樂を受けん。

【一】Dṛḍhāpṛthivīdevatā.（ドリダープリティギー・デーヴター）

既に是の如きの身心快樂を受け、此の經王に於て深く愛敬を加へ、所在の處皆願くは受持供養し、恭敬し、尊重し、讃歎し、又復た彼の說法の大師法座の處に於て、悉く皆彼に往き、諸の衆生の爲に是の最勝經王を說かんことを勸請せん。何を以ての故に、世尊、此の經を說くに由りて、われ自身及び諸の眷屬咸く利益を蒙り、光暉氣力、勇猛威勢、顏容端正にして倍倍常に勝ればなり。世尊、われ堅牢地神法味を蒙り已りて、贍部洲縱廣七千踰繕那の地皆悉く沃壤し、乃至前の如く所有る衆生をして皆安樂を受けしめん。是の故に世尊、時に彼の衆生我が恩を報せんが爲に是の念を作すべし、われ當に必定して是の經を聽受し、恭敬供養し、尊重讃歎せんと。是の念を作し已りて、卽ち住處より城・邑・聚落・舍・宅・空地・法會の所に詣でて法師を頂禮し、是の經を聽受す。既に聽受し已りて各本處に還り、心に慶喜を生じ、共に是の言を作さん、「我等、今甚深無上の妙法を聞くことを得たり、卽ち是れ不可思議功德の聚を攝受す、經力に由るが故に、我等、當に無量無邊百千倶胝那庾多の佛に値ひ、承事供養したてまつりて、永く三塗極苦の處を離るべし。復た來世百千生中に於て常に天上に生じ、及び人間に在りて諸の勝樂を受けん」と。時に、彼の諸人各本處に還り諸の人衆の爲に是の經王を說く。若しは一喩一品、一の昔因緣、一如來の名、一菩薩の名、一四句の頌、或は復た一句も諸の衆生の爲に是の經典乃至首題名字を說かば、世尊、諸の衆生の所住の處に隨ひて、其の地悉く皆沃壤肥濃して餘の處に過ぎ、凡そ是の土地に生ずる所の物悉く增長滋茂廣大なることを得て、諸の衆生をして快樂を受けし

め・珍財を多饒し、好く惠施を生じ、心常に堅固にして、深く三寶を信せしめん。』

是の語を作し已るや、爾の時、世尊、堅牢地神に告げて曰はく、『若し衆生有りて是の金光明最勝經王乃至一句を聞かば、命終の後當に(二)三十三天及び餘天の處に往生すべし。若し衆生有りて是の經王を供養せんと欲する爲の故に、宅宇を莊嚴し、乃至一傘蓋を張り、一繒旛を懸けば、是の因縁に由りて、(三)六天の上に、念の如く生を受け、七寶の妙宮意に隨ひて受用し、各各自然に七千の天女有りて共に相娛樂して、日夜常に不可思議殊勝の樂を受けん。』是の語を作し已はりたまふや、爾の時に堅牢地神、佛に白して言さく、『世尊、是の因縁を以て、若し四衆にして法座に昇り是の法を説くものある時、われ當に晝夜是の人を擁護し、自ら其の身を隱し座所に在りて其足を頂戴すべし。(四)世尊、是の如きの經典は、彼の衆生の已に百千佛所に於て善根を種ゑたるものの爲に、贍部洲に流布して滅せず。是の諸の衆生にして斯の經を聽く者は、未來世無量百千倶胝那庾多劫、天上人中に於て常に勝樂を受け、諸佛に遇ふことを得て、速に阿耨多羅三藐三菩提を成じ、三途生死の苦を歷じ。』

爾の時に堅牢地神、佛に白して言さく、『世尊、われ心呪有りて能く人天を利し一切を安樂にす。若し男子女人及び諸の四衆有りて、親しくわが眞身を見んことを得んと欲すれば、當に至心に此の陀羅尼

【二】忉利天なり・帝釋天王の所住の天。

【三】六天は欲界の六天にて、四王・忉利・夜摩・兜率、快樂・他化自在天なり。

【四】聖經は唯だ宿植善根、福德深厚の衆生のみ之を聽聞受持するを得べし。

を持すべし。其の所願に隨ひて皆悉く心を遂ぐべし。所謂る資財・珍寶・伏藏なり。及び神通・長年・妙樂、并に衆病を療じ、怨敵を降伏し、諸の異論を制せんことを求むれば、當に淨室に於て道場を安置し、身を洗浴し已りて鮮潔なる衣を著け、(五)草座の上に踞すべし。舍利有る尊像の前に、或は舍利有る(六)制底の所に於て香を燒き、華を散じ、飲食を供養し。(七)白月の八日布灑星と合ふときに於て、卽ち此の請召の呪を誦すべし。

(八)「怛姪佗。只里只里。主嚕主嚕。拘柱拘柱。覩柱覩柱。縛訶縛訶。伏捨、伏捨。莎訶」

世尊、此の神呪、若し四衆ありて一百八遍を誦し、我を請召せば、われ是の人の爲に、卽ち來りて請に赴かん。又復た世尊、若し衆生有りて、わが身を現ずるを見て、共に語るを得んと欲すれば、亦復た前の如く、法式を安置し、此の神呪を誦すべし。

(九)「怛姪他。頞折泥。頡力。刹泥。室哩。尸達哩。訶、訶。呬・呬。區嚕。伐囇。莎訶。」

世尊、若し人此の呪を持する時、一百八遍を誦し、并に前の呪を誦すれば、われ必ず身を現じ、其の所願に隨ひて悉く成就することを得て、終に虛然ならざるべし。若し此の呪を誦せんと欲する時に

【五】草座は普通吉祥茅艸の座を指す。
【六】制底(Caitya)。寶塔なり。
【七】白月(大陰暦の前十五日)の八日は每月必ずしも鬼宿と値はず、其値ひたる日を最上となす。
【八】Tadyathā ciri ciri curu curu [kuru kuru] kutu kutu totu totu bha'a bhaha śavari śavari svāhā.
【九】Tadyathā acani griliga k'anati śira siddhari ha ha hi hi kuru bhāre svāhā.

は、先づ護身呪を誦すべし。曰く、

(10)「怛姪他。儞室里。末捨羯檄。捺檄矩檄。勃地。勃地囇。婢檄婢檄。矩句檄。佉婆只哩。莎訶。」

世尊、此の呪を誦する時、五色の線を取り、呪を誦すること二十一遍、二十一結を作して繫けて左臂の肘の後に在き、卽便ち護身せば懼るるところ有ること無けん。若し至心有りて此の呪を誦せば所求必ず遂げん、われ妄語せず、われ佛法僧の寶を以て而して要契と爲し、是の實なることを證知す。』

爾の時、世尊、地神に告げて曰はく、『善哉善哉、汝能く是の實語神呪を以て、此の經王及び說法する者を護る。是の因緣を以て、汝をして無量の福報を獲得せしめん。』

【10】 Tadyathā niśiri maśakani nati kuti buddhi buddhire biti biti kukuti baciri svāhā.

僧愼爾耶藥叉大將品第十九

爾の時、(一)僧愼爾耶藥叉大將幷に(二)二十八部藥叉諸神は大衆の中に於て、皆座より起ちて偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌し、佛に向ひ白して言さく、『世尊、此の金光明最勝經王、若は現在世及び未來世に、所在宣揚流布の處、若くは城邑聚落、山澤空林、或は王の宮殿、或は僧の住處に於て、世尊、われ僧愼爾耶藥叉大將、幷に二十八部藥叉諸神と倶に其の所に詣りて、各自ら形を隱し、處に隨ひて、彼の說法師を擁護し、衰惱を離れて常に安樂を受けしめん。及び聽法の者、若は男、若は女、童男童女にして、此の經中に於て、乃至一四句頌を受持し、或は一句を持し、或は此の經王の首題名號、及び此の經中の一如來の名、一菩薩の名を發心稱念して、恭敬し供養する者は、われ當に救護攝受して、災橫無く、苦を離れ樂を得しむべし。世尊、何故に我を正了知と名づくる。此の因緣を是れ佛親しく證したまへ。(三)われ諸法を知り、われ一切の法を曉らめ、所有る一切法に隨ひ、所有る一切の法の如く、諸法の種類・體・性を差別せり。世尊、是の如きの諸法、われ能く了知す。(四)我に難思の智光有り、

【一】此藥叉大將の名は、普通Sañjya（サニジャ）とす。今經は特にSañcinjaya（サンチジャヤ）とし、之を正了知と譯せり。

【二】二十八部の鬼神は孔雀王經其他に出づ。

【三】釋家は知と曉とを別ち、前者は後得智の證智、後者は根本智の曉達とす。又隨所有一切法を以て俗諦智とし、如所有一切法を以て眞諦智となせり、如所有性とは蓋し解深密經等に之を勝義性とするに準ず。

【四】●光（Avabhāsa アヴバーサ）●炬（Aloka アーロー カ）●行（Gamana ガマナ）●聚（Skandha スカンダ）の四喩難思の妙智の主觀を擧

我に難思の智炬有り、我に難思の智行有り、我に難思の智聚有り、われ難思の智境に於て能く通達す。世尊、我が如き一切の法に於て、(五)正知し、正曉し、正覺し、能く正觀察す。世尊、是の因緣を以て、われ藥叉大將を正了知と名づく。是の義を以ての故に、(六)われ能く彼の說法の師をして、言辭辯了、具足莊嚴せしめ、亦精氣をして毛孔より入らしめ、身力充足し、威光勇健にして、難思の智光皆成就することを得て、正憶念を得、退屈有ること無く、彼の身を增益し、衰滅無からしめ、諸根安樂にして常に歡喜を生ぜしむ。是の因緣を以て彼の有情、已に百千佛の所に於て諸の善根を植ゑ、福業を修したるものの爲に、贍部洲に於て廣宣流布し、速に隱沒せず。彼の諸の有情、是の經を聞き已りて、不可思議大智の光明及び無量福智の聚を得、未來世に於て當に無量の俱胝那庾多劫不可思量の人天の勝樂を受け、常に諸佛と共に相值遇し、速に無上正等菩提を證すべく、閻羅の界三塗の極苦を復た經過せじ。』爾の時、正了知藥叉大將、佛に白して言さく、『世尊、我に陀羅尼あり、今佛前に對して親しく自ら陳說す。諸の有情を憐愍し、饒益せんと欲するが爲の故に』と。卽ち呪を說きて曰く、

(七)『南謨佛陀耶。南謨達摩耶　南謨僧伽耶。南謨跋囉蚶摩耶。南謨因達囉耶。南謨折咄喃。莫喝囉

げて難思對境の客觀に通達するを說く。

【五】此四に前の智光・智炬・智行・智聚の四を配し見よ。

【六】辯才・益力・威光・增智・念力・不退・增壽・安樂の八益、文に當りて知るべし。

【七】Namo Buddhāya namo dharmāya namaḥ saṃghāya namo Brahmaya namo Indrāya namaḥ caturnāṃ mahārājānāṃ tadyathā hiri hiri mili mili gaurī mahā-gaurī gandhārī mahā-gandhārī drimidi mahādri-midi daṇḍa khukunte hāha hahaha hi hi hi hi hi ho ho ho ho hala dhama kudaṃe ca ca ca ca ci ci ci ci cu cu cu cu caṇḍeśvara śikhara śikhara uttiṣṭhahi bhagavan saṃciñjāya svāhā.

闍喃。怛姪他。呬哩・呬哩。弭哩・弭哩。瞿哩。莫訶瞿哩。健陀里。莫訶健陀里。達羅弭雉。莫訶達羅弭雉。單荼。曲勸第。訶・訶・訶・訶・訶。呬・呬・呬・呬・呬。呼・呼・呼・呼・呼。漢魯雲謎。瞿曇謎。者・者・者・者。只・只・只・只。主・主・主・主・主。旃荼攝鉢攞。尸揭囉。尸揭囉。嗢底瑟佗呬。薄伽梵。僧愼爾耶。莎訶。」

若し復た人有りて、此の明呪に於て、能く受持すれば、われ當に資生の樂具、飮食衣服、華果珍異を給與すべし。或は男女、童男童女、金銀珍寶、諸の瓔珞の具を求むれば、われ皆供給して願求する所に隨ひて、闕乏無からしめん。此の明呪大威力有り。若し呪を誦する時には、われ當に速に其の所に至りて障礙無く、意に隨つて成就せしむべし。若し此の呪を持せん時には、其の法を知るべし。(八)先づ一鋪僧愼爾耶藥叉の形像を畫すること高さ四五尺、手に鉾鑹を執る。此の像前に四方壇を作り、四滿瓶の蜜水、或は沙糖水、塗香・末香・燒香・及び諸の華鬘を安じ、又壇前に地火鑪を作り、中に炭火を安じ、蘇摩芥子を以て鑪中に燒き、口に前呪を誦すること一百八遍、一遍して一燒せよ。乃至われ藥叉大將自ら來り、身を現じて呪人に問うて曰はん、「爾何の須むる所ぞや」と。意に求むる所の者卽ち事を以て答へよ。われ卽ち言に隨ひ、求むる所の事皆滿足せしめん。或は金銀及び諸の伏藏を須め、或は神仙となり、空に乘じて去らんと欲し、或は天眼通を求め、或は他心を知る事、一切の有情に於て意に隨ひて自在に、煩惱を斷じ速に解脱を得、皆成就することを得しめん。』

爾の時、世尊、正了知藥叉大將に告げて曰はく、『善哉善哉、汝能く是の如く一切の衆生を利益し、此の神呪を說き正法を擁護す、福利無邊なり。』

【八】圖像抄第十此藥叉神の形相を擧ぐ。

王法正論第二十

爾の時、此の大地神女、名づけて堅牢と曰ふ。大衆の中に於て、座より起ちて佛足を頂禮し、合掌恭敬して、佛に白して言さく『世尊、諸國の中に於て人王たる者、若し正法無くば、國を治め衆生を安養し、及び自身長く勝位に居ること能はじ。惟願くは世尊、慈悲哀愍して、當に我が爲に王法正論、治國の要を說き、諸の人王をして法を聞くことを得、已に如說に修行して正しく世を化し、能く勝位をして永く安寧を保たしめ、國內の居人をして咸く利益を蒙らしめたまふべし。』

爾の時世尊、大衆の中に於て堅牢地神に告げて曰はく、『汝當に諦聽すべし。過去に王あり、㈠力尊幢と名づく。其の王子あり、名づけて㈡妙幢と曰ふ。㈢灌頂の位を受けて未だ久しからざるの頃、爾の時父王、妙幢に告げて言く、「王法正論あり、㈣天主敎法と名づく。われ昔時に灌頂の位を受けて、而して國王と爲る。我が父王を㈤智力尊幢と名づく。我が爲に是の王法正論を說く。われ此論に依て二萬歲に於て善く國土を治めぬ。われ曾て憶せず、一念心を起して非法を行じぬ。汝今日に於て亦是の如きの非法を以て、國を治むること勿るべし。云何んが名づけて王法正論と爲す。汝今善く聽け、

【一】力尊幢 (Balendraketu)。
【二】妙幢 (Ruciraketu)。
【三】立儲位。
【四】Devendrasmaya. 天主敎法の飜譯は義譯にして、實は天主集會の義なり、下の註を見よ。
【五】智力尊幢 (Jñābalendra-ketu)。

當に汝の爲に說くべし。」爾の時、力尊幢王、卽ち其の子の爲に、妙伽陀を以て正論を說いて曰く、

(六)「われ王法論を說きて、諸の有情を利安す。世間の疑を斷せんが爲に、衆の過失を滅除せん。

一切の諸天王、及び人中の王、當に歡喜心を生じ、合掌して我が說を聽くべし。

(七)往昔諸の天衆、集りて(八)金剛山に在り。四王座より起ちて、大梵に請問す。

梵主最勝尊、天中の大自在、願くは我等を哀愍して、爲に諸の疑惑を斷せよ。

云何んが人世に處して、名づけて天と爲すことを得る。復何の因緣を以て、號名して天子と曰ふや。

云何んが人間に生れて、獨人主と爲ることを得る。云何んが天上に在りて、復た天王と作ることを得るやと。

是の如く(九)護世間、彼の梵王に問ひ已る。爾の時梵天主、卽便ち彼の爲に說く、

(一〇)護世汝當に知るべし、有情を利せんが爲の故に、我に治國の法を問ふ。われ說かん善く聽くべし。

【六】已下五言の頌七十三行あり、正しく梵文と合す、この中二頌は序文なり。

【七】七十一頌正說の中、諸天衆會の中四天王と大梵天王との問答を以て先づ論を起す。是天主集會(Devendrasamaya)の名ある所以なり。

【八】金剛山(Vajraprākaragiri)。世界の外側にある大山。

【九】護世間(Lokapāla)。卽四王。

【一〇】護世。前と同じ。

先の善業の力に由りて、天に生じて王と作ることを得。若し人中に在りては、統領して人主と爲る。

諸天共に加護し、然して後ち母胎に入り、既に母胎の中に至れば、諸天復た守護す。

(一)生れて人世に在りと雖も、尊勝の故に天と名く。諸天護持するに由りて、亦天子と名づくることを得。

三十三天の主、力を分ちて人王を助け、及び一切の諸天も、亦自在力を資く。

諸の非法惡業を滅除して、生ぜざらしめ、有情を敎へて善を修せしめ、天上に生ずることを得しむ。

人及び蘇羅衆、幷に健闥婆等、羅刹・旃荼羅、悉く皆半力を資く。

父母半力を資けて、惡を捨て善を修せしめ、諸天共に護持して、其の諸の善報を示す。

若し諸の惡業を造らば、現世の中に於て、諸天をして護持せざらしめ、其の諸の惡報を示す。

國人惡業を造るも、王捨て禁制せざれば、斯れ正理に順ずるに非ず、治擯して當に法の如くすべし。

(二)若し惡を見て遮せずんば、非法便ち滋長して、遂に王の國内をして、奸詐日に增して多からしむ。

【一】人王の尊貴は福力の致す所、人世にあるも尊くして天と同じ、故に印度は王を天と呼ぶ、天子の意義知り易し。

【二】下五十二頌餘は國政の得失により災禍自ら異なるを論ず、其の中三十五頌は正法に違へる結果災禍の至れるを說く、瑜伽論六十一、王法正理論と說相同じ。

王・國中の人の造惡を見て、遮止せざれば、三十三天の衆、咸く忿怒の心を生ず。此に因て國政を損し、諂僞世間に行はれ、他の怨敵に侵され、其の國土を破壞す。居家及び資具、積財皆散失し、種種の諍訨生じて、更互に相侵奪す。正法に由りて王たることを得、而も其の法を行はずんば、國人の皆破散すること、象の蓮池を踏むが如し。

惡風起りて恆無く、暴雨非時に下り、妖星變怪多く、日月蝕して光無し。五穀と衆の華果と、苗實皆成せず、國土饑饉に遇ふ、王の正法を捨つるに由る。若し王正法を捨てて、惡法を以て人を化すれば、諸天本宮に處し、見已りて憂惱を生ず。彼の諸の天王衆、共に是の如きの言を作す。此の王非法を作し、惡黨相親附し、王位久安ならずと。諸天皆忿恨す。彼の忿を懷くに由るが故に、其の國當に敗亡すべし。非法を以て人を敎へ、國内に流行せば、鬪諍して奸僞多く、疾疫衆の苦を生ず。天主護念せず、餘天咸く捨棄し、國土當に滅亡すべし。王身苦厄を受け、父母及び妻子、兄弟幷に姉妹、倶に愛の別離に遭ひ、乃至身は亡歿せん。變怪ありて流星墮ち、二日倶時に出で、他方の怨賊來り、國人喪亂に遭はん。國に重ずる所の大臣、枉横にして身死し、愛する所の象馬等、亦復皆散失せん。

處處に兵戈あり、人多く非法にして死す。惡鬼來りて國に入り、疾疫偏く流行す。
國中の最たる大臣、及び諸の輔相、其の心諂佞を懷き、竝に悉く非法を行ず。
非法を行ずるを見ては、愛敬を生じ、善法を行ずる人に於て、苦楚して治罰す。
惡人を愛敬し、善人を治罰するに由るが故に、星宿及び風雨、皆時を以て行はれず。
(三)三種の過生ずる有り、正法當に隱沒すべし。衆生光色無く、地肥皆下沈す。
惡を敬ひ善を輕んずるに由り、復た(四)三種の過有り、非時に霜雹を降らし、饑疫の苦流行し、
穀稼諸の果實、滋味皆損減し、其の國土の中に於て、衆生疾病多し。
國中の諸の樹林、先に甘美の果を生じたるもの、斯に由りて皆損減し、
苦澁にして滋味無し。
先にありし妙園林、可愛の遊戲處、忽然として皆枯悴し、見る者憂惱を生ず。
稻麥諸の果實、美味漸く消亡して、食する時心喜ばず、何ぞ能く(五)諸大を長せん。
衆生光色減じて、勢力盡く衰微し、食噉復た多しと雖も、飽足せしむること能はず。
其の國界の中に於て、所有る衆生の類、少力にして勇勢無く、所作堪能ならず。
國人疾患多く、衆苦其の身を逼め、鬼魅遍く流行し、處に隨ひて羅刹を生ず。

【三】正法隱沒、有情色なく、地味乾枯す。
【四】非時霜雹、穀稼損減、衆生疾病。
【五】諸大は地水火風の四大にして人體の成分を指す。

若し王非法を作して、惡人に親近すれば、(二六)三種の世間をして、斯に因りて衰損を受けしむ。
是の如きの無邊の過、國中に出在す。皆惡人を見て、棄捨して治擯せざるに由る。
諸天の加護に由り、國王と作ることを得て、而も正法を以て、國界を守護せず。
若し人善行を修すれば、當に天上に生ずることを得べし。若し惡業を造れば、死して必ず三塗に墮す。
若し王・國人を見て、其の過失を造るを縱さば、三十三天の衆、皆熱惱の心を生ず。
諸天の敎及以び、父母の言に順ぜざれば、此は是れ非法の人、王に非ず孝子に非ず。
(二七)若し自國の中に、非法を行ずる者を見ば、法の如く當に治罰すべし、捨棄を生ずべからず。
是の故に諸の天衆、皆此の王を護持す。諸の惡法を滅して、能く善根を修するを以ての故に。
王は此の世の中に於て、必ず現報を招く。善惡の業に於て、行捨を衆生に勸むるに由る。
善惡の報を示さんが爲の故に、人王と作ることを得、諸天共に護持して、一切咸く隨喜す。
自利利他に由り、國を治むるに正法を以てし、諂佞有る者を見ては、當に法の如く治すべし。
假使ひ王位を失ひ、及以び命緣を害すとも、終に惡法を行ぜざれ、惡を見て捨棄せよ。

【二六】三種世間は普通云ふ所の三界なり、又人・畜・百穀を三世間となすの說あり。
【二七】已下十三頌餘、正法を行ずる功德を說く。

害中の極重なる者、國位を失ふに過ぎたるは無し。皆諂佞の人に因る、此の爲に當に治罰すべし。
若し諂誑の人を友とせば、當に國位を失ふべし。斯に由りて王政を損ずること、象の華園に入るが如し。
天主皆瞋恨し、阿蘇羅も亦然り。彼れ人王と爲りて、法を以て國を治めざるを以てなり。
是の故に如法に、惡人を治罰すべし。善を以て衆生を化し、非法に順ぜざれ。
寧ろ身命を捨つとも、非法の友に隨はず、【一八】親及び非親に於て、平等に一切を觀ぜよ。
若し正法の王たらば、國內に偏黨無く、法王名稱有りて、普く三界の中に聞ゆ。
三十三天の衆、歡喜して是の言を作す、「贍部洲法王、彼は卽ち是れ我が子なり。
善を以て衆生を化し、正法もて國を治め、正法を勸行し、當に我が宮に生ぜしむべし」と。
天及び諸天子、及以び蘇羅衆、王の正法の化に因りて、常に心に歡喜を得。
天衆皆歡喜して、共に人王を護り、衆星位に依りて行き、日月乖度無し。
和風常に節に應じ、甘雨時に順ひて行はれ、苗實皆善を成じ、人饑饉の者無し。
一切の諸の天衆、自宮に充滿す。【一九】是の故に汝人王、身を忘れて正法を弘め、

【一八】梵文に依るに親は親屬 bandhujana. を指し、非親は他人 parajana をいへり。
【一九】已下結勸の頌。

法寶を尊重すべし、斯に由りて衆安樂ならん。常に當に正法に親み、功德自ら莊嚴すべし。眷屬常に歡喜し、能く諸の惡を遠離す、法を以て衆生を化し、恒に安隱を得しむ。彼の一切の人をして、十善を修行せしめ、率土常に豐樂にして、國土安寧を得ん。王・法を以て人を化し、善く惡行を調へば、當に好名稱を得、諸の衆生を安樂にすべし。』

爾の時に大地一切の人王、及び諸の大衆、佛の此の古昔人王の治國の要法を說きたまふを聞きて、未曾有なるを得、皆大に歡喜信受し奉行しぬ。

巻の第九

善生品第二十一

爾の時、世尊、諸の大衆の爲に王法正論を說き已りて、復た大衆に告たまはく、『汝等聽くべし、われ今汝が爲に、其の往昔の奉法の因緣を說かん。』卽ち是の時に於て、伽陀を說きて曰く、

[一]『われ昔曾て轉輪王たり、此の大地幷に大海、四洲の珍寶皆充滿するを捨てて、持以て諸の如來を供養す。

われ往昔無量劫に於て、淸淨の眞法身を求めんが爲に、愛する所の物皆悉く捨て、乃至身命も心に悋む無かりき。

又過去難思劫に於て、正遍知有り[二]寶髻と名づく、彼の如來涅槃の後に於て、王有り世に出でて[三]善生と名づく。

轉輪王と爲り四洲を化す、大海際を盡して咸く歸伏せり、城有り名づけて[四]妙音聲と曰ふ、時に彼の輪王此に住す。

夜夢に佛の福智を說きたまふを聞き、法師の[五]寶積と名づくる有るを見るに、處座端嚴にして日

【一】頌文三十二頌あり、正に梵本と合す。
【二】寶髻 (Ratnaśikhi)。
【三】善生 (Susaṃbhava)。
【四】妙音聲 (Jinendraghoṣā)。
【五】寶積 (Ratnoccaya)。

輪の如く、金光微妙の典を演說す。

爾の時に彼の王夢より覺めて、大歡喜を生じ徧身に充つ、天曉に至り已りて王宮を出でて、苾蒭僧伽の處に往詣し、聖衆を恭敬し供養し已りて、卽便ち彼の諸の大衆に問ふ、「頗し法師の寶積と名づけ、功德成就して衆生を敎化する有りや」と。

爾の時に寶積大法師、一室の中に在りて而も住止し、正念にして斯の微妙の典を誦し、端然として動かず身心樂む。

時に苾蒭有り王を引導し、彼の寶積所居の處に至り、室中に在りて端身にして坐するを見るに、光明の妙相其の身に遍し。

王に白さく「此は卽ち是れ寶積なり、能く甚深の佛の行處を持す。所謂る微妙金光明、諸經中の王最第一なり。」

時に王卽便ち寶積を禮し、恭敬し合掌し而して請を致すらく、「唯願くは滿月の面端嚴なるものよ、爲に金光微妙の法を說きたまへ」と。

寶積法師王の請を受け、許して爲に此の金光明を說く、三千世界の中に周遍せる、諸天の大衆咸く歡喜しぬ。

王は廣博清淨の處に於て、奇妙の珍寶而も嚴飾し、上勝の香水もて遊塵に灑ぎ、種種の雜華皆散布す。
卽ち勝處に高座を敷き、繒と旛蓋とを懸けて以て莊嚴し、種種の抹香及び塗香、香氣芬馥として皆周遍す。
天・龍・修羅・緊那羅、莫呼洛伽及び藥叉、諸天悉く曼陀華を雨らし、咸く來りて彼の高座を供養す。
復た千萬億の諸天有り、正法を聞かんことを樂うて倶に來り集る。法師初めて本座より起てば、皆悉く供養するに天華を以てす。
是の時寶積大法師、淨く洗浴し已りて鮮衣を著け、彼の大衆の法座の所に詣り、合掌し虔心にして禮敬す。
天主天衆及び天女、悉く皆共に曼陀華を散らし、百千の天樂思議し難く、空中に在りて住し妙響を出す。
爾の時に寶積大法師、卽ち高座に昇り跏趺して坐し、彼の十方の諸の刹土、百千萬億の大慈尊を念じ、
遍く一切の苦の衆生に及び、皆平等に慈悲の念を起し、彼の請主善生の爲の故に、微妙の金光

明を演說す。

王既に是の如きの法を聞くことを得て、合掌し一心に唱へて隨喜し、法の希有なるを聞き涙交流れ、身心の大喜皆充徧す。

爾の時に國主善生王、此の經を供養せんと欲するが爲の故に、手に如意末尼珠を持し、願を發すらく「咸く諸の衆生の爲にせん。今斯の贍部洲に於て、普く七寶の瓔珞具を雨らす可し、所有る資財を匱乏する者は、皆心に隨ひて安樂を受くることを得ん」と。

卽便ち徧く七寶を雨らし、悉く皆四洲の中に充足し、瓔珞嚴身須ふる所に隨ひ、衣服飮食皆乏しきこと無し。

爾の時國主善生王、此の四洲に珍寶の雨るを見て、咸く持して寶髻佛と、所有る遺敎と苾芻僧とを供養したてまつる。

應に知るべし過去の善生王は、卽ち我れ釋迦牟尼是なり。爲れ昔時に於て、大地及び諸の珍寶の四洲に滿てるを捨てぬ。

昔時の寶積大法師、彼の善生の爲に妙法を說き、彼の經王を開演するに因るが故に、東方にて〔六〕現に不動佛と成りぬ。

【六】阿閦佛と釋尊との關係。寶積諸經を見よ。

われ曾て此の經王を聽けるを以て、合掌して一言隨喜を稱し、及び七寶を施す諸の功德もて、此の最勝の金剛身を獲たり。

金光の百福相莊嚴して、所有る見る者皆歡喜し、一切の有情愛せざる無く、倶胝の天衆亦同く然り。

過去曾て九十九、倶胝億劫を經て輪王と作り、亦小國に於て人王と爲り、復た無量百千劫を經ぬ。無量劫に於て帝釋たり、亦復た曾て大梵王と爲りて、十力の大慈尊を供養す、彼の數量窮盡し難し。

われ昔經を聞きて隨喜せる善、所有る福聚の量知り難し。斯の福に由るが故に菩提を證し、法身眞妙の智を獲得す。」

爾の時、大衆是の說を聞き已りて、未曾有なりと歎じ、皆金光明經を奉持して、流通して絕えざらんことを願ひぬ。

諸天藥叉護持品第二十二

爾の時世尊、大吉祥天女に告げて曰はく、『若し淨信の善男子善女人有りて、過去・未來・現在の諸佛に於て、不可思議廣大微妙の供養の具を以て、而も奉獻せんと欲し、及び三世の諸佛の甚深の行處を解了せんと欲せば、是の人當に決定して至心に是の經王所在の處に隨ひて、城邑聚落、或は山澤の中、廣く衆生の爲に敷演流布すべし。其の法を聽く者は、亂想を除き、耳を攝して心を用ふべし。』世尊、卽ち彼の天及び諸の大衆の爲に、伽陀を說いて曰く、

(一)『若し諸佛に、不思議の供養を施し、復た諸如來の、甚深の境界を了せんと欲する者、

若し此の最勝金光明を、演說するを見ば、親しく彼の方に詣り、其の所住の處に至るべし。

此の經は難思議にして、能く諸の功德を生じ、無邊大苦海に、諸の有情を解脫す。

われ此の經王を觀ずるに、(二)初・中・後皆善なり、甚深にして測るべからず、譬喩するに能く比する無し。

【一】伽陀總て七十九頌あり、大體梵本と一致す。但し梵本は七十四頌あり、文に多少の出入あるを免れず。

【二】初中後善は經を讚歎する常語にて、何れの點も可ならざるなき圓滿の義なり。

假使恒河沙、大地塵・海水、虛空・諸山の石も、能く少分を喩ふる無し。甚深法界に入らんと欲せば、㊂先づ是の經、法性の制底を聽くべし。甚深にして善く安住せり。斯の制底の內に於て、わが牟尼尊、悅意の妙音聲をもて、斯の經典を演說するを見ん。此に由りて、倶胝劫の數量思議し難く、人天の中に生在して、常に勝妙の樂を受けん。

【三】經文を寶塔制底に比す。

若し是の經を聽く者は、是の如きの心を作すべし、「われ不思議、無邊の功德蘊を得ん」と。假使ひ大火聚、百踰繕那に滿つとも、當に此の經王を聽き、直に過ぎて苦を辭する無からん。既に彼の住處に至りて、是の如きの經を聞くことを得ば、能く罪業を滅し、及び諸の惡夢、惡星・諸の變怪、蠱道・邪魅等を除かん。是の經を聞くことを得る時、諸惡皆捨離す。高座を嚴勝にし、淨妙なること蓮華の若くし、法師其の上に處して、猶し大龍の坐するが如くなれ。

斯に於て安坐し已りて、此の甚深の經を說き、書寫し及び誦持し、幷に爲に其の義を解せよ。法師此の座を捨て、餘方の所に往詣せば、此の高座の中に於て、神通一相に非ず。或は法師の像を見るに、猶し高座の上に在るがごとし、或時は世尊、及び諸の菩薩を見ろ。或は普賢の像と作り、或は㊃妙吉祥の如く、或は慈氏尊の身、高座に處するを見、

或は希奇の相、及び諸の天像を見る。暫く容儀を觀ることを得て、忽然として還現せず。
諸の吉祥を成就し、所作皆意に隨ひ、功德悉く圓滿す。世尊是の如く說きたまふ。
最勝の名稱有りて、能く諸の煩惱を滅し、他國の賊皆除き、戰ふ時に常に勝を得ん。
惡夢悉く皆無く、及び諸の毒害を消し、作す所の三業の罪を、經力能く除滅す。
此の贍部洲に於て、名稱咸く充滿し、所有る諸の怨結、悉く皆相捨離す。
設ひ怨敵の至る有りとも、名を聞きて便ち退散せん。兵戈を動ずることを假らずして、兩陣歡喜を生ぜん。

梵王帝釋王、護世四天王、及び金剛藥叉、正了知大將、
(五)無熱池龍王、及び娑揭羅、緊那羅樂神、蘇羅金翅王、
大辯才天女。幷に大吉祥天、斯等の上首の天、各諸の天衆を領し、
常に諸佛と、法寶との不思議なるを供養し、恒に歡喜心を生じ、經に於て恭敬を起す。
斯等の諸の天衆、皆悉く共に思惟して、遍く修福者を觀じ、共に是の如きの說を作す。
此の有情を觀ずべし、悉く是れ大福德なり、善根精進の力、當に來りて我が天に生ぜん。
爲に甚深の經を聽くべし、敬心にて來り、至心に法制底を供養す、正法を尊重するが故に。

【四】 文殊菩薩。次の慈氏は彌勒菩薩。
【五】 Anavatapta, Sāgara

衆生を憐愍して、而して大饒益を作す、此の深經典に於て、能く法寶の器と爲る。
此の法門に入る者は、能く法性に入る、此の金光明に於て、至心に聽受すべし。
此の人は曾て、無量の百千佛を供養す、彼の諸の善根に由りて、此の經典を聞くことを得たり。
是の如き諸の天王、天女大辯才、幷に彼の吉祥天、及以び四王衆、
無數の藥叉衆、勇猛にして神通有り、各其の四方に於て、常に來り相擁護す。
日・月・天帝釋、風・水・火の諸神、吠率怒・大肩、閻羅・辯才等、
一切の諸の護世、勇猛にして威神を具し、持經の者を擁護して、晝夜常に離れず。

大力の藥叉王(六)那羅延・自在、正了知を首と爲し、二十八藥叉、
餘の藥叉百千、神通大力有り、恆に恐怖の處に於て、常に來りて此の人を護る。

(七)金剛藥叉王、幷に五百の眷屬、諸の大菩薩衆、常に來りて此人を護る。
(八)寶王藥叉王、及以び(九)滿賢王、(一〇)曠野(一一)金毗羅、(一二)賓度羅(一三)黃色、
此等の藥叉王、各五百の眷屬、此の經を聽く者を見て、皆來りて共に

【六】Nārāyaṇa. Maheśvara. Sañjaya.
【七】Vajrapāṇi.
【八】Maṇibhadra.
【九】Pūrṇabhadra.
【一〇】Āṭavaka.
【一一】Kumbīra.
【一二】Piṅgala.
【一三】Kapila.
【一四】Citrasena. 已下乾闥婆神。
【一五】Jinarāja.
【一六】Jinarṣabha.
【一七】Maṇikaṇṭa.

擁護す。

(一四)彩軍乾闥婆、(一五)葦王 (一六)常戰勝、(一七)珠頸及び (一八)青頸、幷に (一九)勃里沙王、

(二〇)大最勝 (二一)大黑、(二二)蘇跋拏雞舍・(二三)半之迦 (二四)羊足、及以び (二五)大婆伽、

(二六)小渠幷に (二七)護法、及以び (二八)獼猴王、(二九)針毛及び (三〇)日友、(三一)寶髮皆來りて護る。

(三二)大渠 (三三)諾拘羅、(三四)栴檀 (三五)欲中勝、(三六)舍羅及び (三七)雪山、及以び (三八)娑多山、

皆大神通有りて、雄猛にして大力を具し、此の經を持する者を見て、皆來りて相擁護す。

(三九)阿那婆答多、及以び (四〇)娑揭羅、(四一)目眞 (四二)醫羅葉、(四三)難陀 (四四)小難陀、

百千龍の中に於て、神通威德を具し、共に持經の人を護り、晝夜常に離れず。

【一八】Nīlakaṇṭa.
【一九】Varṣādhipati.
【二〇】Mahāgrasa.
【二一】Mahākāla.
【二二】Suvarṇakeśin.
【二三】Pañcika.
【二四】Chagarapāda.
【二五】Mahābhāga.
【二六】Praṇāli.
【二七】Dharmapāla.
【二八】Markaṭa.
【二九】Sucīloma.
【三〇】Sūryamitra 明本日犬に作り。麗本日支に作る。梵文より見て皆寫誤なり。
【三一】Ratnakeśa.
【三二】Mahāpraṇāli.
【三三】Nakula.
【三四】Candana.
【三五】Kāmaśreṣṭa.
【三六】Nagayaśas. 梵本に依る。但し本譯に順へば Śara に作るべし。

(四五)婆稚 (四六)羅睺羅、(四七)毘摩質多羅、(四八)母旨・苫跋羅、(四九)大肩及び (五〇)歡喜、及び餘の蘇羅王、幷に無數の天衆、大力勇健有り、皆來りて是の人を護る。

(五一)訶利底母神、五百の藥叉衆、彼の人の睡と覺とに於て、常に來りて相擁護す。

(五二)栴荼・(五三)旃荼利、藥叉(五四)旃稚女、(五五)昆帝・(五六)拘吒齒、(五七)吸衆生精氣、

是の如きの諸神等、大力神通有りて、常に持經の者を護り、晝夜恒に離れず。

上首辯才天、無量の諸天女、吉祥天を首とし、幷に餘の諸の眷屬、此の大地の神女、果實園林の神、樹神・江河の神、制底の諸神等、是の如き諸の大神、心に大歡喜を生じ、彼皆來りて、此の經を讀誦する人を擁護す。

經を持する有る者を見ては、壽命・色・力・威光、及び福德を增し、妙相を以て莊嚴す。

【三七】Hemavanta.
【三八】Sātagiri.
【三九】已下龍王、Anavatapta.
【四〇】Sāgara.
【四一】Mucilinda.
【四二】Erāpata.
【四三】Nanda.
【四四】Upananda.
【四五】已下阿修羅。婆稚 Vali.
【四六】Rāhu.
【四七】Vemacitra.
【四八】Saṃvara.
【四九】Kharaskanda.
【五〇】Prahlāda.
【五一】Hāritī. 鬼子母。已下羅刹女を出す。法華十羅刹女中に出るもの多く見ゆ。
【五二】Caṇḍā.
【五三】Caṇḍālikā.
【五四】Caṇḍikā
【五五】Dantī.
【五六】Kuṭadantī.
【五七】Sarvasattvojahāriṇī.

星宿災變を現じ、困厄此の人に當り、夢に惡徵祥を見るも、皆悉く除滅せしむ。
此の大地神女は、堅固にして威勢有り。此の經力に由るが故に、法味常に充足す。
地肥若し流下し、百踰繕那を過ぎなば、地神味をして上らしめ、大地を滋潤す。
此の地の厚きこと、六十八億踰繕那、乃至金剛際にして、地味皆上らしむ。
此の經王を聽くに由り、大功德蘊を獲、能く諸の天衆をして、悉く其の利益を蒙らしめ、
復た諸の天衆をして、威力光明有り、歡喜して常に安樂ならしめ、衰相を捨離す。
此の南洲の內に於て、林・果・苗稼の神、此の經の威力に由りて、心常に歡喜を得、
苗實皆成就して、處處に妙華有り、果實竝に滋繁して、大地に充滿す。
所有る諸の果樹、及以び衆の園林、悉く皆妙華を生じ、香氣常に芬馥たり。
衆草諸の樹木、悉く微妙の華を出し、及び甘美の果を生じ、隨處に皆充遍す。
此の贍部洲に於て、無量の諸の龍女、心に大に歡喜を生じて、皆共に池中に入り、
(五八)鉢頭摩、及以び(五九)分陀利、青白の二蓮華を種植して、池中に皆遍滿す。
此の經の威力に由りて、虛空淨くして翳無く、雲霧皆除遣し、冥闇
悉く光明あり。
日は出でて千光を放ち、無垢の焰淸淨なり。此の經王の力に由りて、流暉四天を遶る。

【五八】Padma. 紅蓮。
【五九】Puṇḍarīka. 白蓮。

此の經の威德力は、天子を資助し、皆贍部金を用ひて、宮殿を作らしむ。
日天子初めて出で、此の洲の歡喜を見、常に大光明を以て、周遍して皆照曜す。
斯の大地の内に於ける、所有る蓮華池、日の光照の及ぶ時、盡く開發せざる無し。
此の贍部洲に於ける、田疇諸の果薬をして、悉く皆善く熟せしめ、大地に充滿す。
此の經の威力に由り、日月所照の處、星辰度を失はず、風雨皆時に順ひ、
此の贍部洲に遍く、國土咸豐樂にして、此の經の有る處に隨ひて、殊勝なること餘方に倍す。
若し此の金光明經典流布の處にして、能く講誦の者有らば、悉く上の如き福を得ん。』
爾の時に大吉祥天女、及び諸天等、佛の所説を聞きて皆大に歡喜し、此の經王及び受持者に於て一心に擁護して、憂惱無く常に安樂を得しむ。

授記品第二十三

爾の時如來、大衆の中に於て廣く法を說き已りて、妙幢菩薩及び其二子(一)銀幢・(二)銀光の爲に、阿耨多羅三藐三菩提の記を授けんと欲したまふ。時に十千の天子(三)最勝光明有りて上首と爲り、倶に三十三天より來りて、佛所に至り佛足を頂禮し、却つて一面に坐して佛の說法を聽く。爾の時に佛、妙幢菩薩に告げて言はく『汝來世に於て、無量無數百千萬億那庾多劫を過ぎ已りて、(四)金光明世界に於て、當に阿耨多羅三藐三菩提を成じ、(五)金寶山王如來・應・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號して、世に出現すべし。時に此の如來の般涅槃の後、所有敎法も亦皆滅盡す。時に彼の長子を名づけて銀幢と曰ひ、卽ち此界に於て次で佛處に補す。世界爾の時に轉じて(六)淨幢と名づく、當に作佛することを得て、(七)金幢光如來・應・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ふべし。時に此如來の般涅槃の後、所有る敎法も亦皆滅盡す。次子銀光卽ち佛處に補し、此界に於て當に作佛することを得て、(八)金光明如來・應・正遍知・明行足・善

【一】銀幢 (Rupyaketu)

【二】銀光 (Rupyaprabha)。

【三】最勝光明 (Jvalanāntarateja)。

【四】Suvarṇaprabhāsitā lokadhātu.

【五】梵に Suvarṇaratnākarachatrakūṭa とす、古譯金寶蓋山王と譯するに合す。

【六】Virajadhvaja. 淨幢・離垢幢。

【七】Suvarṇadhvajakāñcanābha.

【八】Suvarṇavarṇaśataraśmiprabhāsagarbha. 具に金色百光明藏と譯すべし、古譯今譯ともに、唯金光照、或は金光明となせり、蓋略に從へるなら

逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ふべし。是の時、十千の天子、三大士の授記を得已りしことを聞き、復た是の如きの最勝王經を聞きて、心に歡喜を生じ、清淨無垢なること猶し虚空の如し。爾の時に如來、是の十千の天子の善根成就せることを知ろしめして、卽便ち大菩提の記を授與す、『汝等天子、當來の世に於て、無量無數百千萬億那庾多劫を過ぎ、(九)最勝因陀羅高幢世界に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得、同一の種姓、又同一の名號ありて(一〇)面目清淨優鉢羅香山十號具足と曰はん。是の如く次第して十千の諸佛世に出現すべし』と。

爾の時、(一一)菩提樹神、佛に白して言さく、『世尊、是の十千の天子、三十三天より法を聽く爲の故に、來りて佛所に詣でしに、云何が如來便ち當に成佛することを得べしと授記を與へ給へるや。世尊、われ未だ曾て聞かず、(一二)是の諸の天子は、六波羅蜜多の難行苦行を具足し、修習して、手・足・頭・目・髓腦・眷屬・妻・子・象・馬・車乘・奴婢・僕使、宮殿・園林、金銀瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀・璧玉・珂貝・飲食・衣服・臥具・醫藥を捨つること、餘の無量百千の菩薩の如く、諸の供具を以て、過去無數百千萬億那庾多の佛を供養せることを。是の如きの菩薩各無量無邊劫數を經て、然して後方に菩提の記を受くることを得たり。世尊、是の諸の天子は、何の因緣を以て、何の勝行を修し、何の善根を種ゑてか、彼の

【九】Śalendradhvajāgravatī.

【一〇】Prasannavadanotpalagandhakūṭa.

【一一】梵文 Bodhisattvasamuccayākuladevatā 菩薩集會善女天とす。今文と稍異れり。

【一二】六波羅蜜中布施の一行を舉げて餘を例顯す。

天より來り、暫時にして法を聞き便ち授記を得たる。惟願くは世尊、我が爲に解說し、疑網を斷除したまへ。』佛、地神善女天に告たまはく、『汝の說く所の如く、皆勝妙善根の因緣により、勤苦し修し已りて、方に授記を得たり。此の諸の天子は、妙天宮に於て、(一三)五欲の樂を捨て、故らに來りて是の金光明經を聽く。既に法を聞き已りて、是の經中に於て、心に殷重を生じ、(一四)淨瑠璃の如く諸の瑕穢無し。復た此の(一五)三大菩薩の授記の事を聞くことを得るも、亦過去に久しく正行を修せし誓願の因緣に由る。是の故にわれ今皆授記を與ふ、未來世に於て、當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべしと。』時に彼の樹神、佛の說を聞き已りて、歡喜信受しき。

【一三】色聲香味觸の五官の欲樂。

【一四】淨瑠璃は信心の澄清なるに譬ふ。

【一五】妙幢・銀光・銀幢の三大士の事。

除病品第二十四

佛、(一)菩提樹神善女天に告げたまはく、『諦聽せよ、諦聽せよ。善く之を思念せよ。是の十千の天子の本願の因緣、今汝が爲に說かん。善女天、過去無量不可思議阿僧企耶劫、爾の時に佛ありて世に出現したまふ、名づけて(二)寶髻如來、應・正偏知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ふ。善女天、時に彼の世尊の般涅槃の後、正法滅し已りて、(三)像法の中に於て王あり、名づけて(四)天自在光と曰ひ、常に正法を以て人民を化すること猶し父母の如し。是の王國の中に一長者あり、名づけて、(五)持水と曰ふ。善く醫方を解し、妙に(六)八術に通じ、衆生の病苦、四大の調はざる咸能く救療す。善女天、爾の時、持水長者唯だ一子あり、名づけて(七)流水と曰ふ。顏容端正にして人に樂ひ觀らる、性を受くること聰敏、妙に諸の・論・書畫・算・印を閑ひて通達せざる無し。時に王國の內、無量百千の諸の衆生の類あり、皆疫疾に遇ひて衆の苦に逼められ、乃至歡喜の心有ること無し」。善女天、爾の時に長者子流水は是の無量百千の衆生の諸の病苦を受くるを見て、大悲心を起して、是の如きの念を作す、「無量の衆生諸の極苦の爲

【一】梵名前章を見よ。
【二】寶髻佛(Ratnaśikhi)
【三】佛陀の滅後の時期を正、像、末の三時に分つ中、第二期なり、即教行ありて正しく證果を得ること少き時代にて、正法に似たるのみの時代の意義。
【四】天自在光(Sureśvaraprabhāsa)。
【五】持水(Jaṭiṃdhara) 正しくは持髮と云ふべし。
【六】八術の事、後に之を出す。
【七】流水(Jalavāhana.)

に逼迫せらる。わが父長者醫方を善くし、妙に八術に通じ、能く衆病、四大の增損を療ずと雖も、然も已に衰邁・老耄し、虚羸にして扶策を假りて方に能く步を進む。復た城邑聚落に往きて、諸の病苦を救ふ能はず。今無量百千の衆生ありて、皆重病に遇ひ、能く救ふ者爲し。われ今當に大醫父の所に至りて、治病の醫方、祕法を咨問すべし。若し解することを得已りなば、當に城邑聚落の所に往きて、諸の衆生の種種の疾病を救ひ、長夜に安樂を受くることを得しむべし」と。時に長者子是の念を作し已りて、卽ち父の所に詣り、稽首して足を禮し、合掌恭敬して、却て一面に住し、卽ち伽他を以て其の父に請うて曰く。

(八)「慈父、當に哀愍すべし。われ衆生を救はんと欲し、今諸の醫方を請ふ。幸に願くは我が爲に說きたまへ。

云何が身衰邁して、(九)諸大增損有るや。復た何の時中に在りて、能く諸の疾病を生ずる。

云何が飮食を啗み、安樂を受くることを得て、能く內身の中に、火勢をして衰損せざらしむる。

衆生に四病あり、風と黃熱と(一〇)痰癊と、及以び總集の病となり、云何がして療治する。

何の時にか風病起り、何の時にか熱病發り、何の時にか痰癊を動し、何の時にか總集生ずるや。」

【八】請文五頌あり、梵文唯四頌のみ、第一頌を缺く。

【九】諸大は地水火風の四大種を指す、印度醫學は此四要素の增減と均衡とによりて病健を別つ。

【一〇】痰癊（Slesmika）膽汁質病なり。

時に彼の長者、子の請を聞き已りて、復た（二）伽他を以て、之に答へて曰く、

「われ今古仙の、所有る療病の法に依り、次第に汝の爲に說かん、善く聽きて衆生を救へ。
（三）三月は是れ春時、三月を名づけて夏と爲し、三月を秋分と名づけ、三月は謂く冬時。
此は一年の中に據りて、三三を別說せるなり。（三）二二を一節と爲せば、卽ち歲の六時を成ず。
初二は是れ華時、三四は熱際と名づけ、五六は雨際と名づけ、七八は秋時と謂ひ、
九十は是れ寒時、後の二を冰雪と名づく。既に是の如きの別を知る、藥を授けて差はしむること勿れ。
當に此の時の中に隨ひて、飮食を調息して、腹に入れて消散せしむべし、衆病則ち生せず。
節氣若し變改すれは、四大も推移あり。此の時に藥資無くんば、必ず病苦を生せん。
醫人は四時を解し、復た其の六節を知り、身七界を明閑にして、藥を食するに差ふ無からしむ。
謂く味界・血・肉、膏・骨及び髓・腦なり。病此の中に入る時は、其の療ず可きや不やを知る。

【二】長者父三十二頌を以て醫方治療の事を說く、梵文唯だ九頌なり、甚省略す。

【三】四時の梵語は左の如し、春夏秋冬の譯は一應の義譯のみ。

ヴァールシャ Vārṣa —— 雨時
シャーラダ Śārada —— 秋時
ヘーマンタ Hemanta —— 雪時
グリーシユミーカ Grīṣmika —— 夏時

【三】二ケ月を一氣節とし、一年を六時期に分つ。

病に〔一四〕四種の別あり、謂く風・熱痰・癊、及以び總集の病。發動の時を知るべし。

春の中には痰癊動き、夏の内には風病生じ、秋時には黄熱増し、冬節には三倶に起る。

春は澁・熱・辛を食し、夏には膩・熱・鹹・醋、秋時には冷・甜・膩、冬には酸・澁・膩・甜。

此の四時の中に於て、服藥及び飲食、若し是の如きの味に依らば、衆病由て生ずること無からん。

食後の病は癊に由り、食消の時は熱に由り、〔一五〕消後は風に由りて起る、時に準じて病を識るべし。

既に病の源を識り已りなば、病に隨ひて藥を設け、〔一六〕設令ひ狀殊を患ふとも、先づ其の本を療ずべし。

風病は油膩を服し、患熱は利を良と爲す、癊病は變吐すべし、總集は〔一七〕三藥を須ふ。

風熱癊倶に有る、是を名づけて總集と爲す。病の起る時を知ると雖も、其の本性を觀るべし。

是の如く觀知し已りて、時に順ひて藥を授けば、飲食と藥と差ふこと爲けん。是を善醫者と名づく。

復八術を知るべし、諸の〔一八〕醫方を總攝す。此に於て若し明閑ならば、衆生の病を療ずべし。

【一四】 Vāta——風
Pitta——熱
Kapha——痰癊
Sannipata——總集

【一五】 消後。消化の後。

【一六】 對症の末節を措きて病源に著眼すること現時醫學の原因療法と轍を一にす。印度醫學亦頗見るべきものあり。

【一七】 滋養を主とするもの(一)便利を必要とするもの(二)吐出せしむべきもの(三)

【一八】 所謂 Āyur-veda の八術にして印度古代よりの醫方なり。

謂く針刺・傷破、身疾・幷に鬼神、惡毒及び孩童、年を延べ氣力を增す。
先づ彼の形色、語言及び性行を觀じ、然して後に其の夢を問ひ、風・熱・癊の殊を知る。
乾瘦にして頭髮少く、其の心定住無く、語多くして飛行を夢む。斯の人は是れ風性なり。
少年にして白髮を生じ、汗多く及び瞋多く、聰明にして夢に火を見る、斯の人は是れ熱性なり。
心定り身平整し、慮審らかにして頭に津膩あり、夢に水白物を見ば、是は癊性なりと知るべし。
總集の性は倶に有り、或は二或は三を具し、一偏增有るに隨ふ。知るべし是れ其の性なることを。
既に本性を知り已りて、病に準じて藥を授けて、其の死相無きことを驗して、方に救ふべきの人と名づく。
諸根倒して境を取り、尊と醫人とに慢を起し、親友に瞋恚を生ず、是れ死相と知るべし――。
左眼白色に變じ、舌黑く鼻梁欹して、耳輪舊と殊り、下脣垂れて下に向ふを。
(一九)訶梨勒の一種は、具足して(二〇)六味あり、能く一切の病を除く、忌むこと無く藥中の王なり。
又(二一)三果三辛は、諸藥の中に得易し。沙糖と蜜と酥と乳とは、此れ能く衆病を療ず。

【一九】 訶梨勒(Harītaki)。黃木葡萄の一種Terminalia Chebula.
【二〇】 六味は苦・醋・甘・辛・鹹・淡なり。
【二一】 三果は訶梨勒、阿摩洛迦Amalaka (mango)、毗佌得迦Vibhītaka (Terminalia Belerica)。三辛は干薑、胡椒、畢鉢なり。

自餘の諸の藥物は、病に隨ひて增加すべし。〔三〕先に慈愍心を起して、財利を規ること莫れ。われ已に汝の爲に、療疾中の要事を說く。此を以て衆生を救ひ、當に無邊の果を獲べし。」

善女天、爾の時、長者の子流水は、親しく其の父に八術の要、四大增損、時節の不同、餌藥の方法を問ひ、既に善く了知して、自ら能く衆病を救療するに堪ふることを忖りて、卽便ち徧く城・邑・聚落所在の處に至り、百千萬億の病苦の衆生あるに隨ひて、皆其の所に至りて、善言慰喩して是の如きの語を作さく、「我は是れ醫人なり。我は是れ醫人なり、善く方藥を治む。今汝等の爲に衆病を療治し、悉く除愈せしめん」と。善女天、爾の時に衆人長者子の善言慰喩して、許して治病を爲すを聞く。時に無量百千の衆生の極重の病に遇へる有りて、是の語を聞き已りて身心踊躍して未曾有なることを得たり。此の因緣を以て所有る病苦、悉く蠲除することを得、氣力充實して平復すること、本の如し。善女天、爾の時に復た無量百千の衆生の病苦深重にして、療治し難き者有り。卽ち共に長者子の所に往詣して、重て醫療を請ふ。時に長者子卽ち妙藥を以て服せしむ。皆除差を蒙むる。善女天、是の長者子は此の國內に於て、百千萬億の衆生の病苦を治し。悉く除差することを得たり。』

〔三〕醫の仁術なる所以玆にあり、眞に千古の醫誡也。

長者子流水品第二十五

爾の時佛、菩提樹神善女天に告げたまはく、『爾の時に長者子流水は、往昔の時に天自在光王國內に在りて諸の衆生の所有る病苦を療じ、平復することを得て、安隱の樂を受けしめぬ。時に諸の衆生、除病を以ての故に多く福業を修し、廣く惠施を行じ、以て自ら歡娯す。卽ち共に長者子の所に往詣して、咸尊敬を生じ、是の如きの言を作す、「善哉、善哉、大長者子、善能く福德の事を滋長し、我等の安隱壽命を增益す。仁は今實に是れ大力醫王、慈悲の菩薩たり、妙に醫藥を閑ひ、善く衆生の無量の病苦を療ず」と。是の如きの稱歎、城邑に周徧せり。善女天、時に長者子の妻を、(一)水肩藏と名づく、其の二子あり、一を(二)水滿と名づけ、二を(三)水藏と名づく。是の時に流水、其の二子を將ゐて、漸次に城・邑・聚落を遊行して、空澤の中、深險の處を過ぎて、諸の禽獸、豺・狼・狐・玃・鵰・鷲の屬にして、血肉を食する者を見るに、皆悉く奔飛して、一向に而も去る。時に長者子是の如きの念を作すらく、「此の諸の禽獸、何の因緣の故にか、一向に飛び起つや。われ當に後に隨ひて暫く往きて之を觀るべし。」卽便ち隨ひ去りて見るに、大池あり、名づけて(四)野生と曰ふ。其の水將に盡きなんとす。此の池中に多衆の魚あり。流水之を見已りて、大悲心を生ず。時に樹神ありて半身を示現し、是の如きの語を作

【一】水肩藏(Jalāmbugarbhā)。
【二】水滿(Jalāmbra)。
【三】水藏 Jalagarbha)。
【四】野生(Aḍavīsambhavā)。

さく、「善哉、善哉、善男子、汝實義ありて、流水と名くれば、此の魚を愍む可し。其に水を與ふべし。二の因縁有りて、名けて流水と爲す。一には能く水を流し、二には能く水を與ふ。汝今當に名に隨ひて作すべし。」是の時に流水、樹神に問うて言く、「此の魚の頭數幾何有りとする。」樹神答て曰く、「數十千に滿つ」と。善女天、時に長者子是の數を聞き已りて、倍悲心を益す。時に此の大池、日の爲に暴されて、餘水幾くも無く、是の十千の魚、將に死門に入りなんとして、身を旋らして宛轉す。是の長者を見て、希ふ所あるを以て、隨ひ逐ひて瞻視し、目して未だ曾て捨てず。時に長者子、是の事を見已りて、四方に馳せ趣き、水を覓めんと欲して、竟に得ること能はず、復た一邊を望むに、大樹有るを見たり。卽便ち昇上して枝葉を折り取り、爲に蔭涼と作し、復更に推求し、「是の池中の水、何處よりか來るや」と。尋ね覓めて已まざるに、一大河を見たり、名づけて(五)水生と曰ふ。時に此の河邊に諸の漁人ありて、魚を取らんが爲の故に、河の上流、懸險の處に於て、其の水を決棄して、下過せしめず。所決の處に於て、卒かに修補し難し。便ち是の念を作すらく、「此の崖深くして峻し。百千人を設けて時三月を經るとも、亦斷ずること能はず、況やわれ一人にして、濟辨するに堪へんや」と。時に長者子速かに本城に還りて、大王の所に至り、頭面禮足し、却て一面に住し、合掌恭敬して、是の如きの言を作さく、「われ大王の國土人民の爲に種種の病を治し、悉く安隱ならしめ、漸次に遊行して、其の空澤に至るに、一池有るを見る。名づけて野

【五】水生(Jalāgamā)。

生と曰ふ。其の水涸れんと欲し、十千の魚有りて日に暴され、將に死せんとする、久しからず。唯だ願くは大王、慈悲愍念して、二十の大象を與へたまへ。暫く往きて、水を負ひ、彼の魚の命を濟ふこと、我諸の病人に壽命を與へしが如くせん」と。爾の時、大王卽ち大臣に勅して、速疾に此の醫王に大象を與へしむ。時に彼の大臣、王の勅を奉じ已りて、長者子に白す、「善哉、大士、仁、今自ら象の廐の中に至り、意に隨ひて二十の大象を選び取り、衆生を利益して、安樂なることを得しむ可し」と。是の時に流水及び其の二子は、二十の大象を將ゐ、又酒家より多くの皮囊を借りて、決水の處に往きて、囊を以て水を盛り、象をして負ひて、池に至りて池中に瀉ぎ置かしむ。水卽ち彌滿し、還て復た故の如し。善女天、時に、長者子池の四邊を周旋して視るに、時に彼の衆の魚も、亦復た隨逐して岸を循りて行く。時に長者子、復た是の念を作すらく、「衆の魚、何の故にか我に隨うて行くや。必ず饑火の爲に、惱逼せられ、復た我に從つて、食を求索せんと欲す。われ今當に汝に與ふべし」と。爾の時に長者流水、其の子に告げて言く、「汝一象の最大の力ある者を取り、速に家中に至り父長者に啓して、家中に有る所の食す可きの物、乃至父母食啗の分、及以び妻子奴婢の分、悉く皆收取して卽ち持ち來る可し」と。爾の時二子、父の教を受け已りて最大の象に乘り、速に家中に往きて祖父の所に至り、上の如きの事を說き、家中の食す可きの物を收取して象の上に置き、疾に父(流水)の所に還り、彼の池邊に至る。是の時流水、其の子の來るを見て、身心喜躍して遂に飯食を取り、徧く池中に散ず。魚食する

ことを得已りて悉く皆飽足す。便ち是の念を作さく、「我今食を施し、魚をして命を得せしむ。願くは來世に於て當に法食を施し、充ち濟はんこと邊りなからん」と。(六)復た更に思惟すらく、「われ先に曾て空閑の林處に於て、一りの苾芻の大乘經を讀み、十二因緣生、甚深の法要を說けるを見き。又經中に說かく、若し衆生有りて、命終の時に臨んで、寶髻如來の名を聞くことを得れば、卽ち天上に生ずと。われ今當に是の十千の魚の爲に、甚深の(七)十二緣起を演說し、亦當に寶髻佛の名を稱說すべし。然るに贍部洲に二種の人あり、一は深く大乘を信じ、二は信ぜずして毀呰す。亦當に彼をして信心を增長せしむべし」と。時に長者子是の如きの念を作すらく、「われ池中に入りて衆の魚の爲に深妙の法を說く可し」と。是の念を作し已りて、卽便ち水に入りて、唱へて言く、「南謨過去寶髻(八)如來、應・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊、此の佛、往昔菩薩の行を修せし時に、是の誓を作す、願くは十方界所有の衆生、命終に臨める時に、わが名を聞かん者は命終の後、三十三天に生ずることを得ん」と。爾の時流水復た池の魚の爲に、是の如き甚深の妙法を演說す。(九)「此れ有なるが故に、彼有なり、此生ずるが故に彼生ず。(一〇)所謂

【六】財施既に終りて法施をなし、肉體の救濟の後、必らず精神の濟度あり、大乘佛教の深意、大に眼を著けて見よ。緣起の妙理より聞佛名の信念に入る、亦よく思念せよ。決して等閑の看を爲すこと勿れ。

【七】下に說くを見よ。

【八】如來の十號前に屢出づ。

【九】十二緣起は彼此相對因緣相生の法なり、故に此二句を以て甚深緣起の法を惣標す。

【一〇】已下十二緣起を說くに二段あり、前段は雜染緣起にして、流轉生死の次第に就き彼此相生を明かし、後段は淸淨緣起にして、還滅斷除の次第に依り、此彼相滅を示す、文に就きて精細に見よ。其中今前段なり。

る無明は行を縁じ、行は識を縁じ、識は名色を縁じ、名色は六處を縁じ、六處は觸を縁じ。觸は受を縁じ、受は愛を縁じ、愛は取を縁じ、取は有を縁じ、有は生を縁じ、生は老死の憂悲苦惱を縁ず。〔二〕此れ滅するが故に彼れ滅す。所謂る無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち六處滅し、六處滅すれば則ち觸滅し・觸滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則ち愛滅し、愛滅すれば則ち取滅し、取滅すれば則ち有滅し、有滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老死滅し、老死滅すれば則ち憂悲苦惱滅す。是の如く、純ら〔三〕苦蘊を極めて悉く皆除滅す」と。』

是の法を說き已りて、十二縁起相應陀羅尼を說いて曰く、

〔四〕『怛姪他。毗折儞。毗折儞。毗折儞。僧塞枳儞。僧塞枳儞。僧塞枳儞。毗爾儞。毗爾儞。毗爾儞。莎訶。怛姪他。那弭儞。那弭儞。那弭儞。殺雉儞。殺雉儞。殺雉儞。颯鉢哩設儞。颯鉢哩設儞。颯鉢哩設儞。莎訶。怛姪他。薜達儞。薜達儞。薜達儞。窒里瑟儞儞。窒里瑟儞儞。窒里瑟儞儞。鄔波地儞。鄔波地儞。鄔波地儞。莎訶。怛姪他。婆毗儞。婆毗儞。婆毗儞。闍底(丁里切下同)儞。闍底儞。闍底儞。闍摩儞儞。闍摩儞

【二】 第二段清淨縁起。

【三】 苦集滅道の中、苦諦は卽十二縁起の中、生老病死の現在苦果と共に、また無明等の未來の眞諦苦を總じて苦蘊と呼べり。

【四】 Tadyathā vicani vicani vicani saṃśani saṃśani bhiśini bhiśini svāhā, tadyathā nāmini nāmini nāmini svāhā, ṣatini ṣātini ṣātini svāhā, spṛśani spṛśani spṛśani svāhā, tadyath vedani vedani vedani svāhā, tṛṣṇi tṛṣṇi tṛṣṇi upādhini upādhini upādhini svāhā, tadyathā bhavini bhavini bhavini svāhā, tadyathā jatini jatini jatini svāhā, jammanini jammanini jammanini svāhā.

儞。闍摩儞儞。莎訶。』

爾の時、世尊、諸の大衆の爲に、長者子の昔縁を說きたまふ時、諸の人天衆、未曾有なりと歎ず。時に四大天王各其の處に於て、異口同音に是の如きの說を作す、『善哉、釋迦尊、妙法明咒を說き、福を生じ、衆惡を除き給ひ、十二支相應す。我等も亦咒を說きて是の如きの法を擁護せん。若し違逆を生じ、善く隨順せざる者有らば、頭破れて七分と作る、〔一四〕猶蘭香梢の如くならん。我等佛の前に於て、共に其咒を說かん。』曰く、

〔一五〕『怛姪他。呬哩謎。揭睇。健陀哩。旃荼里。地囇。騷伐囇。石呬伐囇。補攞。布囇。矩末底。崎囉末底。達地目契。窶嚕婆。母嚕婆。具荼母嚕健提。杜嚕。杜嚕。毗囇。翳泥悉。泥沓嫓。達沓嫓。鄔悉怛哩。烏率吒囉伐底。頞剌婆伐底。鉢杜摩伐底。俱蘇摩伐底。莎訶。』

佛善女天に告げたまはく、『爾の時に長者子流水及び其二子、彼の池の魚の爲に水を施し食を施し幷に法を說き已りて俱共に家に還る。是の長者子流水は復後時に於て聚會する有るに因て、衆の妓樂を設け酒に醉ひて臥しぬ。時に十千の魚同時に命過ぎて三十三天に生じ是の如きの念を起す、「我等何の善業の因縁を以てか、此天中に生じたるや」と。便ち相謂て曰く、「我等先に贍部洲の內に於て〔一六〕傍

【一四】蘭香梢。(Anjaka-mañjaliti) 此誓語は法華其他諸經に出づ。

【一五】Tadyathā hirimi gate gandhārī caulāri dhiri jāṅvare śihilhare pare pare [gu] gumati khiramati cadhimukhi larrubha murubha kuca-murr.kute duru duru duru vīrya aidhiṣi dadhave da-dhave ustri uṣtravati ansaprahati padmavati kusumavate [usumavate] svāhā.

【一六】傍生、畜生道、眞直に行く能はざるを以て名づく。

生中に墮し、共に魚身を受けたり。長者子流水、我等に水及以び飯食を施し、復た我等の爲に。甚深の法、十二縁起及び陀羅尼を說き、復た寶髻如來の名號を稱す。是の因緣を以て、能く我等をして、此の天に生ずることを得しむ。是の故に、われ今咸く彼の長者子の所に詣りて、恩を報じ、供養すべし」と。爾の時に十千の天子、卽ち天に於て沒して、贍部洲の大醫王の所に至る。時に長者子は高樓の上に在りて安隱にして睡れり。時に十千の天子は、共に十千の眞珠瓔珞を以て其の頭邊に置き、復た十千を以て其の足處に置き、復た十千を以て右脇に置き、復た十千を以て左脇の邊に置き、(七)曼陀羅華・(八)摩訶曼陀羅華を雨らすこと積て膝に至り、光明普く照し、種種の天樂は妙音聲を出し、贍部洲の睡眠せる者をして悉く覺寤せしむ。長者子流水も亦睡より寤めぬ。是の時十千の天子供養を爲し已りて、卽ち空中に飛騰して去り、天自在光王の國內に於て處處皆天妙蓮華を雨らしぬ。是の諸の天子は、復た本處なる空澤池中に至りて、衆の天華を雨らし、卽ち此に沒して天宮殿に還り、意に隨ひて自在に五欲の樂を受けぬ。天自在光王天曉に至り已りて諸の大臣に問ふ、「昨夜何の緣にか、是の如きの希有の瑞相を現じて大光明を放つ」と。大臣答て言さく、「大王、當に知るべし、諸の天衆有りて、長者子流水の家中に於て、四十千の眞珠・瓔珞及び天の曼陀羅華を雨らし、積んで膝に至る。」王、臣に告げて曰く、「長者の家に詣りて其の子を喚び取れ」と。大臣勅を受けて卽ち其の家に至り、王命を宣べ奉りて長者子を

【七】Mandārava. 悅意花。
【八】Mahāmandārava. 大悅意花。

喚ぶ。長者子卽ち王所に至る。王の曰く、「何の緣ありてか、昨夜是の如き希有の瑞相を示現せりや」と。長者子の言さく、「我が思ひ忖るが如くんば、定めて是れ彼の池內の衆魚、經の所說の如く命終の後、三十三天に生ずるを得たりしなるべし。彼來りて恩を報ずる故に是の如きの希奇の相を現せり。」王の曰く、「何を以てか知ることを得るや。」流水答て曰く、「王よ、使を遣す可し。幷に我が二子と彼の池の所に往き其の虛實を驗せん。彼の十千の魚死と爲すか、活と爲すか」と。王是の語を聞き、卽便ち使及び子を遣して、彼の池邊に向ひ其の池中を見せしむるに、多く曼陀羅華有り、積みて大聚を成じ、諸の魚幷に死しぬ。見已りて、馳せ還り、王の爲に廣く說く。王是を聞き已りて、心に歡喜を生じ、未曾有なりと歎じぬ。』

爾の時に佛、菩提樹神善女天に告はく『汝今當に知るべし、昔時長者子流水は卽ち我が身是れなり。持水長者は卽ち妙幢是れなり。彼の二子の長子水滿は卽ち銀幢是れなり。次子水藏は卽ち銀光是れなり。彼の天自在光王は卽ち汝菩提樹神是れなり。十千の魚は卽ち十千の天子是なり。われ往昔水を以て魚を濟ひ、食を與へて飽かしめ、爲に甚深の十二緣起幷に此の相應陀羅尼呪を說き、又爲に彼の寶髻佛の名を稱するに因り、此の善根に因りて、天上に生ずることを得、今我が所に來りて、歡喜して法を聽く。われ皆當に爲に阿耨多羅三藐三菩提の記を授け、其の名號を說くべし。善女天、われ往昔生死中に於て、諸有を輪廻し、廣く利益を爲し、無量の衆生をして悉く次第に無上覺を成せしめ、其

の授記を與へしむるが如く、汝等皆出離を勤求して、放逸なること勿るべし。』爾の時に大衆、是說を聞き已りて悉く皆悟解す。(一九)「大慈悲に由り一切を救護し、勤修苦行して、方に能く無上菩提を證獲せん」と。咸く深心を發し、信受し歡喜しぬ。

【一九】 大慈悲救護は大乘の精神なり。十千の魚を濟ふの實修、要するにこの一端を示すに過ぎず。

卷の第十

(一)捨身品第二十六

爾の時、世尊已に大衆の爲に此の十千の天子の往昔の因緣を說き、復菩提樹神及び諸の大衆に告たまはく、『われ過去に於て菩薩の道を行じ、但に水及び食を施して彼の魚の命を濟ふのみに非ず、乃至亦愛する所の身を捨つ。是の如きの因緣共に觀察すべし。』爾の時に如來應正等覺、天上天下最勝最尊、百千の光明十方界を照して一切智を具し、功德圓滿したまひ、諸の苾芻及び大衆を將ゐて、(二)般遮羅聚落に至り、一林の中に詣る。其の地平正にして、諸の荊棘無く、名華・軟草其の處に徧布す。佛、具壽阿難陀に告たまはく、『汝此の樹下に於て、我が爲に座を敷く可し。』時に阿難陀敎を受け、敷き已りて、佛に白して言さく、『世尊、其の座敷き訖んぬ。唯聖、時を知りたまへ。』爾の時、世尊卽ち座上に於て跏趺して坐し、端身正念にして諸の苾芻に告げたまはく、『汝等樂うて彼の往昔の苦行、菩薩の本(三)舍利を見んと欲するや不や。』諸の

【一】捨身の因緣は救魚に比して、大慈悲の實修一層の深痛徹底を見る、方に是れ一境を出でて、一境更に勝を益すもの、深く心を著けてこの快心の大戲曲を讀み來れ。

【二】般遮羅(pancāla)。印度の古國にて今のロヒルカンド(Rohilkhand)地方なり、玄奘三藏は其旅行記の中に、北印度呾叉始羅(Takṣasila)國の中に於て此遺跡を巡拜したることを記したり。

【三】舍利(Sarīra)。遺骨。

苾芻の言さく、『我等見んことを樂ふ。』世尊卽ち百福莊嚴の相好の手を以て、其の地を按ずるに、時に大地【四】六種に震動して開き裂け、卽便ち七寶の【五】制底、忽然として湧出し、衆寶の羅網其の上を莊嚴す。大衆見已りて希有の心を生ず。爾の時に世尊卽ち座より起ちて禮を作し、右遶して還り本座に就き、阿難陀に告げたまはく、『汝此の制底の戸を開くべし』と。時に阿難陀卽ち其の戸を開きて七寶の函を見る。奇珍、間はり飾る。白して言さく、『世尊、七寶の函有りて、衆寶莊校す。』佛の言はく、『汝函を開くべし。』時に阿難陀敎を奉じ、開き已りて、舍利有るを見る、白きこと珂雪と【六】拘物頭華の如し。卽ち佛に白して言さく、『函に舍利あり、色妙にして常と異る』と。佛、阿難陀に言はく、『汝此の大士の骨を持ち來るべし』と。時に阿難陀卽ち其の骨を取り、世尊に授け奉る。世尊受け已りて諸の苾芻に告はく、『汝等苦行の菩薩の遺身の舍利を觀ずべし』と。而して頌を説いて曰はく、

『菩薩の勝德相應の慧。
勇猛精勤して六度圓かなり。
常に修して息まざるは菩提の爲なり。
大捨堅固にして心倦むこと無し。

汝等苾芻、咸く菩薩の本身を禮敬すべし。此の舍利は乃ち是れ無量の戒定慧香の熏馥する所、最上

【四】 六種震動は動・起・涌・振・吼・撃の六なり。

【五】 Caitya 寶塔。法華寶塔品の、多寶佛塔、從地涌出と對し見よ。

【六】 拘物頭華 (Kumuda)。夜間開く純白の蓮花。

の福田にして極めて逢遇し難し。』時に諸の苾芻及び諸の大衆、咸く皆至心に合掌恭敬して舍利を頂禮し、未曾有なりと歎ず。時に阿難陀前みて佛の足を禮し、白して言さく、『(七)世尊・如來大師一切を出過して諸の有情の爲に恭敬せられたまふ、何の因緣の故にか、此の身骨を禮し給ふや。』佛、阿難陀に告たまはく、『われ此の骨に因りて、速に無上正等菩提を得たり。往恩に報ぜんが爲に、われ今禮を致す』と。復阿難陀に告たまはく、『われ今汝及び諸の大衆の疑惑を斷除せんが爲に、是の舍利の往昔の因緣を說かん。汝等善思して、當に一心に聽くべし。』阿難陀曰さく、『我等・聞かんことを樂ふ。願くは開闡を爲したまへ。』『(八)阿難陀・過去世の時、一國あり。王の名を(九)大車と曰ひ、巨富にして財多し。庫藏盈滿し、軍兵武勇にして、衆に欽伏せられ、常に正法を以て、化を(一〇)黔黎に施す。人民熾盛にして怨敵有ること無し。國の大夫人三子を誕生す。顏容端正にして人樂ひ觀る所なり。太子の名を(一一)摩訶波羅と曰ひ、次子の名を(一二)摩訶提婆と曰ひ、幼子の名を(一三)摩訶薩埵と曰ふ。是の時大王、遊觀して縱に山林を賞せんと欲す。其の三王子も亦皆隨從して華果を求めんとす。父を捨てて周旋して大竹林に至り、中に於て憩息す。第一の王子、是の如きの言を作す、「われ今日に於て、心甚だ驚惶す。此の林中に於て、將に猛獸の我を損害

【七】天人は髑髏を禮拜し、餓鬼は枯骨を鞭つの古話、茲に至りて味深し。
【八】已下如來の示教。此因緣亦賢愚經第一等に出づ別に菩薩投身餓虎因緣經一卷あり。
【九】Mahāratha. 大車。
【一〇】黔黎。支那式に黔首黎庶即ち人民を呼べるもの。
【一一】摩訶波羅 (Mahābala)
【一二】摩訶提婆 (Mahādeva)。
【一三】摩訶薩埵 (Mahāsattva)。

する無からんか」と。第二の王子復是の言を作すらく、「われ己が身に於て、初めより悋惜無し、恐らくは愛する所に於て、別離の苦有らんか」と。第三の王子、二兄に白して曰く、

「此は是れ神仙所居の處、われ恐怖と別離との憂無し。身心充徧して歡喜を生ず、當に殊勝にして諸の功德を獲べし。」

と。時に諸の王子、各本心に念へる所の事を說き、次に復た前み行くに、一虎の七子を生產して纔かに七日を經たるあるを見る。諸子圍繞して、飢渴に逼められ、身形羸瘦して、將に死せんとする久しからず。第一の王子是の如きの言を作す、「哀れなる哉、此の虎產みて來た七日、七子圍繞して食を求むるに暇無し。飢渴に逼められ、必ず還て子を啗はん」と。薩埵王子問うて言く、「此の虎每に常に食する所、何物なるか。」第一王子の答て曰く、

「虎・豹・豺・師子は、唯だ熱せる血肉を啗ふ。

更に餘の飮食の、此の虎の羸を濟ふべきなし。」

第二の王子、此の語を聞き已りて、是の如きの言を作す、「此の虎は、羸瘦して飢渴に逼められ、餘命幾くも無からん。我等何ぞ能く爲に是の如きの、得難き飮食を求めん、誰か復た斯の爲に、自ら身命を捨てて其の飢苦を濟はんや」と。第一の王子の言く、「一切捨て難きは、己が身に過ぎたる無し」と。薩埵王子の言く、「我等今は自己の身に於て各愛戀を生じ、復た智慧無くして、他に於て利

益を興すこと能はず。然るに上士ありて、大悲心を懷き、常に利他の爲めに、身を忘れて物を濟ふ。」復た是の念を作すらく、「われ今此の身は百千の生に於て虛く捨てて爛壞し、曾て益する所無し。云何が今日捨てて以て飢苦を濟ふこと、洟唾を捐つるが如くなる能はざらんや」と。時に諸の王子、是の議を作し已りて、各慈心を起し、悽傷愍念して共に羸虎を觀じ、目して暫くも移さず。徘徊すること久しくして、倶に捨てて去る。爾の時に薩埵王子便ち是の念を作す、「われ身命を捨つる、今正に是の時なり。何を以ての故に、

われ久より來た此の身を持す、臭穢膿流愛す可からず。敷具幷に衣食、象・馬・車乘及び珍財を供給し、變壞の法なる體に常無し。恒に求むれども滿たし難く保ち守り難し。常に供養すと雖も怨害を懷き、終に歸りて我を棄て恩を知らず。

復た次に、此の身は堅からず、我に於て益無く、畏る可きこと賊の如く、不淨なること糞の如し。われ、今日に於て當に此の身をして、廣大の業を修せしめ、生死海に於て大舟航と作り。輪廻を棄捨し、出離することを得しむべし。」復た是の念を作す、「若し此の身を捨つれば、則ち無量の癰・疽・惡疾、百千の怖畏を捨つ。是の身は唯だ大小の便利有りて、堅からざること泡の如く、諸蟲の集まる所、血・脈・筋・骨、共に相連持し、甚だ厭患す可し。是の故にわれ今當に棄捨して、以て無上の究竟涅槃を

求め、永く憂患無常の苦惱を離れ、生死休息し。諸の（一四）塵累を斷ち、（一五）定慧の力を以て、圓滿薫修して、百福莊嚴し一切智を成じ、諸佛の讃ずる所の微妙法身既に證得し已りて、諸の衆生に無量の法樂を施すべし」と。是の時に王子、大勇猛を興して弘誓の願を發し、大悲の念を以て其の心を增益す。彼の二兒、情に怖懼を懷き、共に留難を爲し、祈る所の果さざることを慮り、卽便ち白して言く、「二兄、前に去れ、われ且く後に於てせん」と。爾の時に王子摩訶薩埵、還りて林中に入り、其の虎の所に至り、衣服を脫ぎ去りて竹上に置き、是の誓を作して言く、

「われ法界の諸の衆生の爲に、無上菩提の處を志求す。
大悲心を起して傾動せず、當に凡夫所愛の身を捨つべし。
菩提は患無く熱惱無し、諸有る智者の樂ふ所なり。
三界の苦海の諸の衆生をして、われ今拔濟して安樂ならしめん」

と。是の時に王子、是の言を作し已りて餓虎の前に於て、身を委ねて臥す。

此の菩薩慈悲の威勢に由りて、虎も能く爲すこと無し。菩薩見已りて卽ち高山に上り、身を地に投ず。復た是の念を作すらく、「虎は今羸瘦して我を食すること能はず」と。卽ち起ちて刀を求むれども、竟に得ること能はず、卽ち乾竹を以て頸を刺し、血を出して、漸く虎邊に近づく。是の時に大地六種に震動して、風の水を激するが如く、涌き沒みて安らかならず、日は精明無くして（一六）羅睺の障の如く、

【一四】塵累。六塵卽色・聲・香・味・觸・法の煩累。

【一五】定慧力已下は報身を說き諸佛の讃ずる所已下法身、諸の衆生已下化身を明かす。

【一六】羅睺（Rāhu）。日月の蝕を起す惡星の名、羅睺の障は日蝕をいふ。

諸方暗蔽して復た光輝無く、天は名華及び妙香末を雨らし、繽紛として亂れ墜ちて林中に徧滿す。爾の時虚空に諸の天衆有り。是の事を見已りて隨喜の心を生じ、未曾有なりと歎じ、咸共に讃言すらく、

「善哉、大士」と。卽ち頌を說いて曰く、

「大士救護の悲心を運ぶに、等しく衆生を視ること一子の如し。
勇猛歡喜して情に悋む無く、身を捨てて苦を濟ふ福思ひ難し。
定んで（一七）眞・常・勝妙の處に至りて、永く生死の諸の（一八）纏縛を離れ、
久しからずして當に菩提の果を獲て、寂靜安樂にして無生を證すべし。」

と。是の時に餓虎、既に菩薩の頸下に、血の流るるを見て、卽便ち血を舐め、肉を噉み、皆盡し、唯だ餘骨を留む。

爾の時に第一の王子、地の動くを見已りて、其の弟に告て曰く、

「大地山河皆震動し、諸方暗蔽して日に光無く、
天華亂れ墜ちて空中に徧し、定んで是れ我が弟の身を捨てし相ならん。」

と。第二の王子、兄の語を聞き已りて、伽他を說いて曰く、

「われ薩埵の慈悲の語を聞く、彼の餓虎を見るに身羸瘦して、

（一七）眞・常・勝妙は法身の德相なり。
（一八）纏縛。十纏五縛等の名目あるも今は惣じて煩惱を指す、衆生を纏絡束縛して生死に在らしむるが故なり。

飢苦に纏はれ子を食はんことを恐る、われ今疑ふ弟其の身を捨てたるか。」と。時に二王子大愁苦を生じ、啼泣悲歎して、卽ち共に相隨うて、還りて虎處に至り、弟の衣服を見るに、竹枝の上に在り、骸骨及び髮、在處に縱横し、血は流れて泥と成り、其の地を霑ほし汙がす。見已りて悶絶して自ら持すること能はず。身を骨上に投じて、久しうして乃ち甦ることを得たり。卽ち起ちて手を擧げ、哀號大哭して、倶時に歎じて曰く、

「我が弟の貌端嚴にして、父母偏に愛念す。云何ぞ倶共に出でて、身を捨てて歸らざる。父母若し問ふ時は、我等如何が答へん。寧ろ同じく命を捐つ可し、豈に自ら身を存することを得んや。」と。時に二王子、悲泣し懊惱して漸く捨てて去る。時に小王子の將ゐる所の侍從、互相に謂て曰く、「王子何にか在ます。共に推求すべし」と。爾の時に國の大夫人は高樓の上に寢ね、便ち夢中に不祥の相を見る、兩乳は割かれ、牙齒墮落し、三の鴿鶵を得たるを、一は鷹の爲に奪はれ、二は驚怖を被れり。地の動く時、夫人遂に覺めて心大に愁惱し、是の如きの言を作す。

「何故に今時に大地動きて、江・河・林・樹皆搖震し、日に精光無くして覆蔽の如く、目瞤き乳動きて常の時に異なる。

箭の心を射るが如く憂苦逼り、徧身戰き掉きて安隱ならず。我の夢みる所は祥徵ならず。必ず非常の災變の事有ん。」と。夫人の兩乳、忽然として流出す。此を念ふに、必ず變怪の事有らん。時に侍女有り、外人の言を聞くに、「王子を求め覓むるに今猶ほ得ず」と。心大に驚怖して、卽ち宮中に入り、夫人に白して曰く、「大家知らずや、外に聞くに、諸人散じて、王子を覓め徧く求むれども得ず」と。時に彼の夫人是の語を聞き已りて、大憂惱を生じ、悲淚目に盈ち、大王の所に至り、白して言く、「大王、われ外人の是の如きの語を作すを聞く、我が最小所愛の子を失へり」と。王語るを聞き已りて、驚惶、所を失し、悲哽して言く、「苦しい哉、今日我が愛子を失ふ」と。卽便ち淚を拭ひ、夫人を慰喩し、告げて言く、「(九)賢首、汝憂慼すること勿れ、われ今共に出でて愛子を求覓せん」と。王と大臣と及び諸の人衆、卽ち共に城を出でて各各分散して、處に隨つて求覓す。未だ久しからざるの頃に、一大臣有り、前みて王に白して曰く、「王子在せりと聞く、願くは憂愁する勿れ、其の最小なるは今猶ほ見えず」と。王是の語を聞き、悲歎して言く、「苦しい哉、苦しい哉、われ愛子を失へり。

初め子有りし時には歡喜少く、後ち子を失へる時には憂苦多し、
若し我が兒をして重ねて壽命あらしめば、縱ひ我が身は亡ぼすとも苦と爲さず」

【九】賢首。人を呼ぶ敬語。

と。夫人聞き已りて憂惱纏懷すること、箭に中てられたるが如し。嗟歎して曰く、「我が三子幷に侍從、倶に林中に往きて共に遊賞す。最小の愛子獨り還らず、定んで乖離災厄の事有りしならん」と。次に第二の臣、王の所に來至す。王臣に問うて曰く、「愛子何くにか在る。」第二の大臣は懊惱啼泣し、喉舌乾燥して口に言ふこと能はず、竟に答ふる所無し。夫人問うて曰く、

「速に報ぜよ小子今何くにか在る。

我が身熱し惱み徧く燒き然され、悶亂荒迷して本心を失す。

我が胷をして今破裂せしむること勿れ。」

と。時に第二臣は卽ち王子捨身の事を以て具に王に白して知らしむ。王及び夫人は其の事を聞き已りて、悲噎に勝へず、捨身の處を望み、駕を駆せて前み行き、竹林の所に詣り、彼の菩薩の捨身の處に至り、其の骸骨の隨處に交り横はるを見て、倶時に地に投じて悶絶し、將に死なんとす。猶し猛風の大樹を吹き倒すが如し。心迷ひて緖を失ひ、都て知る所無し。時に大臣等、水を以て徧く王及び夫人に灑ぐに、良や久しうして乃ち甦り、手を擧げて哭咨嗟歎して曰く、

「禍なる哉愛子端嚴の相あり、何に因りてか死苦先に來り逼る。

我が若きは在ることを得て汝前に亡ぶ、豈に斯の如きの大苦の事を見んや。」

と。爾の時に夫人は迷悶稍や止み、頭髪蓬亂し、兩手をもて胷を搥ち、地に宛轉すること魚の陸に處

するが如く、牛の子を失するが若し。悲泣して言く、

「我が子を誰れか屠割せる、餘骨地に散せり。
われ愛する所の子を失うて、憂悲自ら勝へず。
苦しい哉誰か子を殺し、斯の憂惱の事を致せる。
我が心は金剛に非ず、云何ぞ破れざらん。
われ夢中に見る所、兩乳皆割かれ。
牙齒悉く墮落す、今大苦痛に遭ふ。
又三の鴿鶵を夢み、一は鷹に擒去せらる。
今愛する所の子を失ふ、惡相表ること虛に非ず。」

と。爾の時、大王及び夫人幷に二王子、哀を盡くして號哭して瓔珞を御せず。諸の人衆と共に菩薩の遺身の舍利を收め、供養を爲して窣塔波の中に置く。

阿難陀、汝等知るべし、此は即ち是れ彼の菩薩の舍利なり。』復た阿難陀に告たまはく、『われ昔時に於て煩惱・貪・瞋・癡等を具せりと雖も、能く地獄・餓鬼・傍生・五趣の中に於て、緣に隨ひて救濟して、出離することを得しむ。何に況や今時煩惱都て盡きて復た餘習無く、天人師と號し、一切智を具して一一の衆生の爲に、多劫を經て地獄の中に在り、及び餘處に於て衆苦を代り受けて、生死煩惱の輪廻を出

でしむること能はざらんや。」爾の時、世尊重ねて此の義を宣べんと欲して頌を說いて言はく、

(二〇)『われ過去世、無量無數劫を念ずるに、或る時は國王と作り、或は復た王子と爲る。

常に大施を行じ、及び愛する所の身を捨てて、生死を出離して、妙菩提の處に至らんことを願へり。

昔時大國有り、國主を大車と名づけ、王子を (二一)勇猛と名づく、常に施して心に悋む無し。

王子に二兄あり、(二二)大渠・大天と號す。三人同じく出遊し、漸くにして山林の所に至る。

虎の飢に逼めらるるを見、卽ち是の如きの心を生ず、此の虎飢火に燒かる、更に餘に食す可き無し。

大士の視ること斯の如し。恐らくは其れ將に子を食はんか。身を捨てて顧る所無く、子を救ひて傷つけざらしむ。

大地及び諸山、一時に皆震ひ動き、江海皆騰り躍り、波驚き水逆まに流れ。

天地光明を失して、昏冥にして見る所無し。林野の諸の禽獸、飛奔して所依を喪ふ。

二兄怪で還らず、憂感して悲苦を生じ、卽ち諸の侍從と與に、林藪徧く尋求す。

【二〇】五言及七言の偈通じて五十六頌、文辭流麗、巨細筆に隨ひ豐麗、讀みて重複に惱ます、譯文尙此の如し、梵文の妙に至りては彼の大史詩、摩訶婆羅多と匹敵し、而も其敬虔深慈の情貌に之に超ゆ。

【二一】勇猛は Sattva. 薩埵の譯語、韻文字句の都合上「大」の字を略せり。

【二二】大渠大夫は Mahābala, Mahādeva. の譯語なり。

兄弟共に籌議して、復た深山の處に往き、四顧するに有る所無く、虎の空林に處するを見るに、其の母幷に七子、口に皆血の汙れあり。殘骨幷に餘髮、縱橫として地中に在り。復た流血有りて、竹林の所に散在するを見る。二兒既に見已りて、心に大恐怖を生じ、悶絕して倶に地に躃れ、荒迷して覺知せず、塵土に其の身を坌し、(三)六情皆失念す。

王子の諸の侍從、啼泣して心に憂惱し、水を以て灑ぎて甦らしむるに、手を擧げて咷き哭す。

菩薩捨身の時、慈母宮内に在りて、五百の諸の婇女と、共に妙樂を受く。

夫人の兩乳、忽然として自ら流出し、徧體針をもて刺すが如く、苦痛して安きこと能はず。

欻ち失子の想を生じ、憂箭心を苦傷す。卽ち大王に白して知らしめ、斯の苦惱の事を陳ぶ。

悲泣して忍ぶに堪へず、哀聲もて王に向ひて說く、「大王今當に知るべし、われ大苦惱を生じ、

兩乳忽ち流出して、禁止すれども心に應ぜず、針をもて徧く身を刺すが如く、煩惋して胷破れんと欲す。

われ先に惡徵を夢む、必ず當に愛子を失ふべし。願くは王我が命を濟ひて、兒の存と亡とを知らしめたまへ。

夢に見たる三の鴿鶵の、小なるは是れ愛子なり。忽ち鷹に奪ひ去らる、悲愁具に陳べ難し。

【三】六情。眼耳鼻舌身意の六感覺。

われ今憂海に沒し、死に趣きて將に久しからざらんとす。恐らくは子の命全からざらん。願くは爲に速に求覓したまへ。

又外人の語を聞くに、小子を求むれども得ずと。われ今意安らかならず、願くは王我を哀愍したまへ。」

夫人王に白し已りて、擧身而も地に躃れ、悲痛して心悶絶し、荒迷して覺知せず。

婇女夫人を見るに、悶絶して地に在り、聲を擧げて皆大に哭し、憂惶して所依を失す。

王是の如きの語を聞き、憂を懷きて自ら勝へず。因て諸の群臣に命じて、所愛の子を尋求せしむ。

皆共に城外に出でて、處に隨ひて追覓し、啼泣して諸人に問へらく、「王子今何にか在る。今は存とやせん亡とやせん。誰れか去れる處を知る。云何が見ることを得しめて、我が憂惱の心を解かん。」

諸人悉く共に傳へ、咸「王子死せり」と言ふ。聞くもの皆傷悼し、悲歎の苦・裁し難し。

爾の時に大車王、悲號して座より起ち、卽ち夫人の處に就き、水を以て其の身に灑ぎたまふ。

夫人は水灑を蒙り、久しくして乃ち醒悟することを得、悲啼して以て王に問へらく、「我が兒は今在りや不や」と。

王夫人に告げて曰く、「われ已に諸人を使はして、四に向ひて王子を求めしむ、尙ほ未だ消息有ら

ず」と。

王又夫人に告げたまふ、「汝煩惱を生ずること莫れ、且く當に自ら安慰して、共に出でて追尋すべし」と。

王即ち夫人と與に、駕を嚴かにして前に進む。號慟の聲慼を悽み、憂心火の然ゆるが若し。士庶百千萬、亦王に隨ひて城を出で、各王子を求めんと欲し、悲號の聲絕えず。王は愛子を求めんが故に、目して四方を視る。見るに一人の來る有り、髮を被り身は血に塗れ、徧體に塵土を蒙り、悲哭して前に逆へ來る。王は是の惡相を見て、倍復た憂惱を生ず。王便ち兩手を擧げて、哀號して自ら裁せず。初めに一りの大臣あり、匆忙王の所に至り、進んで大王に白して曰く、「幸に願くは悲哀する勿れ。王の愛する所の王子、今求むと雖も未だ獲ざるも、久しからずして當に來至したまひて、以て大王の憂を釋かん。」王復た更に前み行き、次の大臣の至るを見る。

其の臣王の所に詣り、淚を流し王に白して曰く、「二子は今現に存し、憂の火に逼められたまふ。其の第三王子は、已に無常に呑まれたまひぬ。餓虎の初めて生めるを見たまへるに、將に其の子を食はんとす。

彼の薩埵王子は、此を見て悲心を起し、無上道を求めんことを願ひ、當に一切衆を度すべし。
想を妙菩提に繋け、廣大にして深きこと海の如し。卽ち高山の頂に上りて、身を餓虎の前に投じ
たまふ。
虎羸れて食すること能はず、竹を以て自ら頸を傷けたまふに、遂に王子の身を噉み、唯だ餘の骸
骨のみ有り」と。

時に王及び夫人、聞き已りて倶に悶絶し、心憂海に沒し、煩惱の火燒然す。
臣栴檀の水を以て、王及び夫人に灑ぐに、倶に大悲號を起し、手を擧げ胷臆を搥つ。
第三の大臣來りて、王に是の如きの語を白す、「われ二王子を見るに、悶絶して林中に在しぬ。
臣冷水を以て灑ぐに、爾乃ち暫くして蘇息したまへり。四方を顧視するに、猛火の周遍するが如
し。
暫く起ちて還た伏し、悲號して自ら勝へず、手を擧げて以て哀言し、
弟は希有なりと稱歎す」と。
王是の如きの說を聞き、倍憂火の煎るごとく增し、夫人は大に號咷
して、高聲に是の語を作す、
(二四)「我の小子偏に鍾愛す、已に(二五)無常の羅刹の爲に呑まる。餘に二子有りて今現に存するも、復

【二四】已上五言の偈を以て、層巒重濤の勢を以て叙し來り、玆に其最高調に達し、特に七言の頌に改む、造構等閑に觀ること勿れ。

【二五】無常の羅刹、死の鬼の意義、佛典には此譬諸處に出づ。

た憂の火に燒き逼めらる。

われ今速に山下に至るべし、安慰して其をして餘命を保たしめん」と。卽便ち駕を馳せて前路を望み、一心に彼が捨身の崖に詣る。

路に二子と逢ひ行く啼泣し、胷を搥ち懊惱して容儀を失す。父母見已りて憂悲を抱き、倶に山林の捨身の處に往く。

既に菩薩捨身の地に至り、共に聚りて悲號して大苦を生じ、瓔珞を脫ぎ去りて盡く心に哀しむ。菩薩の身の餘骨を收め取りて、諸の人衆と同じく供養し、共に七寶の窣堵波を造り、彼の舍利を以て函の中に置き、駕を整へ憂を懷きて城邑に趣きぬ。

(二六)復た阿難陀に告げたまはく、往時の薩埵は、卽ちわれ牟尼是なり。異念を生ずること勿れ。

王は是れ父の淨飯なり。后は是れ母の摩耶なり。太子を(二七)慈氏と謂ひ、次は(二八)曼殊室利なり。

虎は是れ(二九)大世主なり。五兒は(三〇)五苾芻なり、(三一)一は是大目連、一は是舍利子なり。

われ汝等の爲に說く、往昔の利他の緣、是の如きの菩薩の行は、成佛の因なり當に學すべし。

【二六】已下亦五言の偈に復す。

【二七】慈氏は彌勒菩薩 (Maitreya) なり。

【二八】曼殊室利 (Mañjuśrī)。普通文殊菩薩と云ふ。

【二九】大世主。梵に摩訶波闍波提 (Mahāprajāpatī) なり。世尊の姨母にして、母后崩御、親く鞠育の任に當りし婦人、本行集經を見よ。

【三〇】世尊に從ひ學道せし五比丘。卽ち憍陳如・婆須波・跋提迦・摩訶男・馬勝なり。

【三一】虎の七子中の二子。

菩薩捨身の時に、是の如きの弘誓を發す、「願くは我が身の餘骨、來世に衆生を益せん。此れ是の捨身の處、七寶の窣堵波は、以て無量の時を經て、終に厚地に沈まん」と。昔の本願力に由りて、緣に隨ひて濟度を興し、人天を利せんが爲に、地よりして湧出す。」

爾の時、世尊是の往昔の因緣を說きたまへる時、無量（三）阿僧企耶の人天大衆、皆大に悲喜して未曾有なりと歎じ、悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發す。復た樹神に告げたまはく、『われ報恩の爲の故に、禮敬を致す』と。佛、神力を攝むるに、其の窣堵波は還た地に沒しぬ。

【三】アサンキヤ Asaṅkhya. 無數と譯す。

十方菩薩讚歎品第二十七

爾の時、釋迦牟尼如來是の經を說きたまふ時、十方世界に於て無量百千萬億の諸の菩薩衆ありて、各其の本土より鷲峯山に詣で、世尊の所に至り、（一）五輪を地に著け、世尊を禮し已り、一心に合掌して、異口同音に讚歎して曰さく、

（二）『佛身は微妙の眞金色にして、其の光普く照して金山に等し。淸淨にして柔軟なること蓮華の若く、無量の妙彩而も嚴飾し、三十二相遍く莊嚴し。八十種好皆圓備す。光明炳かに著はれて與に等しきもの無く、垢を離るること猶し淨滿月の如し。其の聲は淸徹して甚だ微妙なり、師子吼して雷音を震ふが如し。（三）八種微妙にして群機に應じ、（四）迦陵頻伽等を超勝す。（五）百福の妙相以て容を嚴り、光明具足し淨くして垢無し。智慧は澄みて明かなること大海の如く、功德廣大にして虛空の若し。圓光十方界に遍滿し、緣に隨ひて普く諸の有情を濟ふ。煩惱・愛・染

【一】五輪。五體といふに同じ。

【二】已下七言の頌十一頌あり梵本と合す、その十頌は讚佛身の偈、最後の一頌は發願なり。支那の釋家十頌を三身に分屬するも、或は穿に過ぐ。

【三】八種の梵音聲。最妙・易了・深遠・柔軟・不妄・不誤・尊調和の八を梵摩喻經に擧ぐ。また不男・不女・不强・不輭・不淸・不濁・不雄・不雌の八とも十住斷結經に見ゆ。

【四】Kalaviṅka. 妙聲を有する印度の小鳥。

【五】百福は百の意思の業を云ふ。即ち初め五十思を起して福業牽引の根柢を作り、後に五十思を起して之を圓滿せしむるなり。五十思とは夫の不

集めて皆除き、法炬恒に然えて休息せず。
諸の衆生を哀愍し利益し、現在未來能く樂を與ふ。常に爲に第一義を宣說して、涅槃の眞寂靜を證せしめたまふ。
佛は甘露殊勝の法を說き、能く甘露微妙の義を與へ、甘露の涅槃城に引入して、甘露無爲の樂を受けしめ、
常に生死の大海の中に於て、一切衆生の苦を解脫し、彼をして能く(六)安隱の路に住せしめ、恒に難思の如意樂を與へたまふ。
如來の德海は甚深にして廣く、諸の譬喩の能く知る所に非ず。衆に於て常に大悲心を起し、方便精勤して恒に息まず。
如來の智海は邊際無く、一切の人天共に測量して、假令千萬億劫の中すとも、其の少分をも知ることを得る能はず。
われ今略して佛の功德を讃ず、德海の中に於て唯だ一渧なり。斯の福聚を廻らして群生に施す、皆願くは速に菩提の果を證せんことを。』
爾の時に世尊、諸の菩薩に告げて言はく、『善哉善哉、汝等善能く是の如く佛の功德を讃じ、有情を利益し、廣く佛事を興す。能く諸罪を滅して無量の福を生ぜん。』

殺生より不邪見に至る十善の修行に各離惡・勸道・讃美・隨喜・廻向の五を具足するが爲に五十思となるなり。

【六】安隱の路。八聖道を指す。

妙幢菩薩讚歎品第二十八

爾の時、(一)妙幢菩薩卽ち座より起ちて、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ、而も說讚して曰く、

(二)「牟尼百福の相圓滿し、無量の功德を以て身を嚴り、廣大淸淨にして人觀んことを樂ふ、猶し千日の光明の照すが如し。

焰の彩邊りなく光熾盛なり、妙寶聚の相の端嚴なるが如し。日の初めて出でて虛空に映ずるが如く、紅白分明にして金色を間ゆ。

亦金山の光普く照して、悉く能く百千の土に周遍するが如く、能く衆生の無量の苦を滅して、皆無邊勝妙の樂を與ふ。

諸相具足して悉く嚴淨なり、衆生觀んことを樂うて厭足すること無し。頭髮柔輭にして紺靑色なり、猶し黑蜂の妙華に集まるが如し。

大喜・大捨、淨く莊嚴し、大慈・大悲、皆具足す。衆妙の相好嚴飾を爲し、菩提分法の成ずる所なり。

如來能く衆に福利を施し、彼をして常に大安樂を獲しむ。種種の妙德共に莊嚴して、光明普

【一】Ruciraketu bodhisattva.

【二】已下八頌半あり、梵本と合す、但し梵本九頌あり、今譯第八頌の前半を缺けり。是原本の缺寫に依るか、古譯亦之を缺く、奇とすべし。

く千萬の土を照す。

如來の光明は極て圓滿にして、猶し赫日の空中に遍ずるが如し。佛は須彌の如く功德具はり、示現して能く十方に周し。

㊂如來の金口は妙に端嚴にして、齒白く齊密にして珂雪の如し。

如來の面貌は倫匹無くして、眉間の毫相常に右旋し。光潤鮮白にして玻瓈に等しく、猶し滿月の空界に居するが如し。』

佛、妙幢菩薩に告げたまはく、『汝能く是の如く、佛の功德の不可思議なることを讚じ、一切を利益し、未だ知らざる者をして隨順修學せしむ。』

【三】梵本此前に二句あり。Gokṣīra-śaṅkha-kumudendu samaibhāḥ, tuṣāra-padmābhāḥ supaṇḍara prabhā. 牛乳と螺貝と白睡蓮とに似、雪と蓮との光、黄白色の光。

菩提樹神讃歎品第二十九

爾の時、菩提樹神も亦伽陀を以て、世尊を讃じて曰さく、

(一)『如來清淨の慧を敬禮す、常に正法を求むる慧を敬禮す、能く非法を離るるの慧を敬禮す、恒に分別する無きの慧を敬禮す。

希有なり世尊の無邊なる行。希有にして見難きこと優曇に比す。希有なること海の(二)山王を鎮むるが如し、希有なり善逝の光無量なるとや。希有なり調御の弘慈の願。希有なり釋種の明なること日に逾ゆることや。能く是の如く經中の寶を説き、諸の群生を哀愍し利益す。

(三)牟尼は寂靜にして諸根定まり、能く寂靜にして涅槃城に入り、能く寂靜にして(四)等持門に住し、能く寂靜にして深境界を知る。

(五)兩足中の尊は空寂に住し、聲聞弟子身も亦空ず。一切の法體性皆無く、一切の衆生悉く空寂なり。

われ常に諸佛を憶念し、われ常に諸世尊を見ることを樂ひ、われ常に慇重の心を發起し、常に如來の日に値遇することを得ん。

【一】已下十一頌。大體原本と符合す。

【二】山王は梵文に依るに須彌山を指す。Aho ah) sāgara-Meru-utpannā

【三】已下二頌、寂靜(Śāntā シャーンター)の二字を縱横に使用し自利の用を讃ず。

【四】等持門。三昧狀態。

【五】兩足中尊は人類中の尊勝なり。此句法平等・衆生平等・所化平等・佛體平等の四平等を説き來る、深義高く眼を著けて見よ。

われ常に世尊を頂禮し、願うて常に渇仰して心捨てず、悲泣流涙し情に間無く、常に奉事することを得て厭ふことを知らず。

唯だ願くは世尊・悲心を起し、和顔にして常に我をして、佛及び聲聞衆の淸淨を見ることを得しめたまへ。願くは常に普く人天を濟ひたまへ。

〔六〕佛身は本淨くして虛空の若く、亦幻焔及び水月の如し、願くは涅槃甘露の法を說き、能く一切の功德聚を生ぜんことを。

世尊の所有ゆる淨境界、慈悲正行の不思議は、聲聞獨覺の量る所に非ず。大仙菩薩も測る能はず。

唯だ願くは如來我を哀愍し、常に大悲身を覩見せしめたまへ。三業倦むこと無く慈尊を奉し、速に生死を出でて眞際に歸らん。』

爾の時に世尊、是の讚を聞き已りて、梵音聲を以て樹神に告げて曰く、『善哉善哉、善女人、汝能く我に於て眞實にして妄無く、淸淨法身、自利利他の妙相を宣揚す。此の功德を以て汝をして速に最上菩提を證せしめ、一切の有情にして同じく修習する所、若し聞くことを得ん者は、皆甘露無生の法門に入らしめん。』

【六】佛身本淨くして言詮を絕する大空の如く、その百福の表現、幻焰水月の如し、大乘の佛身觀、說きて玆に盡く。

(一)大辯才天女讚歎品第三十

爾の時、大辯才天女、卽ち座より起ちて、合掌恭敬して、直に言詞を以て世尊を讚じて曰さく、

(二)『南謨釋迦牟尼如來、應正等覺、身は眞金色にして、咽は螺貝の如く、面は滿月の如く、目は青蓮に類し、脣口は赤好にして玻瓈色の如く、鼻は高く修直にして、金鋌を截せたるが如く、齒は白く齊密にして、(三)拘物頭華の如く、身光普く照して百千日の如く、光彩映徹すること(四)贍部金の如し。所有る言辭は皆謬無くして、(五)三解脫門を示し、三菩提の路を開く。(六)心常に淸淨にして、意樂も亦然なり。佛所住の處及び所行の境も、亦常に淸淨にして非威儀を離る。(七)進止謬ること無く、六年苦行して三たび法輪を轉じ、苦の衆生を度し彼の岸に歸らしむ。身相は圓滿にして(八)拘陀樹の如く、六度を熏修して三業に失無く、一切智を具して、自他の利滿ず。所有る宣說は常に衆生の爲なり、言虛設ならず。(九)釋種の中に於て大師子と爲り、堅固勇猛にして八解

【一】已下梵本之れを缺く。
【二】詩體を用ひず散文口語を以て讚佛す。
【三】Kumuda. 月昇の時開花の白蓮華。
【四】贍部金 (Jambunadasuvarna)。砂金の一種にして金中の最上とするもの。
【五】三解脫門。空と無相と無願。
【六】釋家、自性淸淨、離垢淸淨、得此道淨、生此境淨の四種淸淨を擧げて此句を解す、維摩に云ふ所の隨其心淨、卽佛土淨の句對照すべし、蓋し佛淸淨內證の德を讚する也。
【七】維摩に曰く、如來の所有進止威儀佛事にあらざるなしと、この謂也。
【八】拘陀樹。未だ考へず、或

脱を具したまふ。われ今力に随ひて、如來少分の功德を稱讚したてまつる、猶し蚊子の大海の水を飲むが如し。願くは此の福を以て廣く有情に及ぼし、永く生死を離れて無上道を成ぜん。』

爾の時に世尊、大辯才天に告げて曰はく『善哉、善哉。汝久しく修習して大辯才を具す。今復た我に於て廣く讃歎を陳ぶ。汝をして速に無上法門を證せしめ、相好圓明にして普く一切を利せしめん。』

は尼拘陀(Nyagrodha)の略呼か、此樹普覆一切を以て廣く佛經中に譬喩とせらる。

【九】 釋種中師子 (Syākyasimha)。普通釋師子と譯す、大小兩乘共に此尊號を用ふ、普通は釋迦族の大雄者の意なるも今釋種の意義を佛法大衆の意に見ば法王と同意義となるべし。

(一)付屬品第三十一

爾の時世尊、普く無量の菩薩及び諸の人天、一切の大衆に告げたまはく、『汝等當に知るべし、われ無量無數の大劫に於て苦行を勤修し、(二)甚深の法、菩提の正因を獲て、已に汝の爲に說けり。汝等誰か能く勇猛の心を發し、恭敬し、守護して、我が涅槃の後、此の法門に於て廣宣流布し、能く正法をして久しく世間に住せしめん。』爾の時に衆の中に六十(三)俱胝の諸大菩薩と、六十俱胝の諸天大衆とありて、異口同音に、是の如きの語を作す、『世尊、我等咸く欣樂の心有り、佛世尊の無量の大劫に於て勤修苦行して獲たまふ所の、甚深微妙の法、菩提の正因に於て、恭敬護持して、身命を惜まず、佛涅槃の後、此の法門に於て廣宣流布して、正法をして久しく世間に住せしむべし。』爾の時に諸の大菩薩卽ち佛前に於て伽陀を說いて曰さく、

(四)『世尊の眞實の語は、實法に安住す。彼の眞實に由るが故に、此の經を護持せん。

(五)大悲は甲冑たり、大慈に安住し、彼の慈悲力に由りて、此の經を護持せん。

(六)福の資粮圓滿して、智の資粮を生起す。資粮滿ずるに由るが故に、此の經を護持せん。

【一】此品梵本缺く。
【二】甚深の法、菩提の正因。この七字本經一部の大綱を提示す、高く眼を著けて見よ。
【三】俱胝(Koṭi)は億。
【四】已下五言の頌八偈。第一偈、絕對眞理善く久住す。
【五】第二偈、大慈悲の力護持を得。
【六】第三偈、福智の資粮圓滿するが故に久く護持を得。

(一三)諸佛此の法を證したまふ、恩を報ぜんと欲するが爲の故に、菩薩衆を饒益し、出世して斯の經を演べたまふ。
われ彼の諸佛に於て、恩を報じ常に供養して、是の如きの經、及以び持經の者を護持せん。』

爾の時、(一四)覩史多天子合掌恭敬して伽陀を說いて曰さく、
(一五)『佛是の如きの經を說きたまふ、若し能く持する者有らば、當に菩提の位に住し、覩史天に來生せしむべし。
世尊われ慶悅し、天の殊勝の報を捨てて、贍部洲に住し、是の經典を宣揚せん。』

爾の時、(一六)索訶世界主、梵天王合掌恭敬して、伽陀を說いて曰さく、
(一七)『諸の靜慮無量なり、諸乘及び解脫は、皆此の經より出づ、是の故に斯の經を演ぶ。
若し是の經を說く處、われ梵天の樂を捨てて、是の如きの經を聽かんが爲に、亦常に擁護を爲さん。

爾の時、魔王子あり、名づけて(一八)商主と曰へり。合掌恭敬して伽陀を

【一三】天帝釋の頌二首、主として報恩より護持を說く。蓋し無量壽經の自信敎人信、難中轉更難、大悲傳普化、眞成報佛恩と同意のみ。

【一四】覩史多(Tuṣita)。普通兜率天と呼ぶ、欲界の第四天なり。當來成佛の菩薩は皆此天にありと。現に彌勒は此天に說法しつつありとなす。

【一五】二頌、兜率來生を眼目とすると共に、本經護持の爲に此特殊の勝處を捨てんとす。

【一六】索訶(Sahā)。普通佛典の娑婆世界と同じ。梵天王(Brahman)は此世界の主なり、是印度の古神學に梵天を以て世界創造の主となすに基く。

【一七】二頌、禪定及解脫の根本として本經の擁護を說く、蓋し梵王は四禪の住地にあるが故に此頌を說く。

【一八】欲界第六天の主、是魔王

説いて曰さく、

『若し此の正義相應の經を、受持するもの有らば、魔の所行に隨はず、魔の惡業を淨除せん。

我等此の經に於て、亦當に勤めて守護し、大精進の意を發して、處に隨ひて廣く流通すべし。』

爾の時、魔王、合掌恭敬して、伽陀を說いて曰さく、

(一九)『若し此の經を持するもの有らば、能く諸の煩惱を伏せん。是の如きの衆生の類、擁護して安樂ならしめん。

若し是の經を說くもの有らば、諸魔便を得じ。佛の威神力に由りて、我當に彼を擁護すべし。』

爾の時、(二〇)妙吉祥天子も亦佛前に於て伽陀を說いて曰さく、

『諸佛の妙菩提は、此の經中に於て說く。若し此の經を持する者は、是れ如來を供養するなり。

われ當に此の經を持して、倶胝の天の爲に說き、聽聞する者を恭敬して、勸めて菩提の處に至らしめん。』

爾の時、(二一)慈氏菩薩、合掌恭敬して伽陀を說いて曰さく、

『若し菩提に住するものを見ば、與に(二二)不請の友と爲り、乃至身命を捨つとも、爲に此の經王を

なり、商主は Sarthavaha. 此名、また菩薩及天子の名として諸經に出づ。

【一九】第六天魔亦二頌を以てこの經の護持を說く。見るべし、此經の廣宣・斷じて魔障なきを。

【二〇】Mañjuśrī 文殊。

【二一】Maitreya. 彌勒。

【二二】不請の友は他の請求を待たずして之を資助するの意。

護らん。
われ是の如き法を聞きぬ。(二三)當に覩史天に往き、世尊の加護に由りて、廣く人天の爲に說くべし。』
爾の時、(二四)上座大迦葉波、合掌恭敬して伽陀を說いて曰さく、
(二五)『佛聲聞衆に於て、我が智慧鮮きを說き給ふ。我今自力に隨ひて、是の如きの經を護持せん。
若し此の經を持するもの有らば、われ當に彼を攝受して、其の詞辯力を授けて、常に隨ひて「善哉」と讃ずべし。』
爾の時、具壽阿難陀合掌して、佛に向ひて伽陀を說いて曰さく、
(二六)『われ親しく佛に從つて、無量の衆の經典を聞きたてまつるも、未だ曾て是の如きの、深妙法中の王を聞かず。
われ今是の經を聞き、親しく佛の前に於て受く。諸の菩提を樂ふ者のために、當に廣く宣通すべし。』
爾の時、世尊、諸の菩薩、人天の大衆各發心し、此の經典に於て流通し擁護し、菩薩を勸進し廣く衆生を利するを見たまひて、讃じて言はく『善哉、善哉、汝等能く是の如きの微妙の經王に於て、虔誠に流布し、乃至我が般涅槃の後に於て散滅せしめず。卽ち是れ無上菩提の正因にして、獲る所の功德は恒沙劫に於て說くとも盡すこと能はじ。若し苾芻・苾芻尼・鄔波索迦・

【二三】 彌勒常に覩史(兜率)にあり、故に此言あり。

【二四】 上座大迦葉波 (Sthavira Mahā-kāśyapa)。

【二五】 大迦葉上座と雖も、聲聞法の人なれば大乘至極の妙理を解するを得ず、故に唯影護善哉と讃するに止まる。

【二六】 阿難常に佛に侍して無量の經を聞く、故にこの二頌あり。

鄔波斯迦、及び餘の善男子・善女人等有りて、供養し、恭敬し、書寫し、流通して、人の爲に解說せば、獲る所の功德も亦復た是の如けん。是の故に汝等應に勤めて修習すべし。』

爾の時に無量無邊恒沙の大衆、佛の說を聞き已りて、皆大に歡喜し、信受して、奉行したりき。

付屬品第三十一

國譯金光明最勝王經 終

過去現在因果經解題

宋天竺三藏求那跋陀羅譯

本經、四卷に分たれ、中印度の沙門求那跋陀羅(Guṇabhadra、功德賢)が、元嘉二十一年—同三十年(西暦四四四—四五三)の間に、荊州辛寺に於て譯せる所。善慧仙人の布髮受記に始まりて、大迦葉の化度に終り、行文流暢、繁簡宜しきに適し、多くの佛傳中の優たるものなり。

【譯者小傳】 功德賢は婆羅門種として、沙門禁絕の家に生れ、反佛敎的空氣の中に生長せしが、偶雜心を見て驚悟する所あり、潛に遁れて佛敎に出家し、具戒を受け、三藏に通せり。既にして小乘を辭し大乘を學び、師命に從ひ經匣を探りて、大品・華嚴を得、これを讀誦し講義して、摩訶衍(Mahāyāna、大乘)の號を以て呼ばるるに至れり。緣熟して、師子國(Siṃhala、錫蘭島)より、海に汎びて東し、難に遇へば、十方佛を念じ、觀音を稱し、劉宋の元嘉十年乙亥(四三五)を以て廣州に達す。時に、年四十二歲なり。刺史車朗、表して之を朝に聞す。乃ち迎へられて楊都

祇園寺に住し、名僧慧嚴・慧觀これを勞ふ。文帝、請して深く崇敬を加へ、碩學顏延之・大將軍彭城王義康・南譙王義宣、彼に師事す。寶雲傳譯、慧觀の執筆によりて、祇園寺に雜阿含經・東安寺に法鼓經、丹楊郡に於て、元嘉十三年を以て勝鬘經、道場寺に於て、同二十年を以て、楞伽經を譯出せり。譙王が荊州を鎭するや、その請によりて、伴はれて荊州に到り、辛寺に止住すること十年。此間に於て華嚴經等を講じ、四十餘部百餘卷を譯出せり。本經も亦其の一なり。譙王が逆を謀りて誅に伏するや、孝武帝に迎へられて禮遇を受け、明帝の泰始四年(四六八)、七十五歳にして入寂す。臨終の日、天華聖像を見るといひ、延佇して之を望めりとぞ。彼が大品・華嚴に通じ、勝鬘・楞伽を譯し、十方佛を念じ、觀音名を稱へ、臨終に天華聖像を望見せるを案ずるに、學は大小に亙れりと雖も、解に於ては如來藏說、行に於ては往生淨土を期せるは疑なし。

【內容】本經は、唯四卷に分つのみ、品を分たず。今、その主要條項を擧ぐれば、左の如し。

第一卷—普光佛本生(善慧仙人布髮受記)・生兜率天・下生託胎・誕生・瑞應・占相・三時殿・母后生天・學諸書藝。

第二卷—競試武藝・灌頂太子・閻浮樹下思惟・納妃・四門遊觀・出家・苦行林一宿・宮中悲慟。

第三卷—王師大臣追尋・頻王迎見・問道二仙・六年苦行・捨苦行・菩提樹下・降魔・成道・梵天勸請・向鹿野苑・二商供養・優波伽外道・目眞龍王・度五比丘。

第四卷―度耶舍・度三迦葉・頻王歸佛・竹園精舍建立・度舍利弗目犍連・度大迦葉。

冠首の普光佛といふは、恐くは Dīpaṁkara の譯にして、善慧といふは、Sumedha の譯なるべく、末尾に至りて、善慧仙人とは卽我身是云云を以て結ぶ。

本經の結構内容・頗る馬鳴菩薩造佛所行讚に類す。卽ち太子出家以後、白馬揵陟を中心としての宮中悲慟の如き、阿羅邏仙人の數論の敎理の如き、降魔成道の下に於ける魔王の三女、負多神の讚嘆の如き、樹下思惟の十二因緣・八正道の如き、頻王に對する說法の如き、何も佛所行讚に同じく、唯、散文と韻文との差あるのみにて、これ、かの韻文を散文とせしものか、或は此散文の如きものが基礎となりて、彼の有名なる大作あらしめたるものか、いづれにせよ、兩者の間に必然の關係あるを想像せしむ。

蓋し、所行讚の結構のみを抽き出し、これに一層多く大乘の色彩を帶びしめたるものか。西藏大藏中に、之を缺くといふ。

譯者　常盤大定識

國譯過去現在因果經

卷の第一

是のごとく我聞けり。一時、佛、(一)舍衞國の(二)祇樹給孤獨園に在しぬ。爾の時、世尊、諸の(三)比丘と、竹林に住したまふ。

この諸比丘、晨朝時に於て、衣を著け鉢を持し、城に入りて食を乞ひ、還、所住に歸り、食し竟りて澡漱し、各衣鉢を攝し、集りて講堂に在り、悉く共に過去の因緣を說かんと欲す。爾の時、世尊、淨天耳の、世間に超えたるを以て、諸比丘の語論の聲を聞き、卽ち座より起ちて、講堂の上に到り、衆中に坐して、諸比丘に問ひたまふ『汝等、共に集りて、何の法をか說かんと欲する。』時に、諸比丘、卽ち佛に白して言ふ、『世尊、我等、食し竟りて、澡漱已に訖るが故に、共にここに集りて、各、過去の因緣を聞きつ說きつせんと欲す。』是の時、世尊、諸比丘に語りたまふ、『汝等、過去の因緣を聞かんと樂はば、諦かに聽き諦

【一】Śrāvastī（シユラーヴスティー）
【二】Anāthapiṇḍadasyārāma（アナータピンダダシヤーラーマ）。祇陀太子が樹林を、給孤獨長者が精舍を、布施せるもの。園は精舍に同じ。
【三】Bhikṣu（ビクシユ）

かに聽きて、善くこれを思念せよ。今、汝が爲に說かん。』比丘白して言ふ、『唯然り、世尊、願樂して聞かんと欲す。』

【布髮受記】佛、比丘に告げたまふ。『過去無數(四)阿僧祇劫に、爾の時、一仙人ありき。名けて(五)善慧と曰ふ。梵行を淨修して、(六)一切種智を求め、此大智を成就せんと欲するが爲の故に、生死に處るを樂しみ、(七)五道に周遍して、一身死壞して、復一身を受け、生死無量なること、譬へば天下の草木を盡して、斬りて以て籌と爲し、其故の身を數へんに、窮盡する能はざるが如し。──それ天地の始終を極むるを、これを一劫と謂ふ。而してその天地の成壞を經るものや、稱げて載すべからず。──群生の、愛欲に耽惑し、苦海に沈流するを感傷して、慈悲心を起して、これを拔濟せんと欲するが所以なり。』

『又、この念を作さく、「今、諸の衆生の、生死に沒して自ら出る能はざるは、皆(八)貪欲・瞋恚・愚癡に由りて、(九)色・聲・香・味・觸・法に樂著するが故なり。我當に決定して、そがこの病を斷ずべし」と。諸趣

【四】Asaṁkhyeya-kalpa（アサンキエーヤカルパ）。無數長時と譯す。

【五】Sumedha（スメーダ）

【六】一切の法を知了する智慧。一切智に同じ。もし、之を區別する時は、一切智は平等界の空性を見るもの、一切種智は差別界の事相を見るものなり。

【七】地獄・餓鬼・畜生・人間・天上をいふ。迷の全體なり。修羅を別立する時は、六道といふ。

【八】これを三毒の煩惱といふ、一切の煩惱の根本なり。

【九】これを六境といふ。眼・

に生ると雖も、この念を忘れず、諸の衆生に於て怨親平等に、(一〇)布施を以て貧窮を攝し、持戒もて毀禁を攝し、忍辱もて瞋恚を攝し、精進もて懈怠を攝し、禪定もて亂意を攝し、智慧もて愚癡を攝し、是の如く、長夜に、衆生を增益して、普ねく一切の爲に、歸依と作り、諸の如來に於て、恭敬供養し、法を聽かんを樂欲し、また他の爲に說き、常に(一一)四事を以て、衆僧に奉給し、(一二)佛・法・衆に於て、尊重守護す。是の如きの諸行や、稱げて數ふべからず。』

『爾の時、王あり、名けて燈照と曰ひ、城を(一三)提播婆底と名く。その國の人民、壽八萬歲、安隱豐樂、極めて熾盛にして、所欲の自在なること、猶、諸天の如し。時に彼の國王、正法もて世を治めて、人民を枉げず、殺戮楚撻の苦あることなく、諸の人民を視るや、一子の如し。時に、燈照王、始めて太子を生む。端嚴比なく、威德具足して、(一四)三十二相八十種好あり。初生の日、四方皆明にして、日月珠火も、また用を爲さず。王、太子にかくの如きの瑞あるを見、卽ち諸臣を召して、共に集り議して言ふ、「太子の初めて生るるや、この奇特あり。太子の爲に、何等の名をか作すべ

耳・鼻・舌・身・意の六識の對境なり。

【一〇】布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を六波羅蜜といふ。大乘菩薩の行法なり。

【一一】供養に用ふる四種。或は房舍・衣服・飲食・華香をいひ、或は飲食・衣服・臥具・湯藥をいひ、或は衣服・飲食・散華・燒香をいふ。

【一二】三寶なり。

【一三】Devapati デーヴパテイ

【一四】兩者を合して、相好といふ。よきすがた。大なるを相といひ、小なるを好といふ。

き。」諸臣答へて言ふ、「太子を名けて、以て(一五)普光と爲したまふべし。」また、相師を召して、これを占相せしむ。相師答へて言ふ、「今、太子を觀るに、もし在家せば、轉輪王と爲りて、四天下を統べん。もし出家せば、天人の尊と爲りて、(一六)薩婆若を成ぜん。」王及び夫人、後宮の婇女、相師の言を聞きて、この太子に於て、深く愛念を生じ、また(一七)天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等も、供養恭敬し、尊重讚歎しぬ。』

『この時、太子、後宮に在りて、夫人・婇女の爲に、種種の法を說き、年二萬九千歲に至りて、轉輪王の位を捨て、その父母に啓して、出家せんことを求め欲す。既に聽かれず、乃至、三たび請うて、猶尚許されざるも、太子の慈悲や、志、拯濟に存し、その小違を忍びて、以て大願を成ぜんとて、卽便ち山林の樹下に往詣して、鬚髮を剃除し、法服を服著して、苦行を勤修すること、滿六千歲、(一八)阿耨多羅三藐三菩提を成じて、諸天人、及び八部衆の爲に、(一九)法輪を轉じ、――この輪や、微妙にして、一切世間の天・人・魔・梵の轉ずる能はざる所――

【一五】Dīpaṅkara。普通に燃燈又は錠光と譯す。
【一六】Sarvajña。一切智。
【一七】天(Deva)。龍(Nāga)。夜叉(Yakṣa)。乾闥婆(Gandharva)「天の樂神」。阿修羅(Asura)。迦樓羅(Garuḍa)「金翅鳥」。緊那羅(Kiṃnara)「人非人」。摩睺羅伽(Mahoraga)「大蟒神」。以上を八部衆といふ。人非人は、緊那羅の事にいふと、ここの如く、八部衆の眷屬を總稱するとあり。
【一八】Anuttarasamyaksambodhi。無上正遍知と譯す。
【一九】說法のこと。說法もて一

〔一〇〕三乘の法を以て、衆生を敎化し、利益したまふべき所、稱げて數ふべからず。』

『爾の時、父王及び夫人、後宮の婇女、太子普光の、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまへるを聞き、心に大に歡喜して、踊躍すること無量なり。爾の時、群臣、國内の人民・婆羅門等、太子の道の成ぜるを聞き、心に各念言す、「太子普光、轉輪王の位を捨て、鬚髮を剃除し、法服を被著して、出家修道し、正覺を成ずるを得たり。我等、今、亦、當に出家すべし。」この念を作し已りて、悉く皆普光佛の所に至る。爾の時、普光如來、卽ちその心を觀じ、その因緣に隨つて、爲に法を說きたまへば、大臣・婆羅門等、四千人ありて、〔一一〕阿羅漢を成じ、國中の人民、及餘の四方の諸の來會衆、八萬人ありて、亦〔一二〕無著法忍を得たり。』

〔一三〕爾の時、普光如來、八萬四千の諸阿羅漢と、與に國界に往詣して、遊行敎化す。父王聞き已りて、心に大に歡喜し、卽ち國中に勅して、道路を平治し、香水を地に灑ぎ、諸の繒綵の寶幢・幡・蓋を懸け、衆の名華を散じ、是の如く莊嚴すること、滿十二〔一四〕踰闍那なり。又復、鼓を擊ち

切の疑網を摧破するを、輪寶の一切の障礙を擊破するに喩ふ。

〔一〇〕聲聞・緣覺・菩薩に對する、四諦・十二因緣・六波羅蜜の法をいふ。

〔一一〕Arhan。應供と譯す。一切世間の供養に應ずるに堪ふべき聖果をいふ。

〔一二〕無著は執著なきこと、忍は忍可決定して、確實に悟ること。

〔一三〕以下全部佛說なれば、『』の符號を略す。

〔一四〕Yojana。印度の里數の單位。

て、國内に唱令す、『諸、華あるもの、私に賣るを得ざれ。悉く輸りて王に與へよ。』幷に人民に勅す、『我に先ちて佛を供養するを得ざれ。』卽ち大臣を遣はし、幷に伎樂を作し、燒香散華しつつ、往いてかの普光如來を請じまつる。

爾の時、善慧仙人、山中に在りて、五の奇特の夢を得たり。一には、大海に臥すと夢み、二には、〔三五〕須彌に枕すと夢み、三には、海中の一切衆生、その身内に入ると夢み、四には、手に日を執ると夢み、五には、手に月を執ると夢む。この夢を得るや、卽ち大に驚き寤め、心に自ら念じて言ふ、『我が今のこの夢は、小緣と爲すべからず。以て誰にか問ふべき。宜しく城内に入りて、諸の智者に問ふべし。』この念を作し已りて、鹿皮の衣を被、手に水瓶、及び杖・繖蓋を執り、行いて城邑に入らんとて、路に外道の止住する處を過ぐ。五百人ありて、上首たり。善慧念じて言ふ、『我、今、夢みる所を以て、これに問ふべし。幷にその修する所の業を觀るを得ん。』卽ち諸人と、道義を講論して、その異見を破す。時に五百人、卽便ち屈を受け、弟子たらんを求め、善慧の所に於て、深く恭敬を生じ、各銀錢一枚を以て、これに上つる。復五百の外道あり。既に善慧の辯才聰明なるを見て、また隨喜を生じ、共に議して言ふ、『今や、普光如

【三五】Sumeru。妙高山と譯す。印度世界說に於て、世界の中心にある大山。蓋し雪山の理想化なり。

來、世に出興したまふ。』善慧仙人、この語を聞くや、擧體の毛竪ち、心大に歡喜して、踊躍無量にして、便ち外道と分別れて去る。外道問うて言ふ、『師、何くにか趣く。』答へて言ふ、『我、今、普光佛の所に往きて、供養を施さんと欲す。』外道白して言ふ、『師もし去らば、願樂はくは隨從はん。』善慧答へて曰く、『我、今、緣あり。宜しく先づ行くべし。』爾の時、善慧、五百の銀錢を齎し、路に隨つて去る。諸の外道衆、悲戀懊惱し、辭別して歸る。

善慧、前に至りて、王の家人の、道路を平治し、香水を地に灑ぎ、幢・幡・蓋を列し、種種に莊嚴するを見、卽便ち問うて言ふ、『何の因緣の故に、この事を作すか。』王の人、答へて言ふ、『世に佛ありて興ります。名けて普光といひたまふ。今、燈照王、請じ來りて城に入りたまはんとす。所以に、忽忽に道路を莊嚴す。』善慧、卽ちまたかの路人に問ふ、『汝、何處にか諸の名花あるを知るや。』答へて言ふ、『道士、燈照大王、鼓を擊ちて國內に唱令す、名花は皆賣るを得ざれ。悉く以て王に輸れと。』善慧聞き已りて、心大に懊惱し、意猶息まずして、苦に花所を訪ぬ。俄爾、卽ち王家の〔三六〕靑衣の、密に七莖の靑蓮花を持ちて過ぐるが、王の制令を畏れて、藏めて瓶中に著くに遇ふ。善慧の至誠、その蓮花に感じ、踊りて瓶の外に出づ。善慧遙かに見て、卽ち追ひ呼んで曰く、『大姉、且く止まれ。こ

【三六】大家に奉仕する女子。

の花、賣るや不や。』青衣、聞き已りて、心に大に驚愕し、自ら念言す、『花を藏むること甚だ密なるに、この何の男子ぞ、乃ち我が花を見て、買はんを求索むるか。』顧みてその瓶を看れば、果して花の出づるを見、奇特の想を生じ、答へて言ふ、『男子よ、この青蓮花は、當に宮內に送るべし。以て佛に上らんと欲するも、得べからず。』善慧また言ふ、『請ふ、五百の銀錢を以て、五莖を雇はんのみ。』青衣、意に疑ひ、また、自ら念言す、『この花の直する所、數錢に過ぎざるに、今、男子、乃ち銀錢五百を以て、五莖を買はんを求むるとは。』卽ちこれに問うて言ふ、『この花を持ちて、用て何等をか作さんと欲する。』善慧答へて言ふ、『今、如來ありて、世に出興したまひ、燈照大王請じ來りて城に入りまさんとす。故に、この花を須て、以て供養せんと欲す。大姉、當に知るべし、諸佛如來は、値遇すべきこと難し、〔二七〕優曇鉢花の、時に乃ち一たび現はるるが如しと。』青衣又問ふ、『如來を供養して、何等を求むることをか爲す。』善慧答へて曰く、『一切種智を成就して、無量の苦の衆生を度脫せんと欲するが爲の故に。』爾の時、青衣、この語を聞くを得て、心に自ら念言す、『今この男子、顏容端正、鹿皮の衣を被、纔に形體を蔽ふのみにて、乃ち爾く至誠にして、錢寶を惜まざることよ。』卽ちこれに語りて曰く、『我、今、この花を以て相與ふべし　願はくは、

〔二七〕Udumbara。靈瑞華と譯す。輪王、及び佛陀の出世の時のみ、開くといふ。

我、生生、常に君が妻たらん。』善慧答へて言ふ、『我、梵行を修し、(二八)無爲の道を求む。生死の縁を相許すを得ず。』青衣卽ち言ふ、『もし、我がこの願に從はずんば、花は得べからず。』善慧また曰く、『汝、もし、決定して、我に花を與へずんば、當に汝が願に從ふべし。我は布施を好みて、人意に逆はず。もし、來りて、我より、頭・目・髓腦と、及び妻子とを乞ひ求むるあらしむるも、汝、閡を生じて、吾が施心を壞る莫れ。』青衣、答へて言ふ、『善い哉、善い哉、敬んで來命に從はん。今、我、女、弱くして、前むを得る能はず。請ふ二花を寄せて、以て佛に獻ぜん。我をして生生、好醜ともに離れずとの、この願を失はざらしめ、必らず心中に置いて、佛のこれを知らしめたまはんを。』

爾の時、燈照王、その諸子、及び衆くの官屬・婆羅門等と、好香の花、種種の供具を持ちて、出でて普光如來を迎へ奉り、擧國の人民、亦皆隨從す。この時、善慧の五百の弟子、共に相謂つて言く、『今日、國王、及び諸の臣民、悉く皆普光佛の所に往詣す。大師、今、また、當に已に去るべし。我等、宜しく、彼に往きて、敬禮すべし。』この語を作し已りて、卽ち共に倶に行く。道に在る、未だ遠からずして、善慧に逢ひ見、師徒相遇うて、喜悅無量、卽ち共に同じく普光佛

【二八】爲は爲作造作。本來常住にして、造作せられたるものにあらざるを無爲といふ。常住涅槃をいふ。

の所に詣る。燈照王が、已に佛前に到り、最も初に在りて供養禮拜するを得、是の如く次第して、諸大臣に至るまで、また各禮敬し、幷に名花を散ずるに、花悉く地に墮つるを見る。

時に、善慧、五百の弟子と與に、諸人衆の供養し畢るを見已りて、如來の相好の容を諦觀し、また、諸の苦の衆生を濟拔せんと欲し、また、一切種智を滿足せんと欲するが故に、卽ち五莖を散ずるに、皆空中に住まりて、化して花臺と成り、後に二莖を散ずるに、また、空中に止まりて、佛の兩邊を夾む。爾の時、國王、及びその眷屬一切の臣民、天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等、この奇特を見て、未曾有と歎ず。是に於て、普光如來、無礙智を以て、善慧を讃じて言はく、『善哉善哉、善男子、汝、この行を以て、無量阿僧祇劫を過ぎて、當に成佛を得て、〔二九〕釋迦牟尼如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號すべし。』善慧が〔三〇〕記を受くる時に當り、無量の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等、衆の妙花を散じて、虛空の中に滿たしめ、誓を發して言ふ、『善慧が將來に佛道を成せん時、我等、皆、願はく

【二九】Śākyamuni。能仁寂默と譯す。如來(Tathāgata)。應供(Arhat)。正遍知(Samyak-sambodhi)。明行足(Vidyā-caraṇa-sampanna)。善逝(Sugata)。世間解(Lokavid)。無上士(Anuttara)。調御丈夫(Puruṣa-damya-sārathi)。天人師(Deva-manuṣya-śāstṛ)。佛(Buddha)。世尊(Bhagavat)。以上を佛の十號といふ。

【三〇】委しくは、記莂といふ。豫言なり。

は、その眷屬と爲らん。』この時、普光如來、即ちこれを記したまひて曰く、『汝等、皆當にその國に生るるを得べし。』

爾の時、如來、既に記を授け已りて、猶、善慧が、仙人の髻を作し、鹿皮の衣を披るを見たまひ、如來、この服儀を捨てしめんと欲して、即便ち地を化して、以て淤泥と爲す。善慧、佛のここより、行くべくして、地の濁濕するを見、心に自ら念言す、『云何ぞ乃ち（三一）千輻輪の足をして、これを蹈んで過ぎしめん。』即ち皮衣を脱して、以用て布施するに、泥を掩ふに足らず。仍てまた髮を解きて、また、以てこれを覆ふ。如來、即便ちこれを踐んで度り、因つてこれを記したまふ。曰く、『汝、後に佛を得るや、（三二）五濁惡世に於て、諸の天・人を度せんこと、以て難しと爲さず。必らず我の如くなるべし。』時に善慧、この語を聞き已りて、歡欣踊躍し、喜び自ら勝へず。即時に即ち一切法空を解し、（三三）無生忍を得、身、虚空に昇り、地を去る七多羅樹、偈を以て佛を讚ず。

『今世間の導を見るや、我をして慧眼を開かしめ、

【三一】 三十二相の一。佛足の裏に、千の輻輪の文ありといはる。

【三二】 五つのけがれて、いまはしき事

劫濁（劫は時、時の下る事）。見濁（人の考のあしき事）。煩惱濁（煩惱の盛なる事）。衆生濁（人の德行のなき事）。命濁（命の短くなる事）。

【三三】 無生法忍の略。法空智をいふ。即ち生滅の法を空して、不生不滅の法を忍可決定するなり。

爲に清淨の法を說いて、一切の著を去離せしむ。
今天人の尊に遇ふや、我をして無生を得しむ。
願はくは將來に果を獲て、亦（三四）兩足尊の如くならん。』

この時、善慧、この讚を說き已りて、空中より下りて、佛前に到り、（三五）五體を地に投じて佛に白して言く、『唯、願くは、世尊、我を哀愍するが故に、我が出家を聽したまへ。』爾の時、普光如來、答へて言はく、『善哉、善來比丘。』鬚髮自ら落ち、（三六）袈裟身に著きて、卽ち（三七）沙門と成りぬ。

爾の時、二の貧窮老人あり。各、親屬一百人と倶なり。佛の相好の、威德嚴顯なるを視、自ら貧乏にして、以て供養するなきを傷む。是の時、如來、その心の至れるを愍み、卽ち前地を化して、諸の草穢を生じ、二貧人をして、地の不淨を見、歡喜の心を發して、便ち灑掃せしむ。普光如來、これを記したまうて、曰く、『汝、無量阿僧祇劫を過ぎて、釋迦牟尼佛の、世に出興せんとき、汝等、當に第一聲聞弟子と作るべし。』

【三四】又、二足尊といふ。二足を有する生類中にて、最も尊き人をいふ。

【三五】兩手・兩膝・頭のこと。これを地に著くるは、印度の最敬禮なり。又、五輪著地ともいふ。

【三六】Kaṣāya（カチャーヤ）。染色衣と譯す。食ふべからざる草木の皮葉花を以て染む。出家の正衣。

【三七】Śramaṇa（シュラマナ）。勤息と譯す。善法を勤修して、惡法を止息すればなり。

爾の時、普光如來、貧人を記し已りて、八萬四千の比丘、及び燈照王、幷に(三八)婆羅門、諸の臣民等と、前後に圍繞せられて、提播婆底城に入りたまふ。時に、燈照王、その眷屬と、四事を以て、普光如來、幷に及び八萬四千の比丘を供養し、四萬歳を經て、王卽ち位を捨て、以てその子に付し、その眷屬、及び、夫人の眷屬、各八萬四千人と、同じく佛法に於て、出家修道し、(三九)陀羅尼諸法(四〇)三昧を得たり。善慧比丘、亦、普光如來に隨つて、王の供養を受け、滿四萬歳にして、諸法中に於て、深三昧を得、衆生を敎化せること、稱げて數ふべからず。

爾の時、善慧比丘、普光如來に白して言く、『世尊、我、昔日に於て、深山の中に在りて、五の奇特の夢を得たり。一には、大海に臥すと夢み、二には、須彌に枕すと夢み、三には、海中の一切衆生の、我が身內に入ると夢み、四には、手に日を執ると夢み、五には、手に月を執ると夢みき。唯、願はくは、世尊、我が爲に、この夢の相を解說したまへ。』爾の時、普光如來、答へて言はく、『善哉。汝もしこの夢の義を知らんと欲せば、汝が爲に說くべし。大海に臥すと夢みたるは、汝が身、卽ち時に生死の大海の中に在るなり。須彌に枕すと夢みたるは、生死

【三八】Brāhmaṇa。淨行と譯す。印度四姓の最高位にあるもの、或は他姓にても、淨行を勤修して、嘉納せられたるものにもいふ。

【三九】Dhāraṇī。總持と譯す。善法を持して散ぜざらしむること。

【四〇】Samādhi。等持と譯す。心を一境に止めて、動かざるにいふ、禪定の極なり。

を出でて、(四一)般涅槃を得るの相なり。大海中の一切衆生の、身内に入ると夢みたるは、生死の大海に於て、諸の衆生の爲に、歸依處と作るべきなり。手に日を執ると夢みたるは、智慧の光明、普く(四二)法界を照すなり。手に月を執ると夢みたるは、(四三)方便智を以て、生死に入り、清淨の法を以て、衆生を化道して、惱熱を離れしむるなり。この夢の因縁は、これ汝が將來成佛の相なり。」善慧聞き已りて、歡喜踊躍し、自ら勝ふる能はず、佛を禮して退く。

爾の時、普光如來、復、少時を經て、般涅槃に入りたまふや、善慧比丘、正法を護持する、滿二萬歲、三乘の法を以て、衆生を敎化し、利益する所のもの、稱計すべからず。爾の時、善慧比丘、彼に於て命終して、卽便ち上生して、(四四)四天王と爲り、三乘の法を以て諸天衆を化し、彼の天壽を盡して、人間に下生し、(四五)轉輪聖王と爲りて、四天下に王として、七寶具足す。一に金輪寶、二に白象寶、三に紺馬寶、四に神珠寶、五に玉女寶、六に主藏臣寶、七に主兵臣寶なり。千子具足して、皆悉く勇健にして、能く怨敵を伏す。正法を以て治めて、諸

【四一】 Parinirvāṇa。寂滅・圓寂など譯す。一切の障礙・擾亂の止滅して、絕對の自由安隱に入れる境地をいふ。

【四二】 宇宙をいふ。これに事・理を分ち、また事理の關係に於て、不離相卽を說く。

【四三】 方便卽菩提にして、善巧の方便もて、衆生を化益するを道となすをいふ。方便Upāya に種種の意味あれども、これは善き方法によりて他を導くこと。

【四四】 須彌山の四方を鎭護する天王。欲界六天の第一。

【四五】 須彌四洲、卽ち人間世界を統領する大帝のこと。輪寶を轉じて、一切を威服するを

の憂惱なく、常に、(四六)十善を以て、諸の人民を化し、ここに於て壽終り、(四七)忉利天に生れて、彼の天主と爲り、壽終り、下生して、轉輪聖王と爲り、その壽命を終へて、乃至、第七(四八)梵天に生れぬ。上りて天主と爲り、下りて聖主と爲ること、各三十六反、その間に、或は仙人と爲り、或は外道(四九)六師と爲り、或は婆羅門と爲り、或は小王と爲り、是の如く變現すること、稱げて數ふべからず。

【生兜率天】爾の時、善慧菩薩功行滿足して、位(五〇)十地に登り、(五一)一生補處に在りて、一切種智に近づくや、(五二)兜率天に生れて、(五三)聖善白と名く。諸天主の爲に、一生補處の行を說き、また(五四)十方國土に於て種種の身を現じて、諸衆生の爲に應に隨つて法を說き、下りて作佛すべき期運將に至らんとして、卽ち五事を觀ず。一には、諸衆生の熟すると未だ熟せざるとを觀じ、二には、時の至ると未だ至らざるとを觀じ、三には、諸國土の、何れの國か中に處するを觀じ、四には、諸種族の、何の族か貴盛なるを觀じ、五には、過去の因緣、誰か最も

以て、この稱あり。三十二相を具備すといはる。

【四六】殺生・偸盜・邪婬・妄語・綺語・兩舌・惡口・貪欲・瞋恚・愚癡(或は邪見)の十惡を離るるをいふ。

【四七】Trāyastriṃśa 譯して三十三天といふ。須彌山の頂上にあり。帝釋を以て、天主とす。欲界六天の第二。

【四八】梵天は Brahmaloka-deva の略 欲界の上に位する色界四禪天の中の初禪天をいふ。

【四九】富蘭那迦葉等の六人。佛陀の當時、相當の勢力ありしものにして、懷疑・破壞の思想を以て、衆を惑はせり。

【五〇】菩薩(Bodhisattva)の階級。菩薩は覺有情と譯す。

【五一】等正覺とて、一生の後に

眞正にして、父母と爲すべきを觀ず。五事を觀じ已りて、卽ち、自ら思惟す、『今、諸衆生は、皆これ我が初發心以來、成熟せる所のもの、能く清淨の妙法を受くるに堪ふ。この(五五)三千大千世界に於て、この(五六)閻浮提の(五七)迦毘羅旆兜國は、最も中に處すと爲す。諸族種姓にて、(五八)釋迦は第一、(五九)甘蔗の苗裔、聖王の後、(六〇)白淨王の過去の因緣を觀ずるに、夫妻眞正にして、父母と爲すに堪へ、又、(六一)摩耶夫人の、壽命の修短を觀ずるに、太子を懷抱して十月を滿足して、太子便ち生れ、生れて七日にして、その母命終す。既にこの觀を作して、また、自ら思惟す、『我、今、もし便卽ち下生せば、廣く諸天人衆を利する能はじ。』仍て天宮に於て、五種の相を現じ、諸天子をして、皆悉く、應に下りて作佛すべき菩薩の期運を覺知せしむ。一には、菩薩の眼、瞬動を現じ、二には、頭上の花萎み、三には、衣に塵垢を受け、四には、腋下より汗出で、五には、本座を樂しまず。時に諸天衆、忽ち菩薩にこの異相あるを見て、心大に驚怖し、身の諸の毛孔より、

佛處を補ふべき位置に達するをいふ。

【五二】Tusita。知足と譯す。欲界六天の第四位にあり。等正覺の菩薩、ここにありて、下生成佛を待つと信ぜらる。

【五三】聖善白は、元明二本倶に聖善慧と作す。

【五四】四方・四隅・上・下。

【五五】日月・須彌・四天下・六欲天・梵世天を合して、一世界といひ、これを千個合したるを小千世界といひ、小千世界を千個合したるを、中千世界といひ、中千世界を千個合したるを大千世界といひ、大千世界を三千倍したるを、三千大千世界といふ。

【五六】Jambu-dvīpa の略。須彌四洲の南方にある人間世界。

【五七】Kapilavastu

血の流るること雨の如し。自ら相謂つて言く、『菩薩、久しからずして、我等を捨てん。』

爾の時、菩薩、また、五瑞を現ず。一には、大光明を放ちて、普く三千大千世界を照す。二には、大地、(六二)十八相に動き、須彌・海水・諸天の宮殿、皆悉く震ひ搖ぐ。三には、諸(六三)魔の宮宅、隱蔽して現せず。四には、日月星辰、復、光明なし。五には、天龍八部の身、皆震ひ動きて、自ら禁ふる能はず。

この時、兜率の諸天、菩薩の身に、已に五相あるを見、またまた、外の五の希有の事を視て、皆悉く聚集して、菩薩の所に至り、頭面に足を禮して、白して言ふ、『尊者、我等、今日、この諸相を見、擧身震動して、自ら安んずる能はず。唯、願はくは、我が爲に、この因緣を釋きたまへ。』菩薩、卽便ち諸天に答へて言く、『善男子、當に知るべし、(六四)諸行は皆悉く無常なりと。我、今、久しからずして、この天宮を捨てて、閻浮提に生れん。』

時に諸天、この語を聞き已りて、悲號涕泣し、心大に憂惱して、擧身より血の現ずること、(六五)波羅

【五八】Śākya。能と譯す。
【五九】Ikṣvāku。日種王族の祖先。
【六〇】Śuddhodana-rāja。普通に淨飯王といふ。
【六一】Māyā-devī。幻化と譯す。
【六二】動・起・踊・震・吼・擊を六種震動といふ。これに徧の六種、等徧の六種を加へて、十八相と爲す。
【六三】欲界六天の最高天にあるを以て、第六天の魔王といふ。他化自在天これなり。
【六四】行は遷流の義、生滅變化すべき一切の事物を諸行といふ。
【六五】Palāśa

奢花の如し。或はまた本座を樂しまざるあり。或はその莊嚴の具を棄つるあり。或は地に宛轉迷悶するあり。或は深く無常の苦を歎ずるあり。

爾の時、一天子あり、即ち偈を說いて言く、

『菩薩のここに在るや、我等の法眼を開きしを、
今や我に遠かり去るは、盲の導師に離るるが如く、
また水を渡らんと欲するに、忽然として橋船を失ふが如く、
また嬰孫兒の、その慈母を喪亡するに似たり。
我等もまた是の如く、所歸依の處を失ひ、
方に生死の流に漂うて、了に出づるの緣ある無し。
我等長夜に於て、癡の箭に射らるるを、
既に大醫王を失ふ、誰か當に我を救ふべきものぞ。
無明の牀に滯臥し、愛欲の海に長沒するを、
永く尊者の訓を絕たんか、未だ超出の期を見ざるなり。』

爾の時、菩薩、諸天子の悲泣し懊惱するを見、またまた戀慕の偈を聞き、即ち慈音を以て、こ

れに告げて曰く、『善男子、凡そ人の生を受くる、死せざるものなし。恩愛の合會には、必らず別離あり。上は（六六）阿迦膩吒天に至り、下は（六七）阿毗地獄に至るまで、その中の一切諸衆生等、無常の大火の爲に、煎炙せられざるものあるなし。是の故に、汝等、我に於て、獨、戀慕を生ずべからず。我、今、汝と、皆悉く、未だ生死の熾火を離れず。乃至、一切の貧富貴賤も、皆免脱せず。』是に於て、菩薩、卽ち偈を說いて言く、

『諸行は無常なり、是れ生滅の法なればなり。
生滅・滅し已りて、寂滅なるを樂しと爲す。』

爾の時、菩薩、天子に語りて言ふ、『この偈は、乃ちこれ過去諸佛の共に說く所。諸行の性相や、法として皆是の如し、汝等、今は憂惱を生ずるなかれ。我、無量劫來生死にあり、今は唯この一生の在る有るのみ。久しからずして當に諸行を離るるを得べし。汝等當に知るべし、今は、これ、衆生を度脫するの時ぞ 我、應に閻浮提中、迦毗羅旆兜國、甘蔗の苗裔、釋姓の種族、白淨王の家に下生すべし。我、かしこに生れば、父母を遠離し、妻子及び轉輪王の位を棄捨して、出家學道し、苦行を勤修し、魔怨を降伏して、一切種智を成じ、一切世間の天・人・魔・梵の、轉ずる能はざる所の法輪を轉じ、また過去の諸佛

【六六】Akaniṣṭha。色究竟と譯す。色界十八天の最高にあり。

【六七】Avīci。無間と譯す。八熱地獄の最下にあり。苦を受くる間斷なきを以ていふ。

の行ぜる法式に依りて、廣く一切の諸天人衆を利し、大法幢を建て、魔幢を傾倒し、煩惱海を竭し、(六八)八正路を淨うし、(六九)諸法印を以て、衆生の心に印し、大法會を設けて、諸天人を請ぜん。汝等、爾の時、また、當に皆同じくこの會に在りて、法食を飡受すべし。この因緣を以て、憂惱すべからず。』爾の時、菩薩、偈を以て頌して曰く、

『我ここに於て久しからずして、閻浮提に下り、
迦毗羅旆兜の、白淨王の宮に生れ、
父母親屬を辭し、轉輪王の位を捨てて、
出家して道を學することを行じ、一切種智を成じ、
正法幢を建立し、能く煩惱の海を竭し、
(七〇)惡趣の門を閉塞し、淨く八正道を開き、
廣く諸天人を利すること、その數不可計なるべし。
この因緣を以ての故に、憂惱を生ずべからず。』

爾の時、菩薩、擧身の毛孔より、皆、光明を放つ。諸天子等、菩薩の言を聞き、またまた、身より大光明を出すを見て、歡喜踊躍して、諸の憂苦を離れ、各、心に念言す、『菩薩、久しから

【六八】また八正道、八支正道といふ。見・思惟・語・業・精進・命・念・定の正しきこと。

【六九】苦・空・無常・無我を以て、四法印と爲し、また無常・無我・寂靜を以て、三法印と爲す。

【七〇】惡道に同じ。最惡の地獄・餓鬼・畜生の三を三惡道といひ、之に人間・天上を加へて、五道といひ、修羅を加へて六道といふ。

ずして、當に正覺を成ずべし。』

【下生託胎】爾の時、菩薩、降胎の時至るを觀じ、卽ち六牙の白象に乘じて兜率宮を發す。無量の諸天諸の伎樂を作し、衆の名香を燒き、天の妙花を散じつつ、菩薩に隨順して虛空の中に滿ち、大光明を放ちて、普く十方を照し、四月八日、明星の出づる時を以て、神を母胎に降す。時に、摩耶夫人、眠寤の際に於て、菩薩の、六牙の白象に乘じ、虛に騰りて來るを見る。右脇より入るや、影の外に現はるること、琉璃に處くが如く、夫人、體安快樂なる、甘露を服するが如く、自身を顧み見れば、日月の照すが如し。心大に歡喜して、踊躍無量なり。この相を見已りて、豁然として覺め、希有の心を生じ、卽便ち往いて白淨王の所に至りて、王に白して言く、『我、向に、眠寤の際、その狀夢の如くにて、諸の瑞相を見る、極めて奇特たり。』王卽ち答へて言ふ、『我、向に、また、大光明あるを見、またまた、汝が顏貌の常に異るを覺る。汝、爲に、見し所の瑞相を說くべし。』夫人、卽便ち具に上の事を說く。偈を以て頌して曰く、

『白象に乘じ、皎淨なること日月の如く、
釋梵諸天衆、皆悉く寶幢を執り、香を燒き天花を散じ、
幷に衆の伎樂を作しつつ、虛空中に充滿し、圍繞して來下し、

來りて我が右脇に入るや、猶琉璃に處くが如きを見るあり。今以て大王に現す、こは何の瑞相たるか。』

爾の時、白淨王、摩耶夫人の諸瑞相を見已りて、歡喜踊躍して、自ら勝ふる能はず。卽便ち善相婆羅門を遣請して、妙香花・種種の飲食を以て、これを供養し、供養し畢りて、夫人の右脇を示し、幷に瑞相を說き、婆羅門に白して言く、『願はくは、爲にこれを占へ、何等の異あるか。』時に、婆羅門、卽ちこれを占つて曰く、『大王、夫人の懷ける太子の、諸の善妙の相は、具に說くべからず。今、當に王の爲に略してこれを言ふべきのみ。大王、當に知るべし、今、この夫人の胎中の子は、必ず能く釋迦種族を光顯せん。降胎の時、大光明を放ち、諸天釋梵の、執侍圍繞せるは、この相、必ずこれ正覺の瑞なり。もし、出家せずんば、轉輪聖王と爲り、四天下に王として、七寶自ら至り、千子具足せん。』時に、王、この婆羅門の言を聞きて、深く自ら慶幸し、踊躍無量なり。卽ち金・銀・雜寶・象・馬・車乘、及び村邑を用て、この婆羅門に供給す。時に、摩耶夫人、その婇女幷に及び珍寶を以て、また、以て奉施す。

菩薩の處胎以來、摩耶夫人、日に、更に、(七二)六波羅蜜を修行す。天

【七二】 Pāramitā は到彼岸又は度と譯す。吾人を運載して、彼岸に度らしむる乘りものに六種あり。左の如し。

檀那 Dāna（布施）。

尸羅 Sīla（持戒）。

獻の飲食、自然に至り、また、人間の味を樂まず。三千大千世界、常に皆大に明らかにして、その界の中間の幽冥の處、日月の威光の、照す能はざる所、また、皆朗然たり。その中の衆生、各相見るを得、共に相謂つて言く、『この中、云何ぞ忽ちに衆生を生ずる。』菩薩・降胎の時、三千大千世界、十八相に動き、清凉の香風、四方に起り、諸の疾を抱くもの、皆悉く除こり愈え、貪欲・瞋・癡、また、皆、休息す。

爾の時、兜率天宮に、一天子あり。この念言を作す、『菩薩、已に白淨王宮に生れぬ。我も・また、當に、また、人間に下生すべし。菩薩成佛せば、我、先に在りて、その眷屬と爲り、供養聽法するを得ん。』この念を作し已りて、卽便ち（七二）王舍城中、（七三）明月の種姓、（七四）旃陀羅及多王の家に下生す。また、天子ありて、舍衞國の王家に生れ、また、天子ありて、偸羅厥叉國の王家に生れ、また、天子ありて、（七五）犢子國の王家に生れ、また、天子ありて、跋羅國の王家に生れ、また、天子ありて、盧羅國の王家に生れ、また、天子ありて、（七六）德叉尸羅國の王家に生れ、また、天子ありて、（七七）拘羅婆國の王家に生れ、また、天子ありて、婆羅門の家に生れ、また、天子ありて、長者・居

羼提 Kṣānti（忍辱）。
毗棃耶 Vīrya（精進）。
禪那 Dhyāna（禪定）。
般若 Prajñā（智慧）。
【七二】Rājagṛha。摩伽陀國の都。
【七三】Candra-vaṃśa。月種（Sūrya-vaṃśa）に對す。
【七四】Candragupta。月護と譯す。
【七五】Vatsa
【七六】Takṣaśilā
【七七】Kaurava

士・(七八)毗舍・(七九)首陀羅の家に生れ、また、五百の天子ありて、釋種姓の家に生る。是の如き等の諸天子衆、その數、凡そ九十九億ありて、人間に下生す。また、他化自在天、乃至、四天王の所より、下生するもの、稱計すべからず。また、(八〇)色界の天王あり、その眷屬と、また、皆・下生して、仙人と作りぬ。

菩薩の胎に在るや、行住坐臥に、妨礙する所なく、また、母をして、諸の苦患あらしめず。菩薩、晨朝に、母胎中に於て、色界諸天の爲に、種種の法を說き、日中時に至りて、(八一)欲界諸天の爲に、また、諸法を說き、日晡時に於て、またまた、諸鬼神の爲に法を說き、夜に於て、(八二)三時、またまた、是の如く無量の衆生を成熟し利益す。菩薩の胎に在るや、夫人・婇女の、來りて禮拜して供養するものあり。或は、また、來りて、この預言を作すあり、『當に轉輪聖王と成るを得しむべし』と。菩薩、聞き已りて、心に喜樂せず。或は、また、來りて、この預言を作すあり、『當に一切種智を成ずるを得しむべし』と。菩薩聞き已りて、心大に歡喜す。菩薩の處胎、滿十月に垂んとして、身に諸の支節、及び相好、皆悉く具足して、また、

【七八】Vaiśya
【七九】Śūdra
【八〇】三界說の中位にあり。その下位にある欲界の穢色を離るるも、猶淨色あるを以ていふ。これに四級十八種あり。
【八一】三界說の下位にあり。婬食・食食あるを以ていふ。この界に屬する天に六種あり。四天王天、乃至、他化自在天なり。
【八二】初中後の三時。戌(初更)・子(三更)・寅(五更)をいふ。

その母をして、（八三）諸根寂靜に、園林に處るを樂みて、慣鬧を喜ばざらしめたり。

【誕生】時に白淨王、心に自ら思惟す、『夫人懷妊日月將に滿たんとするに、其生產の相あるを見ず』と。この念を作す時、會、夫人の信を遣はして王に白すに遇ふ、『我、今、園林に出でて、遊觀せんと欲す』と。時に、王、これを聞きて、益歡喜を懷き、卽ち外に勅して、（八四）藍毗尼園を淨掃灑せしめ、更に諸の妙花果を栽植せしめ、流泉浴池を、悉く清潔ならしめ、欄楯階陛は、皆七寶を以て、莊嚴を爲し、翡翠・鴛鴦・鸞・鳳凰・鷖・異類の衆鳥、鳴いてその中に集り、繒の幡蓋を懸け、散華燒香し、諸の伎樂を作すこと、猶、（八五）帝釋の歡喜の園の如し。また、中間の經行する處に勅して、皆嚴淨に、種種莊嚴せしめ、また、勅して、十萬の七寶の車輦を嚴辦せしむ。一一の車輦は、雕玩殊絕なり。またまた、外に勅して、象兵・馬兵・車兵・步兵の四軍を嚴辦せしめ、またまた、後宮の婇女の、顏容端正、不老不少・氣性調和・聰慧明了なるを選び取り、その數凡そ八萬四千あり、以用て摩耶夫人に給侍せしめ、またまた、八萬四千の端正なる童女を擇び取り、妙瓔珞嚴身の具を著け、香花を賫らし持ち、先づ往いてかの藍毗尼園に住せしめ、王、また、諸の群臣百官に勅して、夫人去け

【八三】眼・耳・鼻・舌・身の五根、または意を加ふる六根をいふ。根とは强き作用を起す機關をいふ。

【八四】Lumbini

【八五】Indra-Sakra。忉利天主なり。

ば、皆悉く侍從せしむ。

是に於て、夫人、卽ち寶輿に昇り、諸の官屬、幷に及び婇女と、前後に導從して、藍毗尼園に往く。爾の時、また、天龍八部ありて、また、皆隨從して、虛空に充滿す。爾の時、夫人、旣に園に入り已る。諸根寂靜、十月滿足し、(八六)二月八日、日の初めて出る時に於て、夫人、かの園中に、一大樹の、名けて(八七)無憂と曰ふ有るを見る。花色香鮮・枝葉分布し、極めて茂盛を爲す。卽ち右手を擧げて、これを牽きて摘まんとするや、菩薩、漸漸に右脇より出づ。時に、樹下に、また、七寶の七莖の蓮花を生ず。大きさ輪の如し。菩薩、卽ち、蓮花の上に墮し、扶侍するものなくて、自ら七步を行き、その右手を擧げて、師子吼す、『我、一切の天人の中に於て、最尊最勝なり。無量の生死、今に於て盡きぬ。この生に、一切の人天を利益せん。』

この言を說き已る時、四天王、卽ち天の繒を以て、太子の身を接して、寶机の上に置き、(八八)釋提桓因、手に寶蓋を執り、大梵天王、また、白拂を持ちて、左右に侍立し、(八九)難陀龍王・(九〇)優波難陀龍王、虛空中に於て、清淨の水の、一は溫、一は涼なるを吐きて、太子の身に灌ぎ、――身

【八六】二月は、他本に四月となす。

【八七】Aśoka（アショーカ）

【八八】Śakra-devānām-Indra（シャクラ・デーヴァーナーム・インドラ）因(Indra)は帝なり。諸天の帝たる釋、卽ち帝釋天なり。

【八九】Nanda-nāgarāja（ナンダナーガラージャ）

【九〇】Upananda-nāgarāja（ウパナンダナーガラージャ）

は黄金色にして、三十二相あり。大光明を放ちて、普く三千大千世界を照す。——天龍八部、また、空中に於て、天の伎樂を作し、歌唄讚頌し、衆名香を燒き、諸妙花を散じ、また、天衣及び瓔珞を雨らし、繽紛として亂れ墜つること、稱げて數ふべからず。

爾の時、摩耶夫人、太子を生み已りて、身安く快樂にして、苦患あるなく、歡喜踊躍して、樹下に止まる。前後に、自然に、忽ち四井を生ず。その水、香潔にして、(九一)八功德を具す。爾の時、摩耶夫人と、その眷屬と、須ひんと欲する所に隨つて、自恣洗漱す。また、諸夜叉王あり、皆悉く圍繞して、太子及び摩耶夫人を守護す。爾の時に當り、閻浮提の人、乃至、阿迦膩吒天、喜樂を離ると雖も、皆また、ここに於て、歡喜讚歎すらく『一切種智、今や世に出でます。無量の衆生、皆利益を得ん。唯、願はくは、速に正覺の道を成じ、法輪を轉じ廣く衆生を度したまへ。』唯、魔王のみ、獨、愁惱を懷きて、本座に安んせず。

【九一】澄淨・淸冷・甘美・輕軟・潤澤・安和・除患・增益をいふ。但し異說あり。

【瑞應】爾の時に當り、感ずる所の瑞應、三十有四なり。一には、十方世界皆悉く大に明なり。二には、三千大千世界、十八相に動き、丘墟も平坦なり。三には、一切の枯木、悉く更に敷榮し、國界自然に奇特の樹を生ず。四には、園苑に異甘果を生ず。五には、陸地に寶蓮花を生ず。大さ車

輪の如し。六には、地中の伏藏、悉く自ら發出す。七には、諸の藏せる珍寶、大光明を放つ。八には、諸の天の妙服、自然に來り降る。九には、衆川萬流、恬靜澄淸なり。十には、風止み雲除こりて、空中明淨なり。十一には、香風芬芳として、四方より來り、細雨の潤澤、以て飛塵を斂む。十二には、國中の疾病、皆悉く除愈す。十三には、國內の宮舍、明曜ならざるなく、燈燭の光、また、用を爲さず。十四には、日月星辰、停住して行かず。十五には、(九三)毗舍佉星、下りて人間に現じて、太子の生るるを待つ。十六には、諸梵天王、素寶蓋を執り、列して宮上を覆ふ。十七には、八方の諸仙人衆、寶を奉じて來り獻ず。十八には、天の百味の食、自然に前に在り。十九には、無數の寶瓶に、諸の甘露を盛る。二十には、諸の天の妙車、寶を載せて至る。二十一には、無數の白象の子、首に蓮花を戴き、列して殿前に住す。二十二には、天の紺馬寶、自然にして來る。二十三には、五百の白師子王、雪山より出で、その惡情を息め、心に歡喜を懷きて、城門に羅住す。二十四には、諸の天伎女、虛空中に於て、妙音樂を作す。二十五には、諸の天玉女、孔雀の拂を執つて、宮墻の上に現ず。二十六には、諸の天玉女、各金瓶を持ち、香汁を盛り滿てて、空中に列住す。二十七には、諸天歌頌して、太子の德を讚ず。二十八には、地獄休息して、毒痛行はれず。二十九には、毒蟲

【九三】Viśākhā。氐宿。

隱伏し、惡鳥善心なり。三十には、諸惡律儀、一時に慈悲あり。三十一には、國內の孕婦、產するものは、悉く男にして、その百病あるは、自然に除愈す、三十二には、一切の樹神、化して人形を作し、悉く來りて禮侍す。三十三には、諸の餘の國王、各名寶を賷らし、同じく來つて臣伏す。三十四には、一切の人天、時語に非ざるなし。

爾の時、諸婇女衆、この瑞相を見て、極大歡喜して、自ら相謂つて言く、『太子、今、生るるや、此の如き嘉祥の事あり。唯、願はくは、長壽にして、諸の疾苦なく、我等をして大憂惱を生ぜしむる勿らんを。』この言を作し已りて、天の細氎を以て、太子を裹み抱きて、夫人の所に至る。時に、四天王、虛空中に在りて、恭敬隨從し、釋提桓因、蓋を執りて來り覆ひ、二十八大鬼神王あり、園の四角に在りて、守衞奉護す。

爾の時、聰慧明了なる一靑衣あり。藍毗尼園より、還つて宮中に入り、白淨王の所に到りて、王に白して言く、『大王の威德、轉、更に增進す。摩耶夫人、已に太子を生みます。顏貌端正にして、三十二相、八十種好あり。蓮花の上に墮し、自ら行くこと七步、その右手を擧げて、『我、一切天人の中に於て、最尊最勝なり。無量の生死、今に於て盡きぬ。この生に、一切の人天を利益せん』と、師子吼せり。是の如き等の諸奇特の事あり。具に說くべからず。』時に、白淨王、か

の青衣の、此の語を說くを聞き已りて、歡喜踊躍して、自ら勝ふる能はず。卽ち身の瓔珞を脫して、以てこれに賜ふ。

爾の時、白淨王、卽ち四兵を嚴しめ、眷屬圍繞し、幷に一億の釋迦種姓と、前後導從して、藍毗尼園に入る。かの園中に、天龍八部の、皆悉く充滿するを見、夫人の所に到りて、太子の身の、相好殊異なるを見、歡喜踊躍すること、猶、江海の諸大波浪の如し。その短壽を慮りて、懷に入りて（九三）悚惕すること、譬へば、須彌山王の、動搖すべきこと難きが、大地動く時に、この山も乃ち動くが如し。彼の白淨王、素性恬靜にして、常に歡感なし。今、太子を見て、一は喜び、一は懼るるも、またまた、是の如し。摩耶夫夫の性たる調和にして、既に太子を生み、諸の奇瑞を見て、倍柔輭を增す。爾の時、白淨王、（九四）叉手合掌して、諸天神を禮し、前んで太子を抱き、七寶の象輿の上に置き、諸群臣、後宮の婇女、虛空の諸天と、諸の伎樂を作し、隨從して城に入る。

時に、白淨王、及び諸釋子、未だ三寶を識らず。卽ち太子を將て、往いて天寺に詣づ。太子、既に入るや、梵天の形像、皆座より起ち、太子の足を禮して、王に語りて言ふ、『大王當に知るべ

【九三】悚。おそる。惕。おそる。うれふ。

【九四】手を組み、前方にさし出すこと。

し。今、この太子は、天人中の尊たり。虚空の天神、皆悉く禮敬す。大王、豈、此の如きを見ざるか。云何ぞ、今、ここに來りて、我を禮する。』時に、白淨王・及び諸釋子・群臣内外、是を聞見し已りて、未曾有と歎じ、卽ち太子を將て、天寺を出で、還つて後宮に入る。

爾の時に當りて、諸釋種姓、また、同一日に、五百の男を生む。時に、王の厩中、象は白子を生み、馬は白駒を生み、牛羊、また、五色の羔犢を生む。是の如き等の類、數、各、五百。王家の青衣、また、五百の(九五)蒼頭を生む。爾の時、宮中の五百の伏藏、自然に發出す。一一の伏藏に、七寶の藏ありて、これを圍繞す。また、諸の大國商人あり、海より寶を採り、還つて迦毗羅旆兜國に入る。かの諸商人、各、奇寶を賫らし、來りて王に獻ず。時に、白淨王、諸商人に問ふ、『汝等、海に入り、諸の珍寶を採りて、悉く皆吉利にして、苦惱なきや不や。及び諸の伴侶、遺落なきや。』かの諸商人、答へて言ふ、『大王、經る所の道路、極めて自ら安隱なり。』王この言を聞きて、甚大歡喜す。卽ち諸婆羅門等を請せしむ。婆羅門衆、皆悉く集るや、諸の供養を設け、或は象・馬・及び七寶・田・宅・僮僕を與ふ。供養し畢りて、太子を抱きて出で、卽便ち諸婆羅門に白して言く、『太子の爲に、何等の名をか作すべき。』諸婆羅門、卽ち共に論議して、王に答へて言く、『太子の生時、一切の寶藏、皆悉

【九五】大家に事ふる身分いやしきもの、奴僕なり。

く發出し、有ゆる諸瑞、吉祥に非るなし。この義を以ての故に、太子を名けて（九六）薩婆悉達と爲すべし。』この語を說く時、虛空の天神、卽ち天鼓を擊ち、燒香散花して、善哉と唱言し、諸天人民、則便ち稱して薩婆悉達といひぬ。

爾の時、八王、また、この日に於て、白淨王と、同じく太子を生む。かの諸國王、各歡喜を懷きて、『我、今、子を生み、諸の奇異あり』とて、これ薩婆悉達の瑞相たるを知らず、皆婆羅門を集めて、各太子の爲に、好名字を制す。王舍城の太子は、名けて（九七）頻毗娑羅といひ、舍衞國の太子は、（九八）波斯匿と名け、偸羅拘吒國の太子は、（九九）拘臈婆と名け、犢子國の太子は、（一〇〇）優陀延と名け、跋羅國の太子は、鬱陀羅延と名け、盧羅國の太子は、疾光と名け、德叉尸羅國の太子は、弗迦羅娑羅と名け、拘羅婆國の太子は、拘羅婆と名く。

【占相】爾の時、白淨王、普く群臣に勅して、聰明多聞にして善く占相を知り、諸の世人に知識せらるるものを訪ねしむ。群臣聞き已りて、四方に推し覓む。時に王、卽便ち後園中に於て一大殿を起して、窻牖欄楯、七寶もて莊飾す。爾の時、群臣、五百の婆羅門の、聰明にして、相を知

【九六】Sarvasiddhārtha。一切義成の義。
【九七】Bimbisāra。影堅・影勝と譯す。
【九八】Prasenajit。勝軍と譯す。
【九九】Kurava。勝邊と譯す。
【100】Udayana。出愛と譯す。

り諸奇瑞を見るものを得、來りて王に詣らんとす。王の信を遣はして疾速に至るに會し、諸臣、王に白す、『知相婆羅門、今已に至る。』王聞いて歡喜し、卽ち勅して前ましめ、請じて殿に入りて坐せしめ、諸の供養を設く。かの婆羅門、卽ち王に白して言く、『我、聞く、大王、新に太子を生み、諸の相好奇特の瑞ありと。願はくは、我等をして、悉くこれを見るを得しめたまへ。』時に、王、卽ち勅して太子を抱きて出でしむ。諸婆羅門、既に太子の相好威嚴を見て、未曾有と歎ず。王、卽ち問うて言く、『今、太子を占ふ。その相云何。』婆羅門言ふ、『一切衆生、皆子の好からんを欲するも、大王の今所生の太子は、これ大珍異なり。憂怖を生ずるなかれ。』卽ちまた白して言ふ、『所生の太子は、大王よ、これ王の子と言ふと雖も、乃ちこれ世間人天の眼なり。』王、また、問うて言ふ、『云何ぞ知るを得たる。』婆羅門言ふ、『我、太子を觀るに、身色光焰、猶、眞金の如く、諸の相好あり、極めて明淨たり。もし、出家せば、一切種智を成ずべし。もし、在家ならば、轉輪聖王となりて、四天下を領せん。譬へば、江河にて、海を第一と爲し、衆山の中、須彌を最勝とし、凡そ諸の光暉あるは、日を最上と爲し、一切の清涼は、唯、明月あるごとく、天人世間は、太子を尊しと爲す。』王、この語を聞きて、心大に歡喜し、諸の〔一〇一〕怵惕を離れぬ。かの婆羅門、また、王に白し

【一〇一】怵。おそる、かなしむ。惕。うれふ、おそる。

て言ふ、『一梵仙あり、(一〇二)阿私陀と名く。(一〇三)五通を具足して、香山にあり。かれ、能く王の爲に諸の疑惑を斷ぜん。』諸婆羅門、この語を說き已りて、辭別して去る。

爾の時、白淨王、心に自ら思惟す、『阿私陀仙人は、居して香山に在り。途逕嶮絕して、人の到る所にあらず。何の方を以てか、請じ來りてここに至るべき。』王がこの心念を作せる時、阿私陀仙人、遙に王の意を知り、またまた、諸の奇瑞の相を先見し、菩薩が、生死を破らんが爲の故に、生を受くるを現ずるを深解し、神通力を以て、虛に騰りて來り、王宮の門に到る。時に、守門者、入りて王に白して言ふ、『阿私陀仙人、虛空に乘じて來り、今、門外に在り。』王、聞いて歡喜し、卽ち勅して前ましめ、王、門上に至りて、自らこれを奉迎し、既に仙人を見るや、恭敬禮拜して、卽ち問うて言く、『尊者既に來り、門に住まりて進まざるは、守門者が、前むを聽さざるが爲か。』仙人答へて言く、『止むるものを見るなし。既に來りて相詣る。宜しく須らく先づ白すべし。』王、便ち隨從して、後宮に入り、敬請して坐せしめ、問訊して言く、『尊者、(一〇四)四大常に安和なりや不や。』仙人答へて言く、『大王の恩を蒙りて、幸に安樂なるを得。』時に白淨王、仙人に白して言く、『尊者が、今日、能く來り下降せる

【一〇二】アシタ Asita

【一〇三】天眼・天耳・神足・他心・宿命の五神通。

【一〇四】地・水・火・風。一切の事物を組織する元素。ここには身體にいふ。

は、我等の種族、方に大に熾盛に、今より已去、日に吉祥に就く、この經過の爲の故に、ここに來るや。」仙人答へて言く、『我、香山に在りて、大光明、諸奇特の相を見、又、大王の心の所念を知る。この因緣を以ての故に、來りてここに至る。われ、神力を以て、虛に乘じて來るや、上の諸天の說くを聞きぬ。「王の太子、必ず一切種智を成じて、天人を度脫するを得べし。また、王の太子、右脇より生れ、七寶の蓮花の上に墮して、行くこと七步、その右手を擧げて、我於天人之中、最尊最勝、無量生死、於今盡矣、此生利益一切天人と師子吼せり。またまた、諸天、圍繞恭敬せり」と。此の如き大奇特の事あるを聞く。快き哉、大王よ、宜しく欣慶すべし。太子、今、見るを得べしや不や。』即ち仙人を將て、太子の所に至り、王及び夫人、太子を抱きて出で、仙人を禮せんと欲す。時に、かの仙人、卽ち王を止めて曰く、『こはこれ天人(一〇五)三界中の尊なり」云何ぞ我を禮せしむるか。』時に、かの仙人、卽ち起ちて合掌し、太子の足を禮す。王及び夫人、仙人に白して言く、『唯、願はくは、尊者、太子を相することを爲せ。』仙人、善しと言つて、卽便ち占相す。具に相を見已りて、忽然悲泣して、自ら勝ふる能はず。王及び夫人、かの仙人の悲泣流淚するを見て、擧身戰き怖れて、大憂惱を生ずること、大波浪の小船を動かすが如し。仙人に問う

【一〇五】欲・色・無色の三世界をいふ。世界をその性質上より三大別せるなり。

て言く、『我子の初生、諸の瑞相を具するに、何の不祥ありて、悲泣するか。』爾の時、仙人、歔欷して答へて言く、『大王の太子、相好具足して、不祥あるなし。』王また問うて言く、『願はくは、更に我が爲に太子を占視せよ。長壽の相ありや不や。轉輪王の位を得て、四天下に王たるや不や。我が年既に暮る。國土を以て、皆悉くこれに付し、山林に隱れて、出家學道すべきを欲す。志願すべき所は、唯、これに在るのみ。尊者、必定の果を觀ると爲すや。』

爾の時、仙人、また、王に答へて言く、『大王の太子、三十二相を具す。

一には、足下安平、平なること(一〇六)奩底の如し。

二には、足下の千輻網輪、輪相具足す。

三には、手足の相、指の長、餘人に勝る。

四には、手足柔輭、餘の身分に勝る。

五には、(一〇七)足跟廣、具足滿好なり。

六には、足指合、縵網、餘人に勝る。

七には、(一〇八)足趺高平、好く跟と相稱ふ。

八には、(一〇九)伊泥延鹿(一一〇)腨、纖好なること、伊泥延鹿王の如し。

【一〇六】奩。かうばこ。
【一〇七】跟。くびす。
【一〇八】趺。跗に同じ、あしのかふ。
【一〇九】Anineya（アニネーヤ）
【一一〇】腨。こむら。

九には、平住して、兩手膝を摩す。
十には、陰藏の相、馬王象王の如し。
十一には、身の從廣等しくして、[二二]尼拘類樹の如し。
十二には、一一の孔に一毛生じ、青色柔軟にして右旋す。
十三には、毛上向して靡き、青色柔軟にして、右旋す。
十四には、金色の相、その色の微妙なる、[二三]閻浮檀金に勝る。
十五には、身光の面、一丈なり。
十六には、皮薄く細滑にして、塵垢を受けず、[二三]蚊蚋を停めず。
十七には、七處の滿、兩足の下、兩手の中、兩肩の上、項の中に、皆滿字分明なり。
十八には、兩腋下の滿、[二四]摩尼珠の如し。
十九には、身、師子の如し。
二十には、身、廣く端直なり。
二十一には、肩圓好なり。

【二二】Nyagrodha。無節と譯す。
【二三】Jambū-nada。閻浮は樹名、ナーダは河、閻浮樹の下を流るゝ河中に生ずる沙金なり、閻浮檀金といふ。
【二三】蚋は蚊に同じ。
【二四】Maṇi。如意珠と譯す。

二十二には、口に四十齒あり。
二十三には、齒白く齊しく、密にして根深し。
二十四には、四牙最白くして大なり。
二十五には、方なる頰車、師子の如し。
二十六には、味中上味を得、咽中の二處より津液流出す。
二十七には、舌大に軟薄にして、能く面を覆ひ、耳の髮の際に至る。
二十八には、梵音深遠にして、(二五)迦陵頻伽の聲の如し。
二十九には、眼の色、金精の如し。
三十には、(二六)眼睫、牛王の如し。
三十一には、眉間の(二七)白毫相、軟白なること(二八)兜羅綿の如し。
三十二には、頂髻の肉成る。
此の如き相好の身を具有す。もし在家せば、年二十九にして、轉輪聖王と爲らん。もし出家せば、一切種智を成じ、廣く天人を濟はん。然るに、王の太子は、必ず當に學道して、阿耨多羅三

【二五】Kalaviṅka。妙聲と譯す。
【二六】睫。まつげ。
【二七】毫。ほそげ。白き毛のうづまけるを白毫といふ。
【二八】Tūla。花絮。

藐三菩提を成ずるを得、清淨の法輪を轉じて、天人を利益し、世間の眼を開くべし。我、今、年壽、已に百二十、久しからずして命終して、(二九)無想天に生れん。佛の興るを見ず、經法を聞かざるが故に、自ら悲しむのみ。』また、仙人に問ふ。『尊者、向に占つて言ふ、「二種あり。一には當に王と作るべし。二には、正覺を成ぜん」と。而して、今、云何ぞ、決定して一切種智を成ぜんとはいふ。』時に、仙人言く、『我が相の法、もし衆生あり、三十二相を具するも、或は非處に生じ、又は明顯ならずば、この人、必、轉輪聖王と爲らん。もし、三十二相、皆その處を得、またまた、明顯ならば、この人、必、一切種智を成ぜんといふ。我、大王の太子の諸相を觀るに、皆その所を得、また、極めて明顯なり。是を以て、決定して正覺を成ぜんを知る。』仙人、王の爲に、この語を説き已り、辭別して退く。

【三時殿】爾の時白淨王、既に仙人の決定の説を聞きて、心に愁惱を懷き、出家を慮り恐れ、卽ち五百の賢明多智なる靑衣を擇びて、爲に(三〇)嬭母と爲し、太子を養視す。その中或は乳するものあり、或は抱くものあり、或は浴するものあり、或は浣濯するものあり。是の如き等の比、太子に供給して、皆悉く具足す。またまた、別に爲に三時殿を起す。溫涼・寒・署に、各自處を異に

【二九】色界四禪天中の第四禪天の第四、十八天中の第十三に當る。

【三〇】嬭、音ねはちち(乳)なり。音にはあね(姉)なり。音ないは母なり。

し、その殿は皆七寶を以て莊嚴し、衣裳服飾、皆悉く時に隨ふ。王、太子の家を棄てて道を學ばんを恐れて、その城門の開閉の聲をして、四十里に聞えしむ。またまた、五百の妓女を擇び取る。形容端正にして、肥えず瘦せず、長からず短からず、白からず黑からず、才能巧妙にして、各數技を兼ぬるが、皆名寶を以て、その身を瓔珞し、百八一番、迭ひに代りて宿衞す。その殿前に於て、甘果を列樹し、枝葉蔚映し、花實繁茂す。また、浴地あり、澄淸淨潔、池邊の香草、雜色の蓮花、猗靡芬敷する、稱計すべからず。(二二)異類の鳥、數百千種、心目を光麗ならしむるが、太子を趣悅せしむ。

【母后生天】 太子既に生れ、始めて滿七日にして、その母命終す。太子を懷ける功德の大なるを以ての故に、忉利に上生して、封受自然なり、太子、福德威重にして、女人の禮を受くるに堪ふるものなきを自ら知る。故に將に終らんとするに因りて、これに託して生れたるなり。爾の時、太子の姨母、(二三)摩訶波闍波提、太子を乳養して、母の如く異るなし。

【學諸書藝】 時に白淨王、勅して七寶の天冠及び瓔珞を作りて、太子に與ふ。太子、年漸く長大にして、象馬牛羊の車を辨ずるや、凡そこれ童子の玩好する所の具、給與せざるなし。

【二二】(原文)異類之鳥、數百十種、光麗心目、趣悅太子。

【二三】Mahāprajāpatī。大愛道、大生主と譯す。

爾の時、擧國の人民、皆仁惠を行ひ、五穀豐熟、風雨時を以てし、また盜賊なく、快樂安隱なり。皆これ太子の福德力の故に。時に、王、また、青衣の所生なる、この（二三）車匿等、五百の蒼頭を以て、太子に給侍せしむ。

年七歲に至り、父王、心に念ず、『太子、已に大なり。宜しく書を學ばしむべし』と。國中の聰明なる婆羅門の、諸の書藝に善きを訪ね覓め、請使して、來りて以て太子に敎へしむ。爾の時、一婆羅門あり、（二四）跋陀羅尼と名く。五百の婆羅門と、以て眷屬たり。來りて王の請を受く。卽ち婆羅門に白して言く、『尊者を屈して、太子の師と爲さんと欲す。（二五）これ爾るべしや、不や。』婆羅門言ふ、『知る所に隨つて、以て太子に授くべし。』時に、白淨王、更に太子の爲に、大學堂を起し、七寶もて莊嚴し、（二六）牀榻學具、極めて精麗ならしめ、吉日を卜擇して、卽ち太子を以て、婆羅門に與へて、これを敎へしむ。爾の時、婆羅門、四十九の書字の本を以て、敎へてこれを讀ましめんとす。時に太子、この事を見已りて、その師に問うて言く、『これは何等の書ぞ。閻浮提中の、一切の諸書、凡そ幾種あるか。』師卽ち默然として、答ふる所を知らず。またまた、問うて言く、『この阿の一字に、何等の義あるか。』師、また、默然として、また、答

【二三】Chandaka

【二四】Bādarāyaṇa。吠檀多經の作者たる大婆羅門の名。

【二五】（原文）此可爾不。

【二六】榻、榻に同じ。こしかけ。

生して、七歩を行く時、天人之中、最尊最勝と。自ら言へり。この言虚ならず。唯、願はくは、爲に閻浮提の書に凡そ幾種あるかを説きたまへ。』太子答へて言ふ、『閻浮提中、或は【二七】梵書あり、或は【二八】佉樓書。或は【二九】蓮花書あり。是の如き等六十四種あり。この阿字は、これ梵音聲なり。また、この字義は、これ不可壞なり。また、これ無上正眞道の義なり。凡そ此の如きの義、無量無邊なり。』爾の時、婆羅門、深く慙愧を生じ、還つて王の所に至り、王に白して言く、『大王、太子はこれ天人中、第一の師なり。云何ぞ我をして教へしめんと欲したまふか。』爾の時、父王、婆羅門の言を聞きて、倍、歡喜を生じ、未曾有と歎じ、即ち厚くかの婆羅門を供養して、意の之く所に隨ふ。凡そ諸の技藝・典籍・議論・天文・地理・算數・射御、太子悉く自然にこれを知る。

【二七】Brahmī
【二八】Kharoṣṭhī
【二九】Puṣkarasārī

巻の第二

【競試武藝】爾の時太子、年十歳に至る。諸釋種中、五百の童子皆亦同年なり。太子の從弟(一)提婆達多、次に(二)難陀と名くる、次に(三)孫陀羅難陀と名くる等に、或は三十相・三十一相なるものあり。或は、また、三十二相ありと雖も、相分明ならず。各、技藝に閑うて、大筋力あり。時に提婆達多等の五百童子・既に太子が、諸藝に皆通じて、名の十方に徹するを聞き、共に相謂つて言く、『太子、また、聰明の智慧あり。善く諸論を解すと雖も、力膂に至りては、詎ぞ我等に勝らん。太子と、その勇健を較べんと欲す。』爾の時、父王、また、國中の善く射を知るものを訪ねて、これを召し來り、太子に敎へしむ。卽ち後園に往きて、鐵鼓を射んと欲す。提婆達多等、五百の童子、また、悉く隨從す。時に、師、卽便ち一小弓を授けて、太子に與ふ。太子、笑を含んでこれに問うて言く、『これを以て我に與へて、何等をか作さしめんと欲する。』射師答へて言く、『太子をして、この鐵鼓を射しめんと欲す。』太子、また、言く、『この弓、力弱し。』更に是の如き七弓を求めて將來し・師卽ち授與す。太子、便ち七弓を執り、以て一箭を射、七の鐵鼓を過ぐ。時にかの射師、

【一】Devadatta
【二】Nanda
【三】Sundarananda

往いて王に白して言く、『大王、太子は自ら射藝を知り、一箭力を以て、射て七鼓を過ぐ。閻浮提中、能く等しきものなけん。云何ぞ我をして師たらしむるか。』爾の時、白淨王、この語を聞き已りて、心大に歡喜して、自ら念言す、『我が子、聰明、書論算數は、四遠悉く知るも、その射藝は。四方の人民、未だ知るものあらず。』卽ち太子及び提婆達多等、五百の童子に勅し、またまた、鼓を擊ちて國界に唱令す。『太子薩婆悉達、却後七日、當に後園に出でて、武藝を試みんと欲す。諸人民中、勇力あるものは、悉く此に來るべし。』第七日に到り、提婆達多、六萬の眷屬と、最も先に城を出づ。時に、一大象あり、城門に當りて住まる。この諸軍衆、皆敢て前まず。提婆達多、諸人に問うて言く、『何が故に、此に住りて、前まざるか。』諸人答へて言く、『一大象あり、門に當りて立つ。擧衆、これを畏るるが故に、敢て前まず。』提婆達多、この言を聞き已りて、獨、象の所に前み、手を以て頭を搏つ。卽便ち地に躃る。是に於て、軍衆次第に過るを得たり。爾の時、難陀、また、眷屬と、また、城を出でんと欲す。その諸軍衆、徐歩して漸く前む。難陀卽ち問ふ、『何が故に。行くこと遲きぞ。』諸人答へて言く、『提婆達多、手に一象を搏ち、躃れて城門に在り。行者の路を妨ぐ。是を以ての故に、遲し。』難陀、卽便ち前んで象の所に至り、足指を以て、象を挑げ、路傍に擲著す。無數の人衆、聚りて共にこれを看る。爾の時、太子、十

萬の眷屬に、前後圍繞せられて、始めて城門を出づ。路傍に、人衆の聚り看るを見、卽便ち問うて曰く、『この諸人輩、何の看る所をか爲す。』從人答へて言く、『提婆達多、手に一象を搏ち、斃れて城外に在りて、人の行路を妨ぐ。難陀、次に出でて、足指を以て挑げて、ここに擲著す。是の故に、行人悉く聚りてこれを看る。』是に於て、太子卽ち自ら念言す、『今、正にこれ力を現はすの時』と。太子便卽ち手を以て象を執り、城外に擲著し、還、手を以て接して、傷損せしめず。象また還つて穌りて、苦痛する所なし。時に、諸人民、未曾有と歎ず。王これを聞き已りて、深く奇特を生ず。是の如く、太子、及び提婆達多、幷に難陀、四遠の人民、皆悉く來集して、かの園中に在り。

爾の時、彼の園、種種に莊嚴して、金鼓・銀鼓・鍮石の鼓・銅鐵等の鼓を施列して、各七枚あり。爾の時、提婆達多、最も先きにこれを射て、三金鼓を徹す。次に難陀も、また、三鼓を徹す。諸の來人衆、悉く皆雅歎す。爾の時、群臣、太子に白して言く、『提婆達多、及び難陀、皆已に射訖りぬ。今や次第は正しく太子に在り。唯、願はくは太子、この諸鼓を射よ。』是の如く、三たび請ふ。太子、善しといひて、それに語つて言く、『もし我をして諸鼓を射しめんと欲せば、この弓力弱し。更に强きものを覓む。』諸臣答へて言く、『太子の祖王に、一良弓あり、今、王庫に在り。』

太子語りて言く、『便ち取り來るべし。』弓既に至るや、太子卽ち牽きて以て一箭を放ち、諸鼓を徹し過ぎて、然る後に地に入り、泉水流出し、またまた、㊃大鐵圍山を穿ち過ぐ。爾の時、提婆達多、また、難陀と、共に相撲戲す。二人力等しく、また勝つものなし。太子また前んで、手に二弟を執りて、これを地に擲し、慈力を以ての故に、傷き痛ましめず。爾の時、四遠の諸人民衆、既に太子の此の如き力あるを見て、高聲に唱へ言ふ、『白淨王の太子は、ただ智慧の一切人に勝るるのみにあらず、その力の勇健なるも、また等しきものなし』と、歎伏せざるなく、益恭敬を生ず。

【灌頂太子】　爾の時白淨王、卽ち諸臣を會して共に議して言く、『太子、今や年已に長大、智慧勇健、皆悉く具足す。宜しく四大海水を以て、其頂に灌ぐべし。』又復、勅を餘の小國王に下す、『却後二月八日、太子の頂に灌がん。皆來り集るべし。』二月八日に至る。諸の餘國王、幷に及び仙人・婆羅門等、皆悉く雲集し、繒の幡蓋を懸け、香を燒き。花を散じ、鍾を鳴し、鼓を擊ち、諸の伎樂を作し、七寶の器を以て、四海の水を盛り、諸仙人衆、各各頂戴して、婆羅門に授け、是の如くして、乃至、遍ねく諸臣に及び、悉く已に頂戴して、傳へて王に授與す。時に、王、卽ち以て太子の頂に灌ぎ、七寶の印を以て、これに付す。また、大鼓

【四】（Cakravāḍa。チヤクラヴーダ）須彌山を圍みて、九山八海あり。その外圍を限る山。

を撃ちて、高聲に唱へ言ふ、『今、(五)薩婆悉達を立てて、以て太子と爲す。』爾の時、虚空の天・龍・夜叉・人非人等、天の伎樂を作し、異口同音に、讃じて善哉と言ふ。迦毗羅旆兜國の、太子を立つる時に當りて、餘の八國王も、また、この日に於て、同じく太子を立つ。

【樹下思惟】 爾の時太子、王に啓して出遊す。王即ち聽許す。時に王、即ち太子幷に諸群臣と前後導從して、國界を按行し、次で復、前行して王の田所に至りて、即便ち閻浮樹下に止息して、諸の耕人を看る。爾の時、淨居天、化して壤蟲と作り、烏隨つてこれを啄む。太子、見已りて、慈悲心を起し、『衆生や愍むべし。互に相呑食す』とて、即便ち思惟す、『欲界の愛を離れて、是の如く、乃至、四禪地を得ん。』日光(六)昕赫するや、樹爲に枝を曲げ、隨つて太子を蔭ふ。爾の時、白淨王、四面に推求して、太子を問ひ覓む。從人答へて曰く、『太子、今、閻浮樹下に在り。』時に、王、即便ち諸の群臣と、かの樹の所に往く。未だ至らざるの間に、遙に太子の端坐思惟するを見、また、かの樹曲りて、その軀を蔭ふを見て、深く奇特を生ず。時に王即ち前んで太子の手を執り、問うて言く、『汝、今、何が故に、ここに在りて坐するか。』太子答へて言く、『諸衆生を觀るに、更相呑食す。甚だ傷み愍むべし。』王、この語を聞きて、心に憂惱を生じ、その出家を慮り、宜し

【五】Suddhāvāsa。色界十八天の中、最高の五天をいふ。

【六】昕。あさ。

く急に婚娉し、以てその意を悅ばすべしとて、卽便ちこれを呼びて、俱共に國に還らんとす。太子答へて言く、『願はくは、ここに停まらん。』王その語を聞きて、心に卽ち念言す、『彼の阿私陀が、往日に說ける所、太子、今、將にその言の如くならんとす。』王卽ち淚を流し、重ねて喚んで國に還らんとす。太子既に父王の此の如くなるを見、卽便ち隨從して、所止に歸る。王、在家を樂しまざるを恐れ愁憂へ、更に妓女を增して、これを娛樂せしむ。

【納妃】爾の時太子、年十七に至る。王、群臣を集て共に議して言く、『太子、今は年已に長大なり。宜しくそが爲に婚所を訪ね索むべし。』諸臣答へて言く、『一釋種婆羅門あり、(七)摩訶那摩と名く。その人に女あり、(八)耶輸陀羅と名く。顏容端正、聰明智慧、賢才人に過ぎ、禮儀備に擧る。是の如き德あり。太子の妃たるに堪ふ。』王卽ち答へて言く、『もし、卿の語の如くば、便ち爲にこれを納れん。』王、宮內に還り、卽ち宮中の聰明有智なる舊宿女人に勅す、『汝、往いて、摩訶那摩長者の家に至り、その女の容儀禮行の、如何なるべきかを瞻看すべし。かしこに停まる、滿七日に至るべし。』王勅を受け已りて、卽便ちかの長者の家に往き、七日中に於て、具にこの女を觀、還つて王に答へて言く、『我、この女の容貌端正・威儀進止を見るに、與に等しきものなし。』王その言を聞きて、極大歡喜し、卽便ち

【七】Mahānāma（マハーナーマ）
【八】Yaśodharā（ヤショーダラー）

人を遣はして、摩訶那摩に語つて言く、『太子年長じて、納妃を爲んと欲す。諸臣幷に言ふ、「汝が女淑令なり。宜しくこの擧に堪ふべし」と。今、相屈せんと欲す。』時に、摩訶那摩、王の使に答へて言く、『謹んで勅旨を奉ぜん。』卽ち諸臣をして、吉日を擇び採らしめ、車馬乘を遣はして、往いてこれを迎ふ。既に宮に至り已るや、太子、婚姻の禮を具足し、またまた、更に諸妓女衆を增して、晝夜娛樂せしむ。爾の時、太子、恒にその妃と、行住坐臥、未だ曾て倶にせずんばあらざるも、初より世俗の意あるなく、靜夜中に於て、ただ禪觀を修するのみ。時に、王、日日諸の婇女に問ふ、『太子は妃と相接近するや不や。』婇女答へて言く、『太子に夫婦の道あるを見ず。』王、この語を聞きて、愁憂して樂しまず。更に妓女を增して、これを娛樂せしむ。是の如く、時を經るも、猶、接近せず。時に、王、深く不能男ならんを疑ひ恐れぬ。

【四門遊觀】爾の時、太子、諸妓女の花果茂盛し、流泉清涼なる園林に歌詠するを聞き、太子忽ち便ち出でて遊觀せんと欲す。卽ち妓女をして往いて王に白さしめて言く、『在宮日久し。暫く園林に出て遊戲せんを樂ひ欲す。』王、この語を聞き、心に歡喜を生じて、自ら念言す、『太子は當にこれ宮に在りて夫婦の禮を行ふを樂しまざるべし。所以に園林に出でて去らんを求むるのみ。』卽便ちこれを聽し、諸群臣に勅して、園觀を整治し、經る所の道路を皆清淨ならしむ。太子、卽

便ち往いて王の所に至り、頭面に足を禮し、辭して出で去る。時に、王、卽便ち一舊臣の、聰明智慧にして、言辯に善きものに勅して、太子に從はしむ。爾の時、太子、諸官屬と、前後導從して、城の東門より出づ。國中の人民、太子の出るを聞き、男女路に盈ち、觀者雲の如し。時に、淨居天、化して老人と作り、頭白く背傴り、杖に拄へられて羸步す。太子、卽便ち從者に問うて言く、『こは何人とか爲す。』從者答へて曰く、『これは老人なり。』太子また問ふ、『何を謂つてか老と爲す。』答へて曰く、『この人、昔日、曾て嬰兒・童子・少年を經たり。遷謝して住まらず、遂に根熟するに至り、形變じ色衰へ、飮食消せず、氣力虛微に、坐起に(九)苦極し、餘命幾くもなし。故に謂つて老と爲す。』太子、また問ふ、『唯、この人のみ老なりや、一切皆然りや。』從者答へて言く、『一切皆悉く、此の如くなるべし。』爾の時、太子、この語を聞き已りて、大苦惱を生じて、自ら念言す、『日月流れ邁き、時變り歲移り、老の至る電の如し。身安んぞ恃むに足らん。我、富貴と雖も、豈獨免れんや。云何ぞ、世人、怖畏せざる。』太子、本より以來、世に處するを樂しまず、また、この事を聞きて、益厭離を生じ、卽ち車を廻して還り、愁へ思うて樂しまず。時に、王、聞き已りて、心に煎憂を懷き、その學道を恐れ、更に妓女を增し、以てこれを娛樂せしむ。

【九】極。つかる。

爾の時、太子また、少時を經て、王に啓して出遊す。王この言を聞き、心に憂慮を生じて、自ら念言す、『太子前に出でて、老人に逢ひ見て、憂愁して樂しまず。今、云何ぞ、また、出るを求むる。』王、太子を愛して、違異するに忍びず。【一〇】僶俛してこれに從ひ、即ち諸臣を集めて共に議して言く、『太子前には城の東門を出でて、老人に逢ひ見、還つて輒ち樂まざりき。今、已に、また、出でて遊觀せんを求む。吾免るる能はず。遂にまた、これを許しぬ。』諸臣答へて言く、『當に更に外の諸官屬に嚴勅して、道路を修治し、繒の幡蓋を懸け、散華燒香し、皆華麗ならしむべし。臭穢、諸の不淨潔、及び老病をして、道の側に在らしむるなかれ。』爾の時、迦毗羅旆兜城の四門の外に、各一園あり。樹木花果・浴池樓觀、種種に莊嚴して、皆悉く異るなし。王、諸臣に問ふ、『外の諸園觀、何れをか勝と爲す。』諸臣答へて言く、『外の諸園觀、皆等しくして異るなく、忉利天の歡喜の園の如し。』王、また、勅して言ふ、『太子、前に出でしは、已に東門よりせり。今は、南門より出でしむべし。』爾の時、太子、百官導從して、城の南門を出づ。時に淨居天、化して病人と作る。身瘦せ腹大に、喘息呻吟し、骨消え肉竭きて、顏貌痿黄に、擧身戰き掉うて、自ら持する能はず、兩人扶腋して、路側に在り。太子即ち問ふ、『こは何人なるか。』從者答へて

【一〇】僶。心に欲せざる事を勉めてなす。俛、勉に同じ、つとむ。

曰く、『こは病人なり。』太子また問ふ、『何を謂つてか病とは爲す。』答へて曰く、『夫れ病と謂ふは、皆嗜欲に由る。飲食度なければ、四大調はず、轉變して病を成し、百節苦痛し、氣力虚微に、飲食寡少に、眠臥安からず、身手ありと雖も、自ら運ぶ能はず、要ず他の力を假りて、然る後に坐起す。』爾の時、太子、慈悲心を以て、かの病人を看、自ら愁憂を生じて、またまた問うて言く、『この人獨りのみなりや、餘も皆然りや。』答へて曰く、『一切の人民、貴賤となく、同じくこの病あり。』太子聞き已りて、心に自ら念言す、『此の如きの病苦、普くこれに嬰るべきに、云何ぞ世人、樂に耽りて畏れざる』と。この念を作し已り、深く恐怖を生じて、身心の戰動すること、譬へば月影の波浪の水に現ずるが如し。從者に語りて言く、『此の如き身は、これ大苦の聚なるを、世人は、中に於て横に歡樂を生じ、愚癡・無識にして、覺悟を知らず。今、云何ぞ、彼の園に往きて、遊觀嬉戲せんと欲する』と。卽便ち車を廻し、還つて王宮に入り、坐に自ら思惟し、愁憂して樂しまず。王、從者に問ふ、『太子今出でて、寧ろ樂しめるありや不や。』從者答へて言く、『始め南門を出でて、病人に逢ひ見たり。これを以て樂しまず、卽ち車を廻らして還りぬ。』王、この語を聞きて、心に大に愁憂し、その出家を慮る。時に、王、卽便ち諸臣に問うて言く、『太子前には城の東門を出でて、老人に逢ひ見て、愁憂して樂しまざりき。この事を以ての故に、吾卿

等に勅して、道路を淨治し、老病をして巷側に在らしむる無らしめぬ。云何ぞ、今、城の南門を出でて、また、疾病の人あるを致し、また、太子をして逢値してこれを見しめたりや。』諸臣答へて言く、『近く王の勅を受け、嚴に外司に命じて、諸臭穢・老病の、道側に在るなからしめんと、互に相撿覆して、敢て懈怠するなかりき。知らず、何に緣りてか、忽ちに病人ありしぞ。これ我等の罪咎に非るなり。』爾の時、王、諸の從者に問うて言く、『汝等幷に病人の路に在るを見たり。何よりしてか至れる。』從者答へて曰く、『蹤跡あるなし。何れより來れるかを知らず。』時に、王、深く太子に於て、猶豫の心を生じ、その學道を恐れ、更に妓女を增して、その意を悅ばしめ、またまた、五欲の中に於て、戀著の心を生ぜしめんを欲しぬ。

爾の時、一婆羅門子あり、(二)憂陀夷と名く。聰明智慧にして、極めて才辯あり。時に、王、即便ち請じ來りて宮に入れ、これに語つて言く、『太子、今、世に在りて、五欲を受くるを樂まず。恐くはそれ久しからずして出家學道せん。汝、これと共に朋屬と作り、具に世間の五欲の樂事を說きて、そをして心動きて、出家を樂しまざらしむべし。』時に憂陀夷、即便ち答へて言く、『太子の聰明、與に等しきものなし。所知の書論、皆悉く淵博にして、幷に、これ、我が、今、未だ

【二】Udāyin

曾て聞かざる所なり。云何ぞ、これを誘說せしむるを見んや。譬へば、藕絲を以て、須彌を懸けんと欲するごとく、我もまた是の如し。終に太子の心を迴らす能はじ。大王、既に勅して朋友と作らしむ。要らず當に自ら我が知見する所を竭すべし。』時に優陀夷、王の勅を受け已りて、太子に隨從し、行住に坐臥に、敢て遠離せず。時に、王、またまた、諸妓女の、聰明智慧、顏容端正にして、歌舞に善く、能く人を惑はすものを選び、種種に莊飾し、光麗目を悅ばしむるを、皆悉く遣はし往いて太子に給侍せしむ。

爾の時、太子、また、少時を經て、王に啓して出遊す。王、この語を聞きて、心に自ら念言す、『かの優陀夷、既に太子と、共に朋友たり。今もし出遊せば、或は前に勝りて、また、俗を厭ひ出家を樂しむの心なけん。』この念を作し已りて、卽便ち聽許す。時に、王、またまた、諸大臣を集め、悉くこれに語つて言く、『太子、今、また、出遊を求めぬ。我、違ふに忍びず、已に、また、これを聽しぬ。太子、前に東南の二門を出でて、已に老病を見、還つて輒ち憂愁せり。今は宜しく西門より出でしむべし。我が心そを慮りて、還また樂しまず。〔三〕然れども優陀夷は、これその良友なり。冀くは、今出で還らんに、また、爾るべからざらんを。卿等、好く道路を修治せしめ、園林・臺觀を、皆嚴整なら

【三】（原文）然優陀夷、是其良友、冀今出還不復應爾。

しめ、香華幡蓋を、前に數倍とし、また、老病臭穢ありて、道側に在らしむる無かれ。』臣、勅を受け已りて、卽ち外司に語りて、道路幷に及び園林を嚴治して、光麗常に倍せしめ、王、また、先づ諸の妙妓女を送りて、かの園中に置き、またまた、勅して優陀夷に語りて言く、『もし、路側に當りて、不祥の事あらば、方便を以て、その心を誘ひ悅ばしむべし。』幷に諸臣に勅して、太子に隨從し、皆伺察して、もし不吉あれば、遠くこれを驅逐せしむ。爾の時、太子、優陀夷と、百官導從して、燒香散華し、衆伎樂を作して、城の西門を出づ。時に淨居天、心に自ら念言す、『先に老病を二城門に現じ、擧衆皆見たれば、白淨王をして、從者幷に及び外司を嗔責せしむ。太子の今出や、王制嚴峻なり。我、今、死を現じ、若し皆見ば、王の忿怒を增し、必ず罰戮を加へ、枉、無辜に及ばん。我、今日に於て、現ずる所の事、唯、太子及び優陀夷の二人をして、見しめんのみ。餘の官屬をして、責を受けざらしめん。』この念を作し已りて、卽便ち來り下り、化して死人と爲る。四人輿を擧げ、諸の香華を以て、屍上に布散し、室家大小、號哭してこれを送る。爾の時、太子、優陀夷と、二人のみ獨見る。太子問うて言く、『こは何物とか爲す。花香を以て、その上を莊飾し、また、人衆ありて、號哭して相送る。』時に優陀夷、王勅を以ての故に、默然として答へず。是の如く三たび問ふや、淨居天王の威神の力、優陀夷をして覺えず答へ言はし

む、『これ死人なり。』太子また問ふ、『何を謂つて死と爲すか。』優陀夷言く、『夫れ死と謂ふは、刀風、形を解いて、神識去り、四體諸根、また知る所なきなり。この人の世に在るや、五欲に貪著し、錢財を愛惜し、辛苦經營し、唯積聚を知るのみ、無常を識らざるに、今や一旦これを捨てて死す。また父母親戚眷屬の爲に愛念せらるるも、命終の後は、猶草木の如く、恩情の好惡、また相關せず。是の如く、死は誠に哀れむべきなり。』太子聞き已りて、心大に戰き怖れ、また優陀夷に問うて言く、『唯この人死すや、餘もまた然るべしや。』即ちまた答へて言く、『一切の世人、皆此の如くなるべし。貴も賤も、免脫するを得るなし。』太子、素性、恬靜難動なり。既にこの語を聞き、自ら安んずる能はず、即ち微聲を以て、優陀夷に語る、『世間、乃ちまたこの死苦あるを、云何ぞ中に於て、放逸を行じつつ、心木石の如くにして、怖畏を知らざる。』即ち御者に勅す、『車を廻らして還るべし。』御者答へて言く、『前に二門を出でしに、未だ園所に至らず、中路にして反り、大王をして深く瞋責せられしむるを致せり。今、豈敢てまた此の如くせんや。』時に、優陀夷、御者に語りて言く、『汝が所說の如し。便ち歸るべからず』。即ちまた前行して、かの園中に至るに、香華幡蓋、衆伎樂を作し、衆妓の端正、猶、諸天の婇女の如く、異るなきが、太子の前に在りて、各競つて歌舞し、姿態を以て、その意を悅ばし動かさんを冀ふ。太子の心安

くして、移動すべからず。卽ち園中に止り、樹間に蔭息し、その侍衞を除きて、端坐思惟し、昔、嘗て、閻浮樹下に在りて、欲界を遠離し、乃至、第四禪定を得たりしを憶ふ。

爾の時、優陀夷、太子の所に到りて、この言を作す、『大王、勅して、太子と共に朋友たらしめらる。脫し得失あらば、互に相開悟せん。朋友の法、その要三あり。一には、過失あるを見ば、輙ち相諫曉せん。二には、好事あるを見ば、深く隨喜を生せん。三には、苦厄に在らば、相棄捨せざらん。今、誠言を獻ぜん。願はくは、責められざれ。古昔の諸王も、及び今現在のも、皆悉く五欲の樂を受けて、然る後に出家するを、太子云何ぞ永絕して顧みざる。また人の世に生るる、宜しく人行に順ふべし。國を棄てて、道を學するものあることなし。唯願はくは、太子、五欲を受けて、子息あり、王嗣を絕たざらしめよ。』爾の時、太子、これに答へて言く、『誠に所說の如し。(三)ただ我、以て國を捐てざるが故に爾るのみ。またまた、五欲を樂なしと言はず。老病生死の苦を畏るるを以ての故に、五欲に於て、敢て愛著せざるなり。汝が向に言る所、「古昔の諸王は、先づ五欲を經て、然る後に出家す」と。この諸王等、今、何許にか在る。愛欲を以ての故に、或は地獄に在り、或は餓鬼に在り、或は畜生にあり、或は人・天に在り。是の如き輪轉の苦あるを以ての故に、是を以て、我、老病の苦、

【三】（原文）但我不以捐國故爾。

生死の法を離れんと欲するのみ。汝、今、云何ぞ我をして、これを受けしむる。』時に優陀夷、才辯を竭して、太子に勸奬すと雖も、廻らしむる能はず。卽便ち退坐して、所止に歸る。太子、仍つて勅して駕を嚴しめ宮に還る。諸の妓女衆・及び優陀夷、愁憂慘慼し、顏貌顰蹙して、人の新に愛する所の親屬を喪ふが如し。太子、宮に到りて、惻愴常に倍す。

時に白淨王、優陀夷を呼びて、これに問うて言く、『太子の今出、寧ろ樂めるありや、不や。』優陀夷言く、『城を出づる、遠からずして、死人に逢ひ見る。また、その何れよりして來れるかを知らず。太子と我と、同時にこれを見たり。太子問うて言く、「これは何人たるか。」我もまた覺えず、「これ死人」と答へたり。』時に、王、卽ちまた諸の從者に問ふ、『汝等・皆、城の西門外に、死人あるを見しや不や。』從者答へて言く、『我等見ず。』王、この語を聞きて、神意豁然として、自ら念言す、『太子、優陀夷の二人のみ獨り見たるは、こはこれ天力なり、諸臣の咎に非ず。必定して當に阿私陀の言の如くなるべし。』この念を作し已りて、心大に苦惱し、また妓女を增して、以てこれを娛樂せしめ、日日人を遣はして、太子を慰誘し、これに語つて言く『國はこれ汝の有なり。何が故に、愁憂して樂しまざるか。』王また諸の妓女衆に嚴勅して、太子の意を悅ばせ、晝夜を捨つるなし。

時に、白淨王、天力にして、また人事に非るを知ると雖も、太子を愛重して、言はざる能はず。心に自ら思惟す、『太子前に已に三城門を出でたり。今は唯北門の未だ出でざるあるのみ。それ必ず久しからずして、更に出遊を求めん。當にまたかの外園林を莊嚴して、倍光嚴ならしめ、諸の不可意の事あらしむるなかるべし。』思惟せる所の如く、具に諸臣に勅す。時に、王、また心に自ら願つて言く、『太子、もし、城の北門を出でん時、唯、願はくは、諸天、また不吉祥の事を現じて、また我が子をして心に憂惱を生ぜしむるなからんを。』既に心願し已りて、遂に御者に勅す、『太子、もし、出でば、當に乘馬をして、四に、諸人民の光麗なる莊飾を望み見るを得しむべし。』この時、太子、王に啓して、出遊せんとす。王、違ふに忍びず、便ち優陀夷、及び餘の官屬と、前後導從して、城の北門を出でて、かの園所に至る。太子、馬を下り、樹に止息し、侍衞を除去して、端坐思惟し、世間の老病死苦を念ず。時に、淨居天、化して比丘と作り、法服にして、鉢を持ち、手に錫杖を執り、地を視て行き、太子の前に在り。太子、見已りて、即便ち問うて言く、『汝はこれ何人ぞ。』比丘答へて言く、『我はこれ比丘。』太子また問ふ、『何をか比丘とはいふ。』答へて言く、『能く【四】結賊を破り、後身を受けざるが故に、比丘といふ。世間は皆悉く無常危脆なり。我が修學する所は、

【四】結は、煩惱の異名、心身を纏縛するを以てなり。

無漏の聖道、色・聲・香・味・觸・法に著せず、永く無爲を得て、解脱の岸に到るなり。』この言を作し已り、太子の前に於て、神通力を現じて、虚に騰りて去る。爾の時に當り、諸從官屬、皆悉く覩見す。

太子、已にこの比丘を見、また廣く出家の功德を説くを聞きて、その宿懷厭欲の情に會し、便ち自ら唱へて言く、『善哉、善哉、天人の中、唯これを勝と爲す。我當に決定してこの道を修學すべし。』この語を作し已りて、即便ち馬を索めて宮城に還歸る。時に、太子、心に欣慶を生じて、自ら念言す、『我、先に老病死苦を見て、晝夜常にこれが爲に逼らるるを恐れしに、今、比丘を見るや、我が情を開悟し、解脱の路を示す。』この念を作し已りて、即ち自ら思惟方便して、出家の因縁を求覓む。

爾の時、白淨王、優陀夷に問うて言く、『太子の今出、寧ろ樂めるありや不や。』時に優陀夷、即ち答へて言く、『太子向きに出でて、經し所の道路、諸の不祥なし。既に園中に到りて、太子獨り自ら樹下に在り、遙に一人を見たり。鬚髮を剃除し、(二五)染色衣を著け、太子の前に來りて、共に言語し、言語既に畢りて、虚に騰つて去る。竟にまた何を論説せるかを知らず。太子これに

【二五】袈裟のこと。食ふべからざる草木の花葉皮を以て染むるを以てなり。

因りて、駕を嚴しめて歸る。爾の時に當りて、顏容歡悅し、還つて宮中に至りて、方に憂愁を生じぬ。』時に、白淨王、既にこの語を聞きて、心に狐疑を生じ、またまた、これ何の瑞相たるかを知らず。深く懊惱を懷きて、自ら念言す、『太子、決定して捨家學道せん。また、その妃を納れ、久しうして子なし。我、今、耶輸陀羅に勅し、(二六)思ひ方便して、國嗣を絶つ莫るべし。また、警戒して、太子の去るを知らざらしむる勿るべし。』既にこの念を作すや、思惟する所の如く、卽便ち耶輸陀羅に勅す。耶輸陀羅、王の勅を聞き已りて、心に慙愧を懷き、默然として住し、行住坐臥、太子を離れず。時に王また諸の妙妓女を增して、以てこれを娛樂せしむ。

【二六】(原文)我今應勅耶輸陀羅、當思方便、莫絶國嗣。

【出家】爾の時、太子、年十九に至り、心に自ら思惟す、『我、今、正にこれ出家の時』と。便ち往いて、父王の所に至る。威儀庠序、猶、帝釋の、梵天に往詣するが如し。傍臣見已りて、王に白して言く、『太子、今、大王の所に來る』と。王、この言を聞きて、憂喜交集る。太子既に至りて、頭面に禮を作す。爾の時、父王、卽便ちこれを抱き、勅して坐せしむ。太子坐し已りて、父王に白して言く、『恩愛の集會には、必ず別離あり。唯、願はくは、我が出家學道を聽したまへ。一切衆生の愛別離苦を、皆解脫せしめんを、願はくは、必らず、許を垂れて、留難せられざれ。』

時に、白淨王、太子の語を聞きて、心大に苦痛すること、猶、金剛の、山を摧破するが如く、擧身戰き掉ひ、本座に安んぜず、太子の手を執りて、また言ふ能はず、啼泣流涙し、嘘唏哽咽す。是の如き、良久しうして、微聲に言ふ、『汝、今、宜しく出家の意を息むべし。所以は何。年既に少壯にして、國未だ嗣あらざるを、便ち我に委して、曾て迴顧せずとは。』爾の時、太子、既に、父王の流涙して許さざるを見て、所止に還歸し、出家を思惟して、愁憂して樂します。

爾の時、迦毘羅旆兜國の諸大相師、太子を占知す、『もし、出家せずんば、七日を過る後、轉輪王の位を得、四天下に王として、七寶自ら至らん』と。各、知る所を以て、往いて、王に白して言く、『釋迦種姓、ここに於て、方に興らん。』王、この語を聞きて、心に歡喜を生じ、即ち諸臣幷に釋種の子に勅す、『汝、相師の此の如く言ふを聞くや不や。皆、應に、日夜、太子を侍衞し、城の四門に於て、門ごとに各千人、城外一踰闍那内を周匝して、人衆を羅置し、これを防護すべし。』また、耶輸陀羅、幷に諸内官に勅す、『倍、警戒を加へ、七日を過るまで、家を出でしむる勿れ。』

時に、王、また來りて太子の所に至る。太子、遙に見、即ち往いて奉迎し、頭面に足を禮し、起居を問訊す。王、太子に語る、『我、昔、既に阿私陀の說、及び衆相師、幷に諸奇瑞を聞きて、

必定して、汝が世に處するを樂しまざるを知りぬ。國嗣既に重し。屬當に相繼ぐべし。唯、願はくは、我が爲に、汝が一子を生みて、然る後に俗を絕てよ。また相違せじ。』爾の時、太子、父王の言を聞きて、心に自ら思惟す、『大王の苦に我を留むる所以のものは、正に自ら國に紹嗣なきが爲のみ。』この念を作し已りて、王に答へて言く、『善い哉、勅の如くせん』とて、卽ち左手を以て、その妃の腹を指す。時に耶輸陀羅、便ち體の異るを覺え、自ら娠めるあるを知る。王、太子が、『勅の如くせん』の言を聞き、心に大に歡喜して、謂へらく、『太子、七日の內、必ず未だ兒あらじ。もし、この期を過ぎなば、轉輪王の位、自然に至り、また出家せじ。』

爾の時、太子、心に自ら念言す、『我、年、已に一十有九に至り、今はこれ二月、またこれ七日なり。宜しく方便して出家を志求すべし。所以は何。今、正にこれ時にして、また父王の所願も已に滿ずればなり。』この念を作し已りて、身に光明を放ちて、四天王宮を照し、乃至、淨居天宮を照し、人間をして、この光明を見しめず。爾の時、諸天、この光を見已りて皆太子の出家の時至るを知り。卽便ち來り下りて、太子の所に到り、頭面に足を禮し、合掌して白して言ふ、『無量劫來、修せる所の行願、今、正に成熟の時。』是に於て、太子、諸天に答へて言く、『汝等の語の如く、今、正にこれ時なり。然れども、父王、內外の官屬に勅して、嚴に防衞せらる。去

らんと欲するも、從ふなし。』諸天、白して言く、『我等、自ら當に諸の方便を設け、太子をして出でしめ、知るもの無からしむべし。』諸天卽便ちその神力を以て、諸官屬をして、皆悉く惛臥せしむ。

爾の時、耶輸陀羅、眠臥の中に、三大夢を得たり。一には、月地に墮つと夢む。二には、牙齒落つと夢む。三には、右臂を失ふと夢む。この夢を得已りて眠の中より驚き覺め、心大に怖懼し、太子に白して言く、『我、眠の中に於て、三惡夢を得たり。』太子問うて言く、『汝が夢は、何等ぞ。』耶輸陀羅、卽便ち具に夢むる所の事を說く。太子、語りて言く、『月猶天に在り。齒また落ちず。臂尚在り。また當に知るべし、諸の夢は虛假にして、實に非るを。汝、今、横に怖畏を生ずべからず。』耶輸陀羅、また太子に語る、『我が自ら夢みる事を忖る如くんば、必ずこれ太子出家の瑞なり。』太子また答ふ、『汝、ただ安眠せよ。この慮を生ずる勿れ。要、汝をして不祥の事あらしめず。』耶輸陀羅、この語を聞き已りて、卽便ち還眠る。太子、卽ち坐より起ち、遍く妓女、及び耶輸陀羅を觀るに、皆木人の如く、譬へば芭蕉の中に堅實なきが如し。或は樂器の上に倚りて伏して、臂脚の地に垂るるあり　更に相枕し臥して、鼻涕・目涙し、口中に涎を流す。またまた、遍く妻及び妓女を觀、その形體を見て、（思惟すらく、）『髮・爪・髓腦・骨・齒・髑髏・

皮膚・肌肉・筋・脉・肪・血・心・肺・脾・腎・肝・膽・腸・(一七)胴・屎尿・涕唾、外に革嚢を爲し、中に臭穢を盛る。一の奇とすべきなし。强ひて熏ずるに香を以てし、飾るに花綵を以てす。譬へば、假借せるを、當に還すべきが如く、また久しきを得ず。百年の命、臥してその半を消す。また、憂惱多くして、その樂幾くもなし。世人云何ぞ恒にこの事を見て、覺悟せず、また、その中に於て、婬欲に貪著するぞ。我、今、當に、古昔諸佛所修の行を學し、急にこの大火の聚に遠かるべし。』

爾の時、太子、これを思惟し已りて、後夜に至る。淨居天王、及び欲界の諸天、虚空に充滿し、卽ち共に聲を同じくして、太子に白して言く、『內外の眷屬、皆悉く惛臥す。今、正に、これ出家の時。』爾の時、太子、卽便ち、自ら車匿の所に至るに、天力を以ての故に、車匿自ら覺む。これに語りて言く、『汝、我が爲に(一八)犍陟に(一九)被し來るべし。』爾の時、車匿、この言を聞き已りて、擧身戰怖して、心に猶豫を懷く。一には、太子の命に違ふを欲せず。二には、王の勅旨の嚴峻なるを畏る。思惟良久しくして、涙を流して言ふ、『大王の慈勅、是の如く嚴に、且つまた、今は、遊觀の時に非ず。また怨敵を降伏するの日に非ず。云何ぞ、この後夜の中に於て、忽ちに馬を索め、何くに之かんと欲したまふぞ。』太子、またまた、車匿に語りて言く、

(一七) 胴。胃に同じ。
(一八) Kanthaka。太子の愛乗せる白馬の名。
(一九) 被。明本に鞁に作る。鞁は馬に装束するなり。

『我、今、一切衆生の爲に、煩惱（二〇）結使の賊を降伏せんと欲するが故に、汝、今、我がこの意に違ふべからず。』爾の時、車匿、聲を擧げて號泣し、耶輸陀羅及び諸眷屬をして、皆悉く太子の去るべきを覺り知らしめんと欲せるも、天神力を以て、惛臥故の如し。車匿卽便ち馬を牽いて來る。太子徐に前んで、車匿及び犍陟に語る、『一切の恩愛、會ず當に別離すべし。世間の事は、果遂すべき易く、出家の因緣は、甚だ成就し難し。』車匿聞き已りて、默然として言なく、是に於て、犍陟もまた（二一）噴鳴せず。

爾の時、太子、明相出でて、身より光明を放ち、十方を徹照するを見、師子吼して言く、『過去の諸佛、出家の法なり。我、今、また然り。』是に於て、諸天、馬の四足を捧げ、幷に車匿を接し、釋提桓因、蓋を執りて、隨從す。諸天卽便ち城の北門をして、自然に開いて、聲あらしめず。太子、是に於て、門より出づれば、虛空の諸天、讚歎しつつ隨從す。爾の時、太子、また師子吼す、『我、もし、生老病死憂悲苦惱を斷せずんば、終に宮に還らじ。我、もし、阿耨多羅三藐三菩提を得ず、またまた、法輪を轉ずる能はずんば、要らず、還、父王と相見じ。もし、恩愛の情を盡さざるべくば、終に、還、摩訶波闍波提、及び耶輸陀羅を見じ。』太子がこの誓を說く時に當り、虛空の諸

【二〇】結は、心身を纏縛するの義。使は、心身を驅使するの義。共に煩惱の異名。

【二一】噴は鼻をならすなり。

天、讃じて言く、『善い哉、斯の言必ず果さん。』天曉に至りて、所行の道路、已に三踰闍那なり。時に、諸天衆、既に太子に從ひ、この處に至り已るや、所爲の事畢りて、忽然として現ぜず。爾の時太子、次で、行いて、かの【三】跋伽仙人の苦行林中に至る。太子、この園林の、寂靜にして、諸の諠鬧なきを見、心に歡喜を生じて、諸根悅豫す。卽便ち馬を下り、背を撫でて言く、『爲し難き所の事を、汝は作し已畢りぬ。』また車匿に語る、『馬の行く駿疾にして、【三】金翅鳥王の如かりしに、汝は恒に隨從して、我が側を離れず。世間の人、或は善心あるも、形隨はず。或は形力を運ぶも、心稱はず。汝、今、心形皆悉く違ふなし。また世間の人は、富貴に處れば、競ひ隨つて奉事す。我既に國を捨てて、この林中に來るに、唯汝一人のみ、獨、能く我に隨ふ。甚、希有と爲す。我、今、已に閑靜處に至りぬ。汝、便ち揵陟と倶に宮に還るべし。』爾の時、車匿、この語を聞き已りて、悲號啼泣し、迷悶して地に躃れ、自ら勝ふる能はず。是に於て、揵陟、既に遣らるると聞き、膝を屈して足を舐め、涙落つる雨の如し。車匿答へて言く、『我、今、云何ぞ、太子の此の如く言ふを聽くに忍びんや。我、宮中に於て、大王の勅に違ひ、輙、揵陟に被して、以て太子に與へ、今日、來りてここに至らしむるを致しぬ。父王、及び摩訶波闍波

【三】Bhaga 又は Bhargava

【三】Garuda。龍を取りて食とすといはるる鳥。想像の上に成れる神祕的動物。

提、太子を失ふが故に、必ず當に憂惱すべし。宮中內外、また、應に騷動すべし。またまた、この處、諸の嶮難多く、猛獸毒蟲、道路に交橫す。我、今、云何ぞ太子を捨て、獨、宮に還らんや。』太子卽便ち車匿に答へて言く、『世間の法、獨り生れて獨り死す、豈、また、伴あらん。また、生老病死の諸苦あり。我、云何ぞこれと伴侶たるべき。吾、今、諸苦を斷ぜんと欲するが爲の故に、ここに來至す。苦、もし、斷ずる時、然る後に、一切衆生と、伴侶たるべし。我、卽時に於て、諸苦未だ離れず。云何ぞ、汝と伴侶たるを得ん。』車匿また曰く、『太子、生來、深宮に長じ、身體手足、皆悉く柔輭に、眠臥床褥、細滑ならざるなし。如何ぞ一旦に荊棘瓦礫泥土を履藉して、樹下に止宿せん。』太子答へて言く、『誠に汝が語の如し。設し、我、宮に住せば、乃ちこの荊棘の患を免るべきも、老病死の苦に、會ず自ら侵されん。』車匿、既に、太子のこの語を聞き、悲泣して涙を垂れ、默然として住す。

時に、太子、卽ち車匿に就て、七寶の劍を取りて、師子吼す、『過去の諸佛は、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんが爲の故に、飾好を捨棄し、鬚髮を剃除したまへり。我、今、また、當に、諸佛の法に依るべし。』この言を作し已りて、便ち寶冠を脫し、髻中の明珠を、以て車匿に與へ、これに語つて曰く、『この寶冠、及び明珠を以て、王の足下に致し、汝、我が爲に大王に上白すべ

し、「我、今、生天の樂の爲の故ならず。またまた、父母に孝順ならざるに非ず。また、忿恨瞋恚の心なし。ただ、かの生老病死を畏るるを以て、除斷せんが爲の故に、ここに來至するのみ」と。汝、我を助けて隨喜欣慶すべし。(この)吉祥に於て、更に悲愁を生ずる勿れ。父王、もし、今は未だこれ我が出家の時ならずと謂ひたまはば、汝、我が語を以て、大王に上啓せよ、「老病死の至る、豈、定まれる時あらんや。人、少壯なりと雖も、焉んぞこれを免るるを得んや」と。父王、もし、また、我を責めて、「本、要ず、子あれば當に出家を聽すべし。今、未だ子あらざるに、云何ぞ去るか。及び宮を出づる時、(云何ぞ)啓聞せざる」と、言ひたまはば、汝、我が爲に、具に父王に啓すべし、「耶輸陀羅、久しく已に身めるあり。王、自らこれに問ひたまへ。昔の勅は此の如かりき。(一四)專輒を爲すに非ず」と。往古に諸の轉輪聖王あり。國位を厭ひ、山林に入りて、出家求道せるもの、中途に、還、五欲を受くるあるなし。我が、今の出家も、またまた、是の如し。未だ菩提を成ぜずんば、終に宮に還らじ。内外の眷屬、皆當に我に於て恩愛の情あるべければ、汝が辯を以て、爲にこれを解釋くべし。我に於て、横に憂惱を生ぜしむるなかれ。』太子また身の瓔珞を脫して、以て車匿に授け、これに語つて言く、『汝、我が爲に、この瓔珞を持つて、摩訶波闍波提に奉りて、道ふべし、「我、今、

【一四】專輒は、もつぱらなること。

諸苦の本を斷ぜんが爲の故に、宮城を出で、この願を滿ぜんを求む。また、我に於て、反りて更に苦を生ずるなかれ」と。』また、身上の餘の莊嚴具を脫して、以て耶輸陀羅に與へ、またまた、語りて言く、『人の世に生るる、愛別離の苦あり。我、今、この諸苦を斷ぜんと欲するが爲に、出家學道す。我を以ての故に、恆に愁憂を生ずるなかれ。』幷に、諸の親屬も、皆、また、是の如し。

爾の時、車匿、この語を聞き已りて、倍、悲絕を增すも、太子の勅令に違ふに忍びず。卽便ち長跪して、寶冠・明珠・瓔珞、及び嚴飾の具を受け取り、淚を垂れて言く、『我、太子の此の如き志願を聞きて、擧身戰き掉ふ。設、人心をして、木石の如くならしむるも、この語を聞かば、また、當に悲感すべし。況んや、我は、生來、太子に奉侍せり。この誓言を聞いて、いかで感絕せざらん。唯、願はくは、太子、この志を捨てよ。父王及び摩訶波闍波提・耶輸陀羅、幷に餘の親屬をして、大悲苦を生ぜしむるなかれ。もし、決定して、この意を廻さざらしめば、この處に於てまた我を棄つるなかれ。我、今、太子の足下に歸依するもの、終に遠離して去るの理あるを見ず。設し、宮に還らば、王、必ず、我を責めん、「云何ぞ。獨、太子を委てて歸る」と。何の言もて、大王に上答せしめたまはんと欲するか。』太子答へて言く、『汝、今、此の如き語を作すべからず。世は皆離別あり、豈常に集聚せん。我、生れて七日にして、母、命終したまへり。母子だも、尙、

死生の別あるを、況んや餘人をや。汝、我に於て、偏へに戀慕を生ずるなかれ。揵陟と倶に宮に還るべきなり。』是の如く、再び勅するも、猶、去るを肯んせず。

爾の時、太子、便ち利劒を以て、自ら鬚髮を剃り、卽ち發願して言く、『今、鬚髮を落しぬ。願くは、一切の與に、煩惱、及び〔三五〕習障を斷除せん。』釋提桓因、髮を接して去る。虛空の諸天、燒香散花して、異口同音に讚じて言く、『善哉、善哉。』爾の時、太子、鬚髮を剃り已りて、自らその身に著くる衣の、猶これ七寶なるを見て、卽ち心に念言す、『過去の諸佛の出家の法や、著くる所の衣服、此の如くなるべからず。』時に、淨居天、太子の前に於て、化して獵師となり、身に袈裟を被る。太子、既に見て、心大に歡喜して、これに語つて言く、『汝が著くる衣は、これ寂靜の服、往昔の諸佛の標幟とする所なり。云何ぞ、これを著けて、罪行を爲すか。』獵師答へて言く、『我、袈裟を著けて、以て群鹿を誘ふ。鹿、袈裟を見て、皆來りて我に近づく(を以て)、我、これを殺すを得。』太子また言く、『もし、汝が說ふ如くば、この袈裟を著くるは、ただ、諸鹿を殺さんと欲するが爲の故のみ。解脱を求めて、これを服するにあらず。我、今、この七寶の衣を持つて、汝と貿易へん。吾がこの衣を服するは、一切衆生を攝救して、その煩惱を斷ぜんと欲するが爲な

〔三五〕習とは煩惱の餘習。煩惱の體既に盡きたる後に、猶其痕跡を殘す習慣性をいふ。

り。』獵者答へて言く、『善い哉、告ぐるが如くせん。』卽ち寶衣を脫して、獵者に與へ、自ら袈裟を著け、過去の諸佛所服の法に依る。時に、淨居天、還、梵身に復して、虛空に上昇し、その所止に歸る。時に、空中に、異光明あり。車匿、これを見て、心に奇特を生じ、『未曾有なり。今、この瑞應は、小緣の爲に非ず』と歎ず。車匿、既に、太子の鬚髮を剃除して、身に袈裟を著くるを見、定んで太子の必ず廻すべからざるを知り、地に悶絕して、倍、懊惱を增す。爾の時、太子、これに語つて言く、『汝、今、この悲惱を捨てて、便ち宮城に還り、具に我が意を宣ぶべし。』太子、是に於て、卽ち徐に前行す。車匿歔欷して、頭面もて禮を作し、乃ち遠望し、太子を見ざるに至りて、然る後に方に起ち、擧體戰き掉うて、自ら勝ふる能はず。揵陟及び莊嚴の具を顧み看て、嗚咽悲哽し、涕泗交流れ、卽ち揵陟を牽き、寶冠・嚴身の具を執持し、車匿は號咷し、揵陟は悲鳴しつつ、路に緣りて歸る。

【苦行林一宿】爾の時太子、卽便ち前んで跋伽仙人所住の處に至る。時にかの林中に諸鳥獸あり。既に太子を見て、皆悉く矚目し、端住して瞬かず。跋伽仙人、遙に太子を見て自ら念言す、『こはこれ何の神ぞ。日・月天たりや。帝釋たりや。』便ち眷屬と、來りて太子を迎へ、深く敬重を生じて、この言を作す、『善來、仁者。』太子、既に諸仙人衆を見、心意柔軟、威儀庠序として、太子、

便卽ちその住處に前めば、諸仙人等、また威光なく、皆悉く同じく來りて、太子を請じて坐せしむ。太子坐し已りて、かの仙人の行を觀察すれば、或は草を以て衣と爲すものあり。或は樹皮・樹葉を以て服と爲すものあり。或は唯草木花果のみを食ふものあり。或は、一日一食、或は二日一食、或は三日一食にして、是の如く、自餓の法を行ずるものあり。或は水火に奉じ、或は日月に奉ずるものあり。或は一脚を翹げ、或は塵土に臥すものあり。或は荊棘の上に臥すものあり。或は水火の側に臥すものあり。太子、既に此の如き苦行を見て、卽便ち跋伽仙人に問ふ、『汝等、今、この苦行を修する、甚、奇特たり。皆、何等の果報をか求めんと欲する。』仙人、答へて言く、『この苦行を修するは、天に生れんと欲するが爲なり。』太子また問ふ、『諸天樂しと雖も、福盡くれば則ち窮り、六道に輪廻して、終に苦聚と爲る。汝等、云何ぞ諸の苦因を修して、以て苦報を求むるか。』太子卽便ち心に自ら歎じて言ふ、『商人は寶の爲の故に、大海に入り、王は國土の爲に、師を興して相伐つ。今、諸仙人は、生天の爲の故に、この苦行を修す』と。この歎を作し已り、默然として住す。

跋伽仙人、卽ち太子に問ふ、『仁者、何の意ぞ、默然として言はざる。我等の所行は、眞正に非るか。』太子答へて言く、『汝等の所行は、至苦ならざるに非ず。然れども求むる果報、終に苦

を離れず。』太子、諸仙人と、この議論を設けて、言語往復し、乃ち日暮に至る。太子卽便ち彼に停りて一宿し、既に明旦に至りて、また、更に思惟す、『この諸仙人は、苦行を修すと雖も、皆、解脱眞正の道に非ず。我、今、ここに止住すべからず。』卽ち仙人と、辭別して去らんと欲す。時に、諸仙人、太子に白して言く、『仁者のここに來るや、我皆歡喜し、我が人衆をして、威德增盛ならしめたるを、今、何が故に忽ちに去らんと欲するぞ。是が爲に、我等・威儀を失す。この衆中、相犯觸するが爲か。何の因緣を以てか、ここに住せざる。』太子、答へて言く、『これ、汝等が、是の如く、賓主の儀を失ふあるに非ず。また、乏少する所なし。但、汝が修する所は・苦因を增長す。我、今、道を學するは、苦本を斷ぜんが爲なり。この因緣を以て、是の故に去るのみ。』諸仙人衆、自ら共に議して言く、『その修する所の道は、極めて廣大たり。云何ぞ、我等、これを留むるを得ん。』

爾の時、一仙人あり。善く相法を知る。衆人に語りて言く、『今、この仁者、諸相具足す。必ず當に一切種智を得て、天人師たるべし。』卽便ち倶に太子の所に往詣して、この言を作す、『修する所の道異る。敢て相留めじ。もし、去らんと欲せば、北に向つて行くべし。彼に大仙あり、（二六）阿羅邏・加蘭と名く。仁者、往いてそれに

【二六】 Ārāḍa-kālāma（アーラーダ・カーラーマ）。一仙人の名なれども、此經は、分ちて二仙人と爲し。優陀羅仙人の名を逸す。

就きて語論すべし。我、仁者を見るに、亦、當に、必らず、彼處に住まらざるべし。』是に於て、太子、卽便ち北に行く。諸仙人衆、太子の去るを見て、心に懊惱を懷き、合掌隨送し、極望絕視して、然る後に乃ち還る。

【擧宮泣悲】爾の時太子、既に宮を出で已りて、天曉に至る。耶輸陀羅及び諸婇女、眠より覺めて太子を見ず。悲號啼泣して卽便ち往いて摩訶波闍波提に啓す、『今旦忽ち太子の所在を失ふ。』摩訶波闍波提、この語を聞き已りて、迷悶して地に躄る。是の如く展轉して、乃至王に達す。王、この言を聞きて、屹然として聲なく、その精魄を失し、四體を喪ふが若し。擧宮內外、皆また是の如し。時に諸大臣、卽ち入りて太子の住處を檢視し、宮城を案行すれば、城の北門の、自然に已に開けたるを見、またまた車匿・揵陟を見ず。卽ち門司に問ふ、『誰かこれを開くものぞ。』互に相推撿するに、皆知らずといひ、幷に防人に問ふに、また、この門の開けたる意を解せずといふ。時に大臣、心に自ら思惟す、『北門既に開けたり。太子、必ず當にこの門よりして出でたるべし。宜く速に太子の所在を尋ね覓むべし。』卽ち千乘萬騎に勅して、絡繹として四に出で、太子を追ひ求むるに、天力を以ての故に、迷うて道逕を失し、之く所を知らず。卽便ち還歸りて、大王に白て言く、『太子を推尋するに、所在を知らず。』爾の時、車匿、歩みて揵陟を牽き、及び莊嚴の

具もて、悲泣嗚咽しつつ、路に隨て還る。擧邑の人民、これを見て驚愕し、懊惱せざるなく、悉く皆競ひ來りて、車匿に問うて言く、『汝、太子を送つて、何處に置き、今、揵陟と獨り還るか。』車匿既に諸人のこの問を得て、倍、更に悲絶して、これに答る能はず。この諸人民、揵陟が、帶・鞍・勒・七寶の莊嚴を被ぶるを見ると雖も、太子を見ず。猶、死人の、飾に花綵を以てするが如し。

是に於て、車匿、前んで宮城に入るや、揵陟悲み嘶けば、諸廐の群馬、一時に哀鳴す。外の諸官屬、摩訶波闍波提、及び耶輸陀羅に白して言く、『車匿、唯、揵陟と倶に還る。』この言を聞き已りて、地に宛轉して、自ら念じて曰く、『今、唯、車匿・揵陟の、相隨つて倶に還るを聞きて、太子の歸りますと道ふ聲を聞かず。』摩訶波闍波提、卽ちこの言を作す、『我、太子を養ひ、年、長大に至りて、一旦に我を捨て、所在を知らざるは、譬へば、果樹の、花を結び實を成すが、熟するに臨みて地に落つるが如し。また、飢人の、百味の饌に遇うて、これを食はんと欲するに臨みて、忽然翻し倒すが如し。』耶輸陀羅、また自ら言つて曰く、『我、太子と、行住坐臥、相遠離せざりしに、今、我を捨てて、趣むく所を知るなし。古昔諸王の、入山學道するや、皆妻子を將て、蹔くも相棄てざりき。世間の人、一たび遇うて相識れば、別るとも相忘れず。夫婦の情、恩愛の深きを、乃ち、反りて、更に、是の如く薄からんとは』と。車匿を詰りて言く、『寧ろ智者と

怨讎たりとも、愚人と以て親厚たらざらん。汝、癡頑人、盗んで太子を送つて何處に置き、この釋族をして、また熾盛ならざらしむるぞ。』また揵陟を責む、『汝、太子を載せてこの王宮を出で、去ること近き時には、寂然として聲なく、今、空しく反りて、悲み嘶くは何の意ぞ。』

爾の時、車匿、即便答へて言く、『我、及び揵陟を責むるなかれ。所以は何に。こはこれ天力なり。人の所爲に非ず。爾の夕に當りて、夫人・婇女、皆悉く惛臥せり。太子、我に勅して、起ちて馬に被せしむ。我、爾の時に於て、大高聲を以て、太子を諫め、夫人、及び諸婇女をして、これを聞きて、驚き悟らしめんと欲せるも、揵陟に被するに及ぶまで、都て覺るものなかりき。城門毎に開くや、四十里に聞ゆるに、爾の時に當りて、自然に開きて、また一の聲だも無かりき。此の如きの事、豈、天力に非ずや。城を出づる時、天、諸神をして、手に馬の足を捧げ、并に我を接し、虚空の諸天、隨從して無數なりき。我、當に云何してか能く止むべきぞ。時に、天、既に曉くるや、行くこと、三踰闍那。かの跋伽仙人の住所に至り、またまた、諸の奇特の異事あり。願はくは我が說ふを聽きたまへ。太子、既に跋伽仙人の苦行林中に至り、即便ち馬を下り、手に馬背を撫で、并に我に勅して宮城に還らしむ。我、この時に於て、太子に隨從して、永く歸るの意なかりしに、太子、遣られて、終に住まるを聽したまはず。またまた、我に就きて、七寶の

劍を取りて、自ら唱へて言ふ、「過去の諸佛は、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんが爲の故に、飾好を捨てて、鬚髮を剃除したまへり。我、今、また、當に諸佛の法に依るべし。」この言を唱へ已りて、卽ち寶冠、及び明珠を脫し、悉く我に付し、還つて王の足下に置かしむ。また、瓔珞を以て、摩訶波闍波提に與へ、餘の莊嚴の具を以て、耶輸陀羅に與へたまふ。我、爾の時に於て、この誨を聞くと雖も、猶、左右に侍して、歸るの情なかりき。時に、太子、便ち利劍を以て、自ら鬚髮を剃るや、天、空中に於て、隨つて接して去りぬ。卽便ち前行して、獵者に逢ひ、身に著くる所の七寶の妙衣を以て、獵人に與へ、袈裟と貿易へたまへり。是に於て、虛空に大光明あり。我太子の形服既に變ぜるを見、深くその意の必らず廻すべからざるを知り、我、卽ち悶絕して、心大に懊惱せり。太子、前んで跋伽仙人所住の處に至るや、我、便ち彼に辭別して歸りぬ。この諸奇特は、皆これ天力、また人事に非ず。願はくは、我及び揵陟を責むるなかれ。』

時に摩訶波闍波提、及び耶輸多羅、既に車匿の、この事を說くを聞き已りて、心少しく醒悟し、默然として聲なし。爾の時、白淨王、悶絕始めて醒め、勅して車匿を喚び、これに語つて言く、『汝、云何ぞ諸釋種姓をして、大苦惱を生せしむるか。我嚴制あり、內外の官屬に勅して、太子を守護し、その出家を畏れたり。汝、また何の意ぞ、輙く揵陟に被して、太子に與へ・密に去ら

しめたるか。』車匿、聞き已りて、大怖懼を生じ、王に啓して言く、『太子の出城は、實に我が咎に非ず。唯、願はくは、大王、我が具さに說くを聽きたまへ』とて卽ち寶冠及び髻中の明珠を以て、王の足下に置き、『太子、我をして、この冠・珠を以て、王の足下に置き、七寶の瓔珞を、摩訶波闍波提に與へ、餘の莊嚴具を、耶輸陀羅に與へしめたまふ。』王、諸物を見て、倍、悲絕を增し、『また木石と雖も、猶尙、感あり。況んや乃ち父子恩愛の深きをや。』車匿、具に前事を以て、王に啓して言ふ、『太子、我に勅す。父王、もし、「本、要ず、子有れば、當に出家を聽すべし。今、未だ子あらざるに、云何ぞ去る、去るに臨むの時、また啓せざる」と謂ひたまはば、汝、我が爲に具に父王に答ふべし。「耶輸陀羅、久しく已に娠めるあり。王、宜しくこれに問ひたまふべし。昔の勅や、此の如し、專輒を爲すに非ず」と。』王、この言を聞き、卽便ち耶輸陀羅に問はしむ、『太子云く、汝久しく已に娠めるありと。實に此の如しや不や。』耶輸陀羅、卽ち信に答へて言く、『大王がこの宮に來りたまへる時に當りて、太子、我を指したまふに、卽ち娠めるあるを覺えぬ。』王、その語を聞きて、奇特の心を生じ、憂惱蹔く歇み、自ら念言す、(三七)『我前に、今、子あらば、出家を聽さんといへる所以のものは、七日の中に、子あるの理なく、轉輪王位、自然に至らん(故なり)。謂

【三七】(原文)我前所以許今有子聽出家、七日之中、必無子理、轉輪王位、自然而至。

はざりき、七日未だ滿せずして、便ち娠めるあらんとは。』深く自ら智慧淺短にして、これを住むる方便を爲す能はず。輕しくこの約を作せるを咎め悼みて、重ねて悔恨を增す、〔三八〕『太子の神略、人の意表に勅す。今日の事、また兼てこれ諸大天力、我、今、車匿を責むべからざるなり。』時に、白淨王、心に自ら思惟す、『太子の出家は、必ず廻すべからず。設し、更に、餘の方便を作さしめんとも、また留むる能はじ。また國を棄てて出家學道すと雖も、然れども已に子あり、種嗣を絕たず。我、今、耶輸陀羅に勅して、好く所懷の子を將護せしむべし。』

時に、白淨王、愛念の情深く、車匿に語つて言く、『我、今、往いて太子を尋ね求むべし。知らず、卽時、定んで何許に在るか。それ、今、旣已に我を捨てて學道す。我、また、何ぞ獨り生き獨り活くるに忍びん。便ち追逐して、その所在に隨ふべし。』爾の時、王師、及び大臣、王が出でて、太子を尋ね求めんと欲するを聞き、二人倶共に來りて王を諫めて言く、『大王、自ら憂惱を生ずべからず。所以は何。我、太子を觀じて、その相貌を見るに、過去世の中に、久しく已に出家の業を修習したまふ。設、また、釋提桓因たらしめんも、また當に樂しまざるべし。況んやまた、今、轉輪王位もて、能く留めんや。大王、憶はずや、太子初めて生れて、行くこと七步、手を擧げて住まり、我生已盡・是最後身と言ふや、

〔三八〕（原文）太子神略、勅人意表。

諸梵天王・釋提桓因、悉く來り下りて從へり。此の如き奇特あり。云何ぞ世を樂しまん。』また
また王に白す、『阿私陀仙、昔、太子を相せり。年、十九に至らば、出家學道して、必ず當に一切種智を成就すべしと。今や、時、既に到る。大王、何が故に、愁苦を生じたまふ。またまた、大王、嚴に內外に勅して、太子を守護し、家を出でんを慮り恐れたまへるに、諸天來りて、導引して城を出でたり。是の如きの事は、また人力にあらず。唯、願はくは、大王、當に歡喜を生ずべし。愁惱を懷くなかられ。自ら出でたまふべからず。もし、太子を憶ふこと、須已みたまはずば、我、今、大臣と所在を尋ね求むべし。』

【二九】（原文）我知太子、雖不可廻、未忍便捨、不復追之。

王、この語を聞きて、心に自ら念言す、（二九）『我、太子が廻すべからざるを知る。未だ便ち捨つるに忍びずと雖も、またこれを追はじ。今、當に、師、及び、大臣をして、更に一たび尋ねしむべきなり。』即便ち師及び大臣に答へて言く、『善い哉、去るべし。舉宮內外、心皆苦惱して、遠に還らんを佇遲す。』是に於て、王師・大臣、即便ち辭して出で、太子を追ひ尋ねぬ。

卷の第三

【追尋太子】爾の時、白淨王、王師及び大臣を發遣し已りて、即ち太子の瓔珞を以て、摩訶波闍波提に與へ、これに語りて言く、『こはこれ太子所服の瓔珞、車匿の還るに付して、以て汝に與へしむるなり。』摩訶波闍波提、瓔珞を見已りて、倍、悲絕を增して、自ら念言す、『四天下の人、極めて薄福たり。この明智の轉輪聖王を失はんとは。』また、餘の莊嚴具を送りて、以て耶輸陀羅に與へ、これに語つて曰く、『太子、この嚴身の具を以て、持つて汝に與へしむ。』耶輸陀羅、既にこの物を見て、悶絕して地に躃る。王、また人を遣はして、耶輸陀羅に勅す、『自ら愛敬して、胎子をして安隱ならざらしむるなかれ。』

爾の時、王師及び大臣、跋伽仙人の苦行林中に至り、從人及び諸の儀飾を除き去つて、即ち仙人所住の處に前むや、仙人請じて坐せしめ、互に相問訊す。是に於て、王師、仙人に語つて言く、『我はこれ白淨王の師。今、來りて此に至る所以のものは、彼の白淨王の、(一)足相太子・生老病死の苦を厭ひ、出家學道して、路、この林に由れり。大仙見たまへりや不や。』跋伽仙人、王師に答へて言く、『我、近、ここに於て一童子

【一】三十二相を具足すること。

の、顔容端正相好具足せるを見たり。來りてこの林に入り、我と議論して、遂に一宿を經ぬ。知らず、乃ち是王の太子なりしか。我等所修の道を鄙薄し、これより北行して、かの仙人阿羅邏・迦蘭に至りぬ。』爾の時、王師・大臣、この言を聞き已りて、卽便ち疾くかの仙人の所に至らんとす。中路に於て、遙に太子が、樹下に在りて、端坐思惟するを見ぬ。相好光明、日月に踰えたり。卽便ち馬を下り、侍衞を除却し、諸の儀服を脫して、太子の所に前み、一面に坐し、互に相問訊す。是に於て、王師、太子に白して言く、『大王、太子を尋ね求めしめらる。所說あらんと欲す。』太子答へて曰く、〔一〕『父王、汝を遣はして、何をか道はんと欲したまふ。』王師卽ち言く、『大王、太子が深く出家を樂み、この意迴し難きを、久しく知ろす。然れども、王、太子に於て、恩愛の情深く、憂愁の盛火、常に自ら熾然す。太子の歸るを須ちて、以てこれを滅せんのみ。願はくは、便ち駕を迴して、宮城に還反りたまへ。物務ありと雖も、太子をして全く道業を棄てしめじ。靜心の處は、必ずしも山林ならず。摩訶波闍波提・耶輸陀羅・內外の眷屬、皆悉く憂惱の大海に沒し、太子の還つてこれを拯濟せんを思ふ。』爾の時、太子、王師の語を聞き、深重の聲を以て、王師に答へて言く、『我、豈、父王が、我に於て、恩情の深きを知らざらんや。ただ、生老病死の苦を畏る。是を以て、ここに來れるは、斷除

【一】（原文）父王遣汝、欲何所道。

の爲の故なり。もし、恩愛をして、終日、合會し、また生老病死の苦なからしめば、我また何すれぞ來りて此に至らん。我、今、父王に遠違する所以は、將來の和合を爲さんと欲するが故のみ。父王の憂愁の大火、今、熾然すと雖も、我と父王と、ただ、今生に、この一苦あるを餘すのみ。將來は、自ら當に、永く、この患を絶つべし。もし、汝が言の如く、吾をして宮に處りて道業を修せしめば、七寶の舍に、中に焰火を滿し、人あり、能くこの室に止るべきが如し。雜毒の食を、よし飢たる人も、終にこれを食はざる如くならず。我、既に國を棄てて、出家學道す。云何ぞ我をしてまた宮城に還り、道を學修せしめんや。世間の人は、大苦中に在り。小樂の爲の故に、尙また躭湎して、蹔くも捨つる能はず。況んや、我、この極寂靜處に在りて、諸の患苦なきに、能く捐棄して、還つて惡に就かんや。古昔の諸王の、入山學道する、中路に、還、欲を受くるものなし。父王、もし、必ず我をして歸らしめんと欲したまはば、便ちこれ先王の法に違ふ。』

爾の時、王師、太子に白して言く、『誠に太子の、今の所説の如し。然るに、諸仙聖、一は未來定んで果報ありと言ひ、一は定んでなしと言ふ。二仙聖だも、尙、未來世中の、必定して有りや無しやを知る能はず。太子、云何ぞ現樂を捨てて、未來の不定の果報を求めんと欲したまふぞ。生死の果報だも、尙、決定して有りや無しやを知るべからず。云何ぞ乃ち解脫の果を求めんと欲

したまふぞ。唯、願はくは、便ち宮に還りたまへ。』太子答へて言く、『かの二仙人の、未來の果を說くに、一は有りと言ひ、一は無しと言ふは、皆、これ疑心あり、決定の說に非ず。我、今、終にかの教に隨順せず。これを以て難詰せらるべからず。所以は何。我、今、果報を希ひ慕ふが爲に、ここに來至せず。目に見る所の生老病死、必らず應にこれを經べきを以て、この苦を解脫し免れんを求むるのみ。汝をして、久しからずして、我が道の成るを見しめん。この志願は、終に廻すべからず。還つて父王に啓して、此の如くに說け。』爾の時、太子、この語を作し已りて、卽ち座より起ち、王師・大臣と辭別し、北行して、阿羅邏・迦蘭仙人の所に詣る。

時に、王師・大臣、太子の去るを見て、啼泣懊惱し、一には太子の情の深きを念じ、二には、王の使を受け奉りて、太子の所に來り、またその意を移轉する能はざる(を念じ)、路側に徘徊して、自ら返る能はず。互に共に議して言く、『既に王の使を被りて、力効なく、今、空しく歸りて、云何が答へ奉らん。我等、當に從へる所の五人の、聰明智慧・心意柔輭・忠直の性にして、種族の强なるものを留めて、密に伺察し、その進止を看しむべし。』この言を作し已りて、その傍を顧瞻て、(三)憍陳如等の五人を見、これに語りて言く、『汝等、悉く能く此に留止るや不や。』五人答へて言く、『善い哉、勅の如くにして、

【三】 Kauṇḍinya

進止に去來に、當に密に伺察すべし。』卽便ち辭別して太子の所に趣むき、王師・大臣、宮城に還歸る。

【頻王見太子】　爾の時太子、かの阿羅邏・迦蘭仙人の住處に往かんとて、(四)恒河を渡り、路、(五)王舍城に由る。既に城に入り已るや、諸人民衆、太子の顏貌相好殊特なるを見て、歡喜愛敬し、擧國皆悉く奔馳して瞻視す。是の如き諠譁・(六)頻毗婆羅王に徹す。王、便ち驚いて問ふ、『こはこれ何の聲ぞ。』諸臣答へて言く『白淨王の太子。名は薩婆悉達。昔、諸の相師、その轉輪王位を得て、四天下に王たるべきを記し、またまた、それ、もし、出家せば、必ず一切種智を成就すべきを記せり。その人、今、來りてこの城に入り、外の諸人民、馳せ競うて來り看る。是を以ての故に、所以に諠鬧す。』時に、頻毗婆羅王、既にこの語を聞きて、心大に歡喜し、踊躍身に遍ねく、卽ち一人に勅し、往いて太子の所在を伺察せしむ。使者、勅を受け、太子を尋ね求めて、(七)般荼婆山に在り、一石上に端坐思惟するを見、時に使卽ち歸りて、具に大王に白す。王卽ち駕を嚴しめて、諸の臣民と、太子の所に詣る。般荼婆山に至りて、遙に太子を見れば、相好光明、日月に踰ゆ。卽便ち馬を下り、儀飾及び諸の侍衞を除却し、前ん

【四】Gaṅgā
【五】Rājagṛha。大國摩竭陀の都。
【六】Bimbisāra。影勝、影堅と譯す。摩竭陀國の大王。
【七】Pāṇḍava

で坐して問訊す、『太子、四大悉く調和するや不や。我、太子を見て、心甚だ歡喜す。然れども、一の悲あり。太子は本これ（八）日の種姓、累世相承して、轉輪王たり。太子、今、轉輪王の相、皆悉く具足するに、云何ぞこれを捨て、來つて深山に入り、沙土を（九）踐藉して、遠くここに至るか。我、これを見るが故に、所以に悲むのみ。太子、もし、父王今在すを以ての故に、聖王の位を取らざらんとせば、我が國分の半を以て、これを治むべし。もし、少しと謂はば、我、當に國を捨て、盡く以て相奉じ、太子に臣とし事ふべし。もし、また、我がこの國を取らずば、當に（一〇）四兵を給すべし。自ら攻伐して、他國を取るべきなり。太子の欲する所、それ相違はじ』。爾の時、太子、頻毗娑羅王の、この語を說くを聞き已りて、深くその意に感じ、卽ち王に答へて言く、『王の種族は、もとこれ明月、性　自ら高涼、鄙事を爲さず。爲す所、作す所、淸勝ならざるなし。今、この言を發するも、奇と爲すに足らず。（一一）然して、我、王が、中情の懇至・前後に倍するを觀る。王、今、便ち身・命・財に於て、三堅法を修すべし。また不堅の法を以て、餘人に勸奬むべからず。我、

【八】Sūrya-vaṃśa。甘蔗王の苗裔を日種といふ。
【九】藉はふむなり。
【一〇】象・馬・車・步の四種。
【一一】（原文）然我觀王、中情懇至、倍於前後、王今便可於身命財修三堅法、亦不應以不堅之法、勸奬餘人。斯る親切あらば、不堅の身命財を棄てて、堅牢の法を修するを止むべからずといふなり。
三堅法とは無極身・無窮命・無盡財をいふ。

今、既に轉輪王の位を捨てぬ。またまた何に緣りてか、王の國を取るべき。王が善心を以て、國を捨てて、我に與ふるだも、猶尙取らず。何に緣りてか、兵を以て他國を伐ち取らん、我、今、父母に辭別し、鬚髮を剃除し、國を捨てし所以は、生老病死の苦を斷ぜんが爲の故のみ。〔三〕五欲の樂を求めんが爲に非ず。世間の五欲は、大火聚の如く、諸衆生を燒いて、自ら出る能はざらしむ。云何ぞ、我が、これに貪著せんを勸むるか。我、今、來りてここに至る所以は、二仙人、阿羅邏・迦蘭あり。これ解脫を求むる、最上の導師なり。彼處に往いて、解脫の道を求めんと欲す。久しく停まりて、ここに在るべからざるなり。我、既に、王が、喜心より我に賜ふとの、初始の言に違ふも、嫌恨を致すなかれ。王、今、當に正法を以て國を治むべし。人民を枉ぐるなかれ。』この言を作し已りて、太子卽ち起ちて、王と別る。時に、頻毗娑羅王、太子の去るを見て、深く大に惆悵し、合掌流淚して、この言を作す、『初、太子を見て、心大に踊躍し、太子既に去るや、倍、悲苦を生ず。汝、今、大解脫の爲の故に、去らんと欲せば、敢て相留めじ。唯、願はくは、太子、期する所を速に果さんことを。もし、道成せば、願はくは、先づ度せられしよ。』太子、是に於て、辭別して去る。時に、王、奉送し、次で路側に於て、極目瞻矚し、見えずして、乃ち反る。

〔三〕色・聲・香・味・觸の欲卽ち物質上の欲望。

【問道二仙】 爾の時、太子、卽便ち前んでかの阿羅邏仙人の所に至る。時に、諸天、仙人に語つて言く、『薩婆悉達、國土を棄捨し、父母に辭別して、無上正眞の道を求めて、一切衆生の苦を拔かんと欲するが爲の故に、今、已に來りて、此に至るに垂とす。』時に、かの仙人、既に天の語を聞きて、心大に歡喜し、俄爾の頃に、遙に太子を見、卽ち出でて奉迎し、讃じて『善來』と言ひ、倶に所住に還り、太子を請じて坐せしむ。この時、仙人、既に太子の顏貌端正にして、相好具足し、〔三〕諸根の〔四〕恬靜なるを見て、深く愛敬を生じ、卽ち太子に問ふ、『所行の道路、疲るる無きを得んや。太子の初めて生れし、及び家を出でし、また來つて此に至る、我悉くこれを知る。能く火聚に於て、自ら覺りて出でしこと、また大象の、羂索中に於て、自ら免脫するが如し。古昔の諸王、盛年の時、恣に五欲を受け、根熟するに至りて、然る後に方に國邑樂具を捨てて、出家學道せり。これ未だ奇とするに足らず。太子、今、この壯年に、能く五欲を棄てて、遠くこの間に至る。眞に殊特と爲す。當に勤精進して、速に彼岸に度るべし。』太子、聞き已りて、卽ちこれに答へて曰く、『我、汝が言を聞きて、極めて歡喜を爲す。汝、我が爲に、生老病死を斷ずるの法を說くべし。我、今、聞かんことを樂ふ。』仙人答へて言く、『善哉、

〔三〕 諸根は、眼・耳・鼻・舌・身の五、又は意を加ふる六。根は力用ある機關をいふ。

〔四〕 恬。やすし、しづか。

善哉。』

卽便ち說きて曰く、『衆生の始は、(二五)冥初に始まる。冥初より(二六)我慢を起し、我慢より癡心を生じ、癡心より染愛を生じ、染愛より(二七)五微塵氣を生じ、五微塵氣より(二八)五大を生じ、五大より、貪欲・瞋恚等の諸煩惱を生じ、是に於て、流轉して、生・老・病・死・憂悲苦惱す。今、太子の爲に、略してこれを言ふのみ。』爾の時、太子、卽便ち問うて曰く、『我、今、已に、汝の所說を知る。生死の根本や、また何の方便もて、能くこれを斷ぜん。』仙人答へて言く、『もし、この生死の本を斷ぜんと欲せば、先づ當に出家して、戒行を修持し、謙卑(二九)忍辱にして、空閑處に住し、禪定を修習すべし。欲惡不善の法を離れて、(三〇)覺あり(三一)觀ありて、(三二)初禪を得。覺・觀を除き、定生じて(三三)喜心に入り、第二禪を得。喜心を捨て、正念を得、(三四)樂根を具して、第三禪を得。苦樂を除き、(三五)淨念を得、(三六)捨根に入りて、第四禪を得、(三七)無想の報を獲。別に一師あり、此の如き處を、名けて解脫と爲す

【二五】冥初は Prakṛti。自性冥諦と譯せらるるもの。世界の根本。身心の本源。

【二六】我慢は Ahaṃkāra。自我意識にして、主觀客觀を區別せしむるもの。

【二七】五微塵氣は、五惟の事。色・聲・香・味・觸、卽ち客觀を成す要素なり。

【二八】五大は地・水・火・風・空、卽ち物質なり。以上數論の組織の概要なり。但し、普通に傳へらるるものと異る。普通には、冥諦より大(Mahat)を生じ、大より我慢を生じ、我慢より五惟、五惟より五大と爲す。

【二九】如何なる毀辱をも、忍耐甘受すること。

【三〇】覺は新譯に尋(Vitarka)といふ。麤心もて事理を尋求

と說く。定より覺め已りて、然る後に方に解脫の處に非るを知り、色想を離れて、〔二八〕空處に入り。有對想を滅して、識處に入り。無量の識想を滅し、唯、一識を觀じて、無所有處に入り。種種の想を離れて、非想非非想處に入る。この處を名けて、究竟の解脫と爲す。これ諸學者の彼岸なり。太子、もし、生老病死の患を斷ぜんと欲せば、應に此の如きの行を修學すべし。』

爾の時、太子、仙人の言を聞きて、心喜樂せず。卽ち自ら思惟す、『その知見する所、究竟の處にあらず。これ永く諸結煩惱を斷ずるにあらず。』卽便ち語りて言く、『我、今、汝が所說の法中に於て、未だ解せざる所あり。今、相問はんと欲す。』仙人答へて言ふ、『敬んで來意に從はん。』卽ちこれに問うて曰く、『非想非非想處に、我ありとせんや、我なしとせんや。もし、我なしと言はば、非想非非想處といふべからず。もし、我ありと言はば、我は知ありとやせん、我は知なしとやせん。我、もし、知なくば、則ち木石に同じ。我、もし、知あれ

する作用なり。

【二一】 觀は新譯に伺（Vicāra）といふ。細心もて事理を伺察する作用なり。

【二二】 初禪以下第四禪を、四禪定といふ。色境なり。第一に、覺・觀を得。次に覺・觀を去りて喜を得。次に喜を去りて樂を得。最後に樂を去りて、不苦不樂の捨に入るなり。

【二三】 喜心とは、五識の無分別なる悅豫をいふ。

【二四】 樂根とは、意識の分別ある悅豫をいふ。又輕安樂とせらる。

【二五】 念（Smṛti）は記憶作用にして、一度經驗せることを、忘れざるをいふ。第三禪の樂、極めて勝るるを以て、染著に墮せざるが爲に、之を念するを要す。これ正念なり。第四

ば、則ち〔二九〕攀緣あり、既に攀緣あれば、則ち染著あり、染著を以ての故に、則ち解脱に非ず。汝は麤結を盡すを以て、自ら細結の猶存するを知らず。是を以ての故に、謂つて究竟と爲すも、細結滋長して、また下生を受けん。此を以ての故に、彼岸に度るに非るを知る。もし、能く我及び我想を除かば、一切盡捨せん。これを則ち名けて眞の解脱と爲す。』仙人默然として、心に自ら思惟す、『太子の所說、甚だ微妙と爲す。』

爾の時、太子、また仙人に問ふ、『汝、年、幾に至りて出家せりや。梵行を修して來、また幾許の年ぞ。』仙人答へて言く、『我、年十六にして、卽ち出家し、梵行を修して來、一百四年。』太子、聞き已りて、心に念言す、『出家以來、乃ち是の如く久しうして、所得の法、正に此の如きか。』時に、太子、勝法を求めんが爲に、卽ち座より起ちて、仙人と別る。爾の時、仙人、太子に語りて言く、『我、久遠來、この苦行に習ひて、所得の果、正に此の如きのみ。汝はこれ王種。云何ぞ能

禪に至りて、下地の過を念じ、又、自地の功德を念ず。これ淨心なり。

【二六】 捨(Upekṣā)は、諸法に執著する念を捨離して、平等に住せしむる作用なり。かくて不苦不樂の境に入る。

【二七】 無想(Asaṁjñi)とは、心・心所の都滅するをいふ。無想定を修すれば、無想果を得。これに應ずる存在あり、無想天といふ。

【二八】 空處・識處・無所有所・非想非非想處を、四空定といふ。無色の境なり。空處、委しくは空無邊處(Ākāśānantyāyatana)。色想を厭ひて、無邊の虛空を緣じ、心の空無邊と相應するをいふ。識處。委しくは識無邊處(Vijñānānantyāyatana)。虛空を厭

く苦行を修せんや。』太子答へて言く、『汝が所修の如きは、苦と爲すに非ず。別に最苦難行の道あり。』仙人、既に太子の智慧を見、また志意の堅固にして虧けざるを見て、決定して一切種智を成ぜんを知り、太子に白して言く、『汝、もし、道成せば、願はくは、先づ我を度したまへ。』是に於て、太子答へて『善哉』と言ひ、次で迦蘭所住の處に至りて、論議問答する、またまた是の如くして、太子卽便ち路を前んで去る。時に、二仙人、太子の去るを見て、各心に念言す、『太子の智慧、深妙奇特にして、乃ち爾く測り難し。』合掌して奉送し、視を絶して方に還る。

【六年苦行】爾の時、太子、阿羅邏・迦蘭二仙人を調伏し已りて、卽便ち（三〇）伽闍山苦行林中に前進す。これ憍陳如等五人の止住する處。卽ち（三一）尼連禪河の側に於て、靜坐思惟して、衆生の根を觀ず、『宜しく六年苦行して、以てこれを度すべし。』これを思惟し已りて、便ち苦行を修す。是に於て、諸天、麻米を奉獻す。太子、正眞の道を求めんが爲の故に、淨心に戒を守りて、日に一麻一米を食ひ、設、乞ふものあれば、ま

ひて、內識を緣じ、心識無邊と相應するをいふ。●●●無所有處(Ākiñcanyāyatana)。識を厭ひて心識所有なしと觀するをいふ。●●●●●非想非非想處(Naivasañjñānā-sañjñāyatana)。識處は有想なり。無所有處は無想なり。共に捨つるを以ていふ。非想とは麤想なきなり、非非想とは細想なきにあらざるなり。

【二九】心が外境の爲に、絕えず影響せられて、動搖すること。

【三〇】Gayāśīrṣa or Gajaśīrṣa

【三一】Nairañjanā

た以てこれをも施す。爾の時、憍陳如等五人、既に、太子の端坐思惟して、苦行を修し、或は日に一麻を食ひ、或は日に一米を食ひ、或はまた二日、乃至、七日に、一麻米を食ふを見、時に憍陳如等、また苦行を修して、太子に供奉し、その側を離れず。既にこれを見已りて、即ち一人を遣はし・還つて、王師及び大臣に白して、具に太子所行の事を說く。爾の時、王師・大臣、倶に宮門に還る。顏貌愁悴し、身形萎熟し・猶、人あり、その所親を喪ひ、葬送既に畢りて、忍抑して歸るが如し。時に、守門者、王に白して言く、『師と大臣と、今、門外に在り。』王、既に聞き已りて、氣奔り聲絕え、身首纔に動く。時に、守門人、王のこの意を解し、即ち呼んで前ましむ。王、與に相見て、悲んで言ふ能はず。是の如き、良久しうして、微聲にして問ふ、『太子は既にこれ我が性命。卿等、今、獨、この歸りを作す。我が性命、云何ぞ存せん。』王師答へて言く、『我、王勅を奉じ、太子を尋ね求めて、便ち跋伽仙人の住處に至り、太子を訪ね覓む。仙人、我に太子の所在を語り、幷に太子が言へる事を說きぬ。我、便ち、前行して、中路に於て、太子が、樹下に在りて、端坐思惟し、相好光明、日月に踰ゆるに遇ひ見る。即ち太子に向ひ、具に大王・摩訶波闍波提・及び耶輸陀羅が憂苦の情を說く。太子即ち深重の聲を以て、答へられて言く、「我、豈、父王・親戚の恩情の深きを知らざらんや。ただ、生死愛別離の苦を畏れ、斷除せんと欲する

が爲の故に、ここに來るのみ。」是の種種の言辭を說き。志意の堅固なること須彌山の移轉すべからざるが如く、我を捨て去るや、草芥を棄つるが如し。』

『爾の時、即便ち五人を選擇して、隨從給侍して、所在を伺察せしめぬ。遣はせる人中、一人還つて、說いて言ふ、「太子は當に阿邏羅・迦蘭仙人の所に至るべく、路、恒河に由る。天神力を以て、水を渡るを得、王舍城に至る。時に、頻毗娑羅王、太子に來詣して、方便もて、出家すべからず、國を分ちて共に治めん、及び全く與へん、幷に兵を與へて他國を伐たしめんと欲するを譬說す。太子、またまた皆悉く受けず。即ちまた前行して仙人の所に達し、爲に法を說きて、その心を降伏し、また、伽闍山、苦行林中、尼連禪河の側に至り、靜坐思惟して、日に一麻一米を食ふ』と。

爾の時、白淨王、王師・大臣の、かの使人の、此の如き語を說くを聞き已りて、心大に悲惱し、擧體戰き掉ひ、身毛皆竪ち、即ち王師、及び大臣に語つて言く、『太子、遂に轉輪王位・父母・親屬恩愛の樂を捨て、遠く深山に在りて、この苦行を修す。我、今、薄福、生れて此の如き珍寶の子を失ふ。』王即ちまた使人の所言を以て、摩訶波闍波提及び耶輸陀羅に向つて、爲にこれを說く。

時に、白淨王、即便ち五百乘の車を嚴駕し、摩訶波闍波提及び耶輸陀羅、また相與に五百乘の

一切資生を辦じて、皆悉く具足し、卽ち車匿を喚び、これに語つて言く、『汝、太子を送りて、遠く深山に放ちぬ。今また汝をしてこの千乘を領し、資糧を載致して、太子に送與せしむ。隨時供養して、乏少せしむるなく、盡きなば更に來りて請へ。』車匿勅を受け、卽ち千乘を領し、疾速に去りて、太子の所に至る。形、消瘦して、皮骨相連り、血脉悉く現はること、波羅奢花の如くなるを見、頭面に足を禮し、地に悶絕し、良久しくして乃ち起ち、淚を銜んで言く、『大王、太子を憶念して、日夜を捨てたまはず。今、故に、我をして、この千乘を領し、資生の具を載せ、以て太子に餉らしめたまふ。』時に、太子、車匿に答へて言く、『我、父母に違ひ、及び國土を捨て、遠く來つて此に在るは、至道を求めんが爲なり。云何ぞまたこの餉を受けんや。』爾の時、車匿、この語を聞き已りて、心に自ら思惟し、『太子、今、旣に此の如き資供を受くるを肯んじたまはず。我當に別に一人を覓めて、この千乘を領して、王の所に還歸せしめ、我、ここに住まりて、太子に奉事すべし。』卽ち一人を差はし、車を領して去らしめ、是に於て、車匿、密に太子に侍して、晨に昏に離れず。

【棄捨苦行】爾の時、太子、心に自ら念言す、『我、今、日に一麻一米を食ひ、乃至、七日に一麻一米を食ひ、身形消瘦、枯木のごとく、苦行を修する、滿六年に垂として、解脫を得ず。故に道

に非るを知る。昔、閻浮樹下に在りて、思惟せる所の法、離欲寂靜こそ、これ最も眞正なるに如かず。今、我、もし、また、この羸身を以て道を取らば、かの諸外道、當に自餓これ般涅槃の因と言ふべし。我、今、また節節に〔三一〕那羅延力ありと雖も、またこれを以て道果を取るべからず。我、當に食を受けて、然る後に成道すべし。』この念を作し已り、卽ち座より起ち、尼連禪河に至りて、水に入りて洗浴す。洗浴既に畢るや、身體羸瘠、自ら出る能はず。天神來下して、爲に樹枝を按し、攀ぢて池を出るを得ぬ。時に、かの林外に、一牧牛女人あり、難陀波羅と名く。時に、淨居天、來下して勸めて言ふ、『太子、今、林中に在り。汝、供養すべし。』女人、聞き已りて、心大に歡喜す。時に、地中、自然に千葉の蓮花を生じ、花上に乳糜あり。女人、これを見て、奇特の心を生じ、卽ち乳糜を取り、太子の所に至りて、頭面に足を禮し、以て奉上す。太子、卽便ちかの女の施を受けて、これを呪願す、『今、施す所の食、食ふものをして、氣力を充すを得しめん。施家をして、〔三二〕膽を得、喜を得、安樂無病、年壽を終保し、智慧具足せしむべし。』太子、卽ち是の如き言を作

【三一】那羅延 Nārāyaṇa。堅固力士或は鉤鎖力士と譯す。婆羅門教三位神の一たる毘紐奴天の異名。

【三二】得膽得喜の膽は恐くは贍の誤か。この一句。宋本には得捨得喜に作り、元明二本には得色得力得捨得喜に作る。

を食ふ。身體光悅し、氣力充足して、(三四)菩提を受くるに堪ふ。

【菩提樹下】 爾の時五人、既にこの事を見、これを驚き怪しみ、退轉せりと謂ひ、各所住に還る。菩薩獨り行いて、(三五)畢鉢羅樹に趣き、自ら發願して言く、『かの樹下に坐し、我が道成らずば、要、終に起たじ。』菩薩の德重くして、地勝ふる能はず。時に、步步、地、爲に震動して、大音聲を出す。爾の時、盲龍、地動の響を聞きて、心大に歡喜し、兩目開明し、『曾て先佛に、この瑞應ありき』との念を作し已りて、地より踴出し、菩薩の足を禮す。時に、五百の青雀あり。虛空を飛騰して、菩薩を右繞し、雜色の瑞雲、及び香風、隨つて映拂す。爾の時、盲龍、偈を以て讃じて曰く、

『菩薩の足の踐む處、地皆六種に震ひ、
大深遠の音を發するを、我聞いて眼開明す。
また見る虛空中に、青雀・菩薩を繞り、
瑞雲極めて鮮映にして、香風甚だ淸涼なるを。
この菩薩の瑞相は、悉く過去佛に同じ。
是を以て知る菩薩の、必定して正覺を成ぜんを。』

【三四】 Bodhi。智と譯す。
【三五】 Pippala。佛この樹下に成道したまへるを以て、之を菩提樹といふ。

是に於て、菩薩則ち思惟す、『過去の諸佛は何を以て座と爲し、無上道を成じたまへるか。』卽便ち、草を以て座と爲したまへるを自知するや、釋提桓因、化して凡人と成り、淨軟草を執る。菩薩問うて言く、『汝の名は何等か。』答ふ、『吉祥と名く。』菩薩これを聞きて、心大に歡喜し、『我、不吉を破り、以て吉祥を成ぜん』とて、菩薩また言く、『汝が手中の草は、こは得べしや不や。』是に於て、吉祥、卽便ち草を以て菩薩に與へ、因りて發願して言く、『菩薩道成ぜば、願はくは、先づ我を度したまへ。』菩薩受け已りて、敷いて以て座と爲し、草上に於て、(三六)結加趺坐する、過去佛所坐の法の如く、自ら誓つて言ふ、『正覺を成ぜずんば、この座を起たじ。』我また是の如く、この誓を發する時、天龍鬼神、皆悉く歡喜し、淸涼の好風、四方より來り、禽獸響を息め、樹條を鳴らさず、遊雲飛塵、皆悉く澄淨なり。知りぬ、これ、菩薩の必ず道を成ぜん相なるを。

【降魔】爾の時、菩薩、樹下に在りて、誓言を發する時、天龍八部、皆ことごとく歡喜して虛空中に於て、踊躍讚歎す。時に、(三七)第六天の魔王の宮殿、自然に動搖す。是に於て、魔王、心大に懊惱し、精神躁擾して、聲味御せず、自ら念言す、(三八)『沙門瞿曇、今、樹下に在り、五欲を捨て

【三六】左の趾を右の股の上におき、右の趾を左の股の上におく坐相をいふ。

【三七】欲界天に六あり。その最高卽ち第六を、他化自在天と爲す。これ魔王の所住なり。

【三八】Sramaṇa Gautama

て、端坐思惟す。久しからずして正覺の道を成ずべし。その道、もし、成ぜば、廣く一切を度し、我が境を超越せん。道の未だ成ぜざるに及んで、往いてこれを壞亂せん。』爾の時、魔子薩陀、父の憔悴するを見て、往いて白して言く、『不審し、父王、何故に憂感したまふ。』魔王答へて言く、『沙門瞿曇、今、樹下に坐す。その道將に成じて、我を超越せんとす。今、これを壞らんと欲す。』魔子卽便ち前んで父を諫めて言く、「菩薩の清淨は〔三九〕三界に超出し、神通智慧、明了ならざるなく、天龍八部、咸く共に稱讚す。これ父王の、能く摧屈する所に非ず。須らく惡を造りて、自ら禍咎を招くべからず。」魔に三女あり。形容儀貌極めて端正、妖冶巧媚にして、善能く人を惑はすこと、天女中に於て、最第一たり。熏ずるに名香を以てし、好瓔珞を佩ぶ。一を染欲と名け、二を能悅人と名け、三を可愛樂と名く。三女倶に前んでその父に白して言く、『不審し、今、何が故に憂愁したまふか。』父卽ち心を寫して、諸女に語つて言く、『世間に、今、沙門瞿曇あり。身に法鎧を被り、自在の弓を執り、智慧の箭を鏃し、衆生を伏し我が境界を壞らんと欲す。我もし如かずんば、衆生かれを信じて、皆悉く歸依し、我が土則ち空しからん。是の故に愁ふるのみ。未だ道を成ぜざるに及んで、往いて摧挫し、その橋梁を壞らんと欲す。』是に於て、魔王、手に强弓を執

【三九】三界。欲界・色界・無色界をいふ。以て、迷界の全部を總括す。

り、また五箭を持ち、男女眷屬、倶時にかの毘鉢羅樹下に往き、(四〇)牟尼の、寂然不動にして、生死(四一)三有の海を度らんと欲するを見る。

爾の時、魔王、左手に弓を執り、右手に箭を調へ、菩薩に語りて言く、『汝(四二)刹利種、死は甚だ畏るべし。何ぞ速に起たざる。宜しく汝が轉輪王の業を修し、出家の法を捨つべし。施會に習ひ、生天の樂を得るは、この道第一、先の所行に勝る。汝はこれ刹利轉輪王の種、而して乞士と爲るは、これ所應に非ず。今もし起たずんば、ただ好く安坐して、本誓を捨つるなかれ。我試みに汝を射ん。一たび利箭を放つや、苦行仙人、我が箭聲を聞きて、驚怖せざるなく、惛迷して性を失ふ。況んや汝瞿曇、能くこの毒に堪へんや。汝もし速に起たば、安全を得べし。』魔、この語を説きて、以て菩薩を怖す。菩薩怡然として、驚かず動かず。魔王卽便ち弓を挽き箭を放ち、幷に天女を進む。菩薩、爾の時、眼、箭を見ず、箭、空中に停まり、その鏃下向して、變じて蓮花と成る。時に三天女、菩薩に白して言く、『仁者の至德は、天人の敬ふ所、應に供侍あるべし。我等、今、年、盛時に在り。天女の端正なる、我に踰ゆるものなし。天、今、我を遣はして、以て相供給せしむ。晨昏寢臥、願はくは左右に侍せん。』菩薩答へて言く、『汝、小善を

【四〇】 Muni。聖人のこと。
【四一】 三界の存在をいふ。
【四二】 Kṣatriya。四姓の中、第二に位する王士族。

植ゑて、天身と爲るを得、無常を念ぜずして、妖媚を作す。形體美はしと雖も、心端しからず、淫惑不善なり。死して必ず當に〔四三〕三惡道中に墮すべし。鳥獸の身を受け、これを免かるること甚だ難し。汝等、今、定意を亂さんと欲する、非清淨心を、今、便ち去るべし。吾は相須ひず。』時に三天女、變じて〔四四〕老姥と成り、頭白く面皺み、歯落ち涎を垂れ、肉消え骨立ち、腹の大なる鼓の如く、杖に拄へられて羸歩し、自ら復する能はず。

魔王、既に是の如く堅固なるを見て、心に自ら思惟す、『我、昔、曾て、雪山の中に於て、この〔四五〕摩醯首羅を射しに、即便ち恐懼して、その善心を退けり。而して、今、瞿曇を動かすことを辦せず。既に、この箭も、及び我が三女も、能く移轉して、愛恚を生せしむる所に非ず。當に、また、更に、他餘の方便を作すべし。』即ち軟語を以て、菩薩を誘うて言く、『汝、もし、人間の受樂を樂しまずば、今、便ち、天宮に上昇すべし。我、天位及び五欲の具を捨てて、悉く持つて汝に與へん。』菩薩答へて言く、『汝、先世に於て、少施の因を修す、故に今、自在天王と爲るを得たるも、この福に期あり、要、還、〔四六〕三塗に下生し沈溺して、出濟甚だ難からん。これを、罪因と爲す。我が須ふる所にあらず。』魔、菩薩に語る。『我

〔四三〕地獄・餓鬼・畜生をいふ。
〔四四〕姥は姆に同じ、うば。
〔四五〕Maheśvara マヘーシュヷラ。大自在と譯す。
〔四六〕火塗・刀塗・血塗なり。塗又は途に作らる。三惡道のこと。

が果報は、これ汝が知る所、汝の果報は、誰かまた知るものぞ。』菩薩答へて言く、『我が果報は、ただこの地のみ知る。』この語を說き已るや、時に、大地、(四七)六種に震動す。是に於て、地神、中に蓮花を滿てたる七寶の缾を持ちて、地より涌出して、魔に語つて言く、『菩薩、昔、頭目髓腦を以て人に施し、出せる血、大地に浸潤し、國城・妻子・象馬・珍寶・用て布施せること、稱計すべからず。無上正眞の道を求めんが爲なり。是を以ての故に、汝、今、菩薩を惱亂すべからず。』魔これを聞き已りて、心に怖懼を生じ、身毛皆竪つ。時に、かの地神、菩薩の足を禮し、花を以て供養し、忽然として現せず。

爾の時、魔王、卽ち自ら思惟す、『我、强弓・利箭、幷に三女を以て、兼て方便和言を以て、これを誘ふも、この瞿曇の心を壞亂する能はず。今、更に、諸種の方便を設け、廣く軍衆を聚め、力を以て迫脅すべし。』この念を作す時、その諸軍衆、忽然として來至し、虛空に充滿す。形貌各異る。或は戟を執り、劍を操り、頭に大樹を戴き、手に金杵を執り、種種の戰具、皆悉く備足す。或は、猪・魚・驢馬・師子・龍頭・熊・羆・虎兕、及び諸獸類の、或は一身多頭なる、或は面に各一目なる、或は衆多目なる、或は大腹長身なる、或は羸瘦無腹なる、或は長脚大膝なる、或は大脚肥腨なる、或は長爪利牙なる、或は頭

(四七) 六種とは、動・起・涌・震・吼・撃なり。前三は形の變、後三は聲の變なり。一一に三相ありて、十八相となる。

の胷前に在る、或は兩足多身なる、或は大面傍面なる、或は色の灰土の如き、或は身より烟焰を放つ、或は象身に山を擔ふ、或は被髮裸形なる、或はまた面色の半赤半白なる、或は脣垂れて地に至る、或は上褰して面を覆ふ、或は身に虎皮を著くる、或は師子蛇皮なる、或は蛇の遍ねく身を纏ふ、或は頭上に火燃ゆる、或は瞋目怒臂なる、或は傍行跳擲する、或は空中に旋轉する、或は馳步して吼嚇する、是の如き等の諸惡類形の、稱計すべからざるありて、菩薩を圍繞す。或はまた菩薩の身を裂んとするあり、或は四方に烟起りて、燄焰天を衝き、或は狂音奮發して、山谷を震動し、風火烟塵、暗うして見る所なく、四大海水、一時に涌沸す。護法の天人・諸龍鬼等、悉く魔衆を忿り、瞋恚增盛して、毛孔より血流る。

淨居天衆、この惡魔の、菩薩を惱亂するを見、慈悲心を以て、これを愍傷し、是に於て、來下して、虛空に側ち塞り、無量無邊の魔軍衆が、菩薩を圍繞し、大惡聲を發して、天地を震動するも、菩薩の心定まりて、顏に異相なきこと、猶、師子の、鹿群に處るが如くなるを見て、皆悉く歎じて言く、『嗚呼奇なる哉、未曾有なり。菩薩決定して當に正覺を成ずべし。』この諸魔衆、互に相摧切し、各威力を盡して、菩薩を摧破す。或は角目切齒し、或は橫飛亂擲す。菩薩これを觀る、童子の戲の如し。魔、益愁へ忿り懟み、更に戰力を增す。菩薩、慈悲力を以ての故に、石を

拘くものをして、舉ぐるに勝ふる能はず、その舉るに勝ふるものをして、下すを得る能はざらしむ。飛刀舞劍は、空中に停り、雷雹雨火は、五色の華と成り、毒龍の吐毒は、變じて香風と成り、諸惡類形、菩薩を毀らんと欲するに、動くを得る能はず。魔に姉妹あり。一を彌伽と名け、二を伽利と名く。各各手を以て髑髏器を執り、菩薩の前に在りて、諸の異狀を作して菩薩を惱亂す。この諸魔衆、種種の醜身もて、菩薩を怖さんと欲すれども、終に菩薩の一毛だをも、動かす能はず。魔益憂愁す。

空中に神あり、名けて負多と曰ふ。身を隱して言ふ、「我、今に於て、牟尼尊の心意泰然として、怨恨の想なきを見る。この諸魔衆、毒心を起して、怨なき處に於て、横に怨を生ずるも、この癡愚魔、徒に自ら疲勞するのみ、永く得る所なけん。今日、宜しく患害の心を捨つべし。汝が口乃ち須彌山を吹いて、それを崩倒せしむべく、火を冷ならしむべく、水を熱ならしむべく、地性の堅強なるを、柔軟ならしむべしとも、汝は菩薩が歷劫に修習せる善果、正思惟定・精勤・方便・淨智慧光を壞る能はじ。[四八]この四功德や、能く斷截し、留難を爲作し、正覺を成せざる無きこと、千日の照、必ず能く暗を除き、木を鑽りて火を得、地を穿ちて水を得る如く、精勤方便もて、求めて得ざるな

【四八】（原文、此四功德、能斷截留難、爲作留難、不成正覺、如千日照、必能除暗。）

し。世間の衆生、三毒に沒して、救ふものあるなし。菩薩の慈悲、智慧の藥を求めて、世の爲に患を除くを、汝、今、云何ぞこれを惱亂する。世間の衆生、癡惑無智にして、悉く邪見に著す。今、法眼を設け、正路を修習し、衆生を導かんと欲するを、汝、今、云何ぞ導師を惱亂する。これ則ち不可なり。譬へば、曠野の中に在りて、商人の導師を欺誑せんと欲するが如し。衆生、大黑暗の中に墮し、茫然として、所止の處を知らず。菩薩爲に大智慧燈を然すを、汝、今、云何ぞ吹いて滅せしめんと欲するぞ。衆生、今、生死の海に沒す。菩薩爲に智慧の寶船を修するを、汝、今、云何ぞ沈溺せしめんと欲するぞ。忍辱を芽と爲し、堅固を根と爲し、無上大法を以て大果と爲すを、汝、今、云何ぞ攻伐せんと欲するぞ。貪恚癡の鏁、諸の衆生を縛す。菩薩苦行もて、爲にこれを解かんと欲し、今日決定して、この樹下に於て、結加趺坐して、無上道を成ぜん。この地は、乃ち是過去諸佛の金剛の座なり。餘方悉く轉ずとも、この處は動ぜず、妙定を受くるに堪ふ。汝が摧く所に非ず。汝、今、宜しく欣慶の心を生じ、憍慢の意を息め、知識の想を修して、これに奉事すべし。」

この時、魔王、空中の聲を聞き、また菩薩の恬然として異らざるを見、魔、心に慙愧し、憍慢を捨離し、卽便ち道を復して、天宮に還歸るや、群魔憂慼して、悉く皆崩散し、情意沮悴して、

また威歩なく、諸の闘戰の具、林野に縱橫す。惡魔退散の時に當り、菩薩心淨く、湛然として動かず。天に烟霧なく、風條を搖がさず、落日光を停めて、倍更に明盛、澄月映徹、衆星燦朗にして、幽隱暗瞑、また障礙なし。虚空の諸天、妙花香を雨らし、衆伎樂を作して、菩薩を供養す。

【成道觀照】爾の時、菩薩、慈悲力を以て、二月七日の夜に於て、魔を降伏し已りて、大光明を放ち、卽便ち入定して、眞諦を思惟し、諸法中に於て、禪定自在に、悉く過去所造の善惡、此より彼に生じ、父母眷屬・貧富貴賤・壽夭長短、及び名姓字を知りて、皆悉く明了なり。卽ち衆生に於て、大悲心を起して、自ら念言す、『一切衆生、救濟者なく、五道に輪廻して、津を出るを知らず、皆悉く虚僞にして、眞實あるなし。而してその中に於て、橫に苦樂を生ず。』この思惟を作して初夜の盡くるに至る。

爾の時、菩薩、既に中夜に至りて、卽ち天眼を得、世間を觀察して、皆悉く徹見すること、明鏡の中に、自ら面像を視るが如し。諸衆生を見るに、種類無量なり。此に死して、彼に生れ、行の善惡に隨つて、苦樂の報を受く。地獄中の(四九)考治の衆生を見るに、或は洋銅を口に灌ぎ、或は銅柱を抱き、或は鐵牀に臥し、或は鐵鑊を以て、これを煎煮し、或は火上に於て、(五〇)弗炙を加

【四九】考は元本に栲に作り、明本に拷に作る。
【五〇】弗、くし、くしざす。

へ、或は虎狼鷹犬に食はれ、或は火を避けて樹下に依るに、樹葉墜落して、皆刀劍と成り、その身を割截するあり、或は斧鋸を以て、肢體を〔五一〕解剔し、或は熱沸せる灰河の中に擲ち、或はまた糞屎の坑中に擲つ。是の如き等の種種の諸苦を受くるも、業報を以ての故に、命終に死せず。菩薩既に此の如き事を見已りて、心に思惟す、『此等の衆生、本惡業を造り、世樂の爲の故に、今、極大苦の果を得。もし、人、此の如き惡報を見ば、また更に不善の想を作すべき無からん。』

爾の時、菩薩、また畜生を觀ずるに、種種の行に隨つて、雜醜の形を受く。或はまた骨肉筋角皮牙毛羽の爲に、殺を受くるものあり。或はまた人の爲に、重擔を荷負し、飢渴乏極して、人知るなきものあり。或はその鼻を穿ち、或はその首を〔五二〕鈎し、常に身肉を以て人に供へ、還つてその類と、更相食噉するあり、是の如き種種の苦を受く。菩薩既に見て、大悲心を生じて、自ら思惟す、『これ等の衆生、恒に身力を以て人に供へ、また楚撻饑渴の苦を加ふ。皆これ本惡行を修せる果報なり。』

爾の時、菩薩、次に餓鬼を觀じて、その恒に黑闇の中に居て、未だ曾て蹔くも日月の光を觀ず、還、これ、その類の、また相見ざるを見る。形を受くる長大、腹は太山の如く、咽頸は針の若く、口中に恒に大火ありて熾燃し、常に飢渴の爲に燋迫せられ、千億萬歲、食聲を聞かず。もし、天

〔五一〕剔。きりほどく。
〔五二〕鈎は鉤と同じ。

雨の、その上に灑ぐに値ふも、變じて火珠と成る。或は、時に、過て江海河池に臨むに、水即ち化して熱銅燋炭と爲る。動身擧歩の聲、人の五百乘の車を牽くが如く、支體節節、悉く皆火然す。菩薩既に是の如き等の種種の諸苦を見て、大悲心を起して、自ら思惟す、『これ等、皆、本、慳貪を爲し、財を積んで施さざるが爲の故に、今、この罪報を受けしむ。もし、人、かれがこの苦痛を受くるを見ば、宜しく惠施して、悋惜を生ずる勿るべし。もし、財なからしむるも、また應に肉を割きて、以用て布施すべし。』

爾の時、菩薩、次にまた人を觀じて、中陰より、始めて入胎せんとするを見る。父母和合して、顚倒想を以て、愛心を起し、卽ち不淨を以て、己が身と爲し、既に胎に處し已りて、生熟二藏の間に在り、身體を熏炙すること、地獄の苦の如し。滿十月に至りて、然る後に方に生る。初生の時、外人の爲に抱き執らるるや、麤澀苦痛なる、刀劍を被るが如し。是の如く、久しからずしてまた老死に歸し、更に嬰兒と爲りて、五道に輪轉し、自ら悟る能はず。菩薩見已りて、大悲心を起して、自ら思惟す、『衆生皆斯の如きの患あり。云何ぞ中に於て、五欲に躭著し、横に計して樂と爲し、顚倒の根本を斷ずる能はざるぞ。』

爾の時、菩薩、次に諸天を觀じて、かの天子を見るに、その身淸淨、塵垢を受けざること、眞

の瑠璃の如く、大光明あり、兩目瞬かず。或は居して須彌山の頂に在るあり、或はまた居して須彌の四鎭に在り、或はまた居して虛空の中に在り、心常に歡悅して、事に適せざるなし。天の美樂を奏し、以て自ら娛樂して、晝夜を識らず。四方諸趣、絕妙ならざるなく、東を視て耽著し、歲を彌りて轉ずるを忘れ、西を瞻て耽湎し、年を經て廻らず、乃至南北も、皆また是の如し。飮食衣服、念に應じて卽ち至る。斯の如き適意の事ありと雖も、猶、欲火の爲に煎燋せらる。まだかの天福盡くる時に、五死相の現ずるを見る。一には、頭上の花萎む。二には、眼瞬く。三には、身上の光滅す。四には、腋下に汗出づ。五には、自然に本座を離る。その諸眷屬、天子の身に、五死相の現ずるを見て、心に戀慕を生ず。天子もまた、自ら己が身に、五死相あるを見、また眷屬の、己を戀慕するを見、爾の時に當りて、大苦惱を生ず。菩薩既にかの諸天子に、是の如き事あるを見、大悲心を起して、自ら思惟す、『この諸天子は、もと少善を修して、天の樂を受くるを得たるも、果報將に盡んとして、大苦惱を生じ、既に命終し已りて、かの天身を捨てて、或は三惡道中に墮す。もと、善行を造り、爲に樂報を求めしに、今の得る所、樂少く苦多し。譬へば、飢ゑたる人の、雜毒の食を噉ひ、初は美と爲すと雖も、終に大患を成すが如し。云何ぞ智者、これを貪り樂しまんや。色・無色界の諸天、壽命の長きを見て、便ち常樂と謂ふも、既に變壞を見れ

ば、大苦惱を生じ、卽ち邪見を起して、因果なしと謗る。この事を以ての故に、三塗に輪廻して、備に諸苦を受く。菩薩、天眼力を以て、五道を觀察し、大悲心を起して、自ら思惟す、『三界の中、一の樂あるなし』と。是の如く思惟して、中夜盡くるに至りぬ。

爾の時、菩薩、第三夜に至りて、衆生の性に、何の【五三】因緣を以て、【五四】老死あるかを觀じて、卽ち老死は【五五】生を以て本と爲し、もし、生を離るれば、則ち老死なきを知りぬ。またまた、この生は、天より生ぜず、自より生ぜず、緣なくして生ぜず、因緣よりして生じ、【五六】欲有・色有・無色有の業に因りて生ず。また、三有の業の、何より生ずるかを觀じて。卽ち、三有の業の【五七】四取より生ずるを知りぬ。また、四取の、何より生ずるかを觀じて。卽ち、四取の、【五八】愛より生ずるを知りぬ。また、愛の何より生ずるかを觀じて、卽便ち愛の【五九】受より生ずるを知りぬ。またまた、受の何より生ずるかを觀じて、卽便ち、受の【六〇】觸より生ずるを知りぬ。またまた、觸の何より生ずるかを觀じて、卽便ち、觸の【六一】六入より生ずるを知りぬ。また、六入の何より

【五三】以下十二因緣（Dvādaśāṅga-Pratītyasamutpāda）の逆觀順觀。

【五四】老死（Jarāmaraṇa）。

【五五】生（Jāti）。

【五六】有（Bhava）。未來の存在を定むる業。存在に欲・色・無色の三種あるを、三有といふ。

【五七】四取（Upādāna）。愛する者に對する欲求。欲・見・戒・我語の四種を、四取といふ。

【五八】愛（Tṛṣṇā）。樂境に對する渇愛。

【五九】受（Vedanā）。苦樂の感受。

【六〇】觸（Sparśa）。外物との接

生ずるかを觀じて、卽ち六入の（六二）名色より生ずるを知りぬ。また名色の何より生ずるかを觀じて、卽ち名色の（六三）識より生ずるを知りぬ。またまた、識の何より生ずるかを觀じて、卽便ち識の（六四）行より生ずるを知りぬ。またまた、行の何より生ずるかを觀じて、卽便ち行の（六五）無明より生ずるを知りぬ。

もし、無明を滅すれば、則ち行滅し、行滅すれば、則ち識滅し、識滅すれば、則ち名色滅し、名色滅すれば、則ち六入滅し、六入滅すれば、則ち觸滅し、觸滅すれば、則ち受滅し、受滅すれば、則ち愛滅し、愛滅すれば、則ち取滅し、取滅すれば、則ち有滅し、有滅すれば、則ち生滅し、生滅すれば、則ち老死憂悲苦惱滅す。是の如く、逆順に、十二因緣を觀じ、第三夜分に至りて、無明を破り、明星出づる時、智慧光を得、習障を斷じて、一切種智を成じぬ。

爾の時、如來、心に自ら思惟したまふ、（六六）『八正道は、これ三世諸佛の履み行きて、般涅槃に趣きたまへる路なり。我、今、已に踐み、

觸。よりて之を識別す。

【六一】六入又は六處 (Saḍāyatana)。六根の具足。

【六二】名色 (Nāma-rūpa)。心・身分離の初位。

【六三】識 (Vijñāna)。過去の行業によりて受くる、現在受胎の初一念。

【六四】行 (Saṁskāra)。善惡の行業。

【六五】無明 (Avidyā)。無始の迷惑無知。

【六六】八正道卽ち八聖道 (Āryāṣṭāṅga-mārga)。正見。四諦の理を正しく見ること。正思惟。四諦の理を正しく觀察すること。正語。不實の語なきこと。正業。身の三惡業を離るること。

智慧通達して、罣礙する所なし。」

時に、大地、(六七)十八相に動き、遊霞飛塵、皆悉く澄淨し、天鼓自然に妙聲を發し、香風徐に起りて、柔輭淸涼に、雜色の瑞雲より、甘露の雨を降し、園林の花果、時を待たずして榮えぬ。また(六八)曼陀羅花・(六九)摩訶曼陀羅花・(七〇)曼殊沙花・(七一)摩訶曼殊沙花・金花・銀花・琉璃等の花・七寶の蓮花を雨らし、(七二)菩提樹を繞ること、滿三十六踰闍那なり。この時諸天、天伎樂を作し、散花燒香し、歌唄讃嘆し、天の寶蓋、及び幢幡を執り、虚空に充塞して、如來を供養す。龍神八部の、設くる所の供養も、またまた、是の如し。

爾の時に當り、一切衆生、皆悉く慈愛ありて、瞋害の想なく、歡喜踊躍し、聖跡を見るが如く、怖畏の情なく、その心調柔にして、憍慢の意を離れ、また慳嫉諂誑の心なし。五淨居天、喜樂根を離るるも、また皆歡悦して、自ら勝ふる能はず。地獄の苦痛、蹔く休息を得て、大歡喜を生じ、一切の畜生、相食噉するもの、また惡心なく、餓鬼飽滿して、飢渴の想なし。世界の中、幽瞑の處、日月の威光

正命。正法に隨順して生活すること。
正精進。一心專念に努力すること。
正念。正法を憶念して忘れざること。
正定。淸淨の禪定に入ること。

【六七】十八相。六種震動に、各、小中大の三種あり。小は普通の六種、中は徧の六種、大は等の六種なり。例せば、動・徧動・等動の如し。
【六八】Mandārava マンダーラヴ
【六九】Mahāmandārava マハーマンダーラヴ
【七〇】Mañjūṣaka マンジューシャカ
【七一】Mahāmañjūṣaka マハーマンジューシャカ
【七二】Bodhidruma ボーデイドルマ

の照す能はざる所、皆大に明なり、その中の衆生、悉く相見るを得、各この言を作す、『この中、云何ぞ忽ち衆生あるか。大聖法王、世に出興し、大法の光を以て、非法の暗を破るが故に、一切をして、皆悉く明朗ならしむ。』甘蔗先王の、國を棄て道を學して、五通仙を得、また十善を行じて、天に生るるを得たるもの、皆神通に乘じて、菩提樹に到り、虚空中に在りて、歡喜合掌し、讃歎して言く、『わが甘蔗種族の中に於て、能く（七三）諸漏を斷じ、一切智を成じて、世間の眼たるは、甚奇特たり』とて、一切、歡喜踊躍せざるなし。唯、魔王のみ、心に獨、憂愁するあり。

【梵天勸請】爾の時、如來、七日中に於て、一心に思惟し、樹王を觀て、自ら念言したまふ、『我、この處に在りて、一切の漏を盡し、所作已に竟り、本願成滿す。わが所得の法や、甚深にして解し難く、唯、佛と佛と、乃ち能くこれを知るのみ。一切衆生、（七四）五濁の世に於て、貪慾・瞋恚・愚癡・邪見・憍慢・諂曲の覆障する所と爲り、薄福鈍根にして、智慧あるなし。云何ぞ能く我が所得の法を解せん。今、我、もし、（七五）轉法輪を爲さば、かれ、必、迷惑して、信受する能はず、誹謗を生じて、當に惡道に墮し、諸の苦痛を受くべし。我、寧、默然として般涅槃に入

【七三】漏、けがれ。身口よりもれて善根をけがす意。煩惱の異名。
【七四】劫・見・煩惱・衆生・命の濁りけがるるをいふ。
【七五】説法のこと。法の説かるる處、一切の障礙を摧破せざるなきを、輪寶の轉ずる處、一切を摧破せざるなきに喩ふ。

らん。』

爾の時、如來、偈を以て頌して曰はく、

『聖道は甚だ登り難く、智慧の果は得難し、我この難中に於て、皆悉く已に能く辦せり。わが所得の智慧は、微妙最第一なり。

衆生は諸根鈍にして、樂に著し癡に盲ひられ、生死の流に順ひ、その源に反る能はず。斯の如き等の類、云何ぞ度すべき。』

爾の時、如來、この念を作し已るや、大梵天王、如來の、聖果已に成じて、默然として住し、法輪を轉じたまはざるを見て、心に憂惱を懷き、卽ち自ら念言す、『世尊、昔、無量億劫に於て、衆生の爲の故に、久しく生死に在り、國城・妻子・頭目・髓腦を捨て、備に衆苦を受け、今、始めて所願滿足して、阿耨多羅三藐三菩提を成じつつ、云何ぞ默然として說法したまはざるか。衆生は長夜、生死に沈沒するを。我、今、當に往いて法輪を轉ぜんを請ひまつるべし。』この念を作し已りて、卽ち天宮を發して、猶、壯士の臂を屈伸する如き頃に、如來の所に至り、頭面に足を禮し、繞ること百千匝にして、却いて一面に住し、胡跪合掌して、佛に白して言く、『世尊、往昔、衆生の爲の故に、久しく生死に住し、身の頭目を捨てて、以用て布施し、備に諸苦を受け、廣く

徳本を修し、今、始めて無上道を成じつつ、云何ぞ默然として說法したまはざる。衆生、長夜、生死に沒溺し、無明の暗に墮し、出期甚だ難し。然るに、過去世の時、善友に親近し、諸の徳本を植ゑ、法を聞きて、聖道を受くるに堪任ふる衆生あり。唯願はくは、世尊、これ等を以ての故に、大悲力を以て、妙法輪を轉じたまへ』。釋提桓因、乃至、他化自在天も、またまた是の如く、如來に勸請す『諸衆生の爲に、大法輪を轉じたまへ。』爾の時、世尊、大梵天王、及び釋提桓因等に答へて言はく『我もまた一切衆生の爲に、法輪を轉ぜんと欲す。ただ所得の法、微妙甚深にして、解し難く、知り難し。諸衆生等、信受する能はずして、誹謗の心を生じて地獄に墮せん我、今、これが爲の故に、默然たるのみ。』時に梵天王等、乃ち三たび請ひまつるに至り、爾の時、如來、滿七日に至りて、默然としてこれを受けたまふ。梵天王等、佛の請を受けたまへるを知り、頭面に足を禮して、各所住に還る。

【向鹿野苑】爾の時、世尊、梵天王等の請を受け已りて、また七日、佛眼を以て、諸衆生の上中下の根、及諸煩惱の、また下中上を觀じたまひて、滿二七日。爾の時、世尊、またまた思惟したまふ、『我、今、甘露の法門を開かんに、誰か應に先に在りて聞くを受くべき者ぞ。阿羅邏仙人は、聰慧にして悟り易く、また先に道成せば我を度したまへと發願せり。』この念を作したまへる時、

空中に言あり、『阿羅邏仙人、昨夜命終す』と。爾の時、世尊、卽便ちかの空中の聲に答へて言はく、『我もまたそが昨夜命終せるを知る。』また自ら思惟したまふ、『迦蘭仙人は、利根明了なり。また應に先に聞くべし。』空中にまた言ふ、『迦蘭仙人、昨夜命終す』と。爾の時、世尊、卽ちまた答へたまはく、『我もまたそが昨夜命終せるを知る。』爾の時、世尊、また自ら思惟したまふ、『かの王師・大臣の遣はせる、憍陳如等の五人、我を瞻視せるもの、皆悉く聰明にして、また過去世に、我に於て先づ法を聞くべきを發願せり。我、今、宜しくこの五人の爲に、先づ法門を開くべし。』また自ら思惟したまふ、『古昔、諸佛の轉法輪處は、皆悉く(七六)婆羅㮈國、鹿野苑中、仙人住處なり。またこの五人の、止住する處、また彼處にあり。我、今、往いてその住處に至り、大法輪を轉ずべし。』これを思惟し已りて、卽ち座より起ちて、婆羅㮈國に至りたまふ。

【二商供養】爾の時、五百の商人あり。二人主たり。一を跋陀羅斯那と名け、二を跋陀羅梨と名く。行いて曠野を過ぐる時、天神あり、これに語りて言ふ、(七七)『如來・(七八)應供・(七九)正遍知・(八〇)明行足・(八一)善逝・(八二)世間解・(八三)無上士・(八四)調御丈夫・(八五)天人師・(八六)佛・(八七)世尊あり

【七六】Mṛgadāva of Vārāṇasī

【七七】如來(Tathāgata)。如より來生する意。

【七八】應供(Arhat)。人天の供養に應ずべき意。

【七九】正遍知(Samyaksambuddha)。正しく遍ねく知る意。

【八〇】明行足(Vidyācaraṇa-sampanna)。三明の行の具足

て、世に出興したまひ、最上の福田たり。汝、今、宜しく最も前に供を設くべし。』時にかの商人、天語を聞き已りて、卽ちこれに答へて曰く、『善い哉、告の如くせん。』また天に問うて言く、『世尊、今、何許にありとか爲す。』天また報へて言く、『世尊、久しからずして、當にここに來至したまふべし。』是に於て、如來、無量の諸天に、前後導從せられて、多謂婆跋利村に到りたまふ。時に、かの商人、既に如來の威相莊嚴を見、また、諸天の前後に圍繞するを見て、倍歡喜を生じ、卽ち蜜麨を以て、佛に奉上る。爾の時、世尊、心に自ら思惟したまふ、『過去の諸佛は、(八八)鉢多羅を用つて、以て食を盛りたまへり。』時に、(八九)四天王、佛の心念を知り、各一鉢を持ち、佛所に來至し、以て奉上る。是に於て、世尊、自ら念言したまふ、『我、今、もし、一王の鉢を受けば、餘王は、必ず恨心を生ずべし』とて、卽便ち普く四王の鉢を受けまし、累ねて掌上に置き、(九〇)按じて一と成らしめ、四際を現せしむ。爾の時、世尊、卽便ち呪願したまふ、『今、布施する所

する意。

【八一】善逝(Sugata)。善く涅槃に入れる意。

【八二】世間解(Lokavit)。世間の一切を解了する意。

【八三】無上士(Anuttara)。一切衆生中、無上の大人なる意。

【八四】調御丈夫(Puruṣa-damya-sārathi)。丈夫を方便調御する意。

【八五】天人師(Śāstā-devamanuṣyānām)。人間天上の導者の意。

【八六】佛(Buddha)。覺者の意。

【八七】世尊(Lokanātha)。前十號を具足して世に尊重せらる意。

【八八】pātra

【八九】東方持國天(Dhṛtarāṣṭra)・南方增長天(Virūḍhaka)。西方廣目天(Virūpākṣa)。

は、食者をして、氣力を充すを得しめんと欲し、施者をして、色を得、力を得、(九一)膽を得、喜を得、安快無病にして、終に年壽を保ち、諸善鬼神、恆に隨つて守護せしむべし。飯食の布施は、三毒の根を斷ち、將來三堅法の報を獲、聰明智慧ありて、篤く佛法を信じ、在在の所生、正見不昧なるべし。現世の中、父母妻子、親戚眷屬、皆悉く熾盛に、諸の災怪不吉祥の事なく、門族の中、(九二)もし、命過あり、惡道に墮せば、今施す所の福を以て、還つて人天に生じ、邪見を起さず、功德を增進し、常に諸佛如來に近づき奉るを得、妙說を聞くを得、諦を見、證を得て、所願具足せしむべし。」

爾の時、世尊、呪願し訖已りて、卽便ち食を受け、食既に畢竟りて、澡漱して鉢を洗ひ、卽ち商人に三歸を授けたまふ。一に歸依佛、二に歸依法、三に歸依將來僧なり。三歸を授け竟りて、因りてこれと別れて、便ち前行したまふ。威儀庠序にして、步、鵝王の如し。

【優波伽外道】 路に外道の(九三)優波伽と名くるに逢ひたまふに、既に如來の相好莊嚴、諸根寂定なるを見て、歎じて奇特と爲し、卽ち偈を說きて言はく、

「世間の諸衆生、皆三毒に縛せられ、

北方多聞天(Vaiśravaṇa)。

【九〇】 按令成一、使四際現は、四鉢を累ねて一と成し、緣に於て、四個なるを明ならしめたるなり。

【九一】 膽は宋元明の三本に捨に作る。

【九二】 (原文 若有命過墮惡道者)

【九三】 Upaka

諸根また輕躁、外境に馳蕩す。
今仁者を見るに、諸根極めて寂靜なり。
必ず解脫の地に到れること、決定して疑あるなし。
仁者の學せる所の師、その姓字は何等ぞ。』
爾の時、世尊、偈を以て答へたまはく、
「我今已に、一切衆生の表に超出し、
微妙深遠の法を、我今已に具に知る。
三毒五欲の境、永く斷じて餘習なきこと、
蓮花の水に在りて、濁水の泥に染まざるが如し。
自ら八正道を悟り、師なく等侶なく、
淸淨智慧を以て、大力の魔を降伏し、
今正覺を成ずるを得て、天人師と爲るに堪へ、
身口意滿足す。故に號して牟尼と爲す。
婆羅㮈に趣きて、甘露の法輪を轉ぜんと欲す。

これ天・人・魔・梵の、轉ずる能はざるべき所なり。』

爾の時、優波伽、この偈言を聞きて、心に歡喜を生じ、未曾有と歎じ、合掌恭敬し、圍繞して去り、廻顧瞻矚し、見えずして乃ち止みぬ。

【目眞龍王】爾の時世尊、卽ちまた前行し、次で阿闍婆羅水の側に到り、日暮止宿して便ち定に入たまふ。爾の時に當り、七日風雨あり。時にかの水中に、大龍王あり、(九四)目眞憐陀と名く。佛の入定を見て、卽ちその身を以て、圍繞七匝する、滿七日已りて、時に、かの龍王、化して人形と爲り、頭面に足を禮して、佛に白して言く、『世尊、此に在して、七日の中、乃ち甚風雨を患へたまふに至らずや。』爾の時、世尊、偈を以て答へたまはく、

『諸天及び世人の、歡ぶ所の五欲は、
わが禪定の樂に比するに、譬喩と爲すべからず。』

時に、かの龍王、佛のこの偈を聞き、歡喜踊躍し、頭面に足を禮して、所止に還歸る。

【度五比丘】爾の時、世尊、卽ちまた前行して、婆羅㮈國に往き、(九五)憍陳如・(九六)摩訶那摩・(九七)跋波・(九八)阿捨婆闍・(九九)跋陀羅闍の止住せる處に至りたまふ。時にかの五人、遙に佛の來りませるを

【九四】Mucilinda
【九五】Kauṇḍinya
【九六】Mahānāma
【九七】Vāṣpa
【九八】Aśvajit
【九九】Bhadrajāa(?)。普通に Bhadrika に作る。

見て、共に相謂つて言く、『沙門（一〇〇）、瞿曇、苦行を棄捨し還つて退いて飲食の樂を受け、また道心なし。今既に此に來る。（一〇一）我等、須く起つてこれを迎ふべからず。また禮敬を作して、敷坐を爲すべき處を問ふ勿らん。もし、坐せんと欲せば、自らその意の隨なり。』この語を作し竟りて、各默然たり。爾の時、世尊、既に來至し已るや、五人覺えず各座より起ちて禮拜奉迎し、互に爲に事を執る。或はまた爲に衣鉢を持つものあり。或は水を取りて盥漱に供ふるものあり。或はまた爲に脚を澡洗するものあり。各本誓に違ふも、猶故のごとく、佛を稱して以て瞿曇と爲す。爾の時、世尊、憍陳如に語つて言はく、『汝等共に我を見るも起たずと約せるに、今、何が故に、先に誓へる所に違ひ、卽ち驚き起ちて、我が爲に事を執るぞ。』時にかの五人、佛のこの語を聞きて、深く慙愧を生じ、卽ち前んで白して言く、『瞿曇、道を行きて疲惓なきを得んや。』爾の時、世尊、五人に語りたまはく、『汝等、云何ぞ無上尊に於て、高情を以て、姓を稱へ喚ぶか。己が心は空の如く、諸の毀譽に於て、分別する所なし。ただ汝が憍慢、自ら惡報を招く。譬へば、子が父母の名を稱するは、世儀の中に於て、猶尚不可なるが如し。況んや、我は、今、これ、一切の父母たるをや。』時にかの五人、またこの語を聞きて、倍慙愧を生じて、佛に

【一〇〇】Gautama（ガウタマ）

【一〇一】（原文 我等不須起迎之也、勿作禮敬問所須爲敷坐處、若欲坐者自隨其意。

白して言く、『我等愚癡にして、慧識あるなく、今、已に正覺を成じたまへるを知らず。所以は何ん。往に如來が日に麻米を食ひ苦行六年なりしに、今還つて飮食の樂を受くるを見、我これを以ての故に、道を得ずと謂へり。』爾の時、世尊、憍陳如に語りて言はく、『汝等、小智を以て、輕しく、わが道の成せると成ぜざるとを量るなかれ。何を以ての故に。形、苦にあれば、心則ち惱亂し、身、樂に在れば、情則ち樂著す。ここを以て、苦樂は兩ながら道の因にあらず。譬へば、火を鑽るに、これに澆ぐに水を以てすれば、則ち必ず破暗の照あるなきが如し。智慧の火を鑽るも、またまた是の如し。苦樂の水あれば、慧光生ぜず。生ぜざるを以ての故に、生死の黑障を滅する能はず。今、もし、能く苦樂を棄捨して、中道を行ずれば、心則ち寂定して、能くかの八正聖道を修し、生老病死の患を離るるに堪ふ。我、已に中道の行に隨順して、阿耨多羅三藐三菩提を成せり。』

時に、かの五人、既に如來の此の如きの言を聞きて、心大に歡喜し、踊躍無量、尊顏を瞻仰して、目、蹔くも捨てず。爾の時、世尊、五人の根が、道を受くるに堪任ふるを觀じて、これに語りたまはく、『憍陳如よ、汝等當に知るべし、〔一〇三〕五盛陰苦・生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離苦・怨憎會苦・所求不得苦・

【一〇三】五盛陰苦とは、勢力熾盛なる五陰（色・受・想・行・識、即ち人身組織の成分）に受くる苦。即ち心身に受くる苦を

失榮樂苦は、憍陳如よ、有形も、無形も、無足なる、一足なる、二足・四足・多足なる、一切の衆生、悉く此の如き苦あらざるものなし。譬へば、灰を以て火上に覆はんに、もし、乾草に遇へば、還また燒燃するが如し。是の如く、諸苦は我を本と爲すに由る。もし、衆生あり、微我の想を起せば、還また更に此の如きの苦を受く。貪欲・瞋恚・及び愚癡は、皆悉く我の根本に緣りて生ず。またこの三毒は、これ諸苦の因なり。猶、種子の能く芽を生ずるが如し。衆生は是を以て三有に輪迴す。もし、我想及び貪・瞋・癡を滅すれば、諸苦またこれによりて斷じ、悉くかの八正道に由らざるなし。人の、水を以て盛火に澆ぐが如し。一切衆生は、諸苦の根本を知らず、皆悉く輪廻して、生死に在り。憍陳如よ。（一〇三）苦は應に知るべし、（一〇四）習は當に斷ずべし、（一〇五）滅は應に證すべし、（一〇六）道は當に修すべし。憍陳如よ、我は苦を知り、習を斷じ、滅を證し、道を修するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。是の故に、汝、今、應に苦を知り、習を斷じ、滅を證し、道を修すべし。もし、人、（一〇七）四聖諦を知らずば、當に知るべし、

總じていふ。五盛陰苦、乃至、所求不得苦を、普通に八苦と爲す。ここの文勢を案ずるに、五盛陰苦を開きて、生老病死の四苦と爲し、これに愛別離苦以下の四苦を加へて、八苦とするものの如し。

【一〇三】苦（Duḥkha）。三界六趣の苦報。

【一〇四】習（Samudaya）。苦報を集起する原因。

【一〇五】滅（Nirodha）。寂滅涅槃の果報。

【一〇六】道（Mārga）。涅槃に通入せしむる八正道。

【一〇七】四聖諦（Catvāri-āryasatyāni）聖者所見の四個の眞理。

この人の、解脱を得ざるを。四聖諦は、これ眞、これ實なり。苦は實にこれ苦、習は實にこれ習、滅は實にこれ滅、道は實にこれ道なり。憍陳如よ、汝等解せりや未だしや。』憍陳如言く、『解しぬ、世尊。知りぬ、世尊。』四諦に於て、解知を得たるを以ての故に（一〇八）阿若憍陳如と名く。

佛、四諦十二行の法輪を三轉したまへる時に當り、阿若憍陳如、諸法中に於て、（一〇九）塵に遠かり垢を離れて、（一一〇）法眼淨を得たり。時に、虛空中の、八萬那由他の諸天も、また塵垢を離れて、法眼淨を得たり。

爾の時、地神、如來が、その境界に在りて法輪を轉じたまへるを見て、心大に歡喜し、高聲に唱へて言く、『如來、ここに於て、妙法輪を轉じたまふ。』虛空の天神、既にこの言を聞きて、また踊躍を生じ、展轉して聲を唱へて、乃ち（一一一）阿迦膩吒天に至る。諸天聞き已りて、欣悅無量に、高聲に唱へて言く、『如來、今日、婆羅㮈國、鹿野苑中、仙人住處に於て、一切世間の天・人・魔・梵・沙門・婆羅門の、轉ずる能はざる所の、大法輪を轉じたまふ。』爾の時、大地、十八相に動き、天龍八部、虛空中に於て、衆伎樂を作し、天鼓自ら鳴り、衆名香を燒き、諸妙花を散じ、寶幢・幡蓋・歌唄もて讚歎し、世界の中、自然に大明あり。

【一〇八】阿若（Ajñāta）。已知の義。

【一〇九】塵も垢も、共に、けがれ。煩惱のこと。

【一一〇】法眼淨。或は淨法眼、淸淨法眼に作らる。四諦の理を分明に見たるをいふ。四沙門果中の初果のこと。

【一一一】Akaniṣṭha。色究竟と譯す。色界十八天中の最上位に在り。

阿若憍陳如、弟子中に於て、始めて悟れるを以ての故に、第一の弟子たり。時に、かの摩訶那摩等の四人、佛の轉法輪を聞き已り、阿若憍陳如が、獨、(二二)道跡を悟れるを(見て)、心に自ら念言す、『世尊、もし、更にわが爲に說法したまはば、我等もまた當にまた道跡を悟るべし。』この念を作し已りて、尊顏を瞻仰して、目蹔くも捨てず。爾の時、世尊、四人の念を知ろして、卽便ち重ねて爲に廣く四諦を說きたまふ。時に、四人、諸法中に於て、また塵垢を離れて、法眼淨を得たり。時に、かの五人、道跡を見、見已りて、佛足を頂禮し、佛に白して言く、『世尊、我等五人、已に道跡を見、已に道跡を證しぬ。我等、今、佛法に於て、出家修道せんと欲す。唯、願はくは、世尊、慈愍もて聽許したまへ。』時に世尊、かの五人を、『善來比丘』と喚びたまへば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、卽ち沙門と成る。

爾の時、世尊、かの五人に問ひたまふ、『汝等比丘、(二三)色・(二四)受・(二五)想・(二六)行・(二七)識の、これ常たりや無常たりや、これ苦たりや非苦たりや、これ空たりや非空たりや、有我たりや無我たりやを知るか。』

【二二】道跡。僧肇曰く「法眼淨、須陀洹道也。始見道跡故、得法眼名」。初果のこと。
【二三】色(Rūpa)。有形の物質。
【二四】受(Vedanā)。感受作用。
【二五】想(Saññā)。想知作用。
【二六】行(Saṁskāra)。意志作用。
【二七】識(Vijñāna)。了別識知、及びその體。
右の五を五蘊又は五陰といふ。蘊(Skandha)も陰も、積集の義。有爲法はすべて積集によりて作用するを以てなり。
【二八】無常。諸行の無常。
【二九】苦。一切の皆苦。

時に、五比丘、佛の、この五陰の法を說きたまふを聞き已りて、漏盡き意に解して、阿羅漢果を成じ、卽便ち答へて言く、『世尊、色・受・想・行・識は、實にこれ（二八）無常・（二九）苦・（三〇）空・（三一）無我なり。』是に於て、世間に始めて六阿羅漢あり。佛阿羅漢は、これ佛寶たり、四諦の法輪は、これ法寶たり、五阿羅漢は、これ僧寶たり。是の如く、世間に三寶具足して、諸の天人の、第一（三二）福田たり。

【三〇】空。一切の皆空。

【三一】無我。諸法の無我。これ等を法印といふ。以て、佛教たる印（標幟）とす。

【三二】福田。供養すれば、福徳を生ずること、田地の穀物を生ずるが如きをいふ。佛又は僧を喩ふ。

卷の第四

【度耶舍】爾の時長者子あり、名けて(一)耶舍といふ。聰明利根、極大巨富、閻浮提中、最第一たり。天冠瓔珞を服し、(二)無價の寶履を著く。中夜に於て、諸の妓女と、相娛樂し已りて、各還つて寢息す。忽ち眠より覺めて、諸の妓女を見るに、或は伏して臥すあり、或は仰いで眠るあり。頭髮蓬のごとく亂れ、涎唾流れ出で、樂器服玩、顚倒縱橫す。既にこれを見已りて、厭離の心を生じ、自ら念言して言く、『我、今、この災恠の內にありて、不淨中に於て、妄に淨想を生ず。』この念を作す時、天力を以ての故に、空中に光明あり、門自然に開く。光を尋ねて去り、鹿野苑に趣かんとて、路、恒河に出り、高聲に『苦哉怪哉』と唱へいふ。佛言はく、『耶舍、汝便ち我に來るべし。ここに、今、離苦の法あり。』耶舍聞き已りて、著くる所の寶履の、價閻浮提に直るを、卽便ちこれを脫して、恒河を渡り、往いて佛所に詣り、三十二相・八十種好・顏容挺特・威德具足せるを見て、心大に歡喜し、踊躍無量にして、(三)五體を地に投じて、佛足を頂禮す、『唯願はくは、世尊、我を救濟したまへ。』佛言はく、『善哉、善男子、諦に聽きて善くこれを思念

【一】Yaśas
【二】無上の價。
【三】頭・二肘・二膝を地につけて禮するを五體投地といふ。印度の最敬禮なり。

せよ。』如來卽便ちその根に隨順して、爲に說法したまふ、『耶舍、色・受・想・行・識の、無常・苦・空・無我なるを、汝、これを知るや否や。』この時、耶舍、この語を說きたまへるを聞きて、卽ち諸法に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得たり。是に於て、如來、重ねて四諦を說きたまふや、漏盡意解し、心に自在を得て、阿羅漢果を成じ、卽ち佛に答へて言く、『世尊、色・受・想・行・識は、實にこれ無常・苦・空・無我なり。』爾の時、如來、猶、耶舍の、嚴身の具を著くるを見たまひ、卽ち偈を說きたまはく、

『また居家に處し、寶嚴身の具を服すと雖も、善く諸情根を攝して、五欲を厭離する、
――もし能く此の如くば、――是を眞の出家と爲す。
身曠野にありて、麤澀を服食すと雖も、意猶五欲を貪ぼるを、是を出家に非ずと爲す。
一切善惡を造るは、皆心想より生ず。この故に眞の出家は、皆心を以て本と爲す。』

爾の時、耶舍、既に如來の、この偈を說きたまへるを聞き已りて、心に自ら念言す、『世尊の、この偈を說きたまふ所以のものは、正に我が猶七寶を著くるを以てなるべし。我、今、宜しく此の如き服を脫すべし。』卽便ち佛を禮し、佛に白して言く、『唯願はくは世尊、我に出家を聽したまへ。』佛、『善來比丘』と言ふや、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、卽ち沙門と爲る。

爾の時、耶舍の父、既に天曉に至りて、耶舍を求覓むるに、所在を知らず。心大に懊惱し、悲號啼泣し、路に緣りて推し尋ね、恒河の側に到り、その子の屐を見、心に自ら思惟す、『わが子、正にこの道より去りしなるべし。』卽ちその跡を尋ねて、佛所に至る。爾の時、世尊、そが、子の爲の故に、來りてここに至るを知りたまひ、もし、卽ち耶舍を見るを得しめば、必ず大苦を生じて、或は能く命終せんとて、便ち神力を以て、耶舍の身を隱したまふ。その父、卽便ち前んで佛所に到り、頭面に足を禮し、退いて一面に坐す。是に於て、如來、卽ちその根に隨つて、爲に說法したまふ、『善男子、色・受・想・行・識の無常・苦・空・無我なるを、汝はこれを知るや不や。』時に、耶舍の父、この言を說きたまへるを聞きて、卽ち諸法に於て、遠塵離垢し、法眼淨を得て、佛に答へて言く、『世尊、色・受・想・行・識は、實にこれ無常・苦・空・無我なり。』爾の時、如來、既にそが道跡を見て、恩愛の漸く薄きを知りたまひ、これに問うて言はく、『汝、何の因緣にて、來つてここに至れるぞ。』それ卽ち答へて言く、『我に一子あり、名けて耶舍といふ。昨夜の中、忽ちに所在を失ひ、今旦推し求めて、その寶屐の、恒河の側に在るを見、足跡を追ひ尋ねて、故にここに來り至る。』爾の時、世尊、その神力を攝したまふ。その父、卽便ち耶舍を見るを得て、心大に歡喜し、耶舍に語りて言す、『善

【四】推。椎に作らる。恐くは誤。

哉善哉、汝がこの事を爲せるは、眞實に快し。既に能く自ら度し、また能く他を度す。汝、今、ここに在るが故に、我をして來りて道跡を見るを得しめぬ。』即ち佛前に於て、三自歸を受けたり。是に於て、閻浮提中、唯、この長者のみ、[五]優婆塞として、最初に三寶を供養するを獲得ぬ。

爾の時、また耶舍の朋類、五十の長者子あり。佛の出世したまへるを聞き、また耶舍が、佛法中に於て、出家修道せるを聞き、各自ら念言す、『世間、今、無上尊あり。長者子耶舍、聰慧辨了、才藝人を兼ねるに、乃ち能くその豪族を捨て、五欲の樂を棄て、形を毀り志を守りて、沙門と爲れり。我等、今、また何をか顧戀して、出家せざらんや。』この念を作し已りて、共に佛所に詣る。未だ至らざる間に、遙に如來の相好殊特。光明赫奕たるを見て、心大に歡喜し、擧體清涼、敬情轉至り、即ち佛所に前み、合掌圍繞し、頭面に足を禮す。諸長者子は、徳本を宿植し、聰達悟り易し、如來、即便ちその所應に隨つて、爲に說法したまふ、『善男子、色・受・想・行・識は、無常・苦・空・無我なり。汝、これを知るや不や。』この語を說き已りたまふ時に、諸長者子、諸法中に於て、遠塵離垢し、法眼淨を得て、即ち佛に答へて言す、『世尊、色・受・想・行・識は、無常・苦・空・無我なり。唯願はくは、世尊、我が出家を聽したまへ。』佛、『善來比丘』と言ふや、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即ち沙門と

【五】 Upāsaka。清信士。

成る。爾の時、世尊、また爲に廣く四諦を説きたまふ時、五十の比丘、漏盡意解して、阿羅漢果を得たり。爾の時、始めて五十六の阿羅漢あり。

この時、如來、諸比丘に告げたまふ、『汝等比丘、汝等の所作已に辦じぬ。世間の爲に上福田と作るに堪ふ。宜しく各遊方敎化して、慈悲心を以て、諸衆生を度すべし。我も、今、また當に獨、(六)摩竭提國、王舍城中に往きて、諸の人民を度すべし。』諸比丘言さく、『善哉世尊。』爾の時、比丘、頭面に足を禮し、各衣鉢を持ち、辭別して去る。

【化三迦葉】 爾の時、世尊、卽便ち思惟したまふ、『我、今、何等の衆生を度してか、能く廣く一切の人天を利すべき。唯、(七)優樓頻螺迦葉兄弟三人あり。摩竭提國に在りて、仙道を學び、國王臣民、皆悉く歸信す。また、それ、聰明利根にして、悟り易し。然れども、その我慢も、また摧伏し難し。我、今、當に往いてこれを度脱すべし。』これを思惟し已りたまふや、卽ち波羅㮈を發して、摩竭提國に趣き、日將に昏暮れんとして、優樓頻螺迦葉の住處に往きたまふ。時に、迦葉、忽ち如來の相好莊嚴を見、心大に歡喜して、この言を作さく、『年少沙門、いづこより來るか。』佛卽ち答へたまはく、『我、波羅㮈國より、摩竭提國に詣るべし。日既に晩暮る。一宿を寄せんと欲す。』迦葉また言す、『寄りて

【六】Rājagrha of Magadha（ラージヤグリハ　マガダ）
【七】Uruvelvā-kāśyapa（ウルヴエールヴー・カーシヤパ）

宿止するは、甚相違せず。ただ諸房舍は、悉く弟子住し、ただ石室あるのみ。極めて潔淨、わが火に事ふるの具、皆その中にあり、この寂靜の處、相容るるを得べし。然れども惡龍あり。その内に居在す。恐くは相害せん。』佛また答へたまはく、『惡龍ありと雖も、ただ以て借されよ。』迦葉また言す、『その性、兇暴なり。必、相害すべし。これ惜むあるに非ず。』佛また答へたまはく、『ただ以て借されよ。必ず辱しむるなからん。』迦葉また言す、『もし、能く住せば、便ち意の隨に住せよ。』佛、『善哉』と言ひ、卽ちその夕に於て、石室に入り、結加趺坐して、三昧に入りたまふ。

爾の時、惡龍、毒心轉盛にして、擧體より烟出づ。世尊、卽ち火光三昧に入りたまふや、龍これを見已りて、火焰天を衝き、石室を焚燒す。迦葉の弟子、先づこの火を見て、還つて師に白す、『年少沙門、聰明端嚴。今、龍火の爲に燒害せらる。』迦葉驚き起きて、かの龍火を見、心に悲傷を懷き、卽ち弟子に勅して、水を以てこれに澆ぐに、水滅する能はず、火更に熾盛にして、石室融け盡く。爾の時、世尊、身心不動、容顏(八)怡然として、かの惡龍を降して、また毒なからしめ、三歸依を授けて、鉢中に置き、天明に至りぬ。迦葉の師徒、倶に佛所に往き、『年少沙門、龍火猛烈なり。はたこれが爲に傷けらるるなきか。沙門の家を借るや、我、昨、相與へざりし所以のものは、正にこれが爲のみ。』佛言

【八】怡。やはらぐ。

はく、『我、内、淸淨なり。終にかの外災の爲に害せられず。かの毒龍は、今、鉢中に在り。』即便ち鉢を擧げて、以て迦葉に示す。迦葉の師徒、沙門の、火に處して燒けず、惡龍を降伏して、鉢中に置けるを見、未曾有と歎じ、弟子に語りて言く、（九）『年少沙門、また神通ありと雖も、然れども、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

爾の時、世尊、迦葉に語つて言はく、『我、今、方に、この處に停止せんと欲す。』迦葉答へて言く、『善い哉、意の隨なり。』この時、如來、第二夜に於て、一樹下に坐しまたふ。時に四天王、夜、佛所に來りて、共に法を聽き、各光明を放ち、照すこと日月に踰ゆ。迦葉、夜起きて、遙に天光の如來の側に在るを見、弟子に語つて言く、『年少沙門もまた火に事ふ』と。明日の曉に至り、往いて佛所に詣り、問うて言く、『沙門、汝火に事ふるか。』佛言はく、『不。四天王あり、夜來りて法を聽けり。これその光のみ。』是に於て、迦葉、弟子に語つて言く、『年少沙門、大神德あり。然れども、故、我が道の眞なるに如かざるなり。』

第三夜に至り、釋提桓因來り下りて法を聽き、大光明を放つこと、日の初めて昇るが如し。迦葉の弟子、遙に天光の如來の側に在るを見て、師に白して言く、『年少沙門、定めて火に事ふ』

【九】以下「年少沙門、……然故不如我道眞也」を重複すること、二十二回、以て摧伏し難き我慢を發揮す。

と。明旦に至り、往いて佛所に詣り、沙門に問うて言く、『汝、定めて火に事ふ。』佛言はく、『不。釋提桓因、來り下りて法を聽けり。これその光のみ。』時に、迦葉、弟子に語つて言く、『年少沙門、神德盛なりと雖も、然れども、故、我が道の眞なるに如かざるなり。』

第四夜に至り、大梵天王、來り下りて法を聽き、大光明を放つこと、日の正に中するが如し。迦葉、夜起きて、光明の如來の側に在るを見、沙門必定して火に事ふとて、明日佛に問ふ、『汝、定めて火に事ふ。』佛言はく、『不。大梵天王、夜來りて法を聽けり。これその光のみ。』是に於て、迦葉心に自ら念言す、『年少沙門、また神妙なりと雖も、然れども、故、我が道の眞なるに如かざるなり。』

爾の時、迦葉の五百の弟子、各（一〇）三火に事ふ。晨朝時に於て、倶に火を燃さんと欲するに、火肯て燃えず。皆迦葉に向つて、具さにこの事を說く。迦葉聞き已りて、心に自ら思惟す、『これ必ず當にこの沙門の所爲なるべし。』卽ち弟子と、來りて佛所に詣り、佛に白して言く、『わが諸弟子、各三火に事ふ。旦にこれを燃さんと欲するに、火燃えず。』佛卽ち答へたまはく、『汝、還り去るべし。火當に自ら燃ゆべし。』迦葉便ち還れば、火の已に燃ゆるを見、心に自ら念言す、『年少沙門、また神妙なりと雖も、然も故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

【一〇】三火。朝・中・暮の三時、火を祀るをいふ。

諸弟子衆、火を供養し畢りて、これを滅せんと欲するに、滅せしむる能はず。卽ち迦葉に向つて、具にこの事を說く。迦葉聞き已りて心に自ら思惟す、『これまた當にこれ沙門の所爲なるべし。』卽ち弟子と、來りて佛所に至り、佛に白して言く、『わが諸弟子、朝に火を滅せんと欲して、火滅せず。』佛卽ち答へたまはく、『汝、還り去るべし。火自ら當に滅すべし。』迦葉便ち歸れば、火の已に滅するを見、心に自ら念言す、『年少沙門、また神妙なりと雖も、然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

爾の時、迦葉自ら三火に事ふ。晨朝に火を燃さんと欲するに、肯て燃えず。卽ち自ら思惟す、『これ必ずまたこの沙門の所爲なり』と。卽ち佛所に往き、佛に白して言く、『我、朝に火を燃すに、肯て燃えず。』佛卽ち答へたまはく、『汝、還り去るべし。火自ら當に燃ゆべし。』迦葉便ち歸りて、火の已に燃ゆるを見、心に自ら念言す、『年少沙門、また神妙なりと雖も、然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

時に、迦葉、火を供養し畢りて、これを滅せんと欲するに、滅せしむる能はず。心に自ら思惟す、『これ必ず當にこの沙門の所爲なるべし。』卽ち佛所に往き、佛に白して言く、『我、朝に火を燃し、今、これを滅せんと欲するに、肯て滅せず。』佛卽ち答へたまふ、『汝還り去るべし。火自ら

當に滅すべし。』迦葉便ち歸りて、火の已に滅するを見、心に自ら念言す、『年少沙門、また神妙なりと雖も、然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

爾の時、迦葉の諸弟子衆、晨朝に薪を破るに、斧肯て擧らず。卽ち迦葉に向つて、具にこの事を說く。迦葉聞き已りて、心に自ら思惟す、『これ必ずまたこの沙門の所爲ならん』とて、卽ち弟子と、佛所に來至し、佛に白して言く、『我が諸弟子、朝に薪を破らんと欲するに、斧肯て擧らず。』佛卽ち答へたまはく、『汝還り去るべし。斧自ら當に擧るべし。』迦葉便ち歸りて、諸弟子の斧、皆擧るを得たるを見、自ら念言す、『年少沙門、また神妙なりと雖も、然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

迦葉の弟子、卽ち斧を擧るを得て、また肯て下らず。還迦葉に向つて、具にこの事を說く。迦葉聞き已りて、心に自ら思惟す、『これまた當にこの沙門の所爲なるべし』と。卽ち弟子と、往いて佛所に至り、佛に白して言く、『わが諸弟子、旦に薪を破らんと欲し、斧既に擧るを得、また肯て下らず。』佛卽ち答へたまはく、『汝、還り去るべし。當に斧をして下らしむべし。』迦葉既に歸りて、諸弟子の斧、皆下るを得たるを見、心に自ら念言す、『年少沙門、また神妙なりと雖も、然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

爾の時、迦葉、晨朝時に於て、自ら薪を破らんと欲するに、斧擧るを得ず。心に自ら思惟す、『これまた當にこの沙門の所爲なるべし。』卽ち佛所に詣り、佛に白して言く、『我、旦に薪を破るに、斧肯て擧らず。』佛卽ち答へたまはく、『汝、還り去るべし。斧當に自ら擧るべし。』迦葉既に還れば、斧卽ち擧るを得、心に自ら念言す、『年少沙門、また神妙なりと雖も、然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

迦葉の斧既に擧り已りて、また肯て下らず。心に自ら思惟す、『これまた當にこの沙門の所爲なるべし』と。卽ち佛所に詣り、佛に白して言く、『わが斧已に擧り、また肯て下らず』と。佛卽ち答へたまはく、『汝、還り去るべし。斧自ら當に下るべし。』迦葉卽ち歸れば、斧卽ち下るを得、心に自ら念言す、『年少沙門、また神妙なりと雖も、然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

爾の時、迦葉、卽ち佛に白して言く、『年少沙門、ここに止りて、共に梵行を修すべし。房舍衣食は、我當に相給すべし。』時に、世尊、默然として、これを許したまふ。迦葉、佛の許すを知り已りて、その所住に還り、卽ち勅して、日日、好飲食を辦じ、幷に牀座を施し、明の食時に至り、自ら行いて佛を請ず。佛言はく、『汝去れ。我隨つて後に往かん。』迦葉適き去る。俄爾の間

に、世尊、卽便ち(一)閻浮洲に至りて、(二)閻浮果を取り、鉢に滿てて、持ち來り、迦葉未だ至らざるに、佛已に先づ到る。迦葉後に來り、佛の已に坐したまふを見、卽便ち問うて言く、『年少沙門、何の道より來り、先づここに至るか。』佛、鉢中の閻浮果を以て迦葉に示して、これに語りたまはく、『汝、今、この鉢中の果を識るや不や。』迦葉答へて言く、『この果を識らず。』佛言はく、『これより南行する、數萬踰闍那に、かしこに一洲あり。その上に樹あり、名けて閻浮といふ。この樹あるに緣りての故に、閻浮提といふ。わがこの鉢中のはこれかの果なり。一念の頃に於て、この果を取り來る、極めて香美たり。汝、これを噉ふべし。』是に於て、迦葉、心に自ら思惟す、『かの道、ここを去る、極めて長遠と爲す。而してこの沙門、乃ち能く俄爾に、已に往還するを得、神通變化、殊に自ら迅速なり。然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

迦葉卽便ち種種の食を下す。佛卽ち呪願したまふ、

『婆羅門法中、火に奉事するを最と爲し、
一切の衆流中、大海をその最と爲し、
諸の星宿中に於て、月光をその最と爲し、

【一】Jambu-dvīpa。須彌山說の、南方人間世界。
【二】Jambu

一切の光明中、日照をその最と爲し、
諸の福田中に於て、佛福田を最と爲す。
もし大果を求めんと欲せば、當に佛福田を供すべし。』

佛、食ひ已畢りて、所住に還歸り、鉢を洗ひ口を漱ぎ、樹下に坐したまふ。明日の食時、また往いて佛を請ず。佛言はく、『汝、去れ。我、隨つて後に往かん。』迦葉適き去る。俄爾の間に、世尊、卽便ち〔三〕弗婆提に至り、〔四〕菴摩羅果を取り、鉢に滿てて持ち來り、迦葉未だ至らざるに、佛已に先づ到る。迦葉後に來り、佛の已に坐したまふを見、卽便ち問うて言く、『年少沙門、何の道より來り、先にここに至れる。』佛、鉢中の菴摩羅果を以て、迦葉に示し、これに語つて言く、『汝、今、この鉢中の果を識るや不や。』迦葉答へて言く、『この果を識らず。』佛言はく、『これより東行する、數萬踰闍那にして、弗婆提に到り、この果を取り來る。名は菴摩羅、極めて香美たり。汝、これを食ふべし。』迦葉聞き已りて、心に自ら念言す、『かの道や、ここを去る、極めて長遠と爲す。而してこの沙門、乃ち能く俄爾に、以て往還するを得、その神力を觀るに、未だ曾て有らざる所なり。然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

【三】 Pūrva-videha。須彌山說の、東方人間世界。
【四】 Amra

迦葉即便ち種種の食を下す。佛即ち呪願したまふ、

『婆羅門法中、火に奉事するを最と爲し、
一切の衆流中、大海をその最と爲し、
諸の星宿中に於て、月光をその最と爲し、
一切の光明中、日照をその最と爲し、
諸福田中に於て、佛福田を最と爲す。
もし大果を求めんと欲せば、當に佛福田を供すべし』。

佛食ひ已畢りて、所止に還歸り、鉢を洗ひ口を漱ぎ、樹下に坐したまふ。

明日の食時、また往いて佛を請ず。佛言はく、『汝去れ。我隨つて後に往かん。』迦葉適き去る。俄爾の間に、世尊即便ち（一五）瞿陀尼に至り、（一六）呵梨勒果を取り、鉢に滿てて持ち來り、迦葉未だ至らざるに、佛先づ已に到る。迦葉後れて來り、佛の已に坐したまふを見、即便ち問うて言く、『年少沙門、何の道より來りて、先づここに至るか。』佛、鉢中の呵梨勒果を以て、迦葉に示して、これに語りたまはく、『汝、今、この鉢中の果を識るや不や。』迦葉答へて言く、『この果を

（一五）Godhanya。須彌山說の西方人間世界。
（一六）Harītakī

識らず。』佛言はく、『これより西行する、數萬踰闍那にして、瞿陀尼に到り、この果を取り來る。名は呵梨勒、極めて香美たり。汝これを食ふべし。迦葉聞き已りて、心に自ら念言す、『かの道や、ここを去る、極めて長遠たり。而してこの沙門、乃ち能く俄爾に已に往還するを得。その神通を視るに、未だ嘗て有らざる所なり。然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』迦葉即便ち種種の食を下す。佛即ち呪願したまはく、

『婆羅門法中、火に奉事するを最と爲し、
一切の衆流中、大海をその最と爲し、
諸の星宿中、月光をその最と爲し、
一切の光明中、日照をその最と爲し、
諸の福田中に於て、佛福田を最と爲す。
もし大果を求めんと欲せば、佛福田を供すべし。』

佛食ひ已畢りて、所止に還歸り、鉢を洗ひ口を漱ぎ、樹下に坐したまふ。明日の食時、また往いて佛を請ず。佛言はく、『汝去れ、我隨つて後に往かん。』迦葉適き去る。俄爾の間に、世尊即便ち（一七）鬱單越に至り、自然の粳米の飯を取り、鉢に滿てて持ち來り、

【一七】Uttara-kuru。須彌山說の、北方人間世界。

て言く、『年少沙門、何の道より來りて、先づここに至れる。』佛、鉢中の粳米の飯を以て迦葉に示し、これに語つて言はく、『汝、今、この鉢中の飯を識るや不や。』迦葉答へて言く『この飯を識らず。』佛言はく、『これより北行する、數萬踰闍那にして、鬱單越に到り、この自然の粳米の飯を取り來る。極めて香美たり。汝、これを食ふべし。』迦葉聞き已りて、心に自ら念言す、『かの道は、ここを去る、極めて長遠たり。而してこの沙門、即ち能く俄爾に、已に往還するを得。また神通の測量すべき難しと雖も、然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

迦葉即便ち種種の食を下すや、佛即ち呪願したまふ、

『婆羅門法中、火に奉事するを最と爲し、
一切の衆流中、大海をその最と爲し、
諸の星宿中に於て、月光をその最と爲し、
一切の光明中、日照を最と爲し、
諸福田中に於て、佛福田を最と爲す。
もし大果を求めんと欲せば、當に佛福田を供すべし。』

佛、食ひ已畢りて、却つて所止に還り、鉢を洗ひ、口を漱ぎ、樹下に坐したまふ。明日食時、また往いて佛を請ず。佛、『善哉』と言ひ、即ち共に倶に行き、既にその舍に到れば種種の食を下す。佛、即ち呪願したまふ。

『婆羅門法中。火に奉事するを最と爲し、
一切の衆流中、大海をその最と爲し、
諸の星宿中に於て、月光をその最と爲し、
一切の光明中、日照をその最と爲し、
諸福田中に於て、佛福田を最と爲す。
もし大果を求めんと欲せば、當に佛福田を供すべし。』

爾の時、世尊、呪願し已畢りて、即便ち食を取り、獨樹下に還り、食ひ畢りて心念に水を須む。釋提桓因、即ち佛の意を知り、大壯士の臂を屈伸するが如き頃に、天より來り下りて、佛前に到り、頭面に足を禮し、即便ち手を以て地を指して池を成す。その水淸淨にして、〔一八〕八功德を具す。如來即便ち得てこれを用ひ、澡漱既に畢りて、釋提桓因の爲に、種種の法を説きたまふ。釋提桓因、既に法を聞き已りて、歡喜踊躍し、忽然として現せず、天宮に還歸る。是の時、迦葉、

〔一八〕澄淨・淸冷・甘美・輕輭・潤澤・安和・除患・增益をいふ。但し、異說あり。

中食後に於て、林間を經行し、心に自ら念言す、『年少沙門、今日は食を受けて、樹下に還歸れり。我當に彼に往いてこれを看視るべし。』即ち佛所に詣り、忽ち樹の側に、泉水澄淨して、八功德を具ふる一大池あるを見、怪んで佛に問ふ、『この中、云何ぞ忽ちにこの池あるか。』佛即ち答へて言はく、『旦に汝が供を受け、この處に還歸り、食ひ訖りて、水を須め、澡漱洗鉢せんとするや、釋提桓因、己がこの意を識り、天上より來りて、手を以て地を指し、この池を成しぬ。』爾の時、迦葉、既に池水を見、また佛言を聞きて、心に自ら思惟す、『年少沙門、大威德あり、乃ち能く此の如く天瑞を致せるを感じぬ。然れども、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

爾の時、世尊、別に他日に於て、林間を經行し、糞穢中に諸幣帛あるを見、即便ち拾ひ取り、これを浣濯せんと欲し、心念に石を須む。釋提桓因、即ち佛意を知り大壯士の臂を屈伸する如き頃に、(一九)香山の上に往き、四方石を取りて、樹間に安置し、即ち佛に白して言く、『石上に就きて、衣を浣濯したまふべきなり。』佛また心に念じたまふ、『今應に水を須むべし。』釋提桓因、また香山に往き、大石槽を取り、清淨の水を盛りて、方石の所に置く。釋提桓因、所爲の事畢りて、忽然として現せず、天宮に還歸る。爾の時、世尊、浣濯已に竟りて、

【一九】香山（Gandhamādana）。無熱池の北にあり、池を隔てて、大雪山に對す。閻浮提洲の最高中心にして、漢の崑崙山に當るとぞ。

還つて樹下に坐したまふ。その時、迦葉、佛所に來至し、忽ち樹間に、四方石及び大石槽あるを見、卽ち自ら思惟す、『この中、云何ぞこの二物あるか。』心に驚怪を懷き、往いて佛に問ふ、『年少沙門、汝がこの樹間に、四方石及び大石槽あり。何より來れるか。』是に於て、世尊、卽ちこれに答へたまはく、『我向に經行して、地の幣帛を見、取りてこれを浣はんと欲し、心念にこれを須めしに、釋提桓因、わがこの意を知り、卽ち香山に往き、これを取りて來りぬ。』迦葉聞き已りて、未曾有と歎じ、自ら念言す、『年少沙門、是の如き大威神力あり、能く諸天を感ぜしむと雖も、然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

爾の時、世尊、また他日に於て、指地池に入りて、自ら洗浴し、洗浴し訖已りて、心念に出でんと欲するに、攀ぢ持つ所なし。池上に樹あり、[三〇]迦羅迦と名く。枝葉蔚映して、池上に臨む。樹神卽便ちこの樹枝を[三一]按じて、佛をして攀ぢて出でしめ、還つて樹下に坐したまふ。時に迦葉、佛所に來至し、忽然として樹の枝を曲げ蔭を垂るるを見、怪んで佛に問ふ、『この樹、何が故に枝を曲げ蔭を垂るるか。』佛卽ち答へたまはく、『我、向に於て、池に入りて、洗浴し、出づるに攀づる所なし。樹神、感を致して、わが爲にこれを曲げぬ。』是に於て、迦葉、樹の枝を曲ぐるを見、また佛の言を聞きて、未曾有と歎じ、自ら心に念ず、『年少沙

〔三〇〕 Kālaka
〔三一〕 按。おしくだす。

門、乃ち此の如き大威德力あり、能く樹神を感ぜしむ。然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

爾の時、迦葉、心に自ら念言す、『明日、摩竭提王・及び諸の臣民・婆羅門・長者・居士等・當に來りて我に就きて、七日の會を作すべし。年少沙門、もし、來りてここに在り、國王・臣民・婆羅門・長者・居士等、その相好、及び神通威德力を見ば、必ず當に我を捨てて、これに奉事すべし。願はくは、この沙門・七日中、わが所に來らざらんを』と。佛、その意を知ろして、卽便ち往いて北鬱單越に詣り、七日七夜、彼に停りて、現じたまはず。七日を過ぎ已り、集會畢訖り、國王辭し去るや、迦葉、心に念ず、『年少沙門、近く七日、わが所に來らざるは、善い哉、快い哉。我、今、既に集會の餘饌あり。以てこれに供へんと欲す。それ、もし、來らば、善く時宜を得ん。』是に於て、世尊、卽ちその意を知り、鬱單越より、譬へば、壯士の臂を屈伸する如き頃に、來りてその前に到りたまふ。時に、迦葉、忽ち如來を見て、心大に驚き喜び、卽ち佛に問うて言く、『汝、近き七日、何處に遊行して、相見えざりしぞ。』佛卽ち答へたまはく、『摩竭提王・及び諸臣民・婆羅門・長者・居士、七日中に於て、汝に就きて集會す。汝、近ごろ心に念じて、我を見るを欲せず。是の故に、我、北鬱單越に往きて、以て汝を避くるのみ。汝、今、心に念じて、我をし

て來らしめんと欲す。所以に、今、故に來りて汝に詣るなり。』迦葉、佛のこの言を說くを聞き已りて、心驚き毛竪ちて、この念を作す、『年少沙門、乃ちわが意を知る。甚だ奇特たり。然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

爾の時、世尊、また他日に於て、心に自ら思惟したまふ、『優樓頻螺迦葉、根緣漸く熟す。今は正にこれ調伏その時なり。』これを思惟し已り、卽ち尼連禪河に趣き、旣に河側に到りたまふ。この時、魔王、佛所に來詣し、佛に白して言く、『世尊、今は宜しく般涅槃すべし。今は宜しく般涅槃すべし。何を以ての故に。度すべき所のもの、皆悉く解脫せり。今は正にこれ般涅槃の時なり。』是の如く、三たび請ふや、世尊、其の時、魔王に答へたまはく、『我、今、未だこれ般涅槃の時ならず。所以は何。わが〔三〕四部衆、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷、未だ具足せざるが故に。度すべき所のもの、皆未だ究竟せず。諸外道衆、悉く未だ降伏せず』と。其の時、如來、またまた三たび答へたまふ。魔王聞き已りて、心に愁惱を懷き、卽ち天宮に還る。世尊、卽便ち尼連禪河に入り、神通力を以て、水を兩開せしめ、佛の所行の處、步步塵起り、兩面の水を、皆悉く湧き起らしむ。迦葉遙に見て、佛を沒溺せりと謂ひ、卽ち弟子と、船に乘りて來り、旣に

【三】衆は僧伽(Saṅgha)の譯。四部僧伽とは Bhikṣu, Bhikṣuṇī, Upāsaka, Upāsikā なり。前二は出家の男女、後二は在俗信者の男女。

河側に至り、佛の行きたまふ處、皆悉く塵の起るを見、その希有を歎じて、自ら念言す、『年少沙門、此の如き神通の力ありと雖も、然も、故、わが道の眞なるに如かざるなり。』

この時、迦葉、即ち佛に問うて言く、『年少沙門、船に上らんと欲するや不や。』佛言はく、『甚だ善し』と。時に世尊、即ち神力を以て、船底を貫きて入り、結加趺坐したまふ。迦葉、佛の船底より入りて、穿漏なきを見、その希有を歎じて、心に自ら念言す、『年少沙門、乃ち是の如き自在神力あり。然も、故、わが眞の(三三)阿羅漢を得たるに如かざるなり。』佛即ち語りたまはく、『迦葉、汝は阿羅漢にあらず。またまた、これ阿羅漢向にあらず。汝、今、何が故に、大我慢を起すぞ。』迦葉、此の如き語を説きたまふを聞く時、心に愧懼を懐き、身毛、皆竪ちて、自ら念言す、『年少沙門、善くわが心を知る』と。即ち佛に白して言く、『是の如き沙門、是の如き大仙、善くわが心を知る。唯願はくは、大仙、我を攝受したまへ。』佛即ち答へたまはく、『汝既に年耆百二十歳、またまた多く弟子眷屬あり、また國王臣民の敬ふ所と爲る。もし、決定してわが法に入らんと欲せば、先づ弟子と、熟共に論詳せよ。」迦葉答へて言く、『善い哉、善い哉、大仙の勅の如くせん。然れども、わが内心は、決定せざるに非ず。當に還つて弟子と論

【三三】Arhan。小乘の極聖位。正しくは應供と譯し、義によりて、殺賊又は不生と譯す。これに阿羅漢向・阿羅漢果を分つ。

ずべしと爲すのみ。』この語を作し已り、即ち本處に還り、諸弟子を集め、これに語つて言く、『年少沙門、ここに住して以來、その種種の神通變化を見るに、極めて奇特と爲す。智慧深遠に、性また安庠なり。我、今、便ちその法に歸依せんと欲す。汝等云何。』弟子答へて言く、『我等の知る所は、皆尊者の恩なり。年少沙門、既に尊者の歸信する所と爲る、豈虚あるべけんや。我等もまた諸の奇異あるを見ぬ。尊者もし、必ずその法を受けんと欲せば、我等もまた願はくは隨從歸依せん。』

時に、迦葉、諸弟子の、この言を作すを聞き已りて、即便ち相與に倶に佛所に詣り、佛に白して言く、『我及び弟子、今、定んで歸依す。唯、願はくは、大仙、時に我等を攝したまへ。』佛、『善來比丘』と言へば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即ち沙門と成る。爾の時、世尊、即ち所應に隨つて、廣く四諦を說きたまふ。時に、迦葉、說法を聞き已りて、遠塵離垢して、法眼淨を得、乃至、漸漸阿羅漢と成りぬ　爾の時、迦葉の五百の弟子、既にその師の已に沙門と爲れるを見て、心に願樂を生じて、また出家せんと欲し、即ち佛に白して言く、『我等の大師、已に大仙の攝受する所と爲り、今、沙門と成りぬ。我等もまた大師の學を願樂す。唯願はくは、大仙、わが出家を聽したまへ。』佛、『善來比丘』と言へば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、即ち沙門

と成る。是に於て、世尊、即ち爲に四諦の法輪を轉じたまふ。時に、五百の弟子、遠塵離垢して、法眼淨を得、(二四)須陀洹果を成じ、漸漸修行して、乃至、また阿羅漢果を得たり。爾の時、迦葉及び五百の弟子、その火に事ふる種種の具を以て、悉く皆尼連禪河に捐棄て、師徒相與に佛に隨つて去る。

爾の時、迦葉の二弟、一を(二五)那提迦葉と名け、二を(二六)伽耶迦葉と名く。各、二百五十の弟子あり。尼連禪河の側に在りて、兄の下流に居る。忽ちその兄、幷に弟子の、火に事ふる所の具の、悉く流を逐うて來るを見、心大に驚愕して、自ら念言す、『わが兄、今、何の不祥あるか。事火の具、今、水に隨つて流る。はた惡人の害する所に非ずや。』この時、二弟、奔り競つて相就き、共に議して言ふ、『わが兄、今や、もし、また、惡人の害する所と爲らざるか。諸物何に縁りてか水に從つて來れる。苦しい哉、怪しい哉。我等、宜しく速に共に兄の所に至るべし。』即便ち相與に流に泝りて上り、兄の住處に至るに、空寂にして人なし。心大に悲絶して、その兄及び諸弟子の所在處を知らず、四向推尋して、遇舊人を見、これに問うて言く、『わが仙聖兄、及び諸弟子、所在を知らず。汝これ

【二四】須陀洹（Srota-āpanna）。預流と譯す。三界の見惑を斷じて、初めて聖者の流類に入りし位をいふ。即ち四果の中の初果なり。
【二五】Nadī-kāśyapa
【二六】Gayā-kāśyapa

を見たりや不や。』舊人答へて言く、『汝が仙聖兄は、諸弟子と事火の具を棄て、皆悉く瞿曇の所に往いて、出家學道す。』この時、二弟、この語を聞き已りて、心大に懊惱し、未曾有と怪しみ、また自ら念言す、『云何ぞ阿羅漢道を棄てて、また更に他餘の法を求むるか。』卽便ち馳せ往いて、その兄の所に至り、到り已りて、兄及び眷屬の、鬚髮を剃除し、身に袈裟を披たるを見、卽便ち跪き拜して、兄に問うて言く、『兄は本既にこれ大阿羅漢、聰明智慧、與に等しきものなく、名十方に聞え、宗とし仰がざるなきに、何が故に今自らこの道を捨てて、還つて人に從つて學ぶか。これ小事にあらず。』

爾の時、迦葉、その弟に語りて言く、『我、世尊を見るに、大慈大悲を成就して、三事の奇特あり。一には、神通變化。二には慧心淸徹、決定して一切種智を成就す。三には、善く人根を知り、隨順攝受す。この事を以ての故に、佛法中に於て、出家修道す。今、また我が見る所の宗教、世論機辯を、國王臣民、能く折するものなしと雖も、然れども永く生死を絕つの法に非ず。唯、如來の演說すべき所のみ、能く生死を盡す。既に是の如き大聖の尊に値ふ。而して、自ら勵んで、かの高勝を師とせずんば、則ちこれ無心なり、また無眼と爲す。』二弟白して言く、『もし、兄の語の如くば、決定してこれ一切種智を成せるなり。わが知得する所は、皆これ兄の力、兄、今、

已に佛に從つて出家しぬ。我等もまた願はくは、兄に隨順して學せん。』卽ち各その諸弟子に語つて言く、『我、今、大兄に同じて、佛法中に於て、出家學道せんと欲す。汝が意云何。』時に、諸弟子、卽ち師に答へて言く、『我等が知見あるを得る所以は、皆大師の恩なり。大師、もし、佛法中に於て、出家せんと欲せば、また願はくは、隨從せん。』是に於て、那提迦葉・伽耶迦葉、各二百五十の弟子と與に、佛所に至り、頭面に足を禮し、佛に白して言く、『世尊、唯願はくは、慈哀もて我等を濟度したまへ。』佛、『善來比丘』と言へば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、卽ち沙門と成る。時に、那提迦葉・伽耶迦葉、また佛に白して言く、『我が諸弟子、今、皆、佛法に於て出家せんと欲す。唯願はくは、世尊、愍を垂れて聽許したまへ。』佛卽ち、『善哉善哉』と答へたまひ、爾の時、世尊、便ち、『善來比丘』と呼びたまへば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、卽ち沙門と成りぬ。

爾の時、世尊、卽ち那提迦葉・伽耶迦葉、及び諸弟子の爲に、大神變を現じ、またその心に應じて、爲に說法し、語りたまはく、『比丘、當に知るべし、世間は皆貪欲・瞋恚・愚癡の猛火の爲に燒炙せらる。汝等、往昔奉事せる三火を、既に能く絕棄しぬ。この外惑を除くも、今、三毒の火、尙猶身に在り。宜しく速にこれを滅すべし。』時に諸比丘、佛のこの語を聞きて、諸法中に於

て、遠塵離苦して、法眼淨を得。世尊、また爲に廣く四諦を說きたまふや、皆悉く阿羅漢果を得たり。

【頻王歸佛】爾の時、世尊、心に自ら念言す、『頻毗娑羅王、往昔、我に於て約誓の言ありき。「道、もし成ぜば、願はくは、先づ度せられよ」と。今日時至りぬ。宜しく彼に往きてその本願を滿ずべし。』この念を作し已りて、卽ち迦葉兄弟及び千の比丘と、眷屬に圍繞せられて、王舍城に往き、頻毗娑羅王の所に詣りたまふ。爾の時、頻毗娑羅王が、昔、優樓頻螺迦葉に給せる聚落のもの、既に迦葉及びその弟子の、悉く沙門と爲れるを見て、卽ち還つて王に啓し、此の如き事を說く。王、諸臣と、既にこの語を聞きて心大に驚怕し、默然として聲なし。時に外人民、この語を聞き已り、各相謂つて言く、『優樓頻螺迦葉は、智慧深遠、與に等しきものなく、年また耆老にして、已に阿羅漢を得たり。云何ぞ反りて瞿曇の弟子と爲らんや。終にこの理なし。乃ち說いて沙門瞿曇が、弟子と爲れりと言ふべきのみ。』

爾の時、世尊、漸く王舍城に近づき（二七）杖林に住まりたまふ。時に、優樓頻螺迦葉、卽便ちその常に使ふ所の人を遣はし、頻毗娑羅王に白して言く、『我、今、佛法中に於て、出家修道し、今、佛に隨從して來り、杖林に至りぬ。大王、宜しく先づ禮拜供養したまふべし。』王、來信の、

【二七】Yaṣṭhivana（ヤスティヴナ）

この言を説くを聞き已りて、方に決定して優樓頻螺迦葉の、佛弟子たるを知り、卽ち勅して駕を嚴しめ、諸大臣・婆羅門、及び人民衆と、佛所に往詣し、杖林の外に至りて、王卽ち輿を下り、儀飾を除却し、歩んで佛前に至る。爾の時、空中に天あり、王に語りて言く、『如來、今、この林中に在す。これ諸天人の最上福田なり。大王、宜しく應に恭敬供養したまふべし。また應に國中の人民に宣示して、皆悉くそをして如來を供養せしめまつるべし。』時に、王、既にかの天語を聞き已りて、心大に歡喜し、倍踊躍を增し、便ち林中に進み、遙に如來の相好莊嚴を見、また優樓頻螺迦葉兄弟三人、幷にその弟子の前後に圍繞すること、盛滿の月が、衆星の中に處するが如くなるを見て、歩歩踊悦して、自ら勝ふる能はず。既に佛所に至り、頭面に足を禮し、佛に白して言く、『我は、これ、(二八)月種、摩竭提王、名は頻毗娑羅。世尊知りたまふや不や。』佛卽ち答へたまはく、『善哉、大王。』是に於て、頻毗娑羅王、却いて一面に坐す。時に、婆羅門、及び大臣・諸人民衆、皆悉く座に就く。

爾の時、世尊、既に來衆の皆安坐し已るを見て、卽ち梵音を以て、頻毗娑羅王を慰問して言はく、『大王、四大常に安隱なりや不や。民務を統理して、乃ち勞する無きや。』王卽ち答へて言く、『世尊の恩を蒙りて、幸に安隱なるを得。』爾の時、頻毗娑羅王、及び餘の大學婆羅門・長者居士・

【二八】チャンドラ・ヴンシャ Candra vaṁśa

大臣・人民、既に迦葉の佛弟子と爲れるを見て、自ら相謂つて言く、『嗚呼如來は大神力あり、智慧深遠不可思議なり。乃ち能く此の如きの人を伏して、以て弟子と爲せりとは。』爾の時、また、諸餘の人衆あり、心に自ら念言す、『優樓頻螺迦葉、大智慧あり、普く世人の爲に歸信せらる。云何ぞ沙門瞿曇の爲に、弟子と作るべきか』とて、心に狐疑を懷く。爾の時、世尊、かの心念を知り、卽ち迦葉に語りたまふ、『汝、今、宜しく應に、諸の神變を現ずべし。』時に、迦葉、卽ち虛空に昇りて、身上より水を出し、身下より火を出し。身上より火を出し、身下より水を出し。或は大身を現じて、虛空中に滿ち。或はまた小を現じ。或は一身を分ちて、無量身と爲し。或は地に入り、還つてまた踊出し、虛空中に於て、行住坐臥するを現ず。擧衆見已りて、未曾有と歎じ、皆悉く第一大仙と稱へ言ふ。爾の時、迦葉、この變を現じ已りて、卽ち空より下りて、佛前に到り、頭面に足を禮し、佛に白して言く、『世尊は實にこれ天人の師、我は、今、實にこれ尊の弟子なり。』是の如く、三たび說くや、佛卽ち答へたまはく、『是の如く、是の如し。迦葉よ、汝、我が法に於て、何等の利を見てか、火具を棄捨して、出家せるぞ。』是に於て、迦葉、偈を以て答へて言ふ、

『我昔日の中に於て、火に事ふる所の功德もて、

天人の中に生れ、五欲の樂を受くるを得、
恒に是の如く輪轉して、生死の海に沒しぬ。
我この過患を見て、所以にこれを棄捨せり。
またまた火に事ふるの福は、天人中に生るるを得て、
貪・恚・癡を增長す。是の故に我は遠離せり。
またまた火に事ふるの福は、將來の生を求めんが爲なり。
既已に生あるが故に、必ず老病死あり。
已に此の如き事を見て、是の故に火法を棄てぬ。
施會と苦行を修すると、及び火に事ふるの福とは、
梵天に生るるを得と雖も、これ究竟の處に非ず。
この因緣を以ての故に、所以に火に事ふるを棄てぬ。
我如來の法を見るに、生老病死を離れて、
究竟解脫の處なり。是の故に今出家す。
如來は眞に解脫して、諸天人の師たり。

この因緣を以ての故に、大聖尊に歸依しまつる。
如來・大慈悲あり、種種の方便を現じ、
及び諸の神通力もて、以て我を引導したまふ。
云何ぞまた應に、火法に奉事すべきか。』

爾の時、頻毗娑羅王、及び諸の大衆、優樓頻螺迦葉の、この偈言を說くを聞きて、心大に歡喜し、如來の所に於て、深く敬信を生じ、如來の、必ず一切種智を成じたまへるを決定して知るを得、迦葉のこれ佛弟子なるを審に知りぬ。爾の時、諸天、虛空中に於て、衆の天花を雨らし、妙伎樂を作し、異口同音に唱へて言く、『善い哉、優樓頻螺迦葉、快くこの偈を說けり。』

爾の時、世尊、諸大衆の、心意決定して、また狐疑なきを知ろし、また、その根の、皆已に成熟せるを觀じたまひ、卽ち爲に說法したまふらく、『大王當に知るべし、この(三九)五陰の身は、識を以て本と爲す。識に因るが故に、意根を生じ、意根を以ての故に、色を生ず。而して、この色法は、生滅して住せず。大王、もし、能く、是の如く觀ぜば、則ち能く身に於て、善く無常を知

【三九】 色・受・想・行・識をいふ。色は物質現象、受・想・行・識は、精神現象なり。識に眼・耳・鼻・舌・身・意の六あり。眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が、色・聲・香・味・觸・法の六境に接觸して生ずる處なり。

らん。此の如く身を觀じて、身相を取らずば、則ち能く(三〇)我及び我所を離れん。もし、能く、色の、我・我所を離るるを觀ぜば、卽ち色の生ずるは、便ちこれ苦の生ずるを知り、もしは、色の滅するは、便ちこれ苦の滅するを知らん。もし、人、能く此の如き觀を作せば、これを名けて解と爲す。もし、人、この觀を作す能はざれば、これを名けて縛と爲す。(三一)法は、本、我及び我所なし。倒想を以ての故に、横に我及び我所ありと計するも、實の法あるなし。もし、能くこの倒惑の相を斷ずれば、則ちこれ解脫なり。』爾の時、頻毗娑羅王、心に自ら思惟す、『もし、衆生の、我ありと言ふを、名けて縛と爲し、一切衆生は、皆悉く我なしと謂はば、既に我あるなくば、誰か果報を受くるぞ。』爾の時、世尊、かの心念を知ろして、卽ちこれに語りて言はく、『一切衆生の、爲す所の善惡、及び受くる果報は、皆我が造にあらず、また我が受にあらず。而して、今、現に、善惡を造作し、果報を受くるものあり。大王諦かに聽きたまへ。當に王の爲に說くべし。大王、ただ情・塵・識の合するを以て、境に於て染を生じ、累想滋茂し、この緣を以ての故に、生死に馳流して、備に苦報を受くるも、もし、境に於て染なく、その累想を息めば、則ち解脫を得るなり。

【三〇】我(Ātman)は、心的實在の總稱。我所は我が所有物の意にて、我に附屬し、我によりて執著せらるる事物をいふ。

【三一】法(Dharma)は、有形無形一切の事物の稱。自性を持ちて、其中に一貫する軌則あるを以てなり。

情・塵・識の三事の因緣を以て、共に善惡を起し、及び果報を受くるのみ、更に別の我なし。譬へば、火を鑚るに、手の燧を轉ずるに因りて、火の生ずるあるを得るも、然もかの火性は、手より生ぜず、及び燧より出でず、またまた手及び燧鑚を離れざるが如し。かの情・塵・識も、またまた是の如し。』

時に、頻毗娑羅王、また自ら思惟す、『もし、情・塵・識の和合を以ての故に、善惡あり、果報を受くとせんか、便ち常に合すと爲さば、離絶すべからず、もし、常に合せずば、これ則ち斷と爲す。』爾の時、世尊、王の心念を知りて、卽便ち答へたまはく、『この情・塵・識は、不常不斷なり。何を以ての故に。合するが故に、不斷なり、離るるが故に不常なり。譬へば、地水を緣とし、かの種子を因として、芽葉を生ずるに、種子旣に謝す(るが故に)、常と名くるを得ず。芽葉を生ずるが故に、斷と名くるを得ず。斷常を離るるが故に、中道と名くるが如し。三事の因緣も、また、是の如し。』爾の時、頻毗娑羅王、この法を聞き已りて、心開意解し、諸法中に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得。八萬那由他の婆羅門・大臣・人民も、また諸法に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得。九十六萬那由他の諸天、また諸法に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得たり。

時に、頻毗娑羅王、卽ち座より起ち、佛足を頂禮し、合掌して佛に白す、『快き哉、世尊、能

く轉輪王の位を捨てて、出家學道し、一切種智を成じたまへること。我、昔、愚癡にして、世尊を留めて、小國を臨治せんを欲せり。今、慈顏を觀、また正法を聞きて、方に慚愧を懷き、昔過を追悔す。唯、願はくは、世尊、大慈悲を以て、わが懺悔を受けたまへ。我、昔日に於て、世尊に白して言く、もし、道を得ん時、願はくは、先づ我を度したまへと。今日、始めて宿願を成し遂ぐるを蒙り、世尊の恩を荷ひて、道跡を履むを得たり。我、今日より、世尊及び比丘僧を供養して、〔三二〕四事をして、乏しきあらざらしむべし。唯、願はくは、世尊、〔三三〕竹園に住して、摩竭提國をして、長夜安きを獲しめたまはんを。』佛即ち答へたまはく、『善い哉、大王、乃ち能く〔三四〕三不堅法を捨てて。〔三五〕三堅報を求むること。當に王の願をして、滿足を得しむべし。』時に頻毗婆羅王、佛の、請を受けて竹園に住したまふを知り已りて、佛足を頂禮し、辭退して去る。王、城に還り已りて、即ち諸臣に勅して、竹園に於て、諸堂舍を起さしめ、種種に莊飾して、極めて嚴麗ならしめ、繒の幡蓋を懸け、散花燒香し、悉く皆辦じ已りて、即便ち駕を嚴しめ、往いて佛所に至り、頭面に足を禮して、佛に白して言く、『竹園〔三六〕僧伽藍、修理已に畢りぬ。唯、願はくは、世

〔三二〕 異說あり。或は房舍・衣服・飲食・華香とし、或は衣服・飲食・臥具・湯藥とし、或は、衣服・飲食・散華・燒香とす。

〔三三〕 Veṇuvana ヴエーヌヴナ

〔三四〕 身・命・財。

〔三五〕 無極身・無窮命・無盡財。

〔三六〕 Saṃghārāma サムガーラーマ。衆園、又は僧房と譯す。

尊、比丘僧と與に、我を哀愍するが故に、往いて彼に住したまへ。』爾の時、世尊、諸比丘及び無量の諸天と、前後に圍繞せられて、王舍城に入りたまふ。如來の門閫を蹈みませる時に當りて、城中の樂器、鼓せずして自ら鳴り、門の狹きは更に廣く、門の下れるは更に高く、一切の丘墟、皆悉く平坦に、臭穢の塵垢、自然に香淨に、聾者は聽くを得、瘂者は能く言ひ、盲者は視るを得、狂者は正を得、拘癖の疾病は、普く皆除癒し、枯木花を發き、腐草榮秀し、涸池瀾を增し、香風淸く靡き、鳳・孔雀・翠・鳧・雁・鴛鴦、異類の衆鳥、繽紛として翔集し、和雅の音を出すなど、是の如き等の種種の祥瑞あり。既に城に入り已りて、頻毗娑羅王と、倶に竹園に往きたまふに、爾の時、諸天、虛空中に滿ちぬ。時に、王、卽便ち手に寶餅を執り、盛るに香水を以てし、如來の前に於て、この言を作す、『我、今、この竹園を以て、如來及び比丘僧に奉上る。唯、願はくは、哀愍して、わが爲に納受したまへ。』この言を作し已りて、卽便ち水を捨てぬ。爾の時、世尊、默然として、これを受け、偈を說いて呪願したまふ、

『もし人能く布施すれば、慳貪を斷除す。もし人能く忍辱なれば、永く瞋恚を離る。
もし人能く善を造せば、則ち愚癡に遠かる。能くこの三行を具すれば、速に般涅槃に至る。
もし貧窮の人あり、財の布施すべきなくば、他の施を修するを見ん時、隨喜の心を生ぜよ。

隨喜の福報は、施と等しくして異るなし。』
爾の時、婆羅門・大臣・及び餘の人民、王の如來に僧伽藍を施し奉れるを見て、皆悉く踊躍して、隨喜の心を生じぬ。爾の時、頻毗娑羅王、僧伽藍を施し已りて、心大いに歡喜し、頭面に足を禮し、退いて所住に還る。閻浮提中、諸王の佛を見る、頻毗娑羅王を、最もその首と爲し、諸の僧伽藍にて、竹園僧伽藍は、最もその初たり。

【舍利弗目連】 爾の時世尊、諸比丘と、竹園僧伽藍に住したまふ。時に、王舍城中に、二婆羅門あり、聰明利根にして、大智慧あり、諸の書論に於て、通達せざるなく、辯才論議に、能く摧伏する莫し。一の姓は(三七)拘栗、名は(三八)優波室沙。母の名(三九)舍利なるが故に、世擧りて喚んで(四〇)舍利弗と爲す。二の姓は(四一)目揵連、名は目揵羅夜那。各一百の弟子あり。普く國人の爲に宗とし仰がる。二人互に共に以て親友たり。極めて相愛重し。咸共に誓つて言ふ、『もし、先づ諸の妙法を聞くを得ば、要ず相開悟して、悋惜を得るなけん。』爾の時、(四二)阿捨婆耆比丘、衣を著け、鉢を持して、村に入りて乞食す。善

【三七】 Kolita
【三八】 Upatiśya
【三九】 Śārī
【四〇】 Śāriputra
【四一】 Maudgalyāyana 普通には、拘栗を以て目連の名とするに關らず、此經は之を舍利弗の姓とす。また同一の目連を以て、姓とし名とするは、誤なるや明なり。
【四二】 Aśvajit。馬勝と譯す。五比丘の一人。

く諸根を攝し、威儀庠序なり。路人見るもの、皆恭敬を生ず。時に、舍利弗、忽ち路次に於て、阿捨婆耆が、善く諸根を攝し、威儀庠序なるに逢ひ見る。かの舍利弗、善根既に熟す。阿捨婆耆を見て、心大に歡喜し、踊躍身に遍ねく、停歩瞻視して、暫くも捨てず、卽便ち問うて言く、『わが意、汝を觀るに。新出家に似たり。而も能く此の如く諸情根を攝することよ。問ふ所あらんと欲す。唯願はくは、答へられよ。汝が今の大師、その名は何等ぞ。敎誡する所、何の法をか演說する。』時に、阿捨婆耆、卽便ち安庠として、これに答へて言ふ、『わが大師は、一切種智を得たまふ。これ甘蔗種、天人の師なり。相好・智慧・及び神通力、與に等しきものなし。我既に年幼、學道日淺し。豈能く如來の妙法を宣說せん。然れども知る所を以て、汝が爲に說くべし』とて、卽ち偈を說いて言く、

『一切諸法の本は、因緣より生じて主なし。
もし能くこれを解せば、則ち眞實の道を得ん。』

時に、舍利弗、阿捨婆耆の、この偈を說くを聞き已り、卽ち諸法に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得、道跡を見已りて、心大に踊躍し、身の諸情根、皆悉く悅豫し、自ら念言す、『一切衆生悉く我に著し、所以に輪廻して、生死に在り。もし、我想を除けば、卽ち我所に於て、また

皆離るを得ること、譬へば、日光の、能く闇を破るが如し。無我の想も、またまた是の如く、悉く能く我見の闇障を破る。我、昔より來、修學すべき所、皆、邪見と爲し、唯、今の得る所のみ、これ正眞の道なり。」この念を作し已りて、阿捨婆耆の足を禮し、所止に還歸す。時に、阿捨婆耆、前に至りて食を乞ひ、訖りて竹園に還りぬ。

時に、舍利弗、還つて住處に至る。時に、目揵羅夜那、善根已に熟し、舍利弗の諸根寂定に、威儀庠序にして、顏容の怡悅、常日に異るを見て、卽便ち問うて言く、『我、今、汝を見るに、諸根顏貌、常と異るあり。必ず當に已に甘露の妙法を得たるべし。我、昔、汝と共に誓言を結べり。「もし、妙法を聞かば、要ず相啓悟せん」と。汝が得る所あるもの、願はくは我が爲に說け。』時に、舍利弗、卽便ち答へて言く、『我、今、實に已に甘露の法を得たり。』目揵羅夜那、聞き已りて、歡喜無量、歎じて言く、『善哉、時に我が爲に說け。』舍利弗言く、『我、今、行いて一比丘に逢へり。衣鉢を執持し、村に入りて食を乞ふ。諸根寂靜にして、威儀庠序なり。我、既に見已りて、深く恭敬を生じ、既にその所に到り、これに問うて言く、「我が意、汝を觀るに、新出家に似たり。而も能く此の如く、諸情根を攝す。問ふ所あらんと欲す。唯願はくは、答へられよ。汝が今の大師、その名は何等ぞ。教誡する所、何の法をか演說する。」時に、阿捨婆耆、卽便ち安庠

として答へらる。言く、「我が大師は、一切種智を得まします。これ甘蔗の種、天人の師なり。相好・智慧・及び神通力、與に等しきものなし。我、既に年幼、學道日淺し。豈能く如來の妙法を宣說せん。然れども、知る所を以て、汝が爲に說くべし」とて、卽ち偈を說いて言く、

「一切諸法の本は、因緣より生じ主なし。もし能くこれを解せば、卽ち眞實の道を得ん」と。』

爾の時、目揵羅夜那、舍利弗の、この語を說き已るを聞きて、卽ち諸法に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得ぬ。

爾の時、舍利弗・目揵羅夜那と、各、佛法に於て、甘露を得已りて、共に相謂つて言く、『我等已に佛法に於て、各利益を得たり。今、宜しく共に佛所に往いて、出家を求索むべし。』この語を作し已りて、各、弟子を喚び、これに語つて言く、『我等、今、已に佛法に於て、甘露味を得たり。唯この法のみ、これ出世の道なり。我、今、往いて佛に出家を求めんと欲す。汝等云何。』諸弟子等、その師に答へて言く、『我等、今、知見する所あるは、皆大師の力なり。師もし、出家したまはば、我悉く隨從せん。』是に於て、二人、卽ち二百の弟子を將て、竹園に往詣す。既に門に入り已りて、遙に如來の相好莊嚴と、諸比丘衆の前後に圍繞するとを見て、心大に歡喜し、踊躍身に遍ねし。爾の時、世尊、舍利弗及び目揵羅夜那が、諸弟子と、相隨つて來るを見已りて、

諸比丘に告げたまふ、『汝等當に知るべし、今、この二人・諸弟子を將て、我が所に來至して、出家を欲求す。一を舍利弗と名け、一を目揵羅夜那と名く。當にわが法中に於て、上弟子たるべし。舍利弗は、智慧中に於て、最第一たり。目揵羅夜那は、神通中に於て、また無上たり。』

佛所に至り已りて、頭面に足を禮して、佛に白して言く、『我、佛法に於て、已に道跡を得、出家せんを樂ひ欲す。願はくは、時に聽許したまへ。』爾の時、世尊・卽便ち『善來比丘』と喚びたまへば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、卽ち沙門と成りぬ。時に、かの二百の弟子、既にその師の沙門と成れるを見已りて、倶に佛に白して言く、『我等もまた師に隨つて出家せんを欲す。唯願はくは、世尊、愍を垂れて聽許したまへ。』是に於て、世尊・卽ちまた、『善來比丘』と喚びたまへば、鬚髮自ら落ち、袈裟身に著きて、卽ち沙門と成る。爾の時・世尊、舍利弗、及び目揵羅夜那の爲に、廣く四諦を說きたまふや、二人卽ち阿羅漢果を得たり。またまた、かの二百の弟子の爲に、廣く四諦を說きたまふや、卽ち諸法に於て、遠塵離垢して、法眼淨を得、乃至・また阿羅漢果を成ず。爾の時、世尊、卽ち一千二百五十の比丘、皆大阿羅漢なると與に、摩竭提國に於て、廣く衆生を利したまふ。諸比丘中、目揵羅夜那と名くる多くの人あり。世尊、故にこの目揵羅夜那を名けて、大目揵羅夜那と爲したまふ。

【度大迦葉】爾の時、偸羅厥叉國に、一婆羅門あり、名けて(四三)迦葉といふ。三十二相あり。聰明智慧にして、(四四)四毗陀經を誦し、一切の書論、通達せざるなし。極大巨富にして、善能く布施す。その婦、端正、擧國無雙なり。二人自然に欲想あるなく、乃至、また同じく一室に宿せず。往昔に於て、久しく善根を種ゑたるが故に、家に在りて五欲の樂を受くるを樂はず。日夜思惟して、世間を厭離し、精勤に出家の法を求め訪ね、是の如く推尋するも、得る能はざるや、卽ち家事を捨て、山林に入り、心に念じ口に言ふ、『諸佛如來、出家修道す。我、今、また當に佛に隨つて出家すべし』と。便卽ち金縷にて織り成せる珍寶の衣、價値百千兩金なるを脱ぎ去りて、壞色の(四五)納衣を著、自ら鬚髮を剃る。

爾の時、諸天、虛空中に於て、既に迦葉の自ら出家せるを見るや、これに語つて言ふ、『善男子、甘蔗の種族、白淨王の子、その名薩婆悉達、出家學道して、一切種智を成じ、世擧りて號して(四六)釋迦牟尼佛と爲す。今、千二百五十の阿羅漢と、王舍城竹園中に在りて住したまふ。』爾の時、迦葉、天語を聞き已りて、歡喜踊躍して、身毛皆竪ち、卽便ち往いて竹園僧伽藍に趣く。爾の時、世尊、その當に來るべきを知り、

【四三】Kāśyapa（カーシャパ）

【四四】Ṛg-veda（リグ・ヴエーダ）Sāma-veda（サーマ・ヴエーダ）Yajur-veda（ヤジユル・ヴエーダ）Atharva-veda（アタルヴ・ヴエーダ）

【四五】或は衲衣に作る。不用の布片にて、縫ひつづり合せたる僧衣。故に糞掃衣といふ。

【四六】Śākya-muni-buddha（シャーキャ・ムニ・ブツダ）。釋迦は能仁、牟尼は寂默、佛は覺者と譯す。

自ら思惟して、その善根を觀じ、『宜しく往いてこれを度すべし』との念を作したまひ、卽ち行いてこれを逆へ、子兜婆に到りて、迦葉に逢ひたまふ。時にかの迦葉、既に相好威儀の特に尊きを見、卽便ち合掌して、この言を作さく、『世尊は實にこれ一切種智、實にこれ慈悲もて衆生を濟ひたまふもの、實にこれ一切の所歸依處なり』と。卽便ち五體を地に投じ、佛足を頂禮して、佛に白して言く、『世尊は、今これわが大師なり。我はこれ弟子なり』と。是の如く三たび說く。佛卽ち答へたまはく、『是の如し、迦葉。我はこれ汝が師、汝はこれわが弟子。』佛また語りたまはく、『迦葉當に知るべし、もし人、實に一切種智に非ずして、汝を受けて弟子と爲さんと欲せば、頭則ち破裂して、以て七分と爲らん。』またまた告げたまはく、『善い哉、迦葉。快き哉迦葉。當に知るべし、五受陰の身はこれ大苦聚なるを。』時に迦葉、この言を聞き已りて卽便ち諦を見、乃至阿羅漢果を得たり。爾の時世尊、卽ち迦葉と倶に、竹園に還りたまふ。この迦葉、大威德あり、智慧聰明なるを以て、是の故にこれを名けて大迦葉と爲す。

爾の時、世尊、諸比丘に告げたまふ、『普光如來の、世に出興したまへる時の、善慧仙人は、豈異人ならんや。卽ち我が身、これなり。緣路に遇へる五百の外道の、共に論議し、及び隨喜せる所のものは、今、この會中の優樓頻螺迦葉兄弟、及びその眷屬の千比丘、これなり。時に花を賣

れる女は、今の耶輸陀羅、これなり。善慧仙人の髮、地に布ける時、傍に二人ありて、佛前の地を拂ひ、及び二百人の隨喜して助けたるは、今、この會中の舍利弗・大目揵羅夜那、幷に二百の弟子比丘、これなり。善慧仙人の、髮を以て地に布けるを、悉く皆隨喜して讃歎せる、虛空の諸天は、我初めて得道して、鹿野苑中に、始めて法輪を轉せる(時の)八萬の天子、及び頻毗娑羅王の將ゐたる眷屬、八萬那由他の人、及び九十六萬那由他の天これなり。

汝等當に知るべし、過去の種因は、無量劫を經るも、終に磨滅せざるを。我、往昔に於て、一切の善業を精勤に修習し、及び大願心を發して、退轉せざりしが故に、今に於て一切種智を成就するを得たり。汝等、宜しく應に道行を勤修して、懈怠を得るなかるべし。』

時に、諸の比丘、佛の所說を聞き、歡喜頂戴し、禮を作して退きぬ。

國譯過去現在因果經　終

佛垂般涅槃略說教誡經解題

姚秦三藏法師鳩摩羅什譯

此の經は釋迦牟尼世尊が、一代の教化を終へて、將に入滅せんとするに臨んで、垂教し給へる慈誨である。卽ち佛陀の遺言を編輯結集せる暖皮肉である。

されば先づ序分として、最初の轉法輪から、最後の說法に於いて、須跋陀羅を濟度し給ひ、出世の使命ここに訖りて、鶴林に於いて入滅せんとするに際し、諸弟子の爲に、略して法要を說き給ふ因緣を擧げてある。

次に正宗分卽ち本論に入りて、邪業を誡め、五根の主なる心の抑制すべきを誡め、多く求むるの不可なる理由を說き、睡眠を誡め、瞋恚を誡め、憍慢を誡め、諂曲を誡むるの七項を擧げて、世間的功德の修習すべき大旨を勸說してある。而して更に進一步して、出世間的功德の、如何にして成就せらるべきかにつき、少欲と、知足と、遠離と、精進と、不忘念と、禪定と、智慧と、究竟功德との八大人覺を演べ。次に甚深の功德を顯示せんが爲に、如來の說法を修身の軌範として、何日如何なる場合

と雖も、之を遵守し精進辨道すべきを勸め、若し如來の慈敎に隨はざるものは、恰も良醫の藥を與ふるに、それを服用せざるは醫の咎にあらざるが如しと說き、次に如來一代の說敎の骨髓たる苦集滅道の四諦の敎義に關して、疑を懷くものは疾く之を問へと勸め、以て入證決定せしめんとの大慈大悲の懇切なる垂訓をなし、次に生者必滅・會者定離は人生不可免の法則なれば、徒らに此の身に愛著して、萬年の生存を望むも、何の益する所なき旨を道破し、最後に一切世間の動不動の法は、皆悉く敗壞不安の相なれば、天下一物の執著するに足るものなき、無我の大道を演べ、以て是れ我が最後の敎誨なりと結び給うてある。是の故に吾等は此の遺敎經を佛陀の皮肉骨髓として、拜戴し受持せねばならぬ。

若し夫れ此の經は大乘敎に屬すべきものなるか、將た又小乘敎に屬すべきものなるか、涅槃經の一部を構成せるものなるか、或は涅槃經とは沒交涉の敎勅なるかなど云ふ問題は、敎理發達史幷に本文批評上の比較研究に屬すべきことで、今ここに縷述するの必要を認めないから省略にして置く。

譯者　山上曹源識

國譯佛垂般涅槃略說教誡經（一）

釋迦牟尼佛初めに法輪を轉じて阿若憍陳如を度し、最後の說法に須跋陀羅を度し給ふ。度すべき所の者は皆已に度し訖つて、娑羅雙樹の間に於て將に涅槃に入りたまはんとす。是の時中夜寂然として聲無し、諸の弟子の爲めに略して法要を說き給ふ。

『汝等比丘、我が滅後に於て當に（二）波羅提木叉を尊重し珍敬すべし。闇に明に遇ひ、貧人の寶を得るが如し。當に知るべし、此は則ち是れ汝等が大師なり。若し我世に住するとも、此に異ること無けん。淨戒を持たん者は販賣貿易し、田宅を安置し、人民・奴婢・畜生を畜養することを得ざれ。一切の種植及び諸の財寶皆當に遠離すること火坑を避くるが如くすべし。草木を斬伐し、土を墾し地を掘り、湯藥を合和し、吉凶を占相し、星宿を仰觀し、盈虛を推步し、曆數算計することを得ざれ。皆應せざる所なり。身を節し時に食して淸淨にして自活せよ。世事に參預し、使命を通致し、呪術し仙藥し、好みを貴人に結び親厚媟慢することを得ざれ。皆作に應せず。當に自ら端心正念にして度を求むべし。瑕疵を包藏し、異を顯し衆を惑はすことを得ざれ。（三）四供養に

【一】普通には略して佛遺教經又は單に遺經と云ふ。
【二】波羅提木叉(Prātimokṣa)(プラティモークシャ)譯して別解脫と云ふ、一戒を持てば一解脫を得るが故にこの名あり。
【三】四供養とは飲食・衣服・臥具・醫藥の四種の供養なり。

於て量を知り足ることを知るべし。趣に供事を得て、畜積すべからず。此れ則ち略して持戒の相を說く。戒は是れ(四)正順解脫の本なり、故に波羅提木叉と名く。此の戒に依因すれば、諸の禪定及び滅苦の智慧を生ずることを得。是の故に比丘當に淨戒を持つて毀缺せしむること勿るべし。若し人能く淨戒を持すれば、是れ則ち能く善法あり。若し淨戒無ければ、諸善の功德皆生ずることを得ず。是を以て當に知るべし、戒を第一安隱功德の所住處と爲すことを。

汝等比丘、已に能く戒に住す、當に(五)五根を制すべし。放逸にして五欲に入らしむること勿れ。譬へば牧牛の人の杖を執つて之を視せしめて、縱逸にして人の苗稼を犯さしめざるが如し。若し五根を縱にすれば、唯五欲の將に涯畔無うして制す可らざるのみにあらず、亦惡馬の轡を以て制せざれば、將當に人を牽て坑陷に墜さんとするが如し。劫害を被るが如くんば、苦一世に止まる。五根の賊は、禍殃累世に及ぶ、害たること甚だ重し、愼まずんばあるべからず。是の故に智者は制して而も疑はず。之を持すること賊の如くにして縱逸ならしめざれ。假令之を縱にするとも、皆亦久しからずして其磨滅を見ん。此の五根は心を其主と爲す、是の故に汝等當に好く心を制すべし。心の畏るべきこと毒蛇・惡獸・怨賊よりも甚し。大火の越逸なるも、未だ喩とするに足らず。譬へば人有り、手に蜜器を執つて、動轉輕躁して但蜜のみを見て深坑を見ざ

【四】正順解脫とは煩惱の束縛をぬけ出でて正しき天然自然の法に隨順して行くことを云ふ。

【五】五根とは眼・耳・鼻・舌・身なり。眼にて見、耳にて聞き乃至身にて觸ろにより、種種樣樣なる煩惱妄想を生ず、故に五根を制せざるべからず。

るが如し。又狂象の鉤無く猿猴の樹を得て騰躍踔躑して禁制すべきこと難きが如し。當に急に之を挫いで放逸ならしむること無かるべし。此の心を縱にすれば人の善事を喪ふ。之を一處に制すれば事として辨ぜずと云ふことなし。是の故に比丘當に勤め精進して汝が心を折伏すべし。

汝等比丘、諸の飲食を受けては當に藥を服するが如くすべし。好きに於ても惡きに於ても增減を生ずること勿れ。趣に身を支ふることを得て以て飢渴を除け。蜂の花を採るに但其の味のみを取つて色香を損せざるが如し。比丘も亦爾なり。人の供養を受けては、趣に自ら惱を除け。多く求めて其の善心を壞することを得ること無かれ。譬へば智者の牛力の堪ふる所の多少を籌量して、分に過して以て其の力を竭さしめざるが如し。

汝等比丘、晝は卽ち勤心に善法を修習して、時を失せしむること勿れ。初夜にも後夜にも亦廢することと有ること勿れ。中夜に誦經して以て自ら消息せよ。睡眠の因緣を以て一生空しく過して、所得無からしむること無かれ。當に無常の火の諸の世間を燒くことを念じて早く自度を求むべし。睡眠すること勿れ。諸の煩惱の賊、常に伺つて人を殺すこと、怨家よりも甚だし。安んぞ睡眠して自ら警寤せざる可けんや。煩惱の毒蛇睡つて汝が心にあり。譬へば黑蚖の汝が室に在つて眠るが如し。當に持戒の鉤を以て早く之を屛除すべし。睡蛇旣に出なば乃ち安眠すべし。出ざるに而も眠るは是れ無慚の人なり。慚恥の服は諸の莊嚴に於て最も第一なりとす。慚は鐵鉤の如く、能く人の非法を制す。是の故に比丘

常に當に慚恥すべし、暫くも替つることを得ること無かれ。若し慚恥を離るれば、則ち諸の功德を失す。有愧の人は則ち善法あり。若し無愧の者は諸の禽獸と相異ること無けん。

汝等比丘、若し人あり、來つて節節に支解するも、當に自ら心を攝めて瞋恨せしむること無かるべし。亦當に口を護つて惡言を出すこと勿るべし。若し恚心を縱にすれば則ち自ら道を妨げ功德の利を失す。忍の德たること、持戒苦行も及ぶこと能はざる所なり。能く忍を行ずる者は乃ち名けて有力の大人となすべし。若し其れ惡罵の毒を歡喜し忍受して、甘露を飲むが如くすること能はざる者は、入道智慧の人と名けず。所以は何んとなれば、瞋恚の害は則ち諸の善法を破り好名聞を壞る。今世後世の人見んと喜はず。當に知るべし、瞋心は猛火よりも甚だし。常に當に防護して、入ることを得しむること勿るべし。功德を劫むるの賊は瞋恚に過ぎたるは無し。白衣は受欲非行道の人なり、法として自ら制すること無きは、瞋猶恕むべし。出家行道無欲の人にして而も瞋恚を懷けるは甚だ不可なり。譬へば清涼の雲の中に、霹靂火を起すは所應に非るが如し。

汝等比丘、當に自ら頭を摩づべし。已に飾好を捨てて壞色の衣を著し、應器を執持して乞を以て自活す。自見是の如し。若し憍慢起らば當に疾く之を滅すべし。憍慢を增長するは尙世俗白衣の宜しき所に非ず。何かに況んや出家入道の人、解脱の爲めの故に自ら其身を降して而も乞を行ずるをや。

汝等比丘、諂曲の心は道と相違す。是の故に宜しく應に其の心を質直にすべし。當に知るべし、諂

曲は但欺誑を爲すことを。入道の人は則ち是の處り無し。是故に汝等宜しく端心にして質直を以て本と爲すべし。

汝等比丘、當に知るべし、多欲の人は利を求むること多きが故に苦惱も亦多し。少欲の人は無求無欲なれば則ち此の患ひ無し。直爾に少欲すら尚修習すべし。何に況んや少欲の能く諸の功德を生ずるをや。少欲の人は則ち諂曲して以て人の意を求むること無し。亦復諸根の爲めに牽かれず。少欲を行ずる者は、心則ち坦然として憂畏する所なし、事に觸れて餘りあり、常に足らずと云ふこと無し。少欲ある者は則ち(六)涅槃あり。是れを少欲と名く。

汝等比丘、若し諸の苦惱を脱せんと欲せば、當に知足を觀ずべし。知足の法は卽ち是れ富樂安隱の處なり。知足の人は地上に臥すと雖、猶安樂なりとす。不知足の者は天堂に處すと雖亦意に稱はず。不知足の者は富めりと雖も而も貧し。知足の人は貧しと雖も而も富めり。不知足の者は常に五欲の爲に牽かれて、知足の者の爲に憐愍せらる。是を知足と名く。

汝等比丘、(七)寂靜無爲の安樂を求めんと欲せば、當に憒鬧を離れて獨處に閒居すべし。靜處の人は帝釋諸天の共に敬重する所なり。是故に當に己衆他衆を捨てて空間に獨處して滅苦の本を思ふべし。

【六】涅槃は梵語の Nirvāṇa を音譯せるものにて、滅度又は圓寂の義あり、卽ち一切の苦惱を除きたる圓滿無缺の證果なり。

【七】寂靜無爲とは、煩惱を滅して身心共に少しの妄動なきを寂靜と云ひ、寂靜なるが故に爲すこと一として痕迹を止めざるを無爲と云ふ、要するに涅槃の證果なり。

若し衆を樂ふ者は卽ち衆惱を受く。譬へば大樹に衆鳥の集れば、卽ち枯折の患ひあるが如し。世間の縛著は衆苦に沒す。譬へば老象の泥に溺れて自ら出づること能はざるが如し。是を遠離と名く。

汝等比丘、若し勤めて精進すれば、卽ち事として難き者なし。是故に汝等當に勤めて精進すべし。譬へば少水の常に流れて則ち能く石を穿つが如し。若し行者の心數數懈廢すれば、譬へば火を鑽るに未だ熱からずして而も息めば、火を得んと欲すと雖も、火を得べきこと難きが如し。是を精進と名く。

汝等比丘、善知識を求め、善護助を求むることは、不忘念に如くは無し。若し不忘念ある者は、諸の煩惱の賊則ち入ること能はず。是故に汝等常に當に念を攝めて心に在くべし。若し念を失する者は、則ち諸の功德を失す。若し念力堅强なれば、五欲の賊の中に入ると雖も、爲めに害せられず。譬へば鎧を著て陣に入れば、則ち畏るる所無きが如し。是を不忘念と名く。

汝等比丘、若し念を攝する者は、心則ち定に在り。心定に在るが故に、能く世間生滅の法相を知る。是故に汝等常に當に精進して諸の定を修習すべし。若し定を得る者は、心則ち散ぜず。譬へば水を惜める家の、善く堤塘を治するが如し。行者も亦爾なり。智慧の水の爲めの故に、善く禪定を修して漏失せざらしむ。是を名けて定と爲す。

汝等比丘、若し智慧あれば、則ち貪著なし。常に自ら省察して失有らしめざれ。是れ則ち我が法中に於て、能く解脫を得べし。若し爾らざる者は既に道人にあらず、又白衣に非ず、名くる所なし。實智

慧の者は、則ち是れ老病死海を度る堅牢の船なり、亦是れ無明黒暗の大明燈なり、一切病者の良藥なり、煩惱の樹を伐るの利斧なり。是故に汝等當に聞思修の慧を以て而も自ら増益すべし。若し人智慧の照あれば、是れ肉眼なりと雖も、而も是れ明見の人なり。是を智慧と名く。

汝等比丘、若し種種の戯論は、其心則ち亂る。復た出家すと雖も、猶ほ未だ得脱せず。是故に比丘、當に急かに亂心戯論を捨離すべし。若し汝寂滅の樂を得んと欲せば、唯當に善く戯論の患を滅すべし。是を不戯論と名く。

汝等比丘、諸の功德に於て、常に當に一心に諸の放逸を捨つること、怨賊を離るるが如くすべし。大悲世尊所説の利益は皆已に究竟す。汝等但當に勤めて之を行ずべし。若くは山間、若くは空澤の中に於ても、若くは樹下・閒處・靜室に在つても、所受の法を念じて忘失せしむること勿れ。常に當に自ら勤めて精進して之を修すべし。爲すこと無うして空しく死せば、後に悔あることを致さん。我は良醫の病を知つて藥を說くが如し、服と不服とは醫の咎に非ず。又善く導くものの人を善道に導くが如し、之を聞いて行かざるは導くものの過にあらず。

汝等比丘、若し（八）『苦等の四諦に於て疑ふ所ある者は、疾く之を問ふべし。疑を懷いて決を求めざること得ること無かれ。』爾の時、世尊、是の如く三たび唱へ給ふに、人問ひ奉つる者無し。所以は

【八】苦等の四諦とは、苦・集・滅・道の四諦なり、人生の苦は煩惱の集より生ず。而して苦を滅したる寂滅の境界は八正道の修行に依つて得らる。

何ん、衆疑ひ無きが故なり。

時に阿㝹樓駄、衆の心を觀察して、而も佛に白して言さく、『世尊、月は熱からしむべく、日は冷かならしむべくとも、佛の說き給ふ四諦は異ならしむべからず。佛の說き給ふ苦諦は實に苦なり、樂ならしむべからず。集は眞に是れ因なり。更に異因無し。苦若し滅すれば卽ち是れ因滅す。因滅するが故に果滅す。滅苦の道は實に是れ眞道なり、更に餘道無し。世尊、是の諸の比丘、四諦の中に於て決定して疑ひ無し。此の衆中に於て若し所作未だ辨せざる者有らば、佛の滅度を見て當に悲感あるべし。若し初めて法に入る者有らば、佛の所說を聞いて卽ち皆得度す。譬へば夜電光を見て、卽ち道を見ることを得るが如し。若し所作已に辨じ、已に苦海を度る者有らば、但是の念を作すべし、世尊の滅度一へに何ぞ疾やかなる哉と。』阿㝹樓駄此語を說いて、衆中皆悉く四聖諦の義を了達すと雖も、世尊此の諸の大衆をして、皆堅固なることを得しめんと欲して、大悲心を以て復衆の爲めに說き給ふ。

『汝等比丘、悲惱を懷くこと勿れ。若し我世に住すること一劫なるとも、會ふ者は亦當に滅すべし、會うて而も離れざること、終に得べからず。自利利人の法は皆具足す。若し、我、久しく住すとも、更に所益無けん。應に度すべき者は、若くは天上人間皆悉く已に度す。其の未だ度せざる者には皆亦已に得度の因緣を作す。自今已後、我が諸の弟子展轉して之を行せば、則ち是れ如來の法身常に在まして而も滅せざるなり。是の故に當に知るべし、世は皆無常なり、會ふものは必ず離るることあり。

憂惱を懷くこと勿れ、世相是の如し。當に勤めて精進して、早く解脫を求め、智慧の明を以て、諸の癡闇を滅すべし。世は實に危脆なり、牢强なる者なし。我今滅を得ること惡病を除くが如し。此は是れ應に捨つべき罪惡の物なり。假に名けて身と爲す。老病生死の大海に沒在せり。何ぞ智者は之を除滅することを得ること、怨賊を殺すが如くにして、而も歡喜せざることあらんや。

汝等比丘、常に當に一心に出道を勤求すべし。一切世間の動不動の法、皆是れ敗壞不安の相なり。汝等且く止みね。復た語いふことを得ること勿れ。時將に過ぎなんと欲す、我滅度せんと欲す、是れ我が最後の教誨する所なり。』

國譯佛垂般涅槃略說教誡經　終

後漢西域沙門迦葉摩騰共法蘭譯

佛說四十二章經解題

佛祖の道は高うして限なく、佛法の海は深うして測ることは能きない。されど之に昇り之を探る方法がないではない。否な、此の方法を說き知らせるのが卽ち大藏經の眼目である。

四十二章經には、高遠廣博の譚は少ないけれども、日常卑近の誨は頗る多い。乃ち浮情を防ぎ邪業を誡め、以て正道に歸せしむる端的を簡明に說けるものである。又この經は實に處世の要諦を說ける啓蒙の寶訓であるから、其の僧たると俗たるとを問はず、又その外敎徒たると佛敎徒たるとを論せず、苟くも人たらんと欲するものの是非讀まねばならぬ聖典である。

此の經は佛敎初入者への要門を說ける聖訓なると共に、印度から支那へ傳へられた聖敎の中で、最初に漢譯せられた御經であるから、佛法東漸の歷史の上から見ても實に貴重な法典である。今其の來歷に就て傳ふる所を述べん。

後漢の明帝が、ある夜、金色の人の空を飛んで來至せるを夢み、群臣を集めて占はしめられた。す

ると古今のことに通曉せる傅毅と云ふものが、『臣聞く、西域に神あり、名を佛と曰ふ。陛下の夢み給ふ所は將た必ず是れならん』と奉答した。此に於いて帝は使を天竺に遣はして、佛法の將來を命ぜられた。是れ抑も後漢の永平七年で、今を去ること一千八百五十年の昔である。使者等は彼の地で摩騰・法蘭に遇ひ、彼を請じて支那に還つた。すると明帝は大いに彼を優待厚遇して、雒邑城の西門外に精舍を立てて之れに處らしめられた。これ亦た正史の上から見て、漢地に於ける佛僧の始である。摩騰・法蘭は此の精舍に於いて四十二章經を譯出した。

此の經は印度の原典は今に見附らないが。摩騰・竺法蘭の漢譯は實に流暢輕妙なもので、讀者をして飜譯書を讀むの感を起さしめないほどである。で、有志の仁は漢譯と和譯を合せ拜覽せられんことを希望する。

譯者　山上曹源　識

國譯佛說四十二章經

【序】世尊成道し已つて、是の思惟を作し給ふ。『欲を離れて寂靜なる、是を最も勝れたりと爲す』と。大禪定に住して、諸の魔道を降し、(一)鹿野苑の中に於て、(二)四諦の法輪を轉じて、憍陳如等の五人を(濟)度し、而かも(三)道果を證せしめ給ふ。復た比丘あり、〔自己心中に〕疑ふ所を說き、佛に(向つて)解決を求む。世尊敎勅して、一一に開悟せしめ給へば、合掌敬諾して、尊勅に順へり。

【第一章】佛の言く、親を辭して出家し、心を識りて本に達し、(四)無爲法を解するを、名けて沙門と曰ふ。常に二百五十戒を行じ、進止淸淨にして、四眞の道行を爲し、阿羅漢を成ず。阿羅漢と云ふは、能く飛行變化し、(五)曠劫の壽命を得て、住もすれば天地を動す。次を阿那含と爲す。阿那含と云ふは、壽終りて靈神十九天に上つて阿羅漢を證す。次を斯陀含となす。斯陀含と云ふは、一たび上り一たび還りて、卽ち阿羅漢を得。次を須陀洹となす。須陀洹と云ふは、七たび死し七たび生れて、便ち阿羅漢を證す。愛欲を斷ずと云ふは、四肢

【一】鹿野苑とは現今のベナレス市の郊外にあるサルナートのことにて、佛陀の最初の說法地なり。
【二】四諦とは苦・集・滅・道を云ふ、迷界の原因結果（集と苦）と悟界の原因結果（道と滅）とを說ける眞理又は原理原則を意味す。
【三】道果とは阿羅漢果のことなり。
【四】無爲法とは涅槃の異名なり。
【五】曠劫とは非常に長き時間を意味す。

の斷じて復た用ひざるが如し。

【第二章】佛の言く、出家沙門と云ふは、欲を斷ち愛を去つて、自心の源を識り、「佛法の」深理に達して、無爲の法を悟り、內に所得なく、外に所求なく、心は道に繫がれず、亦た業に結ばれざるものなり。無念・無作・非修・非證にして、諸位を歷ずして、自ら崇最なる、之を名けて道と曰ふ。

【第三章】佛の言く、鬚髮を剃除して沙門となり道法を受くる者は、世の資財を去つて、乞ひ求めて足ることを知り、日中に一食し、樹下に一宿して、愼んで再びすること勿れ。人をして愚蔽ならしむるものは、愛と欲となればなり。

【第四章】佛の言く、衆生十事を以て善と爲し、亦た十事を以て惡と爲す。何等をか十となす、(謂く)身に三、口に四、意に三「之れなり」。身に三とは、殺と盜と婬となり。口に四とは、兩舌と惡口と妄言と綺語となり。意に三とは、嫉と恚と癡となり。是の如く、十事(に於いて)聖道に順はずんば、十惡行と名け、是の惡もし止めば、十善行と名く。

【第五章】佛の言く、人は衆の過ありて、而かも、自ら悔い頓に其心を息めずんば、罪來つて身に赴くこと、水の海に歸して漸く深廣となるが如けん。若し人、過あり、自ら解りて非を知り、惡を改め善を行せば、罪自ら消滅すること、病に汗を得れば漸く痊損することあるが如けん。

【第六章】佛の言く、惡人、(汝が)善を(作すを)聞いて、故らに來つて撓亂するも、汝自ら禁息して

當に瞋責することなかるべし。(そは)彼の來つて惡む者は、而かも自ら其身、惡なればなり。

【第七章】 佛の言く、人あり、吾が道を守り大仁慈を行ふを聞いて、故らに佛を罵ることを致す、佛默して對へ給はず、罵ること止む。[佛その人に]問うて曰く、子禮を以て人に從はんに、其の人禮を納れずんば[其の禮]子に歸せんや。對へて曰く歸せん。佛の言く、今子我を罵れども我いま(それを)納れず、子自ら禍を持して子が身に歸す、猶ほ響の聲に應じ、影の形に隨ふ如く、終に免離することなし。[故に]愼んで惡を爲すこと勿れ。

【第八章】 佛の言く、惡人の賢者を害することは、猶ほ天を仰いで唾せんに、唾、天に至らずして還て己に墮ち、(或は)風に逆つて塵を揚げんに、塵、彼に至らずして還つて己が身を坌すが如し。賢は毀つ可らず、禍必らず己を滅す。

【第九章】 佛の言く、博く聞いて道を愛すれば、道かならず會し難し。志を守つて道を奉ずれば、其の道甚だ大なり。

【第十章】 佛の言く、人の道を施すを觀て、之を助けて歡喜せば、福を得ること甚だ大なり。沙門問うて曰く、此の(施道者の)福、盡くるか。佛の曰く、譬へば一炬の火あるに數千百人各炬を以て來り、分ち取つて食を熟し冥を除くも、此の炬は故の如くなるが如し。(施道者の)福も亦これに類す。

【第十一章】 佛の言く、惡人百に飯せんよりは、一りの善人に飯せんには如かず。善人千に飯せん

よりは、一りの五戒を持するものに飯せんには如かず。［持］五戒の者の萬［人］に飯せんよりは、一りの須陀洹に飯せんには如かず。百萬の須陀洹に飯せんよりは、一りの斯陀含に飯せんには如かず。千萬の斯陀含に飯せんよりは、一りの阿那含に飯せんには如かず。一億の阿那含に飯せんよりは、一りの阿羅漢に飯せんには如かず。十億の阿羅漢に飯せんよりは、一りの辟支佛に飯せんには如かず。百億の辟支佛に飯せんよりは、一りの三世の諸佛に飯せんには如かず。千億の三世諸佛に飯せんよりは、一りの無念・無住・無修・無證の者に飯せんには如かず。

【第十二章】佛の言く、人に二十の難あり。貧窮にして布施すること難し。豪貴にして道を奉ずること難し。命を棄てて必ず死すること難し。佛經を覩ることを得ること難し。生れて佛世に値ふこと難し。色を忍び欲を忍ぶこと難し。好を見て求めざること難し。辱を被つて嗔らざること難し。勢あつて臨まざること難し。事に觸れて無心なること難し。廣學博究なること難し。我慢を除滅すること難し。未學を輕んせざること難し。心行平等なること難し。是非を說かざること難し。善知識に會ふこと難し。［心の］性を見［無上の］道を學ぶこと難し。化度の人に隨ふこと難し。境を覩て動かざること難し。善く方便を解すること難し。

【第十三章】沙門、佛に問ふ、何の因緣を以てか、宿命を知り、其の至道を會することを得ん。佛の言く、心を淨くして志を守らば、至道を會すべし。譬へば鏡を磨ぐに、垢去りて明存するが如し。

慾を斷ちて求むること無くんば、當に宿命を〔知ることを〕得べし。

【第十四章】沙門、佛に問ふ、何者をか善となし、何者をか最大となす。佛の言く、道を行ひ眞を守る者は善なり。志と道と合ふ者は大なり。

【第十五章】沙門、佛に問ふ、何者か多力なる、何者か最明なる。佛の言く、忍辱は多力なり、惡を懷はざるが故に、兼て安健を加ふ。忍者は惡無し、必ず人に尊ばる。心垢滅盡し、淨くして瑕穢無き、是を最明となす。未だ天地有らざるより今日に逮るまで、十方の所有ること、見ずと云ふこと有ること無く、知らずと云ふこと有ること無く、聞かずと云ふこと有ること無く、一切の智を得るを、明と謂ふ可し。

【第十六章】佛の言く、人、愛慾を懷いて道を見ざることは、譬へば澄水の、手を以て之を攪せば、衆人共に臨むも、其影を覩ること能はざるが如し。人、愛慾を以て交錯すれば、心中に濁興る、故に道を見ず。汝等沙門當に愛慾を捨つべし。愛慾の垢盡きて、道見る可けん。

【第十七章】佛の言く、夫れ道を見ることは、譬へば炬を持て冥室の中に入るに、其冥即ち滅して、明獨り存するが如し。道を學び諦を見れば、無明即ち滅して、明常に存す。

【第十八章】佛の言く、吾が法は無念の念を念とし、無行の行を行とし、無言の言を言とし、無修の修を修とす。會する者は近づき、迷ふ者は遠ざかる。言語道斷、物の拘はる所に非ず。之に毫釐に

差ひ、之を須臾に失ふ。

【第十九章】佛の言く、天地を觀ずるに非常と念じ、世界を觀ずるに非常と念じ、靈覺は卽ち菩提と觀ず。是の如く知識すれば道を得ること疾し。

【第二十章】佛の言く、當に身中の四大を念ずべし。各自に名有り、都て無我なり。我既に都て無ければ、其れ幻の如きのみ。

【第二十一章】佛の言く、人、情慾に隨つて聲名を求めんに、聲名顯著にして身已に亡ぶ。世常の名を貪つて道を學ばざるは、功を枉げて形を勞す。譬へば香を燒いて、人、香を聞ぐと雖、香の燼のみ在るが如し。身を危るの火而も其後に在り。

【第二十二章】佛の言く、財色の人に於けるや、人の之を捨てざれば、譬へば刀刃の蜜有り、一餐の美に足らざるを、小兒之を舐むれば、則ち舌を割くの患有るが如し。

【第二十三章】佛の言く、人の妻子舍宅に繫ること、牢獄よりも甚し。牢獄は散釋の期有り、妻子は遠離の念無し。情の色を愛すること、豈に驅驅を憚らんや。虎口の患有りと雖、心に甘伏存し、泥に投じて自ら溺る、故に凡夫と曰ふ。此門を透得すれば、出塵の羅漢なり。

【第二十四章】佛の言く、愛慾は色より甚しきは莫く、色の慾たる、これより大なるは無し。賴ひに一(佛知見)有り、若し(六)二を同からしめば、普天の人、能く道の爲にする者無るべし。

【六】二とは色欲と佛知見となり。

【第二十五章】佛の言く、愛慾の人は、猶ほ炬を執つて風に逆つて行くが如し、必ず手を燒くの患有り。

【第二十六章】天神、玉女を佛に獻じて佛意を壞らんと欲す。佛の言く、『革嚢衆穢、爾來るも何か爲ん、去れ、吾用ひず。』と。天神、逾敬ひ、因て道意を問ふ。佛爲に解說し給へば、卽ち須陀洹果を得たり。

【第二十七章】佛の言く、夫れ道に爲らんとする者は、猶ほ木の水に在て流を尋ねて行くが如し。兩岸に觸れず、人の爲に取られず、鬼神の爲に遮られず、洄流の爲に住められず、亦腐敗せざれば、吾此木を保(證)す、決定して海に入らん。學道の人、情慾の爲に惑はされず、衆邪の爲に燒かれず、無爲に精進せば、吾、此人の必ず道を得んことを保(證)す。

【第二十八章】佛の言く、愼んで汝が(七)意を信ずること勿れ。汝が意は信ず可からず。愼んで色に會すること勿れ。色に會すれば卽ち禍生ず。阿羅漢を得已らば、乃ち汝が意を信ず可し。

【七】意とは此所にては心猿意馬のことなり、意識の本體にあらず。

【第二十九章】佛の言く、愼んで女色を視ること勿れ。亦共に言語すること勿れ。若し與に語る者は、正心に思念せよ。我沙門と爲り、濁世に處ること、當に蓮華の泥の爲に汙されざるが如し。其老者を想ふに母の如く、長者を姉の如く、少者を妹の如く、稚者を子の如くし、度脫の心を生じて、惡念を息滅せよ。

【第三十章】佛の言く、夫れ道に爲らんとする者は、乾草を被たるものの、火來らば須く避くるが

如くすべし。道人、慾(境)を見ば、必ず當に之を遠ざくべし。

【第三十一章】佛の言く、人有り、婬の止まざらんことを患へて、自ら陰を除かんと欲す。佛、之に謂て曰く、『若し其陰を斷たんよりは、心を斷たんには如かず。心は功曹の如し。功曹若し止まば從者都て息まん。心、止まずんば、陰を斷つとも何の益かあらん』と。佛、爲に偈を說き給ふ、『慾は汝の意より生じ、意は思想を以て生ず。(八)二心各寂靜なれば、色にも非ず亦行にも非ず』と。佛の言く、『此偈は是れ迦葉佛の說なり。』

【第三十二章】佛の言く、人は愛慾に從て憂を生じ、憂に從て怖を生ず。若し愛を離れなば、何をか憂へ、何をか怖れん。

【第三十三章】佛の言く、夫れ道に爲らんとする者は、譬へば一人の萬人と戰ひ、鎧を掛けて門を出づるに、意或は怯弱、或は半路にして退き、或は格鬪して死し、或は勝つことを得て還るが如し。沙門、學道せんには、當に其心を堅持し、精進勇鋭にして、前境を畏れず、衆魔を破滅して、道果を得べし。

【第三十四章】沙門、夜、迦葉佛の遺教經を誦す、其聲悲緊なり、思ひ悔いて退かんと欲す。佛、之に問うて曰く、『汝、昔、家に在りしとき、曾て何の業をか爲しし。』對て曰く、『愛して琴を彈じき。』佛の言はく、『弦緩きときは如何。』對て曰く、『鳴らず。』『弦急なるときは如何。』對て曰く、『聲絕ゆ。』『急緩、中を得るときは如何。』對て曰く、『諸音普し。』佛の言く、『沙門の學道も亦然り、心若し調

【八】二心とは心王及心所なり　心王は心の體にて、心所は心の作用なり、心の體を識と名け、心の作用を意と名けば、二心は一心の總稱卽意識なり。

適せば、道を得可し。道に於て若し暴なれば身卽ち疲る。其身若し疲るれば、意卽ち惱を生ず。意若し惱を生ずれば行卽ち退く。其行既に退けば罪必ず加はる。但淸淨安樂なれば道失はず』と。

【第三十五章】佛の言く、人の鐵を鍛へ、滓を去りて器を成ずれば、卽ち精好なり。學道の人、心の垢染を去れば、行卽ち淸淨なり。

【第三十六章】佛の言く、人、惡道を離れ、人たることを得ること難し。既に人たることを得れども、女を去けて卽ち男たること難し。既に男たることを得れども、六根完具すること難し。六根既に具はれども、中國に生るること難し。既に中國に生るれども、佛世に値ふこと難し。既に佛世に値へども、道者に遭ふこと難し。既に道者に遭ふことを得れども、信心を興すこと難し。既に信心を興せども、菩提心を發すこと難し。既に菩提心を發せども、無修無證なること難し。

【第三十七章】佛の言く。佛子、吾を離るること數千里なりとも、吾が戒を憶念せば、必ず道果を得べし。吾が左右に在りて、常に吾を見ると雖も、我が戒に順はずんば、終に道を得ざるべし。

【第三十八章】佛、沙門に問ひ給ふ、『人の命は幾許の間にか在る。』對へて曰く、『數日の間。』佛の言はく、『子未だ道を知らず。』復一の沙門に問ひ給ふ、『人の命は幾許の間にか在る。』對へて曰く、『飮食の間。』佛の言く、『子未だ道を知らず。』復一の沙門に問ふ、『人の命は幾許の間にか在る。』對へて曰く、『呼吸の間。』佛の言く、『善い哉、子、道を知れり。』

【第三十九章】佛の言く、佛道を學ぶ者は、佛の言說し給ふ所を、皆應に信順すべし。譬へば蜜を食ふに、中邊皆甜きが如し。吾が經も亦然なり。

【第四十章】佛の言く、沙門の行道は、(九)磨牛の如くすること勿れ。身道を行ずと雖も、心道は行ぜず。心道若し行ぜば、何ぞ道を行ずるを用ひん。

【第四十一章】佛の言く、夫れ道に爲らんとする者は、牛の重を負うて深泥の中を行き、疲極まれども敢て左右を顧視せず、淤泥を出離して乃ち蘇息す可きが如し。沙門、當に觀ずべし、情慾は汙泥より甚しきを。直心にして道を念ぜば、苦を免る可し。

【第四十二章】佛の言く、吾、王侯の位を視ること隙を過る塵の如し。金玉の寶を視ること瓦礫の如し。紈素の服を視ること弊帛の如し。大千界を視ること(一〇)一訶子の如し。(一一)阿耨池水を視ること塗足の油の如し。方便門を視ること寶聚を化するが如し。無上乘を視ること金帛を夢みるが如し。佛道を視ること眼前の花の如し。禪定を觀ること須彌柱の如し。涅槃を視ること晝夕寤めたるが如し。倒正を視ること六龍の舞ふが如し。平等を視ること一眞地の如し。興化を視ること四時の水の如し。

國譯佛說四十二章經　終

【九】磨牛。磨を旋らす牛は唯人に隨つて磨を旋らすのみ、故に行道あれども無心なるに譬ふ。

【一〇】訶子は藥果なり。

【一一】阿耨池水はヒマラヤ山脈中に在る池にして、ガンヂス河の源泉を爲す。

佛說尸迦羅越六方禮經解題

後漢安息國三藏安世高譯

東晉天竺三藏曇無蘭譯

玉耶經解題

【六方禮經】佛、王舍國の鷄山中に住し給ひし時、尸迦羅越と呼べる一人の青年、父の遺敎によりて每朝早起、天地四方の六方を禮拜するを常としけるが、彼自らは其の何の故たるやを知らず。或日佛は早朝分衞に出でて之を見、之に身を以て拜するに非ず、心を以て禮すべきことを敎へ給ひ、彼のために四戒、六事を說き、四輩の惡知識卽ち四種の惡友、四輩の善知識卽ち四種の益友、更にまた四輩の惡知識及び善知識・第三第四の四輩の善知識、第三の四輩の惡知識と、斯の如き順序を以て說き、善者を選びて惡者を遠離すべきことを勸め給へり。

更に六方禮の事を說き、東に向ひて禮拜するは子の父母に對するに擬ふべくして、之に五事あること、父母の子に對するに同じく五事あること、南を拜するは弟子と師との關係を示して又各五事あり、西に向ひて拜するは夫婦の間柄を示して同じく五事あり、北に向ひて禮するは親屬朋友間の關係に擬せられ、而して之に五事あり、地を拜するは主從の關係、而して之にも各五事あり、天に向ひて

禮拜するは人と沙門道士との關係に對配すべくして、前者の後者に對するには五事あり、後者の前者に對するに六事ありと示し給へり。尸迦羅越は此の佛勅を被り、五戒を受け禮をなして去れりといふ。以下佛の唄偈を示して此の文を結べり。

【玉耶經】　佛在世中舍衛城に大富長者あり、其の名を善施と呼ぶ。祇園精舍を建立して佛敎の大外護者となり、恃怙なき孤獨の輩に衣食を給與して給孤獨長者の名を得たる人なり。其の兒の婦に玉耶(善生と譯す)と呼べるものあり、其の生家の豪富にして、己の顏貌の姝好なるを自負して姑夫婿に承事せず、佛及び比丘衆を恭敬せず。姑なる善施長者は深く之を憂へて、佛に彼女を敎誡し給はんことを請ひ奉りしより、佛は其の家に就き、先神通力を以て彼女の慢心を伏し、夫より婦女の十惡、卽ち婦人通有の十種の缺點、五善卽ち五種の美德と三惡卽ち三種の惡德とを說き、七婦卽ち七種類の婦人を擧げ、最後に婦女の十戒を說き示して之を彼女に授與し給へり。玉耶女は佛の敎化を被り、從來の非を悔いて貞順なる婦女となれりといふ。之と同一原本の異譯と思はるるもの、玉耶女經・佛說玉耶女經、此の二本は譯者不明、西晉錄に附すと記せり。第三は阿遬達經、劉宋求那跋陀羅譯。第四は增一阿含經四十九卷非常品中の善生經にして東晉僧伽提婆の譯せる所なり。巴利文のものは增一阿含經中に收む。

譯者　立花俊道識

國譯佛說(一)尸迦羅越六方禮經

佛王舍國なる(二)鷄山の中に在しき。時に長者の子あり、尸迦羅越と名く、早く起きて頭を嚴り、洗浴して文衣を著け、東に向ひて四拜し、南に向ひて四拜し、西に向ひて四拜し、北に向ひて四拜し、天に向ひて四拜し、地に向ひて四拜す。佛、國に入りて分衞し、遙に之を見たまひ、往いて其の家に到りて之を問ひたまふ、『何として六向拜をなすや。此は何の法にか應ずる。』尸迦羅越言さく、『父在りし時、我を敎へて六向拜せしめき。何の應なるやを知らず。今父喪亡せり(と雖も)、敢て後に於て之に違はず。』佛の言はく、『父の汝を敎へて六向拜せしめたるは、身を以て拜するにあらじ。』尸迦羅越便ち長跪して言さく、『願くは佛、我がために此の六向拜の意を解きたまへ。』

佛言はく、『之を聽いて、內心中に著けよ。其れ長者黠人の能く四戒を持ちて犯さざるものは、今世には人のために敬はれ、後世には天上に生れん(四戒とは)一には諸の群生を殺さず、二には盜まず、三には他人の婦女を愛せず、四には妄言兩舌せず、心欲・貪婬・恚怒・愚癡をば、自ら制して聽すこ

【一】巴利名 Sigālo、中阿含經三三卷及長阿含經十一卷なる善生經の善生と同一人なり。
【二】鷄山は Kukkuṭapāda なる乎、迦葉尊者寂滅の地として知らる。

となかれ。此の四意を制する能はざるものは、惡名日に聞え、月の盡くる時光明の稍冥きが如く、能く自ら惡意を制するものは、月の初て生ずるや、其の光稍明かにして十五日盛滿の時に至るが如くなり。』

佛の言はく、『復六事あり、錢財日に耗減す。一には飲酒を喜ぶ、二には博掩を喜ぶ、三には早臥晩起を喜ぶ、四には客を請ずるを喜び、亦人をして之を請ぜしめんと欲す、五には(三)惡智識と相隨ふを喜ぶ、六には憍慢にして人を輕んず。上頭の四惡を犯し、復是の六事を行はば、其の善行を妨げ、亦治生を憂ふるを得ず、錢財日に耗減して、六向拜すとも當に何の益かあらん乎。』

【三】惡友をいふ、善智識の反對なり。

佛の言はく。『惡智識に四輩あり。一には內怨心ありて、外强ひて智識と爲る、二には人前に於ては好言語し、背後には說いて惡を言ふ、三には急ある時人前に於ては愁苦し、背後には歡喜す、四には外には親厚の如く、內には怨謀を興す。善智識に亦四輩あり。一には外怨家の如くして內に厚意あり、二には人前に於て直諫して外に於ては人の善を說く、三には病瘦の縣官には其がために怔忪憂へて之を解く、四には人の貧賤なるを見ては棄捐せずして常に念じ、方便を求めて之を富まさんと欲す。惡智識に復四輩あり。一には諫曉し難く、之を敎へて善を作さしむれば故らに惡者と相隨ふ、二には之を敎へて酒を喜べる人と伴をなすこと莫らしむれば故らに酒を嗜める人と相隨ふ、三には之を

して自ら守らしむれば益更に多事なり、四には之を教へて賢者と友たらしむれば故らに博掩子と厚きことをなす。善智識に亦四輩あり。一には人の貧窮卒乏なるを見ては生を治めしむ、二には人と諍ひて計校せず、三には日に往いて之を消息す、四には坐起常に相念ふ。善智識に復四輩あり。一には史のために捕へらるる(もの)あれば、將ゐ歸りて之を藏匿し、後に於て之を解決す、二には病瘦あれば、將ゐ歸りて之を養視す、三には智識死亡すれば棺殮して之を視る、四には智識已に死すれば復其の家を念ふ。善智識に復四輩あり。一には鬪はんと欲すれば之を止む、二には惡智識に隨はんと欲すれば之を諫止す 三には生を治むるを欲せざれば勸めて生を治めしむ、四には經道を喜ばざれば、教へて之を信喜せしむ。惡智識に復四輩あり。一には小しく之を侵せば大に怒る、二には急ありて之を倩使すれば行くを肯んぜず、三には人の急あるを見る時は人を避けて走る、四には人の死亡を見ては棄てて視ず。』

佛の言はく、『其の善き者を擇んで之に從ひ、惡者は之を遠離せよ。我善智識と相隨ひ、自ら成佛を致したり。』

佛の言はく、『東に向ひて拜するは子の父母に事ふるを謂ふ。當に五事あるべし。一には當に生を治むることを念ふべし、二には早く起き、奴婢を勑令し、時に飯食を作らしむ、三には父母の憂を益さず、四には當に父母の恩を思ふべし、五には父母疾病あれば、當に恐懼して醫師を求め、之を治せ

しむべし。父母の子を視る亦五事あり。一には當に惡を去り善に就かしめんことを念ふべし、二は當に計書疏を敎ふべし、三には當に敎へて經戒を持たしむべし、四には當に早く與に婦を娶るべし、五には家中ある所は當に之を給與すべし。南向して拜するは謂く弟子の師に事ふるなり。當に五事あるべし。一には當に之を敬難すべし、二には當に其の恩を念ふべし、三には敎ふる所は之に隨へ、四には思念して厭はざれ、五には當に從ひて後之を稱譽すべし。師の弟子を敎ふる亦五事あり。一には當に疾く知らしむべし、二には他人の弟子に勝らしむべし、三には知りて忘れざらしめんと欲せよ、四には諸の疑難あれば悉く爲に之を解說せよ、五には弟子の智慧をして師に勝らしめんと欲せよ。西に向ひて拜するは謂く婦の夫に事ふるなり。五事あり。一には夫外より來れば當に起ちて之を迎ふべし。二には夫出でて在らざれば、當に炊蒸掃除して之を待つべし、三には外に婬心あることを得ざれ、夫罵詈すとも、還りて詈り色を作すことを得ざれ、四には當に夫の敎誡を用ひ、あらゆる什物藏匿することを得ざれ、五には夫休息すれば蓋藏して乃ち臥するを得せしめよ。夫の婦を視る亦五事あり。一には出入當に婦を敬すべし、二には之に飯食せしめ、時節を以て衣被を與ふべし、三には當に金銀珠璣を給與すべし、四には家中ある所の多少悉く用つて之に付せよ、五には外に於て邪に傅御を畜ふことを得ざれ。北に向ひて拜するは人の親屬朋友を視るを謂ふ。當に五事あるべし。一には之が罪惡を作すを見ば、私に屏處に往いて之を諫曉呵止すべし、二には小く急あれば當に奔趣して之を救護す

べし、三には私語あれば他人のために說くことを得ざれ、四には當に相敬難すべし、五にはあらゆる好物は當に多少之を分與すべし。地に向ひて拜するは大夫の奴客婢使を視るを謂ふ。亦五事あり。一には當に時を以つて飯食せしめ、衣被を與ふべし、二には病瘦あれば當に爲に醫を呼んで之を治せしむべし、三には妄に之を撾捶することを得ざれ、四には私の財物あれば之を奪ふことを得ざれ、五には分付の物は當に平等ならしむべし。奴客婢使の大夫に事ふる亦五事あり。一には當に早く起きて大夫をして呼ばしむることなかれ、二には當に作すべき所は自ら用心して之を爲せ、三には當に大夫の物を愛惜して、乞匃人に棄捐することを得ざれ、四には大夫の出入には當に之を送迎すべし、五には當に大夫の善を稱譽して其の惡を說くことを得ざるべし。天に向ひて拜するは人の沙門道士に事ふるを謂ふ。當に五事を用ふべし。一には善心を以つて之に向へ、二には好言を擇んで與に語れ、三には身を以つて之を敬せよ、四には當に之を戀慕せよ、五には沙門道士は人中の雄なり、(故に)當に恭敬承事して度世の事を問ふべし。沙門道士は當に六意を以つて凡民を視るべし。一には之を敎へて布施せしめ、自ら慳貪なることを得ざれ、二には之を敎へて戒を持たしめ、自ら犯すことを得ざれ、三には之を敎へて忍辱ならしめ、自ら恚怒することを得ざれ、四には之を敎へて精進せしめ、自ら懈慢なることを得ざれ、五には人をして一心ならしめ、自ら放意することを得ざれ、六には人をして黠慧ならしめ、自ら愚癡なることを得ざれ。沙門道士は人を敎へて惡を去り善を爲さしめ、正道を開示す、

恩父母より大なり。是の如く之を行はば、汝の父の在りし時の六向拜の敎を知るとなす。何ぞ富まざるを憂へんや。』

尸迦羅越卽ち五戒を受け、禮を作して去るや、佛唄偈を說きたまふ。

『鷄鳴當に早起し、衣を被來りて牀を下り、
澡漱して心を淨からしめ、兩手に花香を奉るべし。
佛は尊きこと諸天に過ぎたまひ、鬼神も當ること能はず、
低頭して塔寺を遶り、叉手して十方を禮せよ。
賢者精進せざれば、譬へば樹の根なきが如し、
根斷たるれば枝葉落つ、何時か當に復連るべき。
華を採りて日中に著くれば、能く幾時か鮮かならん、
心を放ち自ら意を縱にすれば、命過ぎて復何をか言はん。
人は當に非常を慮るべし、對し來るに期あるなし、
過を犯して自ら覺らず、命過ぎて自ら欺くことを爲す。
今當に泥犂に入るべくば、何時か出るの期あらん、
賢者は佛語を受け、戒を持し愼みて疑ふことなかれ。

佛は好華樹の如く、愛樂せざる者なし、
處處に人民は聞きて、一切皆歡喜す。
我をして佛を得せしむるの時、願くは法王の如く、
諸の生死を過度し、解脫せざるものなからしめん。
戒德は恃怙すべし、福報常に己に隨ふ、
現法には人の長となり、終に三惡道に遠ざかる。
戒ありて愼めば恐畏を除き、福德は三界に尊し、
鬼神は邪に毒害すれど、戒ある人を犯さず。
俗に墮すれば世苦を生じ、命速かなること電光の如し、
老病死の時至れば、對し來るに豪强なし。
親の恃怙すべきなく、處の隱藏すべきなし、
天福尙ほ盡くることあり、人命豈久しく長からんや。
父母家室に居り、譬へば寄客人の如し、
宿命の壽以に盡くれば、故きを捨てて當に新たなるを受くべし。
各作すところの行を追ひ、際りなきこと車輪の如し、

起滅は罪福に從ひ、生死に十二の因あり。
現身遊びて亂を免れ、一切人を濟育す、
衆邪に墜ち、深淵に流沒するを慈傷す。
勉進するに六度を以てし、修行して自然を致す、
是の故に稽首して禮し、天中天に歸命せよ。
人身旣に得難く、得る人復嗜欲す、
意識痛想に、貪婬して厭足するなし。
豫め種を後世に栽ゑ、歡喜して地獄に詣る、
六情幸に完具するに、何爲ぞ自ら困辱する。
一切能く心を正くし、三世の神吉祥、
八難の與に貪らず、隨ひ行ひて十方に生ぜん。
生ずる所に輙ち精進し、六度を橋梁となし、
廣く勸むるに無極の慧を以てし、一切神光を蒙らん。」

國譯佛說尸迦羅越六方禮經　終

國譯玉耶經

(我が)聞きしこと是の如し、一時佛舍衞國なる祇樹給孤獨園に在して、(佛)四輩の弟子のために說法したまひき。給孤獨の家、先に子のために婦を娶りき、長者の家の女なり、女を玉耶と名く、端正姝好にして憍慢を生じ、婦禮を以て妐姑夫壻に承事せず。給孤長者夫妻議して言へらく、『子の婦順ならず、法に依りて禮せず。設ひ杖捶を加ふとも、此を行ふことを欲せじ。置いて敎訶せざれば、其の過轉た增さん。當に之を如何にすべきぞ。』長者の言く、『唯佛、大聖善く物を化することを能くしたまふ。剛强も弭伏して敢て從はざるなし。佛の來化を請はん。』妻の言く、『大に善し。』明旦服を嚴り、佛の所に往詣し、頭面を地に著け、前みて佛に白して言さく、『我が家、子のために婦を娶りしに、(婦)甚だ大に憍慢にして禮節を以て我が子に承事せず。唯願くは世尊、明日自ら屈したまひ、諸弟子を將ゐ、舍に到りて中飯し、幷に玉耶のために法を說きて(彼の女をして)心開解し、過を改め善を行はしめたまへ。』佛、長者に告げたまはく、『善哉、善哉。』給孤長者は佛の請を受けたまへるを聞いて歡喜し、佛を禮し足を接して去り、舍に歸りて齋戒し中飯を供辦せり。明日佛千二百五十の弟子と與に長者の家に到りたまひしかば、長者は歡喜して佛を迎へたてまつり禮をなせり。佛坐し已に定

まりたまひしかば、大小皆出でて佛を禮し却いて住せしに、玉耶は逃藏して佛を禮することを肯んせざりき。佛卽ち變化し、長者の家の屋宅牆壁をして皆琉璃水精の色の如く內外相見えしめたまへり。玉耶佛に三十二相八十種好あり、身紫金色にして光明暉暉たるを見たてまつり、「玉耶」惶怖して心驚き(身)毛竪てり。卽ち出でて佛を禮し、頭頂懺悔して却いて右面に在りき。佛玉耶に告げたまはく、『女人は當に自ら端正を恃み、夫壻を輕慢すべからず。何をか端正と謂ふ。邪態八十四姤を除却し、定意一心なる、是を端正となす。顏色面目髮綵を以て端正となさざるなり。女人の身中には十惡事あり。何等をか十となす。一には女人初て生れて地に墮つるや父母喜ばず、二には養育するに視て滋味なし、三には女人は心常に人を畏る、四には父母恒に嫁娶を憂ふ、五には父母と生ながら相離別す、六には常に夫壻を畏れて其の顏色を視、歡悅すれば輙ち喜び、瞋恚すれば則ち懼る、七には懷妊すれば產生甚だ難し、八には女人は小にしては父母のために檢錄せらる、九には中にしては夫壻のために制せらる、十には年老いては兒孫のために訶せらる、生より終に至るまで、自在を得ず、是を十事となす。女人は自ら覺知せず。』玉耶長跪叉手して佛に白さく、『賤身を稟受して禮儀に閑はず、唯願くは世尊、具に敎を說き婦たるの法を訓へたまへ。』佛玉耶に告げたまはく、『婦の姑嫜夫壻に事ふるに五善三惡あり。何等か五善となす。一には婦は當に晩く臥し早く起き、髮綵を櫛梳し、衣服を整頓し、面目を洗拭して垢穢あらしむることなく、作事を執るには尊む所に先啓し、心常に恭順にして、

設し甘美あれば先づ食することを得ざれ、二には夫壻訶罵すとも瞋恨することを得ざれ、三には一心に夫壻を守り邪婬を念ふことを得ざれ、四には常に夫壻の長壽を願ひ、(夫壻)出で行けば婦當に家中を整頓すべし、五には常に夫の善を念ひ、夫の惡を念はざれ、是を五善となす。何等をか三惡となす。一には婦禮を以て姑妐夫壻に承事せず、但美食は先じて之を噉はんと欲し、未だ冥からざるに早く臥し、日出でて起きず、夫教呵せんと欲すれば目を瞋らして夫を視、應拒して獨り罵る、二には一心に夫壻に向はず、但他の男子を念ふ、三には夫をして死せしめ、早く更嫁を得んと欲す、是を三惡となす。』玉耶默然として佛に辭答したてまつるなし。佛玉耶に告げたまはく、『世間に七輩の婦あり。一婦は母の如し、二婦は妹の如し、三婦は善知識の如し、四婦は婦の如し、五婦は婢の如し、六婦は怨家の如し、七婦は奪命の如し、是を七輩の婦となす。汝豈に解せん乎。』玉耶佛に白さく、『七輩盡く何の施行する所なるやを知らず。唯願くは佛ために之を解きたまへ。』佛玉耶に告げたまはく、『諦かに聽け、諦かに聽け、善く之を思念せよ、吾當に汝がために分別解說すべし。何等をか母婦となす。母婦は夫壻を愛念すること猶ほ慈母の如し、其の晨夜に侍して左右を離れず、供養に心を盡して、時宜を失はず、夫若し行き、來りて人の輕易を恐るれば、見ては則ち憐念し、心に疲厭せず、夫を憐むこと子の如し、是を母婦となす。何等をか妹婦となす。妹婦は夫壻に承事して其の敬誠を盡し、兄弟の氣を同くし形を分ち、骨肉至親、二情あることなきが如し、尊奉して之を敬ひ、妹の兄に事ふるが如

し、是を妹婦となす。何等をか善知識婦となす。(善知識婦とは)、其の夫壻に侍し、愛念懇に至り、依依戀戀相棄つること能はず、私密の事は常に相告示し、過を見ては依て訶し、行失なからしめ、善事に相敬して益明慧ならしめ、相親み相愛して、世を度すこと善知識の如くならしめんと欲す、是を善知識婦となす。何等をか婦婦となす。(婦婦とは)大人を供養するに、誠を竭し敬を盡し、夫壻に承事して、謙遜命に順ひ、夙に興き夜に寐ね、恭しく言命を恪しみ、口に逸言なく、身に逸行なし、善あれば推讓し、過てば則ち己を稱し、誨訓・仁施・勸進を道となす、心端しく專一にして分邪あるなく、婦節を精修して終に闕廢なし、進んで儀を犯さず、退いて禮を失はず、唯和を貴しとなす、是を婦婦となす。何等をか婢婦となす。(婢婦とは)常に畏愼を懷きて敢て自ら慢せず、兢兢として事に趣きて避憚する所なし、心常に恭恪にして忠孝節を盡し、言は以て柔軟、性は常に和穆、口に麁邪の言を犯さず、身に放逸の行を入れず、貞良純一質朴直信常に自ら嚴整し、禮を以て自ら夫壻を將ゐ、納幸せられて以て憍慢せず、設ひ接遇せられざるも以て怨となさず、或は捶杖の分を得、受くれども恚らず、罵辱せらるるに及んでも默して恨みず、甘心樂受して二意あることなし、好む所を勸進して聲色を妬まず、己の曲薄に遇しては訴へて直くすることを求めず、務めて婦節を修め衣食を擇ばず、專ら恭恪に精らにして唯及ばざらんことを恐れ、夫壻を敬奉して婢の大家に事ふる(が如くす)、是を婢婦となす。何等か怨家婦となす。(怨家婦とは)夫の歡ばざるを見ては恆に瞋恚を懷き、晝夜思念して

解離を得んと欲す、夫婦の心なく常に寄客の如し、狺狺鬪諍して畏忌する所なし、亂頭墜臥して作使すべからず、家を治め兒子を養活せんことを念はず、或は婬蕩を行ひ羞恥を知らず、狀犬畜の如く親里を毀辱して、譬へば怨家の如し、是を怨家婦となす。何等か奪命婦となす。(奪命婦)とは晝夜に寐ねず、恚心相向ふ、當に何の方便(を作して)か相遠離することを得べき、毒藥を與へんと欲して人の覺知せんことを恐る、或は親里に至れば遠近之に寄る、是を瞋恚常に共に之を賊すと作す、若し寶物を持てば雇人之を害し、或は傍人をして伺ひて之を殺さしめん、夫の命を怨枉す、是を奪命婦となす。是を七輩の婦となす。』玉耶默然たり。佛玉耶に告げたまはく、『五善婦は常に顯名あり、言行に法あり、衆人に愛敬せらる、宗親九族並に其の榮を蒙り、天龍鬼神皆來りて擁護し、枉橫ならざらしむ、萬分の後天上の七寶宮殿に生ずることを得、在所自然左右に侍從し、壽命延長にして意の欲する所を恣にし、快樂言ひ難し、天上に壽盡くば、下世間に生れ、當に富貴なる王侯の子孫となり、端正聰慧にして、人に奉尊せらるべし。其の惡婦は常に惡名を得、現在身をして安寧なることを得ざらしむ、數惡鬼衆毒のために病はされ、起臥安からず、惡夢に驚怖す、願ふ所は得ず、多く災橫に逢ふ、萬分の後魂神形を受けて、當に地獄餓鬼畜生に入り、三塗に展轉して累劫竟らざるべし。』佛玉耶に告げたまはく、『是の七輩の婦(の中)、汝何を行はんと欲する。』玉耶流涕し前みて佛に白して言さく、『我か心愚癡、無智の作す所。今より以後、往を改めて來を修め、當に婢婦の如く、妐姑夫壻に奉事すべし。我が壽命を

盡すまで敢て憍慢せじ。』佛玉耶に告げたまはく、『善哉、善哉、人誰か過なからん。過ちて能く改むる者は善焉より大なるは莫し。』玉耶即ち前み請じて十戒を受け優婆夷となれり。佛玉耶に告げたまはく、『戒を保つに一には殺生することを得ず、二には偸盜して他人の財物を取ることを得ず、三には他の男子に婬することを得ず、四には酒を飮むことを得ず、五には妄語することを得ず、六には惡罵することを得ず、七には綺語することを得ず、八には嫉妬することを得ず、九には瞋恚することを得ず、十には當に善を作せば福を得、惡を作せば罪を得ることを信じ、佛を信じ、法を信じ、比丘僧を信ずべし。是を十戒優婆夷の法となす。終身奉行して敢て違犯せざれ。』佛經を說き已りたまふや、諸弟子皆悉く禮を作し、給孤長者姑舩大小及玉耶盡く〔一〕澡水を行ひ、佛を供養し奉るに百味の飮食を以てせり。佛玉耶に告げたまはく、『當に信じて布施すべし、常に其の福德を得、後世には當に復長者の家に生るべし。』玉耶言さく、『諾。』佛飯畢り、竟りて〔二〕噠嚫に呪願したまはく、『五十善神汝の身を擁護せん。』佛玉耶に告げたまはく、『勤めて經戒を念ぜよ。』玉耶言さく、『我佛恩を蒙り、經法を聞くことを得たり。』皆前みて佛のために禮をなして退きぬ。

〔一〕長者に物を捧ぐる時、其の手に水を澡ぐを禮とす。
〔二〕梵語に Daksiṇa。施物・供養物の意。

國譯玉耶經 終

諸經要集解題

所行藏解題

【諸經要集】本經は五品、七十一經、一千一百四十九偈より成れる一小經にして、散文を混せる十七經を除き他は總て韻文なり。此に譯出したる巴里五經の中、散文を見るは唯此の十七經のみなり。
本經は他の四經に比すれば文體遙に古雅且つ簡樸なれば、之を轉譯する上に於て、困難を感ぜし箇所少しとせず。ファウスベールの如き斯學の泰斗たる人にして、尚ほ且つ疑問點を附して疑を存せし箇所頗る多し。但しファウスベールの難解とせし點にして余が解し得たりと自信する箇所亦多し。
本書を譯するに當り參考として用ひたる書は、

佛音の『最上義光』
小尼柯耶中の『大尼提舍』及び『小尼提舍』
クマーラスワーミーの英譯『諸經要集』
ファウスベールの英譯『諸經要集』（東方聖書第十卷）
ファウスベールの『諸經要集語彙』

等なり。此の中『最上義光』は錫蘭文字のものにて、漸く蛇品の終まで出版せられしのみ。『大尼提舍』は八八品の註にして、『小尼提舍』は彼岸道品及び犀牛經の註なり。クマーラスワーミーの英譯は蛇品、小品の全部と、大品中の三經、及び八八品中の一經を收むるのみ。量に於ては全經の約半なるべし。ファウスベールの英譯と語彙とは本經全部を收むること素より云ふまでもなし。之を國譯するに當りて余が最も多く參考の資としたるは實に之等の兩書なり。

【所行藏】本經は全部三百七十二偈より成り、釋尊の前生物語三十五を含む。此等物語は一一波羅蜜の意を寓し、十波羅蜜中、布施波羅蜜に關するもの十、持戒波羅蜜に關するもの十、出離波羅蜜五、決定波羅蜜一、眞實波羅蜜六、慈悲波羅蜜二、而して捨波羅蜜に關するもの一なり。此等三十五物語は、總て釋尊の前生譚を偈頌の形式を以て自ら說かせ給ひしものとせらるるが故に、『本生經』又は梵文『本生鬘』中に此等と同一の物語を發見し得る場合少しとせず。余は物語每に之を註して、兩書中其の對等なる物語の番號を記し、參照の便を計れり。『本生經』の如く流暢なる散文を以て記せるものに比すれば、本經の如く簡約なる韻文を以て記せるものは難解の箇所多多之あり、譯文の晦澁なるは單り譯者の過のみにはあらざるなり。

譯者 立花俊道識

國譯諸經要集

彼の祥者、尊貴者、正遍覺者に歸命す

蛇品第一

(一)蛇經第一

忿の起りたる時、之を制すること、藥を以て、蛇毒の擴がるを、〔制するが〕如くする此の比丘の、(二)此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を〔捨つるが〕如し。(一)

愛欲を斷ちて餘す所なきこと、池に生ふる蓮華をば、〔水を〕潛りて、〔折り取るが〕如くする此の比丘の、此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を〔捨つるが〕如し。(二)

疾く奔り流るる渇愛を、涸らし盡して、餘す所なきこと此の比丘の、此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を〔捨つるが〕如し。(三)

憍慢を拔きて餘す所なきこと、大水の弱き蘆の堤を〔拔くが〕如くする此の比丘の、此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を〔捨つるが〕如し。(四)

(三)諸有の間に(四)精を〔索めて〕得ざること、(五)優曇婆羅樹〔の林中〕に、華を索めて〔得ざるが〕如くなる此の比丘の、此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を〔捨つるが〕如し。(五)

內に怒の心なく、(六)有非有の念をも亦之によりて超えたり、此の比丘の此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を「捨つるが」如し。（六）

疑念を解き、內「亦」斷じ盡して、殘す所なき此の比丘の、此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を「捨つるが」如し。（七）

(七)走ること疾きに過ぎず、又(八)遲るることなく、總て此の(九)妄心を伏したる此の比丘の、此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を「捨つるが」如し。（八）

走ること疾きに過ぎず、又遲るることなく、世間一切のものは、是れ虛妄なりと知れる此の比丘の、此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を「捨つるが」如し。（九）

走ること疾きに過ぎず、又遲るることなく、一切は虛妄なりと「知りて」、貪望を離れたる此の比丘の、此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を「捨つるが」如し。（一〇）

走ること疾きに過ぎず、又遲るることなく、一切は虛妄なりと「知りて」、愛欲を離れたる此の比丘の、此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を「捨つるが」如し。（一一）

走ること疾きに過ぎず、又遲るることなく、一切は虛妄なりと「知りて」、瞋恚を離れたるもの、此の比丘の此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を「捨つるが」如し。（一二）

走ること疾きに過ぎず、又遲るることなく、一切は虛妄なりと「知りて」、愚癡を離れたる此の比丘の、此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を「捨つるが」如し。（一三）

隨眠「の惑」は些も彼に存することなく、害惡の根

は「悉」く斷たれたり。此の比丘の此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を「捨つるが」如し。《一四》

(一〇)此岸に還り來るの緣たる怖畏所生の「邪業」は、一として彼に存することなし。斯る比丘の此岸彼岸を捨つること、蛇の朽古たる蛻を「捨つるが」如し。《一五》

「人を」生有に縛するの因たる愛欲所生の「邪業」は一として彼に存することなし。斯る比丘の此岸彼岸を捨つること、蛇の朽古たる蛻を「捨つるが」如し。《一六》

(一一)五蓋を捨て、苦なく、疑を超えて、惱なき此の比丘の此岸彼岸を捨つること、蛇の朽ち古りたる蛻を「捨つるが」如くす。《一七》

【一】比丘の愛欲其他の邪惡を捨つること蛇の蛻を捨つるが如くすることを說く　【二】以下十七偈中に現はるる此岸彼岸に就て、本書の註解書は種種の解釋を施す、(一)第三果即ち不還果に至りて總て忿怒の煩惱を捨て、隨て又五下分結即ち欲界貪、瞋恚、身見、戒禁取見及び疑等欲界に屬する五種の煩惱を捨つ、此五下分結を指して此岸彼岸と云ふ。(二)此岸とは己身を指し彼岸とは他身を指す。(三)此岸とは內の六處即ち六根を指し、彼岸とは外の六處即ち六境を指す。(四)此岸とは人間世界、彼岸とは天人世界。(五)此岸とは欲界、彼岸とは色無色二界。(六)此岸とは欲色有、彼岸とは無色有。(七)此岸とは有情身、彼岸とは有情身を助けて樂を與ふるもの。【三】所有ゆる世界を云ふ。【四】有情の本質本體我體など稱ふるもの。【五】優曇婆羅樹の華とは、所謂優曇華のことにて、此の樹は華なくして實を結ぶ。又は三千年に一回、或は佛の出世に會うて華を開くと信ぜられたり。【六】有非有とは遷非遷、增長減損、常見斷見、福業罪業等對待の念を云ふ。【七】精勤に過ぎざるを云ふ。【八】怠惰に過ぎざるを云ふ。【九】貪愛、邪見慢の三を云ふ、法句經、一九五、二五四參照。【一〇】有情の身を受けて、再び世に生れ出づるを云ふ。【一一】五蓋とは貪欲、瞋恚、惛沈、掉擧、疑の五種の煩惱を指す。

(一)陀尼耶經第二

「我は食を煮、乳を搾り、摩企河の畔に「一類と」共に住めるもの、我が屋は葺かれ、(二)火は點されたり。されば(三)天、若し雨を「降さんと」欲せば「之を」降せ」と牧牛士・陀尼耶は云へり。《一八》

(四)「我は忿を盡し、頑を除き、摩企河の畔に一夜の

宿をなせるもの、（五）我が屋蓋は去られ、〔貪愛の〕火は消されたり。されば、天、若し雨を〔降さんと〕欲せば、〔之を〕降せ」と、世尊は宣へり。（一九）

「蚊虻は住まず、牛は濕地の草茂れる所を徘徊す、雨來るとも〔彼等は〕之に耐へん。されば天、若し雨を〔降さんと〕欲せば〔之を〕降せ」と牧牛士陀尼耶は云へり。（二〇）

（六）「我が筏は編まれ、善く造られたり。（七）〔流を〕渡りて、彼岸に到り、（八）暴流を伏したれば、〔更に〕筏の要あるなし。されば天、若し雨を〔降さんと〕欲せば〔之を〕降せ」と世尊は宣へり。（二一）

「我が牧婦は從順にして婬ならず。久しく共に住み來りて意に適へり、彼の女に一の邪あることを聞かず。されば天、若し雨を〔降さんと〕欲せば〔之を〕降せ」と牧牛士陀尼耶は云へり。（二二）

「我が心は從順にして解脱を得たり。久しく修練せられ、調御せられぬ、我に一の罪あるなし。されば天、若し雨を〔降さんと〕欲せば、〔之を〕降せ」と世尊は宣へり。（二三）

「我自ら賃し、自ら養ふ。諸兒は健かにして我が傍に羣る、彼等に一の邪あることを聞かず。されば天、若し雨を〔降さんと〕欲せば、〔之を〕降せ」と牧牛士陀尼耶は云へり。（二四）

「我は何人の庸作者にもあらず。得たる所を〔食うて〕一切世界を遊行す、我に庸作の要なし。されば天、若し雨を〔降さんと〕欲せば、〔之を〕降せ」と世尊は宣へり。（二五）

「馴付かざる童牛あり、（九）乳を飲む仔牛あり。牝牛の既に孕めるあり、未だ孕まざるあり、牝牛の主なる牡牛も亦此處にあり。されば天、若し雨を〔降さんと〕

欲せば、「之を」降せ」と牧牛士陀尼耶は云へり。（二六）

（一〇）「我に童牛なく、仔牛なし。既に孕みたる牝牛もなく、未だ孕まざる牝牛もなく、牝牛の主たる牡牛も亦此處に之あるなし。されば天、若し雨を「降さん」と欲せば、「之を」降せ」と世尊は宣へり。（二七）

「「牛繋ぐ」杙は掾たれて搖がず、文邪草もて作れる索は新にして善く綯はれたり。仔牛も之を斷つこと能はじ。されば天、若し雨を「降さんと」欲せば「之を」降せ」と牧牛士陀尼耶は云へり。（二八）

「牛の如く結縛を斷ち、象の蔓草を「絕つが」如く「纏縛を」絕ちて、我は再び母胎に入ることあらじ。されば天、若し雨を「降さんと」欲せば、「之を」降せ」と世尊は宣へり。（二九）

大雨忽にして起り、窪と陸とを滿しぬ。天の雨降らすを聞きて、陀尼耶は此の義を宣べて云へり。（三〇）

「げにも大なる哉、世尊を見奉れる、此の我等の得る所や。具眼者、世尊に歸依し奉る、大牟尼、我等の師とならせ給へ。（三一）

牧婦も我も共に從順なり、善逝者に「就きて」淸淨行を行はん。生死の彼岸に到りて、苦際を盡すものもならん。」（三二）

魔王・波旬は云く、「兒あるものは兒を以て喜び、牛あるものは牛を以て喜ぶ。是れ人の喜は（二）本質あるによる、本質なきものには喜なきが故なり。」（三三）

世尊の宣く「兒あるものは兒を以て憂へ、牛あるものは牛を以て憂ふ。是れ人の憂は本質あるによる、本質なきものには憂なきが故なり。」（三四）

【一】陀尼耶は摩企河の畔に、其の一類のものと共に住みて、牧牛を業とせしものなり。【二】食を煮、乳を搾り、屋根を葺き、火を點する等平和なる生活の情態想見すべきなり。【三】此時空に雨模様ありしが如し。【四】世尊摩企河の畔に一夜の宿をなし、牧牛士

陀尼耶の上の歌を歌へるに對し、之を唱へ給へり、陀尼耶が Pakkodano（食を煮たる）と云へるに對して akkodhano（忿を盡したる）と宣ひ、duddhakhīro（乳を搾りたる）と云へるに對しては vigatakhilo（頑固なる心を除きたる）と宣ふ、先づ語呂の相通へるに注意すべし。【五】家屋を自身とすれば、之は愛、慢、邪見等の煩惱のために蓋はれてあり、よりて此等の煩惱を除くを屋蓋を去ると云ふ。【六】佛の教に譬へたるなり。【七】生死の彼岸なる安穩・涅槃の地に到れるなり。【八】暴流とは欲・見・有・無明等四種の煩惱を指す、此等は人の生死より涅槃に到るを妨ぐること、暴河の如しと云ふ意よりして暴流と稱したるなり。【九】乳を與ふる母牛の義にも見ることを得。【一〇】此等は總て譬喩なりと了解すべし。【一】長老偈一五二偈註。

(一)犀牛經第三

一切生類に對して刀杖を加へず、其の中一として之を害ふことなく、兒をも〔得んと〕願はざれ、況や友をや。單り遊行すること犀牛の如くせよ。（三五）

〔他と〕交會するものには愛戀の情起り、愛情に隨うて此の苦は起る。愛情より生るる患難を觀て、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（三六）

朋友、心友の爲に愍を垂れ、愛念に絆されて、〔爲に己の〕利を喪ふ。親交に此の恐あることを觀て、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（三七）

妻と又兒との愛は、茂りたる竹の、互に相絡まるが如く〔絡まる〕。竹の幼芽の如く、縛著なくして、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（三八）

林の中にありて縛られざる獸の、食を求めて其の好む所に赴くが如く、智ある人は、〔唯〕己の意を察して、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（三九）

友の中にあれば、休むにも、立つにも、行くにも、旅するにも、〔常に人に〕呼び立てらる。〔されば唯〕離欲を〔求め〕、己の意を察して、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（四〇）

友の中にあれば嬉戲遊樂あり、兒等に對しては情愛甚だ大なり。愛者と別るることを厭うて、單り遊行

すると犀牛の如くせよ。（四一）

四方〔意に任せて住し、總てのものに對して〕瞋ることなく、一一〔得るに隨ひて〕滿足し、危難に耐へ、怖るることなく、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（四二）

出家者と雖も滿足せしむること難きものあり、在家者の家に住めるものも亦然り。されば他人の兒に執心すること寡くして、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（四三）

(三) 在家人の相を棄つること、葉の落ちたる劫賓陀羅樹の如くし、勇者は俗士の繫縛を破りて、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（四四）

若し思慮ある善行の賢者を、同行の友とし得ば、一切の危難に克ち、歡喜思惟して、彼と共に行へ。（四五）

若し思慮ある善行の賢者を、同行の友とし得ずば、王の取りたる國を棄つるが如く、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（四六）

〔我等〕定めて友を得るの幸を稱美す。友の〔己に〕勝れると等きとは共に交るべきなり。斯る〔友を〕得ずば、邪なきものを受用して、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（四七）

金工の加工せる黃金の〔腕輪の〕光あるも、兩箇一手に〔捧げらるれば〕、互に相打つことを知りて、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（四八）

斯くして我、第二人者と共にあれば、罵り又叱る。未來に此の恐あることを察して、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（四九）

欲は多樣にして、蜜の如く美味に、種種の形によりて心を攪す。欲に此の過難あるを見て、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（五〇）

〔欲は〕我に取りて災害なり、腫物なり、障礙なり、

疾なり、矢なり、又怖畏なり。欲に此の過難あることを見て、單り遊行すること犀牛の如くせよ。《五一》

寒と熱と飢と渇と、風と日と虻と蛇と、總て此等のものを制伏して、單り遊行すること犀牛の如くせよ。《五二》

㊂強く大きくして斑紋ある象の、「其の」羣を離れて、意の儘に林中に遊行するが如く、單り遊行すること犀牛の如くせよ。《五三》

暫時の解脱を得とも、之は合會を樂とするものには是處には非ず。㊃「日の族の語を思うて、單り遊行すること犀牛の如くせよ。《五四》

「己」諸見の峻烈なるに克ち、自制を得、道に達し、「智慧を得て他に導かるるものにあらず」「と知り」、單り遊行すること犀牛の如くせよ。《五五》

著なく僞なく、渇望なく覆なく、貪欲と愚癡とより脱れ、所有ゆる世界に於て意樂あるなく、單り遊行すること犀牛の如くせよ。《五六》

邪僻にして、非利を見、横路に陷れる友「と交ること」を避け、貪著にして怠惰なるものと交ることなく、單り遊行すること犀牛の如くせよ。《五七》

多聞にして法の護持者たり、高邁にして賢明なる友と交れ。義理を知り疑を制して、單り遊行すること犀牛の如くせよ。《五八》

己が飾ることなく、世に嬉戲遊樂と欲樂とを求めず、莊嚴を厭ひ眞實を語り、單り遊行すること犀牛の如くせよ。《五九》

妻子と父母と、財穀と親族と、諸種の欲とを捨てて、單り遊行すること犀牛の如くせよ。《六〇》

「之は縛なり、此處に幸少く樂少く、此處に苦は多し之は魚鉤なり」と知りて、識者は單り遊行すること犀牛の如くせよ。《六一》

繋縛を破ること水中の魚の網を破るが如く、火の〔一度〕燒きたる處に還らざるが如く、單り遊行すること犀牛の如くせよ。(六二)

俯して視、疾く走ることなく、諸根を防ぎ、意を護り、煩惱なく、〔欲火の爲に〕燒かるることなくして、單り遊行すること犀牛の如くせよ。(六三)

(五) 在家人の相を捨つること、波利質多迦樹の葉の落ちたるが如く、出家して袈裟衣を纏ひ、單り遊行すること犀牛の如くせよ。(六四)

無欲にして、諸味に著するなく、他を養はず、戶戶に食を乞ひ、家家に心を縛著するなくして、單り遊行すること犀牛の如くせよ。(六五)

心の五蓋を捨て、總て隨煩惱を除き、愛念と瞋恚とを斷ちて憑依なく、單り遊行すること犀牛の如くせよ。(六六)

先づ憂と喜とを、〔次に〕苦と樂とを擲て、捨と止と淨潔とを得、單り遊行すること犀牛の如くせよ。(六七)

(六) 最上利に達せんが爲めに精勤し、心に著なく行に怠なく、毅くして身心の力あり、單り遊行すること犀牛の如くせよ。(六八)

獨坐と禪思とを捨てず、諸法に於て常に依法行者たり、諸有に於て過難を見、單り遊行すること犀牛の如くせよ。(六九)

渇愛の滅盡を望みて放逸ならず、聾啞ならず、多聞正念なり、自制あり精勤ありて、法を測度し、單り遊行すること犀牛の如くせよ。(七〇)

(七) 聲を怖れざる獅子の如く、網に觸れざる風の如く、水の爲めに汚されざる蓮の如く、單り遊行すること犀牛の如くせよ。(七一)

齒牙強き、諸獸の王たる獅子の克ちて、勝利者とし

て徘徊するが如く、邊地の坐臥を樂み、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（七二）

慈と捨と悲と解脱と喜とを時時に修習し、世のあらゆるものに對して怒ることなく、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（七三）

貪と瞋と癡とを捨て、諸の結縛を破り、生命を喪ふとも懼るる所なく、單り遊行すること犀牛の如くせよ。（七四）

「人は」目的のために「他と」交を結び、又「他に」事ふ、目的なき朋友は今日之を得ること難し。（八）己の利を知る人は不淨なり。「されば」單り遊行すること犀牛の如くせよ。（七五）

【一】原語 Khaggavisāṇaṁ は khaggo（刀、犀）visāṇaṁ（角）の二語より成る、よりて「犀牛の角」の義にも取られ、「刀の如き角ある（獸）」、卽ち「犀牛」の義にも取らる．犀牛の角は唯一本あるのみなれば獨行の辟支佛は之に比するを得べく．犀牛は常に單獨にて林野の間を徘徊する獸なりと云へば、辟支佛は亦之に比することを得べし、漢譯に麟角喩の獨覺と云へるは之なり．此の經は、辟支佛の道を說きたるなり。【二】鬚髮を蓄へ、白色の衣服を著け、瓔珞、華鬘、香、塗香の類を用ひ、妻兒、奴婢を蓄ふる等を云ふ。【三】「驅幹の巨大なる」の意。【四】釋迦牟尼佛の別號。【五】上四四偈註參照。【六】涅槃の果を云ふ。【七】下二一三偈參照。【八】「己に存するもののみを知る人」又は「現利をのみ知る人」の意もあり。

耕田婆羅墮闍經第四

是の如く我聞けり。一時世尊は摩揭陀國なる、（一）ダッキナギリの（二）エーカナーラーてふ、梵志村に住し給へり。時に耕田婆羅墮闍梵志は播種の期に五百挺の犂を駕したり。其時世尊朝時に內衣を著け、衣鉢を携へて、耕田婆羅墮闍梵志の作業の處に赴き給へり。時に耕田婆羅墮闍梵志は配食を行へり。世尊は配食の處に近づき給ひ、近づきて一方に立ち給へり。耕田婆羅墮闍梵志は世尊の受食の爲立ち給るを見たり。

見るや［否や］、世尊に次の如く白せり、
「沙門、我は田を耕し且つ種を播く、耕し且つ播きて食ふ。沙門、汝も亦耕し且つ播け、耕し且つ播きて食へ」と。
「婆羅門、我も亦田を耕し且つ種を播く、耕し且つ播きて食ふ」と。
「されど沙門、我等は汝瞿曇の軛も犂頭も刺針も耕牛も之を見ず、さるを汝沙門は、「婆羅門、我も亦田を耕し且つ種を播く、耕し且つ播きて食ふ」と斯の如く云ふ」と。
其の時耕田婆羅墮闍梵志は偈を以て世尊に白せり、
「［汝］自ら耕夫なりと稱ふれども、汝の耕事を見ず、我等に耕事を問はれて語れ、之によりて我等は汝の耕事を知らん」と。 (七六)
「信は種子、行は雨、智慧は我が軛と犂となり、慚は轅、意は轅縻、念は我が犂頭と刺針となり。(七七)
身を防護し、語を防護し、食と腹とを節し、眞を耘となし、慈愛を我が解脱となす。(七八)
精勤は我が駄牛にして［我を］安隱［の地］に運び、還ることなくして進む、彼處に到りては憂あるなし。(七九)
［我が］此の耕事は斯の如くして作され、之に甘露の果報あり、此の耕事をなして［人は］所有ゆる苦惱より脱る」と。 (八〇)
其の時耕田婆羅墮闍梵志は、乳粥を大なる青銅鉢に盛り、之を世尊の面前に捧げて［云へり］、
「汝瞿曇、乳粥を食へ、汝は耕夫なり、汝瞿曇は甘露の果ある耕事をなすが故に」と。
「偈を唱へ［て得た］るものを我は食ふべからず、婆羅門、之は諦觀者の法にあらず。偈を唱へて得たるものを諸佛は却け給ふ、婆羅門、［世に］法の存する限

り。之は「諸佛の」道なり。一切成就せる大仙、漏を盡し、疑を捐てたる人を供養するに、他の飲食を以てせよ。是れ彼は、善根を望む者の、田地なるが故なり」と。（八一、八二）

「さらば、汝瞿曇、我は我が此の乳粥を何人にか與ふべきぞ」と。

「婆羅門、天魔梵を併せたる世界に於て、沙門・婆羅門・天人の羣中にありて、此の乳粥を食うて善く熟し得べきもの、如來と如來の弟子とを除きて、他に之あるを見ず。よりて汝婆羅門其の乳粥を青草なき「處」に棄てよ、或は生類の「棲ま」ざる水中に沈めよ」と。

其時耕田婆羅墮闍梵志は其の乳粥を生類の棲まざる水に投じたり。時に其の乳粥を水に投ずるや、音を作し、泡を立て、煙を發ち、烟を揚げたり。恰も終日日に曝されたる犂頭の水に投せられて、音を作し、泡を立て、煙を發ち、烟を揚ぐるが如く、此の乳粥を水に投ずるや、音を作し、泡を立て、煙を發ち、烟を揚げたり。其時耕田婆羅墮闍梵志は怖れ戰き身毛竪ちて、世尊の居給へる處に近づけり。近づきて、頭を以て世尊の御足を禮し、世尊に下の如く白せり。

「奇なる哉、尊瞿曇、奇なる哉、尊瞿曇、譬へば尊瞿曇、覆れるを起し、掩はれたるを發き、迷者に道を示し、「眼あるものは形を見ん」と云ひて、暗中に燈明を掲ぐるが如く、斯の如く、尊瞿曇は種種の方便を以て法を説示す。此の我は尊瞿曇に歸依す、法及び比丘衆にも亦、尊瞿曇、今日より始めて生を終るに至るまで、歸依せる優婆塞として我を攝受せられよ。願くは我尊瞿曇の傍にありて出家を得、受戒を得ん」と。

耕田婆羅墮闍梵志は世尊の傍にありて出家と受戒とを得たりき。受戒の後久しからざるに具壽婆羅墮闍

は單り〔他に〕遠ざかりて、精勤し、熱烈に、專心にして住し、久しからずして、之〔を得ん〕が爲に善家男子の善く家より〔出でて〕出家の身となる、其の無上にして梵行に終れる〔法〕を、此の世に於て自ら證知し、實證し、逮得して住せり。「生既に盡き、梵行既に立ち、義務既に辦じ、再び斯ることの爲に〔生を受くること〕あらじ」と悟れり。而して具壽婆羅墮闍は阿羅漢の一人となれり。

【一】南山の意あり。【二】一箇の意あり。

(一)淮陀經第五

「牟尼・大智者・覺者・法主・離愛者・兩足尊・調御士中の最勝者に問ふ、世間幾種の沙門かある、願くは之を示し給へ」と鍛工淮陀は云へり。 (八三)

「沙門に四種あり、第五あるなし、目前に問はれて一一之を明さん、(三)道によりて〔邪惡に〕勝つもの、道を說くもの、道に活くるもの、沙門にして道を汙すもの是れなり、淮陀」と、世尊は宣へり。 (八四)

「誰をか道によりて〔邪惡に〕勝つものと諸佛は說き給ふ」と鍛工淮陀は云へり、「道を說く人は如何にしてか無等倫なる、問はれて我に道に活くるものを示し、更に我に汙道の人を顯し給へ。」 (八五)

「疑を超え、苦を離れ、涅槃を樂み、貪欲を除き、天と人とを併せたる世界の導師たり、斯る〔人〕を道によりて〔邪惡に〕勝つものと諸佛は宣ふ。」 (八六)

「此の世に於て、最勝〔の法〕を最勝〔の法〕と知り、此處に法を宣說し、分別するもの、此の疑を絕ち、欲を滅する智者を、比丘中の第二、說道者と呼ぶ。」 (八七)

「善く說かれたる法句の道の上に活き、自ら制し、〔正〕念あり、過なき道に則る者、〔之を〕比丘中の第

三、活道の人と云ふ。」（八八）

「禁戒に〔己を〕蔽護して〔比丘の中に交り〕、卒暴、憍恣にして、〔信者の〕家を亂すもの、虚僞心を懷き、自制心なく、籾糠〔の如くなるもの〕は、適當の法に遊行すとも彼は汙道者なり。」（八九）

「多聞にして智慧ある在家の聖弟子は能く此等〔四種の沙門〕を辨知せり。總て〔比丘は〕此〔の汙道の沙門〕の如しと知り、〔又〕見るとも、彼の信力は滅ぶることなし。如何にしてか、汙れたるものと、汙れざるものと、淨きものと、淨からざるものとを、同一視することあらんや。」（九〇）

【一】准陀のため四種の沙門を説明す。　【二】四種の沙門、(一)勝道沙門(二)説道沙門(三)活道沙門(四)壞道沙門と云ふは是なり。

(二)敗亡經第六

是の如く我聞けり。一時世尊は舍衞城の祇陀林〔と云ふ〕給孤獨者の遊園に住し給へり。時に容色絶妙なる一人の天子、深夜隈なく祇陀林を照して、世尊の居給へる處に近づき來れり。近づき來るや彼は世尊を禮拜して一方に立てり。一方に立ちたる彼天子は偈を以て世尊に白して言へり、

「敗亡する人を、我等、世尊に問ふ、世尊に問はんが爲に〔我等は〕來れり、何をか敗亡者の〔敗亡の〕因となす。（九一）

「興盛の人は容易く知らるべく、敗亡の人は容易く知らるべし。法を希ふものは興盛の人なり、法を忌むものは敗亡の人なり。」（九二）

「是に由りて之を知る、之は第一の敗亡者なりと。世尊二たび告げ給へ、何をか敗亡者の因となす。」（九三）

「寂靜なき人は彼の愛好する所にして、寂靜ある人を〔彼は〕愛好せず、寂靜なき人の法を樂む。之れ敗亡

者「敗亡」の因なり。」 《九四》
「是に由りて之を知る、之は第二の敗亡者なりと。世尊三たび告げ給へ、何をか敗亡者の因となす。」《九五》
「人に睡眠の癖あり、合會の癖あり、精勤せず、懈怠にして、忿怒を「其の」標榜となす。之れ敗亡者「敗亡」の因なり。」 《九六》
「是に由りて之を知る、之は第三の敗亡者なりと。世尊四たび告げ給へ、何をか敗亡者の因となす。」《九七》
「人の父若しくは母の、年邁きて朽ち衰へたるを、「己は」豊なる身にして而も養はざる。之れ敗亡者「敗亡」の因なり。」 《九八》
「是に由りて之を知る、之は第四の敗亡者なりと。世尊五たび告げ給へ、何をか敗亡者の因となす。」《九九》
「人の婆羅門又は沙門、又他の乞食者を、妄語を以て欺く。之れ敗亡者「敗亡」の因なり。」 《一〇〇》
「是に由りて之を知る、之れ第五の敗亡者なりと。世尊六たび告げ給へ、何をか敗亡者の因となす。」《一〇一》
「夥しき寶を有てる人、黄金あり食物あるもの、唯單り甘きを食ふ。之れ敗亡者「敗亡」の因なり。」《一〇二》
「是に由りて之を知る、之は第六の敗亡者なりと。世尊七たび告げ給へ、何をか敗亡者の因となす。」《一〇三》
「人の生を誇り、財を誇り又姓を誇り、而も己の親族をも蔑にす。之れ敗亡者「敗亡」の因なり。」《一〇四》
「是に由りて之を知る、之は第七の敗亡者なりと。世尊八たび告げ給へ、何をか敗亡者の因となす。」《一〇五》
「人の女色に溺れ、酒に淫み博奕に耽りて、隨つて得れば隨つて喪ふ是敗亡者「敗亡」の因なり。」《一〇六》
「是に由りて之を知る、之は第八の敗亡者なりと。世尊九たび告げ給へ、何をか敗亡者の因となす。」《一〇七》
「己の妻に慊らずして、遊女に交り、他人の妻女に交

る。是敗亡者「敗亡」の因なり。」（一〇八）
「是に由りて之を知る、之は第九の敗亡者なりと。世尊十たび告げ給へ、何をか敗亡者の因となす。」（一〇九）
「年邁きたる人の、チンバル果「に似たる」乳房ある「女」を誘き入れ、彼の「女の」嫉よりして善く眠ることなき。是敗亡者「敗亡」の因なり。」（一一〇）
「是に由りて之を知る、之は第十の敗亡者なることを。世尊十一たび告げ給へ、何をか敗亡者の因となす。」（一一一）
「酒に荒みて浪に財を費す女、又は斯る男を、王の位に立つる、是敗亡者「敗亡」の因なり。」（一一二）
「是に因りて之を知る、之は第十一の敗亡者なることを。世尊十二たび告げ給へ、何をか敗亡者の因となす。」（一一三）
「財少く欲多く、刹帝利の種族に生れて　彼此の世にありて王位に上らんと願ふ。之れ敗亡者「敗亡」の因なり。」（一一四）
「知見ある賢者、聖者は、世に斯の如き敗亡あることを知りて、彼は安隱の世界に生る。」（一一五）

【一】敗亡者の種類を擧げて一一之を說明す。

賤人經第七

是の如く我聞けり。一時世尊舍衞城の祇陀林「と云ふ」給孤獨者の遊園に住し給へり。其の時世尊朝時に內衣を著け、鉢と衣とを携へて受食の爲に舍衞城に入り給へり。此の時に當り事火婆羅墮闍梵志の家に於て、神火點され供物捧げられて居たり。其より世尊は舍衞城に於て次第に食を乞ひつつ、事火婆羅墮闍梵志の家に近づき給へり。事火婆羅墮闍梵志は世尊の遠くより來り給へるを見たるが、見るや「否や」、世尊に次の如く白せり。

「圓頭、其の處に「留まれ」、沙門、其の處に「留まれ」、賤人、其の處に「留まれ」。」

斯く云ふや、世尊は事火婆羅墮闍梵志に向ひて次の如く宣へり、

「婆羅門、汝は賤人、幷に賤人たる所以の法を知れりや。」

「友瞿曇、我は賤人をも、賤人たる所以の法をも知らず。願くは尊瞿曇、我に敎を垂れよ、我之によりて賤人、將又賤人たる所以の法を知らん。」

「さらば婆羅門、聽け、善く思念せよ、我「之を」語らん。」

「唯唯、友」と事火婆羅墮闍梵志は世尊に應答し、世尊は下の如く述べ給へり。

「人にして忿と恨とを懷き、姦邪にして「他の美德を」覆ひ、謬見を有ち且つ詐心あるもの、之を賤人なりと知れよ。 《一六》

此の世にありて、生類の一度生のものにても、二度生のものにても、之を害ひ、生類に對し、慈愛心を有たざる、之を賤人なりと知れよ。 《一七》

村落都邑を毀ち、「又たは兵を以て」圍み・壓制者として普く「世に」知らるるもの、之を賤人なりと知れよ。 《一八》

村落にありても、林間にありても、他人の有に屬し、與へられざるに、盜心よりして「之を」取るもの、之を賤人なりと知れよ。 《一九》

借債ありて、督促せらるるや、「我汝に借債なし」と云ひて「之を」遁るる、之を賤人なりと知れよ。 《二〇》

些少のものを欲がりて、路行く人を害ひ、些少のものを奪ふ、之を賤人なりと知れよ。 《二一》

人の自己のため、他人のため、又財のため、證人と

して問はるるに、妄語を吐く、之を賤人なりと知れよ。（一二二）

或は暴力を用ひて、或は相合意して、親族又は朋友の妻と交る、之を賤人なりと知れよ。（一二三）

〔己財〕豊にして、母又は父の年邁き、朽ち衰へたるを養はざる、之を賤人なりと知れよ。（一二四）

母、父、兄弟、姉妹或は義母を打ち、又は語を以て惱ます、之を賤人なりと知れよ。《一二五》

有利の事を問はれながら、非利の事を敎へ、(一)隱して〔事を〕告ぐる、之を賤人なりと知れよ。（一二六）

邪の事をなして、「〔何人も〕我が爲せしこと」を知らざれ」と祈り、隱事をなすもの、之を賤人なりと知れよ。《一二七》

他人の家に行きて、美食を饗され、〔彼の〕來れる時は之を返し饗さざる、之を賤人なりと知れよ。《一二八》

人の、婆羅門、沙門、又は他の乞食者をば、妄語を以て欺くもの、之を賤人なりと知れよ。《一二九》

食時に來れる婆羅門又は沙門をば、語を以て惱まし、且つ〔食を〕與へざる、之を賤人なりと知れよ。《一三〇》

此の世にありて、愚癡に包まれ、些少のものを欲がりて、無實の事を語れるもの、之を賤人なりと知れよ。《一三一》

己を稱め、他を蔑み、己の慢心の爲に卑くなれるもの、之を賤人なりと知れよ。《一三二》

怒り易く、慾深く、邪欲あり、誑き慳む〔性ありて〕、慚愧の心なきもの、之を賤人なりと知れよ。《一三三》

佛、或は又出家にても在家にても、佛の弟子を毀るもの、之を賤人なりと知れよ。《一三四》

阿羅漢にあらずして阿羅漢なりと自稱し、梵天を併せたる世界に於て盜〔稱〕者たる、之れ賤人中最劣の

ものなり。我が汝に說き示したるもの、此等は「總て」賤人と稱せらる。（一三五）

生によりて賤人たるにあらず、生によりて婆羅門たるにあらず、業によりて賤人となり、業によりて婆羅門となるなり。（一三六）

我が此の指示する所の如く、之を知れ。養犬族に生れたる闡陀羅の一兒あり麻登伽とて世に知らる。（一三七）

彼摩登伽は得難き譽の極に達し、多くの刹帝利族、婆羅門族のものは、彼に奉事せんが爲に來れり。（一三八）

彼は天車に乘りて、塵垢なき大道に「就き」、欲貪を離れて昇梵天車となれり。生も彼の梵界に昇るを妨げざりき。（一三九）

念誦者の家に生れ、神咒を伴とする婆羅門も、若し常に邪なる業に近づかば、彼此の世にありては毀訾を蒙り、來世には惡趣に生れん。生も彼の惡趣「に生れ」毀訾「に逢ふ」を防ぐことなし。（一四〇、一四一）

生によりて賤人たるにあらず、生によりて婆羅門たるにあらず、業によりて賤人たり、業によりて婆羅門たり。」（一四二）

斯の如く宣ふや、事火婆羅墮闍梵志は世尊に白して云へり、

「奇なる哉尊瞿曇、奇なる哉尊瞿曇、譬へば尊瞿曇、覆へれるものを起し、掩はれたるものを發き、「道に」迷へるものに道を示し、「眼あるものは形を見ん」とて暗中に燈火を掲ぐるが如く、斯の如く尊瞿曇は種種の方便によりて法を說示す。此の我は世尊瞿曇に歸依す、法及び比丘衆にも亦「歸依す」。尊瞿曇、今日より始めて生を終るに至るまで、歸依せる優婆塞として我を攝受せよ。」

【一】二度生のものとは卵生の生類を云ふ、是れ此等は一度卵として

て生れ、二度卵より孵化して一個の生類となるが故なり。

【二】先方の了解せざる文句を用ひ、隱し語を以て告げ、又は長時弟子附をさせたる上にて教ふ。

慈經第八

寂靜の道に達して、善利〔を求むる〕に巧なるものの爲すべきことは、〔彼〕能あり、直く、正しく、愛語あり柔和にして、慢に過ぎざるべきなり。（一四三）

足ることを知り、養ひ易く、事少く、生活も亦簡素に、諸根寂靜にして、智あり、自負心なく、諸家の間〔に往來する〕に貪欲の念あるなかれ。（一四四）

他の智者の、ために〔彼を〕咎むるが如き下劣の事は爲すまじきなり。一切有情安樂に、安穩なれ、快樂なれ。（一四五）

凡そ物の生を有するもの、弱きも強きも漏す所なく、長き、さては大なる、中なる、短き、小さき、或は太き、

見しことあるも、見しことなきも、遠きに、さては近きに住める、已に生れ出たるもの、或は生を求むるもの、一切有情快樂なれ。（一四六、一四七）

何人も他を欺くことなく、假令何處にありとも他を輕んずること勿れ。怒り憤りて、互に他の苦痛を願ふこと勿れ。（一四八）

恰も母の己の兒、〔其の〕獨兒を命を以て愛護するが如く、然く總て有情に對して、無量の〔喜悅〕心を起せ。（一四九）

一切世間對して、慈悲心無量の〔喜悅〕心を起せ。上下縱横、障礙なく、怨心なく、敵意なく。（一五〇）

立ち、歩き、坐り、さては臥しても、彼眠らざる限り、此の心を保持せば、此の教に於て、之を（二）梵住なりと云ふ。（一五一）

〔邪〕見に接することなく、戒徳ありて〔知〕見を具有

し、諸の欲望を制せば、「彼は」更に母胎に入ることあらじ。 《一五二》

【一】梵住とは最上の生活の道を云ふ。

(二)雪山住經第九

薩「今日十五日布薩日「に當り」、快き夜は來れり、來れ、我等は高名の師、瞿曇を拜せん。」 《一五三》

雪「斯る人の意は、一切有情に對して、安立「不動」なりや、可愛不可愛「の境に對ひて」、彼の思惟する所に節制ありや。」 《一五四》

薩「斯の如き人の意は、一切有情に對して安立「不動」なり、而して可愛不可愛「の境に對ひて」、彼の思惟する所には節制あり。」 《一五五》

雪「「彼は」與へられざるを取らざるや、生あるものに「對して」自制心ありや、「彼は」怠惰より離れたりや、禪思を廢せざるや。」 《一五六》

薩「彼は與へられざるを取らず、生あるものに「對して」自制心あり、而も佛は怠惰より離れ、禪思を廢てず。」 《一五七》

雪「彼は 妄言を語らざるや、麤惡語を吐かざるや、彼は離間語を發せざるや、綺語を用ひざるや。」 《一五八》

薩「彼は妄言を語らず、麤惡語を吐ず、又離間語をも發せず、智慧を以て利なることをのみ彼は語る。」 《一五九》

雪「「彼は」諸欲に染せられざるや、「彼の」心は「瞋恚に」擾されざるや、「彼は」愚癡を超えたりや、「彼は」諸法「を見るの明」眼ありや。」 《一六〇》

薩「彼は諸欲に染せられず、又「其の」心は「瞋恚の爲に」擾されず、所有ゆる愚癡を超えて、佛は諸法「を見るの明」眼を具す。」 《一六一》

雪「「彼は」明智を具ふるや、「彼は」清淨行の人なり

や、彼の諸漏は滅盡せりや、「彼は」更に世に生るゝことあらざるや。」《一六二》

尊「「彼は」明智をも具へ、又清淨行の人なり。彼は所有ゆる漏を盡し、更に生を受くることなし。《一六三の一》

(二)智者の心は、業と語とに於て充足せり。明と行とを具足せる「彼瞿曇」を、汝の讃歎するは是し。《一六三の二》

智者の心は、業と語とに於て充足せり、明と行とを具足せる「彼瞿曇」を、汝の隨喜するは是し。《一六三の三》

智者の心は、業と語とによりて充足せり。來れ「我等は」明と行とを具足せる、彼瞿曇を拜せん。《一六四》

鹿の脚を有ち、痩せ細りて、智あり、來れ、我等は少食無欲にして、樹林の間に禪思せる瞿曇を拜せん。《一六五》

獅子の如く、獨行の象の如く、諸欲を愛求することなき「智者」に近づきて、死の羅網を脫るる「の道」を

問はん。《一六六》

指示者、演說者、一切法を熟知し、怨と怖とを超えたる佛、瞿曇に我等は問はん。」《一六七》

尊「世界は何物より起り、何物に親み、何物に著し、何物に惱まさるるや」《一六八》

世「世界は(三)六物より起り、六物に親み、六物に著し、六物に惱まさる。」《一六九》

尊「世人の、爲に惱まさるゝ、彼の取著は何物ぞや、出離「の道」を問はれて語れ、如何にしてか苦より脫るべきぞ。」《一七〇》

世「(四)世に五種の欲樂あり、意「の欲樂」は第六なりと示さる。此等に於て貪欲を除き、斯の如くして苦より脫る。汝のために說かれたる所、是れ世間出離「の道」なり。之を我、汝がために說く、斯の如くして苦より脫る。」《一七一、一七二》

雪「此の世に於て何人が暴流を渡り、此の世にありて何人が大海を超ゆる。立處なく支なき深海に入りて、何人が沈まざるものぞ。」 《一七三》

世「常に戒を守り、智ありて安靜なる人、內省あり正念ある人は、渡るに難き暴流を渡る。 《一七四》

欲愛の相を離れ、所有ゆる結縛を超え、歡樂の心を盡したる人、彼は深海に沈むことなし。」 《一七五》

雪「深智を具へ、微妙の義を見、我有なく、欲と有とに執せず、一切處に解脫し、天路を愛樂する彼の大仙士を見よ。 《一七六》

高名を得、微妙の義を見、智慧を與へ、欲藏に執せず、一切を解了せる智者、聖路を踏める、彼の大仙士を見よ。 《一七七》

今日我等は善きものを見、美しき曉に「逢ひ」、目出たく起き出たり。暴流を渡り、漏を盡したる正覺者を拜したれば。 《一七八》

此等十百の夜叉、通力あり譽あるもの、總て汝に歸依す、汝は我等の無上の師なり。 《一七九》

我等は村より村へ、山より山へ徘徊せん、正覺者と、其の圓成の法とを拜して。」 《一八〇》

【一】此の經は薩多琦利住卽ち薩多山住(Sātāgira)夜叉と、雪山住(Hemavata)夜叉との佛の威德に關する問答に始まり、兩夜叉佛を拜して、雪山住夜叉の佛に歸依し、歸依の誓言を述ぶるに終る。「薩」と記せるは薩多山夜叉、「雪」と記せるは雪山住夜叉、而して「世」と記したるは世尊なりと知るべし。【二】一六三の二、一六三の三の兩偈はファウスベルの英譯には之を出さず、クマーラスワーミの英譯には之を出せど、以下一六九偈に至る六偈を兩夜叉の語となせり。【三】六內外處。【四】眼耳鼻舌身の五欲にして之に意の一を加へて六欲となる。

阿吒嚩迦經第十

是の如く我聞けり。一時世尊阿吒毘なる阿吒嚩迦夜叉の棲處に住し給へり。時に阿吒嚩迦夜叉は世尊の

居給へる處に近づき來れり、近づき來りて、彼は世尊に白して云へり、
「出行け、沙門」「諾、友」と云ひて世尊は出で給へり。
「入來れ、沙門」「諾、友」と云ひて世尊は入り給へり。
二たび又阿吒嚩迦夜叉は世尊に白して云へり、
「出行け、沙門」「諾、友」と云ひて世尊は出で給へり。
「入來れ、沙門」「諾、友」と云ひて世尊は入り給へり。
三たび又阿吒嚩迦夜叉は世尊に白して云へり、
「出行け、沙門」「諾、友」と云ひて世尊は出で給へり。
「入來れ、沙門」「諾、友」と云ひて世尊は入り給へり。
四たび又阿吒嚩迦夜叉は世尊に白して云へり、
「出でよ、沙門」「友、我は出行かざるべし。若し汝の我に爲すべきことあらば、之を爲せ」
「沙門、我汝に問を爲さん。汝若し我に答へずんば、汝の心を撓し、汝の胸を裂き、汝の脚を捉へて恒河の彼岸に投せん」「友、天魔梵界を併せたる此の世界に於て、沙門婆羅門、天人を併せたる羣集の中に於て、我が心を撓し、我が胸を裂き、我が脚を捉へて恒河の彼岸に投じ得べきものを見ず。されど友、汝の好む所に隨ひて問へ。」

時に阿吒嚩迦夜叉は偈を唱へて世尊に白せり、
「此の世にありて何物か人間最上の財なる、何を行じてか樂を齎すぞや、何物か諸味中の最上味なる、如何に活くるを最善なりと人は云ふや。」（一八一）
「信仰は人間最上の財なり、法を行へば樂を齎す、眞諦は諸味中の最良味にして、智によりて活くるを最良の生活なりと人は云ふ。」（一八二）
「如何にしてか暴流を渡り、如何にしてか大海を渡る、如何にしか苦惱を超え、如何にしてか淸淨なる。」（一八三）

「信仰によりて暴流を渡り、精勤によりて大海を〔渡り〕、精進を以て苦惱を超え、智慧によりて極淨となる。」《一八四》

「如何にして智慧を得、如何にして財寶を獲、如何にして名聞を獲、如何にして交友を結び、此の世より彼の世に至るに、如何にせば憂なかるべきや。」《一八五》

「諸聖の〔說き給へる〕涅槃獲得の法を信じ、精勤にして明辨なるものは、聞欲によりて智慧を得。《一八六》

適宜に〔事を〕爲し重擔を負ひ、努力する者は財を獲、眞實によりて名聞を獲、施す者は交友を結ぶ。《一八七》

信心ありて在家の生活を營む人に、眞・法・堅・施等、此等四種の法あらば、彼來世に到りて憂ふることあらじ。《一八八》

望むらくは廣く他の沙門、婆羅門にも問へ、若し此の世に眞實・自調・捨施・忍辱よりも更に勝れるものあらば。」《一八九》

「如何で我今、更に多くの沙門・婆羅門に問ふべき、我今日來世の利益なるもの、之をも覺り得たり。《一九〇》

佛の阿吒毘に住せんが爲に來り給ひしは、我が利益の爲なりき、我は今日施して、大果報を〔得べき〕所を知る。《一九一》

我は村より村へ、都より都へ辿り行かん、正覺者と、其の圓成の法とを禮して。《一九二》

最勝經第十一

歩き若しくは立ち、坐り又は臥して、〔其の身を〕屈げ〔又は〕伸ばす、是れ身の動作なり。《一九三》

骨と筋とによりて繫がれ、内皮と肉とによりて塗られ、外皮のために覆はれて、身は有のままには見ゆることなし。《一九四》

身は腸に滿ち、胃に滿ち、肝塊・腹・心・肺・腎・幷に脾に「滿つ」。（一九五）

鼻液・痰・汗・又肪・血液・骨節髓・膽汁・將た漿液に「滿つ」。（一九六）

又身の九箇の孔よりは、不淨常に流れ出づ、眼よりは眼渣、耳よりは耳蠟。（一九七）

鼻よりは鼻液、口よりは時ありては膽汁を吐き、「時ありては」又痰を吐く、「而して全」身よりは汗と垢とを「排泄す」。（一九八）

又其の頭は洞にして、腦髓を以て滿たさる、愚者無智に誘かれて、之を淸淨なりと思へり。（一九九）

又其が死して臥する時は、脹れ膨れ靑紫色となり、墓に棄てられて、親族も之を顧みず。（二〇〇）

狗も之を噉ひ、野干、狼、蟲類も亦「之を噉ふ」、鴉も鷲も他の生類の「世に」存するものも亦之を噉ふ。（二〇一）

此の世に於て、智慧を具へたる比丘は、佛の語を聞きて之を熟く知る、是れ彼は如實に「之を」見るが故なり。（二〇二）

此の「生ける身」の如く、亦彼の「死せる身」もあらん、彼の「死せる身」の如く、亦此の「生ける身」もあらん、内にも外にも、身の愛欲を斷除せよ。（二〇三）

此の世に於て愛欲を斷ち、智慧を具へたる彼比丘は、不死、寂靜、不滅の涅槃の道に達したるなり。（二〇四）

此の兩足「の身は人に」愛せらるれど、不淨惡臭にして、種種の汙穢其の中に滿ち、又處處より滲り出づ。（二〇五）

斯の如き身を有ちて、人己を揚げんと思ひ、若しは他を貶さば、彼盲にあらずして他何をか「盲と云ふ」。（二〇六）

牟尼經第十一

親交よりは怖畏生じ、家〔の生活〕よりは穢生ず。家なく交なき、是れ實に牟尼の見なり。《二〇七》

起りたる〔煩惱の芽〕を拔きて〔新に〕植うることなく、其の既に生えたるは之を長ぜしむることなくば、此の獨行〔の人〕を牟尼と呼ぶ。此の大仙は寂靜の道を觀たるなり。《二〇八》

〔煩惱の〕因を思量し〔其の〕種を辨へ知りて、之を愛する心を長ぜしむることなくば、此の生〔死〕の終を見る牟尼は、論量を捨てて〔更に生者の〕數に入ることなし。《二〇九》

所有ゆる世界を知りて、其の中一をも之を愛求することなく、貪を離れ欲を盡したる彼牟尼は、彼岸に達して〔更に業を〕積むことなし。《二一〇》

所有ゆるものに勝ち所有ゆるものを知れる智者、所有ゆる法に汚さるることなく所有ゆるものを捨て、愛盡の上に於て解脫を得たるもの、彼をも賢者は牟尼なりと知る。《二一一》

智慧力あり、戒德と禁行とを具へ、安定あり、禪思を樂み、正念あり、著より脫れて、剛愎なく、煩惱なきもの、彼をも賢者は牟尼なりと知る。《二一二》

獨り遊行して怠惰ならざる牟尼、毀呰と稱譽とに〔心を〕動かさず、音聲に怖ざる獅子の如く、網に掛らざる風の如く、水に浸ざる蓮の如く、他に導かれずして他を導くもの、彼をも賢者は牟尼なりと知る。《二一三》

浴場に〔立てる〕柱の如く峙ち、人の語を盡して〔譽むるも毀るも關せず〕、欲を離れ諸根を安じたるもの、彼をも亦賢者は牟尼なりと知る。《二一四》

己を立てて梭の如く直くし、諸の邪業を厭嫌し、正と不正とを顧るもの、彼をも亦賢者は牟尼なりと知る。《二一五》

己を制して邪業を行はず、幼年にも中年にも牟尼は自ら攝す。〔他に〕惱まされず又何人をも惱ますことなし、彼をも亦賢者は牟尼なりと知る。《二一六》

他の施によりて活くるものは〔器の〕上部より、中部より、或は他の處より食を〔取りて〕與へらる、而も褒めず又貶すことなし、彼をも亦賢者は牟尼なりと知る。《二一七》

〔諸方に〕遊行し、交合を斷てる牟尼、年壯にして、何物にも縛せらるることなく、憍慢と怠惰とより離れ、解脱を得たるもの、彼をも亦賢者は牟尼なりと知る。《二一八》

世間〔の事〕を覺り知り最上利を見、暴流と大海とを越えたるもの、斯の如く結を破りて縛なく漏なき人、彼をも亦賢者は牟尼なりと知る。《二一九》

兩者の生活も行爲も異りて同じからず、在家人は妻を養ひ我意なく善德あり、他の生を害ふに於て在家人は自制心なし、牟尼は自ら制して常に生物を護る。《二二〇》

猶ほ青頸にして、虚空を飛ぶ有冠鳥の、白鳥の疾きに及ばざるが如く、斯の如く在家者は、比丘、牟尼の〔世間より〕遠ざかりて、林間に禪思せるものには如かず。《二二一》

小品第二

寶經第一

此處に集り來れる諸鬼神等、地〔居〕のもの、空中〔住〕のもの、諸鬼神等悉く幸なれ、其より意を留めて〔我が〕說く所を聽け。《二二二》

されば諸鬼神等總て意を用ゐよ、晝夜に供物を奉施

する、「此の」人間に慈悲を垂れよ、されば精勤にして彼等を護れ。（二二三）

若しは此「の世」に於て、若しは來世に於て、財と云ふもの、若しは天界に於て勝れたる寶と云ふもの、我等の如來に等しきもの「他に」之あるなし。此の勝れたる寶は佛にあり、此の眞諦によりて吉瑞あれ。（二二四）

定心に住したまへる釋迦牟尼の證りたまひし「煩惱」滅盡・離欲・不死・勝妙「の法」、此の法に等しきものは一として之あるなし、此の勝れたる寶は法にあり、此の眞諦によりて吉瑞あれ。（二二五）

諸佛の長者の讃歎し給ひし清淨「定」、世に無間定と稱ふるもの、此の定に同じきもの「他に」之あらず、此の勝れたる寶は法にあり、此の眞諦によりて吉瑞あれ。（二二六）

(一)善人に稱め歎へらるる八輩の人は此等四雙の人なり、此の應供の徳ある善逝の弟子者、彼等に施「したる者」には大果報あり、此の勝れたる寶は僧にあり、此の眞諦によりて吉瑞あれ。（二二七）

堅固なる心を以て專修し、瞿曇の敎に於て欲なく、不滅に沒入して、最上利を得、等閑に獲て寂靜の樂を享く、此の勝れたる寶は亦僧にあり、此の眞諦によりて吉瑞あれ。（二二八）

「城門外に立てる」柱の「固く」大地に入りたるは四風も之を搖がさざるが如く、「四種の」聖理を諦觀せる正士は之に喩ふべきなりと我は云ふ、此の勝れたる寶は亦僧にあり、此の眞諦によりて吉瑞あれ。（二二九）

深智の「佛の」說きたまひし「四種の」聖理を證るものは、假令放逸に陷ること多しと雖ども、彼等(二)第八生を受くることなし、此の勝れたる寶は亦僧にあり、此の眞諦によりて吉瑞あれ。（二三〇）

身見と疑と戒禁と、此の三種の法の些にても存するものは、彼が知見を成就すると共に捨離せられて殘る所なし、彼は又四惡趣より脫れ、又六逆罪を作ること能はず、此の勝れたる寶は僧にあり、此の眞諦によりて吉瑞あれ。《三一》

彼若し身、語、又は意を以て邪業を犯さば、假令微なりと雖も彼は之を祕すること能はず。是れ見道〔の聖〕者は〔事を祕するに〕堪へずと稱せらるるが故なり、此の勝れたる寶は僧にあり、此の眞諦によりて吉瑞あれ。《三二》

夏の月の初の暑にて、林樹の頂の、花を著けたるが如く、之に喩ふべき尊き法を〔佛は〕說きたまへり、涅槃に導く最上の〔法を、人天の〕利益のために、此の勝れたる寶は佛にあり、此の眞諦によりて吉瑞あれ。《三三》

尊き智あり、尊きものを與へ、尊きものを運ぶ尊者無上士は、尊き法を說き給へり、此の勝れたる寶は佛にあり、此の眞諦によりて吉瑞あれ。《三四》

古きは滅び新なるは起ることなく、心は未來の生欲より離れたり、種子を盡し欲を增長せざる、此等の賢者の滅に入ること恰も此の燈明の如し、此の勝れたる寶は僧にあり、此の眞諦によりて吉瑞あれ。《三五》

此處に集り來りたる諸鬼神、地上のものも、虛空〔住〕のものも、天人に奉事せられたまへる、如來、佛を拜せん、〔之によりて〕吉瑞あれ。《三六》

此處に集り來りたる諸鬼神、地上のものも、虛空〔住〕のものも、天人に奉事せられたまへる如來、法を拜せん、〔之によりて〕吉瑞あれ。《三七》

此處に集り來りたる諸鬼神、地上のものも、虛空〔住〕のものも、天人に奉事せられたまへる如來、僧を拜せ

ん、「之によりて」吉瑞あれ。 （二三八）

【一】預流、一來、不還、阿羅漢の四聖位を四雙と云ひ、之を一一向果に分つが故に八輩と云ふ。 【二】七生の間に必ず極果に達するをいふ。

（一）臭穢經第二

「サーマーカ・チングラカ・チーナカ・葉果・根果・水生果等、義しき人より、法によりて、得たるを食ひて、欲を貪らず、僞を語らず。 （二三九）

他の人より與へられ、善く炊がれ、善く調へられ、淸淨にして美味なる粳米の飯を喫するもの、迦葉、彼は臭穢を食ふなり。 （二四〇）

「臭穢「の謗」は我に當らず」と、梵親、汝は粳米の飯と善く調理せる鳥肉とを併せ食ひながら、而も斯の如く云ふ、迦葉、汝に此の義を問ふ、如何なる類が果して汝の所謂臭穢なる。」 （二四一）

「殺生・殘害・割截・囚縛・竊盜・妄語・詐欺・哄誘・無用の讀誦、他人の妻女と交る、これ臭穢なり、肉食は「臭穢に」あらず。 （二四二）

此の世にありて諸欲を制せざる人、諸味を貪り、不淨の輩と交り、空無の見を抱き、不公平にして、跡を追ふこと難きもの、これ臭穢なり、肉食は「臭穢に」あらず。 （二四三）

粗暴、慘酷にして、後言を言ひ、友に不實に、無慈悲にして、極めて傲慢なり、性吝嗇にして、何人にも物を與ふることなき、これ臭穢なり、肉食は「臭穢に」あらず。 （二四四）

忿怒・憍恣・剛愎・頑迷・虛僞・嫉妬及び誇言、慢過慢、不良の徒と交はる、これ臭穢なり、肉食は「臭穢に」あらず。 （二四五）

此の世にありて邪行の性あり、債務を果さず、私告を

なすもの、常法に背き、正義を裝ひ、此の世にありて惡事を爲す最劣等の人、これ臭穢なり、肉食は〔臭穢に〕あらず。《二四六》

此の世に於て、有情に對し自制心なく、他の〔財を〕奪うて、之を害するに餘念なく、悖德、多欲にして、麤暴、無禮なる、これ臭穢なり、肉食は〔臭穢に〕あらず。《二四七》

此等〔邪行に〕耽り、〔道に〕背き、〔德教を〕侵し、常に邪行を事とし、死して黑闇に入り、頭を倒にして泥犂に入るもの、これ臭穢なり、肉食は〔臭穢に〕あらず。《二四八》

魚肉獸肉も・斷食も・裸形も・圓頭も・結鬘も・塵垢も・獸皮の服も・火天の祭祀も・若しは又此の世多くの不朽の苦行・眞言・供犧・祭祀・時季を祀ることも、疑念を超えざる有情を淨くすることなし。《二四九》

聞く所に於て防護し、諸根に克ちて遊行す、法によりて立ち、公直に柔和なるを樂み、著を超え、所有ゆる苦を捨てたる賢者は、見聞する所に若かざることなし。」《二五〇》

如上の義を世尊迦葉は幾度となく說き給へり、〔吠陀〕神咒に通ぜる〔婆羅門〕は亦之を知れり、臭より離れ依著を解き跡を追ふこと難き牟尼は、種種の偈を以て之を明し給へり。《二五一》

佛の善く說き給ひし〔言〕、臭穢なく一切の苦を離れたる道を聞き、卑下の心を以て如來を禮拜し、卽處に得度したり。《二五二》

【一】原語の Āma には生、調理せざる等の義あり、gandha には香、臭の義あれば、生臭、なまぐさ、惡臭などと譯するを當れりとすべきか、今は簡に隨ひて單に臭穢經とせり、之は過去の迦葉佛と、元其の友たりし婆羅門との間に交換せられし問答にして釋尊は之を引用し給ひしなり、初の三偈は婆羅門の語、其より以下は迦葉佛の語、而して最後の二偈は釋迦牟尼佛の語なり。

慚經第三

慚恥を捨て且つ〔之を〕厭ひ、「我は〔汝の〕友なり」と云ひて、而も爲し得べき事を爲さざるものは、これ「我が〔友に〕あらず」と知れ。《二五三》

朋友の中に〔交りて〕、謂なき愛語を用ふるものを、賢者は、唯言ふのみにて行はざる人なりと知る。《二五四》

常に努めて、破壞を求め、只管過失を觀る者は友にあらず。兒の〔母の〕胸に賴るが如く〔賴りて〕、他の爲に〔其の間を〕裂かるることなきもの、彼こそ〔眞の〕友なれ。《二五五》

果報を〔望むものは〕人間の重擔を負ひて、歡喜を生ずべき事、稱讃を齎すべき樂を增修す。《二五六》

遠離の味と、寂靜の味とを味ひ、法喜の妙味を嘗めて、怖畏なく〔又〕邪業なし。《二五七》

大吉祥經第四

是の如く我聞けり。一時世尊は舍衞城の祇陀林と云ふ給孤獨者の遊園に住し給へり。時に容色絕妙なる一人の天子は深夜隈なく祇陀林を照して、世尊の居給へる所に近づき來れり。近づき來るや、彼は世尊を禮拜して一方に立てり。一方に立ちたる彼の天子は偈を以て世尊に白して言へり。

「慶福を求むる衆の天と人とは、吉祥を思念せり、〔願はくは世尊〕最上の吉祥を示し給へ。」《二五八》

「愚者に親まずして賢者に親み、禮敬すべき人を禮敬する、これ最上の吉祥なり。《二五九》

適宜のところに住み、前世には善業を作し、〔而して〕己は正しき誓願を起したる、これ最上の吉祥なり。《二六〇》

多くの學と術と律とは善く習ひたる、言語は能く述べたる、これ最上の吉祥なり。《二六一》

母と父とに孝順にして、子と妻とを愛護し、又「其の」職務は平和なる、これ最上の吉祥なり。《二六二》

施與、法行、親族を愛護し、「其の」行には過失あらざる、これ最上の吉祥なり。《二六三》

邪行を飲酒にも捨離し、自ら約し、法に於て怠惰ならざる、これ最上の吉祥なり。《二六四》

恭敬と・卑遜と・滿足と・知恩と・而して時時法を聽聞する、これ最上の吉祥なり。《二六五》

忍耐あり、軟語あり、又沙門を見、折折、法の談話をなす、これ最上の吉祥なり。《二六六》

苦行と、梵行と「あり」、聖諦を見、涅槃を證知する、これ最上の吉祥なり。《二六七》

世俗の法に接觸して、其の心動くことなく憂なく、愛慾なくして安隱なる、これ最上の吉祥なり。《二六八》

此等「の事」を行ふものは、一切處に敗らるることなく、一切處に慶福を受けん、これ彼等が最上の吉祥なり。」《二六九》

針毛經第五

是の如く我聞けり。一時世尊は伽耶城に住し給ひ、針毛夜叉の棲處に「ありて」石牀に「坐し給へり」。其の時兇惡夜叉と針毛夜叉とは世尊の側を過れり。時に兇惡夜叉は針毛夜叉に語りて言へり、「彼は沙門なり」、「彼が沙門なりや、將た似非沙門なりやを知らざる間は、彼は似非沙門にして、沙門にあらず」と。其より針毛夜叉は世尊の居給へる所に近づき來れり。近づき來りて世尊の身に觸れ當れり。時に世尊は其身を退け給へり。針毛夜叉は世尊に白して

言へり。
「沙門、汝は怖れたりや。」「友、我は汝を怖るることなし、されど汝の「我が身に」觸るるは邪事なり。」「沙門、我汝に問を爲さん、若 汝我に答へずんば、汝の心を撓し、胸を裂き、將た汝の兩足を捉へて、恒河の彼岸に投ぜん。」「友、我は天魔梵界を併せたる世界に於て、沙門婆羅門、天人を併せたる羣集の中に於て、我が心を撓し、胸を裂き、兩足を捉へて恒河の彼岸に投ぜんものを見ず、されど友、汝の望に隨ひて之を問へ」と。其より針毛夜叉は世尊に對し偈を唱へて言へり、

「貪と瞋とは何處より起り、非樂と樂 身毛竪立とは何處より生じ、疑は何處より出でて、心を困むること幼童の鴉を「困むるが」如くなる。」 (二七〇)

「貪と瞋とは此「の身」より起り、樂と非樂と身毛竪立とは此「の身」より生じ、疑は此「の身」より出でて、心を困むること幼童の鴉を「困むるが」如くなり。(二七一)

「此等は」愛情より生じ自己より起ること、尼拘律陀樹の幼芽の如し、廣く諸欲に著すること、蔓草の林間に蔓るが如し。 (二七二)

夜叉よ、聞け、「邪惡の」何處より起るやを知るものは、之を除く、斯くて彼等は此の渡り難くして、渡られしことなき暴流を渡る、再び生を享けざらんがために。」 (二七三)

法行經第六

法行、梵行、これ最上の珠寶なりと「賢者は」云ふ、俗家を「出でて」得度し、出家の身となりたるものには。 (二七四)

彼若し惡舌にして、獸の「如く他を」害ふを以て樂と

せば、其の生活は邪惡にして、自己の塵垢を增す。爭論を樂み、愚癡の法に覆はれたる比丘は、佛の說き示し給ひし法をも、之を知ることなし。（二七五、二七六）〔彼は〕無明に誘はれて、心を修練せる人を惱まし、煩惱の泥洹に導き行く道なることを知らず。（二七七）惡趣に陷り、胎より胎に〔轉じ〕、闇より闇に〔轉ず〕、彼、斯の如き比丘こそ死後苦惱を受くれ。（二七八）恰も〔糞〕滿ちて、年を經たる糞坑の如く、等しく亦執著心あるものは、之を淨くすること難し。（二七九）諸比丘、斯の如きを、家に依る人、邪慾あり、邪分別あり、邪行處〔邪〕親近處の人なりと知れ。（二八〇）總て相和合して彼を斥け、塵埃〔の如く彼〕を除き、芥屑〔の如く彼〕を拂へ。（二八一）其より、沙門にあらずして、沙門の思をなせる彼の空心の徒を斥けよ、邪慾、邪行處〔邪〕親近處〔の徒〕を除き、己清淨にして、清淨の人と交り、思惟あり、其より和合し、智慧ありて、苦惱を滅盡せよ。（二八二、二八三）

梵志法經第七

是の如く我聞けり、一時世尊は舍衞城の祇陀林と呼ぶ給孤獨者の遊園に住し給へり。其の時拘薩羅に屬する多數の大家の婆羅門の年老い、年長け、年邁き、齡高く、耄期に達したるもの等、世尊の居給へる處に近づき來れり。近づき來るや、彼等は世尊と共に相會釋し、歡喜すべき談話をなしたる後、彼等は一方に坐したり。一方に坐したる彼等大家の婆羅門は世尊に白して下の如く言へり。

「尊、瞿曇よ、今の婆羅門は、古昔婆羅門の婆羅門道を守れりや。」「汝等婆羅門、今の婆羅門は、古の婆羅門の婆羅門道を守れることなし」

「願くは尊、瞿曇、我等の爲に古の婆羅門の婆羅門道を宣説せられんことを、若し「爲に」尊、瞿曇を累はすことなくば。」「然らば汝等婆羅門、聽け、善く之を思念せよ、我之を語らん。」「唯唯、尊」と。彼等大家の婆羅門は世尊と應答をなし、世尊は次の如く說き給へり、「往昔の仙士は、自ら制する苦行者なりき、五種の慾を捨てて、己の利を行へり。（二八四）

婆羅門には、獸畜なく、黃金なく、穀類なかりき、「されど彼等は」讀誦の財と穀とを有し大寶藏を護れり。（二八五）

（二）彼等の爲めに調理せられ、戶邊に置かれたる食は、信心を以て調理せられし食を求むるものに施さるべきなりと、彼等は思へり。（二八六）

種種の色に染めたる衣服、臥榻、住屋の類を以て「供養し」、榮ゆる郷村の民も閭國の民も、「共に」婆羅門を拜せり。（二八七）

婆羅門は法に護られて、害ふべからず克つべからず、彼等の大家の戶に立つを妨げたるもの、一人として之あらざりき。（二八八）

四十八年の間、彼等は童子梵行を行へり、古昔の婆羅門は、知と行とを求索せり。（二八九）

婆羅門は他「族の女」を娶らず、彼等は又其の妻を購ふこともなかりき、相愛して住み、相和合して樂めり。（二九〇）

（三）婆羅門は經水の閉止せる妻を除き、又は正しき時の外は、媾遇をなせしことなし。（二九一）

梵行又戒德、廉直・溫厚・苦行、柔和・慈悲及び忍辱をも、亦「彼等は」稱嘆せり。（二九二）

彼等の中にて最第一たり、勇猛堅固なる婆羅門、彼は夢にも媾遇をなせしことなし。（二九三）

此の世にありて彼の行に傚ひし有智者は、梵行と戒徳と忍辱とを稱嘆したり。（二九四）

米と臥榻と衣服と酥と油とを求め、法によりて之を集め、それより供物を調へたり、而して供犧「の時」到りても、彼等は牛を屠らざりき。（二九五）

猶ほ母、父、兄弟、將又他の親族の如く、牛は我等の最上の友たり、是れ彼等より藥生ずるが故なり。（二九六）

彼等は食を與へ力を與へ、同じく色と樂とを與ふ、此の眞意を知りて、彼等は牛を害ふことなかりき。（二九七）

優雅にして長身なり、美容にして譽あり、生れながら婆羅門にして、種種の務に勵む、「斯の如き婆羅門の」世にありし間は其の族は榮えき。（二九八）

「されど」彼等に變化來れり、追追、王者の富と飾りたる婦女とを見るに隨ひて、（二九九）

巧に造り、駿馬を附けたる車、種種に彩りたる絨氈、住屋住處を部部に分ち、程よくしたるをも「見るに隨ひて」、（三〇〇）

婆羅門は牛の羣に圍まれ、美しき女羣を擁する等、大なる人間の樂を貪りぬ。（三〇一）

時に彼等は讃歌を作り、彼の甘蔗「王」に近づき來りて「云へり」、「王には夥多の財と穀とあり、汝の夥しき財を我等に與へよ。」（三〇二）

時に御者の主、王は諸梵志の敎を受けて、馬祠・人祠・正食・勇飲等を滯りなく「行ひ」、此等の祭祀を行ひて「王は」諸梵志に財を與へぬ。（三〇三）

牛・臥榻・衣服・飾りたる婦女、巧に造り駿馬を附したる車、種種に彩りたる絨氈をも亦、（三〇四）

愛すべき住屋を、巧に部部に分ち、諸種の穀物を以て滿たし、「王は」之を諸梵志に與へぬ。（三〇五）

彼等は斯く財を獲て〔更に〕畜積を願へり、欲に溺れて其の愛執益益增長せり、斯くて彼等は讚歌を作りて、再び甘蔗〔王〕の處に近づき來れり。 （三〇六）

「猶は水及び地・金・寶・穀あるが如く、等しく又人には牛あり、牛は生物の資具なり、供獻せよ、汝の寶は夥し、供獻せよ、汝の財は夥し。」 （三〇七）

其より御者の主、王は此等諸婆羅門の敎を受け、數千百の牛を祭祀〔のため〕に屠らせたり。 （三〇八）

〔牛〕は其の脚を以て、角を以て何人をも害ふことなし、牛は野羊の如く、溫柔にして器に〔乳を〕搾らす、〔然るを〕王は彼等の角を捕へ、刃物を以て之を屠らせたり。 （三〇九）

其の時諸天・父天・帝釋・阿脩羅・羅刹は刃物の牛に落つるや、「非法なる哉」と叫べり。 （三一〇）

古昔は慾、飢、老の三病のみ之ありき、此の牛畜の〔屠殺〕よりして九十八〔種の病〕起れり。 （三一一）

此の古き非法の罰杖は〔今に〕傳はり來りて、害なき〔牛〕は害せられ、祭祀者は法に背けり。 （三一二）

斯の如く此の古き非法は、賢者に毀らる、人若し斯の如きを見る時は、祭祀者を毀訾す。 （三一三）

斯くの如くして法の失はるるや、首陀及び吠舍の〔二族〕分れ、刹帝利族亦別立し、婦は〔其の〕夫を蔑みぬ。 （三一四）

刹帝利族、婆羅門親、其の他、族姓に護らるるものは、其の生の爭を捨てて、諸欲の爲に動かさるるに至れり。」 （三一五）

斯の如く宣ふや、彼等大家の婆羅門は世尊に白して言へり「奇なる哉、尊、瞿曇、奇なる哉、尊、瞿曇。譬へば尊、瞿曇、覆へれるを起し、覆はれたるを開き、道に迷へるものに道を示し、「眼あるものは形を見ん」

と云ひて、暗中に燈明を揭ぐるが如く、斯の如く、尊瞿曇は種種の方便を用ひて法を說示す。此の我等は尊瞿曇に歸依す、法及び比丘僧にも亦。尊瞿曇、今日より始めて生を終るに至るまで、歸依せる優婆塞として我等を攝受せられよ。」

【一】彼等のために調理せられ、準備せられて、戶邊に置かれたる食、又は戶邊にて施さるる食物の意なり。【二】經水閉止頃の時を除きては婆羅門は媾遇をなせしことなし（ファウスベル）、婆羅門は經水の閉止したる妻を除き、又正しき時以外には同棲せしことなし（クマーラスワーミ）。【三】印度には刹帝利・婆羅門・吠舍・首陀の四族あり。

船經第八

人「若し他より」法を習ふとあらば、彼を敬ふこと諸天の帝釋天を「敬ふ」が如くすべし、彼の多聞の士は敬はれて、和悅の心を以て法を顯示するなり。（三一六）

賢者は此「の法」を聽取し、思量し、大小の法を修行し、懈怠なく、斯る人と親みて、智者、識者又巧者となる。（三一七）

「人若し」小「人」又は義理を解せず、嫉妬心ある愚者に事へなば、「彼自ら」法を覺らず、疑を除かずして死するに至る。（三一八）

猶ほ人の水多く、流疾き河に入れるに、彼「水に」引かれて流に沿ひ行かば、如何ぞ他を渡すことを得ん。（三一九）

其と等しく、法を覺らず、多門の人に義を問はず、自ら知らず、疑を超えざるもの、彼如何ぞ他をして了知せしむることを得べき。（三二〇）

猶ほ堅固なる船に乘りて、棹と舵とを有し、其の方便を辨へ、善巧にして、思慮あるもの、彼其の船にて多くの他の人を渡さんが如く、其と等しく、吠陀を知り、己心を修練し、多聞にして、不動の質なるもの、

彼〔自ら〕知り、他の注意と精勤心ある人人をして了解せしめん。（三二一、三二二）

されば善良の士、智者、多聞の人と交れ、義を知りて依行し、法を覺れる彼は樂を得ん。（三二三）

何戒經第九

「如何なる戒あり、如何なる行あり、如何なる業を增修してか、人は正しく住立し、又最上利に達するや。」（三二四）

「長老を尊敬し、嫉妬心なく、師を見るには又〔宜しき〕時を知り、法話を聞くに〔正しき〕機を知りて、巧に說きたる〔語〕をば謹みて聽け。（三二五）

時に隨ひて師の前に出で、剛愎を捨てて謙遜なれ、利と法と自制と梵行とを、且つ憶ひ且つ行へ。（三二六）

法を〔其の〕遊樂園とし、法を欣び、法に立ち、法の定に通じ、法を損するの語は之を口にするなく、巧に說きたる正理を〔聽きて其の〕時を過せ。（三二七）

嗤笑・駄言・悲哀及び汙濁・虛僞・僞善・貪慾及び高慢・喧噪・粗暴・及び敗德を捨てて、憍恣なく、安立して行へ。（三二八）

〔語は其の〕精を覺れば、能く說かれたるなり、定は其の精を覺れば、又〔能く〕聞かれたるなり、人若し躁急にして怠惰なれば、彼の智も聞も增加することなし。（三二九）

聖者の示せる法を樂むものは、語と意と又業とによりて最上なり、彼等は寂靜と慈愛と定とに住立し、聞と智との精を會得したるなり。」（三三〇）

精勤經第十

起てよ、坐せよ、睡眠汝等に何の用かあらん、〔苦に〕

惱み、「煩惱の」矢に射られ、且つ苦めるものに、何の睡ぞ。（三三一）

起てよ、坐せよ、寂靜を「獲んが」爲に堅く學べ、死王をして汝等の怠惰にして彼の力に服せることを覺り、汝等を瞞せしむること勿れ。（三三二）

天も人も共に「欲のために」縛せられ、「欲を」求めて存す、此の欲を超え、(一)汝等寸陰も空しく過すこと勿れ、その寸陰を「空」過せるものは泥洹に墜ちて憂ふべきが故なり。（三三三）

怠惰は塵垢なり、怠惰、怠惰より塵垢生ず、精勤により、明によりて、己の「煩惱の」矢を拔け。（三三四）

【一】長老尼偈五。

羅睺羅經第十一

世尊は宣へり「常に共に住めるよりして、汝は賢者を輕んずることなきや、人間「にありて」炬を執る「人」を汝は敬へりや。」（三三五）

羅睺羅は云へり「常に共に住む爲めとて、我は賢者を輕んずることなく、人間「にありて」炬を執る「人」をば我は常に敬へり。」（三三六）

＊　＊　＊

「喜ぶべく、樂むべき五種の欲を棄て、信心により家を離れて、苦際を盡す人となれ。（三三七）

善友と交り、僻り、人里を離れて、音なき處に坐臥し、飮食に量を知れるものとれ。（三三八）

衣服・團食・資具・住處、此等に於て欲を作す勿れ、再び世に生れ出る勿れ。（三三九）

戒律に於て自ら攝し、又五の根に於ても「自ら攝し」念は汝の身に置き、厭嫌「の念」は大なるべし。（三四〇）

愛欲に伴へる淨相を捨て、不淨相のために心を修習

せよ、單一にして定に住せる［心を］。（三四一）
無相念をも亦修習せよ、憍慢心を棄てよ、其の憍慢の除滅よりして、寂靜にして遊行せん。」（三四二）
斯の如く世尊は、此等の偈を以て、常に具壽羅睺羅を教へ給へり。

鵬耆婆經第十二

是の如く我聞けり。一時世尊は阿吒毘なるアッガーラヴ塔廟に住し給へり。其時具壽なる鵬耆婆の師にして尼拘盧陀劫波と名くる長老アッガーラヴが塔廟に於て圓寂に入りてより久しからざりき。時に具壽鵬耆婆は獨坐靜思して斯の如きの念をなせり、「我が師は圓寂に入れりや、或は圓寂に入らざるや」と。時に具壽なる鵬耆婆は夕時靜思より起ちて世尊の居給へる處に近づき來れり。近づき來るや、彼は世尊を禮して一方に坐せり。一方に坐したる具壽鵬耆婆は世尊に白して言へり、「茲に世尊、我獨坐靜思するや、「我が師は圓寂に入れりや、將た入らざるや」と斯の如き念起れり」と。其より具壽鵬耆婆は座より起ちて、法衣を一肩にして、世尊の居給へる方に合掌を向け、偈を以て世尊に白して言へり、
「尊智あり、(二)現法に於て、疑惑を斷ずる師に問ひ奉る、世に知られ、譽高く、心寂靜に歸したる比丘、アッガーラヴにありて死しき。（三四三）
彼の名は尼拘盧陀劫波なり、世尊、［此の名は］世尊の［彼の］婆羅門に與へ給ひし所、堅固の法を見たまへる世尊、彼は世尊を禮拜し解脫を索め、勤めて精進して行じたり。（三四四）
釋氏、普眼者、我等は總て彼の佛弟子を知らんと欲す、我等の耳は聞くの用意をなせり。世尊は我等の

師、世尊は無上者なり。《三四五》

我等の疑惑を斷ち、之を我に告げたまへ、饒智者、圓寂せる比丘を示したまへ、普眼者、我等の中にありて「之を」示すこと、千眼の帝釋天の諸天の「中にありて示すが」如くしたまへ。《三四六》

此の世の所有ゆる纏縛、愚癡の道、無智の伴、疑惑の處、此等は如來に到れば「更に」存することなし、これ如來は最上の人眼なればなり。《三四七》

眞に若し人煩惱を「截つこと」、譬へば風の空中に「浮べる」雲羣を「截つが」如くすること能はずんば、一切世間は闇に覆はれ、光あるものも輝くことなからん。《三四八》

賢人は光明を作すものたり、賢者、我は世尊を然なりと思ふ、我等は、禪觀をなす智者、汝の處に來れり、「此の」衆の中にありて、我等に劫波を示したまへ。《三四九》

妙好の人、疾く妙好の音聲を揚げさせ給へ、白鳥の「其の首を」擡げて、善く調ひて圓かなる聲を以て、徐ろに歌ふが如くに、「我等は」總て意を傾けて聽かん。《三五〇》

生死殘りなく棄て、「邪惡を」拂ひ給へる「佛」に切望して說法を請ひ奉る、そは凡夫の欲は果すべからず、如來は慮りて「事を」行ひ給ふが故なり。《三五一》

汝全智者のなし給へる、此の十全の說示は、領受せられたり、我は此の最後の合掌を善く手向けたり、「劫波を」知りながら、「我等を」誑かし給はざれ、尊智の人。《三五二》

漏す所なく、聖者の法を覺り、「總てのものを」知りて、「我等を」誑かし給ふこと勿れ、大精進の人、猶ほ熱時著熱に惱める人の水を「求むるが」如く、汝の語を得んと願ふ、聽者に雨を降したまへ。《三五三》

劫波那は意義ある梵行を修したり、之れ彼に取りて空なりしや、彼は圓寂せりや、將た有餘滅に入れりや、我等は彼が解脱せし如くに之を聞かん。」《三五四》

「此處に名色の上に、彼は愛欲を截ちたり」と、世尊は〔宣へり〕。「長時愛著せし愛欲の流を截ち、生死を渡りて殘りなし」と、五者の最長たる世尊はのたまへり。《三五五》

「此の汝の語を聞いて〔我が心〕悦ぶ、仙士中の第七者、我は徒には問ひ奉らざりき、婆羅門は我を欺き給はず。《三五六》

佛の弟子は〔口に〕言ふが如く、〔身に〕行ひ、虚僞の死王の強き網を破れり。《三五七》

世尊、(二)劫比耶は執著の初を見たり、(三)劫比耶那は渡ること難き死王の領域を超えたり。」《三五八》

【一】現世に於ける所有ゆる疑惑を斷す。【二】共に前出の劫波を指すこと勿論なり。

正遊方經第十三

「聖者、饒智者、〔流を〕渡りて、彼岸に達り、寂靜を得て、心安住せる人に問ふ、〔俗〕家を出で、諸欲を棄てたる比丘は、如何にしてか、能く世に遊方するや。」《三五九》

世尊は宣へり「瑞兆、天象、夢及び相〔等の念〕を盡し、瑞兆邪惡〔の信仰〕共に捨てたる彼比丘は能く世に遊方せん。《三六〇》

比丘若し有を超え、法を覺りて、人界天界の樂より其の欲を去らば、彼は能く世に遊方せん。《三六一》

比丘、兩舌と忿とを抛ち、慳を棄て順逆〔の念〕を盡さば、彼は能く世に遊方せん。《三六二》

喜も非喜も共に棄て、何物にも執せず、依せず、諸の

結縛より脫れて、彼は能く世に遊方せん。《三六三》

彼は本質の上に精を見ず、諸の執著物に對して愛欲を制し、依なく、他に誘かるることなし、彼は能く世に遊方せん。《三六四》

語により、意により、將た業によりて逆ふことなく、能く法を覺りて、涅槃道を覓む、斯の如きものは能く世に遊方せん。《三六五》

「〔他〕我を拜す」と〔思ひて〕、亢ぶる心なく、〔他に〕罵らるるとも、之を顧ることなく、他の食を得て心醉ふことなき比丘、斯の如きものは、能く世に遊方せん。《三六六》

貪欲と生有とを棄て、斷と縛とを離れたる比丘、彼は疑惑を超え、痛苦を離れて能く世に遊方せん。《三六七》

己に適する所を知り、比丘は此の世に於て何人をも害ふことなく、如實に法を了知す、斯の如きものは能く世に遊方せん。《三六八》

彼の隨眠は一として存することなく、〔又其の〕不善根は斷じ盡されたり、彼に意樂なく欲念なし、彼は能く世に遊方せん。《三六九》

漏を盡し慢を棄て、所有ゆる貪愛の道より離れ、調あり寂あり心安住せる、彼は能く世に遊方せん。《三七〇》

信あり聞ありて道を見、黨類の中にありて黨類の念なき賢者、貪と怒と瞋とを制せば、彼能く世に遊方せん。《三七一》

〔行〕淸淨にして、〔罪に〕克ち、〔世間の〕被蓋を除き、法に於て制あり、彼岸に到り、欲なくして、諸行寂滅智に熟せる、彼は能く世に遊方せん。《三七二》

過去に於て未來に於て、一劫を隔つとも〔識知する〕極淨の智慧ありて、諸入より脫れたるもの、彼は能

く世に遊方せん。(三七三)
道を知り法を覺り、明に諸漏の捨離を見、所有ゆる現相を滅盡す、斯の如くするものは能く世に遊方せん。」(三七四)
「世尊、之は實に上に宣へる所の如し、斯の如くして住し調御ある比丘は、所有ゆる繫縛を超えて、能く世間に遊方せん。」

出家經第一

是の如く我聞けり。一時世尊舍衞城の祇陀林「と云ふ」給孤獨長者の遊樂園に住し給へり。時に彈彌迦と呼べる信男子、五百人の信男子等と共に世尊の居給へる處に近づき來れり。近づき來りて一方に坐しぬ。一方に坐して信男子彈彌迦は、偈を以て世尊に白して言へり。(三七五)

「廣智、瞿曇、之を汝に問ひ奉る、佛弟子は家を出でて出家となると、家にありて信男子たると、何をなしてか可なる。(三七六)
そは汝は人天界の歸處と(二)依處とを知り給ひ、微妙の義を見るに於て、亦汝に匹ぶものなし、汝は最勝の佛なりと「世人は」言へばなり。(三七七)
汝は一切の智慧を覺り、有情を愍みて法を顯示す、普眼、汝は「世の」被蓋を除けり、垢穢なくして普く世間に光り輝く。(三七八)
譪羅筏那と呼べる龍王は「汝は」時那なりと聞きて、汝の處に來り、汝と共に語り、「汝の說く所を」聞きて喜び、「善哉」と言ひて去れり。(三七九)
毗沙門「天」王、鳩鞞羅も亦法を問はんとて、汝に近づき來れり、賢者、彼に問はれて亦汝は語れり、彼亦聞きて喜べり。(三八〇)

總て此等論爭を習とせる外道等、邪命師たりとも、尼乾子たりとも、智慧に於ては總て汝に過ぐることなきこと、立てるものの、走り疾く行く〔人〕を過ぐることなきが如し。（三八一）

此等婆羅門の論爭を習とせるもの、或は年老いたる婆羅門あり、又他の自ら論議者なりと思へる輩、總て汝の義理の爲に縛せらる。（三八二）

世尊、汝の巧說せし、〔我等の〕總て聽聞したる此の法は、微妙にして且つ安樂なり、覺者の最長、我等に問はれて、之を語れ。（三八三）

〔此處に〕集れる總て此等の比丘、又同じく聽かんとて〔集れる〕信男子等、離垢者によりて覺られ巧に說かれたる法を聽くこと、諸天の天王の〔語を聞く〕が如くせよ。」（三八四）

「諸比丘、我を聽け、我汝等に法を聽かしめん、總て頭陀の法をも護持せよ、出家の人に適せる此の威儀を守れ、利を見る有智者。（三八五）

比丘は時ならざるに遊行せざれ、正しき時に於て受食の爲に村里に遊行せよ。そは非時に遊行するものは愛執に縛せらるればなり。されば諸佛は非時に遊行したまはず。（三八六）

色と聲と味と香及び觸と、〔總て〕有情を狂醉せしむる此等のものに於て、欲を制し、正時に朝食の爲め〔村里に〕入るべし。（三八七）

比丘、〔正しき〕時に團食を得、獨り退きて閑處に坐し、內に顧み自ら攝持し、意を外に放つこと勿れ。（三八八）

彼若し、聲聞又は他の比丘と共に語ることあらば、彼に殊妙の法を示せ、離間語又は惡罵語を發つこと勿れ。（三八九）

或は他に逆ふの語を發つものあり、「我等は」此等の小智者を讃せず、愛執處處より來りて彼等を縛す、其「の論爭」に於て彼等は「己の」心を遠く放つ。（三九〇）

勝智の佛弟子は善逝の說きたる法を聽きて、食物、住處及び座牀、臥榻、大衣の塵を去るべき水をば、思慮して受用すべし。（三九一）

されば比丘は食物・臥榻・座牀・及び大衣の塵を濯ふべき水と、此等のものに於て執著せざること、恰も蓮華の上の水滴の如くなるべし。（三九二）

而して在家者の務を我汝等に語らん、斯くする人は良き佛弟子なり、法の唯比丘のみに關れるは、家族あるものは之を行ふを得ず。（三九三）

生類を害はず又害はしめず、又他の害ふをも可とせざれ。強きものも又世に怯えたるものも、總て生類に對して害意を抱くことなく。（三九四）

其より佛弟子は與へられざるものは、何物たりとも。又何處にありとも、知りて之を取ることを控へ、「他をして」取らしむることなく、「他の」取るをも可とするなく、總て與へられざるは之を取ること勿れ。（三九五）

智者は不淨行を避くること、熾然たる炭火の坑を「避くるが」如くすべし、淨行を修すること能はずば、他の妻女を犯すこと勿れ。（三九六）

若しは法廷にあり、若しは羣衆の中にありて、何人も他に向ひて虛を言はず、又言はしめず、又「他の」言ふをも可とせざれ、總て虛妄を語ることを避けよ。（三九七）

在家人にして此の法を樂めるものは飲酒を樂むことなく、又飲ましめず、又他の飲むを可とすること勿れ、彼は「終に狂者となるべきことを」知りて。（三九八）

醉狂せる愚人は邪業を行ひ、他の人をして怠惰ならしむ、此の不善業の處、醉狂、愚癡、愚を喜ぶことを避

けよ。

生命を害はず、與へられざるを取らざれ、虛言を語ることなく、酒を飲む勿れ。不淨行、「又」媾遇を避け、夜分、非時食を食ふこと勿れ。（三九九）（四〇〇）

華鬘を携へず、香を用ひず、地上に敷きたる臥處に臥せよ。之を八支の布薩と云ひ、苦際に達したる佛の示し給へる所なり。（四〇一）

其より又信心を以て毎半月の布薩を行へ、十四日、十五日と八日となり。八支分ありて缺くる所なく、變改月分の布薩をも亦「之を行へ。」（四〇二）

其より又早天に於て布薩を行へ。信心ありて食物と飲料とを以て、比丘衆を隨喜し、智者は適する所に應じて之を分つべし。（四〇三）

法によりて母と父とを養ひ、正しき商業に就くべし。此の在家者の道に精進するものは、自光と呼ぶ天に生る。」（四〇四）

【一】最終の目的の意もあり。

大品第三

出家經第一

普眼者の出家し給ひしが如く、又思ひ回して、讃歎し給ひしが如くに、我出家「の道」を說かん。（四〇五）

此の家の生活は苦痛なり、塵埃の因なり、出家は野外「の生活なり」と知りて、出家したまへり。（四〇六）

身に於て出家して、罪惡業を捨て、語惡業を除きて、其の生活を淸淨にしたまへり。（四〇七）

佛は王舍城に來り、受食のために、摩揭陀の耆利婆闍に入り給へり、勝れたる相好を數多有ちたまへる「佛は」。（四〇八）

頻毘沙羅〔王〕は樓臺上に立ちて、之を見たり、相好具足せる〔彼〕を見て、此の義を語れり。（四〇九）

「汝等、此の人に侍せよ、美しく、大きく、清く、行狀具はり、一軛量の外を見ず。（四一〇）

俯視して念を失はず、彼は卑族の出にあらざるが如し、諸王使、走り追へ、乞士は何處に行かんとするぞ。」（四一一）

遣はされたる彼等王使は後より隨へり、「乞士は何處に行くぞ、何處に住めるぞ。」（四一二）

〔諸根の〕門を防ぎ、自ら攝し、次第に乞食して、頓て其の鉢を滿し給へり、覺あり、念を失ふことなくして。（四一三）

乞食を終りて都城を出で、牟尼は槃荼婆山に入り給へり、彼處に住み給ふなるべし。（四一四）

〔己の〕棲處に入り給へるを見て、其より王使等は坐せり、一人の王使は來りて王に白せり。（四一五）

「大王、彼の比丘は槃荼婆山を前にし、虎の如く、牛王の如く、山窟中の獅子の如くして坐す」と。（四一六）

使者の語を聞きて王種は玉車に駕し、急ぎて槃荼婆山のある處に赴けり。（四一七）

車を通じ得べき處まで車により、車を降りて王種は徒歩にて近づき來りて坐せり。（四一八）

坐して王は會釋し、其より追憶すべき談話あり、談終るや、王は此の事を語れり。（四一九）

「汝は若年にして春秋に富む、人生の初にある年少者なり、善き顏貌あり、生貴き王種の如し。（四二〇）

軍營を莊嚴し、〔汝を〕龍象の羣の長となし、財を與へん、我汝の生を問ふ、〔之を〕告げよ。」（四二一）

「大王、正しく雪山の中腹に當りて、一民族あり、財と精進力とを具有す、拘薩羅の住民なり。（四二二）

種によりては日種たり、生によりては釋迦たり、大王、我は諸欲を求むることなく、其の族より出でて出家せり。（四二三）

諸欲の上に患難あることを觀、出離を安隱なりと見んがために、精勤のために出で行かん、我が心は此處にぞ樂める」と。（四二四）

精勤經第二

尼連禪河の畔にありて、專心に精勤し、安隱に達せんが爲に勇健禪思せる此の我に、（四二五）

「魔王」、那無智は慈言を發しつつ、近づき來れり、「曰く」「汝は瘦せて容色醜し、死は汝の側にあり。（四二六）

千分は死に「屬し」、生は汝に「唯」一分存するのみ、(二)汝生きよ、生くるこそ善けれ、生きて汝は善業を行ふべし。（四二七）

汝梵行を行ひ、神火を祀り、「斯くして」大善根は積まる、精勤によりて何を爲さんとする、（四二八）

精勤の道は踏み難く、行ひ難く始め難し」と、此等の偈を唱へて、魔王は佛の側に立ちたり。（四二九）

斯く語れる彼魔王に世尊は次の如く語げ給へり、「汝怠惰漢の親族者、波旬、汝の要ありて此の處に來れる、我には些も「其の」善業の要あるなし、善業の要あるもの、彼等に摩羅、汝は語るべきなり。（四三〇、四三一）

我には信あり、行あり、精進あり、智慧も亦あり、斯の如く專心にして「生くる」我に、奈何で生きんことを求むる。（四三二）

此の風は諸河の流をも涸らさん。專心なる我が血液の奈何でか竭きざることあるべき。（四三三）

血液竭くれば膽汁も痰も竭き、肉の減ずるに隨ひて心は益益和悅し、我が念と慧と定とは、愈愈安立す

るに至る。（四三四）

斯の如くにして住し、最勝の受を得たる此の我が心は、諸欲を願ふことなし、有情の清淨を見よ。（四三五）

欲は汝の第一の軍にして、第二〔軍〕は樂と稱せらる、汝の第三軍は飢渴にして、第四〔軍〕は愛と名けらる。（四三六）

汝の第五〔軍〕は惛沈睡眠にして、第六〔軍〕は怖畏と稱せらる 汝の第七〔軍〕は疑にして、覆と剛愎とは汝の第八〔軍〕なり。（四三七）

利養と名聞と恭敬と、邪にして得たる名聲、又己を稱揚して他を貶下するもの、（四三八）

那無智、此等は汝の軍勢なり、黑者の戰士なり、勇なきものは之に克たず、克ちては樂を得。（四三九）

此の我は文邪草を著けん、此處に生くるは災なり、敗れて生きんよりは、戰に斃るるこそよけれ。（四四〇）

此或沙門婆羅門は此の〔世間の〕中に沈みて見えず、德行の人の依るべき道をも辨せず。（四四一）

軍を四方に齊へ、魔王の其の象に騎れるを見て、我は戰のために之を迎へん、斯くして我を〔我が居る〕處より退けざらしめん。（四四二）

人天兩界の克ち得ざる汝の此の軍を破ること、燒かざる〔土〕鉢を碎くが如くせん。（四四三）

自ら思惟を制し、念を確立し、廣く弟子を導きつつ、國より國に遊方せん。（四四四）

彼等は勤勉專心にして、我が敎を行ふものなり、彼は願はずして、而も到りて憂なき處に赴く。」（四四五）

〔魔王曰く〕「步步世尊に追跡せしこと七年なり、〔而も〕榮ある正覺者の過を見ること能はず。（四四六）

鴉は獸脂の色せる岩石を回りて飛べり「此處に柔かなるものを得るか、或は味よきものありや」とて。

（四四七）

此處に味よきものを得ずして、鴉は飛び去れり。岩石に近づきたる鴉の如く、〔我等は〕厭きて瞿曇を棄て去らん。」　（四四八）

此の憂に壓れたる〔魔王〕の琴の緒は絶たれ、其より彼の夜叉は悲みて、其の處に沒せり。（四四九）

【一】或は、生命あるものには生くることこそ善けれ。

巧説經第三

是の如く我聞けり。一時世尊舍衛城の祇陀林〔と云ふ〕給孤獨者の遊樂園に住し給へり。時に世尊諸比丘を呼び給へり「諸比丘」「大德」と。此等諸比丘は世尊に應答し奉り、世尊は次の如く告げ給へり、「諸比丘、四種の要分を具ふる言語は、巧に説かれたるものにて、拙く説かれたるものに非ず、智者に取りて失なく過なきものなり。何をか四種となす、諸比丘、此處に比丘は巧説〔の言〕のみを語りて、拙説〔の言〕を語らず、法のみを語りて、非法を〔語ら〕ず、愛〔語〕のみを語りて、非愛〔の言〕を語らず、眞實のみを語りて、虚妄を〔語ら〕ず。諸比丘、此等四種の要分を具ふる言語は巧に説かれたるものにて拙く説かれたるものに非ず、智者に取りて失なく過なきものなり」と。之を告げ給へり世尊は、之を告げ給ひて善逝は、其より更に下の如く告げ給ひぬ師は、

「寂靜の人は巧説〔の語〕を最上なりと云ふ、法を語りて非法を〔語ら〕ざれ、これ第二、愛〔語〕を語りて非愛〔の言〕を〔語ら〕ざれ、これ第三、眞實を語りて虚妄を〔語ら〕ざれ、これ第四。」（四五〇）

其の時、具壽なる鵬耆娑は卽ち座より起ちて法衣を一肩にし、合掌を世尊の居給へる方に向けて、世尊に

白して言へり、「善逝、思ひ出ることあり。」「思ひ出せ、鵬耆娑」と世尊は告げ給へり。其より具壽鵬耆娑は「世尊の」前にありて、適宜の偈を以て世尊を稱揚し奉れり、

「語によりて己を苦むることなく、他を害ふことなき、斯の如き語のみを口にせよ、此の語ぞ實に巧に說かれしものなる。　(四五一)

語は歡びて受けらるる愛語のみを語れ、邪惡の語を用ひずして、他人の快とする所を語れ。　(四五二)

眞實はげに不滅の語、これ不朽の法、眞實と義と法との上に正しきものありと「人は」云ふ。　(四五三)

佛の說き給へる語の、安隱、涅槃に導き、苦際を盡すもの、是ぞ實に最上の語なる。」　(四五四)

孫陀利迦婆羅墮闍經第四

是の如く我聞けり。一時世尊拘薩羅國の孫陀利迦河の岸に住し給へり。其の時孫陀利迦婆羅墮闍婆羅門、孫陀利迦河の岸に於て火神に供犧し、火神を禮拜せり。時に孫陀利迦婆羅墮闍婆羅門は火神に供犧し、火神を禮拜し、終りて座より起ち、普く四方を見回せり「誰か此の供物の餘れるを食ふべきぞ」と。孫陀利迦は世尊の、側なる一樹の下に頭に至るまで「衣を」被りて、坐し給へるを見たり。見るや、「孫陀利迦は」左手に供物の餘れるを、右手に水瓶を取りて、世尊の居給へる處に近づき來れり。時に世尊孫陀利迦の足音を聞きて頭を顯はし給へり。其の時孫陀利迦は「此の尊は頭を剃れり、此の尊は圓頂者なり」と「云ひて」其より還り去らんと思へり。時に彼心に謂へらく「頭を剃れるものにても、此處には婆羅門なるものあり、我彼に近づきて「其の」生を問はん」と。其より孫陀利

迦は世尊の居給へる處に近づきて、世尊に下の如く白せり「尊は何の生なりや」と。時に世尊は偈を以て孫陀利迦婆羅墮闍に告げ給へり、

世「婆羅門にあらず、我は王子にあらず、我は吠舍にも將た何者にも之あらず、諸凡夫の族姓を知りて、我有なく、熟慮して世に遊行す。（四五五）

僧伽梨衣を著け、家なくして遊行す、髪を斷ち、己を寂靜にし、此の世に於て人人と伍することなし、婆羅門、汝は我に時ならざるに族姓の問を致す。」（四五六）

孫「友よ、梵志は梵志と共に「尊は梵志なりや、「梵志なら」ざるや」と問ひ合ふ。」

世「若し汝は梵志にして、我は梵志にあらず、と云はば、我は汝に問ふに、三句二十四字の娑毘諦を以てせん。」（四五七）

孫「仙や人や王種や梵志や、何に據りてか、此世界に於て廣く諸天に供犧をなすや。」

世「究極に達し、吠陀に通じたるもの、「若し」供犧の節に於て、其の供犧天に達せば、其は結成せるなりと我は云ふ。」（四五八）

孫「「我等が」汝の如き吠陀の智者を見るは、これ實に我等の供犧結成せるなり、そは汝の如き人を見ずば、他の人此の供物を享くべければなり。」（四五九）

世「されば茲に、婆羅門、汝は所要により、所要のために來りたれば問へ、汝は此處に寂靜にして、忿なく、苦なく、欲なき良智の人を見ん。」（四六〇）

孫「尊、瞿曇。我は供犧を樂とし、犧牲を供へんと願へり、「而も」我は知る所なければ、尊、我を敎へよ。何處に供へてか、犧牲は成就するや、之を我に告げよ。」（四六一）

世「然らば汝婆羅門、耳を欹けよ、我汝に法を說かん。

生を問ふこと莫れ、行を問へ、げにも火は薪木より生ず、族姓卑しと雖も、賢者、智者若し慚恥を以て〔自ら〕制する時は尊貴なるなり。（四六二）

自ら御して正理と調御とを具有し、吠陀に熟して既に梵行を修したり、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、善業を望める梵志は供養せよ。（四六三）

諸欲を棄て、家なくして遊方し、能く己を節して筬の如く直くし、時に隨ひて斯る人は奉施すべし、善業を望める梵志は供養せよ。（六六四）

貪欲を離れ、能く諸根を攝して、解脫を得たること、月の羅睺の捕はれより〔脫れたる〕が如し、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、善業を望める梵志は供養せよ。（四六五）

住著する所なくして世間に遊行し、我意を棄てて常に念を忘せず、時に隨ひて斯る人に奉施すべし。善業を望める梵志は供養せよ。（四六六）

諸欲を棄て、勝ち優りて遊方し、生死の果を知り、寂靜を得て、清涼なること、池水の如し、如來は供養を受くるに堪ふ。（四六七）

〔己〕平等にして平等なるものと〔居り〕、非平等なるものに遠ざかる。如來は無邊智者にして、此の世にも彼の世にも染著あるなし、如來は供養を受くるに堪ふ。（四六八）

彼に僞心なく慢心なし、彼貪欲を離れて、我意なく、欲なく、忿を除き、心寂靜に、婆羅門にして憂の垢穢を去れり、如來は供養を受くるに堪ふ。（四六九）

心は住著する所なく、執著は一も彼に存することなく、此の世にも將た彼の世にも取著する所なし、如來は供養を受くるに堪ふ。（四七〇）

定に住して暴流を渡り、最上智見の法を知り、諸漏

なくして、最後身を保つ、如來は供養を受くるに堪ふ。（四七一）

彼の生漏と麤惡語とは絕され、泯されて存することなく、彼智の彼岸に達し、一切種の解脫を得たり、如來は供養を受くるに堪ふ。（四七二）

著を超えて著あるなく、慢心ある有情の中にありて慢心なく、處と物とを倂せ能く苦を知れり、如來は供養を受くるに堪ふ。（四七三）

欲に賴らずして遠離を見る、他人の敎ふる見を逃れて、彼に一の對境あるなし、如來は供養を受くるに堪ふ。（四七四）

種種の法を悟りて之を棄て、泯びて存せざらしめ、寂靜にして取著の滅するに於て解脫を得たり、如來は供養を受くるに堪ふ。（四七五）

結と生との滅盡を見、愛欲の道を斷じて餘す所なく、淨白にして瞋恚なく垢を離れて欲なし、如來は供養を受くるに堪ふ。（四七六）

自ら己を觀察するなく、定に住し質直にして心安立せるもの、彼貪欲なく剛愎なく疑なし、如來は供養に應ずるに堪ふ。（四七七）

彼に愚の因一として之あるなく、「彼は」あらゆる法に於て智見を有す。最後身を持ち、無上正覺と安隱地とに達せり。斯の如きは是れ夜叉の淸淨なり、如來は供養に應ずるに堪ふ。」（四七八）

孫「汝の如き、吠陀に通せるものを供養し得たる此の我が供物こそ、眞の「供物」なれかし、そは梵天、我が證據たればなり、世尊我を領納し、我が供を受けよ。（四七九）

孫「偈を唱へて「得たるもの」は我食ふべきにあらず。婆羅門、之は善觀者の法にあらず。偈を唱へて「得た

るもの」を諸佛は卻け給ふ、婆羅門、法の世に存する限り、之は諸佛の道なり。（四八〇）

一切具足の大仙、漏を盡し疑を捐てたる人を供養するに、他の飲食を以てせよ。是れ彼は善根を望むものの田地なるが故なり。」（四八一）

孫「善哉、世尊、余が如きものの、「與ふる」供を受くるに堪へ、供犧の時に我索めて、「其の人より」汝の敎を習ふ「と云ふ」、我は斯の如き人を知らんと願ふ。」（四八二）

世「彼剛愎なく、心に汙濁なく、諸欲より解脫し、昏沈を除けり。（四八三）

己の罪業を降伏し、生死を知り、智識を具有し、供犧を得たる、斯の如き牟尼、（四八四）

顰蹙することを止め、合掌して禮拜せよ、飲食を以て供養せよ、斯の如くして「汝の」供養成就せん。」（四八五）

孫「覺者、尊は供養を受くるに堪ふ。「尊は」最上の福田なり、あらゆる世界の受施者、尊に施したるは大果あり。」（四八六）

其の時孫陀利迦婆羅墮闍婆羅門は世尊に白して言へり「奇なる哉、尊、瞿曇、奇なる哉、尊、瞿曇、譬へば尊、瞿曇、覆へれるを起し、掩はれたるを發き、道に迷へるものに道を示し、「眼あるものは卽ち形を見ん」と云ひて暗中に燈明を掲ぐるが如く、斯の如く尊、瞿曇は種種方便を以て法を說示せらる。此の余は尊、瞿曇に歸依す、法及び比丘僧にも亦。願くは我尊瞿曇の側にありて出家を得ん、受戒を得ん」と。孫陀利迦婆羅墮闍婆羅門は世尊の側にありて出家と受戒とを得たりき。受戒の後、久しからざるに具壽孫陀利迦婆羅墮闍は單り「他に」遠ざかりて精勤し、熱烈に專心にして住し、久しからずして彼のために善家男子の善く

在家より〔出でて〕出家の身となる、其の無上にして梵行に終れる〔法〕を此の世に於て自ら證知し、實證し逮達して住したり。「生既に盡き、梵行既に立ち、義務既に辨じ、再び斯ることのために〔生を受くること〕あらじ」と知れり。而して具壽孫陀利迦婆羅墮闍は阿羅漢の一人となれり。

(二) マーガ經第五

是の如く我聞けり。一時世尊は王舍城なる靈鷲山中に住し給へり。時に青年マーガは世尊の居給へる處に近づき來れり。近づき來りて世尊と共に會釋せり。歡喜すべき追念すべき談話を終りて後、一方に坐せり。一方に坐して後青年マーガは世尊に下の如く白せり「尊、瞿曇、余は施者なり、施主なり、寬仁にして施の求に應じ、法によりて富を求む、法によりて富を求めて、法によりて得、法によりて儲けたる所を以て、一人にも施し、二人にも施し、三人にも施し、四人五人六人七人八人九人十人二十人三十人四十人五十人百人にも施し、更に多くの人にも施す。尊瞿曇、斯の如くして施し、斯の如くして供養する余は大なる善業を積むとせんや。」「げにも青年、汝は斯の如く施し、斯如く供養して大なる善業を積む。青年・施者・施主の寬仁にして施の求に應じ、法によりて富を求め、法によりて富を求て、法によりて得、法によりて儲けたる所を以て、一人にも施し、……百人にも施し、更に多くの人にも施すものは大なる善業を積む」と。時に青年マーガは偈を以て世尊に白して言へり、「尊、余は、仁慈にして黄色の衣を著け、家なくして遊行する瞿曇に問ふ、施の求に應ずる在家の施主、善業を求め、善業を願ひて供養し、此處に他人に飲食

を施すもの、何處に供物を供へてか、清淨なりとするや。」（四八七）

「マーガ、施の求に應ずる在家の施主、」と世尊は宣へり。「善根を求め、善根を願ひて供養し、此處に他人に飮食を施すもの、斯の如き人は此等應施者と共に榮えん。」（四八八）

「余は施の求に應ずる在家の施主」と青年マーガは言へり。「善業を求め善業を願ひて供養し、此處に他人に飮食を給するものたり、世尊、余に應施者を示し給へ。」（四八九）

「無著無物にして、一切具足し、自ら節約して世に遊方するもの、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、婆羅門の善業を望むものは供養せよ。（四九〇）

一切の結縛を斷ち、調御あり解脫ありて、苦なく、欲なし、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、婆羅門の善業を願ふものは供養せよ。（四九一）

あらゆる繫より脫れ、調御あり、解脫ありて、苦なく、欲なし、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、婆羅門の善業を願ふものは供養せよ。（四九二）

愛欲と瞋恚と愚癡とを棄て、諸漏を盡し、梵行を修し終れり、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、(二)婆羅門の善業を願ふものは供養せよ。（四九三）

彼に僞心の住むなく、又慢心あるなし、(三)貪を離れ、我意なく、欲念なし、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、善業を望める婆羅門は供養せよ。（四九四）

(四)愛に沒入することなく、暴流を渡り、我意なくして遊方す、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、善業を望める婆羅門は供養せよ。（四九五）

彼の愛は世の何處にも之あるなし、生より生を〔經て〕、此處にも彼處にも、時に隨ひて斯る人に奉施す

べし、善業を望める婆羅門は供養せよ。《四九六》

(五)諸の欲を捨て、家なくして遊方し、善く己を節して箴の如く直くす、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、善業を望める婆羅門は供養せよ。《四九七》

(六)愛欲を離れ、善く諸根を攝して、解脱を得たること、月の羅睺の捕はれより［脱れたる］が如し、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、善業を望める婆羅門は供養せよ。《四九八》

寂靜にして、貪欲を離れ、忿怒なく、此處に［此の身を］棄てて、更に行處なし、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、婆羅門にして善業を望むものは供養せよ。《四九九》

生死を捨てて餘す所なく、あらゆる疑惑を超えたり、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、善業を希へる梵志は供養せよ。《五〇〇》

己を燈明として、世に遊方し、無物にして一切處に解脱せり、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、善業を希へる梵志は供養せよ。《五〇一》

此處に「之は最後［の生］なり、［更に］再生あらじ」と、此［の意を］實の如くに知る、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、善業を望める梵志は供養せよ。《五〇二》

吠陀に通じ、禪思を樂とし、［正］念ありて、正覺に達し衆人の所依處たり、時に隨ひて斯る人に奉施すべし、善業を望める梵志は供養せよ。」《五〇三》

「げにも余が問ひしことは徒爲ならざりき、世尊は余に應供者を示し給へり。そは汝は此の世に於て、之を實の如くに知り給ひ、汝の知り給ふ所、これ法なればなり。」《五〇四》

「施の求に應ずる在家の施主」と［更に］青年マーガは言へり、「善業を求め、善業を望めるものは此處に他

に飲食を施して供養す、世尊、我に供施の成就を示し給へ。」《五〇五》

「供養せよ、マーガ」と、世尊は宣へり、「供養しつつ又一切處に、心を和悅ならしめよ、供養者の目的とする所は供物なり、[彼は]此處に安住して邪惡を捨つ。《五〇六》

彼貪欲を離れ邪惡を降伏し、無量の慈心を增修し、晝夜常に不放逸にして、諸方に無量心を擴ぐ。」《五〇七》

「誰か淸淨となり、離脫し、又は繫縛せらるる、[人は]如何にしてか、自ら梵界に生るる、牟尼、無智なる余の問を受けて語れ、そは世尊は、余の今日梵天を見るの證明者たればなり、眞に汝は我等の梵天に同じ、人は如何にしてぞ梵天界に生るる、光輝ある人。」《五〇八》

「三種の一切成就せる供施を供ふるもの、マーガ」と世尊は宣へり、「斯の如き人は應施者と共に榮えん、斯の如く供獻して善く施の求に應ずるものは、梵天界に生ると我は云ふ。」《五〇九》

斯の如く宣ふや、靑年マーガは世尊に白して言へり、「奇なる哉、尊、瞿曇……今日より始めて生を終るに至るまで、歸依せる信男子として我を攝受し給へ。」

【一】暹羅版にては之を Dhammikasuttaṁ とせり。【二】以下五〇三偈に至るまで暹羅版にては此の一句を缺く。【三】暹羅版にては「諸漏を盡し、梵行を修し終れり」とあり。【四】暹羅版には「貪を離れ、我意なく、欲なく、諸漏を盡し、梵行を修し終れり、時に隨ひて斯る人に奉施すべし」の一五九偈を加ふ、【五】四六四偈參照。【六】四六五偈參照。

サビヤ經第六

是の如く我聞けり。一時世尊は王舍城の竹林園なる栗鼠飼養處に住し給へり。其の時普行出家サビヤのもと親族たりし一天人は質問を起せり、「曰く」「サビヤ、若は沙門、若は婆羅門の此等のことを問はれて、

答ふるものあらば、汝彼の側にありて梵行を修せよ」と。其より普行沙門サビヤは彼の天人の面前に於て此等のことを學びて、沙門婆羅門の衆を有し、徒を有し、衆徒に師たり、名聞え、譽あり、敎派の師たり、衆人に敬視せらるるもの、卽ち富蘭那迦葉・末伽黎拘舍羅・阿耆陀翅舍欽婆羅・迦鳩陀迦多衍那・刪闍耶毘羅胝子・尼乾陀若提子、と、此等のものに近づきて此等の問を質せり。彼等はサビヤ普行沙門に此等の問を質されて「之に答ふることを」能くせざりき、「之に答ふることを」能くせずして、忿怒と憎惡と不滿とを色に現はし、且は又却つてサビヤ普行沙門に問へり。時にサビヤ普行沙門心に謂へらく「此等の諸尊、沙門婆羅門にして衆を擁し、徒を有し、衆徒に師たり、名聞え、譽あり、敎派に師たり、衆人に敬視せらるるもの、卽ち富蘭那迦葉、……尼乾陀若提子と、此等のものは我に問を質されて「之に答ふることを」能くせざりき、「之に答ふることを」能くせずして、忿怒と憎惡と不滿とを色に現し、且は又却つて我に問へり、我寧ろ在俗の身に還りて諸欲を享けん」と。時にサビヤ普行沙門は心に謂へらく「此の沙門瞿曇も亦衆を擁し、徒を有し、衆徒に師たり、名聞え譽あり、敎派の師として、衆人に敬視せらる、我寧ろ沙門瞿曇の處に至りて此等の問を質さん」と。時にサビヤ普行沙門は又心に謂へらく「此等の諸尊、沙門婆羅門の年老い、齡高く、年長け、年邁き、耄期に達し、耆宿たり、老功たり、出家して後久時を經たるもの、衆を擁し、徒を有し、衆徒に師たり、名聞え、譽あり、敎派に師たり、衆人に敬視せらるるもの、卽ち富蘭那迦葉……尼乾陀若提子と、此等のもの我に問を質されて「之に答ふることを」能くせざりき、「之に答ふるとを」能くせずして、

恚怒と憎惡と不滿とを色に現し、且つ又却つて我に問へり。然るを如何ぞ沙門瞿曇は此等の問を質されて答ふることあらん。そは沙門瞿曇は弱齡にして新に出家したるものなればなり。」サビヤ普行沙門は更に謂へらく「沙門瞿曇は弱齡なりとて蔑視せらるべからず、弱齡なりとも沙門なり、彼は又大神通、大威德あり、我寧ろ沙門瞿曇に近づきて此等の問を質さん」と。其よりサビヤ普行沙門は王舍城の方に遊行せり。次第に遊行しつつ、王舍城の竹林園、栗鼠飼養處なる世尊の居給へる處に來れり。來りて世尊と共に相會釋せり。歡ぶべき、追思すべき談話を交へたる後、一方に坐したり。一方に坐したるサビヤ普行沙門は世尊に偈を以て白せり。

「疑ひ惑ひて我は來る、問を質さんことを願ひて、「汝我に」問はれて疑を解くものとなれ、序に順ひ法に順ひて我に說き示せ」とサビヤは云へり。(五一〇)

世尊宣はく、「サビヤ、汝は遠きより來れり、問を質さんと願ひて、「我汝に」問はれて疑を解くものとならん、序に順ひ法に順ひて汝に說き示さん。(五一一)

サビヤ、何事にもあれ、汝の心に願へる處は、我に問ひ質せ、我汝のために其の疑を解かん。」(五一二)

是に於てサビヤ普行沙門は心に謂へらく「げにも希有なる哉、げにも未曾有なる哉、他の沙門婆羅門の處にありては我機會をだにも與へられざりしを、沙門瞿曇よりして此の機會を得たり」と歡喜し、慶喜し、踊躍し、心に悅豫を生じ、世尊に問を質せり。

「何物を得たるを「人は」呼んで比丘と云ひ、何によりて慈悲者たり、又如何にして調柔者なりと稱せらるるや、如何にしてか覺者と稱せらるるや、世尊、問はれて我に說き示し給へ。」(五一三)

世尊宣はく、「サビヤ、自ら作りたる道によりて圓滿なる寂靜に入り、疑惑を超え、生有と更有とを棄て、〔梵行に〕住して、再生を盡したるもの、彼は比丘なり。（五一四）

一切處に捨あり、念あり、一切世界に於て〔何物をも〕害ふことなく、〔流を〕超え、〔心に〕擾亂なく、欲なき沙門、彼は慈悲者なり。（五一五）

彼の諸根は内外一切世界に於て修練せられぬ、此〔の世〕と彼の世とを厭ひて、死を願ひ、修習せるもの、彼は調柔者なり。（五一六）

所有ゆる時劫と、輪廻と生死と、兩ながら思惟して塵垢を離れ、無著、清淨にして生の滅盡に達したるもの、彼を覺者と云ふ。」（五一七）

時にサビヤ普行沙門は、世尊の所説を欣讃し隨喜し歡喜し慶喜し踊躍し心に悦豫を生じ、更に世尊に問を發せり。

「何物を得たるを、人は呼んで婆羅門と云ふ、何によりてか沙門たり、如何にしてか淨身梵志たり、如何にしてか那伽と稱せらるるや、問はれて世尊我に説き示し給へ」とサビヤ普行沙門は云へり。（五一八）

世尊宣はく「サビヤ、一切の邪惡を除きて、垢穢なく、善定に住して、心安立し、輪廻界を超えて、一切具足せるもの、斯の如き著なき人を梵志と稱す。（五一九）

寂靜にして善惡業共に之を棄て、塵垢を離れ、此〔の世〕と彼の世とを知り生死を超越したるもの、斯る人は斯の如くなるによりて沙門と稱せらる。（五二〇）

内外一切の世界に於て、一切の罪業を洗淨し、時に支配せらるる人天の中にありて、時を超えたり、彼を淨身梵志と稱す。（五二一）

世間にありて一の罪業をも作らず、あらゆる結と縛

とを解き、一切處に縛せらるることなくして解脫を得たり、斯るものは斯の如くなるによりて那伽と稱せらる。」（五二二）

時にサビヤ普行沙門は、世尊の所說を欣讃し、隨喜し歡喜し慶喜し踊躍し心に悅豫を生じ、更に世尊に問を發せり、

「諸佛は誰をか刹土の勝者と呼ぶ、何によりてか巧者と呼ばれ、又如何にしてか賢者、如何にしてか牟尼とは稱せらるるや、世尊、問はれて我に之を說き示し給へ」とサビヤは云へり。（五二三）

「天上・人間、梵界刹土［等］一切の刹土を思惟し、一切の刹土根本の縛より脫れたり、斯る人は斯の如くなるによりて刹土の勝者と稱せらる。（五二四）

天上・人間、梵界、寶藏［等］總ゆる寶藏を思辨して、一切寶藏根本の縛より脫れたり、斯る人は斯の如くなるによりて巧者と稱せらる。（五二五）

內外二種の意識を思辨し、智慧清淨にして、黑白業より脫れたり、斯る人は斯の如くなるによりて賢者と稱せらる。（五二六）

內外一切の世界に於いて、正邪の法を知り、人天の供養を受くるに堪へ、著と網とを超えたる彼は牟尼なり。」（五二七）

時にサビヤ普行沙門……は更に世尊に向つて問を發せり、

「何を得たるをか吠陀智者と云ふ、何によりてか智者たり、又如何にしてか精進者たり、駿良とは何者なりや、世尊、問はれて之を我に說き示し給へ」とサビヤ普行沙門は云へり。（五二八）

「サビヤ、沙門婆羅門［の知れる限り］總ゆる吠陀を思辨し、一切の受に於て愛欲を遠離し、あらゆる受を超

えたる、是れ吠陀智者なり。（五二九）

內外疾病の根原たる、戲論の名色を知りて、一切疾病の根原より脫れたり、斯る人は斯の如くなるによりて智者と稱せらる。（五三〇）

此の世のあらゆる邪業より離れ、泥犁の苦を超えて精進する彼、精進・精勤の彼、斯る人は斯の如くなるによりて勇者と稱せらる。（五三一）

纏縛は斷たれ、內外執著の根は又「斷たれて」、一切愛著根本の縛より脫れたり、斯る人は斯の如くなるによりて駿良と稱せらる」と世尊は宣へり。（五三二）

時にサビヤ普行沙門は……更に世尊に向つて問を發せり。

「何をか得たるを(一)聞者と稱する、何によりてか尊貴たり、又如何にしてか行足者とは「稱へらる」、普行沙門とは如何にしてぞと、問はれて世尊、我に說き示し給へ」とサビヤは云へり。（五三三）

「サビヤ、世間一切の法を聞き知り」と世尊は宣へり。

「有りと總ゆる有過無過の法を「聞き知りて」、一切處に勝者たり離惑者たり、解脫者たり離苦者たるを聞者と呼ぶ。（五三四）

藏と漏とを斷ちて、彼の有智者は「再び」胎に入ることなし、三種の相、「欲の」泥を捨てて時を超越せるもの彼を尊貴の人と呼ぶ。（五三五）

此の世界に於て行の極位に達し、一切時に法を識知せる巧者、一切處に著なくして心解脫し、瞋恚あることなき、彼は行「具足」者と稱せらる。（五三六）

上下と橫と中とに於て、業の苦果を齎すものは之を捨て、徧智ありて遊行す、「彼」僞心、慢心、又欲と忿と名と色とを滅せり、此の極位に達したる人を普行沙門と云ふ。」（五三七）

時にサビヤ普行沙門は世尊の所説を欣讃隨喜して、歡喜慶喜踊躍し心に悦豫を生じ、座より起ちて、中衣を一肩にし、世尊の居給へる方に合掌を向け、相應せる偈頌を面前に「唱へて」世尊を讃歎し奉れり。

「饒智者、沙門の諍論に關し、字相相形に依れる六十有三「種の見」、此等の所依を伏せるものは暴流の闇を超えたるなり。（五三八）

苦惱の極際に達し、彼岸に達し、汝は應供者なり、正遍覺者なり、汝漏盡者なりと思ふ、光者、智者、饒慧者、苦際を盡すもの、我を度し給へり。（五三九）

我が疑へる所を知り、惑へる我を度したり、智慧の道に於て極位に達したる汝牟尼に歸命す、剛愎なき汝日親、汝は慈悲者なり。（五四〇）

我が先に疑ひし所は、具眼者、汝は之を我に說き示し給へり、げに汝は牟尼なり、正等覺者なり、汝に障蓋あることなし。（五四一）

總て汝の懊惱は破られ、斷たれたり、清涼にして調柔を得、勇健にして、誠實なり。（五四二）

那伽よ、此の汝那伽、大雄の說きし所を、總ゆる天人は隨喜しぬ、那羅陀も波里嚩陀も共に。（五四三）

汝人駿に歸命す、汝人最に歸命す、人天世界に於て、汝に對等なるものなし。（五四四）

汝は覺者、汝は師、汝は魔羅に勝ち給へる牟尼なり、汝は隨眠を斷ちて「自ら」渡り、「更に」此の羣生を渡せり。（五四五）

汝は本質を超越し、漏を壞り、取著なき獅子なり、怖畏を滅し給へり。（五四六）

妙好の白蓮華の水に浸されざるが如く、斯の如く汝は善惡共に浸され給はず、雄者の足を伸べ給へ、サビヤは師「の足」を拜し奉る。（五四七）

其の時サビヤ普行沙門は頭面を以て世尊の足を禮し世尊に次の如く白せり。

「奇なる哉大德、奇なる哉大德、譬へば大德、覆へれるを起し、掩はれたるを發き、道に迷へるものに道を示し、『眼あるものは卽ち形を見ん』と云ひて、暗中に燈明を掲ぐるが如く、斯の如く世尊は種種の方便によりて法を說示し給へり、此の我は世尊に歸依し奉る、法及び比丘衆にも亦。大德、我世尊の側にありて得度を得ん、受戒を得ん。」

「サビヤ、元と外道者にして此の敎に得度を求め、受戒を求むるものは、四箇月の間別住す、四箇月の終に諸比丘は和ぎたる心を以て、「此の」別住したるものを得度せしめ受戒せしめて、比丘たらしむ、されど我は此處に人人の差異を認む。」

「大德、元と外道たりしものにて此の敎に得度を求め受戒を求むるもの、若し四箇月の間別住し、四箇月經ちて後、諸比丘は和ぎたる心を以て、「此の」別住したるものを得度せしめ受戒せしめて、比丘たらしむとせば、我は四夏終りて後、諸比丘は心和ぎて、別住したる我を得度受戒せしめ比丘たらしめんことを。」サビヤ普行沙門は世尊の側にありて得度を得、受戒を得たり、受戒の後久しからざるに具壽サビヤは單り「他人に」遠かりて精勤し、熱烈に專心にして住し、久しからずして、爲に善家男子の善く在家より「出でて」出家の身となる、其の無上にして梵行に終れる「法」を、此の世に於て自ら證知し實證し逮達して住したり。「生旣に盡き、梵行旣に立ち、義務旣に辨じ、再び斯ることのために、「生を受くること」あらじ」と知れり、而して具壽サビヤは阿羅漢の一人となれり。

【一】ソツチコー Sotthiko と ソツチヨー Sotthiyo

セーラ經第七

是の如く我聞けり。一時世尊は、大比丘衆千二百五十人の比丘と共にアングッタラーパに遊行しつつ、アーパナと名るアングッタラーパの村に達し給へり。ケーニヤ結髪士は、「沙門、尊瞿曇、釋族より出家したる釋子は大比丘衆、千二百五十人の比丘と共にアングッタラーパに遊行しつつ、アーパナに來れり、其の尊瞿曇に下の如き好名聞の起れるを聞けり、『よりて又、彼世尊は應供・正偏覺・明行具足・善逝・世間解・無上者・可調人の御者・人天の師・覺者・世尊なり。彼は天・魔・梵を併せたる此の世界、沙門婆羅門、天人を含める羣衆を自ら證知し、證得して教ふ。彼は初め善く中ごろ善く後善く、義あり文ある法を說く。一切完具し清淨なる梵行を指示す』と、斯の如き應供者を見るは可ならん」と。

其よりケーニヤ結髪士は世尊の居給へる處に近づき來れり。近づき來りて世尊と共に相會釋せり。歡喜すべく追憶すべき談話を終へて後、一方に坐せり。一方に坐したるケーニヤ結髪士を、世尊は教を說きて教化し、發趣・奮起・悅喜せしめ給へり。ケーニヤ結髪士は世尊のため、其の說教によりて教示せられ、發趣・奮起・悅喜せしめられ、世尊に下の如く白せり「尊瞿曇、明日比丘衆と共に、我が食供養を受くるを肯はれよ」と。斯の如く云ふや、世尊はケーニヤ結髪士に下の如く告げ給へり、「ケーニヤ、比丘衆の數は多く、千二百五十人の比丘なり、汝は又諸婆羅門を信仰せり」ケーニヤ結髪士は二たび又下の如く白せり「尊瞿曇、比丘衆の數大に、千二百五十人の比丘なりとも、我亦諸の婆羅門を信仰せりとも、尊瞿曇よ明日比丘衆と

共に我が食供養を受くべきことを肯はれよ。」世尊は二たびケーニャ結髪士に下の如く告げ給へり、「ケーニャ、比丘衆の數は大に、千二百五十人の比丘なり、汝は又諸の婆羅門を信仰せり。」ケーニャ結髪士は三たび世尊に次の如く白せり、「尊瞿曇、假令、比丘衆の數大に、千二百五十人の比丘なりと雖も、我亦諸の婆羅門を信仰せりと雖も、尊瞿曇、比丘衆と共に明日我が食供養を受くべきことを肯はれよ。」世尊は默して之を肯ひ給へり。時にケーニャ結髪士は、世尊の肯ひ給ひしを知りて、座より起ちて、己の住菴のある處に至れり。至りて朋友・奴僕・眷族・近親のものを呼べり、「汝等・朋友・奴僕・眷族・近親、我〔が言ふ所〕を聽け。沙門瞿曇は比丘衆と共に明日我が食供養に招かれたり。されば汝等我に身の奉仕をなせ。」「諾、尊」と。ケーニャ結髪士の朋友・奴僕・眷族・近親は、ケーニャ結髪士に唯諾して、或は竈を穿つあり、或は薪を析き、或は器を洗ひ、或は水瓶を置き、或は座席を設けぬ。而してケーニャ結髪士は自ら圓廊を構へぬ。其の時、セーラ梵志はアーパナに住せり。三吠陀・語彙・楷書・文字分別・第五には傳說にも熟達し、句を知り、語法を知り、順世論、大人相好にも通せざるなく、而して三百の少年を敎へたり。ケーニャ結髪士はセーラ梵志を篤く信仰し居たり。時にセーラ梵志は三百の少年に圍繞せられ、徒歩にて遊行しつつ、ケーニャ結髪士の住菴の立てる處に至れり、セーラ梵志はケーニャ結髪士の住菴には或は竈を穿ち……而してケーニャ結髪士は自ら圓廊を構ふるを見たり。見るや彼はケーニャ結髪士に問うて云へり、「尊ケーニャには兒の婚ありや、女の姻ありや、大齋近づきたりや、摩揭陀の洗尼耶、頻毘娑羅王は其の軍勢と共に明

日饗應に招かれたりや如何。」「否セーラ、我に兒の婚あるにあらず、女の姻あるにあらず、摩揭陀の洗尼耶、頻毘娑羅王、其の軍勢と共に明日の饗應に招かれたるにもあらずして、大齋近きたるなり。沙門瞿曇、釋族より出家したる釋子は大比丘衆、千二百五十人の比丘と共にアングッタラーパに遊行しつゝアーパナに來れり、彼の尊瞿曇に下の如き好名聞起るを耳にせり『「よりて又世尊は……」』と。彼は比丘衆と共に明日受食の爲に我に招かれたり。」「友ケーニャ、汝は彼を佛なりと云へりや。」「友セーラ、我は彼を佛なりと云ふ。」「友ケーニャ、汝は彼を佛なりと云へりや。」「友セーラ、我は彼を佛なりと云ふ。」時にセーラ梵志心に謂らく「佛と云へば、音聲のみにても世に之を得ることは難し、我等の讃歌中に三十二種大人の相好を載す。此等の相好を具有する大人には唯二途の外あらず。彼若し在家の生活を營まば轉輪王となり、義者、法王、四方の君主、勝者、國土を安隱にし、七寶を具有せるものとして、彼に此等の七寶至らん。卽ち、輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・第七は主兵寶なり。彼の兒は一千よりも多からん、皆大なる膂力ありて外敵を破る。彼は此の世界を四海の果に至るまで、刀杖を用ひず、義を以て克服して住す。されど彼若し在家より出でて、出家の身とならば、世に「煩惱の」障蔽を除ける應供者・正遍覺者とならん。友ケーニャ、彼の尊瞿曇・應供者・正遍覺者は今何處に住めるぞ。」

斯く云ふや、ケーニャ結髮士は、右手を差延べて次の如く答へぬ「友セーラ、彼處に青色の林線のある處なり。」其よりセーラ梵志は三百の青年と共に世尊の居給へる處に近づき來れり。時にセーラ梵志は此等の青年を呼んで云へり「友等、響を少うして步步踏みて

來れ。そは此等世尊は獅子の如く獨行にして近づくこと難ければなり。而して余が沙門瞿曇と共に談話を交ふる間は友等嘴を挿むこと勿れ。汝等余が談話の終を待て。」

其よりセーラ梵志は世尊の居給へる處に近づき、世尊と共に相會釋せり。歡喜すべき追憶すべき談話をなし終へて後一方に著座せり。一方に著座したるセーラ梵志は世尊の身に三十二種大人の相好を探れり。而して彼セーラ梵志は世尊の身に、唯二相を除きて三十二種大人の相好の遍く具はれるを見たり。此等二相に於て彼は疑ひ惑ひ信憑せざりき。二相とは隱所と廣長舌となり。

時に世尊は思惟し給はく、「此なるセーラ梵志は余が三十二種大人の相好を見る、隱所と廣長舌と唯二相を除きて、此等二種大人の相に於て彼は疑惑を抱き信憑せず。」其より世尊はセーラ梵志が世尊の隱所を見得るやう、神通を示現し給へり。次に世尊は舌を出して兩耳を撫で打ち、兩鼻孔を撫で打ち、額輪殘らず舌を以て覆ひ給へり。其の時セーラ梵志は思へり「沙門瞿曇は三十二種大人の相好を有す、具足して缺くる所あらじ。余は彼の佛なりや否やは知らず。但余は、年老い、齡高く、人に師たり、師に師たる婆羅門の語るを聞けり、「此等世尊・應供者・正遍覺者は己れ讃歎せらるる時は己身を示現す」と。我適宜の偈を以て沙門瞿曇を其の面前に於て讃歎するこそ可なれ。」

其の時セーラ梵志は、世尊の面前に於て適宜の偈を唱へて云へり。

「身體圓滿にして光輝あり、汝は良族の生にして美し。世尊、汝は金色なり、白齒にして力用あり。(四八)

良族に出たる人の「具ふる」相、總て此等大人の相好

は汝の身にあり。　（五四九）

眼清かに顔善く、大きく直く厳かに、沙門衆の中にありて、太陽の如く輝く。　（五五〇）

汝は顔貌愛すべく、黄金に似たる膚ある乞士、斯く優れたる色ありて、汝に奈何で沙門たるの要あるや。　（五五一）

汝は王・轉輪王・御者の主・四方の君・勝者・閻浮州の君主たるに適せり。　（五五二）

刹帝利種と富有なる王とは、汝に忠誠なり、王中王・人中主・瞿曇、政を司れ。」　（五五三）

世尊は宣はく、「セーラよ、我は王者なり、無上の法王なり、法によりて輪を轉ず、轉じ得られざる輪を」と。　（五五四）

セーラ梵志は云へり、「汝は正遍智者なりと自稱す、無上の法王にして、法によりて輪を轉ずと、瞿曇、汝は斯の如く云ふ。　（五五五）

誰か汝の軍師たり、弟子たり、相續者たり、誰か「汝の」轉じたる此の法輪を隨ひ轉ずるものぞ。」　（五五六）

「セーラ、我が轉じたる輪、無上の法輪を舍利弗は、如來に倣うて隨ひ轉ず。　（五五七）

證るべきは之を證り、修習すべきは之を修習し、捨離すべきは我之を捨離せり、されば婆羅門、我は佛なり。　（五五八）

婆羅門よ、我に對する疑惑を去り、我を信ぜよ。正遍智者を常に見ることは難し。　（五五九）

世に其の常恆現前を「得ることの」汝等に取りて難き人人の中にありて、婆羅門、我はこれ、正等覺者なり、無上の醫師なり。　（五六〇）

至高無比にして魔軍を服するもの、あらゆる敵に克ち、四方懼るる所なくして喜ぶ。」　（五六一）

「諸友、具眼者の語る所を聞け、彼は醫師なり、大雄者なり、林間の師子の如く吼ゆ。（五六二）
至高無比にして、魔軍を克服するものを見て、誰か信仰せざらん、假令黑族の生なりとも。（五六三）
我に伴はんと願ふものは伴へ、又願はざるものは去れ、此處に我は勝智者の側にありて出家せん。」（五六四）
「尊、若し正遍覺者の此の教を喜ばば、我等も亦勝智者の側にありて出家せん。（五六五）
此等三百の婆羅門、掌を合せて願ふ。世尊、世尊の側にありて梵行を修せん。」（五六六）
世尊は宣はく、「セーラ、現生、卽時に「果を齎す」梵行は善く說かれたり。精勤に修學する人の、此處にありて出家するは徒爾ならじ。」（五六七）
セーラ梵志は其の隨身の輩と共に世尊の面前にありて得度を得、受戒を得たり。其の夜の過ぐるや、ケーニャ結鬘士は、己の住菴に於て味よき硬軟の食物を用意せしめて世尊に時を報せしめぬ、「尊瞿曇、時「至れり」、食「調ひ」終れり」と。時に世尊は早朝衣服を著け、鉢衣を携へてケーニャ結鬘士の住菴に至り、至りて比丘衆と共に設けたる座に著き給へり。其よりケーニャ結鬘士は佛を初めとし、比丘衆等に味よき硬軟の食物を「彼等の」飽きて謝するに至るまで手づから「供養したり」。時にケーニャ結鬘士は世尊の食し終りて、鉢より手を放ち給へる「時」近寄り、一箇の低き座牀を取りて一方に著座したり。一方に著座したる、彼ケーニャ結鬘士に、世尊は此等の偈を以て隨喜せしめ給へり、
「供犧は火祀中の最上なり、娑毘諦は韋陀頌中の最上なり、王は人中の最上なり、海は諸水の最上なり。
諸星中最上なるは月、日は光り輝くものの最尊、善

業を望みて供養する人に取りて、僧伽は實に最上なり。《五六八、五六九》

時に世尊は此等の偈を以てケーニヤ結鬘士を隨喜せしめ、座より起ちて去り給へり。其より具壽セーラは其隨身の徒と共に單り〔他に〕遠かりて精勤し、熱烈に專心にして住し、久しからずして、爲に善家男子の善く在家より〔出でて〕出家の身となる、其の無上にして梵行に終れる〔法〕を此の世に於て自ら證知し、實證し、逮達して住したり。「生既に盡き、梵行既に立ち、義務既に辨じ、再びかかることの爲に〔生を受くること〕あらじ」と知れり。而して具壽セーラは其の隨身の輩と共に阿羅漢の一人となれり。其の後具壽セーラは其の隨身の輩と共に世尊の居給へる處に來り、中衣を一肩にして合掌を世尊の方に向け、偈を以て世尊に白して云へり、

「具眼者・世尊、我等は今より先第八日、汝に歸依して、七夜に汝の敎に調御を得たり。《五七〇》

汝は佛、汝は師、汝は魔羅に克てる牟尼、汝は愛執を破りて、自ら〔生死の流を〕渡り、〔更に〕此の羣生を渡す。《五七一》

汝は生死の素質を超え、諸漏を盡せり、〔汝は〕取著なく恐怖畏懼を捨てて獅子の如し。《五七二》

此等三百の比丘は、掌を合せて立てり。雄尊、足を伸し給へ。諸龍衆、師の〔足を〕禮せよ。」《五七三》

矢經第八

此の世の有情の命は、相なく解せられず、慘ましく短く、加之苦惱に繫がる。《五七四》

生れたるものには死を遁るるの道なく、老に達しては死あり、生あるものの法斯の如し。《五七五》

熟したる果物は、疾く落つるの虞あり、同じく、生れたる有情には、常に死の虞あり。（五七六）

恰も陶師の作りたる土器の、終には總て壞るべきが如く、有情の命も、亦斯の如し。（五七七）

若きも大なるも、愚なるも賢きも、總て死の爲に服せらる、總て死に從ふべきものなり。（五七八）

死の爲に敗られて、他界に赴く此等の輩を、父も其の兒を救はず、親族も「其の」親族を「救はず」。（五七九）

見よ、親族の輩が觀て大に悲めるに、殺さるる牛の如く、有情の一人一人運び去らるるを。（五八〇）

斯の如く世界は、死と老とのために惱まさる、されば賢者は世の終を知りて憂ふることなし。（五八一）

彼の來者も往者も共に、汝は其の道を知るなし、「汝は」兩極を見ることなくして、徒に哀む。（五八二）

若し傷み哀みて、苟も利を得る所あらば、「之を爲すものは、」己を害ふ愚者「なれども」、賢者もこれに倣へ。（五八三）

泣き哀むことによりて、心の安靜を得ることなし、苦惱の生ずること、益益甚だしくして、「其の」身は惱まさる。（五八四）

自ら己を害ひ、痩て姿、醜きに至る、之によりて死者は命を得ることなし、悲哀は無益のことなり。（五八五）

憂を捨てざる有情は、益益苦惱を受く、死者を哭くものは、憂苦の掌中に陷る。（五八六）

又他の人人の其の業に應じて往き、死の虜となりて此處に慄ひ戰けるを見よ。（五八七）

此より將た彼よりは「斯の如きもの出で來るべし」と期するに、其より其は異りて出で來る、相違は夫れ斯の如し、世の方便を見よ。（五八八）

人假令百歲を保ち、或は更に久しき「壽を保つとも」、

彼は終に其の親族より離るべく、此處に其の命を捨つ。（五八九）

されば聖者〔の言〕を聞きて悲哀を除け。死に行くものを見て、「彼は再び我に見られじ」と〔悟れ〕。（五九〇）

猶ほ火に燒かるる家の、水を以て消さるるが如く、勇者・有智者・賢者・巧者も亦斯の如し、起りたる憂苦を疾く滅すること、風の綿を〔吹き拂ふ〕が如し。（五九一）

己の樂を求むるものは、其の悲歎・不平・憂慼〔を去れ〕、其の矢を拔け。（五九二）

矢を拔き取りて著なきものは、心の安靜に達す、あらゆる憂苦を越えて、無憂寂靜に至る。（五九三）

ヴーセッタ經第九

是の如く我聞けり。一時世尊はイッチャーナンガラのイッチャーナンガラ林中に住し給へり。其の時數多の名高く家富みたる梵志はイッチャーナンガラに住みたり、チャンキー梵志、タールッカ梵志、ポッカラサーチ梵志、ヂャーヌッソーニ梵志ドーディヤ梵志、其の他、名高く家富みたる梵志等。時にヴーセッタ、婆羅墮闍兩青年あり〔共に諸方を〕徒行遊歩せし時、下の如き談起れり、「友、婆羅門とは如何なるものぞ。」婆羅墮闍青年は言はく、「父方にも母方にも雙方共に生善く、父祖七代に至るまで並に母胎清淨にして、素性に關して、曾て〔他に〕輕んぜられず誹られず、之にて婆羅門たるなり」と。ヴーセッタ青年は言ひて曰く、「友、人若し戒德あり義務を怠らずば、之にて婆羅門たるなり」と。されど婆羅墮闍青年はヴーセッタ青年をして了解せしむること能はず、ヴーセッタ青年は婆羅墮闍青年をして了解せしむる能はざりき。時にヴーセッタ青年は婆羅墮闍青年に告げて曰へり、

「婆羅墮闍、此沙門瞿曇、釋家より出家したる釋子は、イッチャーナンガラのイッチャーナンガラ林中に住せり。然るに此の尊瞿曇には斯の如き好名聞起れり、『よりて又彼世尊は應供・正遍覺・明行足・善逝・世間解・無上者・可調人の調御者・人天の師・覺者・世尊なり』と。友婆羅墮闍、沙門瞿曇の住する處に赴き、彼沙門瞿曇に此の義を問はん、沙門瞿曇の我等に說き示す所に隨ひ、我等は之を護持せん。」「諾、友」と婆羅墮闍青年はヷーセッタ青年に應答しぬ。其よりヷーセッタ、婆羅墮闍兩青年は世尊の居給へる處に近づき、世尊と共に相問訊せり。歡喜すべき追憶すべき談話をなし終へて後一方に座を取れり。一方に坐したるヷーセッタ青年は偈を以て世尊に白して言へり、

「我等は三吠陀の學者として、信ぜられ認められたるもの、我はポッカラサーチの「弟子」にして、此の青年はタールッカの「弟子」なり。（五九四）

三吠陀學者の說き明せる所、此に於て我等は全「智を有す」。句に通じ、語法に通じ、讀誦に於ては師に同じ。（五九五）

瞿曇、此の我等の生の談に於て爭起れり、生によりて婆羅門なりと婆羅墮闍は云ひ、我は「婆羅門は」行によると云ふ、具眼者、斯の如く之を知れ。（五九六）

我等二人は互に承引せしむることを得ず、「よりて」正覺者として知る世尊に問はんが爲に來る。（五九七）

恰も人の合掌して、滿ちたる月を禮拜恭敬するが如く、同じく「人は」瞿曇を恭敬す。（五九八）

世の眼目出で來れり。我等は瞿曇に問ふ、婆羅門は生によれりや、將た業によれりや、知らざる我等に告げよ、依りて我等は婆羅門を知らん。」（五九九）

世尊宣はく、「ヷーセッタ等よ、我は汝等の爲め、次

第に隨ひ如實に生類の生の差別を示さん、是れ生類は數多きが故なり。《六〇〇》

草木も亦た「其の生を」知れ、假令「彼等は」之を表はさずとも、彼等の相は生より來り、其の類は雜多なり。《六〇一》

其より蠕蟲・昆蟲、乃至蟻螻までも「其の生を」知れ、彼等の相は生より來り、其の類は雜多なり。《六〇二》

四足類の小なるも大なるも、共に「其の生を」知れ、彼等の相は生より來り、其の類は雜多なり。《六〇三》

腹足長脊の蛇類も亦「其の生を」知れ、彼等の相は生より來り、其の類は雜多なり。《六〇四》

其より水に「住み」て、水を家とする魚類も亦「其の生を」知れ、彼等の相は生より來り、其の類は雜多なり。《六〇五》

其より羽翼を乗物とし、空を行く鳥も、亦た「其の生を」知れ、彼等の相は生より來り、其の類は雜多なり。《六〇六》

此等生類の中にては、生より來れる相は、夥しけれど、人類の中にては、生より來れる相は、然く數多からず。《六〇七》

髮によらず、頭によらず、耳・目・口・鼻・唇・眉毛にもよらず。《六〇八》

首・肩・腹・脊・臀・胸にもよらず、女陰にもあらず、婚媾にもあらず。《六〇九》

手・足・指・爪・脛・股・容色・音聲にもよらず、他の生類の中に於けるが如く、「人類には」生より來れる特相あるなし。《六一〇》

「他生類は」身を稟ること區區なれども、人間には之なし、人間の相違は、「唯」名目のみなりと云ふ。《六一一》

人間の中にて牛を牧しつつ生を營むものあらば、ヴ

ーセッタ、斯の如きは耕者にして、婆羅門にあらずと知れ。（六一二）

人間の中にて種種の技術を〔修めて〕生くるものあらば、ヴーセッタ、斯の如きは技工にして、婆羅門にあらずと知れ。（六一三）

人間の中にて商業を營むものあらば、ヴーセッタ、斯の如きは商估にして、婆羅門にあらずと知れ。（六一四）

人間の中にて、他に仕へて生くるものあらば、ヴーセッタよ、斯る人は奴僕にして、婆羅門に非ずと知れ。（六一五）

人間の中にて與へられざるものを取りて生くるものあらば、ヴーセッタ、斯の如き人は是れ盜賊にして、婆羅門にあらずと知れ。（六一六）

人間の中にて射術によりて生くるものあらば、ヴーセッタ、斯の如き人は是れ軍士にして、婆羅門にあらずと知れ。（六一七）

人間の中にありて、王の敎臣として生くるものあらば、ヴーセッタ、斯の人は是れ祭祀僧にして、婆羅門にあらずと知れ。（六一八）

人間の中にて、村邑國土を食むものあらば、ヴーセッタよ、斯る人は是れ王者にして、婆羅門にあらずと知れ。（六一九）

（一）我は〔婆羅門女の〕胎より出で、〔婆羅門〕母より生れたるの故を以て、彼を婆羅門と呼ばず、彼若し我有ある身ならば彼は我を呼んで爾と言ふもの、我有なく著なきもの、我は彼を婆羅門と呼ぶ。（六二〇）

所有ゆる愛結を斷ち、怖るる所なく、著を超え繫を離れたるもの、此の人を我は婆羅門と呼ぶ。（六二一）

紐と緒と索とを、之に屬せるものと共に併せ斷ち、梁木を摧きたる智者、我は此の人を婆羅門と呼ぶ。

《六二二》

惡罵も打擲も監禁も、怒ることなくして默受し、堪忍力ありて心猛き人、我は斯の如き人を婆羅門と呼ぶ。《六二三》

忿怒なく、行あり、戒あり、欲を離れ、自調して、最後身に達せるもの、之を我は婆羅門と呼ぶ。《六二四》

荷葉の上なる水の如く、錐の頭なる罌粟の如く、諸欲に染せられざるもの、此の人を我は婆羅門と呼ぶ。《六二五》

己の苦惱の此處に滅ぶるを知り、重擔を卸し、繫縛を離れたるもの、我は之を婆羅門と稱す。《六二六》

深智あり賢才ありて、道非道を辨へ、最上利に到達せるもの、我は之を婆羅門と呼ぶ。《六二七》

在家人にも出家人にも、其の間に混らず、家なくして遊行し欲寡きもの、我は此の人を婆羅門と云ふ。

《六二八》

弱きも強きも有情に對して刀杖を加へず、之を害ふことなく、將た殺さしむることなき、我は此の人を婆羅門と呼ぶ。《六二九》

敵意ある人の間にありて敵意なく、暴者の中にありて心溫かに、取著ある人の中にありて取著なき、之を我は婆羅門と名く。《六三〇》

人の貪と瞋と慢と覆と共に落つること、錐頭の罌粟の如くなる、我は之を婆羅門と名く。《六三一》

麤ならず、意義を含みて眞なる語を吐き、之によりて、他を怒らしむることなき、我は之を婆羅門と稱す。《六三二》

此の世にありて、長きも短きも、小なるも大なるも、善きも惡きも與へられざるを取ることなき、我は之を婆羅門と呼ぶ。《六三三》

此の世にも彼の「世」にも、欲望あるなく、意樂なく繫縛を離れたる、此の人を我は婆羅門と云ふ。（六三四）

人に依處なく、智慧ありて疑惑なく、不死の極處に到れる、此の人を我は婆羅門と呼ぶ。（六三五）

此處に福業も、罪業も、共に「脱れて」、著を伏し、憂なく、染なく、清淨なるもの、之を我は婆羅門と呼ぶ、（六三六）

曇りなき月の如く「心」淸く、澄みて、濁りなく、歡樂の心盡きたる人、之を我は婆羅門と稱す。（六三七）

此の泥途・難路・輪廻・愚癡を超え渡りて彼岸に到り、禪思ありて、欲なく、疑なく、執なくして、靜穩に歸したる、我は此の人を呼んで婆羅門と云ふ。（六三八）

此處に諸欲を棄て、家を離れて遊行し、欲有を滅したる人、之を我は婆羅門と呼ぶ。（六三九）

此處に愛著を棄て、家を離れて遊行し、愛有を滅したる人、之を我は婆羅門と呼ぶ。（六四〇）

人界の縛を棄て、天界の繫を超えたり、所有ゆる繫縛を離れたる人、之を我は婆羅門と呼ぶ。（六四一）

樂と非樂とを棄て、淸涼に歸して、有質なく、所有ゆる世間に打ち勝ちたる勇士、我は之を婆羅門と云ふ。（六四二）

總て有情の死と生とを知り、執著の念なき善趣の智者、之を我は婆羅門と呼ぶ。（六四三）

諸天も乾闥婆も人間も、其の行く道を窺ひ知るなし、此の漏盡の阿羅漢、之を我は婆羅門と名く。（六四四）

彼の過去にも未來にも將た中間にも、己の有とすべきものなし、我有なく取著なき、之を我は婆羅門と呼ぶ。（六四五）

最雄・最勝の人・勇士・大仙・勝者・無欲にして學を訖りたる智者、之を我は婆羅門と呼ぶ。（六四六）

宿世を知り、天界と惡趣とを見、更に生の滅盡に到り、智の極に達したる牟尼にして、總て果すべきを果したる人、我は此の人を婆羅門と呼ぶ。（六四七）

世に名とし姓として擧げらるるものは、唯語に過ぎず、此處に彼處に擧げらるるものは、共許によりて了解せらるるなり。（六四八）

無智者の見解は、長時執著せるなり、無智者は我等に告げて、「婆羅門たるは生による」と云ふ。（六四九）

生によりて婆羅門たるにあらず、生によりて非婆羅門たるにあらず、業によりて婆羅門たり、業によりて非婆羅門たり。（六五〇）

耕者は業により、技工は業による。商人は業により、奴僕は業によりて「奴僕たり」。（六五一）

盜賊も業により、軍士も亦業による。祭祀僧も業により、王者も亦業によりて「王者たり」。（六五二）

緣起を見、業果を知る賢者は、斯の如く如實に、此の業を見る。（六五三）

業によりて世界は存し、業によりて有情界は存す。業の有情を縛するは、猶ほ轉がれる車の轄の「車を制むるが」如し。（六五四）

苦行により、梵行により、自制により、將た自調により、之によりてぞ婆羅門なる、之ぞ最上の婆羅門なる。（六五五）

三種の智を具有し、寂靜にして再生を盡したる、ヴーセッタよ、斯の如きは智ある人の梵天、帝釋天なりと知れ。」（六五六）

斯の如く云はるるや、ヴーセッタ婆羅墮闍兩靑年は世尊に白して言へり「奇なる哉、尊瞿曇、奇なる哉、尊瞿曇……尊瞿曇、今日より始めて生を終るに至るまで、歸依せる優婆塞として我等を攝受せよ。」

(一)コーカーリカ經第十

是の如く我聞けり。一時世尊舍衞城の祇陀林と云ふ給孤獨者の遊樂園に住し給へり。時にコーカーリカ［と呼べる］比丘、世尊の居給へる處に近づき來れり。近づき來りて一方に坐したり。一方に坐したる比丘コーカーリカは世尊に白して言へり、「大德、舍利弗目犍連には邪欲の念あり、彼等は邪欲の爲に伏せられたり」と。

斯く云ふや、世尊は比丘コーカーリカに告げて宣へり「コーカーリカ、斯く云ふ勿れ、コーカーリカ、斯く云ふ勿れ、コーカーリカ、舍利弗目犍連に對して和悅の念を起せ、舍利弗目犍連は悅愛すべきなり」と。

二たびコーカーリカ比丘は世尊に白していへり「大德、我が［見る所にては］世尊は信實にして信賴すべきが如くなれど、而も舍利弗目犍連には邪欲の念あり、彼等は邪欲の爲に伏せられたり」と。

二たび世尊は比丘コーカーリカに告げて宣へり「コーカーリカ、斯く云ふ勿れ、コーカーリカ、斯く云ふ勿れ、舍利弗目犍連に對して和悅の心を起せ、舍利弗目犍連は悅愛すべきなり」と。

三たびコーカーリカ比丘は世尊に白して言へり「大德、我が［見る所にては］世尊は信實にして信賴すべきが如くなれど、［彼の］舍利弗目犍連には邪欲の念あり、彼等は邪欲の爲に伏せられたり」と。

三たび世尊はコーカーリカ比丘に告げて宣はく「コーカーリカ、斯の如きの言をなす勿れ、コーカーリカ、斯の如きの言をなす勿れ、舍利弗目犍連に對して和悅の心を起せ、舍利弗目犍連は悅愛すべきなり」と。

【一】以下法句經三九六偈以下參照。

其より比丘コーカーリカは座より起ちて世尊を禮拜し、右繞の儀を行じて去れり。去りて未だ久しからざるに、コーカーリカ比丘は全身、罌粟粒大の瘻疹を以て掩はれたり。罌粟粒大となりて、菜豆大となれり。菜豆大となりて、山黎豆大となれり。山黎豆大となりて、コーラッチ大となれり。コーラッチ大となりて棗實大となれり。棗實大となりて、(二)阿摩洛迦果大となれり。阿摩洛迦果大となりて、未熟の(三)ベールヴ果大となれり。未熟のベールヴ果大となりて、(四)ビッリ果大となれり。ビッリ果大となりて破れぬ。膿と血と流れ出でぬ。其よりコーカーリカ比丘は其の病のために死したり。死したるコーカーリカ比丘は舍利弗目犍連に對し敵意を抱きたるため、波頭摩地獄に墮ちたり。

時に娑婆世界の主大梵天王は「其の」夜遲く、絕妙の容色をなして隈なく祇陀林を照し、世尊の居給へる處に近づき來れり。近づき來りて世尊を禮拜し一方に立ちたり。一方に立ちたる娑婆の主梵天王は世尊に白して言へり「大德、コーカーリカ比丘は死したり、大德、死したるコーカーリカ比丘は舍利弗目犍連に對して敵意を抱きて爲に、波頭摩地獄に墮ちたり」と。之を言へり、娑婆の主梵天王は、之を言ひて右繞の禮を行ひ、其の處に隱沒したり。

其より世尊は其の夜を過ぎて後諸比丘に告げて宣へり、「諸比丘昨夜娑婆の主梵天王は、後夜絕妙の容色をなして……之を言ひて右繞の禮を行ひ、其の處に隱沒したり」と。

斯く宣ふや、一比丘あり、世尊に白して言へり「大德、波頭摩地獄に於ける壽量如何ぞや。」「比丘、波頭摩地獄に於ける壽量は長し、之を『或は若干年なり、或は

若干百年なり、或は若干千年なり、或は又若干百千年なり』と云て算ること容易ならず。」「大德、之を喩ふることを得べきや。」「比丘、喩ふることを得べし」と世尊は宣へり。「比丘、例へば、二十カーリカの拘薩羅胡麻一車量ありとせよ、其より一人ありて百年、千年、百千年の終に一粒の胡麻を取り去るとせば、比丘、二十カーリカの拘薩羅胡麻一車量は、斯の如き方法によりて一の阿浮陀地獄よりも疾く盡くるに至る。比丘、例へば二十の阿浮陀地獄を併せたるもの、是れ一尼剌部陀地獄なり。比丘、例へば二十の尼剌部陀地獄を併せたるもの、是れ一阿婆婆地獄なり。比丘、例へば二十の阿婆婆地獄を併せたるもの、是れ一阿訶訶地獄なり。比丘、二十の阿訶訶地獄を併せたるもの、是一阿吒吒地獄なり。比丘、二十の阿吒吒地獄を併せたるもの、是れ一拘勿頭地獄なり。比丘、二十の拘勿頭地獄を併せたるもの、是れ一須犍提地獄なり。比丘、二十の須犍提地獄を併せたるもの、是れ一鬱鉢羅地獄なり。比丘、二十の鬱鉢羅地獄を併せたるもの、是れ一芬陀利地獄なり。比丘、例へば二十の芬陀利地獄を併せたるもの、是れ一波頭摩地獄なり。比丘、然るに彼のコーカーリカ比丘は舍利弗目犍連に對して敵意を抱きたるため波頭摩地獄に生れ出でたり」と。之を宣へり世尊は、之を語りて善逝は、其より下の如く宣へり師は、

「生れたる人には〔其の〕口に斧生じ、之によりて愚者は惡言を放ち己を切る。《六五七》

毀るべき人を譽め、又は譽むべき人を毀るもの、彼は口を以て罪を造り、其の罪の爲めに樂を享くることあらず。《六五八》

骰子によりて財を喪ふは、假令己を併せすべて〔喪ふ

と」雖も、此の罪は輕し。善逝に對して心を汚すもの、之ぞ重き罪なる。 《六五九》

百千の尼刺部陀の中、三十六の尼刺部陀と五の阿浮陀とに墜つ、聖者を訾るものは地獄に赴く、心と語とを邪に導きて。 《六六〇》

非事を語るものは地獄に墮つ、爲して「我爲さず」と云ふものも亦、此等兩者は死後にありては同じ、劣業の人來世に「至りては同じ」。 《六六一》

人若し害心なき人、清淨にして執著なき人に忤はば、禍の此の愚者に還り來ること、逆風に投じたる細塵の如し。 《六六二》

貪望に墮せるもの、彼は語を以て他を罵る、信心なく、悋にして、親むこと難く、慳む心ありて、兩舌を事とす。 《六六三》

口穢く、僞ありて、卑く、生を損ひ、邪にして、惡を行ふもの、野鄙にして、罪穢あり、素性卑き汝、此の世にありて饒舌なる勿れ、「然らざれば」汝地獄に墮つるものとならん。 《六六四》

汝「他人の」非利の爲に塵を撒ず、「自ら」罪惡を作るものにして、而も寂靜の人を難む、衆の惡業を行うて、長夜「地獄の」坑中に陷る。 《六六五》

何人の業も亡ぶることなし、「業は還り」來りて、主たるものは之を受く、罪を犯して愚者は來世に於て其の身に苦を見る。 《六六六》

「人は」鐵棒を以て打たるる處に、「人は」利刃の鐵槍「ある處に」至る、其より熱したる鐵丸に似て、「彼に」適する食物あり。 《六六七》

語るものは好きことを語らず、彼等は樂しき「顏を以て」近づき來らず、又依處を得ることなし、「彼等は」擴げたる炭火の上に臥し、焰焰たる火聚の中に入る。

(六六八)

また彼等は網を以て覆はれ、此處に鐵槌を以て殺され、黑暗の中に入る、黑暗は〔大〕地身の如く蔓れるなり。(六六九)

其より〔彼等は〕鐵製の釜に〔入り〕、焰焰たる火聚の中に入る、長時其の火聚の中に煑られ、(六七〇)

其より膿血を混ぜる中にて、罪を犯せるものは如何にして煑らるるぞ、彼何の方に止らんとも、其の處にて觸れ汚さる。(六七一)

蠕蟲の棲める水の中にて、罪を犯せるものは煑らるること必定なり、〔此處には〕逃るべき緣も之なし、瓶は四方共に同じければなり。(六七二)

又彼等に四肢を切斷せられて、銳利なる刃葉林中に入る、諸種の獄卒は釣鉤を以て舌を捕へ、彼等を苦む。(六七三)

其より又た彼等は、刃銳き剃刀の流ありて、超え難き大江に入る、邪業の輩は、罪業を犯して此處に陷る。(六七四)

此處に泣き叫べるを、黑き斑なる大鴉の羣ありて噉ひ、狗・野干・大鷲・鷹・鴉も亦之を啄む。(六七五)

罪を犯せる輩の此處に(五)見る此の生活はげにも慘なる哉、されば此〔の世〕に於て、殘生の間勉勵して放逸なること勿れ。(六七六)

波頭摩地獄に運び入れらるる彼の胡摩の馱數は智者之を算へぬ、其は五那由他倶胝、(六)又他に十二百倶胝あり。(六七七)

此の世に於て、地獄は苦と稱へらるる限り、人は其處に斯く久しく住まざるべからず、されば人は淸く愛すべく、善き羣の中にありて、常に語と意とを護れ。」(六七八)

【一】コーカーリカと云へる比丘、舍利弗目犍連に對して惡意を抱きたるため、死して地獄に陷る、之に因みて佛地獄の苦しき狀態を說く。【二】Amalaka.　【三】Beluva.　【四】Billi.　【五】斯の如くして地獄の中に陷れる輩の經驗する生活狀態。【六】五萬一千二百萬億。

(一)那羅迦經第十一

序偈

(二)三十天羣の歡び喜み、帝釋天王幷に淨居天子の衣服を取りて、甚しく讚歎しけるを、阿私陀は日中の休息の間に見たり。(六七九)

諸天子の〔斯く〕歡喜踊躍せるを見て、〔彼は〕其の時曰へり「天子の羣は、何故なれば歡喜の色あり、何によりてか衣服を取りて之を振れるぞ、(六八〇)

(三)阿修羅と戰ひて、天子の勝ち、阿修羅の敗れし時、其の時も斯る身毛竪立底の事なかりき、如何なる未曾有の事を見んとて諸天子は歡べるぞ。(六八一)

〔彼等は〕震ひ、跳び、樂を奏し、手を以て打ち、又は舞ふ、予は汝須彌山の頂に住めるもの等に問ふ、諸尊疾く我が疑惑を除け。」(六八二)

「彼の菩薩。無比の勝寶、人界の利益安樂の爲め、釋迦族の村、藍毘尼の地に生れ給へり、之によりて我等は喜び、甚く悅べるなり。(六八三)

彼、一切衆生の最上者、尊貴の人、人中の最、所有ゆる人類中の最上者は、仙人の名ある林にて「法」輪を轉じ給はん、獸類に勝てる、强き獅子の吼ゆるが如く。」(六八四)

此の聲を聞きて疾く彼は去れり、其より淨飯〔王〕の宮殿に入り、其處に坐して、仙士は諸釋に向ひ、次の如く云へり、「王子は何處〔に在すぞ〕、我拜せんと思ふ。」(六八五)

其より諸釋は、鎔爐の口にて巧なる「鍛工の」鍛ひたる黄金の光れるが如き王子、榮福に輝き、尊き顏ある兒を阿私陀と呼べる「仙士」に見せたり。《六八六》

輝く火の如く空を行く、星王の如く淸み、雲を離れて照る秋の日の如くなる王子を見て、「彼」歡喜生じ、大なる喜悦を得たり。《六八七》

諸天は數多の枝ある、千輪の傘を空中に翳せり、黄金の柄ある麈尾は搖るれど、麈尾と傘とを執れるものは見えざりき。《六八八》

(四)カンハシリと呼べる結髮仙士は「王子の」黄色の毛彼に「載せたる」金貨の如く、「其の」頭上には白傘を翳せるを見て、心歡び嬉みて「之を」受取れり。《六八九》

相形と呪文とを熟知せる「仙士」は、釋牛を「抱かんと」願ひて「之を」抱き、心悦びて聲を放てり「之は無上者、兩足中の最上者なり」と。《六九〇》

其より己の行先を憶ひて心樂まず、淚を流せり、諸釋は仙人の泣くを見て「我等の王子に障礙ありや」と問へり。《六九一》

諸釋の樂まざるを見て仙士は云へり「我王子に不利「の相ある」を憶はず、尚又彼には障礙あらざるべし、彼は賤きものにあらず、心を安んぜよ。《六九二》

此の王子は正覺の頂に達し、此の最勝淸淨の「涅槃」を見る「人」は法輪を轉ぜん、此の羣生の利益を慈念する「人」、而して彼の敎は廣まらん。《六九三》

此の世の我が壽は又餘る所長からず、よりて「彼の」中途に我には死來るべし、我は此の無等倫者の法を聞かじ、よりて我は惱み、(五)憂へ、苦めるなり。」《六九四》

彼梵行者は諸釋に大なる喜悦を起させて、宮殿内より去れり、彼は己の(六)甥を愍み、無等倫者の法に從はんことを勸めぬ。《六九五》

「佛と云ふ聲を他より聞く時は、〔又〕正覺を成じて法の道を行けりと〔聞く時は〕、其の處に往きて自ら問ひ、彼の世尊〔の傍〕にて梵行を修せよ。」（六九六）

此の斯の如く利益心あり、未來に最勝清淨〔の涅槃〕を見る〔仙士〕に敎へられ、彼衆の善根を積みたる那羅迦は、諸根を護りつつ、(七)時那たることを期して、〔世尊の〕傍に住めり。（六九七）

時那の最上〔法〕輪を轉ずるや、其の聲を聞きて、悦び(八)仙牛〔の處〕に到り〔仙牛を〕見て、牟尼の長者に最勝の智を問へり、阿私陀と呼べる〔仙士〕の敎來りし時。（六九八）

* * *

(九)「阿私陀の此の言は如實に、我之を識知せり、されば瞿曇、汝有ゆる法を熟知せるものに問ふ。（六九九）

〔我は〕出家の身となり、比丘行を〔修せんと〕願へるものなり、牟尼、問はれて我に智と最上の道とを示せ。」（七〇〇）

世尊は〔宣へり〕「我汝に行ひ難く、得難き智を示さん、今我之を汝に告げん、毅然たれ、確乎たれ。（七〇一）

平等を修せよ、平等は村里にて毀り又は譽むる所、意の汚れに心せよ、寂靜に誇なくして住せよ。（七〇二）

種種のもの現はれ出づ、林中の火聚の如く、婦女子は牟尼を誘惑す、婦女子に彼を誘惑せしむること勿れ。（七〇三）

交媾を謝し、勝劣の欲を棄て、弱き又は强き有情の中にありて敵せず、而も執せず。（七〇四）

此等は我の如く然り、我は此等の如く然り、己を譬として打つ勿れ、殺す勿れ。（七〇五）

凡夫の執著する所の欲愛と貪望とを棄て、具眼者は行ひて此の奈落を超えよ。（七〇六）

腹小にして食に量あり、寡欲にして貪る所なくば、彼こそは、欲に燒かるることなく、無欲にして寂靜なれ。（七〇七）

彼牟尼は分衞に赴きて、樹林の邊に去り行きて、樹下の座に就くべし。（七〇八）

彼の禪思を專とする勇士は、林邊にありて樂み、樹下に禪思して自ら歡ぶべし。（七〇九）

其より夜を過ぐるや、村里の邊に去るべく、招請をも村里より齎せるものを「受くることをも」喜とせざるべきなり。（七一〇）

牟尼、村に來りては、急ぎて家家の間に遊行するなく、食を求めては談話を止め、合著の語を發つこと勿れ。（七一一）

「我が得たる所之善し、得ざりし「も亦」善し」とて、「得るも得ざるも」共に變ることなく、彼樹下に還り來る。（七一二）

彼鉢を手にして遊行するに、啞者にあらずして啞者と思はる、少施も蔑むことなく、施者を輕ずることなかれかし。（七一三）

沙門は種種の道を說明したまひしが、「此の道は」邪徳の人を彼岸に運ぶことなく、之は一德とは思惟せられず。（七一四）

「生死の」流を斷ちたる比丘には、貪欲あるなく、あらゆる務を捨てたるものには、苦悶あるなし。（七一五）

我汝に智を示さんと、世尊は宣へり、剃刀の刃の如く舌を以て上顎に著け、腹に於て自ら制すべし。（七一六）

心執著するなく、又多を思惟するなく、汚穢なく依著なくして、專心梵行を修すべし。（七一七）

獨棲の爲めに、又た沙門の奉仕「の道」の爲めに學べ、獨りなるは、智なりと示さる、「人は」獨にしてぞ樂

まん。（七一八）

其より〔彼は〕十方に光り輝かん。勇にして、禪思あり欲を棄てたる人の聲を聞きて、我に歸屬する人は慚と信とを增長すべし。（七一九）

之を池又は小孔の水より學び知れ、小池は音をなして流れ、大海は靜にして流る。（七二〇）

足らざるものは音をなし、滿てるものは靜かなり、愚者は半〔滿ちたる〕瓶に喩ふべく、智者は滿ちたる池の如し。（七二一）

沙門の意義あることを多く語るは、彼は知りて法を說くなり、彼は知りて多を語るなり。（七二二）

〔されど〕知りて己を制し、知りて多くを語らずば、彼牟尼は智〔者の名を受くる〕に堪ふ、彼牟尼は智を獲たるなり。」（七二三）

【一】阿私陀仙の忉利天に於て悉達太子の降誕を聞くことより初め其甥那羅迦の出家して後、道を世尊に問ひ、世尊の彼がために智最上の道を示したまふことを述ぶ。【二】忉利天、怛唎耆天、又多羅夜登陵舍天と云へるものに當る、常に之を三十三天と譯すれども巴利語の原語には此の意なし。【三】阿修羅を非天と云ふ、天子の敵にして、兩者は常に相戰へりと云ふ。【四】Kaṇhasiri（カンハシリ）阿私陀の一名なり。【五】滅び、災に陷り。【六】那羅迦（Nālaka）（ナーラカ）。【七】佛の異名なり。【八】佛の異名なり、仙人の長と云はんが如し。【九】以下那羅迦と世尊との問答なり。

（一）種觀照經第十三

是の如く我聞けり。一時世尊は舍衞城の東園なる彌伽羅〔長者〕母の樓閣中に住し給へり。時に世尊は其の布薩日十五日滿月の夜に於て比丘衆に圍繞せられ屋外に坐し給へり。時に世尊は默默たる比丘衆を見回して彼等に告げ給へり、

「諸比丘、善く、尊く、解脫を得せしめ、正覺に導く法ありて、諸比丘、此等の善く、尊く、解脫を得せしめ、正覺に導く法を汝等が聽聞するの要は何ぞやと、諸

比丘、若し問者あらば、彼等に對して下の如く答ふべきなり、二種の法を如實に解了せんがためなりと。何をか二種「の法」と云ふや。之は苦なり、之は苦集なりと、これ一の觀照なり。之は苦滅なり、之は苦滅に達するの道なりと、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く正しく二法を觀照して、精勤し、熱烈專心にして住する比丘には二種の果の一ぞ期待せらる。現世に於ては全智、或は又有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げて後善逝は、更に之を說き給へり師は、

「苦を知らず、更に苦の生をも、苦の總て餘りなく滅ぶる處をも、苦の止息に達する彼の道をも知らざるもの、（七二四）

彼等は心解脫、更に智解脫を缺く、彼等は「輪廻を」盡すことを得ず、彼等は生老を受く。（七二五）

苦をも知り、さらに苦の生をも、苦の總て餘りなく滅ぶる處をも、苦の止息に達する彼の道をも知るものは、（七二六）

心解脫、更に智解脫を具有す、彼等は「輪廻を」盡すことを得、彼等は生老を受くることなし。」（七二七）

「他の方便によりて能く二種「の法」を觀照することありやと、諸比丘、若し問ふものあらばありと答ふべきなり。如何にしてあるや。如何なる苦も其の生ずるは總て(三)本質を緣とす、これ一の觀照なり。本質を遠離し、斷盡して餘す所なければ、苦生ずることなしと。これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く能く二法を觀照して、熱烈專心にして住する比丘には二種の果の一ぞ期待せらる。現世に於ては全智、有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げて後善逝は、更に之を說き給へり師は、

「世間に於て種種の形をなせる苦は本質を縁として生ず、無智にして愚昧なるものは本質を作り、再再苦を受く、されば智慧を具して本質を作らず、苦の生起を觀するものとなれ。」 《七二八》

「他の方便によりて能く二種〔の法〕を觀照することありやと、諸比丘、若し問ふものあらば、ありと答ふべきなり。如何にしてありや。如何なる苦も其の生ずるは總て無明を縁とすと、これ一の觀照なり。無明を遠離し斷盡して餘す所なければ、苦生ずることなしと、之第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く能く二法を觀照して精勤し熱烈專心にして住するものには二種の果の一ぞ期待せらる。現世に於ては全智、有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げて後善逝は、更に之を說き給へり師は、

「此の生有〔又〕彼の生有と生死輪廻を受くると再再なるものは、其所趣は無明の〔所趣〕にぞある。《七二九》

是れ此の無明は大愚癡にして、此〔大愚癡の〕爲に長く輪廻したればなり、而して智に達れる有情は再び生を受くることなし。」 《七三〇》

「他の方便によりて……如何にしてありや。如何なる苦も其の生ずるは總て行を縁とすと、これ一の觀照なり。諸行を遠離し斷滅して餘す所なければ苦生ずることなしと、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く能く二法を觀照して精勤し、熱烈專心にして住する比丘には、二種の果の一ぞ期待せらる。現生に於ては全智、有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げて後善逝は、更に之を說き給へり師は、

「如何なる苦たりとも其の生ずるは總て行を縁とす、諸行の斷滅によりて苦生ずることなし。 《七三一》

行を縁と〔して生〕ずる此の苦を患難なりと知りて、一切行の寂止と想の除滅とよりして苦滅盡すと、之を如實に知りて、　《七三二》

正しく見、全成し、正しく知れる智者は、魔の繋縛を破りて、再び生を受くることなし。」　《七三三》

「他の方便によりて正しく二〔種の法〕を觀照することありやと、諸比丘、若し問ふものあらば、ありと答ふべきなり。如何にしてありや。如何なる苦も其生ずるは總て識を縁とすと、これ一の觀照なり。識を斷滅して餘す所なければ、苦生ずることあらずと、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く正しく二法を觀照して精勤し熱烈專心にして住する比丘には、二種の果の一ぞ期待せらる。現生に於ては全智、有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げて後善逝は、更に之を説き給へり師は、

「如何なる苦も其の生ずるは總て識を縁とす、識の滅盡によりて苦生ずることなし。　《七三四》

識を縁と〔して生〕ずる此の苦の患難なることを知りて比丘は識を息止し、飢渇なく清涼なり。」　《七三五》

「他の方便によりて二〔種の〕法を觀照することありやと諸比丘、若し問ふものあらば、ありと答ふべきなり。如何がありや。苦の生ずるは總て觸を縁とすと、これ一の觀照なり。觸を斷滅して餘す所なければ苦生ずることなしと、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く正しく二法を觀照して精勤し熱烈專心にして住する比丘には、二種の果の一ぞ期待せらる、現生に於ては全智、或は若し有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げて後善逝は、更に之を説き給へり師は、

「觸に沒し、生有の流に順ひ邪路に入れる其等〔の徒〕

には繫縛を盡さんここは遠し。《七三六》

觸を解了し、知りて寂止を樂むもの、彼等は觸を滅し飢渇なく清涼なり。」《七三七》

「他の方便によりて二〔種の〕法を觀照することありやと諸比丘、若し問ふものあらば、ありと答ふべきなり。如何にしてありや。苦の生ずるは總て受を緣とすと、これ一の觀照なり。受を滅盡して餘す所なければ苦生ずることあらずと、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く正しく二法を觀照して精勤し熱烈專心にして住する比丘には、二種の果の一ぞ期待せらる。現生に於ては全智、或は若し有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げて後善逝は、更に又之を說き給へり師は、

「樂或は苦、及び非苦非樂と、內幷に外に感受したるもの、《七三八》

之を苦なりと知り、壞るべき朽つべき法に觸れ、觸れて〔諸法の〕敗壞を見、斯の如くして欲を離る、比丘は諸受の滅盡よりして飢渇を去り清涼となる」。《七三九》

「他の方便によりて二〔種の〕法を觀照することありやと諸比丘、若し問ふものあらば、ありと答ふべきなり。如何にしてありや。苦の生ずるは總て愛を緣とすと、これ一の觀照なり。愛を斷盡して餘す所なければ苦生ずることあらず。諸比丘、斯の如く正しく二法を觀照して精勤し熱烈專心にして住する比丘には、二種の果の一ぞ期待せらる。現生に於ては全智、若し有餘身ならば不還果なり」と。之を世尊は語げ給へり、之を語げ給ひて善逝は、更に又之を說き給へり師は、

「愛を其の伴とする人は、長途を轉生しつつ、此の生又は彼の生と、輪廻を超ゆることなし。《七四〇》

愛より苦の生ずる、之を患難なりと知て、比丘は愛を

離れ、取著を去り、〔正〕念にして遊方すべし。」《七四一》
「他の方便によりて二〔種の〕法を觀照することありやと、諸比丘、若し問ふものあらばありと答ふべきなり。如何がありや。苦の生ずるは總て取を緣とすと、これ一の觀照なり。取を斷滅して餘す所なければ苦の生ずることなしと、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く正しく二法を觀照して精勤し、熱烈專心にして住する比丘には、二種の果の中の一ぞ期待せらる、現生に於ては全智、若し有餘身ならば不還果なり」と、之を世尊は告げ給へり、之を語げ給ひて善逝は、更に下の如く說き給へり師は、
「有は取を緣として〔起り〕、生れたる者は苦を受く、
生あるものには死あり、之れ苦の起りなり。《七四二》
されば取の滅盡よりして、智者は正しく知り、生の滅盡を識りて再び生を受くることなし。」《七四三》

「他の方便によりて二〔種の〕法を觀照することありやと、諸比丘、若し問ふものあらば、ありと答ふべきなり。如何にしてありや。苦の生ずるは總て(三)努力を緣とすと、これ一の觀照なり。努力を滅盡して餘す所なければ苦生ずることあらずと、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く正しく二法を觀照して精勤し熱烈專心にして住する比丘には、二種の果の一ぞ期待せらる。現生に於ては全智、若し有餘身ならば不還果なり」と、之を世尊は語げ給へり、之を語げ給ひて後善逝は、更に之を說き給へり師は、
「如何なる苦も其の生ずるは、總て努力を緣とす、努力の滅盡によりて、苦生ずることなし。《七四四》
努力を緣とする此の苦を患難なりと知りて、有ゆる努力を棄て、努力なきに於て解脫を得、《七四五》
生有の愛を斷じ、心寂靜に歸したる彼の比丘は、生

〔死〕輪廻を超て、再び生〔を受くること〕なし」。（七四六）

「他の方便によりて二〔種の〕法を觀照することありやと、諸比丘、若し問ふものあらば、ありと答ふべきなり。如何が之ありや。如何なる苦も其の生ずるは食を緣とすと、これ一の觀照なり。食を盡して餘す所なきより苦生ずることなしと、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く正しく二法を觀照して精勤し熱烈專心にして住する比丘には二果中の一こそ期待せらるれ。現生に於ては全智、若し有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げ給ひて後善逝は、更に之を說き給へり師は、

「如何なる苦たりとも其の生ずるは、總て食を緣とす、食の滅盡によりて、苦生ずることなし。（七四七）

苦は食を緣とすと、此の患難を知り、總て食を識り、總て食に依らず。（七四八）

無病は諸漏の滅盡より〔來ることを〕正しく知り、辨へて仕へ、法に住する智者は、〔生者中に〕數へらるることなし。」（七四九）

「他の方便によりて二〔種の〕法を觀照することありやと諸比丘、若し問ふものあらば、ありと答ふべきなり。如何が之ありや。凡そ苦の生ずるは總て(四)動亂を緣とすと。これ一の觀照なり。動亂を滅盡して餘す所なければ苦生ずることなしと、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く正しく二法を觀照して精勤し熱烈專心にして住する比丘には二果中の一果こそ期待せらるれ。現生に於て全智、若し又有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げ給ひて善逝は、更に之を說き給へり師は、

「凡そ苦の生ずるは、總て動亂を緣とす、動亂を斷滅するによりて、苦生ずることなし。（七五〇）

苦は動亂を緣とすと、此の患難を知り、其より欲を棄て行を阻めて、比丘は欲なく取なく〔正〕念にして遊方すべし。」《七五二》

他の方便によりて二〔種の〕法を觀照することありやと諸比丘、若し問ふものあらばありと答ふべきなり。如何が之ありや。依屬せるものには(五)動搖ありと、これ一の觀照なり。獨立せるものは動搖せずと、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如くして正しく二法を觀照して精勤し熱烈專心にして住する比丘には二果中の一果ぞ期待せらるる。現生にありて全智、若し有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げ給ひて善逝は、更に之を說き給へり師は、

「獨立せるものは、動搖せず、依屬せるものは、また此〔の生〕彼〔の生〕を執らへて、輪廻界を超ゆることなし。《七五二》

依著には大怖畏ありと、此の患難を悟りて、比丘は依なく取なく、〔正〕念にして遊方すべし。」《七五三》

「他の方便によりて二〔種の〕法を觀照することありやと諸比丘、若し問ふものあらば、ありと答ふべきなり。如何にして之ありや、諸比丘、無色〔界身〕は色〔界身〕よりも更に寂靜なりと、これ一の觀照なり。(六)滅盡は無色〔界身〕よりも更に寂靜なりと、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く正しく二法を觀照して精勤し熱烈專心にして住する比丘には二果の中一果こそ期待せらるれ。現生に於ては全智、或は若し有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げ給ひて善逝は、更に之を說き給へり師は、

「色身を有する有情と、無色〔界〕に住するものとは滅盡〔涅槃〕を知らずして再生を受くるものなり。《七五四》

色身を識り、無色界に安立し、滅盡に解脫を得たるも

の此等の人は死を捨てたるものなり。」
「他の方便によりて二種の法を觀照することありや（七五五）と、諸比丘、若し問ふものあらば、ありと答ふべきなり。如何にしてか之ありや。諸比丘、天界魔界を併せたる世界のものによりて、沙門婆羅門、人天の集の中に於て之は眞實なりと思惟せられし、其を諸の賢聖は正智を以て其は虛妄なりと如實に識知す、これ一の觀照なり。諸比丘、天界魔界を併せたる世界のものによりて、沙門婆羅門、人天の集の中に於て、之は虛妄なりと思惟せられし、其を諸の賢聖は正智を以て之は眞實なりと如實に之を識知す、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如くして正しく二法を觀照して精勤し熱烈專心にして住する比丘には二果中の一果こそ期待せらるれ。現生に於て全智、若し又有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げ給ひて善逝は、更に之を說き給へり師は、

「我なきに於て我の思をなし、名色に沒入せる、人天世界を見よ、之を眞實なりと思へるなり。（七五六）

此により彼により「之來るべしと」思へるに、其より其は異りて來る、其は彼に取りては虛妄なり、虛妄の法は卑陋なり。（七五七）

敗壞なき法、涅槃、其を諸聖は如實に識知す、げに彼等は眞に解了して、渴欲なく清涼となれり。」（七五八）

「他の方便によりて正しく二「種の」法を觀照することありやと、諸比丘、若し問ふものあらば、ありと答ふべきなり。如何が之ありや。諸比丘、天界魔界を併せたる世界のものによりて、沙門婆羅門、天人の羣によりて、之は樂なりと思惟せられたるもの、其を諸の賢聖は正智を以て其は苦なりと如實に識知す、これ一の觀照なり。諸比丘、天界魔界を併せたる世界のも

のによりて、沙門婆羅門、天人の羣によりて、之は苦なりと思惟せられたるもの、其を諸の賢聖は正智を以て其は樂なりと如實に識知す、これ第二の觀照なり。諸比丘、斯の如く正しく二法を觀照して精勤し熱烈專心にして住する比丘には二果中の一果こそ期待せらるれ、現生に於ては全智、若し有餘身ならば不還果なり」と。之を語げ給へり世尊は、之を語げ給ひて後善逝は、更に之を說き給へり師は、

「色聲味香觸及び法の、總て愛すべく樂むべく、又意に適せるものにて、ありと稱へらるる限り、《七五九》

此等〔諸法〕は汝等人天世界のものには樂と認められたり、而して此等の滅ぶる處、これ彼等には苦と認められたり。《七六〇》

己身の滅ぶるは賢聖には樂と見られ、あらゆる世界の識者には之は相反して〔見ゆ〕。《七六一》

他の〔愚者の〕樂なりと云へる其を、賢者は苦なりと云ひ、他の〔愚者の〕苦なりと云へる其を、賢者は樂なりと識る、難解の法を見よ、此處に無智の人は迷はされたり。《七六二》

蔽はれたるものには、闇あり、觀ざるものには、暗〔あり〕、善良の人に開顯あり、觀るものに光明あるが如く、道と法とを知らざるものは、傍にありて知らず。《七六三》

生有の欲に沒頭し、生有の流に順ひ、魔王の領土に入れるものには、此の法は知り易からず。《七六四》

賢聖を他にして、誰か〔涅槃の〕道を知るに堪へん、無漏の人は、正しく此の道を知りて、圓寂に入るなり。」《七六五》

之を世尊は說き給へり。此等の歡喜せる諸比丘は世尊の所說を欣讃したり。而して此の說示の宣說せら

るるや、六十八の比丘は取著なくして其の心を諸漏より脫れしめたり。

【一】世間にありとあらゆる苦痛は（一）本質、無明・行等より生ずること、（二）此等を斷盡して餘す所なければ苦痛生ずることなしと、斯の如く二種の觀照をなすものは全智を得べく、又は不還果に達すべし等と說く。【二】長老偈一五二偈注を見よ。【三】Arambha なり、發勤・造などと譯する處あり、努力勉強の意。【四】Iñjitaṁ。【五】Calitaṁ。【六】涅槃の意なり。

（一）八八品第四

（二）欲經第一

欲を求むるもの、彼若し之に成效するときは、彼は人間の欲するものを得て心に喜ぶ。《七六六》

此の貪欲あり、慾心起れる有情に、若し諸欲消亡することあらば、「彼は」箭を貫かれたるが如くに苦まん。《七六七》

諸欲を避くること、蛇の頭を踏む「を避くる」が如くするもの、彼は「正」念にして、世に此の（三）罣礙を超ゆ。《七六八》

田地・什物・黃金・牛馬・奴人・婦女・親族「等」人の貪る欲は多し。《七六九》

罪は彼に勝ち、危難は彼を壓す、其より苦の彼に追隨すること、破れたる船に水の「漏るが」如し。《七七〇》

されば有情は常に正念にして、諸欲を捨てよ、之を捨て、船「の淦」を戽みて流を渡り、到彼岸の人となれ。《七七一》

【一】下に示せるが如く、窟八・汚八・淨八・最勝八等、八偈の經を含めるより、此の題號を設けしものならんか。【二】諸欲の避くべきことを說く。【三】諸欲を指す。

（一）グハッタカ經第二

多「の邪惡」に覆はれ、（三）窟に住まれる有情、愚癡に

沈める人、斯の如きものは〔三〕離居には遠し、これ世の諸欲は捨て易からざるが故なり。（七七二）

貪欲の因縁により、生有の樂に繫がるるもの、彼等は解脱すること難し、これ〔彼等は〕後又は先なるを求め、此等又は前なる欲を貪りて、他人〔によりて〕離脱せざるが故なり。（七七三）

彼の諸欲に著し溺れ迷ひ、吝嗇にして邪に沒入し、苦に陷れるものは、「此處に死して我等如何がならん」と〔云ひて〕悲しむ。（七七四）

されば人は此の敎に於て學ぶべきなり、何にても世間に於て其の邪なることを知らんもの、其がために邪を行ふことなかれ、これ此の命は短しと賢者は云へばなり。（七七五）

諸有の愛に陷り、世に轉輾せる此の羣生を我は見る、卑小の輩は生生の愛欲を離るることなく、死の門にありて悲しむ。（七七六）

我有の上に於て輕噪すること、水少く流涸れたる〔河〕の魚の如くなる〔輩〕を見よ、之をしも見て、諸有に著することなく我有の念なくして遊方せよ。（七七七）

賢者は兩極に於て貪欲を制し、觸を解了し、貪著するなく、自ら非とすることは之を爲すなく、見聞の上に汚るることなし。（七七八）

〔名〕相を解了して、智者は暴流を渡るべし、執著體に汚さるることなく、〔煩惱の〕矢を拔き、精勤して遊方し、此の世も又他〔の世〕も願ふことなし。（七七九）

【一】諸欲の灾と之を離るべきことを說く。グハ・アッタカ Guha-aṭṭhaka. 窟八と直譯すべきが如し、之は初偈に窟の語あり、偈數八なるより經題とせしものの如し。【二】吾人の肉身を云ふ。【三】羣を離れ遠ざかりて獨り棲むを云ふ。

〔一〕ヅッタッタカ經第三

げにげに邪心ある人にて〔他を〕謗るものあり、げに又正心あるものも謗る、謗起るも智者は〔之を〕受くることなし、されば智者には何處に〔居るとして〕（二）障礙あることなし。　（七八〇）

貪欲に誘はれ喜樂に沒入して、如何で己の〔邪〕見を超ゆることを得べき、自ら總てのことを爲し、解する所に隨ひて言ふべし。　（七八一）

人の問はれざるに己の戒行を他人に向ひて譽むるもの、自ら己を譽むるもの、善巧者は之を聖法〔の人〕に非ずと云ふ。　（七八二）

寂靜を得、心を靜穩にしたる比丘の戒德の上に於て「我は然なり」と云ひて〔己を〕稱揚することなく、世間の何處にありとも欲あることなき、之を善巧者は聖法なりと云ふ。　（七八三）

企畫し、形成し、尊重したる諸法は穢にして、己の身に其〔の見〕の果を見るものは、其なる忿怒緣生の止息に依著せり。　（七八四）

（三）諸法の上に於て熟慮の後抱きたる見住は、之を超ゆること易からず、されば人は此等〔見〕住の上に於て、法を斥け又は之を執す。　（七八五）

邪惡を除けるものは、世の何處に〔處するとも〕、諸有に對して構へたる見あることなし、邪なきものは虛僞と憍慢とを捨てて、彼何處に赴くべきぞ、彼は依賴する所なし。　（七八六）

依賴あるものは諸法の間にありて謗を受く、何を以てか又如何にして依賴なきものを謗らん。これ彼には執なく捨なく、彼は此處にありて一切の見を除きたればなり。　（七八七）

【一】Duṭṭha-aṭṭhaka 汚八の意。【二】Khīla 杙、門柱などの意。
【三】八〇一偈參照。

(一)スッダッタカ經第四

「我清淨に最勝に無病なるものを見る、人の極淨なるは見による」と、之を知るを最勝なりと知りて、淨を觀ずるものは智に還る。《七八八》

人の淸淨は見により、或は彼智慧によりて苦を捨てなば、此本質ある人は(二)他「の方」によりて淸淨となる、斯の如く語る此の人を見によりて稱せよ。《七八九》

婆羅門は他より淸淨「の來ること」を云はず、見聞・戒行・思惟・禍福の上に執することなく、我を捨てて此處に爲すことなく。《七九〇》

前なるを捨て、後なるを取、此の欲に隨ふものは著を超ゆることなし、彼等は取らへ又捨つ、枝を取へて放つ獼猴の如く。《七九一》

人は自ら禁行に著し、「欲」想に誘かされて種種のことに走る、智者・饒慧の人は智慧によりて法を識り、種種の事に走ることなし。《七九二》

彼は一切諸法の上に於て見聞又は思惟せし所に勝ちたり、此の斯の如く見、公に遊方するものを、此の世界に於て何によりてか變改することを得べき。《七九三》

彼等は「見解を」構ふるなく、「何物をも」選ぶなく、「極淨なり」と云ふこともなし、取著の繫結を捨てて、世間の何物にも欲念を起すことなし。《七九四》

婆羅門「邪惡の」結界を超えたり、彼は知り又は見て「物に」愛執するとなく、「三界の」樂に貪著するとなく、彼此の世に於て更に愛著する所あるなし。《七九五》

【一】Suddha-aṭṭhaka（スッダ　アツタカ）淨八の意。【二】智慧よりも他のものの意。

(一)パラマッタカ經第五

諸見に住著して人は「其の」勝れりとなせるを、世界

に於て最勝なりと〔云ひ〕、餘他は總て劣れりと云ふ、されば彼は爭を超ゆることなし。《七九六》

見聞・戒行・思惟の上に於て、己の身に見る所の果、彼は之を愛執して、他は總て劣小なりと見る。《七九七》

〔人の〕依賴して以て他を劣小なりと見るもの、善巧の人は之も亦繫縛なりと云ふ、されば比丘は見聞・思惟・戒行に依らざるべきなり。《七九八》

世界に於て見を構ふること勿れ、智慧を以ても戒行を以ても。己を同じとして詮はすなく、劣れりとして將た勝れりとして見る勿れ。《七九九》

著を捨てて執ずることなく、彼は智慧にも依賴することなし、諸派の間にありて派の交をなさず、彼は如何なる見にも轉ずることなし。《八〇〇》

茲に兩極の上に、此の世及び來世の生生の上に欲なきもの、彼には諸法の上に於て熟慮して得たる住著些も之あるなし。《八〇一》

茲に見聞又は思惟の上に於て、彼の構へたる想は些も之あらず、見に執著せざる此の婆羅門を、此の世に於て何によりてか轉ずべき。《八〇二》

〔見解を〕構ふることなく〔物を〕選ぶことなく、彼等は法をも願ふことなし、婆羅門は戒行によりて導くべからず、斯る人は彼岸に到りて還らず。《八〇三》

【一】Parama-aṭṭhaka 最勝八の意。

老衰經第六

げにも此の生は短きかな、百歲の内にありて死す、假令〔之を〕過ぎて生くるとも、而も彼は老衰の爲に死す。《八〇四》

人は我が有とせるものの爲に憂ふ、これ永恆の所有之なきが故なり、此〔の世〕に相違あるべきものぞと、

斯の如く識りて在家に住すること勿れ。（八〇五）

人の之は我が有なりと思へるもの、其は死の爲にも捨てらる、斯の如く知りて、我に〔從へる〕智者は〔利〕己に轉ずること勿れ。（八〇六）

目醒めたる人の、夢に逢ひしものを見ることなきが如く、同じく愛せる人の死して世を去れるは〔再び〕見ることなし。（八〇七）

見又は聞きたる此等の人人、彼等の名は擧げらる、死したる人は名のみぞ殘りて滅ぶることなき。（八〇八）

我有の上に貪欲ある人は、憂悲・慳貪を捨つることなし、されば安隱を見る智者は、所有を捨てて遊行したり。（八〇九）

愛執なくして遊行し、遠離の心を養ふ比丘、（一）若し己を生有の間に示すことなければ、これ彼に適する所なりと云ふ。（八一〇）

智者は一切處に依賴することなく、喜も非喜もなすことなし、憂悲慳貪の彼を汚すことなき、葉上の水の〔汚すことなきが〕如し。（八一一）

水滴の蓮を〔汚さず〕、水の蓮を汚さざるが如く、同じく智者は此の見聞又は思惟せるものに汚さるることなし。（八一二）

罪を捨てたるものは、見聞又は思惟せるの故を以て、物を〔重〕視することあらず、〔彼〕他〔の道〕によりて清淨〔ならんこと〕を望まず、これ彼は喜び又は嫌ふことあらざればなり。（八一三）

【一】再び三界に生を受くることなくば。

（二）チッサメッティヤ經第七

「尊、姓の交に耽るものの破滅を語れ、我等汝の敎を聞きて、遠離を學ばん」と、具壽メッティヤは〔いへ

り。」
「メッテイヤ、姓の交に耽るものの教は滅び、其の行や　（八一四）
邪なり、これ彼に於て卑きことなり。　（八一五）
嘗て單り遊行し、［後］姓交に耽るものを、廻る車の如く、世の卑き凡夫なりと［人は］いふ。　（八一六）
嘗て彼にありける好名令聞は失はる、之をも見て姓交を捨てんことを學べ。　（八一七）
彼は其の思惟に囚はれて、默想すること斉嗇奴の如し、斯る人は他人の聲を聞いて恐懼す。　（八一八）
其より他の教に促されて惡事を行ふ、彼は大慳貪なり虚僞に陷れり。　（八一九）
賢者なりと言ひ傳へられて獨行を始め、其より姓交に耽りて愚者の如く苦に遇ふ。　（八二〇）
此處に智者は、前後に此の患難あることを知りて、堅く獨行を爲し姓交を行はざれ。　（八二一）
遠離をこそ習へ、これ諸聖の最上たるなり、之によりて己を最勝なりと思ふ勿れ、彼［此の思なき人］こそは涅槃に近づきたれ。　（八二二）
空虛にして諸欲の願なくして行じ、流を渡りたる智者は、欲に縛せられたる羣生の羨む所たり。」　（八二三）

【一】性交の避くべきことを說く。

パスーラ經第八

「淸淨は此の處にこそあれ」と云ひて、他の法の上には淸淨［あり］と云はず、［己の］依れるもの、之を善と說きて、凡夫は箇箇別別の眞理に沒入せり。（八二四）
此等論議を好める輩は羣衆に交りて、互に他を愚者なりと見る、此等依る所異り、稱譽を望み［自ら］巧者と稱するものは［他に］爭を挑む。　（八二五）
羣集の中にありて論を交へ稱譽を［獲んと］願ふもの

は疑念を挾む、而るに排斥せらるれば不滿を抱き、誹謗には怒る、〔他の〕失を求むるこれ此の人。《八二六》

問を究むるものは、彼の論ずる所を敗られたり、排斥せられたりと云ふ、論議に敗れたるものは歎き憂へ、〔他〕我に勝てりと〔思ひて〕悲む。《八二七》

此等の論爭は沙門の間に起り、其の間に毆打打擲行はる、之を見ても爭を避けよ、これ他に稱譽を得るより〔生ずる〕利あらざればなり。《八二八》

或は又羣集の間に於て爭を解きて、譽められ、彼之によりて笑ひ又得得たり。〔其の〕心に存する所の利を達し得て、《八二九》

得得たること是れ彼の破滅の處なり。而も彼慢過慢を語る、之をしも見て論爭する勿れ。これ善巧の人は之によりて淸淨なりと云はざればなり。《八三〇》

猶王食を供せらるる勇士の敵手たる勇士を求めて怒號しつつ徘徊するが如し、勇者よ、彼の人の居る所へ到れ、古昔は斯る應戰の人あらざりけり。《八三一》

見を抱きて論爭するものは「之こそは眞實なれ」と云ふ。汝彼等に告げて云へ「論爭の起りて〔汝に〕對抗するもの此處には之なし」と。《八三二》

見と見とを戰はすことなく、〔他より〕遠かりて遊方し、此處に最勝なりとて執ぜるものも彼等には之あることなし、パスーラ、汝斯る人の中にありて、何をか得るぞ。《八三三》

其より汝分別心を抱き、心を以て見を思議するものは、〔罪過を〕洗淨せる〔彼の佛〕と相逢うて共に語ることを能くせじ。《八三四》

マーガンヂヤ經第九

世尊「愛・樂・貪〔の三魔女〕を見て、〔我に〕姓交の欲

すら起らざりき、此の不淨物に滿てるものに、奈何でか足を以て觸ることすら願はんや。」　《八三五》

「マーガンヂヤ」「數多の王者の「得んと」希へる女、斯の如き寶を汝願はずとせば、汝は如何なる見・戒・行・生活「の道」と、再生とを說くぞ。」　《八三六》

世尊「マーカンヂヤ、「我之を說く」と、此「の我」には諸法の間を穿鑿して得たる「斯の如き見」あることなし諸見の中を見て執することなく、我が內心の寂靜の積れるを見たり。」　《八三七》

マーガンヂヤ　(二)「樹立したる定說、牟尼、げに汝は執することなくして之を說く、「內心の寂靜」と云へる、此の義は賢者は如何にか之を說きたる。」　《八三八》

世尊「マーガンヂヤ、見により、聞により、智慧により、戒行によりても淸淨なりと云はず、非見・非聞・非智・非戒・非行によりても「淸淨なりと云はず」、善良の士は此等を捨てて執することなく、依賴することなく、生有を願ふことなし。」　《八三九》

マーガンヂヤ「云ふが如く、若し見により、聞により、戒行によりても淸淨なりと說かず、非見・非聞・非智・非戒・非行によりても「淸淨なりと說かずば」、我は「之を」狂愚の法とこそ思へ、見によりて淸淨に還るものあり。」　《八四〇》

世尊「マーガンヂヤ、見を憑みて問ひて汝は執著せる事物の上に迷却したり、之より又些も想を見ず、隨ひて汝は狂愚なりと見る。　《八四一》

同じく、優れり、或は劣れりと、斯く思ふもの、彼は之によりて爭ふ、三品の上に心を動かさるることなきもの、彼には同じきなく優れるなし。　《八四二》

同も非同もなき「人」の上に於て、彼婆羅門は何をか「眞なり」と云ひ、又彼誰と共にか「僞なり」と云ひて

爭ふ、彼誰と共にか爭を構ふるぞ。《八四三》

智者は依處を捨て住處なくして遊行し、村里に於て親交を結ぶことなく、諸の欲より離れて［物を］選び取ることなく、羣衆と談論を始むることを爲す勿れ。《八四四》

龍象者は［彼が］遠離して遊行する、其等の諸法に執じて爭はざるべきなり、水中に生ずる棘ある蓮花の、水にも泥にも汚されざるが如く、同じく爭を止め、貪を離れたる智者は、諸欲にも世界にも汚さるることなし。《八四五》

成就の人は見により思惟によりて慢に至ることなし、是れ彼は此の種の人ならざればなり、業によりても聞によりても導かるべきに非ず、彼は［心の］住する處に導かるべきにあらず。《八四六》

想を離れたるものには繫結なし、智解脱の人には愚癡なし、想と見とに執せる、其等の徒は世に徘徊して［他を］惱ます。」《八四七》

【一】「大尼提舍」には六十二種の見を云ふと釋せり。

（一）プラーベーダ經第十

「如何なる見あり如何なる戒ありてか寂靜なりとは稱せらるるぞ、瞿曇、我より問はれて此の最上の人を說き示せ。」《八四八》

世尊「［肉身の］分解に先ちて愛欲を謝し、前にも後にも依ることなく、中に於ても期望することなく、彼には選び取る心なし。《八四九》

（二）忿怒なく、怖畏なく、憍なく、疑なく、神咒を語りて、調戯ならざる、げに彼は言語を節せる牟尼なり。《八五〇》

未來に於て欲を離れ、過去を追憂することなし、諸の觸の上に遠離を見、諸の見に誘はるることなし。《八五一》

執なく、僞なく、貪なく、慳なし、厚顏ならず、輕侮的ならず、又兩舌をも擅にせず。 《八五二》

好ましきを貪らず、又慢に過ぐることなし、溫和にして辯才あり、輕信的ならずして欲を去る。 《八五三》

利欲心よりして學ぶことなく、得ざるが爲に怒ることなし、愛欲の爲に惱まされず、美味を貪ることもなし。 《八五四》

平靜にして常に念あり、世に於て「何人にも」等しと思ふことなく、勝れりとも劣れりとも「思は」ざるもの、彼に欲念あるなし。 《八五五》

彼に憑恃の心なく、法を知りて依賴することなし、有のためにも非有のためにも欲愛これあるなし。《八五六》

諸欲の間にありて期望なきもの、之を寂靜「の人」と云ふ、彼に繫結なく、彼は罣礙を越えたり。 《八五七》

彼には兒も獸畜も田地も什器もこれあらず、執も不執も彼にはこれあることなし。 《八五八》

凡夫さては沙門婆羅門の彼にありと言へる「過は」彼之を有することなし、隨ひて話頭に上りても戰くことあらず。 《八五九》

貪を離れ、慳を無みして、牟尼は「己」高き人、等しき人、低き人の間にもありと云はず、彼は時を脫れて、時に入ることなし。 《八六〇》

世に於て彼の我有とするものなく、有らざるの故を以て憂ふることなく、諸法に對して「欲を」起すことなき彼こそは寂靜なりと稱せらるれ。」 《八六一》

【一】題名の由來は八四九偈に就て見るべし、分解に先つの意。此の經寂靜の牟尼を示す。 【二】長老偈二偈註參照。

(一)鬪諍經第十一

「鬪諍・憂悲・及び慳貪・慢過慢及び兩舌は何處より起

る、「此等何處より起るや、冀くは之を語れ。」（八六二）

「〔人の〕喜とするものより鬪諍・憂悲・及び慳貪と慢過慢及び兩舌とは起る、鬪爭諍論は慳貪に伴ひ、諍論すれば兩舌〔隨ひて生ず〕。」（八六三）

「世に〔人の〕喜とするもの、或は世に蔓れる所の欲念、〔此等は〕何處にか起り、人の來生に對する欲望と成就とは何處にか起る。」（八六四）

「世に〔人の〕喜とするもの、或は世に蔓れる所の欲念〔此等は〕(二)樂欲を緣とす、人の來生に對する欲望と成就とも之を緣として〔生ず〕。」（八六五）

「世に樂欲は何處を緣として〔起り〕、決斷は又何處より生ずる、忿怒・妄語・疑惑及び　(三)沙門の說き明せる諸法〔此等は何を緣として起る〕。」（八六六）

「世に快なり不快なりと云へるもの、樂欲は之に依りて起る、色の上に生起滅盡を見て、人は世に決斷をなす。（八六七）

忿怒と妄語と疑惑と、此等の諸法も〔快不快の〕二ありてこそ〔生ずれ〕、疑惑ある人は智慧の道に學べ、沙門は知りて法を說きたり。」（八六八）

「快と不快とは何處を緣として〔起り〕、何物のあらざるに於て、此等亦之なきや、生起滅盡と〔云へる〕、其の意義と、其の緣とする所を我に說き示せ。」（八六九）

「快と不快とは觸を緣として〔起り〕、觸あらざれば此等存することなし、生起滅盡と〔云へる〕、其の意義と、快〔不快の觸を〕緣とすることとを〔斯くの如く〕我汝に告ぐ。」（八七〇）

「世に觸は何處を緣として生じ、執著は何處より來る、何物のあらざるに於て主我心なく、何物のあらざるに於て觸は觸るることなきや。」（八七一）

「名と色とを所依として觸あり、欲を緣として執著あ

り、欲あらざるに於ては主我心あるなく、色あらざれば觸は觸るることなし。」（八七二）

「如何なる人の色が果して無に歸し、樂と苦とは如何にしてか無に歸す、其の滅ぶる方を我に語れ、我等之を覺らんと、我が心は斯の如くなりき。」（八七三）

㈣「ありのままの想者にあらず、㈤誤想者にあらず、㈥無想者にも㈦離想者にもあらず、斯の如くなる人の色は無に歸す、これ迷妄は想を緣として「生ずればなり」。」（八七四）

「我等が問ひしものは汝悉く說き明したり、我等汝に他事を問はん、之を答へよ、此「の世に」於て有情の清淨は、㈧如上を第一とすと語る賢者あり、或は他に之と異る所ありや。」（八七五）

「此の世に於て有情の清淨は如上を第一とすと語る賢者あり、更に此等賢者の中には滅を「清淨と」說き、巧なる說者は無餘「涅槃」を清淨と說く。（八七六）

此等をも憑依する所ありと知り、彼の思慮あり解脫ある智者は憑依する所を知り、知りて諍論することなく生より生に至ることなし。」（八七七）

【一】闘爭、諍論等の起に就て述べたるなり。【二】原語は chanda. 【三】世尊を指す、八六八偈の沙門も同じ。【四】通常の人。【五】狂者、亂心の人を指す。【六】滅盡定の人。【七】四無色定に入れる人。【八】上節に云へる無想定。

㈠小莊嚴經第十二

「巧者の各各自己の見に住し、固執して語る所は一一異りあり、「曰く」「斯の如く知るものは法を解せるものにて、此「の法を」誹るは、彼未だ完からざるなり。」（八七八）

斯の如くまた固執して相爭ひ、「對手は愚者にして巧者にあらず」と云ふ、此等の中孰か果して實語なる、

是れ此等は總て己こそ巧者なれと云へばなり。（八七九）

他人の法を承認せざるは愚者なり、獸類なり、劣智者なり 愚者は總て極劣智のものたり、此等は總て見に任せるものたり。（八八〇）

正見によりて清淨となれるものは清淨智の人なり、巧者なり、慧者なり、此等の中一として劣智者あるなし、是れ彼等の見は極めて完きが故なり。（八八一）

愚者の互に他に對して云へるもの、我は之を實なりと云はず、「彼等は」各各自己の見を眞實となす、故に他人を愚者なりと見る。」（八八二）

「或人の眞なり實なりと云へるもの、其を他は又虛なり妄なりと云ふ、斯の如く亦固執して相爭ふ、何故に沙門は同一事を語らざるぞ。」（八八三）

「眞は一あるのみ、第二「の眞」あるなし、之を知れる羣生は爭ふことなし、彼等各各相異にして眞を稱說す、故に沙門は一事を語ることなし。」（八八四）

「巧辯なる論者は何故に種種の異れる眞理を談ずる、「彼等は」多の異れる眞理を聞きたりや、或は彼は「自己の」(二)推理に隨へりや。」（八八五）

「(三)想を除きては「他に」多の異れる永劫の眞理世に之あることなし、諸見の間に於て推論をなし、「彼等は」眞と妄との二種の法を說く。（八八六）

見聞思惟せる所と戒行と、此等のものに依りて「他を」蔑視する人は、「己の」決斷に立ちて歡び、他は愚者なり、巧者にあらずと云へり。（八八七）

「彼は」他人を愚者なりと見、之によりて己は巧者なりと云ふ、此の己れ自ら巧者なりと稱するものは、他を蔑み同じく「他を蔑みて」語る。（八八八）

彼(四)過分の見に滿ち、憍慢によりて狂し、「己れ」完全なりと思ひ、己れ「智者の」心を具せりと「思ふ」、こ

れ其なる彼の見は滿ちてあればなり。（八八九）

（五）「人」若し（六）他の語によりて卑く「なら」ば、彼亦之と共に劣智者たり、或は己は完智者たり賢者たらば、沙門の中には愚人あるなし。（八九〇）

「之に異れる法を說くものは、淸淨を得ず完からざるものなり」と、外道は斯の如く語ること多し、これ彼等は己見の樂に貪著せるが故なり。（八九一）

「淸淨は此處にこそ「得らるれ」」と云ひて、他の法に淸淨「ありと」云はず、斯の如く外道は沒入する所甚しく、己の道に固著して語る。（八九二）

己の道に固著して談ずるもの、此處に他何人をか「愚人」なりと見、他を愚なり不淨法「の人」なりと云ひて、彼自ら諍論を起さんや。（八九三）

決斷の上に住立して自ら度量し、世間にありて彼は益益論議に赴く、有ゆる決斷を棄却して、世に人は諍論を爲すことなし。」（八九四）

【一】世に種種異見の徒ありて、己の見は正しく、他の見は總て誤れりと主張す、斯る異見の滅せざる間は世の爭は絕ゆることなからん。【二】Takka.【三】Saññā 涅槃又は八正道の意なりと解せり。【四】六十二種の邪見を指す。【五】次に己と云へるもの。【六】次に彼と云へるもの。

大莊嚴經第十三

「見に住し、之こそは眞なれと云ひて爭ふ、總て此等のものは、此に於いて毀を蒙り、また彼等は譽を得。（八九五）

之は少小にして「邪惡を」息むるに足らず、我は爭論の二種の果を語らん、斯の如く見、安穩「涅槃」は無爭論の地なることを觀て、爭論することなかれ。（八九六）

衆人の持せる此等の意見、智者は總て之に陷ることなし、彼憑依する所なし、見聞する所に慾を起すことなくして、何物にか憑依をなさん。（八九七）

戒を最第一と〔思へる〕ものは自制によりて清淨を〔得〕と云ひ、禁行を受持して立ちて「此の道に於てぞ學ばん、其より清淨あらん」〔と云ふ〕、言語に巧なるものも生有のために移さる。（八九八）

若し戒律禁行を破らば彼（一）業を喪うて震ひ怖れ、彼は怨み訴へ此の世に於て清淨を願ふ、旅隊より離れ、家より出でて棲めるものの如くに。（八九九）

有ゆる戒行を捨て、此の有過無過の業をも〔捨てて〕、淨と不淨と之をも願ふことなく、樂を離れ寂靜を得て遊方せん。（九〇〇）

苦行によりて憎惡せるもの、又は見聞し思惟せるものを、（二）上流の人は生有の欲を離れずして之を清淨なりと讃美す。（九〇一）

冀望ある人は欲を〔懷き〕、計畫の中に居て畏れ慄ふ、此の世に於て死なく生なき、彼何によりてか畏れ慄ひ、何の處にか欲を起さん。（九〇二）

或は此の法は〔勝れり〕と云へば、他は之を〔劣れり〕と云ふ、此等の何れか眞實語なりや、これ彼等は總て巧語者なればなり。（九〇三）

己の法を十全なりと云ひ、他人の法を卑劣なりと云ふ、斯の如く執じ、各各己の說を眞なりと云ひて爭ふ。（九〇四）

他人の毀によりて卑きに至るとせば、諸法の中に於て一も尊きものあらざらん、これ衆人は他人の法は劣れりと云ひ、己〔の法〕には堅きものありと云へばなり。（九〇五）

己の法を奉ずるは猶ほ己の道を稱揚するが如し、有ゆる爭論は亦其の如くならん、これ此等の清淨は箇箇相異ればなり。（九〇六）

婆羅門は他に憑依することなく、諸法の間に於て熟

慮して得たる「見」あることなし、されば諍論を超越して他の法を勝れりと見ることなし。（九〇七）

「我は之を斯の如くに知り、斯の如くに見る」と、見によりて或は清淨に還るあり、假令「清淨を」見るとも、之彼に取りて何かある、超過して他所に清淨ありと說く。（九〇八）

見る人は名と色とを見、見ては此等「の名と色と」を知らん、欲ある「人」は多又は少「の名と色と」を見るべし、これ（三）之「を見る」によりて清淨ならずと巧者は云へばなり。（九〇九）

住著して談ずるものは「自ら」構へたる見を尊しとす「るが故に」、調伏し易からず、自ら憑れるもの、之を是なりと談じ、其處に清淨「あり」と談じて彼は等しく之を見る。（九一〇）

婆羅門は時を超え、「生者の」數に入らず、「邪」見に隨ふものにあらず、「邪」智に伴ふものにもあらず、彼廣く「諸の」見解を知りて、他人は「之に」執著すれど、「彼は之に」頓著することなし。（九一一）

牟尼は此處に此の世界に於て「諸の」結縛を捨て、諍論の中に於て偏黨することなし、彼は寂靜ならざる人の中に於て寂靜・平靜にして、他人は執著すれども彼は執著することなし。（九一二）

前なる漏を棄て、新きは作ることなく、慾に趣くものあらず、住著して談ずるものにあらず、彼賢者は諸の見より脫れ、世に染著することなく、自ら難ずるものにもあらず。（九一三）

彼は一切諸法の上に於て、見聞又覺知せるものに克ちたり、重擔を卸し解脫を得たる彼牟尼は（四）時に屬せず、快樂なく希願なし。」（九一四）

と世尊は宣へり。

【一】戒律禁行を指す。【二】『大尼提舍』には上流、上行を談ずる沙門婆羅門にして、極淨家、輪廻淨家、非業見家、常見家なりと釋せり。【三】是れ名色を見れば、之によりて不淨なることを覺るの意。【四】時間を超えたり。

(一)ツヴタカ經第十四

「汝(二)日親の大仙に遠離と寂靜の道とを問ふ、比丘は如何なる見識ありて、世に何物にも著することなくして滅に歸するや。」（九一五）

世尊は宣へり、「我は智なりと云ふ迷想の根は總て之を斷ち、常に［正］念にして愛念の内部にあるものは之を制することを習へ。（九一六）

内及び外なる法は何にても之を學べ、之によりて誇ることをなすなかれ、是れ之は善人の、慶福と呼ばざる所なればなり。（九一七）

之によりて己勝れりと思ふなかれ、劣れり又は等しと［思ふ］勿れ、種種の方便によりて問はれて、己を修飾すること勿れ。（九一八）

比丘は内にてぞ靜穩なるべき、外に寂靜を求むること勿れ、内心靜穩なる人には執取なし、焉んぞ厭棄あらん。（九一九）

猶ほ海の(三)中部には波は生ぜずして住止せるが如く、等しく比丘は住止し無欲にして、何物の上にも欲念を起すこと勿れ。」（九二〇）

「開眼の人は［自ら］經驗せし避難の法を説きたまへり、大徳者、道を説きたまへ、(四)波羅提木叉幷に(五)三味を［説きたまへ］。」（九二一）

「眼によりて貪あるなく、耳を鄙の話より避けよ、又諸味に貪戀することなく、世に於て何物をも己のものと見ること勿れ。（九二二）

(六)［苦］觸に觸れたる時、比丘は哀傷すること勿れ、又

何處たりとも生有を貪求することなく、又危難に臨みて震懼すること勿れ。（九二三）

食物と又飲料と、噉食物と又衣服と、「之等を」得ては蓄積することなく、此等を得ずしては又念とすること勿れ。（九二四）

禪思せよ、處處彷徨すること勿れ、疑悔を離れ、放逸なる勿れ、其より比丘は音なき住處に住せよ。（九二五）

多く睡眠することなく、眞摯にして身を警護せよ。懶惰・諂曲・笑戲・交媾・侈飾を避けよ。（九二六）

（七）阿闥婆吠陀「の法を行はず」、夢や相「の占」も、星術も之を行はざれ、我が屬徒たるものは鳥獸の音「を判じ、病を」醫し、妊娠の法を行ふこと勿れ。（九二七）

比丘は謗に逢うて懼るることなく、稱め堪へられて慢心すること勿れ、貪と忿と慳と兩舌とは、之を除き去れ。（九二八）

賣買に從事することなく、比丘は何處にありても誹謗をなすこと勿れ、村里にありて叱咤することなく、利を求むるが爲に人と語ること勿れ。（九二九）

比丘は高慢なることなく、（八）隱意の語を用ふること勿れ、慢を習ふことなく、不和の語をなすこと勿れ。（九三〇）

妄語に導かるることなく、知覺ありて詐僞をなすこと勿れ、其より生活に於て、智慧に於て、戒行に於て、他を蔑視すること勿れ。（九三一）

毀を受けたるもの、多言の沙門より多言の語を聞きて麤語を以て答ふること勿れ、是れ善人は「他に」逆ふことなければなり。（九三二）

斯の如き法を知りて、比丘は常に尋求し正念にして學べ、「寂靜」は慶福なりと知り、瞿曇の教に於て放逸なること勿れ。（九三三）

彼は勝ちたり、勝たれしことなし、傳聞にあらざる親

驗の法を見たり、されば彼の世尊の法に於て精勤し
常に禮拜して學べ。」（九三四）
と世尊は「宣へり」。

【一】比丘のなすべきこと、なすまじきこと等を述ぶ。【二】Adiccabandhu 釋尊の別號、日の親、日族などと譯せる箇所あり。【三】海底深き處を云ふ。【四】比丘比丘尼の大戒の條文を云ふ。【五】定の謂なり。【六】疾病飢渇等の如き苦痛なる感觸。【七】戰爭の起りたる時、敵中に種種の災禍を起し、虎烈拉・赤痢・熱病の如き惡疫を流行せしむる語を云ふ。【八】對手が衣服臥具飲食醫藥等四種の供養をなすやう遠廻しに話し掛くること。

（一）執杖經第十五

「杖を執るよりして怖畏生ず、相撲ち爭へる輩を見よ、我今我が知れる所に隨ひて、憂苦を說かん。（九三五）
譬へば互に相礙ふること少水の魚の如くにして爭へる輩を見しが、見るや我に怖畏生ぜり。（九三六）
世間は一切堅實ならず、諸方動搖せり、我自己の住處

を求めて、「而も」住者なき「住處」を見ざりき。（九三七）
終に至りて、障礙に逢へる「有情」を見、我に不快生ぜり、其より見ること難くして、胸に立てる箭を見たり。（九三八）
此の箭に貫かれたるものは、諸方を奔馳す、此の箭を拔けば、走ることなくして坐す。（九三九）
此處に諸種の（三）技術は敎へらる、世間に於て愛著すべきもの、之に欲念を起すことなく、諸欲總て了解して、自己の寂滅を習へ。（九四〇）
牟尼は眞實にして大膽ならず、詐僞心なく兩舌を用ひず、忿怒なく、邪欲と慳貪とを超ゆべし。（九四一）
涅槃「を求むる」心ある人は、睡眠、懶惰、昏沈に克ち、怠惰の徒と共に棲むことなく、過慢に住すること勿れ。（九四二）
妄語に導かるることなく、色身に戀著心を起すこと勿れ、

又憍慢を知り暴戻を行ふヿなくして遊方せよ。《九四三》
古きを愛好するヿなく、新きに欲念を起すヿ勿れ、滅びたるを憂ふるヿなく、欲に依著するヿ勿れ。《九四四》
〔我は之を〕貪望なり暴流なりと云ひ、急疾なる欲なりと云ひ、對境なり、企晝なり、超え難き欲の泥土なりと云ふ。《九四五》
牟尼は眞實より離るることなく、婆羅門は涅槃にぞ立てる、一切を捨てたる彼、彼寂靜なりとぞ稱せらるる。《九四六》
彼は智慧ある人、彼は十成の人、彼は法を知りて依著することなく、世間に於て威儀を正うし、此の世に何人をも羨むことなし。《九四七》
此處に諸欲を超え、世に、超え難き執著を〔超え〕たるもの、彼は流を斷ち、縛を無くして、憂へず、貪らず。《九四八》

前にありしものは之を除き、後には汝に何物をもあらしむる勿れ、中ごろ汝若し執ずることなくば、寂靜にして遊方せん。《九四九》
名色の上に於て我有の念なく、あらざるの故を以て憂ふるヿなくば、彼は世に於て老ゆるヿなし。《九五〇》
「之は我が「有」なり、又は他人の「有」なり」と、斯かる「思」は毫も之なきもの、彼は我有心なく、「我になし」と云ひて憂ふることなし。《九五一》
羨望の情なく貪なく欲なく、一切處に於て平等なり、怕るる所なき「人」はと問はれなば、我は之を其の果なりと云はん。《九五二》
無欲にして智ある人には、毫末も(三)行あることなし、彼勞作より離れて、一切處に安隱を見る。《九五三》
牟尼は「己は」等きもの、卑きもの、尊きものの中にありとも云はず、彼は靜隱にして慳貪を離れ執ずるこ

となく、斥くることなし。」
と世尊は〔宣へり〕。　（九五四）

【一】成熟せる牟尼の心行を説く。【二】象馬車等を御するの術、弓術、醫術等を云ふ。【三】造作の義ありと釋す。「諸行無常」「無明・行・識……」等と云へる時の行なり。

(一)舍利弗問經第十六

「我未だ曾て見たるとなく、又何人にも聞きたるとなし、斯の如く言美はしく衆徒ある師の兜率天より降り來給ひしことを」と具壽舍利弗は〔言せり〕。　（九五五）

「有眼者〔世尊〕は〔其の〕見る所に隨ひ、總て人天世界の黑闇を除きて、獨り〔法〕樂を享け給へり。　（九五六）

此の依著なく變轉なく僞妄なくして〔此の世に〕來り給へる師、佛の處に、問を持ちて來れり。此處に數多の縛せられたるもののために願ふ所あり、　（九五七）

比丘は〔世を〕厭ひて、獨坐・樹下・又は墓所を愛し、又

は山間の窟中に〔居る〕。　（九五八）

〔彼が〕處處に住止するに、此處に幾何種の危難か之あり、而も比丘は音なき臥處にありて震懼することなきや。　（九五九）

此の世にありて、不滅の方に赴くものに幾何種の障礙か之あり、比丘は邊地の住處に〔坐臥して〕此の〔障礙〕に克てりや。　（九六〇）

何をか、彼の言路となし、此の世の何處をか、彼の可行處となし、何をか此の專心なる比丘の戒行となす。　（九六一）

彼は如何なる學に從事してか、專念愼重にして正念を喪ふことなく、己の垢穢を除くこと、鍛工の黃金の〔垢穢を除くが〕如くなるや。」　（九六二）

「舍利弗、此〔の世〕を厭ひ、孤獨の坐臥を受用し、法に順ひて正覺を求むるものの快樂とする所を我は自ら

知れる所に隨ひて、汝に說き示さん」と、世尊は「宣へり」。（九六三）

「賢にして正念あり邊地に遊行する比丘は、五種の危難を怖るること勿れ、虻・蠅・蛇・人間に接觸すると、四足類となり。（九六四）

異法の輩は、假令彼等多の怖畏あることを見るとも、人を懼るること勿れ、善を求むる人は其より他の障礙に克たん。（九六五）

疾病に觸れ飢渴に觸れて、寒冷と極著とに耐へよ、彼此等のものに觸るること多からんとも、家なくして堅く精進をなすべし。（九六六）

偸盜をなすことなく、妄語をなすこと勿れ、慈念を以て弱きも强きも「あらゆる有情に」接せよ、心の擾亂を感ずる時は、「魔の黨」なりとて之を追へ。（九六七）

忿怒と憍慢とに服すること勿れ、此等の根をも之を掘り盡して住せよ、其より愛するものも愛せざるものも共に之に克て。（九六八）

智を先とし、善を喜として、此の障礙を拂へ、邊地の住處に「生ずる」不快に堪へ、四種憂苦の法に堪へよ。（九六九）

「我何をか食ひ、何處にか食はん、「昨日」我苦しく寢ねたり、今日我何處にか寢ねん」と、憂苦の源たる此の思を制せよ、家を棄てたる有學の士。（九七〇）

順時に食物と衣服とを得、彼は滿足のために此の世に於て量を知れ、彼の村里に遊行するものは此等の上に於て制する所あり、怒れりとも麤惡の語を放つこと勿れ。（九七一）

眼を「地に」投じて彷徨することなく、禪思に專一にして、警戒大なるべし、心を平靜にして安定に住し、尋求の地に「於て」、疑惑を斷じ盡せ。（九七二）

思惟ある人は［師友の］言に促されて喜び、同行の伴に對して剛愎なると勿れ、善良［なる語を用ひて］、時ならざる語を用ひず、誹毀の法を思ふと勿れ。（九七三）

其より世に五種の塵垢あり、思惟ある人は此等を制せんことを習へ、色・聲及び味・香と觸とに於て、貪欲を防げ。（九七四）

思惟あり善く解脫せる心を有て、此等の法の上に於て慾を制せよ、彼は順時に正しく法を觀察して、心を境にして黑暗を拂ふべし。」（九七五）

と世尊は宣へり。

【一】舍利弗の問に應じて比丘の履むべき道を說く。

（一）彼岸道品第五

序偈第一

よく（二）明呪に通ぜる一梵志は、拘薩羅族の（三）美しき都より、空無を得んと願ひて南路へと來れり。（九七六）

彼［梵志］はアッサカの地、アラカの隣地、ゴーダーヴァリー河岸の邊に、遺穗と、果物とによりて生活せり。（九七七）

此［の河岸］に接して、大なる村落あり、其より得たる收利を以て、彼は一大齋會を行へり。（九七八）

大齋を終りて、彼は再び道菴に入れり、彼［道菴に］入るや、今一人の梵志來れり。（九七九）

足腫れ、［身］震ひ、齒汚れ、頭には塵を浴びたる此の［梵志］は、彼［梵志］に近きて五百金を乞へり。（九八〇）

（四）バーヴァリーは此の［梵志］を見て座席に請じ、安樂なりや、强健なりやと問ひ、下のことを語れり。（九八一）

「我が供養物は總て我之を與へ盡せり、婆羅門、我を恕せ、我に五百［金］なし。」（九八二）

「我が求むるに、尊若し與ふることなくば、是より第七日に於て、汝の頭碎けて七となれ。」（九八三）

詐心ある彼〔梵志〕は、此の怖畏を設けていへり、バーヴリーは彼が此の語を聞いて悲めり。（九八四）

彼は念盡きて食を取らず、憂の箭に刺されたりき、斯る心ある人の意は、禪思に樂むことなし。（九八五）

〔梵志の〕怖れ悲めるを見、慈悲の心ある天子は、バーヴリーの處に行きて、之を語れり。（九八六）

「彼は頭を知らず、彼は詐心を懷き財を求む、頭も頭の落つることも、彼は知る所なし。」（九八七）

「尊、若し之を知らば、我に問はれて頭と頭の落つることを語げよ、我等汝の語を聞かん。」（九八八）

「我も之を知れるにあらず、我に此の智識なし、頭と頭の落つることとは、これ（五）勝者の示し給へる所なり。」（九八九）

「さらば此の地輪の中に於て、何人か頭と頭を落つることを知れりや、天子之を我に語げよ。」（九九〇）

「世間導師は迦毘羅衞の都より出でたまへり、甘蔗王の後裔、釋族の子、光明を與ふる人。（九九一）

梵志、彼の正覺者は、一切諸法の彼岸に達し、一切智の力を獲、一切諸法を見るの眼を有し、一切諸法の滅盡に達し、（六）本質の斷滅に於いて解脱を得たまへり。（九九二）

彼の覺者、世尊、具眼者は、世に〔出でて〕法を說き給ふ、汝彼の處に到りて問へ、佛汝に之を說き明し給はん。」（九九三）

「正覺者」と云ふ語を聞きて、バーヴリーは踊躍し、彼の憂は滅り、彼は又大なる喜悦を得たり。（九九四）

彼バーヴリーは歡喜踊躍して切に彼の天子に問へり「何處の村邑、さては何處の鄕にか世間主は居給ひ、

彼處に赴きて我等は兩足尊正覺者を禮拜し奉ることを得ん。」《九九五》

「拘薩羅族の都たる舍衞城にあり、勝者、饒智者、勝大慧者、彼釋子は擔を卸し漏を無くし、頭の落つることを知れる人中の牛王なり。」《九九六》

其より「バーヴァリーは」其の弟子にして、明呪に熟せる梵志等に告げて言へり、「來れ汝等青年、我語らん、我が語を聽け。《九九七》

其の出世には常に値ひ奉ること難く、正覺者として聞えたまへる人、今日世に出現し給へり、疾く舍衞城に赴きて兩足尊を見奉れ。」《九九八》

「今如何にしてか見奉りて「佛なり」と知らんや、梵志汝「之を」知らざる我等に語げよ、よりて我等之を知らん。」《九九九》

「明呪中に三十二種大人の相出で、順次に總て說き明さる。《一〇〇〇》

肢體に此等大人の相あるもの、彼には二種の前途あるのみ、第三は之あらず。《一〇〇一》

彼若し在家に住さば、此の「大」地に勝ち、刀杖を用ひず、法によりて「民を」治めん。《一〇〇二》

若し又彼在家より出でて、出家得度せば、世の覆障を除くべき、無上正覺の聖者とならん。《一〇〇三》

生と姓と相と明呪と、我が他の弟子と、頭と頭の落つることと、「汝の」心の中に「之を」問へ。《一〇〇四》

「彼」若し無礙眼の佛ならば、心の中に問ひたる問に對し、語を以て答へん。」《一〇〇五》

バーヴァリーの語を聞いて十六人の梵志弟子アヂタ、チッサメーヤ、プンナカ、及びメッタグ、ドータカ、ウパシーヴと、ナンダと及びヘーマカ、トーデーヤ、カッパの二人、識者ヂヤッカンニーと、バドラーウダ・

ウダヤと、又ポーサーラ梵志、智者モーガラージャと
大仙ピンギヤと、
彼等は一一衆徒を率ゐぬ。總て一切世間に知らるる、（一〇〇六―一〇〇八）
禪思者にして禪思を樂とする賢者たり、前世〔善業〕
の香氣に薫ぜられたるものなり。（一〇〇九）

バーヴリーを禮拜し、又彼を右繞して、辮髮を結び、
獸皮を著たる輩は總て北方に向つて去れり。（一〇一〇）

アラカのパチッターナへと、其よりマーヒッサチへ、
ウッヂェーへも、亦たゴーナッダ、ヴナサと呼べる處
へ、（一〇一一）

コーサンビヤへも、サーケータ及びサーヴッチーの勝
れし都へも、セータッギヤ、カピラヴッツ、クシナーラ
都城へも、（一〇一二）

バーヴーと、ボーガナガラ、摩掲陀の城なるヹーサー
リー、バーサーナカと名くる可樂可意の塔廟へも。

渇せるものの冷水を、商估の大利を、暑熱に惱める（一〇一三）
ものの樹蔭を〔得んと望める〕が如く、〔彼等は〕急ぎ
て山に登れり。（一〇一四）

世尊も、此の時、比丘衆等に圍遶せられ、比丘の爲
めに法を說き、獅子の林中に吼ゆるが如くしたまひ
き。（一〇一五）

アヂタは、正覺者の、太陽の熱なくして光り、猶ほ
太陰の十五日に於いて、滿に達せるが如くなるを見
たり。（一〇一六）

其より又〔彼は〕其の肢體に相好の成滿せるを見、一
面に立ちて踊躍して、心の問をなせり。（一〇一七）

「〔我が（モ）師の〕生を語げよ。姓と相とをも語れ、明呪
に熟通せることを語れ、梵志は幾何を誦するや。」（一〇一八）

「壽量一百二十歲、彼は〔其の〕姓をバーヴァリー〔と呼び〕、彼の肢體には三種の相好あり、三吠陀に熟通せり。（一〇一九）
相術・傳說・語彙・楷畫に於て、彼は五百を讀誦し、己の法に於て完滿に達せり。」（一〇二〇）
「人間の最上者、愛欲を斷てる人、バーヴァリーの相好を委曲に說き明かし、我が疑を殘したまふことなかれ。」（一〇二一）
「〔彼は〕舌を以て顏を覆ひ、彼の眉間には毫光あり、彼の陰處は覆被に隱さる、斯の如く知れよ、青年。」（一〇二二）
何事をも問ふとを聞かず、〔而も〕問は答へられるを聞いて、總て人人は喜び合掌して思惟すらく、（一〇二三）
「彼は何人ぞや、天か、梵天か、將た又た（八）須闍の夫たる帝釋天か、心の中にて問はれて、誰にか之を答ふる」。（一〇二四）
〔アヂタ〕「頭と頭の碎くることとを、バーヴァリーは問へり、世尊之を說きたまへ、仙士、我が疑を拂ひたまへ。」（一〇二五）
〔世尊〕「無明を頭なりと知れ、明は頭の碎くるなりと、信、念、定と欲と勤とを併せて。」（一〇二六）
其より青年は大なる喜悅を以て〔自ら〕調制し、皮衣を一肩に掛けて、〔世尊の〕足下に頓首せり。（一〇二七）
「尊、バーヴァリー梵志は歡喜喜悅して〔其の〕弟子等と共に尊の足下を禮拜したてまつる、有眼者。」（一〇二八）
「バーヴァリー梵志は其の弟子等と共に快樂なれ、汝も亦快樂にして長壽なれ、青年。（一〇二九）
バーヴァリーにも汝にも共に總て許を與へたり、總て疑はしきは問へ、何事をも心に願ふ所は。」（一〇三〇）
正覺者に許を與へられ、合掌して坐し、アヂタは此處

に如來に第一問を問ひ奉れり。《一〇三一》

【一】アッサカの地、ゴーダーヴァリー河の邊にバーヴァリーと呼ぶ一梵志住めるが、ここに一人の梵志來りて五百金を乞ふ、バーヴァリー之を與へざる故、彼梵志は「汝の頭碎けて七となれ」と云ひて之を訕ふ。時に一天子あり、出でてバーヴァリーの憂に沈めるを慰め、佛の所に往けと諭す、彼其弟子十六人を佛の所に送れば、彼等一一佛に問ひて夫夫答を得、悉く佛弟子となる、十六人共に八十大長老の中にあり。【二】以下明呪と云へるは總てマントラを指す。【三】舍衛城をいふ。【四】初の梵志なり。【五】世尊を指す。【六】長老偈一五二偈註參照。【七】バーヴァリー婆羅門。【八】Sujā 善生の意、帝釋天の配なり。

(二) アヂタ青年質問經第二

「世は何物によりて覆はれ、何によりてか光なき、何物をか世の垢穢と宣ひ、何をか世の大怖畏と〔宣ふ〕」と具壽なる阿逸多は問ひたてまつれり。《一〇三二》

「阿逸多、世は無明の爲に覆はれ、疑惑と放逸とよりして光なし、欲を垢穢なりと云ひ、苦を世の大怖畏なりと云はん」と世尊は〔宣へり〕。《一〇三三》

「欲流は諸方に流注す、流を遮るものは何ぞや、流を止むるものを語りたまへ、何によりて流は防がるるや」と具壽なる阿逸多は〔問ひたてまつれり〕。《一〇三四》

「阿逸多、世にありと所有ゆる流は、念こそは之を遮るものなれ、流を止むるものを語げん、慧によりて此等〔の流〕は防がれん」と世尊は〔宣へり〕。《一〇三五》

「尊、慧と念と名と色と、之を我に問はれて語りたまへ、此等は何處にありてか滅に歸するや」と具壽阿逸多は〔問ひたてまつれり〕。《一〇三六》

「阿逸多、汝が問ひし所の問、我之に答へん、名と色と餘りなく滅ぶる所は、識の滅するによりて此處に此等滅ぶ。」《一〇三七》

「法を究めたる人、將又有學者、凡夫等、賢者は此等の輩の威儀を問はれて語り示したまへ、尊。」《一〇三八》

「比丘は諸欲に貪著せず、心に擾さるることなく、一切諸法に善巧に、正念ありて遊行すべし。」（一〇三九）

【一】Ajita は無勝・能勝と譯せり、勝たれざるの意。

(一)チッサメッティヤ青年質問經第三

「何人か此の世に於て滿足せる」と具壽なるチッサメッティヤは〔云へり〕「何人か動著する所なく、何人が兩端を知りて、中にも端にも染著することなき、〔世尊は〕何人を指してか大人と呼び給ふ、何人が此の世にありて(二)縈纏を超えたる。」（一〇四〇）

「メッティヤ、渇愛を斷じ、常に正念にして、識あり滅を得、諸欲の上に梵行を修する比丘、彼〔の比丘〕は動著することなし。（一〇四一）

彼は兩端を知りて、中にも端にも染著することなし、

我は彼〔の比丘〕を大人と呼ぶ、彼は此の世にありて縈纏を超えたり」と世尊は〔宣へり〕。（一〇四二）

【一】Tissametteyya 帝須慈氏。【二】煩惱の異名なり。

(一)プンナカ青年質問經第四

「〔我〕願ふ所あり、質問によりて、欲無く、(二)根本を見る〔人の處〕に來る」と具壽なるプンナカは〔云へり〕、「仙士や常人や剎帝利種や婆羅門種やは、何によりてか此の世界に於て廣く諸天に犧牲を供ふる、世尊、我之を問ひ奉る、之を我に語り給へ。」（一〇四三）

「プンナカ、仙士や、常人や、剎帝利種や、婆羅門種やは、廣く此の世に於いて、諸天に犧牲を供せり、プンナカ、〔彼等は〕現在生を望み、老に至りて犧牲を供せり。」（一〇四四）

「仙士や常人や剎帝利種や婆羅門種や此の世に於て

廣く諸天に犧牲を供せり、世尊、此等供犧の道に怠りなきもの、生と老とを超越したりや、尊、之を問ひ奉る、世尊、之を我に語り給へ」と具壽プンナカは〔云へり〕。　《一〇四五》

「プンナカ、[三]彼等は願ひ、[四]讚め、樂ひ、〔而して〕施捨す」と世尊は〔宣へり〕、「〔其の〕得たる所によりて、〔更に〕諸欲を得んと望み、彼等意を供犧に專にするものは生有の貪欲に染せられて生老を超えざりしと我は云ふ」。　《一〇四六》

「尊、若し彼等意を供犧に專にするもの、供犧によりて生と老とを超えざりしとせば、然らば、尊、人天世界に於て何人か生と老とを超えたる、世尊、我之を問ひ奉る、之を我に語げ給へ」と具壽プンナカは〔云へり〕。　《一〇四七》

「プンナカ、世界に於て總てのものを知り、世界何處にありとも動著する所なく、寂靜にして、〔煩惱の〕煙氣なく、苦なく、欲なき、斯の如き人こそ生老を超えたれとは我は云ふ」と世尊は〔宣へり〕。　《一〇四八》

【一】Puṇṇaka 能滿者の意。【二】世尊を指す。【三】色聲香味觸の五境・妻子・財寶・名聞・王位を得、刹帝利・婆羅門・居士の家、四王天乃至梵天に生ることを願ふ。【四】供犧、供犧の結果、供物などを讚せるなり。

メッタグー青年質問第五

「世尊、我之を問ひ奉る、之を我に語りたまへ。世尊は成熟し給ひ、心を修練し給へりと思惟す、世にある種種の苦惱、此等は何處より出で來るや」と具壽メッタグーは〔云へり〕。　《一〇四九》

「メッタグー、汝我に苦惱の生起を問ふ、我知る所に從ひて之を說き示さん、本質の緣によりて世界にありとあらゆる苦惱は起る。　《一〇五〇》

智なくして本質を作るものは、愚にして苦惱に逢ふこと再再なり、されば苦惱の生起を觀るもの、知りて本質を作ることなかれ。」（一〇五一）

「我等の問ひ奉りし所は之を我等に說き明し給へり、他〔事〕を問ひ奉らん、冀くは之に答へ給へ、賢者は如何にして暴流、生老、憂悲を超ゆるや、牟尼、我が爲に能く之を解釋し給へ、是れ世尊は此の法を如實に知り給へばなり。」（一〇五二）

「メッタグー、我汝が爲に法を說かん、正念の人、現世に於ける傳說に據ることなく、此〔の法〕を觀て行ぜば彼世に罣礙を超えん」と世尊は〔宣へり〕。（一〇五三）

〔メッタグーは言へり〕「大仙、正念の人の觀て行ずる時は世に罣礙を超ゆる所の、彼の最勝の法をも亦之を歡受す。」（一〇五四）

世尊は〔宣へり〕「メッタグー、上下縱橫及び中央にありて、汝の知れる所は何ものにせよ、之に歡喜と住著とを留むることなく、〔汝の〕意識をして生有の上に立たしむること勿れ。（一〇五五）

斯の如くして住し、正念精勤にして我意を棄て、生老と憂悲とを棄てて遊方する有識の比丘は苦惱を捨てん。」（一〇五六）

「此の大仙の語を歡受す、瞿曇、尊、(二)本質なき〔法〕をば能く說き明し給へり、げにも、世尊、世尊は苦惱を捨て給へり、是れ此の法を如實に知り給へばなり。（一〇五七）

牟尼、汝の常に誡め給へるもの等も亦其の苦惱を捨てん、(三)那伽、されば我識りて汝を禮拜せん、冀くは世尊常に我を誡め給へ。」（一〇五八）

「成熟して我有なく欲有に執せざる婆羅門を知るもの、彼は實に此の暴流を渡りたり、彼岸に渡りて剛

愎なく疑惑なし。 （一〇五九）
此処に有識にして成熟したる彼の人は、此の生生の執著を捨てたり、彼愛なく苦なく欲なく、彼生死を超えたりと我は云はん」と。 （一〇六〇）

【一】涅槃を云ふ。【二】龍・象・主の意あり、敬語なり。

ドータカ青年質問第六

具壽ドータカは「云へり」、「世尊、之を問ひ奉る、之を我に語り給へ、大仙、我汝の語を「聞かんと」欲す、汝の語を聞いて己の寂滅を學ばん。」 （一〇六一）
世尊「宣はく」「ドータカ、さらば此世にありて愼重に正念を失ふことなくして努力せよ、是よりして我が語を聞いて、己の寂滅を學べ。」 （一〇六二）
「我人天世界の中に、無一物にして行ずる婆羅門あるを見る、されば普眼の士、我汝を拜し奉る、釋氏、我を疑惑より脱れしめ給へ。」 （一〇六三）
「ドータカ、我は此の世の疑惑ある人を脱れしむるに堪ふるなし、「されど」汝最勝の法を知る時は、之によりて汝は此の暴流を渡らん。」 （一〇六四）
（一）「梵主、慈悲を垂れて「我を」教へ給へ、よりて我れ（二）遠離の法を知ることを得、障礙なきこと猶ほ虚空の如くに、此の世にありて寂靜を得、自立して遊行せん。」 （一〇六五）
世尊「宣はく」「ドータカ、我、汝が爲に現世に於て傳説に據らざる寂靜「の法」を説き明さん、正念のもの之を觀て行せば、彼世の罣礙を超えん。」 （一〇六六）
「大仙、正念の人の、觀て之を行ずる時は、世の罣礙を超ゆべき、此の最勝寂靜「の法」をも、我之を歡受す。」 （一〇六七）
世尊「宣はく」「ドータカ、汝が知れるものは上下、

縱橫、中間〔何處にあるにもせよ〕、總て之は執著なりと知りて、生有に愛欲を作すこと勿れ」。（一〇六八）

【一】世尊を呼ぶなり。 【二】涅槃を指す。

ウパシーヴ青年質問第七

「釋氏、依憑する所なくして、單り大なる暴流を渡らんことは、我が堪へざる所なり、普眼者、我が依りて此の暴流を渡るべき物を示し給へ」と具壽なるウパシーヴは〔云へり〕。（一〇六九）

「ウパシーヴ、正念ある人にして空無天を期望するものは「〔一物も〕之あるなし」と、之によりて暴流を渡れ、諸欲を捨て疑惑を離れて、晝夜に渇愛を盡して見よ」と世尊は〔宣へり〕。（一〇七〇）

ウパシーヴ「世尊、總ての欲に對して貪樂を離れ、空無天に依りて他を認めず、最上の【二】有想解脫に於て

解脫を得たるもの、彼は上進者とならずして同處に停らんや。」（一〇七一）

世尊「ウパシーヴ、總ての欲に對して貪樂を離れ、他を顧ずして空無天に依り、最上の有想解脫に於て解脫を得たるもの、彼等は上進者となることなくして同處に停らん。」（一〇七二）

ウパシーヴ「彼上進者とならずして、同處に停ること多年ならば、普眼者、〔而して〕又た彼同處に冷靜となり、解脫を得ば、斯の如き人の識は、存在すとせんや。」（一〇七三）

世尊「ウパシーヴ、猶ほ暴風の爲に吹かれたる火焰の滅して〔存者の〕數に入らざるが如く、等しく名色身より解脫せる牟尼は滅して〔存者の〕數に加はることなし。」（一〇七四）

ウパシーヴ「彼は滅したりや、或は又彼は之なきや、

或は又彼は常恒疾病なきや、牟尼、之を我が爲に說き示し給へ、是れ、此の法は汝の如實に知り給ふ所なればなり。」《一〇七五》

世尊「ウパシーヴ、滅に歸したるものには度量あるなし、よりて以て彼なりと語るべきもの、彼には之あらず、あらゆる法の斷じ盡されたる時、あらゆる論議〔亦〕盡されたり。」《一〇七六》

【一】有想解脫（Saññāvimokkha）とは七等至を指す、七等至の中にて空無邊處等至は最勝最上なるが故に之を指して最上の有想解脫と云ふ。

㈠ナンダ青年質問第八

具壽ナンダは〔問へり〕、「世に㈡牟尼ありと、世人は云へり、之は如何ぞ、智慧を具ふるを牟尼なりと云ふや、將た又た㈢活命を具ふるを〔牟尼なりと云ふや」。」《一〇七七》

〔世尊〕「ナンダ、此處に巧者は見、傳聞、智慧の故を以て〔人を〕牟尼と呼ぶことなし、〔煩惱の魔〕軍を遠ざけ苦なく欲なき人、之を我は牟尼と云ふ。」《一〇七八》

具壽ナンダ「總て此等の沙門婆羅門の見聞によりても清淨〔を得〕と云ひ、戒行によりては清淨〔を得〕と云ひ、種種の法によりて清淨〔を得〕と云ふもの、世尊、彼等は此處に遊行するままにして、生と老とを越えたりや、世尊、我之を汝に問ひ奉る、之を我に語げ給へ。」《一〇七九》

世尊「ナンダ、總て此等の沙門婆羅門の見聞によりても清淨〔を得〕と云ひ、戒行によりても清淨〔を得〕と云ひ、種種の法によりて亦清淨〔を得〕と云ふもの、彼等は此處に遊行せるままにては未だ生と老とを越えずと我は云ふ。」《一〇八〇》

具壽ナンダ「總て此等の沙門婆羅門の見聞によりて

清淨〔を得〕と云ひ、戒行によりても清淨〔を得〕と云ひ、種種の法によりて清淨〔を得〕と云ふもの、牟尼、汝若し此等未だ暴流を渡らずと宣はば、然らば尊、人天の世界に於いて、何人か果して生と老とを越えたる、世尊、之を問ひたてまつる、之を我に語げたまへ。」（一〇八一）

世尊「ナンダ、我は沙門婆羅門は總て生老のために覆はれたりとは云はず、見聞又は思惟せし所、戒行をも總て之を捨て、種種の法をも總て之を捨て、愛を識り漏を無くせるもの、斯の如き人を實に我は暴流を渡れりと云ふ。」（一〇八二）

ナンダ「瞿曇尊、我大仙の此の語を歡受す、此處に見聞又は思惟せし所、戒行をも總て之を捨て、種種の法をも總て之を捨て、愛を識り漏を無くせるもの、我も亦彼を暴流を渡れりと云ふ。」（一〇八三）

【一】Nanda 難陀、慶喜の意。【二】Muni 智者默者。【三】『小尼提舍』には多種多様なる極重の難作苦行の實行と釋せり、實行的方面のことを云ふ。

ヘーマカ青年質問第九

具壽ヘーマカ〔いはく〕「此等先に瞿曇尊の教に先じて「之は然なりき、之は然ならん」と説き明せしもの、之は總て傳説なり、之は總て（一）疑惑を增すものたり、我は之を欣樂する所あらざりき。（一〇八四）

牟尼、汝亦我が爲に愛欲斷盡の法を説き給へ、正念の人之を知りて行せば世に於て罣礙を超えん」。（一〇八五）

世尊「ヘーマカ、此の世界にありて、見聞思惟意識せられたる〔法〕の、喜ぶべきものに對して、慾愛を除滅する、これ不滅なる涅槃道なり。（一〇八六）

之を知りて正念あり、法を見て涅槃を得、常に寂靜なる人は此の世に於て罣礙を超えたるなり。」（一〇八七）

【一】Vitakka 尋・覺・疑。

トーデーヤ青年質問第十

「諸欲〔其の〕身に住せず、又渇愛なく、疑惑より亦超越したる人、何が斯の如き人の解脱なる」と具壽トーデーヤは〔云へり〕。（一〇八八）

「トーデーヤ、諸欲〔其の〕身に住せず、又渇愛なく、疑惑より亦超越したる人、斯の如き人に他の解脱あるなし」と世尊は〔宣へり〕。（一〇八九）

トーデーヤ「彼は（一）無欲なりや、將欲を求むるや、彼は有智者なりや、將た又た智を積みつつありや、普眼者、之を我に語げ給へ、釋氏、よりて我此の牟尼を知らん。」（一〇九〇）

世尊「彼は無欲にして欲を求むるにあらず、彼は有智者なり、更に智を積むことなし、トーデーヤ、牟尼は斯の如しと知れ、彼は無物にして欲と生有とに愛著することなし。」（一〇九一）

【一】Nirāsa。

カッパ青年質問第十一

具壽カッパは〔云へり〕「大水中の心、恐るべき暴流の起れる處に立てるもの、老死に服せられたるものの（一）依止所を説き給へ、尊、汝亦我が爲に依止所を説き此〔の苦惱〕をして更に存せしむること勿れ。」（一〇九二）

世尊は「宣へり」「大水の中心、恐るべき暴流の起れる處に立てるもの、老死のために服せられたるものの依止所を、カッパ、我汝のために説かん。（一〇九三）

無物、無執、これ苦惱なき依止所なり、之を老死盡きたる涅槃なりと云ふ。（一〇九四）

之を識りて正念あり、法を見て涅槃を得たる人、彼

等は魔の伏する所とならず、彼等は魔の作とならじ。」（一〇九五）

【一】原語 dīpa には又は燈の意あり、身を寄する處、避難場等の意なり。

チャツカンニ青年質問第十二

具壽チャツカンニは〔云へり〕「勇者、我欲を求めざるもの〔ありと〕聞き、暴流を超え欲を亡くせる人を問はんがために來る、（一）倶生眼の人、寂靜の道を語げ給へ、世尊、之を我に語げ給へ。（一〇九六）

是れ世尊は諸欲に克ちて遊行し給ふこと、威光ある日輪の威光を以て大地に〔克つが〕如くなればなり、饒智者、少智の我がために法を說き給へ、よりて我此の世に於て生老捨離〔の道〕を知らん。」（一〇九七）

世尊は〔宣へり〕「諸欲に對する貪著を制し、出離は安隱なりと見よ、執すべき將捨つべき一物をも汝に存せしむること勿れ。（一〇九八）

先なるものは之を排ひ、後なるものは一物も存せしむる勿れ、汝若し中に執することなくば、寂靜にして遊行せん。（一〇九九）

婆羅門よ、總て名色の上に、貪著を離れたるもの、よりて、彼には死〔王〕の虜となるべき漏あることなし。」（一一〇〇）

【一】眼とは一切智を云ふ、佛は菩提樹の下に於て魔軍に克ちて勝者となり、同時に一切智の眼を得給へり、故に佛を sahajanetta 倶生眼を有する人と云ふ。

バドラーウダ青年質問第十三

具壽バドラーウダは〔云へり〕「家を捨て、愛を斷ち、欲を滅し、歡喜を捨て、暴流を超え、解脱を得、（一）時を捨てたる（二）善智者を求む、（三）那伽の〔敎〕を聞いて人

人此處より立去らん。（一一〇一）

種種の人は〔諸諸〕の國土より來集せり、雄者、汝の言說を〔聞んことを〕願うて、汝彼等のために善く說き明し給へ、是れ此の法は汝によりて如實に知られたればなり。」（一一〇二）

世尊「バドラーウダ、上下、縱橫及び中間なるあらゆる取と愛とを防止せよ、是れ世間に於て〔有情の〕執著するもの、之によりて魔は此の有情に追隨すればなり。（一一〇三）

されば正念ある比丘は知りて一切世間の何物にも執することなかるべきなり、魔王の領土に固著せる此の羣生は、執著の所生なることを思ひて。」（一一〇四）

【一】時を超越したるものの意にて再び世に生れ出ざる人を云ふ。
【二】Sumedha。【三】Nāga 龍・象・主・長者等の意あり、此處にては佛を指す。

ウダヤ青年質問第十四

具壽ウダヤは〔云へり〕「塵垢を離れ、禪思して坐し、義務を果し、漏を盡し、一切法の彼岸に到り給へる〔世尊〕に願ふ所あり質問によりて來る、無明の斷滅たる（一）了知解脫とは何ぞや。」（一一〇五）

世尊「ウダヤ、其は欲愛と（二）兩種の不快とを捨つること、昏沈を除き、惡作を避くることなり。（一一〇六）

平靜と念とを清淨にし、法思惟を先とし、無明を斷滅するを、我は了知解脫と說かん。」（一一〇七）

ウダヤ「世は何物にか繫縛せられ、何をか其の伺察となす、世の何物を捨離してか、涅槃とは稱せらるぞや。」（一一〇八）

世尊「世は歡喜に繫縛せられ、尋は其の（三）伺察たり、愛を捨離して涅槃ありと稱せらる。」（一一〇九）

ウダヤ「如何なる念あり行ある人の意識か滅する、世尊に問ひ奉らんがために來れり、我等汝の語を聞かん。」（二一〇）

世尊「內にも外にも共に(四)感覺を歡受せず、斯の如き念あり行ある人の意識は滅ぶ。」（二一一）

【一】Aññāvimokkha 了知、勝解阿羅漢の解脫なりと釋せり。【二】身心兩種。【三】Vicāraṇaṁ 伺、辨察、觀。【四】Vedanā 受。

ポーサーラ青年質問第十五

具壽ポーサーラは〔云へり〕「過去世を示し、欲なく、疑惑を斷じ、一切法の上に成就せる人、我は願ふ所あり、質問を携へて來れり。（二一二）

(一)無色を思想し、あらゆる色身を捨離し、內外共に一物之なしと見る人の智慧を問ふ、釋氏、斯の如きは如何にしてか導かるべきぞや。」（二一三）

世尊は〔宣へり〕「ポーサーラ、あらゆる(二)識住を知れる如來は住立し、得解し、其處を依止所とせる彼を知る。（二一四）

歡喜の繫縛は無所有處より生ずと知り、之を斯の如く知りて、其より其處に〔起れる法を〕觀る、此の成熟せる婆羅門の智慧は如實なり。」（二一五）

【一】Vibhūtarūpasaññī: vibhūta は非存の義 rūpa は色にして saññī は意識者の意なれば四無色定を意識思想する人の義なり。【二】識住に四識住（色受想行）七識住（一人間、天の一部、四惡趣の一部、二初生の梵衆天、三光音天、四偏淨天、五空無邊處天、六識無邊處天、七無所有處天）の二あり。

モーガラーヂャ青年質問第十六

具壽モーガラーヂャは〔云へり〕「釋氏、我〔曾て〕二たび問ひ奉りしに、具眼者、汝我に答へ給はず、天仙、汝三たび問はれては答へ給ふと我聞けり。（二一六）

「此の世界、彼の世界、梵世界及び天人世界、」等と云

ふ、我譽高き瞿曇尊の意見を知らず。（二一七）

斯の如く、絶妙を見る人に願ふ所あり、質問を有ちて來る、如何に世界を觀る人をぞ、死王は見ることなき。」（二一八）

世尊「モーガラーヂャ、常に正念ある人は世界を空なりと觀るべく、(一)自己の見を棄て、斯て死を超ゆるものとならん、斯の如く世界を觀るものを死王は見ることなし。」（二一九）

【一】自己は常住なり等。

ピンギヤ青年質問第十七

具壽なるピンギヤは〔云へり〕「我は年老いて、力なく顏色衰へたり。我が眼は明かならず、我が耳は聽くこと易からず、我愚〔のまゝ〕にして中途に亡びざらんことを、我がために法を説き給へ、よりて以て我此の世に於て生老の捨離を知らん。」（二二〇）

世尊「ピンギヤ、諸の色の上に惱まさるるを見、人の放逸にして、諸の色の上に苦む〔を見〕、よりて、ピンギヤ、汝は精勤にして、再生のための色を拋捨せよ。」（二二一）

ピンギヤ「四方、四維、上下と此等の十方、此の世界に於て、汝の見聞思惟及び又意識せざるものは一として之あるなし、我がために法を説き給へ、よりて我此の世に於て生老の捨離を知らん。」（二二二）

世尊「欲愛に捕はれ、熱惱を起し、老のために滅びたるを見、よりて汝ピンギヤ、精勤にして再生のための欲愛を拋捨せよ。」（二二三）

之を語げ給へり世尊は、摩揭陀國なるパーキーナカ塔廟中に住し給ひて、バーヴリーの弟子なる十六人の婆羅門に質され、問はれて問に答へ給へり。此等の

質問一一の義を知り、情を知り、法に隨ひて行ぜば、老死の彼岸に至らん。此等の法は彼岸に至らしむるものなりと、よりて此の法門の名を「彼岸道」とこそ稱すれ。

アヂタ、チッサメッテーヤ、プンナカ、及びメッタグードータカと、ウパシーヴと、ナンダ、幷にヘーマカ。（一一二四）

トーデーヤ、カッパの兩者、賢者なるチャッカンニー、バドラーウダ、ウダヤと又ポーサーラ婆羅門も、智者モーガラーヂャ、ピンギャなる大仙も。（一一二五）

此等のものは行具足の仙士たる佛に近づき、微妙なる質問を尋ねて尊佛の處に近づき來れり。（一一二六）

彼等に質問を發されて、佛は如實に答へ給へり、牟尼は質問に應答して、婆羅門等を滿足せしめ給へり。（一一二七）

彼等は具眼者、日の親たる佛によりて滿足を與へられ、多智者〔世尊〕の傍にありて梵行を行ぜり。（一一二八）

一一の質問に對して佛の答へ給ひし如く、其の如く行ふものは此岸より彼岸に趣かん。（一一二九）

最上の道を修習して、此岸より彼岸に到らん、此の道は彼岸に到らんがためなり、よりて彼岸道と〔稱す〕。（一一三〇）

具壽ピンギャは〔云へり〕「我彼岸道を隨說せん、無垢の饒智者は、〔自ら〕見る所に隨ひて說き給へり、欲なく煩惱なき主は、何に因りてか妄語を語り給はん。（一一三一）

垢と癡とを捨て、慢と覆とを棄て給ひたる〔佛〕の美しき音聲を我讃說せん。（一一三二）

黑闇を拂ひ給へる佛、四方を見、世の極に達し、あらゆる生有を越え、漏なく、あらゆる苦惱を捨てて、眞

に「佛と」稱へ奉るべき人、婆羅門、彼我が處に來り給へり。　（一一三三）

恰も鳥の疎なる林を捨てて、果物豐かなる林に就くが如く、等しく我も少見「の人」を捨てて、大海に達せる鵞鳥の如くす。　（一一三四）

此等先に瞿曇の敎に先じて「之は然なりき、之は然ならん」と說き明せしもの、之は總て傳說なり、之は總て疑惑を增すものなり。　（一一三五）

獨り黑闇を拂ひて坐す、彼は光輝あり、光明を作すものたり、「彼」瞿曇尊は饒智者たり、「彼」瞿曇尊は饒智者たり。　（一一三六）

(一)卽時に果を現し、(二)時を移さずして果を示し、愛を盡し、災を滅する法を我がために說きたる人、又比類あらざる人なり。」　（一一三七）

バーヴリー「ピンギヤ、汝は彼の饒智者たる瞿曇、饒慧者たる瞿曇より、瞬時たりとも、離るることを得ざるや。　（一一三八）

「瞿曇は」卽時に果を現じ、時を移さずして果を與へ、愛盡き災無き法を汝がために說き、比類絕えてあらざる人なり。」　（一一三九）

ピンギヤ「婆羅門、我は彼の饒智者たる瞿曇、饒慧者たる瞿曇より、瞬時たりとも離れず。　（一一四〇）

彼は卽時に果を現し、時を移さずして果を與へ、愛盡き災無き法を我がために說き敎へ、比類絕えてあらざる人なり。　（一一四一）

婆羅門、我は心を以て或は眼を以て、懈怠なく晝夜に彼を見奉り、禮拜して夜を過す、故に我離れて住するにあらずと思ふ。　（一一四二）

信仰と喜悅と心と念と、「此等は」我を瞿曇の敎より遠ざくることなし、饒智者の赴く方向、其の方向へぞ

此の我も向ひてあり。（二四三）

老い朽ちて力衰へたる我が此の身は彼處に到ることなし、〔されど〕思惟の上にては我常に彼處に赴く、是れ婆羅門、我が心は彼と結合してあればなり。（二四四）

泥中に臥して踠きつつ、我は洲より洲へ展轉し、其より暴流を超えて漏無き正覺者を見たり。」（二四五）

世尊「恰もヴツカリの信仰によりて解脱せしが如く、又バドラーウダ、アーラギ、瞿曇の如く、等しく汝も亦信仰によりて解脱を得よ、汝は魔王の領土の彼岸に至らん。」（二四六）

國譯諸經要集 終

ピンギヤ、「我は牟尼の語を聞いて益之を信ず、正覺者は覆障を除き、剛愎なく辯才あり。（二四七）

增上天〔の法〕を知り、總て知りて餘す所なし、師は疑を懷き、又は言を立つる人の質問に明答を與へ給ふ。（二四八）

比類絕てあらざる不變不滅の體に、我は誓ひて赴かん、我に疑惑あることなし、我は斯の如く心解脫したりと見よ」。（二四九）

【一】Sandiṭṭhika 卽時に其の果の見らるべき、現世に於て果を現すに適すべき等の意ありと釋す。【二】Akālika 八正道を行ふもの其の修行の終に於て直に果に逢ふ、斯の如く時を失はず直に果を得るを云ふ。

國譯所行藏

彼の福者、聖者、正徧覺者に歸命す。

布施波羅蜜品第一

アカッチ所行品第一

(一)「今を去ると」百千また四阿僧祇劫以來、此の間に行ひし所は、總て是菩提を熟せしめんが爲なり。(二)

過去劫の生生に於ける所行は措き、此の劫に於ける所行を物語らん、我「が言ふ所」を聽け。(三)

我は寂寞たる大林、世を離れたる森林中に入りて住しき、アカッチと呼べる苦行者として。(三)

其の時(三)三十三天の主は、我が苦行の力のために溫められ、婆羅門の姿に扮して乞食のため、我が所に來れり。(四)

油も鹽もなくて、我が戸外に立てるを見、森林より齎し來りし木の葉に、己の水瓶を以て、水灑ぎて「施しぬ」。(五)

我は彼に木葉を供養し、器を覆して、再び「木葉を」索むることを止め、茅舍の中に入れり。(六)

二たび三たび、彼我が所に近づき來り、我は懼れず著せずして、同じく施與しぬ。(七)

我、之がために身の色變りしことなく、喜樂の中に欣樂の中に其の日を過しき。(八)

若し一箇月にても二箇月にても、優れる施物を得ば、懼れず著せずして、最上の供養物を施さん。（九）

我、彼に施物を與へて、(三)名譽と利益とを求めず、一切智を希ひて、此等の業を行ひき。（一〇）

【一】本生經四八〇、アキッチ品。本生鬘七。【二】Tidiva-adhibhū（タヂヴァ・アヂブー）諸天の主の意、帝釋天なり。【三】Akitti（アキッチ）は名譽なきの意。

サンカ所行品第二

(一)復次にサンカと呼べる婆羅門たりし時、大海を度らんと欲して、港に赴きぬ。（一一）

其の時彼方より、(二)常勝の(三)自主者の、難路を旅しつつ、熱せる堅き道を來りたまへるを見たり。（一二）

我は其の〔佛の〕彼方より〔來りたまへる〕を見て、此の義を思量せり、「善業を欲する人の、此の〔福〕田來りたり」と。（一三）

恰も耕夫の大利を生ずべき田地を見て、其處に種を下さずは、彼は穀を求むる意なきが如く、（一四）

同じく我・善業を欲するものにして、最勝の〔福〕田を見、若し此處に事を爲すことなくば、我は善業を求むるの心なきなり。（一五）

大臣若し内廷の群集の中にて王の印を得んと欲し、〔而も〕彼等に財穀を施すことなくば、印を得ざるが如く、（一六）

同じく我、善業を欲するものにして、廣大なる應供者を見、若し彼に施與することなくば、善業を得ることなからん。（一七）

我、斯の如く思惟して、履を下り、彼の〔佛の〕御足を禮して傘と履とを奉施せり。（一八）

柔弱なる我は之によりて安樂なること百倍なりしが布施を成滿せんとて、我は斯の如く偏に布施したてまつりき。（一九）

【一】本生經四四二、サンカ品。【二】Apparājita 曾て敗られしことなきの意。【三】Sayambhū 自存・自主・獨立の意、佛の別號なり。

クルダムマ所行品第三

(一)復次にインダバッタなる善き都に於て、我はダナンヂャヤと名くる十善を具足せる王なりき。(二〇)

カーリンガ國の境土より、諸の婆羅門我が所に來りて、目出たく吉德ありとせる有牙の象「の施」を求めき、(二一)

「地方は雨なくして、穀實らず、大飢饉なり、「されば」我等に彼のアンヂャナサと呼べる、青色の良き象を施されよ。」(二二)

乞者の我が所に到れるに、之を斥くるは適はしからず、我が所受に礙あらしむることなかれ、我大象を施さん。(二三)

象の牙と、寶石を鏤めたる金瓶とを取りて、手に水を灑ぎ、象を婆羅門等に施しき。(二四)

此の象を施すや、諸大臣は言つて曰はく「如何なれば、大王彼の良象を乞丐輩に施したまひしぞ。(二五)

目出たく、吉德を具備し、戰に勝つ最上の「象を何故に施したまひしぞ」、此の象を施して、如何にか王事を領理したまふぞ。」(二六)

「我が國をも施さん、總て己の身をも與へん、我が愛樂する所は一切智なり、故に我象を施與しき」と。(二七)

【一】本生經、二七六、クルダムマ品。

(一)マハースダッサナ所行品第四

(一)クサーヴチーの都にありて王、マハースダッサナと名くる大力の轉輪王たりし時、(二八)

其の處に於て我は日日三たび處處に叫ばしめたり、「誰人か、何物をか願ひ求むる、誰人に如何なる財物をか與ふべきぞ。（二九）
誰人か飢ゑ、誰人か畏れたる、誰人か華鬘、誰人か塗香、誰の裸形者か、色色に染めたる衣服を著けんと〔欲〕する、誰人か路上にて傘を得んと願ひ、誰人か柔かなる革履を得んと願へる」。（三〇）
斯の如く夕に旦に、處處に叫ばしめたり。之十箇所にあらず、百箇所にもあらず。（三一）
數百箇所に於て、乞者のために財を備へ、晝にも夜にも、乞者來るあれば、（三二）
求むる所の財を得、手を滿たして去りき。斯の如く我は、終生大施財を行ひき。（三三）
我憎み嫌へる財穀を施すにあらず、己に蓄積する所もなく、譬へば病に罹れるものの、〔病を〕脫るるが如くせり。（三四）
財を以て罪過を燒きて、病より脫る、斯の如く、我は知りて、成滿して缺くる所なからしめんがため、（三五）
足らざる財を滿たさんがため、施を乞丐者に與ふ、著なく緣なく、正覺に逮達せんがために。（三六）

【一】大善見の意。　【二】本生經九五、マハースダッサナ品。

マハーゴーギンダ所行品第五

復次に、我七王の補臣たりし時、名をマハーゴーギンダ婆羅門と呼び、人天に恭敬せられき。（三七）
其時七國に於いて、我、幣物を得ることあれば、之にて我は大施を行ひき、搖ぎなくして、海に譬ふべき〔施を〕。（三八）
我財穀を憎み嫌はず、己に蓄積する所もなし、我が愛樂する所は一切智なり、故に我は善き財を施しぬ。

ニミ王所行品第六　《三九》

(一)復次にミチラの優れたる都に於て、ニミと呼べる賢徳ありて、善業を願へる大王たりし時、《四〇》

其の時四の門口ある四の屋を構へしめ、其處には鳥獸、男子女子に施を行へり。《四一》

被物と、臥具と、飲食と、嚼食物と、間斷なくして大施を行ひき。《四二》

奴僕の財を得んがために、主人に近づく時、身にも語にも意にも、親近すべき道を求むるが如く、《四三》

等しく我は、あらゆる生に於いて、菩提生を尋求せん、施を以て有情を飽かしめ、最上の菩提を得んと欲す。《四四》

【一】本生經二七六、ニミ王品。

チャンダクマーラ所行品第七

次にまたブッパヴチーの都にありて、エーカラーヂャの兒、チャンダと名くる王子たりし時、《四五》

其の時我「供犧」の壇場を司れるものにして、驚悸して供犧より遁れ去り、大施を行ひき。《四六》

我は施物を與へざれば、五六夜の間も自ら飲まず、喫せず、食物をも攝取せざりき。《四七》

恰も貨財を蓄へたる商估の、利得の大なる處へ貨財を運ぶが如く、《四八》

等しく、自己の受用する所よりも他人に與へたるは大果あり、されば他人に與ふべきなり。《四九》

此の義を辨へて、我は生生に布施を行ふ、布施によりて成正覺より退轉することなけん。《五〇》

(一)シヰ王所行品第八

アッタと名くる都に於いて、我はシギと呼べる（三）王なりしが、其の時最勝の宮殿を捨てて、斯の如く思議しき。（五一）

「凡そ人間の施にして我が施さざるものは一として之あるなし、若し我に眼をも乞ふものあらば、慴るる所なくして之を與へん」と。（五二）

我が思惟せし所を知りて、諸天の王なる帝釋天は、諸天衆の間に坐して、此の語をなしき、（五三）

「シギ王は最勝の宮殿を棄て、種種の施を思議せしも彼は未だ與へざりしものを見ざりき。（五四）

之眞にして僞ならざるや、いでや我之を詮索せん、我が彼の心を知るまで、汝等瞬時此處に待て。」（五五）

彼は頭髮白く、肢體皺み、老に惱める盲者となり、慄ひつつ、王に近づき來りき。（五六）

其時彼〔盲人〕は左手と右手とを組み、合掌を頭上にして此の語をなしぬ、（五七）

「大王、陛下の正法國土の隆昌を祈りたてまつる、陛下の布施を喜びたまふ譽は人天界に揚れり。（五八）

某が眼兩ながら害はれて盲となれり、陛下、一眼を某に施したまひ、陛下も亦一〔眼〕を以て歩かせたまへ」と。（五九）

我彼の語を聞いて踊躍し、心動悸し、喜悦を生じ、合掌して此の語を宣べき、（六〇）

「今思議して宮殿を〔去り〕此の處に來れり、汝我が心を知りて眼を求めんがために來れり。（六一）

ああ、我が心成就し、思惟成滿しぬ、未だ嘗て施せしことなき、善き施を今日我乞者に施さん。（六二）

來れ、シーヴカ、奮起せよ、伏せざれ、震慴せざれ、痛きを抉りて兩眼ともに施せ」と。（六三）

其より語を守る彼のシーヴカは我が誡を受け、抉り

て多羅果の核子の如く乞丐に與へき。《六四》

我施與し、施物を與ふるや、正念にして心唯菩提のための他あらざりき。《六五》

兩眼我に憎きにあらず、我著せず憎まず、但一切智は我が好愛する所たり、故に我眼を與へき。《六六》

【一】本生經四九九、シヰ王品、本生鬘二。【二】Khattiya。

(一)ヹッサンタラ所行品第九

プッサチーと名くる刹利種の女、我が母たりしことあり、彼女は過去の生生に於いて、また帝釋の首妃たりき。《六七》

彼女の命盡くるを見、天主は語げて言へり、「我汝に十惠を附與せん、汝の望む所に隨ひて之を願へ」と。《六八》

斯くいふや、彼の妃は(二)施都者、帝釋天に向ひて言へり、「我に何の失かあり、何故に汝の嫌ふ所となれる、何故に汝我を樂しき地より逐ふこと、猶ほ風の樹を「搖がすが」如くなる。」《六九》

斯くいふや、彼帝釋は再び彼女に語りていはく、「汝惡事を爲せるにもあらず、汝は我に憎まるるにもあらず。《七〇》

汝の命は、これまでなり、「女の」死すべきとき來らん、我が汝に附與したる、勝れて善き、十の惠を受取せよ。《七一》

彼女帝釋天より善き惠を與へられ踊躍歡喜し、プッサチーは十の惠を選びぬ、(三)我を其の一として。《七二》

其より彼プッサチーは死して刹帝利種に生れ、チェーッタラの都に於てサンヂャヤと交を結びぬ。《七三》

我が愛すべき母、プッサチーの胎に宿りしや、我が威力によりて、母は常に施與を樂としたりき。《七四》

財なき、病に罹れる、年老いたる、乞食、行旅の人人、沙門婆羅門の斷盡して一物もなきものに、施物を與へき。（七五）

［胎中に］懷くこと十月、都の巡行終るや、プッサチーは吠舍種の街路の中央にて我を生みたり。（七六）

我が名は母方よりせず、父方より來らず、吠舍種の街路の中央にて生れたるが故に、（四）ヱッサンタラと名けたり。（七七）

我生れて八歲の童兒たりし時、其の時宮殿を捨てて、施物を施さんと思へり。（七八）

心を施さん、眼を、肉をも、血をも亦。若し人我に乞ふものあらば、應じて身をも與へん。（七九）

搖ぎなき、［而も］常なき己が身を思ひける時、須彌森林を以て包める大地は震ひ搖ぎき。（八〇）

半月半月の十五日、滿月の日の布薩日には、供養物を［携へ］、象に騎りて、施與をなさんがために行けり。（八一）

カーリンガ國の境土より、諸の婆羅門は、我が處に來りて、目出たく吉德ありとせる、有牙の象を乞ひたり。（八二）

「地方は雨なくして、穀實らず、大飢饉なり、［我等に］優れたる象、全身白色の善き象を施したまへ。」（八三）

婆羅門の我に求むるものには、我之を與へん、辟易せじ、有るものは祕せじ、我が心は施與を樂とす。（八四）

乞者の我が所に來れるに、之を斥くるは適はしからず。我が所受に礙あらしむることなかれ、我大象を施さん。（八五）

象の牙と、寶玉を鏤めたる金瓶とを取りて、手に水を灑ぎ、象を婆羅門等に施しき。（八六）

次に全身白色の善き象を施すや、其の時も亦、須彌森

林を以て包める大地は震ひ動けり。（八七）
其の象を施すや、シギ國民は、怒り集りて、「我を」己の國より去らしめ、「ヴンカの山に入れ」「と云へり」。（八八）
此の動なき、「而も」常なき「己の身を」嫌へる輩に、大施を起さんがために一の惠を求めぬ。（八九）
シギ人は我が求に應じて、總て一の惠を我に與へき、耳鼓を「打たんとを」請ひて、我は大施を施しき。（九〇）
其より其の都に騒しく、恐しく、大なる音起りぬ、施與と共に「彼等」我を運び去らん、よりて我再び施を行はん。」（九一）
象・馬・車乘・奴・婢・牛・財を施し、大施を行ひて、其より都を出で去りぬ。（九二）
都より出で、振返りて見廻しき、其の時また須彌森林を以て包める大地は震ひ動けり。（九三）

四馬を駕したる車乘を與へて、唯一人にして第二人者なく、十字の大街道に立ち、マッヂー妃に語りて言へり、（九四）
「マッヂ、汝は女兒カンハーを抱け、彼女は幼にして輕し、我は「男兒」チャーリを携へん、彼は兄にして重きが故なり。」（九五）
赤蓮、白蓮の如く、マッヂー妃は、カンハーヂナーを取り、我は金像の如く、剎帝利種のヂャーリを取れり。（五三）「牛に水を注ぎて、我は諸婆羅門に象を與へき」。（九六）
貴く生れ、孱き我等四人の剎帝利種は、凹凸ある道を踏みてヴンカ山に行けり。（九七）
人の我等と連れ行くもの、また向方より來るもの、我等は彼等に、「ヴンカ山は何處ぞ」と言ひて、道を問へり。（九八）

此處に、彼等は我等を見て、哀愍の聲を發ち、ヴンカ山は、ほど遠く、「之に達するの」苦なることを語りぬ。（九九）

兒等は森林中に樹木の果實を結べるを見れば、此の果實のために泣き叫べり。（一〇〇）

兒等の泣き叫ぶを見て、高く繁れる樹木は、自ら曲りて兒等に近づきぬ。（一〇一）

此の希有にして身毛も爲に竪つべき不可思議を見て肢體美はしきマッヂーは「善哉」と叫べり。（一〇二）

世にも奇特、希有、身毛ために竪起すべき哉、ヱッサンタラ、汝の威光のために樹木自ら撓めり。（一〇三）

夜叉等は兒等哀愍の故を以て、道を近くし、出立ちたる日にぞチェータ國には著きたりける。（一〇四）

其の時母の兄弟なる六萬の王あり、總て合掌啼泣して接近し來れり。（一〇五）

此處にチェータ王・チェータ王子等と物語り、(六)彼等其より去りてヴンカ山に至れり。（一〇六）

「帝釋」天王は大神通力ある(七)ヱーッサカムマを呼びて「命せり」、「道院を「構へよ」、宜く堅固にして愛すべき茅舍を造るべし」と。（一〇七）

帝釋天の語を聞きて、大神通力あるヱーッサカムマは、道院、堅固にして愛すべき茅舍を建造せり。（一〇八）

音少く、人跡稀なる森林に入りて、我等四人のものは、同處の山間に住せり。（一〇九）

我はマッヂーと二人のヂャーリとカンハーヂナーと、互に憂苦を拂ひて、其處なる道院中に住しぬ。（一一〇）

我道院中に兒等を護りて閑日あることなく、マッヂーは果物を拾ひて、三人を養へり。（一一一）

斯く森林中に住せしに、一旅人あり、我に接近し來りて、我が兩兒ヂャーリ、カンハーヂナーを與へよと乞

へり。（二二）

乞者の來れるを見て、我に歡喜心起り、其の時兩兒を取りて〔之を〕婆羅門に與へてき。（二三）

己の兒を乞者婆羅門に施せしとき、其の時また、須彌森林を以て包める大地は震ひ動きぬ。（二四）

次に復帝釋天は婆羅門の姿にて降り、戒徳あり貞操具はれるマッヂー妃を與へよと我に乞へり。（二五）

マッヂーの手を取り、水を掌に滿し、心思惟和悅にして、彼にマッヂーを與へき。（二六）

マッヂーを與ふるや、天神空中にありて喜び、其の時また、須彌森林を以て覆へる大地震ひ動きぬ。（二七）

ヂャーリと兒女カンハーと、貞操あるマッヂーを捨てて、唯菩提のため〔の他は〕思はざりき。（二八）

我兩兒の憎きにあらず、妃マッヂーの憎きにあらず、但一切智は我が切愛する所、故に我愛さるるものを與へぬ。（二九）

復次に大森林中に、父母の到達して悲愍哀戚して苦樂を語り合へし時、（三〇）

慚愧と尊敬とよりして、我兩親に接近しぬ、其の時また須彌森林を以て包める大地震ひ動きぬ。（三一）

復次に親族と共に大森林より去りて愛すべき都、チェーツッタラの優れたる都に入りぬ。（三二）

七寶降り、大雨澍ぎぬ、其の時また、須彌森林を以て覆はれたる大地は震ひ動きぬ。（三三）

大地は無心にして苦樂を識らず、而も我が施與の力よりして、七たび震ひ搖ぎぬ。（三四）

【一】本生經五四七ヹッサンタラ品、本生鬘九、【二】Purinadda 施都者、帝釋天、曾て人間たりし時、諸の都府に於て施を行ひたり、故に此の名を得たり。【三】即ちヹッサンタラを生むことも十願の中の一なりしなり。【四】吠舍補族（Vessa）の中、Antara に生れしが故に Vessantara と名けたり。【五】此の二句恐くは竄入ならん。【六】親子四人。【七】Vessakamma 毘首羯磨。

(二)賢兎所行品第十

復次に我林間を徘徊する兎たりしことあり、草葉樹枝果實を喰ひ、他人を害ふことを避けたり。（一三五）

其の時猿と野干と獺兒と我と、共に同じく近隣に棲み、日暮には相見たり。（一三六）

我彼等に慚恥と善惡とを敎へ、「邪惡を避けよ、正善に任せよ」と語りぬ。（一三七）

布薩日に月の滿てるを見て、彼等に告げ「今日は布薩日なり」と云へり。（一三八）

汝等施物を得よ、應供者には布施すべきなり、應供者に施物を與へて、布薩戒を守れ。（一三九）

彼等我に對ひ「善哉」と云ひ、其の力に應じて施物を得、應施者を求めぬ。（一三〇）

我は坐して、正しうして適せる施物を思ひ、我若し應施の人を得ば、何物か我が、施物たるべきと「思へり」。（一三一）

我に胡麻なく、豆なく、米なく、酪なし、我は草を以て命を繫ぐ、「されど」草を施すこと能はず。（一三二）

若し應施者の我が側に來るあらば、我己の身を施さん、さらば彼手を空しうしては去らざるべし。（一三三）

我が思惟する所を知りて、帝釋天は、婆羅門の形をなし、我が棲むところに來れり、我が施を試みんがために。（一三四）

我彼を見るや、心滿悅して、此の語を宣べたり、「善哉、汝の食物の故を以て我が側に來りしこと。（一三五）

未だ曾て與へしことなき、善き施を、我、今日汝に與へん、汝戒德を具有して、他を害せんこと適はしからず。（一三六）

今、火を點せよ、様様の薪木を集めよ、我我が身を炙

らん、汝炙りたるを食ふべし」と。《一三七》

「善哉」といひて、彼は心に歡喜し、樣樣の薪木を集め、炭火の坑を造りて大なる堆を設けぬ。《一三八》

之に火を點じぬ、其が速に擴がるや、彼は塵に塗れたる肢體を拂ひて、一方に坐したり。《一三九》

此の大なる薪堆の火の點ぜられ、煙となりし時、我は之に跳び入りて、火焰の眞直中に墜ちぬ。《一四〇》

譬へば何人も冷かなる水に入れば著熱の苦惱止み、快樂と喜悅とを得るが如く、《一四一》

等しく、其の時我が焰焰たる火に投ずるや、あらゆる苦惱止み、恰も冷水の如くなりき。《一四二》

皮膚・肉・腱・骨心を結べるもの、全身擧げて我は婆羅門に施しぬ。《一四三》

【一】本生經三一六、賢兎品、本生鬘六。

＊　＊　＊　＊

アカッチ婆羅門、サンカ、拘樓王ダナンヂャヤ、マハースダッサナ王とマハーゴーギンダ婆羅門と《一四四》

ニミ、チャンダ王子と、シヰ、ヹーッサンタラ、兎、我は其の時、此等の勝れたる施を、與へたるものなりき。《一四五》

此等布施の要事、此等は布施の成滿、生命を乞者に施して、我は此の波羅蜜を成就したり。《一四六》

乞食のために近づき來れるを見て、我は自身をも「喜」捨しぬ、施に於て我に匹ぶものなし、之我が布施波羅蜜なり。《一四七》

戒波羅蜜品第二

(一)持戒象所行品第一

我、森林の中にありて、母を養へる象たりし時、其

の時世界に於て德を以てしては、我と等しきものあらざりき。（一四八）

林間を徘徊するもの林中に於て我を見、王に報じていへり「大王、陛下の用たるに適すべき象、林中に棲めり。（一四九）

彼を檢分するの要なく、又陷穽を〔設くるの要〕もあることなし、牙によりて捕へなば、自ら此の處に來らん」。（一五〇）

彼の此の語を聞いて、王も亦心に歡喜し、調象者、善く練りたる巧妙の師範を遣はしぬ。（一五一）

彼調象者は去りて、〔象の〕母を養はんがために、蓮池に蓮莖を拔けるを見たり。（一五二）

「彼象師は我が」相を閱し我が戒德を識りて、「兒よ、來れ」といひて、我が牙を捕へぬ。（一五三）

其時、自ら我が身に具はりたる力は、今日の千象の力と同等なりき。（一五四）

若し我、彼の我を捕へんがために近寄れるものに對して怒りたらば、一國の民に至るまで力抗するに堪へしならん。（一五五）

我、戒を持たんがために、戒波羅蜜多を成就せんがために、我を陷穽に投ずるものも、心に異念をなさざらん。（一五六）

彼等若し其處に於て、我を斧又は槍を以て打ちたらんとも、我は我が戒を破らんことを恐れ、彼等に對して怒らざりしならん。（一五七）

【一】本生經七二。

（二）ブーリダッタ所行品第二

復次にブーリダッタなる大神通力〔の蛇〕たりし時、廣目大〔天〕王と共に我は天上界に至れり。（一五八）

此處にて我は諸天子の唯安樂の他なきを見て、己此の天に生れんがために戒律・禁行を守れり。（一五九）

身の始末をなし、命を支ふるの食量を攝りて、四分「具足の布薩戒を」守り、蟻垤の上に臥したり。（一六〇）

「皮膚や、肉や、腱や、骨や、此等を以て爲すべきことあるものは、此の施物を持ち去るべし」。（一六一）

忘恩者と共に徘徊しつつありしアーランバーナは我を捕へ、籃に投じて、處處に我を踊らせたり。（一六二）

籃に投ぜられても、手にて壓へられても、我戒法を破らんことを恐れ、アーランバーナに對して怒ることなかりき。（一六三）

己の生命を捨つることは、我に取りては草よりも輕く、戒法を犯すは、我には大地の上るが如し。（一六四）

間斷なく我が命を捨つること百生ならんとも、四洲のためにも、我は戒を破ることなからん。（一六五）

我戒を持たんがため、戒波羅蜜を成ぜんがためには、籃に投ずるものたりとも、「彼に」對して心に異念を作すことなからん。（一六六）

【一】本生經五四三ブリーダッタ品。

(三) チャンペーヤ龍所行品第三

復次に大神通力の「龍王」チャンペーヤたりし時、其の時も亦我、義にして戒法禁行を守りたり。（一六七）

其の時も亦我が法によりて行ひ、布薩戒を守れるを蛇使は捕へて、王宮の門邊に躍らせたり。（一六八）

彼「我が」色を青黄又は赤なりと思へば、其の心に隨ひ變じ、思惟せし所に似たり。（一六九）

「我克く」陸をも水となし、水をも陸となす、我若し彼に怒ることあらば、瞬時にして灰となさん。（一七〇）

若し我が心に服せば、戒より遠ざからん、戒に遠ざか

れるものは、最上利を成就せず。（一七一）

欲を破り、此處に身を分散せしむとせよ、而も戒を破ること籾を散ずるが如くならざらしめん。（一七二）

【一】本生經五〇六、チヤンペーヤ品。

（二）チューラボーヂ所行品第四

復次にチューラボーヂと呼べる持戒堅固の人なりし時、生有の怖畏ありと知りて出離を遂げたり。（一七三）

我が妻は婆羅門婦にして〔色〕黄金に似たるが、彼の女成劫に欲望を斷ちて出離を遂げたり。（一七四）

欲を離れ縛を斷ち、家族にも羣衆にも欲望なくして、大小村邑を周遊しつつ、〔二人は〕婆羅尼斯城に來れり。（一七五）

此處に愼重にして、家族にも羣衆にも混ずることなくして住し、二人は雜踏なく、音響少なき王園の中に棲めり。（一七六）

王園を見んがために來りて、王は婆羅門婦を見、我に近づき來りて問へり、「彼の女は汝の有なりや、何人の妻なりや」と。（一七七）

斯く云ふや我は王に向ひて此の語を宣べたり「彼の女は我が妻にあらず、法を同じうし教を一にするものなり」。（一七八）

〔王は〕彼の女に愛著を得て、從僕をして捕へしめ、力を以て壓へて都城の中に入らしめぬ。（一七九）

我が同胞にして同じき教を奉ぜる婦の、水瓶を〔取りたるまま〕曳かれて行くや、我に忿怒起れり。（一八〇）

忿の起ると共に、持戒禁行を回想し、此處に忿を抑へ、其の周く起ることを許さざりき。（一八一）

假令我が婆羅門婦を、銳き槍を以て刺すものあらんとも、我は戒を破ることなからん、菩提のための故

に。（一八二）

我は彼の婆羅門婦の憎きにあらず、我にまた力なきにもあらず、我が好愛する所は一切智なり、故に我戒を守らん。（一八三）

【一】本生經四四三、チェッラボーヂ品・本生覺二一。

(二)水牛王所行品第五

復次に我林間を徘徊する水牛たりし時、身體長大にして力あり、大きく、恐しき相をなせり。（一八四）

岩窟、超え難き山、樹下、溜水と、茲に水牛の「居に適する」處あれば、何處にても何方にても、（一八五）

大森林を徘徊して、宜しき處を見、其の處に赴きて、且つは立ち且つは臥しけり。（一八六）

時に凶く卑しく、輕はずみなる猿來りて、我が肩に額に眉に溺し、又は打ち叩きたり。（一八七）

一日も第二第三第四日も亦、常恒彼は我を汙し、我は之がために憂に沈めり。（一八八）

(三)我が憂ふるを見て、夜叉は我に語りていふらく「此の凶き屍を角と蹄とを以て亡くせよ」と。（一八九）

夜叉の其の時斯く云ふや、我は彼に答へていへり、「汝如何なれば我を、凶く卑き屍を以て汙さんとはするぞ。（一九〇）

若し我彼に對して怒らば、彼よりも劣りなん、我が戒は破れ、智ある人はまた我を誹らん。（一九一）

恥ありて生きんよりは、淨くして死ぬるぞ優れる、如何なれば我、生命のためにも、他を害ふことをなさん。（一九二）

彼我を度るが如く、同じく又他をも遇はん、其の時彼等こそは之を殺さん、之我が解脱となるべし。（一九三）

輕賤せられて、堪ふること劣中勝なれば、斯くして智

ある人は心に願へるものを得」と。（一九四）

【一】本生經五三四、水牛品本生臺三三。【二】猿を罵りていふ。

(二) ルル王所行品第六

復次に我最上の戒徳を具へ、縫ひ繫ぎたる黄金に似たる鹿王ルルたりし時、（一九五）

我は樂しき地方、其處なる愛すべく、樂しむべくして、世と離れ、人の到らざる、恆河の岸に、居を定めぬ。（一九六）

時に恆河の上流に於いて、一人の人の富者のために迫られて、恆河に落ち、「我生んや死せんや」「と云へり」。（一九七）

晝夜彼は恆河の大水に流され、悲しげなる聲にて泣き叫びつつ、恆河の中を行けり。（一九八）

我彼の悲しく慟哭する聲を聞きて、恆河の岸邊に立

ちて問へり、「汝は如何なる人なるぞ」と。（一九九）

彼は我が問をうけて、其の時其の所以を說きて曰く、「我富者を畏れ震ひて、大河に跳び入れり」と。（二〇〇）

我彼を哀み、我が命を捨てて跳び入り、夜の闇黑の中に、彼を救ひ出せり。（二〇一）

元氣を復せし時を知り、我彼に語りていへらく、「我汝に一事の恩惠を求む、我が事を何人にも語ることなかれ」と。（二〇二）

彼都に上りて、「人に」問はれ、財のために(三)物語れり、彼は王を導きて我が側に來れり。（二〇三）

(三)我は總て事情を王に說き明し、王は語を聞いて其の矢を番へり、「友を賣る下劣のもの、此の處に於て殺戮せん」とて。（二〇四）

我、彼を防護して、自ら我が「身を」化作しぬ、「大王、彼を生かし置かれよ、われ大王の望を成すものたら

ん。」　(二〇五)

我が戒を護りて、我が命を護らず、其の時我は持戒者となれり、唯菩提のための故に。　(二〇六)

【一】本生經四八二、ルル鹿品、本生鬘二六。　【二】此の鹿の事を語りたるなり。　【三】鹿は此の男の事を王に物語りたり。

(一) マータンガ所行品第七

復次に我苦行嚴しき結髪外道たり、名をマータンガと呼び戒を具し、安定に住したり。　(二〇七)

我と一人の婆羅門と、二人恆河の岸に棲み、我は上方に、婆羅門は下方に〔居れり〕。　(二〇八)

岸に沿うて徘徊しつつ、彼は我が彼の上にあるを見て、我を罵り、頭の碎くべき詛をなせり。　(二〇九)

我若し彼に對して怒らば、我若し戒を持つことなくば、我は目前にして彼を灰燼の如くにしたらん。　(二一〇)

彼が怒り、邪惡の心にして、我を詛ひしこと、却つて彼の頭上にぞ落ちたる、我は之を(二)觀法を以て免れしめたり。　(二一一)

我我が戒を護り、我が生命を護らず、其の時我は持戒の人となれり、唯菩提のための故に。　(二一二)

【一】本生經四九七、マータンガ品　【二】Yoga。

法非法天子所行品第八

次にまた我大神通力の大夜叉たり、ダムマと名くる大夜叉、一切世界の慈念者たりき。　(二一三)

衆人を十善業道に導き、友と共に、從屬と共に、大小村邑の間を往來せり。　(二一四)

凶惡にして慳貪なる一夜叉、十箇の火點しつつ、彼もまた友を率ゐ從屬を伴ひて、世界を徘徊したり。　(二一五)

法を說くものと非法なるものと、我等二人は相反對なるもの、兩者は中路に〔會ひ〕輙輙相摩して、互に相凝視せり。（三二六）

其より善惡〔兩者〕の間に、爭鬪起り、路を避くるに就きて、大なる戰起りたり。（三二七）

若し我彼に對して怒りたらば、また若し苦行の德を破りたらば、彼を其の從屬と共に、塵埃と化せしめたらん。（三二八）

されど我戒法を守らんがため、心靜かにして、從屬と共に下りて兇者に道を讓りぬ。（三二九）

我心を安靜にして、道を下ると共に、大地は直に兇惡夜叉に、罅隙を與へたり。（三三〇）

（一）ジャヤッヂサ所行品第九

パンチャーラ國の都、迦毘羅の優れたる都府にて、ジャヤッヂサと名くる王は、戒德を具へたり。（三三一）

我は此の王の兒にしてスタダムマと云ひ、善く戒を持てり、愛執染著なく、德ありて常に最良の眷屬を隨へたり。（三三二）

我が父は狩に出でて食人鬼に會へり、彼我が父を捕へ、而していへり「汝は我が生餌なり、動くことなかれ」と。（三三三）

彼は此の語を聞いて、畏れ震ひ、食人鬼を見て、彼の腿は柱の如くなれり。（三三四）

「獵物を取りて放て、我再び還り來りて〔汝に食はれん」といひて去り」、父は婆羅門に財を施し、我を喚びて云へり。（三三五）

「兒よ、王位を嗣げ、此の都城を等閑にすることなかれ、我は食人鬼に約するに、再び還り來るべきことを以てせり」と。（三三六）

我母と父とを拜し、變裝して「父に扮し」、弓と刃とを捨てて、食人鬼に近づけり。（三二七）

手に刃物を携へて近づき來るには、彼常に震ひ怖れん、我少にても畏怖心を起さしめなば、之によりて戒を破らん。（三二八）

我破戒の怖よりして、彼の嫌へるものを携へず、慈心利言にして、此の語をなせり、（三二九）

「大なる火を點ぜよ、我樹より墜ちん、時の至れるを知りて喰へ、汝祖父」と。（三三〇）

斯の如く持戒者のための故に、我我が命を愛護せず、而して彼の常に殺生を事とせしものを、また出家せしめたりき。（三三一）

【一】本生經五一三、ヂャヤッヂサ品。

(一) サンカパーラ所行品第十

次に大威力あるサンカパーラ、牙の武具あり、猛毒、支舌ある蛇王たりし時、（三三二）

四通の大道に、衆多の人の羣れる處に、四分「具足の布薩戒」を守り、其の處に居住を構へたり。（三三三）

「皮膚や・肉や・腱や・または骨や、此等を以て爲すべきとあるものには施さん、彼は持ち去るべし。」（三三四）

粗暴にして殘忍無慈悲なるボーヂャ人等は見て、杖と杵とを手にして此處なる我に近づき來れり。（三三五）

鼻を刺し、尾と背部とを「刺し」擔杆に掛けて、ボーヂャ人等は我を持ち去れり。（三三六）

我若し心に望まば、此の大地を海と森と山とを併せ、鼻風を以て滅することを得ん。（三三七）

杖を以て刺され、刃物を以て打たれても、ボーヂャ人に對して怒ることなかりき、之我が戒波羅蜜なり。（三三八）

【一】本生經五二五、サンカパーラ品。

* * * *

有牙の象、ブーリダッタ、チャンペーヤ、ボーヂと、水牛、ルル、マータンガ、ダムマと、兒のチャヤッチサと。（三三九）

此等は總て戒力あり、資具たり、說示者たる人、命を投げ棄てて、戒を護らんとす。（三四〇）

我サンカパーラは正念にして、常に何人のためにも命を委す、故に之戒波羅蜜なり。（三四一）

出離波羅蜜等品第三

（一）ユダンチャヤ所行品第一

我名聞無限の王子、ユダンチャヤたりし時、露滴の日光中に落つるを見ても、心驚懼しぬ。（三四二）

此の驚懼心を降伏することなく、益增長せしめ、母と父とを禮して、我は出家を求めき。（三四三）

［彼等］合掌して、村民、國民と共に請ひて云へり「兒よ、今日此の豐かに昌ゆる大國を領せよ。」（三四四）

王屬・後宮・村民・國民の悲しげに泣き叫ぶをも顧みずして我は出家しぬ。（三四五）

あらゆる大地・王國・親類・眷屬・名譽を捨てて、菩提のための他は思慮する所なかりき。（三四六）

母や父の憎きにあらず、大名譽の憎きにもあらず、一切智は我が好愛する所、故に我王國を捨てたり。（三四七）

【一】本生經四六〇、ユダンチャヤ品。

（二）ソーマナッサ所行品第二

復次にインダバッタと呼べる良き都府に於て、我は

ソーマナッサとして知られ、愛寵せられたる兒なりき。（二四八）

戒を具し、德を備へ、辯才巧に、恭敬增加し、慚恥心あり、攝取する所に於てまた熟通せり、（二四九）

其の王の師たるものに、虛僞の苦行者ありて、遊園と華園とに種を蒔きて生活せり。（二五〇）

われは此の實なく、籾殼を積めるが如き、中洞なる樹木の如き、心なき芭蕉の如き、虛僞漢を見て「云へり」、（二五一）

「彼に善人の法あるなく、彼は沙門道より遠かり、生活の道のための故に、慚恥と淨白の法とを捨てたり」と。（二五二）

時に我が邊土は、最遠隔の森林に及ぶまで亂れ、我が父は之を鎭めんがために、行くに當りて我を敎へぬ。（二五三）

(二)「兒よ、汝彼の結鬘の苦行者を等閑にするなかれ、彼の望む所に應じて供せよ、これ彼はあらゆる欲を與ふるものなればなり」と。（二五四）

我、彼に奉侍せんがために行きて、此の言をなせり、「居士よ、汝は强健なりや、汝に何物か捧ぐべきや」と。（二五五）

彼の虛僞にして憍慢を恃めるもの、之によりて怒りて云へり、「我今日汝を殺さしめん、然らずば國外に追放せしめん」と。（二五六）

邊土に戡ちて王は「還り」、虛僞者に語りていへり「尊師、(三)堪ふべきことありや尊師の「要する所は」能く供へられしや否や、」彼は王に語りて「兇惡の王子は恰も滅されたるが如し」と「云へり」。（二五七）

彼の此の言を用ひて、王は命令すらく「彼の首を卽處に刎ね、四分となして、街路より街路に觀せよ、之結

鬘士を辱しむる「ものの行くべき」道なり」と。(二五八)
是に於て乎、慈悲なく、暴惡にして、殘忍無慈悲なる輩は、我が母の膝に坐せるを曳きて去れり。(二五九)
我、彼等に語りていへらく、「堅き縛を以て我を縛せよ、疾く我を王に覲せよ、王の我に對して行ふべきことあり」と。(二六〇)
此等凶惡なる從者は、我を凶惡なる王に覲し、我は彼を見るや之を宥め、且つ己をも制しぬ。(二六一)
彼は其の處にて我が罪を恕し、我に大王の位を讓り、我は黑闇を破りて、出家得度しぬ。(二六二)
我は大王の位の厭はしきにあらず、諸欲を享くるの厭はしきにあらず、一切智は我が好愛する所、故に我は王位を抛ちき。(二六三)

【一】本生經五〇五、ソーマナッサ品。【二】此の時年甫めて七歲。
【三】諸事便安なりや、供養物足れりやの意。

(二) アヨーガラ所行品第三

復次に我迦尸王の兒たりし時、鐵屋の中に生長し、名をアヨーガラと稱へき。(二六四)
困難によりて生活を得、艱苦に逆ひて養育せられぬ、「父王はいへり」「兒よ、汝今日此の全大地を領有せよ。」(二六五)
我、國民、都民、人民を、王と共に禮し、掌を合せて此の言をなせり。(二六六)
「大地上にある有情、劣るも優れるも中なるも、己の家にありて守護なく、己の親族と共に生長す。(二六七)
世界にありて、我が此の養育は、最極の艱苦の中にありき、我は月日の光乏しき、鐵屋の中にて人となれり。(二六八)
腐れる屍に滿ちたる母胎を脫れ出で、其より再び更

に恐るべく、苦しき牢獄に投ぜられぬ。（二六九）

我若し斯の如き最嚴の苦に會ひ、若し王國に染心あらば、凶惡者中最極のものとならん。（二七〇）

我は身を厭ふ、我は國を望まず、我は死の我を壓伏することなき安靜の境に至らん。」（二七一）

我は斯の如く思ひ考へて、羣民の泣き叫ぶを、大象の縛を斷つが如くにして、森林中に入れり。（二七二）

母や父の我に厭はしきにあらず、また大名聲の厭はしきにもあらず、一切智は我が好愛する所たり、故に我王位を抛ちき。（二七三）

【一】本生經五一〇、アヨーガラ品、本生鬘三二。ayo-ghara アヨーガラには鐵屋の意あり、夜叉に噉まるるを恐れて、鐵屋中に保護して生長せしめたるなり。

（二）ビサ所行品第四

次にまた迦尸人の優勝なる都府にありて、姉妹七人の兄弟婆羅門の家に生れき。（二七四）

我は此等の首に生れ、慚恥と淸白とを具備し、生有を怖るべきものと見て、出離を樂とせり。（二七五）

母と父とが遣はしたる同一心の友は、諸欲によりて我を誘ひて、「家系を嗣續せよ」と云へり」。（二七六）

彼等のいひし言にして、在家の法に安樂を齎らすもの、之は、われには堅固にして、熱したる犂頭の如くなり。（二七七）

其の時、我、之を擯けしに、彼等は我が願ふ所を問うていへり「友よ、汝諸欲を娯まずば何をか望むぞ」と。（二七八）

我此等の利益を欲求する輩に語げていへり「在家の人たることを願はず、我は出離をぞ樂む」と。（二七九）

彼等我が語を聞いて、母と父とにも語りぬ、母と父とは斯の如くいへり、「總て共に出家せん」と。（二八〇）

我が母と父との二人、姉妹と七人の兄弟とは、無量の財を棄てて、大林中に入りぬ。（二八一）

【一】本生經四八八、ビサ品、本生臺一九。

(一)賢者ソーナ所行品第五

復次に我ブラフマヴッダの都にありて、其處なる家格よく、富裕なる長者「の家」に生れき。（二八二）

其の時もまた我闇に包まれて暗黑なる世界を見、心を生有より背かしめ、恰も尖鞭に刺されたるが如くせり。（二八三）

時に我種種の害惡を見て、心に思へらく、「我何時か家より出でて、森林の中に入らんや」と。（二八四）

親族輩は我を誘ふに享欲を以てせり、彼等にもまた我が欲する所を語り、「之を以て我を誘ふことなかれ」といへり。（二八五）

我が弟にナンダと稱ふる賢明のものありしが、彼もまた我に隨ひ學びて出家を是なりとせり。（二八六）

我ソーナと、ナンダと二人、我が母と父とは、此の時もまた富財を捨てて、大森林の中に入れり。(二)（二八七）

【一】本生經五三二、ソーナナンダ品。【二】總て四人なり。

(一)テーミヤ所行品第六

次にまた我迦尸王の兒たりし時、名をムーガパッカといひ、「人人我を」(二)テーミヤと呼びたり。（二八八）

此の時一萬六千の女に、一人の男兒あらず、(三)晝夜を經て後、我一人生れ出でたり。（二八九）

艱苦によりて得たる愛し兒、聰明にして威光を有てり、父は臥牀に白傘を翳して、我を養ひぬ。（二九〇）

見事なる臥牀に眠り、目覺めて、白色の傘を見ぬ、之によりて我(四)泥犁に墮ちしことあり。（二九一）

傘を見ると共に、我に恐怖、戰慄生せり、我何時か決定を得て之より脱れん。（二九二）

曾て我が同胞なりし一天女の、我が利益を願へるもの、彼女我が苦み惱めるを見て。我に勸むるに三事に於てせり。（二九三）

「[己]賢明なること、智慮多きことを他の人人に示すことなかれ、總て人人「汝を」輕賤すまじ、斯の如くして利益あらん。（二九四）

斯く言はるるや、我彼に對して此の語をなせり、「天女、汝の語る所、我汝の此の言を行はん。（二九五）

大姉、汝は我が利を願ふ、天女、汝は益を願ふ」と。彼女の語を聞いて、海中に陸を得たるが如くなりき。（二九六）

欣喜し心踊躍して、我三事に於て決定せり、喑啞聾者となり、跛者となりて歩行の自由を失へり。（二九七）

此等の事に於て決定して住すること十有六年、其より我が手足と舌と耳とを撫で、我に足らざる所なきを見、「災禍なり」といひて罵れり。（二九八）

其よりあらゆる人人、軍帥、輔臣等、聽いて心を一にして、「[我を]捨つることを承認せり。（二九九）

我彼等の意思を聞きて欣喜し、心踊躍して、「思へらく「利益のために」苦行を行ひしが、今此の利益を我は成じたり。（三〇〇）

(五)洗浴せしめ「塗香を」塗り、王服を纏はしめ、王傘を以て灌頂せしめて、都府の巡行をなさしめぬ。（三〇一）

七日の間翳さしめて、日輪の上りし時、馭者は我を車にて運び出し、森林中に入れり。（三〇二）

馬車を一方に立て、手綱を捨てて、馭者は、我を埋めんがために地に穴を掘れり。（三〇三）

種種の因よりして、既定の決心を稱し、唯菩提に達せんがための故に、此の決心を破ることなかりき《三〇四》

母や父や、我、惡きにあらず、己我に惡きにあらず、一切智は我が愛好する所、故に之をぞ「得んと」決したる。《三〇五》

此等の事を決定して、世に住すること十六年、決定に於ては我に等しきものなかりき、これ我が決定波羅蜜なり。(六)《三〇六》

【一】本生經五三八、ムーガパッカ品、ムーガは啞者パッカは跛者の意。本文によりて題名の由來を知るべし。【二】テーミヤは本名なり。【三】歲月を經ての意。【四】前生に地獄に墮ちたることあるを憶念せしなり。【五】此の王子の母なる妃の願により七日間王位に卽かしめ、後林間に捨てんとするなり。【六】此の一、決定波羅蜜。

(一)猿王所行品第七

我猿となりて河の岸なる岩窟中の臥處にありける時鰐魚の爲に窘められ、往來することを得ざりき。《三〇七》

我が立ちて此岸彼岸に度りし處に、仇敵、殺害者、獰猛の相せる鰐魚は棲みけり。《三〇八》

彼、我を讃めて「來れ」といひ、我は彼に答へて「往かん」といひて、彼の頭を踏み「度りて」、對岸に立ちたり。《三〇九》

我が語をなせし如くにして、我は彼に虛言をなせしにあらず、眞實に於ては我に等しきものなし、之我が眞實波羅蜜なり。(二)《三一〇》

【一】本生經三四二、猿品。【二】以下六品眞實波羅蜜。

サッチャと呼べる賢者所行品第八

次にまたサッチャと呼べる苦行者たりし時、我眞實を以て世界を護り、民を和合せしめたり。《三一一》

(一)雛鶉所行品第九

次にまた、摩揭陀國に於いて雛鶉たりし時、稚くして翼未だ成らず、肉臠〔の如く〕して、巣の中にありき。（三一二）

母鶉は嘴を以て運び來りて我を飼ひ、我は體力あるなく、唯母の接觸によりて、生命を保ちたり。（三一三）

某年寒時に、野火燃され、〔物物〕悉く黑化せんとする火は、我等に近づき來りぬ。（三一四）

斯くて大火は漠漠たる煙を生じ、響を發しつつ、次第に燒き盡して、我に迫り來ぬ。（三一五）

我が母と父とは、火勢の恐ろしさに怖ぢ怯れて、我を巣の中に捨て、身を以て逃れぬ。（三一六）

足と翼とを捨てん、我に體力あるなし、去ることを得ざる我は、其の時斯の如く思惟せり。（三一七）

我が畏れ震ひて、走り近づくべきもの、彼等は我を捨てて去れり、我今日如何がなすべきぞや。（三一八）

世に戒德、眞實、淸淨、慈悲あり、此の眞實によりて我最上の眞實の祈誓をなさん。（三一九）

法力を撿して、古昔の勝者を憶ひ、眞實の力を唱へて、眞實の祈誓を行へり。（三二〇）

「墜るなき翼あり、僞なき足あれ、母と父とは、火を退きて去れり。」（三二一）

我が眞實の〔祈誓〕をなすや、焰焰たる火は十六カリーサの間を避けて、恰も火の水に會へるが如くなりき、眞實に於ては我と匹ぶものなかりき、之我が眞實波羅蜜なり。（三二二）

【一】本生經三五、本生鬘一六。

(二)魚王所行品第十

次にまた我大湖の中にて、魚類の王たりし時、暑き日に灼かれて、湖中の水盡きたり。（三二三）

其より鴉と、鷲と、鶴と、隼の羣とは、晝夜坐して魚類を啄みぬ。（三二四）

我親族のもの等と共に窘められ、其の時斯く思ひぬ、「如何なる方便を以てか、親族を「此の」苦惱より免れしむべきぞ。」（三二五）

法利を度量しつつ、我は眞實を見ぬ、眞實の上に住し、親族を此の滅盡より脫れしめん。（三二六）

正法を憶念し、最上利を度量し、世間に於て堅固に常住なる眞實の祈誓をなせり。（三二七）

「我自己を憶念し、我上智に達せしより、我は一生物として故に害せられたるを識らず。此の眞實語によりて雲、雨を降せ。（三二八）

雲鳴り響き、鴉の貯ふる所を滅し、鴉を憂苦に鎖し、魚類を憂苦より救へ。」（三二九）

最上眞實「の祈誓」をなすと共に、雲雷り、忽ち雨降れり、陸と窪とを滿しつつ。（三三〇）

斯の如き最勝の眞實を最上の精進として、眞實の威力により大雨を降しぬ、眞實を以てしては我に等しきものなし、之我が眞實波羅蜜なり。（三三一）

【一】本生經七五、本生鬘一五。

（二）カンハヂーパーヤナ所行品

第十一

次にまた我カンハヂーパーヤナ仙たりし時、五十餘年の間、快快として遊行しぬ。（三三二）

されど何人も我が此の快快たる心を知るものなく、我亦樂を願ひて、何人にも我が樂なきことを語らざりき。（三三三）

同じく梵行を修せし我が友、マンダッギャアと云へる大仙は、先に作りし業の爲に槍に突かれたり。（三三四）

我彼を看護して平癒せしめ。彼は別を告げ、我が道院に來りぬ。（三三五）

我が友なる婆羅門は、妻と兒とを携へ、三人共に來りて、我が道院に入れり。（三三六）

彼等と共に會釋し、己の道院に坐しけるに、彼の兒は毬を投げて、蛇を怒らしめたり。（三三七）

其より彼兒は、毬の行ける道を尋ね、手もて蛇の首を撫でぬ。（三三八）

彼に撫でらるるや、毒の力を恃とせる蛇は怒り、荒立つこと此の上なく、忽ち幼兒の手を咬めり。（三三九）

劇毒〔の蛇〕のために咬まるると共に、幼兒は地上に倒れぬ、我は之がために苦悶し、我が戲笑も苦となれり。（三四〇）

苦み悶え、憂に刺されたる彼の人等を慰め、先づ最勝第一の眞實の祈誓をなせり。（三四一）

我、斯の如く七日の間、淸淨心にして善根を要め、梵行を行ぜり、其の後、我が行ひし所、五十餘年の間に、（三四二）

我は實に〔行ふの〕意なくしてぞ之を行ひたる、此の眞實によりて祥福あれ、毒は除かれたり（二）ヤンニャダッタ、壽を獲よ。（三四三）

我眞實〔の祈誓〕を爲すと共に、幼兒は毒の勢のために震ひ、目覺むることなくして起ち、また無病となれり、眞實に於て我に等しきものなし、之我が眞實波羅蜜なり。（三四四）

【一】本生經四四四、カンハヂーパーヤナ品。【二】幼兒の名なり。

（二）スタソーマ所行品第十二

次にまた、我、スタソーマと呼べる王たりし時、食人鬼のために捕へられ、曾て婆羅門に約せしことを

憶ひぬ。（三四五）

（二）掌を掩ひて「泣ける」一百王種、此の供犧のために、「捕へられし」もの等の中に我を混ぜしめぬ。（三四六）

食人鬼は我に問うて「汝は何の捨離をか望める、汝若し我に還り來らば、汝の意のある所、之をなさん」といへり。（三四七）

彼の問に答へ、我が來るべきを「約して」、其より樂しき都に到り、王位を「兒に」讓り與へぬ。（三四八）

古昔の勝者の行ひたまひし善人の法を追憶し、婆羅門に財物を與へて、食人鬼の所に歸れり。（三四九）

彼の我を殺すか殺さざるか、我疑ふ所なく、眞實語を護りて、生命を捨てんがために行けり、眞實に於て我に匹ぶものなし、之我が眞實波羅蜜なり。（三五〇）

【一】本生經五三七、本生鬘三一。【二】事はマハスータソーマ本生譚に詳記す、もと某國の王たりしもの、前世の業により人肉を食ふ盜賊となりて森林中に隱れたり、或時足に負傷したるを樹神に祈りて平癒せしかば、其の謝禮として一百名の王種を得其の肉を供へて祭るべきことを誓ひたり、一百王種の最後に捕へられたるはスタソーマ王なり、此の朝一婆羅門あり、德叉尸羅より來り、スタソーマ王のために迦葉佛の說かれし四首の偈を說かんとせしが、王は偶ま沐浴のため都外に出づべき所なりし故、之を聞くの閑なし、沐浴より歸りて之を聞くべしと約し、多の扈從を率ゐて都外に出で、沐浴後此の食人鬼のために捕へられたり、王は彼の婆羅門に約せしことを思ひ、食人鬼に對して都に行きて四偈を聞きし後は再び還るべきことを誓ひて去れり、偈を聞いて後復還り來り、他の王種をも救ひ出せり。

スヴンナサーマ所行品第十三

我林間にありて帝釋天のために化作せられたるサーマたりし時、森林の獅虎をも慈悲に導きたり。（三五一）

我は獅・虎・豹・熊・水牛・豚鹿・鹿・猪等に圍繞せられて、林中に棲めり。（三五二）

何ものも我を懼るることなく、我また何ものをも恐るることなく、我其の時慈悲の力により毅然として、

森林中に樂めり。（一）　（三五三）

【一】以下二品慈悲波羅蜜。

エーカラーヂャ所行品第十四

復次に我エーカラーヂャとして知られし時、最上の戒に住し、普く世人を訓へき。（三五四）

十善業の道、餘りなく轉じ、四種の攝法によりて、衆人を攝取したり。（三五五）

我斯の如く今世及び來世に精勤せしに、ダッバセーナは來りて、我が都を破り、（三五六）

王に接して住める都民、兵士、國民をも、總て之を擒にして、我を穴に埋めぬ。（三五七）

我が羣臣、榮ゆる國、內廷へと闖入して之を捕へぬ、［而も］我之を見ること愛兒の如し、慈悲に於て我に等しきものあるなし、之我が慈悲波羅蜜なり。（三五八）

（一）ハマーローマハンサ所行品第十五

冢間に我骸骨を藏めて、臥牀を設くれば、村民來りて種種の形式を表しぬ。（三五九）

或はまた歡喜し、心踊躍して、香と華鬘と、種種多量の食物等の施物を齎せるあり。（三六〇）

我を苦惱に陷るるもの、また我に安樂を與ふるもの、總てのものに對して平等なり、慈愛忿怒あることなし。（三六一）

安樂と苦痛と、名譽と不名譽とに、平衡にして、あらゆる場合に於いて平等なり、これ我が捨波羅蜜なり。（二）（三六二）

【一】本生經九四ローマハンサ品。【二】此の一品捨波羅蜜。

*　*　*　*

ユダンヂャヤ、ソーマナッサ、アョーガラと、ソーナ、ナンダ、ムーガパッカ、猿王、眞實の稱ある人、鶉、魚王と、黑ヂーパーヤナ仙、スタソーマ、更にサーマたり、またエーカラーヂャたり、捨成滿なりきと大仙は宣はせたまへり。（三六三、三六四）

斯の如く菩提種種、所成また種種、生生に之を享けて、最上の菩提を成せり。（三六五）

施すべき者には施物を施し、戒法成就して餘す所なく、出離の成滿に達して、最上の菩提を成せり。（三六六）

識者に問ひ、最上の精進をなし、忍辱の成滿に達して、最上の菩提を成せり。（三六七）

堅固の決定をなし、眞實語を護り、慈悲の成滿に達して、最上の菩提を成せり。（三六八）

得と不得と、名譽と不名譽と、恭敬と輕賤と、あらゆる場合に平等にして、最上の菩提に達せり。（三六九）

懶惰を恐しきものと見、精進を安隱なりと見て、精進の人となれ、之諸佛の誡なり。（三七〇）

諍論を恐しきものと見、無諍論を安隱なりと見、和合して頑剛なるなかれ、之諸佛の誡なり。（三七一）

放逸を恐しきものと見、精勤を安隱なりと見て、八支道を修習せよ、之諸佛の誡なり。（三七二）

國譯所行藏 終

金光明最勝王經卷第一

〔麗食〕〔宋塲〕〔元塲〕〔明塲〕

大唐三藏沙門義淨奉　制譯

序品第一

如是我聞。一時薄伽梵。在王舍城鷲峯山頂。於最清淨甚深法界。諸佛之境如來所居。與大苾芻衆九萬八千人。皆是阿羅漢。能善調伏如大象王。諸漏已除無復煩惱。心善解脫慧善解脫。所作已畢捨諸重擔。逮得己利盡諸有結。得大自在住清淨戒。善巧方便智慧莊嚴。證八解脫已到彼岸。其名曰具壽阿若憍陳如。具壽阿說侍多。具壽婆濕波。具壽摩訶那摩。具壽婆帝利迦。大迦攝波。優樓頻螺迦攝。伽耶迦攝。那提迦攝。舍利子。大目乾連。惟阿難陀住於學地。如是等諸大聲聞。各於晡時從定而起。往詣佛所頂禮佛足。右遶三帀退坐一面。復有菩薩摩訶薩。百千萬億人俱。有大威德如大龍王。名稱普聞衆所知識。施戒清淨常樂奉持。忍行精勤經無量劫。超諸靜慮繫念現前。開闡慧門善修方便。自在遊戲微妙神通。逮得總持辯才無盡。斷諸煩惱累染皆亡。不久當成一切種智。降魔軍衆而擊法鼓。制諸外道令起淨心。轉妙法輪度人天衆。十方佛土悉已莊嚴。六趣有情無不蒙益。成就大智具足大忍。住大慈悲心有大堅固力。歷事諸佛不般涅槃。發弘誓心盡未來際。廣於佛所深種淨因。於三世法悟無生忍。逾於二乘所行境界。以大善巧化導世間。於大師教悉能敷演。祕密之法甚深空性。皆已了知無復疑惑。其名曰無障礙轉法輪菩薩。常發心轉法輪菩薩。常精進菩薩。不休息菩薩。慈氏菩薩。妙吉祥菩薩。觀自在菩薩。總持自在王菩薩。大辯莊嚴王菩薩。妙高山王菩薩。大海深王菩薩。寶幢菩薩。大寶幢菩薩。地藏菩薩。虛空藏菩薩。寶手自在菩薩。金剛手菩薩。歡喜力菩薩。大法力菩薩。大莊嚴光菩薩。大金光莊嚴菩薩。淨戒菩薩。常定菩薩。極清淨慧菩薩。堅固精進菩薩。心如虛空菩薩。不斷大願菩薩。施藥菩薩。療諸煩惱病菩薩。醫王菩薩。歡喜高王菩薩。得上授記菩薩。大雲淨光菩薩。大雲持法菩薩。大雲名稱喜樂菩薩。大雲現無邊稱菩薩。大雲師子吼

譯號三本俱無大字○沙門同作法師下皆同

那下同無摩字○攝同作葉下同○惟同作唯下同

化下同無導字○教下同無悉字

菩薩。大雲牛王吼菩薩。大雲吉祥菩薩。大雲寶德菩薩。大雲日藏菩薩。大雲月藏菩薩。大雲星光菩薩。大雲火光菩薩。大雲電光菩薩。大雲雷音菩薩。大雲慧雨充遍菩薩。大雲清淨雨王菩薩。大雲花樹王菩薩。大雲青蓮花香菩薩。大雲寶栴檀香清涼身菩薩。大雲除闇菩薩。大雲破翳菩薩。如是等無量大菩薩衆各於晡時從定而起。往詣佛所頂禮佛足右遶三帀退坐一面。復有黎車毗童子五億八千。其名曰師子光童子。師子慧童子。法授童子。因陀羅授童子。大光童子。大猛童子。佛護童子。法護童子。僧護童子。金剛護童子。虛空護童子。虛空吼童子。寶藏童子。吉祥妙藏童子。如是等人而爲上首。悉皆安住無上菩提。於大乘中深信歡喜。各於晡時往詣佛所頂禮佛足。右遶三帀退坐一面。復有四萬二千天子。其名曰喜見天子。喜悅天子。日光天子。月髻天子。明慧天子。虛空淨慧天子。除煩惱天子。吉祥天子。如是等天子而爲上首。皆發弘願護持大乘。紹隆正法能使不絕。各於晡時往詣佛所頂禮佛足。右遶三帀退坐一面。復有二萬八千龍王。蓮華龍王。翳羅葉龍王。大力龍王。大吼龍王。小波龍王。持駃水龍王。金面龍王。如意龍王。如是等龍王而爲上首。於大乘法常樂受持。發深信心稱揚擁護。各於晡時往詣佛所頂禮佛足。右遶三帀退坐一面。復有三萬六千諸藥叉衆。毗沙門天王而爲上首。其名曰庵婆藥叉。持庵婆藥叉。蓮花光藏藥叉。蓮花面藥叉。顰眉藥叉。現大怖藥叉。動地藥叉。呑食藥叉。是等藥叉悉皆愛樂如來正法。深心護持不生疲懈。各於晡時往詣佛所頂禮佛足。右遶三帀退坐一面。復有四萬九千揭路荼王。香象勢力王而爲上首。及餘健闥婆阿蘇羅緊那羅莫呼洛伽等。山林河海一切神仙。幷諸大國所有王衆。中宮后妃淨信男女。人天大衆悉皆雲集。咸願擁護無上大乘。讀誦受持書寫流布。各於晡時往詣佛所頂禮佛足。右遶三帀退坐一面。如是等聲聞菩薩。人天大衆龍神八部。既雲集已。各各至心合掌恭敬。瞻仰尊容目未曾捨。願樂欲聞殊勝妙法。爾時薄伽梵。於日晡時從定而起。觀察大衆而說頌曰

金光明妙法　最勝諸經王　甚深難得聞　諸佛之境界　我當爲大衆　宣說如是經　幷四方四佛
威神共加護　東方阿閦尊　南方寶相佛　西方無量壽　北方天鼓音　我復演妙法　吉祥懺中勝
能滅一切罪　淨除諸惡業　及消衆苦患　常與無量樂　一切智根本　諸功德莊嚴　衆生身不具

栴明作旃○翳三本俱作瞖

荼宋元俱作茶下同

壽命將損減　諸惡相現前　天神皆捨離　親友懷瞋恨　眷屬悉分離　彼此共乖違　珍財皆散失
惡星爲變怪　或被邪蠱侵　若復多憂愁　衆苦之所逼　睡眠見惡夢　因此生煩惱　是人當澡浴
應著鮮潔衣　於此妙經王　甚深佛所讚　專注心無亂　讀誦聽受持　由此經威力　能離諸災橫
及餘衆苦難　無不皆除滅　護世四王衆　及大臣眷屬　無量諸藥叉　一心皆擁衛　大辯才天女
尼連河水神　訶利底母神　堅牢地神衆　梵王帝釋主　龍王緊那羅　及金翅鳥王　阿蘇羅天衆
如是天神等　幷將其眷屬　皆來護是人　晝夜常不離　我當說是經　甚深佛行處　諸佛祕密教
千萬劫難逢　若有聞是經　能爲他演說　若心生隨喜　或設於供養　如是諸人等　當於無量劫
常爲諸天人　龍神所恭敬　此福聚無量　數過於恒沙　讀誦是經者　當獲斯功德　亦爲十方尊
深行諸菩薩　擁護持經者　令離諸苦難　供養是經者　如前澡浴身　飲食及香花　恒起慈悲意
若欲聽是經　令心淨無垢　常生歡喜念　能長諸功德　若以尊重心　聽聞是經者　善生於人趣
遠離諸苦難　彼人善根熟　諸佛之所讚　方得聞是經　及以懺悔法

善三本倶作若

金光明最勝王經如來壽量品第二

爾時王舍大城有一菩薩摩訶薩。名曰妙幢。已於過去無量倶胝那庾多百千佛所。承事供養殖諸善根。是時妙幢菩薩獨於靜處作是思惟。以何因緣釋迦牟尼如來。壽命短促唯八十年。復作是念。如佛所說有二因緣得壽命長。云何爲二。一者不害生命。二者施他飲食。然釋迦牟尼如來。曾於無量百千萬億無數大劫。不害生命行十善道。常以飲食惠施一切飢餓衆生。乃至己身血肉骨髓。亦持施與令得飽滿。況餘飲食。時彼菩薩。於世尊所作是念時。以佛威力其室忽然廣博嚴淨。帝青琉璃種種衆寶雜彩間飾如佛淨土。有妙香氣過諸天香芬馥充滿。於其四面各有上妙師子之座。四寶所成以天寶衣而敷其上。復於此座有妙蓮花。種種珍寶以爲嚴飾。量等如來。自然顯現。於蓮花上有四如來。東方不動。南方寶相。西方無量壽。北方天鼓音。是四如來各於其座。加趺而坐。

品目上明無金光明最勝王經七字下品目上有經名者皆同○殖同作植

琉明作瑠○芬宋作分○西下三本倶無方字○北下同無方字○趺明作跌

放大光明周遍照耀王舍大城。及此三千大千世界。乃至十方恒河沙等諸佛國土。雨諸天花奏諸天樂。爾時於此贍部洲中及三千大千世界。所有衆生以佛威力受勝妙樂無有乏少。若身不具皆蒙具足。盲者能視聾者得聞。瘂者能言愚者得智。若心亂者得本心。若無衣者得衣服。被惡賤者人所敬。有垢穢者身清潔。於此世間所有利益。未曾有事悉皆顯現。爾時妙幢菩薩。見四如來及希有事。歡喜踊躍合掌一心。瞻仰諸佛殊勝之相。亦復思惟釋迦牟尼如來無量功德。惟於壽命生疑惑心。云何如來功德無量壽命短促唯八十年。爾時四佛告妙幢菩薩言。善男子。汝今不應思忖如來壽命長短。何以故。善男子。我等不見諸天世間梵魔沙門婆羅門等人及非人。有能筭知佛之壽量知其齊限。惟除無上正遍知者。時四如來。欲說釋迦牟尼佛所有壽量。以佛威力。欲色界天諸龍鬼神健闥婆阿蘇羅揭路荼緊那羅莫呼洛伽。及無量百千億那庾多菩薩摩訶薩。悉來集會入妙幢菩薩淨妙室中。爾時四佛於大衆中。欲顯釋迦牟尼如來所有壽量。而說頌曰

一切諸海水　可知其渧數　無有能數知　釋迦之壽量
析諸妙高山　如芥可知數　無有能數知　釋迦之壽量
一切大地土　可知其塵數　無有能數知　釋迦之壽量
假使量虛空　可得盡邊際　無有能度知　釋迦之壽量
若人住億劫　盡力常筭數　亦復不能知　世尊之壽量
不害衆生命　及施於飲食　由斯二種因　得壽命長遠
是故大覺尊　壽命難知數　如劫無邊際　壽量亦如是
妙幢汝當知　不應起疑惑　最勝壽無量　莫能知數者

爾時妙幢菩薩。聞四如來說釋迦牟尼佛壽量無限白言。世尊。云何如來示現如是短促壽量。時四世尊告妙幢菩薩言。善男子。彼釋迦牟尼佛於五濁世出現之時人壽百年稟性下劣。善根微薄復無信解。此諸衆生多有我見人見衆生壽者。養育邪見我我所見斷常見等。爲欲利益此諸異生及衆外道。如是等類令生正解速得成就無上菩提。是故釋迦牟尼如來示現如是短促壽命。善男子。然彼如來欲令衆生見涅槃已。生難遭想憂苦等想。於佛世尊所說經敎。速當受持讀誦通利。爲人解說不生謗毀。是故如來現斯短壽。何以故。彼諸衆生若見如來不般涅槃。不生恭敬難遭之想。如來所說甚深經典。亦不受持讀誦通利爲人宣說。所以者何。以常見佛不尊重

渧三本俱作滴
數同作筭
度明作數
衆同作諸
令同作命

寶三本俱作財

惟宋作唯下同

故。善男子。譬如有人見其父母多有財產珍寶豐盈。便於財物不生希有難遭之想。所以者何。於父財物生常想故。善男子。彼諸衆生亦復如是。若見如來不入涅槃。不生希有難遭之想。所以者何。由常見故。善男子。譬如有人父母貧窮資財乏少。然彼貧人或詣王家或大臣舍。見其倉庫種種珍寶悉皆盈滿。生希有心難遭之想時彼貧人爲欲求財。廣設方便策勤無怠。所以者何。爲捨貧窮受安樂故。善男子。彼諸衆生亦復如是。若見如來入於涅槃。生難遭想乃至憂苦等想。復作是念。於無量劫諸佛如來出現於世。如烏曇跋花時乃一現。彼諸衆生發希有心起難遭想。若遇如來心生敬信。聞說正法生實語想。所有經典悉皆受持不生毀謗。善男子。以是因緣彼佛世尊。不久住世速入涅槃。善男子。是諸如來以如是等善巧方便成就衆生。爾時四佛說是語已忽然不現。爾時妙幢菩薩摩訶薩。與無量百千菩薩及無量億那庾多百千衆生。俱共往詣鷲峯山中釋迦牟尼如來正遍知所。頂禮佛足在一面立。時妙幢菩薩以如上事具白世尊。時四如來亦詣鷲峯。至釋迦牟尼佛所。各隨本方就座而坐。告侍者菩薩言。善男子。汝今可詣釋迦牟尼佛所爲我致問。少病少惱起居輕利安樂行不。復作是言。善哉善哉。釋迦牟尼如來。今可演說金光明經甚深法要。爲欲饒益一切衆生。除去飢饉令得安樂。我當隨喜。時彼侍者各詣釋迦牟尼佛所。頂禮雙足却住一面。俱白佛言。彼天人師致問無量。少病少惱起居輕利安樂行不。復作是言。善哉善哉。釋迦牟尼如來。今可演說金光明經甚深法要。爲欲利益一切衆生。除去飢饉令得安樂。爾時釋迦牟尼如來應正等覺。告彼侍者諸菩薩言。善哉善哉。彼四如來。乃能爲諸衆生饒益安樂。勸請於我宣揚正法。爾時世尊。而說頌曰

我常在鷲山　宣說此經寶　成就衆生故　示現般涅槃　凡夫起邪見　不信我所說　爲成就彼故
示現般涅槃

時大會中有婆羅門。姓憍陳如名曰法師授記。與無量百千婆羅門衆。供養佛已。聞世尊說入般涅槃。涕淚交流前禮佛足白言。世尊。若實如來於諸衆生有大慈悲。憐愍利益令得安樂。猶如父母餘無等者。能與世間作歸依處如淨滿月。以大智慧能爲照明如日初出。普觀衆生愛無偏黨如羅怙羅。惟願世尊施我一願。爾時世尊默然

而止。佛威力故於此衆中。有梨車毗童子名一切衆生喜見。語婆羅門憍陳如言。大婆羅門。汝今從佛欲乞何願。我能與汝。婆羅門言。童子。我欲供養無上世尊。今從如來求請舍利如芥子許。何以故。我曾聞說若善男子善女人。得佛舍利如芥子許恭敬供養。是人當生三十三天而爲帝釋。是時童子。語婆羅門曰。若欲願生三十三天受勝報者。應當至心聽是金光明最勝王經。於諸經中最爲殊勝。難解難入聲聞獨覺所不能知。此經能生無量無邊福德果報。乃至成辦無上菩提。我今爲汝略說其事。婆羅門言。善哉童子。此金光明經甚深最上難解難入。聲聞獨覺尚不能知。何況我等邊鄙之人。智慧微淺而能解了。是故我今求佛舍利如芥子許。持還本處置寶函中恭敬供養。命終之後得爲帝釋常受安樂。云何汝今不能爲我從明行足求斯一願。作是語已。爾時童子卽爲婆羅門。而說頌曰

恒河駛流水　可生白蓮花　黃鳥作白形　黑鳥變爲赤　假使贍部樹　可生多羅果　朅樹羅枝中
能出菴羅葉　斯等希有物　或容可轉變　世尊之舍利　畢竟不可得　假使用龜毛　織成上妙服
寒時可被著　方求佛舍利　假使蚊蚋足　可使成樓觀　堅固不搖動　方求佛舍利　假使水蛭蟲
口中生白齒　長大利如鋒　方求佛舍利　假使持兎角　用成於梯隥　可昇上天宮　方求佛舍利
鼠緣此梯上　除去阿蘇羅　能障空中月　方求佛舍利　若蠅飲酒醉　周行村邑中　廣造於舍宅
方求佛舍利　若使驢脣色　赤如頻婆果　善作於歌舞　方求佛舍利　烏與鵂鶹鳥　同共一處遊
彼此相順從　方求佛舍利　假使波羅葉　可成於傘蓋　能遮於大雨　方求佛舍利　假令大船舶
盛滿諸財寶　能令陸地行　方求佛舍利　假使鷦鷯鳥　以觜銜香山　隨處任遊行　方求佛舍利

爾時法師授記婆羅門。聞此頌已亦以伽陀。答一切衆生喜見童子曰

善哉大童子　此衆中吉祥　善巧方便心　得佛無上記　如來大威德　能救護世間　仁可至心聽
我今次第說　諸佛境難思　世間無與等　法身性常住　修行無差別　諸佛體皆同　所說法亦爾
諸佛無作者　亦復本無生　世尊金剛體　權現於化身　是故佛舍利　無如芥子許　佛非血肉身

被三本俱作披
隥宋作橙元作隥明作磴
令三本俱作使
救明作求

惟三本俱作唯下同

云何有舍利　方便留身骨　爲益諸衆生　法身是正覺　法界則如來　此是佛眞身　亦說如是法

爾時會中三萬二千天子。聞說如來壽命長遠。皆發阿耨多羅三藐三菩提心。歡喜踊躍得未曾有。異口同音而說頌曰

佛不般涅槃　正法亦不滅　爲利衆生故　示現方滅盡　世尊不思議　妙體無異相　爲利衆生故
現種種莊嚴

爾時妙幢菩薩。親於佛前及四如來幷二大士諸天子所。聞說釋迦牟尼如來壽量事已。復從座起合掌恭敬白佛言。世尊。若實如是。諸佛如來不般涅槃無舍利者。云何經中說有涅槃及佛舍利。令諸人天恭敬供養。過去諸佛現有身骨流布於世。人天供養得福無邊。今復言無致生疑惑。惟願世尊。哀愍我等廣爲分別。爾時佛告妙幢菩薩及諸大衆。汝等當知。云般涅槃有舍利者。是密意說。如是之義當一心聽。善男子。菩薩摩訶薩如是應知。有其十法。能解如來應正等覺眞實理趣。說有究竟大般涅槃。云何爲十。一者諸佛如來究竟斷盡諸煩惱障所知障故。名爲涅槃。二者諸佛如來善能解了有情無性及法無性故。名爲涅槃。三者能轉身依及法依故。名爲涅槃。四者於諸有情任運休息化因緣故。名爲涅槃。五者證得眞實無差別相平等法身故。名爲涅槃。六者了知生死及以涅槃無二性故。名爲涅槃。七者於一切法了其根本證清淨故。名爲涅槃。八者於一切法無生無滅善修行故。名爲涅槃。九者眞如法界實際平等得正智故。名爲涅槃。十者於諸法性及涅槃性得無差別故。名爲涅槃。是謂十法說有涅槃。復次善男子。菩薩摩訶薩如是應知。復有十法。能解如來應正等覺眞實理趣。說有究竟大般涅槃。云何爲十。一者一切煩惱。以樂欲爲本從樂欲生。諸佛世尊斷樂欲故。名爲涅槃。二者以諸如來斷諸欲樂。不取一法以不取故。無去無來無所取故。名爲涅槃。三者以無去來及無所取。是則法身不生不滅無生滅故。名爲涅槃。四者此無生滅非言所宣言語斷故。名爲涅槃。五者無有我人。惟法生滅得轉依故。名爲涅槃。六者煩惱隨惑。皆是客塵法性是主。無來無去佛了知故。名爲涅槃。七者眞如是實餘皆虛妄。實性體者卽是眞如。眞如性者卽是如來。名爲涅槃。八者實際之性無有戲論。惟獨如來證實際法戲論永斷。名爲涅槃。九者無生是實生是

虚妄。愚癡之人漂溺生死。如來體實無有虚妄。名爲涅槃。十者不實之法是從緣生。眞實之法不從緣起。如來法身體是眞實。名爲涅槃。善男子。是謂十法說有涅槃。復次善男子。菩薩摩訶薩如是應知。復有十法。能解如來應正等覺眞實理趣說有究竟大般涅槃。云何爲十。一者如來善知施及施果無我我所。此施及果不正分別永除滅故。名爲涅槃。二者如來善知戒及戒果無我我所。此戒及果不正分別永除滅故。名爲涅槃。三者如來善知忍及忍果無我我所。此忍及果不正分別永除滅故。名爲涅槃。四者如來善知勤及勤果無我我所。此勤及果不正分別永除滅故。名爲涅槃。五者如來善知定及定果無我我所。此定及果不正分別永除滅故。名爲涅槃。六者如來善知慧又慧果無我我所。此慧及果不正分別永除滅故。名爲涅槃。七者諸佛如來善能了知一切有情非有情。一切諸法皆無性。不正分別永除滅故。名爲涅槃。八者若自愛者便起追求。由追求故受衆苦惱。諸佛如來除自愛故永絕追求。無追求故名爲涅槃。九者有爲之法皆有數量。無爲法者數量皆除。佛離有爲證無爲法。無數量故。名爲涅槃。十者如來了知有情及法。體性皆空離空非有。空性卽是眞法身故。名爲涅槃。善男子。是謂十法說有涅槃。復次善男子。豈惟如來不般涅槃是爲希有。復有十種希有之法。是如來行。云何爲十。一者生死過失涅槃寂靜。由於生死及以涅槃證平等故。不處流轉不住涅槃。於諸有情不生厭背。是如來行。二者佛於衆生不作是念。此諸愚夫行顚倒見。爲諸煩惱之所纏迫。我今開悟令其解脫。然由往昔慈善根力。於彼有情隨其根性意樂勝解。不起分別任運濟度示敎利喜。盡未來際無有窮盡。是如來行。三者佛無是念。我今演說十二分敎利益有情。然由往昔慈善根力。爲彼有情廣說。乃至盡未來際無有窮盡。是如來行。四者佛無是念。我今往彼城邑聚落。王及大臣婆羅門刹帝利薜舍戍達羅等舍。從其乞食。然由往昔身語意行慣習力故。任運詣彼爲利益事而行乞食。是如來行。五者如來之身無有饑渴。亦無便利羸憊之相。雖行乞取而無所食亦無分別。然爲任運利益有情示有食相。是如來行。六者佛無是念。此諸衆生有上中下。隨彼機性而爲說法。然佛世尊無有分別。隨其器量善應機緣爲彼說法。是如來行。七者佛無是念。此類有情不恭敬我。常於我所出呵罵言。不能與彼共爲言論。彼類有情恭敬於我。常於我所共相讚歎。我當與彼共爲言說。然而如來起慈悲心平等無二。是如來行。八者

其三本俱作得

爲同作於

慣宋作串

諸佛如來.無有愛憎憍慢貪惜及諸煩惱.然而如來常樂寂靜.讚歎少欲離諸諠鬧.是如來行.九者如來無有一法不知不善通達.於一切處鏡智現前無有分別.然而如來見彼有情所作事業.隨彼意轉方便誘引令得出離.是如來行.十者如來若見一分有情得富盛時不生歡喜.見其衰損不起憂戚.然而如來見彼有情修習正行.無礙大慈自然救攝.若見有情修習邪行.無礙大悲自然救攝.是如來行.善男子.如是當知如來應正等覺.說有如是無邊正行.汝等當知是謂涅槃眞實之相.或時見有般涅槃者是權方便.及留舍利令諸有情恭敬供養.皆是如來慈善根力.若供養者於未來世.遠離八難逢値諸佛.遇善知識不失善心.福報無邊速當出離.不爲生死之所纏縛.如是妙行.汝等勤修勿爲放逸.爾時妙幢菩薩.聞佛親說不般涅槃及甚深行.合掌恭敬白言.我今始知如來大師不般涅槃.及留舍利普益衆生.身心踊悅歎未曾有.說是如來壽量品時.無量無數無邊衆生.皆發無等等阿耨多羅三藐三菩提心.時四如來忽然不現.妙幢菩薩禮佛足已.從座而起還其本處

金光明最勝王經卷第一

金光明最勝王經卷第二

〔麗食〕〔宋𢇁〕〔元𢇁〕〔明𢇁〕

大唐三藏沙門義淨奉　制譯

分別三身品第三

爾時虛空藏菩薩摩訶薩。在大衆中從座而起。偏袒右肩右膝著地。合掌恭敬頂禮佛足。以上微妙金寶之花寶幢幡蓋而爲供養白佛言。世尊。云何菩薩摩訶薩於諸如來甚深祕密。如法修行。佛言善男子。諦聽諦聽善思念之。吾當爲汝分別解說。善男子。一切如來有三種身。云何爲三。一者化身。二者應身。三者法身。如是三身具足攝受阿耨多羅三藐三菩提。若正了知速出生死。云何菩薩了知化身。善男子。如來昔在修行地中。爲一切衆生修種種法。如是修習至修行滿。修行力故得大自在。自在力故隨衆生意。隨衆生行。隨衆生界。悉皆了知。不待時不過時。處相應時相應。行相應說法相應。現種種身。是名化身。善男子。云何菩薩了知應身。謂諸如來爲諸菩薩得通達故說於眞諦。爲令解了生死涅槃是一味故。爲除身見衆生怖畏歡喜故。爲無邊佛法而作本故。如實相應如如如如智。本願力故。是身得現具三十二相八十種好項背圓光。是名應身。善男子。云何菩薩摩訶薩。了知法身。爲除諸煩惱等障。爲具諸善法故。唯有如如如如智。是名法身。前二種身。是假名有。此第三身是眞實有。爲前二身而作根本。何以故。離法如如。離無分別智。一切諸佛無有別法。一切諸佛智慧具足。一切煩惱究竟滅盡。得清淨佛地。是故法如如如如智攝一切佛法。復次善男子。一切諸佛利益自他至於究竟。自利益者是法如如。利益他者是如如智。能於自他利益之事。而得自在。成就種種無邊用故。是故分別一切佛法。有無量無邊種種差別。善男子。譬如依止妄想思惟說種種煩惱。說種種業用。說種種果報。如是依法如如。依如如智。說種種佛法。說種種獨覺法。說種種聲聞法。依法如如。依如如智。一切佛法自在成就。是爲第一不可思議。譬如畫空作莊嚴具是難思議。如是依法如如。依如如智。成就佛法亦難思議。善男子。云何法如如如如智。二無分別。而得自在事業

種上三本俱無說字

成就。善男子。譬如如來入於涅槃願自在故。種種事業皆得成就。法如如如如智。自在事成亦復如是。復次菩薩摩訶薩。入無心定依前願力。從禪定起作衆事業。如是二法無有分別自在事成。善男子。譬如日月無有分別。亦如水鏡無有分別。光明亦無分別。三種和合得有影生。如是法如如如如智。亦無分別。以願自在故。衆生有感現應化身。如日月影和合出現。復次善男子。譬如無量無邊水鏡依於光故。空影得現種種異相。空者卽是無相。善男子。如是受化諸弟子等。是法身影。以願力故於二種身現種種相。於法身地無有異相。善男子。依此二身。一切諸佛說有餘涅槃。依此法身說無餘涅槃。何以故。一切餘法究竟盡故。依此三身。一切諸佛說無住處涅槃。爲二身故不住涅槃。離於法身無有別佛。何以故二身不住涅槃。二身假名不實。念念生滅不定住故。數數出現以不定故。法身不爾。是故二身不住涅槃。法身不二是故不住涅槃。故依三身說無住涅槃。善男子。一切凡夫爲三相故有縛有障。遠離三身不至三身。何者爲三。一者遍計所執相。二者依他起相。三者成就相。如是諸相不能解故不能滅故不能淨故。是故不得至於三身。如是三相。能解能滅能淨故。是故諸佛具足三身。善男子。諸凡夫人未能除遣此三心故。遠離三身不能得至。何者爲三。一者起事心。二者依根本心。三者根本心。依諸伏道起事心盡。依法斷道依根本心盡。依最勝道根本心盡。起事心滅故得現化身。依根本心滅故得顯應身。根本心滅故得至法身。是故一切如來具足三身。善男子。一切諸佛於第一身與諸佛同事。於第二身與諸佛同意。於第三身與諸佛同體。善男子。是初佛身隨衆生意有多種故現種種相。是故說多。第二佛身。弟子一意故現一相。是故說一。第三佛身。過一切種相非執相境界。是故說名不一不二。善男子。是第一身。依於應身得顯現故。是第二身。依於法身得顯現故。是法身者。是眞實有無依處故。善男子。如是三身。以有義故而說於常。以有義故說於無常。化身者。恒轉法輪處處隨緣。方便相續不斷絕故。是故說常。非是本故具足大用。不顯現故說爲無常。應身者。從無始來相續不斷。一切諸佛不共之法能攝持故。衆生無盡用亦無盡。是故說常。非是本故以具足用。不顯現故說爲無常。法身者。非是行法無有異相。是根本故猶如虛空。是故說常。善男子。離無分別智。更無勝智。離法如如。無勝境界。是法如如。是慧如如。是二種如如如如不一不異。是故法身。慧淸淨故滅淸淨故。是二淸淨。是故法身具足淸

王三本俱作生

淨。復次善男子。分別三身有四種異。有化身非應身。有應身非化身。有化身亦應身。有非化身亦非應身。何者化身非應身。謂諸如來般涅槃後。以願自在故隨緣利益。是名化身。何者應身非化身。是地前身。何者化身亦應身。謂住有餘涅槃之身。何者非化身非應身。謂是法身。善男子。是法身者。二無所有所顯現故。何者名爲二無所有。於此法身相及相處。二皆是無。非有非無。非一非異。非數非非數。非明非闇。如是如如智不見相及相處。不見非有非無。不見非一非異。不見非數非非數。不見非明非闇。是故當知。境界清淨智慧清淨。不可分別無有中間。爲滅道本故。於此法身能顯如來種種事業。善男子。是身因緣境界處所。果依於本難思議故。若了此義。是身即是大乘。是如來性。是如來藏。依於此身得發初心。修行地心。而得顯現不退地心。亦皆得現一生補處心。金剛之心如來之心。而悉顯現。無量無邊如來妙法。皆悉顯現。依此法身不可思議摩訶三昧。而得顯現。依此法身得現一切大智。是故二身依於三昧依於智慧。而得顯現如此法身。依於自體說常說我。依大三昧故說於樂。依於大智故說清淨。是故如來常住自在安樂清淨。依大三昧。一切禪定首楞嚴等。一切念處。大法念等。大慈大悲一切陀羅尼。一切神通。一切自在一切法平等攝受。如是佛法悉皆出現。依此大智。十力四無所畏。四無礙辯。一百八十不共之法。一切希有不可思議法。悉皆顯現。譬如依如意寶珠無量無邊種種珍寶悉皆得現。如是依大三昧寶。依大智慧寶。能出種種無量無邊諸佛妙法。善男子。如是法身三昧智慧。過一切相不著於相。不可分別非常非斷。是名中道。雖有分別體無分別。雖有三數而無三體。不增不減猶如夢幻。亦無所執亦無能執。法體如如是解脫處。過死王境越生死闇。一切衆生不能修行所不能至。一切諸佛菩薩之所住處。善男子。譬如有人願欲得金。處處求覓遂得金鑛。既得鑛已即便碎之。擇取精者爐中銷鍊。得清淨金隨意迴轉。作諸鐶釧種種嚴具。雖有諸用金性不改。復次善男子。若善男子善女人。求勝解脫修行世善。得見如來及弟子衆。得親近已白佛言。世尊。何者爲善。何者不善。何者正修得清淨行。諸佛如來及弟子衆。見彼問時。如是思惟。是善男子善女人。欲求清淨欲聽正法。即便爲說令其開悟。彼既聞已正念憶持。發心修行得精進力。除嬾惰障滅一切罪。於諸學處離不尊重。息掉悔心入於初地。依初地心除利有情障得入二地。於此地中除不逼惱障入於三地。於此地中除心軟淨障

離同作雜

兎明作兎

入於四地。於此地中除善方便障入於五地。於此地中除見眞俗障入於六地。於此地中除見行相障入於七地。於此地中除不見滅相障入於八地。於此地中除不見生相障入於九地。於此地中除六通障入於十地。於此地中除所知障除根本心入如來地。如來地者由三淨故名極清淨。云何爲三。一者煩惱淨。二者苦淨。三者相淨。譬如眞金鎔銷冶鍊。既燒打已無復塵垢。爲顯金性本清淨故。金體清淨非謂無金。譬如濁水澄渟清淨無復滓穢。爲顯水性本清淨故非謂無水。如是法身與煩惱離苦集除已無復餘習。爲顯佛性本清淨故非謂無體。譬如虛空煙雲塵霧之所障蔽。若除屏已是空界淨非謂無空。如是法身一切衆苦悉皆盡故。說爲清淨非謂無體。譬如有人於睡夢中。見大河水漂泛其身。運手動足截流而渡得至彼岸。由彼身心不懈退故。從夢覺已不見有水彼此岸別。非謂無心。生死妄想既滅盡已。是覺清淨非謂無覺。如是法界一切妄想不復生故。說爲清淨。非是諸佛無其實體。復次善男子。是法身者。惑障清淨能現應身。業障清淨能現化身。智障清淨能現法身。譬如依空出電依電出光。如是依法身故能現應身。依應身故能現化身。由性淨故能現法身。智慧清淨能現應身。三昧清淨能現化身。此三清淨是法如如。不異如如。一味如如。解脫如如。究竟如如。是故諸佛體無有異。善男子。若有善男子善女人。說於如來是我大師。若作如是決定信者。此人卽應深心解了如來之身無有別異。善男子。以是義故。於諸境界不正思惟悉皆除斷。卽知彼法無有二相亦無分別。聖所修行。如如於彼無有二相。正修行故。如是如是一切諸障悉皆除滅。如如一切障滅。如是如是法如如如如智得最清淨。如如法界正智清淨。如是如是一切自在。具足攝受皆得成就。一切諸障悉皆除滅。一切諸障得清淨故。是名眞如正智眞實之相。如是見者是名聖見。是則名爲眞實見佛。何以故。如實得見法眞如故。是故諸佛悉能普見一切如來。何以故。聲聞獨覺已出三界。求眞實境不能知見。如是聖人所不知見。一切凡夫皆生疑惑。顚倒分別不能得度。如兎浮海必不能過。所以者何。力微劣故。凡夫之人亦復如是。不能通達法如如故。然諸如來無分別心。於一切法得大自在。具足清淨深智慧故。是自境界不共他故。是故諸佛如來於無量無邊阿僧祇劫不惜身命。難行苦行方得此身最上無比。不可思議過言說境。是妙寂靜離諸怖畏。善男子。如是知見法眞如者。無生老死壽命無限。無有睡眠亦無飢渴。心常在

抂三本俱作枉

品目同無金鼓二字

琉明作瑠下同

將三本俱作持

惟同作唯

定無有散動。若於如來起諍論心。是則不能見於如來。諸佛所說皆能利益。有聽聞者無不解脫。諸惡禽獸惡人惡鬼。不相逢值由聞法故果報無盡。然諸如來無無記事。一切境界無欲知心。生死涅槃無有異想。如來所記無不決定。諸佛如來四威儀中。無非智攝一切諸法。無有不爲慈悲所攝。無有不爲利益安樂諸衆生者。善男子。若有善男子善女人。於此金光明經聽聞信解。不墮地獄餓鬼傍生阿蘇羅道。常處人天不生下賤。恒得親近諸佛如來聽受正法。常生諸佛淸淨國土。所以者何。由得聞此甚深法故。是善男子善女人。則爲如來已知已記。當得不退阿耨多羅三藐三菩提。若善男子善女人。於此甚深微妙之法一經耳者。當知是人不謗如來不毀正法不輕聖衆。一切衆生未種善根令得種故。已種善根令增長成熟故。一切世界所有衆生。皆勸修行六波羅蜜多。爾時虛空藏菩薩。梵釋四王諸天衆等卽從座起。偏袒右肩合掌恭敬。頂禮佛足白佛言。世尊。若所在處。講說如是金光明王微妙經典。於其國土有四種利益。何者爲四。一者國王軍衆强盛無諸怨敵。離於疾病壽命延長。吉祥安樂正法興顯。二者中宮妃后王子諸臣和悅無諍。離於諂佞王所愛重。三者沙門婆羅門及諸國人修行正法。無病安樂無抂死者。於諸福田悉皆修立。四者於三時中四大調適。常爲諸天增加守護。慈悲平等無傷害心。令諸衆生歸敬三寶。皆願修習菩提之行。是爲四種利益之事。世尊。我等亦常爲弘經故。隨逐如是持經之人所在住處爲作利益。佛言。善哉善哉。善男子。如是如是。汝等應當勤心流布此妙經王。則令正法久住於世

金光明最勝王經夢見金鼓懺悔品第四

爾時妙幢菩薩。親於佛前聞妙法已。歡喜踊躍一心思惟還至本處。於夜夢中見大金鼓。光明晃耀猶如日輪。於此光中得見十方無量諸佛。於寶樹下坐琉璃座。無量百千大衆圍繞而爲說法。見一婆羅門桴擊金鼓出大音聲。聲中演說微妙伽陀明懺悔法。妙幢聞已。悉皆憶持繫念而住。至天曉已與無量百千大衆圍繞。將諸供具出王舍城。詣鷲峯山至世尊所。禮佛足已布設香花。右遶三帀退坐一面。合掌恭敬瞻仰尊顏白佛言。世尊。我於夢中見婆羅門以手執桴擊妙金鼓出大音聲。聲中演說微妙伽陀明懺悔法。我皆憶持。惟願世尊降大慈悲聽我

桴同作枹

所說。卽於佛前而說頌曰

我於昨夜中　夢見大金鼓　其形極姝妙　周遍有金光　猶如盛日輪　光明皆普耀　充滿十方界
咸見於諸佛　在於寶樹下　各處瑠璃座　無量百千衆　恭敬而圍繞　有一婆羅門　以桴擊金鼓
於其鼓聲內　說此妙伽陀

金光明鼓出妙聲　徧至三千大千界　能滅三塗極重罪　及以人中諸苦厄　由此金鼓聲威力
永滅一切煩惱障　斷除怖畏令安隱　譬如自在牟尼尊　佛於生死大海中　積行修成一切智
能令衆生覺品具　究竟咸歸功德海　由此金鼓出妙聲　普令聞者獲梵響　證得無上菩提果
常轉淸淨妙法輪　住壽不可思議劫　隨機說法利群生　能斷煩惱衆苦流　貪瞋癡等皆除滅
若有衆生處惡趣　大火猛焰周遍身　若得聞是妙鼓音　卽能離苦歸依佛　皆得成就宿命智
能憶過去百千生　悉皆正念牟尼尊　得聞如來甚深敎　由聞金鼓勝妙音　常得親近於諸佛
悉能捨離諸惡業　純修淸淨諸善品　一切天人有情類　殷重至誠所願者　得聞金鼓妙音聲
能令所求皆滿足　衆生墮在無間獄　猛火炎熾苦焚身　無有救護處輪廻　聞者能令苦除滅
人天餓鬼傍生中　所有現受諸苦難　得聞金鼓發妙響　皆蒙離苦得解脫

現在十方界　常住兩足尊　願以大悲心　哀愍憶念我　衆生無歸依　亦無有救護　爲如是等類
能作大歸依　我先所作罪　極重諸惡業　今對十力前　至心皆懺悔　我不信諸佛　亦不敬尊親
不務修衆善　常造諸惡業　或自恃尊高　種姓及財位　盛年行放逸　常造諸惡業　心恒起邪念
口陳於惡言　不見於過罪　常造諸惡業　恒作愚夫行　無明闇覆心　隨順不善友　常造諸惡業
或因諸戲樂　或復懷憂惱　爲貪瞋所纏　故我造諸惡　親近不善人　及由慳嫉意　貧窮行諂誑
故我造諸惡　雖不樂衆過　由有怖畏故　及不得自在　故我造諸惡　或爲躁動心　或因瞋恚恨
及以飢渴惱　故我造諸惡　由飮食衣服　及貪愛女人　煩惱火所燒　故我造諸惡　於佛法僧衆

不生恭敬心　作如是衆罪　我今悉懺悔　於獨覺菩薩　亦無恭敬心　作如是衆罪　我今悉懺悔
無知謗正法　不孝於父母　作如是衆罪　我今悉懺悔　由愚癡憍慢　及以貪瞋力　作如是衆罪
我今悉懺悔　我於十方界　供養無數佛　當願拔衆生　令離諸苦難　願一切有情　皆令住十地
福智圓滿已　成佛導群迷　我爲諸衆生　苦行百千劫　以大智慧力　皆令出苦海　我爲諸含識
演說甚深經　最勝金光明　能除諸惡業　若人百千劫　造諸極重罪　暫時能發露　衆惡盡消除
依此金光明　作如是懺悔　由斯能速盡　一切諸苦業　勝定百千種　不思議總持　根力覺道支
修習常無倦　我當至十地　具足珍寶處　圓滿佛功德　濟渡生死流　我於諸佛海　甚深功德藏
妙智難思議　皆令得具足　唯願十方佛　觀察護念我　皆以大悲心　哀受我懺悔　我於多劫中
所造諸惡業　由斯生苦惱　哀愍願消除　我造諸惡業　常生憂怖心　於四威儀中　曾無歡樂想
諸佛具大悲　能除衆生怖　願受我懺悔　令得離憂苦　我有煩惱障　及以諸報業　願以大悲水
洗濯令清淨　我先作諸罪　及現造惡業　至心皆發露　咸願得蠲除　未來諸惡業　防護令不起
設令有違者　終不敢覆藏　身三語四種　意業復有三　繫縛諸有情　無始恒相續　由斯三種行
造作十惡業　如是衆多罪　我今皆懺悔　我造諸惡業　苦報當自受　今於諸佛前　至誠皆懺悔
於此贍部洲　及他方世界　所有諸善業　今我皆隨喜　願離十惡業　修行十善道　安住十地中
常見十方佛　我以身語意　所修福智業　願以此善根　速成無上慧
我今親對十力前　發露衆多苦難事　凡愚迷惑三有難　恒造極重惡業難　我所積集欲邪難
常起貪愛流轉難　於此世間耽著難　一切愚夫煩惱難　狂心散動顚倒難　及以親近惡友難
於生死中貪染難　瞋癡闇鈍造罪難　生八無暇惡處難　未曾積集功德難　我今皆於最勝前
懺悔無邊罪惡業　我今歸依諸善逝　我禮德海無上尊　如大金山照十方　唯願慈悲哀攝受
身色金光淨無垢　目如淸淨紺琉璃　吉祥威德名稱尊　大悲慧日除衆闇　佛日光明常普遍

渡三本俱作度

頗黎明作玻瓈
瀑三本俱作暴

善淨無垢離諸塵　牟尼月照極清涼　能除衆生煩惱熱　三十二相遍莊嚴　八十隨好皆圓滿
福德難思無與等　如日流光照世間　色如琉璃淨無垢　猶如滿月處虛空　妙頗黎網映金軀
種種光明以嚴飾　於生死苦瀑流內　老病憂愁水所漂　如是苦海難堪忍　佛日舒光令永竭
我今稽首一切智　三千世界希有尊　光明晃耀紫金身　種種妙好皆嚴飾　如大海水量難知
大地微塵不可數　如妙高山叵稱量　亦如虛空無有際　諸佛功德亦如是　一切有情不能知
於無量劫諦思惟　無有能知德海岸　盡此大地諸山嶽　析如微塵能算知　毛端渧滴尚可量
佛之功德無能數　一切有情皆共讚　世尊名稱諸功德　清淨相好妙莊嚴　不可稱量知分齊
我之所有衆善業　願得速成無上尊　廣說正法利群生　悉令解脫於衆苦　降伏大力魔軍衆
當轉無上正法輪　久住劫數難思議　充足衆生甘露味　猶如過去諸最勝　六波羅蜜皆圓滿
滅諸貪欲及瞋癡　降伏煩惱除衆苦　願我常得宿命智　能憶過去百千生　亦常憶念牟尼尊
得聞諸佛甚深法　願我以斯諸善業　奉事無邊最勝尊　遠離一切不善因　恒得修行眞妙法
一切世界諸衆生　悉皆離苦得安樂　所有諸根不具足　令彼身相皆圓滿　若有衆生遭病苦
身形羸瘦無所依　咸令病苦得消除　諸根色力皆充滿　若犯王法當刑戮　衆苦逼迫生憂惱
彼受如斯極苦時　無有歸依能救護　若受鞭杖枷鏁繫　種種苦具切其身　無量百千憂惱時
逼迫身心無蹔樂　皆令得免於繫縛　及以鞭杖苦楚事　將臨刑者得命全　衆苦皆令永除盡
若有衆生飢渴逼　令得種種殊勝味　盲者得視聾者聞　跛者能行瘂能語　貧窮衆生獲寶藏
倉庫盈溢無所乏　皆令得受上妙樂　無一衆生受苦惱　一切人天皆樂見　容儀溫雅甚端嚴
悉皆現受無量樂　受用豐饒福德具　隨彼衆生念伎樂　衆妙音聲皆現前　念水卽現清涼池
金色蓮花汎其上　隨彼衆生心所念　飲食衣服及牀敷　金銀珍寶妙琉璃　瓔珞莊嚴皆具足
勿令衆生聞惡響　亦復不見有相違　所受容貌悉端嚴　各各慈心相愛樂　世間資生諸樂具

田明作因

隨心念時皆滿足　所得珍財無悋惜　分布施與諸衆生　燒香末香及塗香　衆妙雜花非一色
每日三時從樹墮　隨心受用生歡喜　普願衆生咸供養　十方一切最勝尊　三乘清淨妙法門
菩薩獨覺聲聞衆　常願勿處於卑賤　不墮無暇八難中　生在有暇人中尊　恒得親承十方佛
願得常生富貴家　財寶倉庫皆盈滿　顏貌名稱無與等　壽命延長經劫數　悉願女人變爲男
勇健聰明多智慧　一切常行菩薩道　勤修六度到彼岸　常見十方無量佛　寶王樹下而安處
處妙琉璃師子座　恒得親承轉法輪　若於過去及現在　輪廻三有造諸業　能招可厭不善趣
願得消滅永無餘　一切衆生於有海　生死羂網堅牢縛　願以智劍爲斷除　離苦速證菩提處
衆生於此贍部內　或於他方世界中　所作種種勝福田　我今皆悉生隨喜　以此隨喜福德事
及身語意造衆善　願此勝業常增長　速證無上大菩提　所有禮讚佛功德　深心清淨無瑕穢
廻向發願福無邊　當超惡趣六十劫　若有男子及女人　婆羅門等諸勝族　合掌一心讚歎佛
生生常憶宿世事　諸根清淨身圓滿　殊勝功德皆成就　願於未來所生處　常得人天共瞻仰
非於一佛十佛所　修諸善根今得聞　百千佛所種善根　方得聞斯懺悔法

爾時世尊聞此說已讚妙幢菩薩言.善哉善哉.善男子.如汝所夢金鼓出聲.讚歎如來眞實功德.并懺悔法若有聞者.獲福甚多廣利有情滅除罪障.汝今應知此之勝業.皆是過去讚歎發願宿習因緣.及由諸佛威力加護.此之因緣常爲汝說.時諸大衆聞是法已.咸皆歡喜信受奉行

金光明最勝王經卷第二

金光明最勝王經卷第三

〔麗食〕〔宋場〕〔元場〕〔明場〕

大唐三藏沙門義淨奉　制譯

滅業障品第五

爾時世尊住正分別。入於甚深微妙靜慮。從身毛孔放大光明無量百千種種諸色。諸佛刹土悉現光中。十方恒河沙校量譬喩所不能及。五濁惡世爲光所照。是諸衆生作十惡業五無間罪。誹謗三寶不孝尊親。輕慢師長婆羅門衆。應墮地獄餓鬼傍生。彼各蒙光至所住處。是諸有情見斯光已。因光力故皆得安樂。端正姝妙色相具足。福智莊嚴得見諸佛。是時帝釋一切天衆。及恒河女神幷諸大衆。蒙光希有皆至佛所。右遶三帀退坐一面。爾時天帝釋。承佛威力卽從座起。偏袒右肩右膝著地。合掌向佛而白佛言。世尊。云何善男子善女人。願求阿耨多羅三藐三菩提修行大乘。攝受一切邪倒有情。曾所造作業障罪者。云何懺悔當得除滅。佛告天帝釋。善哉善哉善男子。汝今修行欲爲無量無邊衆生。令得淸淨解脫安樂。哀愍世間福利一切。若有衆生由業障故造諸罪者。應當策勵晝夜六時。偏袒右肩右膝著地。合掌恭敬一心專念。口自說言。歸命頂禮現在十方一切諸佛。已得阿耨多羅三藐三菩提者。轉妙法輪持照法輪。雨大法雨。擊大法鼓。吹大法螺。建大法幢。秉大法炬。爲欲利益安樂諸衆生故。常行法施誘進群迷。令得大果證常樂故。如是等諸佛世尊。以身語意稽首歸誠至心禮敬。彼諸世尊以眞實慧。以眞實眼。眞實證明。眞實平等。悉知悉見一切衆生善惡之業。我從無始生死以來隨惡流轉。共諸衆生造業障罪。爲貪瞋癡之所纏縛。未識佛時。未識法時。未識僧時。未識善惡。由身語意造無間罪。惡心出佛身血。誹謗正法。破和合僧。殺阿羅漢。殺害父母。身三語四意三種行。造十惡業。自作敎他見作隨喜。於諸善人橫生毀謗。斗秤欺誑以僞爲眞。不淨飮食施與一切。於六道中所有父母更相惱害。或盜窣堵波物四方僧物現前僧物。自在而用。世尊法律不樂奉行。師長敎示不相隨順。見行聲聞獨覺大乘行者。喜生罵辱。令諸行人心生悔惱。見有

皆三本俱作咸　○已同作所　○已同作亦

天宋元俱作大　○衆下三本俱無天字　○果下同無天字　○現下同有天字

言明作曰

勝已便懷嫉妬。法施財施常生慳惜。無明所覆邪見惑心。不修善因令惡增長。於諸佛所而起誹謗。法說非法非法說法。如是衆罪。佛以眞實慧眞實眼眞實證明眞實平等。悉知悉見。我今歸命對諸佛前。皆悉發露不敢覆藏。未作之罪更不復作。已作之罪今皆懺悔。所作業障。應墮惡道地獄傍生餓鬼之中阿蘇羅衆及八難處。願我此生所有業障皆得消滅。所有惡報未來不受。亦如過去諸大菩薩修菩提行。所有業障悉已懺悔。我之業障今亦懺悔。皆悉發露不敢覆藏。已作之罪願得除滅。未來之惡更不敢造。亦如未來諸大菩薩修菩提行。所有業障悉皆懺悔。我之業障今亦懺悔。皆悉發露不敢覆藏。已作之罪願得除滅。未來之惡更不敢造。亦如現在十方世界諸大菩薩修菩提行。所有業障悉已懺悔。我之業障今亦懺悔。皆悉發露不敢覆藏。已作之罪願得除滅。未來之惡更不敢造。善男子。以是因緣若有造罪。一刹那中不得覆藏。何況一日一夜乃至多時。若有犯罪欲求淸淨心懷愧恥。信於未來必有惡報。生大恐怖應如是懺悔。如人被火燒頭燒衣救令速滅。火若未滅心不得安。若人犯罪亦復如是。卽應懺悔令速除滅。若有願生富樂之家多饒財寶。復欲發意修習大乘。亦應懺悔滅除業障。欲生豪貴婆羅門種刹帝利家。及轉輪王七寶具足。亦應懺悔滅除業障。善男子。若有欲生四天王衆天。三十三天。夜摩天。覩史多天。樂變化天。他化自在天。亦應懺悔滅除業障。若欲生梵衆梵輔大梵天。少光無量光極光淨天。少淨無量淨遍淨天。無雲福生廣果天無煩無熱善現善見色究竟天。亦應懺悔滅除業障。若欲求預流果一來果不還果阿羅漢果。亦應懺悔滅除業障。若欲願求三明六通聲聞獨覺自在菩提。至究竟地求一切智智淨智。不思議智不動智。三藐三菩提正遍智者。亦應懺悔滅除業障。何以故。善男子。一切諸法從因緣生。如來所說。異相生。異相滅。因緣異故。如是過去諸法皆已滅盡。所有業障無復遺餘。是諸行法未得現生而今得生。未來業障更不復起。何以故。善男子。一切法空。如來所說無有我人衆生壽者。亦無生滅亦無行法。善男子。一切諸法皆依於本亦不可說。何以故。過一切相故。若有善男子善女人。如是入於微妙眞理生信敬心。是名無衆生而有於本。以是義故。說於懺悔滅除業障。善男子。若人成就四法。能除業障永得淸淨。云何爲四。一者不起邪心正念成就。二者於甚深理不生誹謗。三者於初行菩薩起一切智心。四者於諸衆生起慈無量。是謂爲四。爾時世尊而說頌言

藥同作樂
習三本俱作集
惟同作唯

專心護三業　不誹謗深法　作一切智想　慈心淨業障

善男子。有四業障難可滅除。云何為四。一者於菩薩律儀犯極重惡。二者於大乘經心生誹謗。三者於自善根不能增長。四者貪著三有無出離心。復有四種對治業障。云何為四。一者於十方世界一切如來。至心親近說一切罪。二者為一切衆生。勸請諸佛說深妙法。三者隨喜一切衆生所有功德。四者所有一切功德善根。悉皆迴向阿耨多羅三藐三菩提。爾時天帝釋白佛言。世尊。世間所有男子女人。於大乘行有能行者有不行者。云何能得隨喜一切衆生功德善根。佛言。善男子。若有衆生雖於大乘未能修習。然於晝夜六時。偏袒右肩右膝著地。合掌恭敬一心專念。作隨喜時得福無量。應作是言。十方世界一切衆生。現在修行施戒心慧。我今皆悉深生隨喜。由作如是隨喜福故。必當獲得尊重殊勝無上無等最妙之果。如是過去未來一切衆生。所有善根皆悉隨喜。又於現在初行菩薩發菩提心所有功德。過百大劫行菩薩行。有大功德獲無生忍。至不退轉一生補處。如是一切功德之蘊。皆悉至心隨喜讚歎。過去未來一切菩薩。所有功德隨喜讚歎亦復如是。復於現在十方世界。一切諸佛應正遍知證妙菩提。為度無邊諸衆生故。轉無上法輪。行無礙法施。擊法鼓吹法螺。建法幢雨法雨。哀愍勸化一切衆生。咸令信受皆蒙法施。悉得充足無盡安樂。又復所有菩薩聲聞獨覺功德積集善根。若有衆生未具如是諸功德者。悉令具足。我皆隨喜。如是過去未來諸佛菩薩聲聞獨覺所有功德。亦皆至心隨喜讚歎。善男子。如是隨喜當得無量功德之聚。如恒河沙三千大千世界所有衆生。皆斷煩惱成阿羅漢。若有善男子善女人。盡其形壽常以上妙衣服飲食臥具醫|藥。而為供養。如是功德不及如前隨喜功德千分之一。何以故。供養功德有數有量。不攝一切諸功德故。隨喜功德無量無數。能攝三世一切功德。是故若人欲求增長勝善根者。應修如是隨喜功德。若有女人願轉女身為男子者。亦應修|習隨喜功德。必得隨心現成男子。爾時天帝釋白佛言。世尊。已知隨喜功德。勸請功德|惟願為說。欲令未來一切菩薩當轉法輪現在菩薩正修行故。佛告帝釋。若有善男子善女人。願求阿耨多羅三藐三菩提者。應當修行聲聞獨覺大乘之道。是人當於晝夜六時。如前威儀一心專念作如是言。我今歸依十方一切諸佛世尊已得阿耨多羅三藐三菩提未轉無上法輪欲捨報身入涅槃者。我皆至誠頂禮

闓元明俱作憒

勸請轉大法輪。雨大法雨。然大法燈。照明理趣施無礙法。莫般涅槃久住於世。度脫安樂一切衆生。如前所說乃至無盡安樂。我今以此勸請功德。迴向阿耨多羅三藐三菩提。如過去未來現在諸大菩薩勸請功德迴向菩提。我亦如是勸請功德。迴向無上正等菩提。善男子。假使有人以三千大千世界滿中七寶供養如來。若復有人勸請如來轉大法輪所得功德。其福勝彼。何以故。彼是財施此是法施。善男子。且置三千大千世界七寶布施。若人以滿恒河沙數大千世界七寶。供養一切諸佛。勸請功德亦勝於彼。由其法施有五勝利。云何爲五。一者法施兼利自他。財施不爾。二者法施能令衆生出於三界。財施之福不出欲界。三者法施能淨法身。財施但唯增長於色。四者法施無窮財施有盡。五者法施能斷無明。財施唯伏貪愛。是故善男子。勸請功德無量無邊難可譬喩。如我昔行菩薩道時。勸請諸佛轉大法輪。由彼善根。是故今日一切帝釋諸梵王等。勸請於我轉大法輪。善男子。請轉法輪爲欲度脫安樂諸衆生故。我於往昔爲菩提行。勸請如來久住於世莫般涅槃。依此善根我得十力四無所畏。四無礙辯大慈大悲。證得無數不共之法。我當入於無餘涅槃。我之正法久住於世。我法身者。清淨無比種種妙相。無量智慧無量自在。無量功德難可思議。一切衆生皆蒙利益。百千萬劫說不能盡。法身攝藏一切諸法。一切諸法不攝法身。法身常住不墮常見。雖復斷滅亦非斷見。能破衆生種種異見。能生衆生種種眞見。能解一切衆生之縛。無縛可解。能植衆生諸善根本。未成熟者令成熟。已成熟者令解脫。無作無動遠離闓鬧。寂靜無爲自在安樂。過於三世能現三世。出於聲聞獨覺之境。諸大菩薩之所修行。一切如來體無有異。此等皆由勸請功德善根力故。如是法身我今已得。是故若有欲得阿耨多羅三藐三菩提者。於諸經中一句一頌爲人解說。功德善根尙無限量。何況勸請如來轉大法輪。久住於世莫般涅槃。時天帝釋復白佛言。世尊。若善男子善女人。爲求阿耨多羅三藐三菩提故。修三乘道所有善根。云何迴向一切智智。佛告天帝釋。善男子。若有衆生欲求菩提修三乘道所有善根願迴向者。當於晝夜六時慇重至心作如是說。我從無始生死以來。於三寶所修行成就所有善根。乃至施與傍生一摶之食。或以善言和解諍訟。或受三歸及諸學處。或復懺悔勸請隨喜所有善根。我今作意悉皆攝取。迴施一切衆生無悔悋心。是解脫分善根所攝。如佛世尊之所知見。不可稱量無礙淸淨。如是所有功

百元明俱作日

男及女上三本俱無善字

踰元明俱作踰

脫三本俱作解

德善根。悉以廻施一切衆生。不住相心不捨相心我亦如是功德善根。悉以廻施一切衆生。願皆獲得如意之手。撝空出寶滿衆生願。富樂無盡智慧無窮。妙法辯才悉皆無滯。共諸衆生同證阿耨多羅三藐三菩提。得一切智。因此善根更復出生無量善法。亦皆廻向無上菩提。又如過去諸大菩薩。修行之時功德善根。悉皆廻向一切種智。現在未來亦復如是。然我所有功德善根。亦皆廻向阿耨多羅三藐三菩提。是諸善根願共一切衆生俱成正覺。如餘諸佛坐於道場菩提樹下。不可思議無礙淸淨。住於無盡法藏陀羅尼首楞嚴定。破魔波旬無量兵衆。應見覺知應可通達。如是一切一刹那中悉皆照了。於後夜中獲甘露法證甘露義。我及衆生願皆同證如是妙覺。猶如無量壽佛。勝光佛。妙光佛。阿閦佛。功德善光佛。師子光明佛|百光明住網光明佛。寶相佛。寶燄佛。燄明佛。燄盛光明佛。吉祥上王佛。微妙聲佛。妙莊嚴佛。法幢佛。上勝身佛。可愛色身佛。光明遍照佛。梵淨王佛。上性佛。如是等如來應正遍知。過去未來及以現在。示現應化得阿耨多羅三藐三菩提。轉無上法輪爲度衆生。我亦如是廣說如上。善男子。若有淨信男子女人。於此金光明最勝王經滅業障品。受持讀誦憶念不忘。爲他廣說。得無量無邊大功德聚。譬如三千大千世界所有衆生。一時皆得成就人身。得人身已成獨覺道。若有|善男子|善女人。盡其形壽恭敬尊重。四事供養一一獨覺。各施七寶如須彌山。此諸獨覺入涅槃後。皆以珍寶起塔供養。其塔高廣十二|踰繕那。以諸花香寶幢幡蓋常爲供養。善男子。於意云何。是人所獲功德寧爲多不。天帝釋言。甚多。世尊。善男子。若復有人於此金光明微妙經典衆經之王滅業障品。受持讀誦憶念不忘爲他廣說。所獲功德於前所說供養功德。百分不及一。百千萬億分。乃至校量譬喩所不能及。何以故。是善男子善女人。住正行中。勸請十方一切諸佛。轉無上法輪。皆爲諸佛歡喜讃歎。善男子。如我所說。一切施中法施爲勝。是故善男子。於三寶所設諸供養不可爲比。勸受三歸持一切戒無有毀犯。三業不空不可爲比。一切世界一切衆生。隨力隨能隨所願樂。於三乘中勸發菩提心不可爲比。於三世中一切世界。所有衆生皆得無礙。速令成就無量功德。不可爲比。三世刹土一切衆生。令無障礙得三菩提。不可爲比。三世刹土一切衆生。勸令速出四惡道苦。不可爲比。三世刹土一切衆生。勸令除滅極重惡業。不可爲比。一切苦惱勸令解脫。不可爲比。一切怖畏苦惱逼切。皆令得|脫。不可爲比。三世佛

令明作合

應下三本俱無供字

前一切衆生所有功德。勸令隨喜發菩提願。不可爲比。勸除惡行罵辱之業。一切功德皆願成就。所在生中。勸請供養尊重讚歎一切三寶。勸請衆生淨修福行。成滿菩提不可爲比。是故當知。勸請一切世界三世三寶。勸請滿足六波羅蜜。勸請轉於無上法輪。勸請住世經無量劫。演說無量甚深妙法。功德甚深無能比者。爾時天帝釋及恒河女神。無量梵王。四大天衆從座而起。偏袒右肩右膝著地合掌頂禮白佛言。世尊。我等皆得聞是金光明最勝王經。今悉受持讀誦通利。爲他廣說。依此法住。何以故。世尊。我等欲求阿耨多羅三藐三菩提。隨順此義種種勝相。如法行故。爾時梵王及天帝釋等。於說法處皆以種種曼陀羅花而散佛上。三千大千世界地皆大動。一切天鼓及諸音樂不鼓自鳴。放金色光遍滿世界出妙音聲。時天帝釋白佛言。世尊。此等皆是金光明經威神之力。慈悲普救種種利益種種增長菩薩善根。滅諸業障。佛言。如是如是如汝所說。何以故。善男子。我念往昔過無量百千阿僧祇劫。有佛名寶王大光照如來應正遍知。出現於世。住世六百八十億劫。爾時寶王大光照如來。爲欲度脫人天釋梵沙門婆羅門一切衆生令安樂故。當出現時初會說法。度百千億億萬衆。皆得阿羅漢果。諸漏已盡三明六通自在無礙。於第二會。復度九十千億億萬衆。皆得阿羅漢果。諸漏已盡三明六通自在無礙。於第三會。復度九十八千億億萬衆。皆得阿羅漢果。圓滿如上。善男子。我於爾時作女人身。名福寶光明。於第三會。親近世尊。受持讀誦是金光明經。爲他廣說。求阿耨多羅三藐三菩提故。時彼世尊爲我授記。此福寶光明女。於未來世當得作佛。號釋迦牟尼如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。捨女身後。從是以來越四惡道。生人天中受上妙樂。八十四百千生作轉輪王。至于今日得成正覺。名稱普聞遍滿世界。時會大衆忽然皆見寶王大光照如來。轉無上法輪說微妙法。善男子。去此索訶世界。東方過百千恒河沙數佛土。有世界名寶莊嚴。其寶王大光照如來。今現在彼未般涅槃。說微妙法廣化群生。汝等見者卽是彼佛。善男子。若有善男子善女人。聞是寶王大光照如來名號者。於菩薩地得不退轉至大涅槃。若有女人聞是佛名者。臨命終時得見彼佛來至其所。既見佛已究竟不復更受女身。善男子。是金光明微妙經典種種利益。種種增長菩薩善根。滅諸業障。善男子。若有苾芻苾芻尼。鄔波索迦鄔波斯迦。隨在何處。爲人講說是金光明微妙經典。於其國土皆

獲四種福利善根。云何爲四。一者國王無病離諸災厄。二者壽命長遠無有障礙。三者無諸怨敵兵衆勇健。四者安隱豐樂正法流通。何以故。如是人王常爲釋梵四王藥叉之衆共守護故。爾時世尊告天衆曰。善男子。是事實不。是時無量釋梵四王及藥叉衆俱時同聲答世尊言。如是如是。若有國王講宣讀誦此妙經王。是諸國主我等四王常來擁護行住共俱。其王若有一切災障及諸怨敵。我等四王皆使消殄。憂愁疾疫亦令除差。增益壽命感應禎祥。所願遂心恒生歡喜。我等亦能令其國中所有軍兵悉皆勇健。佛言。善哉善哉。善男子。如汝所說汝當修行。何以故。是諸國主如法行時。一切人民隨王修習如法行者。汝等皆蒙色力勝利。宮殿光明眷屬強盛。時釋梵等白佛言。如是世尊。佛言。若有講讀此妙經典流通之處。於其國中大臣輔相有四種益。云何爲四。一者更相親穆尊重愛念。二者常爲人王心所愛重。亦爲沙門婆羅門大國小國之所遵敬。三者輕財重法不求世利。嘉名普暨衆所欽仰。四者壽命延長安隱快樂。是名四種利益。若有國土宣說是經。沙門婆羅門得四種勝利。云何爲四。一者衣服飲食臥具醫藥無所乏少。二者皆得安心思惟讀誦。三者依於山林得安樂住。四者隨心所願皆得滿足。是名四種勝利。若有國土宣說是經。一切人民皆得豐樂無諸疾疫。商估往還多獲寶貨具足勝福。是名種種功德利益。爾時梵釋四天王及諸大衆白佛言。世尊。如是經典甚深之義若現在者。當知如來三十七種助菩提法住世未滅。若是經典滅盡之時。正法亦滅。佛言。如是如是。善男子。是故汝等於此金光明經一句一頌一品一部。皆當一心正讀誦正聞持正思惟正修習。爲諸衆生廣宣流布長夜安樂福利無邊。時諸大衆聞佛說已。咸蒙勝益歡喜受持

主三本俱作王

讀同作誦

王元作主

四下三本俱無種利二字

金光明最勝王經卷第三

金光明最勝王經卷第四

〔麗食〕〔宋場〕〔元場〕〔明場〕

大唐三藏沙門義淨奉　制譯

品目淨上明無最字

最淨地陀羅尼品第六

爾時師子相無礙光燄菩薩。與無量億衆從座而起。偏袒右肩右膝著地。合掌恭敬頂禮佛足。以種種花香寶幢幡蓋。而供養已白佛言。世尊。以幾因緣得菩提心。何者是菩提心。世尊。卽於菩提現在心不可得。未來心不可得。過去心不可得。離於菩提菩提心亦不可得。菩提者不可言說。心亦無色無相。無有事業非可造作。衆生亦不可得亦不可知。世尊。云何諸法甚深之義。而可得知。佛言。善男子。如是如是。菩提微妙事業造作皆不可得。若離菩提菩提心亦不可得。菩提者不可說。心亦不可說。無色相無事業。一切衆生亦不可得。何以故。菩提及心同眞如故。能證所證皆平等故。非無諸法而可了知。善男子。菩薩摩訶薩如是知者。乃得名爲通達諸法善說菩提及菩提心。菩提心者。非過去非未來非現在。心亦如是。衆生亦如是。於中二相實不可得。何以故。以一切法皆無生故。菩提不可得。菩提名亦不可得。衆生衆生名不可得。聲聞聲聞名不可得。獨覺獨覺名不可得。菩薩菩薩名不可得。佛佛名不可得。行非行不可得。行非行名不可得。以不可得故。於一切寂靜法中而得安住。此依一切功德善根而得生起。善男子。譬如寶須彌山王饒益一切。此菩提心利衆生故。是名第一布施波羅蜜因。善男子。譬如大地持衆物故。是名第二持戒波羅蜜因。譬如師子有大威力。獨步無畏離驚恐故。是名第三忍辱波羅蜜因。譬如風輪那羅延力。勇壯速疾心不退故。是名第四勤策波羅蜜因。譬如七寶樓觀有四階道。清涼之風來吹四門受安隱樂。靜慮法藏求滿足故。是名第五靜慮波羅蜜因。譬如日輪光耀熾盛。此心速能破滅生死無明闇故。是名第六智慧波羅蜜因。譬如商主能令一切心願滿足。此心能度生死險道獲功德寶故。是名第七方便勝智波羅蜜因。譬如淨月圓滿無翳。此心能於一切境界清淨具足故。是名第八願波羅蜜因。譬如轉輪聖王主兵寶臣隨

生元作主

伎三本俱作技

就同作熟

想是同作相心

意自在。此心善能莊嚴淨佛國土。無量功德廣利群生故。是名第九力波羅蜜因。譬如虛空及轉輪聖王。此心能於一切境界無有障礙。於一切處皆得自在至灌頂位故。是名第十智波羅蜜因。善男子。是名菩薩摩訶薩十種菩提心因。如是十因汝當修學。善男子。依五種法。菩薩摩訶薩成就布施波羅蜜。云何爲五。一者信根。二者慈悲。三者無求欲心。四者攝受一切衆生。五者願求一切智智。善男子。是名菩薩摩訶薩成就布施波羅蜜。善男子。復依五法。菩薩摩訶薩成就持戒波羅蜜。云何爲五。一者三業淸淨。二者不爲一切衆生作煩惱因緣。三者閉諸惡道開善趣門。四者過於聲聞獨覺之地。五者一切功德皆悉滿足。善男子。是名菩薩摩訶薩成就持戒波羅蜜。善男子。復依五法。菩薩摩訶薩成就忍辱波羅蜜。云何爲五。一者能伏貪瞋煩惱。二者不惜身命不求安樂止息之想。三者思惟往業遭苦能忍。四者發慈悲心成就衆生諸善根故。五者爲得甚深無生法忍。善男子。是名菩薩摩訶薩成就忍辱波羅蜜。善男子。復依五法。菩薩摩訶薩成就勤策波羅蜜。云何爲五。一者與諸煩惱不樂共住。二者福德未具不受安樂。三者於諸難行苦行之事不生厭心。四者以大慈悲攝受利益。方便成熟一切衆生。五者願求不退轉地。善男子。是名菩薩摩訶薩成就勤策波羅蜜。善男子。復依五法。菩薩摩訶薩成就靜慮波羅蜜。云何爲五。一者於諸善法攝令不散故。二者常願解脫不著二邊故。三者願得神通成就衆生諸善根故。四者爲淨法界蠲除心垢故。五者爲斷衆生煩惱根本故。善男子。是名菩薩摩訶薩成就靜慮波羅蜜。善男子。復依五法。菩薩摩訶薩成就智慧波羅蜜。云何爲五。一者常於一切諸佛菩薩及明智者。供養親近不生厭背。二者諸佛如來說甚深法。心常樂聞無有厭足。三者眞俗勝智樂善分別。四者見修煩惱咸速斷除。五者世間伎術五明之法皆悉通達。善男子。是名菩薩摩訶薩成就智慧波羅蜜。善男子。復依五法。菩薩摩訶薩成就方便波羅蜜。云何爲五。一者於一切衆生意樂煩惱心行差別悉皆通達。二者無量諸法對治之門心皆曉了。三者大慈悲定出入自在。四者於諸波羅蜜多皆願修行成就滿足。五者一切佛法皆願了達攝受無遺。善男子。是名菩薩摩訶薩成就方便勝智波羅蜜。善男子。復依五法。菩薩摩訶薩成就願波羅蜜。云何爲五。一者於一切法從本以來不生不滅。非有非無心得安住。二者觀一切法最妙理趣離垢淸淨心得安住。三者過一切想是本眞如無作無行不異不動

心得安住。四者爲欲利益諸衆生事。於俗諦中心得安住。五者於奢摩他毘鉢舍那。同時運行心得安住。善男子。是名菩薩摩訶薩成就願波羅蜜。善男子復依五法。菩薩摩訶薩成就力波羅蜜。云何爲五。一者以正智力能了一切衆生心行善惡。二者能令一切衆生。入於甚深微妙之法。三者一切衆生輪迴生死。隨其緣業如實了知。四者於諸衆生三種根性。以正智力能分別知。五者於諸衆生如理爲說。令種善根成熟度脫。皆是智力故。善男子。是名菩薩摩訶薩成就力波羅蜜。善男子。復依五法。菩薩摩訶薩成就智波羅蜜。云何爲五。一者能於諸法分別善惡。二者於黑白法遠離攝受。三者能於生死涅槃不厭不喜。四者具福智行至究竟處。五者受勝灌頂能得諸佛不共法等及一切智智。善男子。是名菩薩摩訶薩成就智波羅蜜。善男子。何者是波羅蜜義。所謂修習勝利。是波羅蜜義。滿足無量大甚深智。是波羅蜜義。行非行法心不執著。是波羅蜜義。生死過失涅槃功德正覺正觀。是波羅蜜義。愚人智人皆悉攝受。是波羅蜜義。能現種種珍妙法寶。是波羅蜜義。無礙解脫智慧滿足。是波羅蜜義。法界衆生界正分別知。是波羅蜜義。施等及智能令至不退轉。是波羅蜜義。無生法忍能令滿足。是波羅蜜義。一切衆生功德善根能令成熟。是波羅蜜義。能於菩提成佛。十力四無所畏不共法等皆悉成就。是波羅蜜義。生死涅槃了無二相。是波羅蜜義。濟度一切。是波羅蜜義。一切外道來相詰難。善能解釋令其降伏。是波羅蜜義。能轉十二妙行法輪。是波羅蜜義。無所著無所見無患累。是波羅蜜多義。善男子。初地菩薩是相先現。三千大千世界無量無邊種種寶藏無不盈滿。菩薩悉見。善男子。二地菩薩是相先現。三千大千世界地平如掌。無量無邊種種妙色清淨珍寶莊嚴之具。菩薩悉見。善男子。三地菩薩是相先現。自身勇健甲仗莊嚴。一切怨賊皆能摧伏。菩薩悉見。善男子。四地菩薩是相先現。四方風輪種種妙花。悉皆散灑充布地上。菩薩悉見。善男子。五地菩薩是相先現。有妙寶女衆寶瓔珞周遍嚴身。首冠名花以爲其飾。菩薩悉見。善男子。六地菩薩是相先現。七寶花池有四階道。金沙遍布清淨無穢。八功德水皆悉盈滿。嗢鉢羅花拘物頭花分陀利花。隨處莊嚴。於花池所遊戲快樂清涼無比。菩薩悉見。善男子。七地菩薩是相先現。於菩薩前有諸衆生應墮地獄。以菩薩力便得不墮。無有損傷亦無恐怖。菩薩悉見。善男子。八地菩薩是相先現。於身兩邊有師子王以爲衛護。一切衆獸悉皆怖畏。菩薩悉見。善男

蜜下三本俱無多字

沙同作砂〇分明作芬

皆悉同作悉皆

謏三本俱作護今同作令

礙同作量○未下同有得字

子。九地菩薩是相先現。轉輪聖王無量億衆圍遶供養。頂上白蓋無量衆寶之所莊嚴。菩薩悉見。善男子。十地菩薩是相先現。如來之身金色晃耀。無量淨光皆悉圓滿。有無量億梵王。圍遶恭敬供養。轉於無上微妙法輪。菩薩悉見。善男子。云何初地名爲歡喜。謂初證得出世之心。昔所未得而今始得。於大事用如其所願。悉皆成就生極喜樂。是故最初名爲歡喜。諸微細垢犯戒過失皆得清淨。是故二地名爲無垢。無量智慧三昧光明。不可傾動無能摧伏。聞持陀羅尼以爲根本。是故三地名爲明地。以智慧火燒諸煩惱。增長光明修行覺品。是故四地名爲燄地。修行方便勝智自在極難得故。見修煩惱難伏能伏。是故五地名爲難勝。行法相續了了顯現。無相思惟皆悉現前。是故六地名爲現前。無漏無間無相思惟。解脫三昧遠修行故。是地清淨無有障礙。是故七地名爲遠行。無相思惟修得自在。諸煩惱行不能令動。是故八地名爲不動。說一切法種種差別。皆得自在無患無累。增長智慧自在無礙。是故九地名爲善慧。法身如虛空。智慧如大雲。皆能遍滿覆一切故。是故第十名爲法雲。善男子。執著有相我法無明。怖畏生死惡趣無明。此二無明障於初地。微細學處謏犯無明。發起種種業行無明。此二無明障於二地。未得今得愛著無明。能障殊勝總持無明。此二無明障於三地。味著等至喜悅無明。微妙淨法愛樂無明。此二無明障於四地。欲背生死無明。希趣涅槃無明。此二無明障於五地。觀行流轉無明。麤相現前無明。此二無明障於六地。微細諸相現行無明。作意欣樂無相無明。此二無明障於七地。於無相觀功用無明。執相自在無明。此二無明障於八地。於所說義及名句文。此二無礙未善巧無明。於詞辯才不隨意無明。此二無明障於九地。於大神通未得自在變現無明。微細祕密未能悟解事業無明。此二無明障於十地。於一切境微細所知障礙無明。極細煩惱麤重無明。此二無明障於佛地。善男子。菩薩摩訶薩於初地中。行施波羅蜜。於第二地行戒波羅蜜。於第三地行忍波羅蜜。於第四地行勤波羅蜜。於第五地行定波羅蜜。於第六地行慧波羅蜜。於第七地行方便勝智波羅蜜。於第八地行願波羅蜜。於第九地行力波羅蜜。於第十地行智波羅蜜。善男子。菩薩摩訶薩最初發心攝受能生妙寶三摩地。第二發心攝受能生可愛樂三摩地。第三發心攝受能生難動三摩地。第四發心攝受能生不退轉三摩地。第五發心攝受能生寶花三摩地。第六發心攝受能生日圓光燄三摩地。第七發心攝受能生

一切願如意成就三摩地。第八發心攝受能生現前證住三摩地。第九發心攝受能生智藏三摩地。第十發心攝受能生勇進三摩地。善男子。是名菩薩摩訶薩十種發心。善男子。菩薩摩訶薩於此初地得陀羅尼。名依功德力。

爾時世尊卽說呪曰

怛姪他　哺嘩儞曼奴喇剃　獨虎　獨虎獨虎　耶跛　蘇利瑜　阿婆婆薩底下里反下皆同　耶跛　旃達囉　調

怛底　多跛達咯叉漫　憚茶鉢唎訶膽　矩嚕　莎訶

善男子。此陀羅尼。是過一恒河沙數諸佛所說。爲護初地菩薩摩訶薩故。若有誦持此陀羅尼呪者。得脫一切怖畏。所謂虎狼師子惡獸之類。一切惡鬼人非人等。怨賊災横及諸苦惱。解脫五障不忘念初地

善男子。菩薩摩訶薩於第二地。得陀羅尼。名善安樂住

怛姪他　嗢篘入聲下同　哩　質哩質哩　嗢篘羅篘羅引　喃繕覩繕覩嗢篘哩　虎嚕虎嚕　莎訶

善男子此陀羅尼是。過二恒河沙數諸佛所說爲。護二地菩薩摩訶薩故若。有誦持此陀羅尼呪者。脫諸怖畏惡獸惡鬼人非人等。怨賊災横及諸苦惱。解脫五障不忘念二地

善男子。菩薩摩訶薩於第三地。得陀羅尼名難勝力

怛姪他　憚宅　枳般　枳宅　羯喇　撥高喇撥　雞由哩　憚撥哩　莎訶

善男子。此陀羅尼。是過三恒河沙數諸佛所說。爲護三地菩薩摩訶薩故。若有誦持此陀羅尼呪者。脫諸怖畏惡獸惡鬼人非人等。怨賊災横及諸苦惱。解脫五障不忘念三地

善男子。菩薩摩訶薩於第四地。得陀羅尼名大利益

怛姪他　室唎室唎　陀弭儞陀弭儞　陀哩陀哩儞　室利室唎儞　毗舍羅波世波始娜　畔陀弭帝　莎訶

善男子。此陀羅尼。是過四恒河沙數諸佛所說。爲護四地菩薩摩訶薩故。若有誦持此陀羅尼呪者。脫諸怖畏惡獸惡鬼人非人等。怨賊災横及諸苦惱。解脫五障不忘念四地

哺宋元俱作脯○虎下跛下旃上嚕下並三本俱不間空○底下音註里下明無反下皆同四字○耶宋作邪○咯明作洛○茶三本俱作茶○莎下訶下並同有夾註引字○薩下同無摩訶薩三字下同

姪宋元俱作侄○哩三本俱作里下同○質上虎上並同不間空○覩下同間空○宅下般下憚上並同不間空○枳宋作抧次同○撥三本俱連續上句○哩同作里

世同作始○帝下同不間空

訶哩二字宋元俱連續上句〇儞三本俱連續上句〇羯上三上悉上並同不間空

哩同作里次同〇灑下曼上並同間空〇覩下宋有漫字

嚕下三本俱間空〇枳宋作抧次同〇嘌哆三本俱作栗多〇哩同作里

〇哩下元明俱間空〇嚕下宋不間空

善男子．菩薩摩訶薩於第五地得陀羅尼．名種種功德莊嚴

怛姪他　訶哩訶哩　儞遮哩遮哩儞　羯喇摩引儞僧羯喇摩引儞　三婆山儞瞻跋儞　悉虓婆儞謨漢儞

碎閦步陛莎訶

善男子．此陀羅尼．是過五恒河沙數諸佛所說．爲護五地菩薩摩訶薩故．若有誦持此陀羅尼呪者．脫諸怖畏惡獸惡鬼人非人等．怨賊災橫及諸苦惱．解脫五障不忘念五地．善男子．菩薩摩訶薩於第六地．得陀羅尼名圓滿智

怛姪他　毗徒哩毗徒哩　摩哩儞迦哩迦哩　毗度漢底　嚕嚕嚕嚕　主嚕主嚕　杜嚕婆杜嚕婆　捨捨設者婆哩灑莎入　悉底薩婆薩埵喃　悉甸覩曼怛囉鉢陀儞莎訶

善男子．此陀羅尼．是過六恒河沙數諸佛所說．爲護六地菩薩摩訶薩故．若有誦持此陀羅尼呪者．脫諸怖畏惡獸惡鬼人非人等．怨賊災橫及諸苦惱．解脫五障不忘念六地

善男子．菩薩摩訶薩於第七地．得陀羅尼名法勝行

怛姪他　勺訶上勺訶引嚕勺訶勺訶勺訶嚕　鞞陸枳鞞陸枳　阿蜜嘌哆唬漢儞　勃哩山儞　鞞嚕勑枳婆嚕伐底　鞞提哂枳　頻陀鞞哩儞　阿蜜哩底枳　薄虎主愈　薄虎主愈莎訶

善男子．此陀羅尼．是過七恒河沙數諸佛所說．爲護七地菩薩摩訶薩故．若有誦持此陀羅尼呪者．脫諸怖畏惡獸惡鬼人非人等．怨賊災橫及諸苦惱．解脫五障不忘念七地

善男子．菩薩摩訶薩於第八地．得陀羅尼名無盡藏

怛姪他　室唎室唎室唎儞　蜜底蜜底　羯哩羯哩醯嚕醯嚕　主嚕主嚕　畔陀弭莎訶

善男子．此陀羅尼．是過八恒河沙數諸來所說．爲護八地菩薩摩訶薩故．若有誦持此陀羅尼呪者．脫諸怖畏惡獸惡鬼人非人等．怨賊災橫及諸苦惱．解脫五障不忘念八地．善男子．菩薩摩訶薩於第九地．得陀羅尼名無量門

怛姪他　訶哩旃荼哩枳　俱藍婆喇體(天里反)都刺死　跋吒跋吒死室唎室唎　迦室哩迦必室唎　莎(蘇活反)
悉底　薩婆薩埵喃莎訶
善男子。此陀羅尼。是過九恒河沙數諸佛所說。爲護九地菩薩摩訶薩故。若有誦持此陀羅尼呪者。脫諸怖畏惡獸惡鬼人非人等。怨賊災橫及諸苦惱。解脫五障不忘念九地
善男子。菩薩摩訶薩於第十地。得陀羅尼名破金剛山
怛姪他　悉提(去)蘇悉提(去)謨折儞木察儞　毗木底菴末麗　毗末麗涅末麗　忙揭麗　呬𡅏若揭鞞　曷喇怛娜揭鞞　三曼多跋姪麗　薩婆頞他娑憚儞　摩捺斯莫訶摩捺斯　頞步底頞　窒步底　阿嚩誓毗喇誓　頞主底菴蜜嘌底　阿嚩誓毗喇誓　跋嚂謎　跋囉蚶(火含)麼莎(入)囇哺喇儞哺喇娜　曼奴喇剃莎訶
善男子。此陀羅尼灌頂吉祥句。是過十恒河沙數諸佛所說。爲護十地菩薩摩訶薩故。若有誦持此陀羅尼呪者。脫諸怖畏惡獸惡鬼人非人等怨賊災橫。一切毒害皆悉除滅。解脫五障不忘念十地
爾時師子相無礙光燄菩薩。聞佛說此不可思議陀羅尼已。即從座起偏袒右肩。右膝著地合掌恭敬。頂禮佛足以頌讚佛

敬禮無譬喻　甚深無相法　衆生失正知　唯佛能濟度　如來明慧眼　不見一法相　復以正法眼
普照不思議　不生於一法　亦不滅一法　由斯平等見　得至無上處　不壞於生死　亦不住涅槃
不著於二邊　是故證圓寂　於淨不淨品　世尊知一味　由不分別法　獲得最清淨　世尊無邊身
不說於一字　令諸弟子衆　法雨皆充滿　佛觀衆生相　一切種皆無　然於苦惱者　常興於救護
苦樂常無常　有我無我等　不一亦不異　不生亦不滅　如是衆多義　隨說有差別　譬如空谷響
唯佛能了知　法界無分別　是故無異乘　爲度衆生故　分別說有三

爾時大自在梵天王。亦從座起偏袒右肩。右膝著地合掌恭敬。頂禮佛足而白佛言。世尊。此金光明最勝王經希有難量。初中後善文義究竟。皆能成就一切佛法。若受持者是人則爲報諸佛恩。佛言。善男子。如是如是如汝所

茶三本俱作荼○體下明無音註○都三本俱作覩○刺明作刺○跋三本俱作拔次同○死下迦下並元明俱間空○莎下明無音註

若下誓下並三本俱間空○麗同作囉○頞同連續下句○囒同作喇次同○嘌同作栗○蚶明作甜同字下音註宋元俱作火甘反三字明無○莎下明無夾註

法三本俱作故

所謂同在無上

說。善男子。若得聽聞是經典者。皆不退於阿耨多羅三藐三菩提。何以故。善男子。是能成熟不退地菩薩殊勝善根。是第一法印。是衆經王故。應聽聞受持讀誦。何以故。善男子。若一切衆生。未種善根未成熟善根未親近諸佛者。不能聽聞是微妙法。若善男子善女人能聽受者。一切罪障皆悉除滅。得最淸淨常得見佛。不離諸佛及善知識勝行之人。恒聞妙法住不退地。獲得如是勝陀羅尼門無盡無滅。所謂海印出妙功德陀羅尼無盡無滅。通達衆生意行言語陀羅尼無盡無滅。日圓無垢相光陀羅尼無盡無滅。滿月相光陀羅尼無盡無滅。能伏諸惑演功德流陀羅尼無盡無滅。破金剛山陀羅尼無盡無滅。說不可說義因緣藏陀羅尼無盡無滅。通達實語法則音聲陀羅尼無盡無滅。虛空無垢心行印陀羅尼無盡無滅。無邊佛身皆能顯現陀羅尼無盡無滅。善男子。如是等無盡無滅諸陀羅尼門得成就故。是菩薩摩訶薩能於十方一切佛土。化作佛身演說無上種種正法。於法眞如不動不住不來不去。善能成熟一切衆生善根。亦不見一衆生可成熟者。雖說種種諸法。於言詞中不動不住不去不來。能於生滅證無生滅。以何因緣。說諸行法無有去來。由一切法體無異故。說是法時。三萬億菩薩摩訶薩得無生法忍。無量諸菩薩不退菩提心。無量無邊苾芻苾芻尼得法眼淨。無量衆生發菩薩心。爾時世尊而說頌曰

勝法能逆生死流　甚深微妙難得見　有情盲冥貪欲覆　由不見故受衆苦

爾時大衆俱從座起。頂禮佛足而白佛言。世尊。若所在處。講宣讀誦此金光明最勝王經。我等大衆皆悉往彼爲作聽衆。是說法師。令得利益安樂無障身意泰然。我等皆當盡心供養。亦令聽衆安隱快樂。所住國土。無諸怨賊恐怖厄難飢饉之苦。人民熾盛。此說法處道場之地。一切諸天人非人等一切衆生。不應履踐及以汙穢。何以故。說法之處卽是制底。當以香花繒綵幡蓋而爲供養。我等常爲守護令離衰損。佛告大衆善男子。汝等應當精勤修習此妙經典。是則正法久住於世

金光明最勝王經卷第四

金光明最勝王經卷第五

〔麗食、宋場、元場、明場〕

大唐三藏沙門義淨奉　制譯

蓮華喩讚品第七

爾時佛告菩提樹神。善女天。汝今應知。妙幢夜夢見妙金鼓出大音聲。讚佛功德并懺悔法。此之因緣我爲汝等廣說其事。應當諦聽善思念之。過去有王名金龍主。常以蓮華喩讚。稱歎十方三世諸佛。卽爲大衆說其讚曰

過去未來現在佛　安住十方世界中　我今至誠稽首禮　一心讚歎諸最勝　無上淸淨牟尼尊
身光照耀如金色　一切聲中最爲上　如大梵響震雷音　髮彩喩若黑蜂王　宛轉旋文紺青色
齒白齊密如珂雪　平正顯現有光明　目淨無垢妙端嚴　猶如廣大青蓮葉　舌相廣長極柔軟
譬如紅蓮出水中　眉間常有白毫光　右旋宛轉頗梨色　眉細纖長類初月　其色晃耀比蜂王
鼻高脩直如金鋌　淨妙光潤相無虧　一切世間殊妙香　聞時悉知其所在　世尊最勝身金色
一一毛端相不殊　紺青柔軟右旋文　微妙光彩難爲喩　初誕身有妙光明　普照一切十方界
能滅三有衆生苦　令彼悉蒙安隱樂　地獄傍生鬼道中　阿蘇羅天及人趣　令彼除滅於衆苦
常受自然安隱樂　身色光朗常普照　譬如鎔金妙無比　面貌圓明如滿月　脣色赤好喩頻婆
行步威儀類師子　身光朗耀同初日　臂肘纖長立過膝　狀等垂下娑羅枝　圓光一尋照無邊
赫奕猶如百千日　悉能遍至諸佛刹　隨緣所在覺群迷　淨光明網無倫比　流耀遍滿百千界
普照十方無障礙　一切冥闇悉皆除　善逝慈光能與樂　妙色映徹等金山　流光悉至百千土
衆生遇者皆出離　佛身成就無量福　一切功德共莊嚴　超過三界獨稱尊　世間殊勝無與等
所有過去一切佛　數同大地諸微塵　未來現在十方尊　亦如大地微塵衆　我以至誠身語意

頗梨明作玻瓈○晃三本俱作光○脩明作修
耀明作輝

授三本俱作受下同

稽首歸依三世佛　讚歎無邊功德海　種種香花皆供養　設我口中有千舌　經無量劫讚如來
世尊功德不思議　最勝甚深難可說　假令我舌有百千　讚歎一佛一功德　於中少分尙難知
況諸佛德無邊際　假使大地及諸天　乃至有頂爲海水　可以毛端滴知數　佛一功德甚難量
我以至誠身語意　禮讚諸佛德無邊　所有勝福果難思　迴施衆生速成佛　彼王讚歎如來已
倍復深心發弘願　願我當於未來世　生在無量無數劫　夢中常見大金鼓　得聞顯說懺悔音
讚佛功德喩蓮華　願證無生成正覺　諸佛出世時一現　於百千劫甚難逢　夜夢常聞妙鼓音
晝則隨應而懺悔　我當圓滿修六度　拔濟衆生出苦海　然後得成無上覺　佛土淸淨不思議
以妙金鼓奉如來　并讚諸佛實功德　因斯當見釋迦佛　記我當紹人中尊　金龍金光是我子
過去曾爲善知識　世世願生於我家　共授無上菩提記　若有衆生無救護　長夜輪廻受衆苦
我於來世作歸依　令彼常得安隱樂　三有衆苦願除滅　悉得隨心安樂處　於未來世修菩提
皆如過去成佛者　願此金光懺悔福　永竭苦海罪消除　業障煩惱悉皆亡　令我速招淸淨果
福智大海量無邊　淸淨離垢深無底　願我獲斯功德海　速成無上大菩提　以此金光懺悔力
當獲福德淨光明　既得淸淨妙光明　常以智光照一切　願我身光等諸佛　福德智慧亦復然
一切世界獨稱尊　威力自在無倫匹　有漏苦海願超越　無爲樂海願常遊　現在福海願恒盈
當來智海願圓滿　願我刹土超三界　殊勝功德量無邊　諸有緣者悉同生　皆得速成淸淨智
妙幢汝當知　國王金龍主　曾發如是願　彼卽是汝身　往時有二子　金龍及金光　卽銀相銀光
當授我所記　大衆聞是說　皆發菩提心　願現在未來　常依此懺悔

金光明最勝王經金勝陀羅尼品第八

爾時世尊復於衆中。告善住菩薩摩訶薩。善男子。有陀羅尼名曰金勝。若有善男子善女人。欲求親見。過去未來

現在諸佛恭敬供養者。應當受持此陀羅尼。何以故。此陀羅尼乃是過現未來諸佛之母。是故當知持此陀羅尼者。具大福德已。於過去無量佛所。殖諸善本今得受持。於戒清淨不毀不缺無有障礙。決定能入甚深法門。世尊卽爲說持呪法。先稱諸佛及菩薩名。至心禮敬然後誦呪

南無十方一切諸佛。南無諸大菩薩摩訶薩。南謨聲聞緣覺一切賢聖。南謨釋迦牟尼佛。南謨東方不動佛。南謨南方寶幢佛。南謨西方阿彌陀佛。南謨北方天鼓音王佛。南謨上方廣衆德佛。南謨下方明德佛。南謨寶藏佛。南謨普光佛。南謨普明佛。南謨香積王佛。南謨蓮花勝佛。南謨平等見佛。南謨寶髻佛。南謨寶上佛。南謨寶光佛。南謨無垢光明佛。南謨辯才莊嚴心惟佛。南謨淨月光稱相王佛。南謨華嚴光佛。南謨光明王佛。南謨善光無垢稱王佛。南謨觀察無畏自在王佛。南謨無畏名稱佛。南謨最勝王佛。南謨觀自在菩薩摩訶薩。南謨地藏菩薩摩訶薩。南謨虛空藏菩薩摩訶薩。南謨妙吉祥菩薩摩訶薩。南謨金剛手菩薩摩訶薩。南謨普賢菩薩摩訶薩。南謨無盡意菩薩摩訶薩。南謨大勢至菩薩摩訶薩。南謨慈氏菩薩摩訶薩。南謨善慧菩薩摩訶薩

陀羅尼曰

南謨喝囉怛娜怛喇夜也　怛姪他　君睇　君睇　矩折囇矩折囇　壹窒哩蜜窒哩　莎訶

佛告善住菩薩。此陀羅尼是三世佛母。若有善男子善女人持此呪者。能生無量無邊福德之聚。卽是供養恭敬尊重讚歎無數諸佛。如是諸佛皆與此人。授阿耨多羅三藐三菩提記。善住。若有人能持此呪者。隨其所欲衣食財寶多聞聰慧無病長壽獲福甚多。隨所願求無不遂意。善住。持是呪者。乃至未證無上菩提。常與金城山菩薩。慈氏菩薩。大海菩薩。觀自在菩薩。妙吉祥菩薩。大氷伽羅菩薩等。而共居止。爲諸菩薩之所攝護。善住當知。持此呪時作如是法。先應誦持滿一萬八遍爲前方便。次於闇室莊嚴道場。黑月一日。淸淨洗浴著鮮潔衣。燒香散花種種供養幷諸飮食。入道場中先當稱禮如前所說諸佛菩薩。至心殷重悔先罪已。右膝著地可誦前呪。滿一千八遍。端坐思惟念其所願。日未出時於道場中。食淨黑食日唯一食。至十五日方出道場。能令此人福德威力不可思議。隨所願求無不圓滿。若不遂意重入道場。既稱心已常持莫忘

殖明作植

無三本倶作謨次同

在下同無王字○最勝王佛下元明倶有南謨寶相佛五字○慧明作思

喝囉三本倶作曷喇○睇宋作睇次同○君上三本倶不間空

殷三本倶作慇

金光明最勝王經重顯空性品第九

爾時世尊說此呪已。爲欲利益菩薩摩訶薩人天大衆。令得悟解甚深眞實第一義故。重明空性而說頌曰

我已於餘甚深經　廣說眞空微妙法　今復於此經王內　略說空法不思議　於諸廣大甚深法
有情無智不能解　故我於斯重敷演　令於空法得開悟　大悲哀愍有情故　以善方便勝因緣
我今於此大衆中　演說令彼明空義　當知此身如空聚　六賊依止不相知　六塵諸賊別依根
各不相知亦如是　眼根常觀於色處　耳根聽聲不斷絕　鼻根恒齅於香境　舌根鎭嘗於美味
身根受於輕軟觸　意根了法不知厭　此等六根隨事起　各於自境生分別　識如幻化非眞實
依止根處妄貪求　如人奔走空聚中　六識依根亦如是　心遍馳求隨處轉　託根緣境了諸事
常受色聲香味觸　於法尋思無暫停　隨緣遍行於六根　如鳥飛空無障礙　藉此諸根作依處
方能了別於外境　此身無知無作者　體不堅固託緣成　皆從虛妄分別生　譬如機關由業轉
地水火風共成身　隨彼因緣招異果　同在一處相違害　如四毒蛇居一篋　此四大蛇性各異
雖居一處有昇沈　或上或下遍於身　斯等終歸於滅法　於此四種毒蛇中　地水二蛇多沈下
風火二蛇性輕擧　由此乖違衆病生　心識依止於此身　造作種種善惡業　當往人天三惡趣
隨其業力受身形　遭諸疾病身死後　大小便利悉盈流　膿爛蟲蛆不可樂　棄在屍林如朽木
汝等當觀法如是　云何執有我衆生　一切諸法盡無常　悉從無明緣力起　彼諸大種咸虛妄
本非實有體無生　故說大種性皆空　知此緣虛非實有　無明自性本是無　藉衆緣力和合有
於一切時失正慧　故我說彼爲無明　行識爲緣有名色　六處及觸受隨生　愛取有緣生老死
憂悲苦惱恒隨逐　衆苦惡業常纏迫　生死輪廻無息時　本來非有體是空　由不如理生分別
我斷一切諸煩惱　常以正智現前行　了五蘊宅悉皆空　求證菩提眞實處　我開甘露大城門

示現甘露微妙器　既得甘露眞實味　常以甘露施群生　我擊最勝大法鼓　我吹最勝大法螺
我然最勝大明燈　我降最勝大法雨　降伏煩惱諸怨結　建立無上大法幢　於生死海濟群迷
我當關閉三惡趣　煩惱熾火燒衆生　無有救護無依止　清涼甘露充足彼　身心熱惱並皆除
由是我於無量劫　恭敬供養諸如來　堅持禁戒趣菩提　求證法身安樂處　施他眼耳及手足
妻子僮僕心無悋　財寶七珍莊嚴具　隨來求者咸供給　忍等諸度皆遍修　十地圓滿成正覺
故我得稱一切智　無有衆生度量者　假使三千大千界　盡此土地生長物　所有叢林諸樹木
稻麻竹葦及枝條　此等諸物皆伐取　並悉細末作微塵　隨處積集量難知　乃至充滿虛空界
一切十方諸刹土　所有三千大千界　地土皆悉末爲塵　此微塵量不可數　假使一切衆生智
以此智慧與一人　如是智者量無邊　容可知彼微塵數　牟尼世尊一念智　令彼智人共度量
於多俱胝劫數中　不能算知其少分

時諸大衆聞佛說此甚深空性。有無量衆生。悉能了達四大五蘊體性俱空。六根六境妄生繫縛。願捨輪廻正修出離。深心慶喜如說奉持

金光明最勝王經依空滿願品第十

爾時如意寶光耀天女。於大衆中聞說深法歡喜踊躍。從座而起偏袒右肩。右膝著地合掌恭敬而白佛言。世尊。惟願爲說於甚深理修行之法。而說頌言

我問照世界　兩足最勝尊　菩薩正行法　惟願慈聽許　佛言善女天　若有疑惑者　隨汝意所問
吾當分別說

是時天女請世尊曰

云何諸菩薩　行菩提正行　離生死涅槃　饒益自他故

並三本俱作普
敬下同無而字
惟同作唯

證下三本俱無於字

佛告善女天。依於法界。行菩薩法修平等行。云何依於法界。行菩提法修平等行。謂於五蘊能現法界。法界卽是五蘊。五蘊不可說。非五蘊亦不可說。何以故。若法界是五蘊。卽是斷見。若離五蘊。卽是常見。離於二相不著。二邊不可見。過所見無名無相。是則名爲說於法界。善女天。云何五蘊能現法界。如是五蘊不從因緣生。何以故。若從因緣生者。爲已生故生。爲未生故生。若已生生者。何用因緣。若未生生者。不可得生。何以故。未生諸法卽是非有。無名無相。非校量譬喩之所能及。非是因緣之所生故。善女天。譬如鼓聲依木依皮及桴手等故得出聲。如是鼓聲過去亦空未來亦空。現在亦空。何以故。是鼓音聲不從木生。不從皮生及桴手生。不於三世生。是則不生。若不可生則不可滅。若不可滅無所從來。若無所從來。亦無所去。若無所去則非常非斷。若非常非斷則不一不異。何以故。此若是一則不異法界。若如是者。凡夫之人應見眞諦。得於無上安樂涅槃。旣不如是故知不一。若言異者。一切諸佛菩薩行相卽是執著。未得解脫煩惱繫縛。卽不證於阿耨多羅三藐三菩提。何以故。一切聖人於行非行同眞實性是故不異。故知五蘊非有非無。不從因緣生。非無因緣生。是聖所知非餘境故。亦非言說之所能及。無名無相無因無緣。亦無譬喩。始終寂靜本來自空。是故五蘊能現法界。善女天。若善男子善女人。欲求阿耨多羅三藐三菩提。異眞異俗難可思量。於凡聖境體非一異。不捨於俗不離於眞。依於法界行菩提行。爾時世尊作是語已。時善女天。踊躍歡喜卽從座起。偏袒右肩右膝著地。合掌恭敬一心頂禮。而白佛言。世尊如上所說菩提正行我今當學。是時索訶世界主。大梵天王於大衆中問如意寶光耀善女天曰。此菩提行難可修行。汝今云何於菩提行而得自在。爾時善女天答梵王曰。大梵王如佛所說。實是甚深一切異生不解其義。是聖境界微妙難知。若使我今依於此法得安樂住。是實語者願令一切五濁惡世無量無數無邊衆生。皆得金色三十二相。非男非女坐寶蓮花受無量樂。雨天妙花諸天音樂不鼓自鳴。一切供養皆悉具足。時善女天說是語已。一切五濁惡世所有衆生。皆悉金色具大人相。非男非女坐寶蓮花受無量樂。猶如他化自在天宮無諸惡道。寶樹行列七寶蓮花遍滿世界。又雨七寶上妙天花作天伎樂。如意寶光耀善女天。卽轉女身作梵天身。時大梵王問如意寶光耀菩薩言。仁者如何行菩提行。答言。梵王。若水中月行菩提行。我亦行菩提行。若夢中行菩提行。我亦行菩提行。

界三本俱作異
○如下同無不
一二字

若陽餤行菩提行。我亦行菩提行。若谷響行菩提行。我亦行菩提行。時大梵王聞此說已。白菩薩言。仁依何義而說此語。答言。梵王。無有一法是實相者。但由因緣而得成故。梵王言。若如是者。諸凡夫人。皆悉應得阿耨多羅三藐三菩提。答言。仁以何意而作是說。愚癡人異。智慧人異。菩提異。非菩提異。解脫異。非解脫異。梵王。如是諸法平等無異。於此法界眞如。不一不異。無有中間而可執著。無增無減。梵王。譬如幻師及幻弟子。善解幻術。於四衢道取諸沙土草木葉等。聚在一處作諸幻術。使人覩見象衆馬衆車兵等衆。七寶之聚種種倉庫。若有衆生愚癡無智。不能思惟不知幻本。若見若聞作是思惟。我所見聞象馬等衆。此是實有餘皆虛妄。於後更不審察思惟。有智之人則不如是。了於幻本若見若聞作如是念。如我所見象馬等衆非是眞實。唯有幻事惑人眼目。妄謂象等。及諸倉庫有名無實。如我見聞不執爲實。後時思惟知其虛妄。是故智者了一切法皆無實體。但隨世俗如見如聞。表宣其事思惟諦理。則不如是。復由假說顯實義故。梵王。愚癡異生未得出世聖慧之眼。未知一切諸法眞如不可說故。是諸凡愚若見若聞行非行法。如是思惟便生執著謂以爲實。於第一義不能了知諸法眞如是不可說。是諸聖人若見若聞行非行法。隨其力能不生執著以爲實有。了知一切無實行法。無實非行法。但妄思量行非行相。唯有名字無有實體。是諸聖人隨世俗說。爲欲令他知眞實義如是。梵王。是諸聖人以聖知見了法眞如不可說故。行非行法亦復如是。令他證知故說種種世俗名言。時大梵王問如意寶光耀菩薩言。有幾衆生能解如是甚深正法。答言。梵王。有衆幻人心心數法。能解如是甚深正法。梵王曰。此幻化人體是非有。此之心數從何而生。答曰。若知法界不有不無。如是衆生能解深義。爾時梵王白佛言。世尊。是如意寶光耀菩薩不可思議。通達如是甚深之義。佛言。如是如是。梵王。如汝所言此如意寶光耀。已教汝等發心修學無生法忍。是時大梵天王。與諸梵衆從座而起偏袒右肩。合掌恭敬頂禮如意寶光耀菩薩足。作如是言。希有希有。我等今日幸遇大士得聞正法。爾時世尊告梵王言。是如意寶光耀。於未來世當得作佛。號寶餤吉祥藏如來應正徧知明行圓滿善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。說是品時。有三千億菩薩於阿耨多羅三藐三菩提得不退轉。八千億天子無量無數國王臣民遠塵離垢得法眼淨。爾時會中有五十億苾芻。行菩薩行欲退菩提心。聞如意寶光耀菩薩

惜明作昔

說是法時。皆得堅固不可思議滿足上願。更復發起菩提之心。各自脫衣供養菩薩。重發無上勝進之心。作如是願。願令我等功德善根悉皆不退。迴向阿耨多羅三藐三菩提。梵王是諸苾芻依此功德如說修行。過九十大劫當得解悟出離生死。爾時世尊卽爲授記。汝諸苾芻過三十阿僧祇劫當得作佛。劫名難勝光王。國名無垢光。同時皆得阿耨多羅三藐三菩提。皆同一號名願莊嚴間飾王。十號具足。梵王。是金光明微妙經典。若正聞持有大威力。假使有人於百千大劫行六波羅蜜無有方便。若有善男子善女人。書寫如是金光明經。半月半月專心讀誦。是功德聚於前功德百分不及一。乃至算數譬喩所不能及。梵王。是故我今令汝修學。憶念受持爲他廣說。何以故。我於往昔行菩薩道時。猶如勇士入於戰陣。不惜身命流通如是微妙經王。受持讀誦爲他解說。梵王。譬如轉輪聖王。若王在世七寶不滅。王若命終所有七寶自然滅盡。梵王是金光明微妙經王。若現在世無上法寶悉皆不滅。若無是經隨處隱沒。是故應當於此經王專心聽聞受持讀誦。爲他解說勸令書寫。行精進波羅蜜。不惜身命不憚疲勞功德中勝。我諸弟子應當如是精勤修學。爾時大梵天王。與無量梵衆帝釋四王及諸藥叉。俱從座起偏袒右肩。右膝著地合掌恭敬。而白佛言。世尊。我等皆願守護流通是金光明微妙經典。及說法師若有諸難。我當除遣。令具衆善。色力充足辯才無礙身意泰然。時會聽者皆受安樂。所在國土若有飢饉怨賊非人爲惱害者。我等天衆皆爲擁護。使其人民安隱豐樂無諸枉橫。皆是我等天衆之力。若有供養是經典者。我等亦當恭敬供養如佛不異。爾時佛告大梵天王及諸梵衆乃至四王諸藥叉等。善哉善哉。汝等得聞甚深妙法。復能於此微妙經王發心擁護及持經者。當獲無邊殊勝之福。速成無上正等菩提。時梵王等聞佛語已。歡喜頂受

金光明最勝王經四天王觀察人天品第十一

爾時多聞天王。持國天王。增長天王。廣目天王。俱從座起偏袒右肩。右膝著地合掌向佛。禮佛足已白言。世尊。是金光明最勝王經。一切諸佛常念觀察。一切菩薩之所恭敬。一切天龍常所供養。及諸天衆常生歡喜。一切護世稱揚讚歎。聲聞獨覺皆共受持。悉能明照諸天宮殿。能與一切衆生殊勝安樂。止息地獄餓鬼傍生諸趣苦惱。一

能明作皆
惟宋作唯
茶三本俱作荼次同〇正明作王
經三本俱作緣

切怖畏悉能除殄．所有怨敵尋即退散．飢饉惡時能令豐稔．疾疫病苦皆令蠲愈．一切災變百千苦惱咸悉消滅．世尊．是金光明最勝王經．能爲如是安隱利樂饒益我等．惟願世尊．於大衆中廣爲宣說．我等四王幷諸眷屬．聞此甘露無上法味．氣力充實增益威光．精進勇猛神通倍勝．世尊．我等四王修行正法．常說正法以法化世．我等令彼天龍藥叉健闥婆阿蘇羅揭路茶俱槃茶緊那羅莫呼羅伽及諸人王．常以正法而化於世．遮去諸惡．所有鬼神吸人精氣無慈悲者．悉令遠去．世尊．我等四王與二十八部藥叉大將．幷與無量百千藥叉．以淨天眼過於世間．觀察擁護此贍部洲．世尊．以此因緣我等諸王名護世者．又復於此洲中．若有國王被他怨賊常來侵擾．及多飢饉疾疫流行．無量百千厄災之事．世尊．我等四王於此金光明最勝王經．恭敬供養．若有苾芻法師受持讀誦．我等四王共往覺悟勸請其人．時彼法師由我神通覺悟力故往彼國界．廣宣流布是金光明微妙經典．由經力故．令彼無量百千衰惱災厄之事悉皆除遣．世尊．若諸人王於其國內．有持是經苾芻法師至彼國時．當知此經亦至其國．世尊．時彼國王應往法師處．聽其所說聞已歡喜．於彼法師恭敬供養．深心擁護令無憂惱．演說此經利益一切．世尊．以是經故我等四王皆共一心護是人王及國人民．令離災患常得安隱．世尊．若有苾芻苾芻尼鄔波索迦鄔波斯迦持是經者．時彼人王隨其所須．供給供養令無乏少．我等四王令彼國王及以國人．悉皆安隱遠離災患．世尊．若有受持讀誦是經典者．人王於此供養恭敬尊重讚歎．我等當令彼王於諸王中恭敬尊重最爲第一．諸餘國王共所稱歎．大衆聞已歡喜受持

金光明最勝王經卷第五

金光明最勝王經卷第六

〔麗食〕〔宋塲〕〔元塲〕〔明塲〕

大唐三藏沙門義淨奉　制譯

四天王護國品第十二

爾時世尊聞四天王恭敬供養金光明經及能擁護諸持經者讚言善哉善哉汝等四王已於過去無量百千萬億佛所恭敬供養尊重讚歎植諸善根修行正法常說正法以法化世汝等長夜於諸衆生常思利益起大慈心願與安樂以是因緣能令汝等現受勝報若有人王恭敬供養此金光明最勝經典汝等應當勤加守護令得安隱汝諸四王及餘眷屬無量無數百千藥叉護是經者卽是護持去來現在諸佛正法汝等四王及餘天衆幷諸藥叉與阿蘇羅共鬬戰時常得勝利汝等若能護持是經由經力故能除衆苦怨賊饑饉及諸疾疫是故汝等若見四衆受持讀誦此經王者亦應勤心共加守護爲除衰惱施與安樂爾時四天王卽從座起偏袒右肩右膝著地合掌恭敬白佛言世尊此金光明最勝王經於未來世若有國土城邑聚落山林曠野隨所至處流布之時若彼國王於此經典至心聽受稱歎供養幷復供給受持是經四部之衆深心擁護令離衰惱以是因緣我護彼王及諸人衆皆令安隱遠離憂苦增益壽命威德具足世尊若彼國王見於四衆受持經者恭敬守護猶如父母一切所須悉皆供給我等四王常爲守護令諸有情無不尊敬是故我等幷與無量藥叉諸神隨此經王所流布處潛身擁護令無留難亦當護念聽是經人諸國王等除其衰患悉令安隱他方怨賊皆使退散若有人王聽是經時隣國怨敵興如是念當具四兵壞彼國土世尊以是經王威神力故是時隣敵更有異怨而來侵擾於其境界多諸災變疫病流行時王見已卽嚴四兵發向彼國欲爲討罰我等爾時當與眷屬無量無邊藥叉諸神各自隱形爲作護助令彼怨敵自然降伏尙不敢來至其國界豈復得有兵戈相罰爾時佛告四天王善哉善哉汝等四王乃能擁護如是經典我於過去百千俱胝那庾多劫修諸苦行得阿耨多羅三藐三菩提證一切智今說是法

土北藏作王

罰元明俱作伐次同

繫明作擊〇生
愛三本俱作然受
慧同作惠
經上同無是字
殷同作慇

若有人王受持是經恭敬供養者。爲消衰患令其安隱。亦復擁護城邑聚落。乃至怨賊悉令退散。亦令一切贍部洲內所有諸王。永無衰惱鬪諍之事。四王當知。此贍部洲八萬四千城邑聚落。八萬四千諸人王等。各於其國受諸快樂皆得自在。所有財寶豐足受用不相侵奪。隨彼宿因而受其報。不起惡念貪求他國。咸生少欲利樂之心。無有鬪戰繫縛等苦。其土人民自生愛樂。上下和穆猶如水乳。情相愛重歡喜遊戲。慈悲謙讓增長善根。以是因緣此贍部洲安隱豐樂。人民熾盛大地沃壤。寒暑調和時不乖序。日月星宿常度無虧。風雨隨時離諸災橫。資產財寶皆悉豐盈。心無慳鄙常行慧施具十善業。若人命終多生天上增益天衆。大王。若未來世有諸人王聽受是經恭敬供養幷受持是經。四部之衆尊重稱讚。復欲安樂饒益汝等及諸眷屬無量百千諸藥叉衆。是故彼王常當聽受是妙經王。由得聞此正法之水甘露上味。增益汝等身心勢力。精進勇猛福德威光悉令充滿。是諸人王若能至心聽受是經。則爲廣大希有供養。供養於我釋迦牟尼應正等覺。若供養我。則是供養過去未來現在百千俱胝那庾多佛。若能供養三世諸佛。則得無量不可思議功德之聚。以是因緣。汝等應當擁護彼王后妃眷屬令無衰惱。及宮宅神常受安樂功德難思。是諸國土所有人民。亦受種種五欲之樂。一切惡事皆令消殄。爾時四天王白佛言。世尊。於未來世。若有人王樂聽如是金光明經。爲欲擁護自身后妃王子。乃至內宮諸婇女等城邑宮殿。皆得第一不可思議最上歡喜寂靜安樂。於現世中王位尊高自在昌盛常得增長。復欲攝受無量無邊難思福聚。於自國土令無怨敵及諸憂惱災厄事者。世尊。如是人王不應放逸令心散亂。當生恭敬至誠殷重。聽受如是最勝經王。欲聽之時。先當莊嚴最上宮室王所愛重顯敞之處。香水灑地散衆名花。安置師子殊勝法座。以諸珍寶而爲挍飾。張施種種寶蓋幢幡。燒無價香奏諸音樂。其王爾時當淨澡浴以香塗身。著新淨衣及諸瓔珞。坐小卑座不生高擧。捨自在位離諸憍慢。端心正念聽是經王。於法師所起大師想。復於宮內后妃王子婇女眷屬生慈愍心。喜悅相視和顏軟語。於自身心大喜充遍。作如是念。我今獲得難思殊勝廣大利益。於此經王盛興供養。既敷設已見法師至。當起虔敬渴仰之心。爾時佛告四天王。不應如是不迎法師。時彼人王。應著純淨鮮潔之衣。種種瓔珞以爲嚴飾。自持白蓋及以香花。備整軍儀盛陳音樂。步出城闕迎彼法師。運想虔恭爲吉祥事。四

王。以何因緣。令彼人王親作如是恭敬供養。由彼人王擧足下足。步步卽是恭敬供養承事尊重百千萬億那庾
多諸佛世尊。復得超越如是劫數生死之苦。復於來世如是劫數。當受輪王殊勝尊位。隨其步步亦於現世福德
增長自在爲王。感應難思衆所欽重。當於無量百千億劫人天受用七寶宮殿。所在生處常得爲王。增益壽命言
詞辯了。人天信受無所畏懼。有大名稱咸共瞻仰。天上人中受勝妙樂。獲大力勢有大威德。身相奇妙端嚴無比。
値天人師遇善知識。成就具足無量福聚。四王當知。彼諸人王見如是等種種無量功德利益故。應自往奉迎法
師。若一踰繕那。乃至百千踰繕那。於說法師應生佛想。還至城已作如是念。今日釋迦牟尼如來應正等覺入我
宮中受我供養爲我說法。我聞法已卽於阿耨多羅三藐三菩提不復退轉。卽是値遇百千萬億那庾多諸佛世
尊。我於今日卽是種種廣大殊勝上妙樂具。供養過去未來現在諸佛。我於今日卽是永拔琰魔王界地獄餓鬼
傍生之苦。便爲已種無量百千萬億轉輪聖王釋梵天主善根種子。當令無量百千萬億衆生。出生死苦得涅槃
樂。積集無量無邊不可思議福德之聚。後宮眷屬及諸人民皆蒙安隱。國土淸泰無諸災厄。毒害惡人他方怨敵。
不來侵擾遠離憂患。四王當知。時彼人王。應作如是尊重正法。亦於受持是妙經典。苾芻苾芻尼鄔波索迦鄔波
斯迦。供養恭敬尊重讚歎。所獲善根先以勝福。施與汝等及諸眷屬。彼之人王。有大福德善業因緣。於現世中得
大自在增益威光。吉祥妙相皆悉莊嚴。一切怨敵能以正法而摧伏之。爾時四天王白佛言。世尊。若有人王。能作
如是恭敬正法聽此經王。幷於四衆持經之人。恭敬供養尊重讚歎。時彼人王。欲爲我等生歡喜故。當在一邊近
於法座。香水灑地散衆名花。安置處所設四王座。我與彼王共聽正法。其王所有自利善根。亦以福分施及我等。
世尊。時彼人王。請說法者。昇座之時。便爲我等燒衆名香供養是經。世尊。時彼香煙於一念頃上昇虛空。卽至我
等諸天宮殿。於虛空中變成香蓋。我等天衆聞彼妙香。香有金光照曜我等所居宮殿。乃至梵宮及以帝釋。大辯
才天。大吉祥天。堅牢地神。正了知大將。二十八部諸藥叉神。大自在天。金剛密主。寶賢大將。訶利底母五百眷屬。
無熱惱池龍王。大海龍王所居之處。世尊如是等衆。於自宮殿見彼香煙。一刹那頃變成香蓋。聞香芬馥覩色光
明。遍至一切諸天神宮。佛告四天王。是香光明非但至此宮殿。變成香蓋放大光明。由彼人王手擎香鑪。燒衆名

瞻明作瞻

擎三本俱作執〇鑪明作鑪次同

茶宋元俱作荼

渡三本俱作度

知下同無神字

香供養經時．其香煙氣於一念頃遍至三千大千世界．百億日月．百億妙高山王．百億四洲．於此三千大千世界．一切天龍藥叉健闥婆阿蘇羅揭路茶緊那羅莫呼洛伽宮殿之所．於虛空中充滿而住．種種香煙變成雲蓋．其蓋金色普照天宮．如是三千大千世界．所有種種香雲香蓋．皆是金光明最勝王經威神之力．是諸人王手持香鑪供養經時．種種香氣非但遍此三千大千世界．於一念頃亦遍十方無量無邊恒河沙等．百千萬億諸佛國土．於諸佛上虛空之中變成香蓋．金色普照亦復如是．時彼諸佛聞此妙香．覩斯雲蓋及以金色．於十方界恒河沙等諸佛世尊．現神變已彼諸世尊悉共觀察．異口同音讚法師曰．善哉善哉．汝大丈夫．能廣流布如是甚深微妙經典．則爲成就無量無邊不可思議福德之聚．若有聽聞如是經者．所獲功德其量甚多．何況書寫受持讀誦．爲他敷演如說修行．何以故．善男子．若有衆生聞此金光明最勝王經者．卽於阿耨多羅三藐三菩提不復退轉．爾時十方有百千俱胝那庾多．無量無數恒河沙等諸佛剎土．彼諸剎土一切如來異口同音．於法座上讚彼法師言．善哉善哉．善男子．汝於來世以精勤力．當修無量百千苦行．具足資糧超諸聖衆．出過三界爲最勝尊．當坐菩提樹王之下殊勝莊嚴．能救三千大千世界有緣衆生．善能摧伏可畏形儀諸魔軍衆．覺了諸法最勝淸淨甚深無上正等菩提．善男子．汝當坐於金剛之座．轉於無上諸佛所讚十二妙行甚深法輪．能擊無上最大法鼓．能吹無上極妙法螺．能建無上殊勝法幢．能然無上極明法炬．能降無上甘露法雨．能斷無量煩惱怨結．能令無量百千萬億那庾多有情．渡於無涯可畏大海．解脫生死無際輪迴．値遇無量百千萬億那庾多佛．爾時四天王復白佛言．世尊．是金光明最勝王經能於未來現在．成就如是無量功德．是故人王若得聞是微妙經典．卽是已於百千萬億無量佛所種諸善根．於彼人王我當護念．復見無量福德利故．我等四王及餘眷屬無量百千萬億諸神．於自宮殿見是種種香煙雲蓋神變之時．我當隱蔽不現其身爲聽法故．當至是王淸淨嚴飾所止宮殿講法之處．如是乃至梵宮帝釋．大辯才天．大吉祥天．堅牢地神．正了知神大將．二十八部諸藥叉神．大自在天．金剛密主．寶賢大將訶利底母五百眷屬．無熱惱池龍王．大海龍王無量百千萬億那庾多諸天藥叉．如是等衆．爲聽法故皆不現身．至彼人王殊勝宮殿莊嚴高座說法之所．世尊．我等四王及餘眷屬藥叉諸神．皆當一心共彼人王爲

常同作嘗
惟同作唯下同
博元明俱作薄
主同作王

善知識。因是無上大法施主。以甘露味充足於我。是故我等擁護是王。除其衰患令得安隱。及其宮殿城邑國土諸惡災變悉令消滅。爾時四天王俱共合掌白佛言。世尊。若有人王於其國土雖有此經未常流布。心生捨離不樂聽聞。亦不供養尊重讚歎。見四部衆持經之人。亦復不能尊重供養。遂令我等及餘眷屬無量諸天。不得聞此甚深妙法。背甘露味失正法流。無有威光及以勢力。增長惡趣損減人天。墜生死河乖涅槃路。世尊。我等四王并諸眷屬及藥叉等見如斯事。捨其國土無擁護心。非但我等捨棄是王。亦有無量守護國土諸大善神悉皆捨去。既捨離已。其國當有種種災禍喪失國位。一切人衆皆無善心。惟有繫縛殺害瞋諍互相讒諂枉及無辜。疾疫流行彗星數出。兩日並現博蝕無恒。黑白二虹表不祥相。星流地動井內發聲。暴雨惡風不依時節。常遭飢饉苗實不成。多有他方怨賊侵掠。國內人民受諸苦惱。土地無有可樂之處。世尊。我等四王及與無量百千天神。并護國土諸舊善神遠離去時。生如是等無量百千災怪惡事。世尊。若有人王欲護國土常受快樂。欲令衆生咸蒙安隱。欲得摧伏一切外敵。於自國境永得昌盛。欲令正教流布世間。苦惱惡法皆除滅者。世尊。是諸國主必當聽受是妙經王。亦應恭敬供養讀誦受持經者。我等及餘無量天衆。以是聽法善根威力。得服無上甘露法味。增益我等所有眷屬。并餘天神皆得勝利。何以故。以是人王至心聽受是經典故。世尊。如大梵天。於諸有情常為宣說世出世論。帝釋復說種種諸論。五通神仙亦說諸論。世尊。梵天帝釋五通仙人。雖有百千俱胝那庾多無量諸論。然佛世尊慈悲哀愍。為人天衆說金光明微妙經典。比前所說。勝彼百千俱胝那庾多倍不可為喻。何以故。由此能令諸贍部洲所有王等正法化世。能與衆生安樂之事。為護自身及諸眷屬令無苦惱。又無他方怨賊侵害。所有諸惡悉皆遠去。亦令國土災厄屏除。化以正法無有諍訟。是故人王各於國土。當然法炬明照無邊。增益天衆并諸眷屬。世尊。我等四王無量天神藥叉之衆。贍部洲內所有天神。以是因緣得服無上甘露法味。獲大威德勢力光明無不具足。一切衆生皆得安隱。復於來世無量百千不可思議那庾多劫。常受快樂。復得值遇無量諸佛。種諸善根。然後證得阿耨多羅三藐三菩提。如是無量無邊勝利。皆是如來應正等覺。以大慈悲過諸梵衆。以大智慧逾於帝釋。修諸苦行勝五通仙。百千萬億那庾多倍不可稱計。為諸衆生演說如是微妙經典。令贍部洲一切國

主及諸人衆.明了世間所有法式.治國化人勸導之事.由此經王流通力故普得安樂.此等福利皆是釋迦大師.於此經典廣爲流通慈悲力故.世尊.以是因緣諸人王等.皆應受持供養恭敬尊重讚歎此妙經王.何以故.以如是等不可思議殊勝功德.利益一切.是故名曰最勝經王.爾時世尊復告四天王.汝等四王及餘眷屬.無量百千俱胝那庾多諸天大衆.見彼人王若能至心聽是經典.供養恭敬尊重讚歎者.應當擁護除其衰患.能令汝等亦受安樂.若四部衆.能廣流布是經王者.於人天中廣作佛事.普能利益無量衆生.如是之人汝等四王常當擁護.如是四衆勿使他緣共相侵擾.令彼身心寂靜安樂.於此經王廣宣流布令不斷絶.利益有情盡未來際.爾時多聞天王.從座而起白佛言.世尊.我有如意寶珠陀羅尼法.若有衆生樂受持者功德無量.我常擁護令彼衆生離苦得樂.能成福智二種資糧.欲受持者先當誦此護身之咒.卽說咒曰

南謨薜室囉末拏也莫訶曷囉闍也　怛姪他　囉囉囉囉　矩怒矩怒　區怒區怒　窶怒窶怒　颯囉颯嚩　羯囉羯嚩莫訶毗羯喇麼　莫訶毗羯喇麼　莫訶曷囉社　曷喀叉曷喀叉　覩曼自稱己名　薩婆薩埵難者　莎訶

世尊誦此咒者.當以白線咒之七遍.一遍一結繫之肘後其事必成.應取諸香.所謂安息栴檀龍腦蘇合多揭羅薰陸.皆須等分和合一處.手執香爐燒香供養.淸淨澡浴著鮮潔衣.於一靜室可誦神咒請我薜室囉末拏天王.卽說咒曰

南謨薜室囉末拏引也南謨檀那馱也　檀泥說囉引也　阿揭擔　阿鉢喇弭哆　檀泥說囉　鉢囉麼　迦留尼迦　薩婆薩埵　呬哆振哆　麼麼己名　檀那末奴鉢喇拽擔　碎闍摩揭薜　莎訶

此咒誦滿一七遍已.次誦本咒.欲誦咒時.先當稱名敬禮三寶及薜室羅末拏天王.能施財物.令諸衆生所求願滿.悉能成就與其安樂.如是禮已.次誦薜室羅末拏天王.如意末尼寶心神咒.能施衆生隨意安樂.爾時多聞天王.卽於佛前說如意末尼寶心咒曰

南謨曷喇怛娜　怛喇夜野引　南謨薜室囉末拏引也莫訶囉闍引也　怛姪他　四弭四弭　蘇母蘇母　栴

故下三本俱無以字

囉三本俱作羅下同○也下同有夾註但是也上之字皆須引聲十字○他下社下並同不間空○窶宋作窶次同○嚩三本俱作縛次同○羯上莫上並同間空○訶下同有夾註此之二字皆長引聲八字○爐明作爐○也下那下並三本俱間空○嚩同作喇○哆同作ゞ○埵下擒下並同不間空○敬明作揭○天三本俱作大○王上同無天字○野同作也而置夾註下○也下元明俱間空

茶三本俱作荼次同○覩宋元俱作覲○也下三本俱間空次同○訶下莎上元明俱間空○惟三本俱作唯○拏下細註目貝宋元俱作見貝明作見目○明校譌日目疑當作貝波拏明作波挐○至三本俱作志○疊元明俱作羆○座三本俱作坐○列宋作烈○利三本俱作喇○那下迦下婆下並同有夾註引字○謨明作無○闍下夾註引下三本俱有下同二字○也同連續上句○羅下宋不間空○窣三本俱作窣次同○琉同作瑠○褒下元明俱不間空○鼻下三本俱不間空○醫元明俱作醫次同○咽下拏下寫下三本俱間空○磨同作麼○袜下音註反明作切○囉三本俱

茶栴茶　折囉折囉　薩囉薩囉　羯囉羯囉　枳哩枳哩　矩嚕矩嚕　母嚕母嚕　主嚕主嚕　婆大也頞貪　我名某甲　呢店頞他　達達覩莎訶　南謨薛室囉末拏也莎訶檀那馱也莎訶　曼奴喇他鉢喇脯喇迦(引)也莎訶

受持呪時。先誦千遍。然後於淨室中。瞿摩塗地作小壇場。隨時飲食一心供養。常然妙香令烟不絕。誦前心呪晝夜繫心。惟自耳聞勿令他解。時有薛室囉末拏王子名禪膩師。現童子形來至其所。問言。何故須喚我父。即可報言。我爲供養三寶。事須財物願當施與。時禪膩師聞是語已。即還父所白其父言。今有善人。發至誠心供養三寶。少乏財物爲斯請召。其父報曰。汝可速去日日與彼一百迦利沙波拏(引)(此是根本梵音惟目貝齒而隨方不定或是貝齒或是金銀銅鐵等錢然摩揭陀現今通用一迦利沙波拏有一千六百貝齒總數可以准知若准物直隨處不定若人持呪得成就者獲物之時自知其數有本云每日與一百陳那羅即金錢也乃至盡形日日常得西方求者多有神驗除不至心也)　其持呪者見是相已。知事得成。當須獨處淨室燒香而臥。可於牀邊置一香篋。每至天曉觀其篋中獲所求物。每得物時當日即須供養三寶。香花飲食兼施貧乏。皆令罄盡不得停留。於諸有情起慈悲念。勿生瞋誑諂害之心。若起瞋者即失神驗。常可護心勿令瞋恚。又持此呪者。於每日中憶我多聞天王。及男女眷屬稱揚讚歎。恒以十善共相資助。令彼天等福力增明。衆善普臻證菩提處。彼諸天衆見是事已。皆大歡喜共來擁衛持呪之人。又持呪者壽命長遠。經無量歲。永離三塗常無災厄。亦令獲得如意寶珠及以伏藏。神通自在所願皆成。若求官榮無不稱意。亦解一切禽獸之語。世尊。若持呪時。欲得見我自身現者。可於月八日或十五日。於白疊上畫佛形像。當用木膠雜彩莊飾其畫像人爲受八戒。於佛左邊作吉祥天女像。於佛右邊作我多聞天像。幷畫男女眷屬之類。安置座處咸令如法。布列花彩燒衆名香。然燈續明晝夜無歇。上妙飲食種種珍奇。發殷重心隨時供養。受持神呪不得輕心。請召我時應誦此呪

南謨室利健那也　勃陀(引)也　南謨薛室囉末拏也　藥叉囉闍(引)也　莫訶囉闍　阿地囉闍也　南麼室唎耶寠　莫訶提鞞(引)寠　怛姪他　怛囉怛囉　咄嚕咄嚕　末囉末囉　窣繂吐窣繂吐　漢娜漢娜　末尼羯諾迦　跋折囉薛琉璃也　目底迦楞訖㗚多　設唎羅寠　蒲(引)薩婆薩埵呬哆迦摩　薛室囉末拏室唎夜提鼻　跋囉婆也　醫呬醫呬　麼毗藍婆　瞿㗚拏瞿㗚拏袜(麻八反)　喇婆袜喇婆　達馱咽麼麼　阿目

作羅
天三本俱作大
脩明作修
鞔元明俱作縵
護三本俱作衞

迦那末寫（自稱己名）達哩設那迦末寫達哩設南　麼麼末那　鉢喇曷囉大也　莎訶

世尊。我若見此誦呪之人。復見如是盛興供養。即生慈愛歡喜之心。我即變身作小兒形。或作老人苾芻之像。手持如意末尼寶珠。幷持金囊入道場內。身現恭敬口稱佛名。語持呪者曰。隨汝所求皆令如願。或隱林藪或造寶珠。或欲衆人愛寵。或求金銀等物。欲持諸呪皆令有驗。或欲神通壽命長遠。及勝妙樂無不稱心。我今且說如是之事。若更求餘皆隨所願悉得成就。寶藏無盡功德無窮。假使日月墜墮于地。或可大地有時移轉。我此實語終不虛然。常得安隱隨心快樂。世尊。若有人能受持讀誦是經王者。誦此呪時不假疲勞。法速成就。世尊。我今爲彼貧窮困厄苦惱衆生。說此神呪令獲大利。皆得富樂自在無患。乃至盡形我當擁護。隨逐是人爲除災厄。亦復令此持金光明最勝王經流通之者。及持呪人。於百步內光明照燭。我之所有千藥叉神亦常侍衞。隨欲驅使無不遂心。我說實言無有虛誑。惟佛證知。時多聞天王說此呪已。佛言。善哉天王。汝能破裂一切衆生貧窮苦網。令得富樂。說是神呪復令此經廣行於世。時四天王俱從座起。偏袒一肩頂禮雙足。右膝著地合掌恭敬。以妙伽他讚佛功德

佛面猶如淨滿月　亦如千日放光明　目淨脩廣若青蓮　齒白齊密猶珂雪　佛德無邊如大海
無限妙寶積其中　智慧德水鎭恒盈　百千勝定咸充滿　足下輪相皆嚴飾　轂輞千輻悉齊平
手足鞔網遍莊嚴　猶如鵝王相具足　佛身光曜等金山　清淨殊特無倫匹　亦如妙高功德滿
故我稽首佛山王　相好如空不可測　逾於千日放光明　皆如焰幻不思議　故我稽首心無著

爾時四天王讚歎佛已。世尊亦以伽他而答之曰

此金光明最勝經　無上十力之所說　汝等四王常擁護　應生勇猛不退心　此妙經寶極甚深
能與一切有情樂　由彼有情安樂故　常得流通贍部洲　於此大千世界中　所有一切有情類
餓鬼傍生及地獄　如是苦趣悉皆除　住此南洲諸國王　及餘一切有情類　由經威力常歡喜
皆蒙擁護得安寧　亦使此中諸有情　除衆病苦無賊盜　賴此國土弘經故　安隱豐樂無違惱

法三本俱作音

若人聽受此經王　欲求尊貴及財利　國土豐樂無違諍　隨心所願悉皆從　能令他方賊退散
於自國界常安隱　由此最勝經王力　離諸苦惱無憂怖　如寶樹王在宅內　能生一切諸樂具
最勝經王亦復然　能與人王勝功德　譬如澄潔清冷水　能除飢渴諸熱惱　最勝經王亦復然
令樂福者心滿足　如人室有妙寶篋　隨所受用悉從心　最勝經王亦復然　福德隨心無所乏
汝等天主及天衆　應當供養此經王　若能依教奉持經　智慧威神皆具足　現在十方一切佛
咸共護念此經王　見有讀誦及受持　稱歎善哉甚希有　若有人能聽此經　身心踊躍生歡喜
常有百千藥叉衆　隨所住處護斯人　於此世界諸天衆　其數無量不思議　悉共聽受此經王
歡善護持無退轉　若人聽受此經王　威德勇猛常自在　增益一切人天衆　令離衰惱益光明

爾時四天王聞是頌已。歡喜踊躍白佛言。世尊。我從昔來未曾得聞如是甚深微妙之法。心生悲喜涕淚交流。舉身戰動證不思議希有之事。以天曼陀羅花摩訶曼陀羅花。而散佛上。作是殊勝供養佛已白佛言。世尊。我等四王各有五百藥叉眷屬。常當處處擁護是經及說法師。以智光明而為助衛。若於此經所有句義。忘失之處我皆令彼憶念不忘。幷與陀羅尼殊勝法門令得具足。復欲令此最勝王經所在之處。為諸衆生廣宣流布不速隱沒。

爾時世尊於大衆中說是法時。無量衆生皆得大智聰叡辯才。攝受無量福德之聚。離諸憂惱發喜樂心。善明衆論登出離道。不復退轉速證菩提

金光明最勝王經卷第六

金光明最勝王經卷第七

〔麗食〕〔宋場〕〔元場〕〔明場〕

大唐三藏沙門義淨奉　制譯

無染著陀羅尼品第十三

爾時世尊告具壽舍利子。今有法門名無染著陀羅尼。是諸菩薩所修行法。過去菩薩之所受持。是菩薩母。說是語已。具壽舍利子白佛言。世尊。陀羅尼者是何句義。世尊。陀羅尼者。非方處非非方處。作是語已。佛告舍利子。善哉善哉。舍利子。汝於大乘已能發起信解大乘尊重大乘。如汝所說。陀羅尼者。非方處非非方處。非法非非法。非過去非未來非現在。非事非非事。非緣非非緣。非行非非行。無有法生亦無法滅。然爲利益諸菩薩故。作如是說。於此陀羅尼功用正道理趣勢力安立。卽是諸佛功德。諸佛禁戒諸佛所學。諸佛祕意諸佛生處。故名無染著陀羅尼最妙法門。作是語已。舍利子白佛言世尊。惟願善逝爲我說此陀羅尼法。若諸菩薩能安住者。於無上菩提不復退轉。成就正願得無所依。自性辯才。獲希有事。安住聖道皆由得此陀羅尼故。佛告舍利子。善哉善哉。如是如是如汝所說。若有菩薩得此陀羅尼者。應知是人與佛無異。若有供養尊重承事供給此菩薩者。應知卽是供養於佛。舍利子。若有餘人聞此陀羅尼受持讀誦生信解者。亦應如是恭敬供養與佛無異。以是因緣獲無上果。

爾時世尊。卽爲演說陀羅尼曰

怛姪他　刪陀喇儞嗢多喇儞　蘇三鉢囉底瑟耻哆　蘇那麼　蘇鉢喇底瑟耻哆　鼻逝也跋羅薩底也鉢
喇底愼若　蘇阿嚧訶　愼若那末底　嗢波彈儞　阿伐那末底　阿毗師彈儞　阿鞞毗耶訶囉　輸婆
伐底　蘇尼室多喇引薄虎郡社引阿毗婆馱引莎訶

佛告舍利子。此無染著陀羅尼句。若有菩薩能善安住能正受持者。當知是人若於一劫若百劫若千劫若百千劫。所發正願無有窮盡。身亦不被刀杖毒藥水火猛獸之所損害。何以故。舍利子。此無染著陀羅尼。是過去諸佛

起同作趣○說同作言

惟同作唯下同

○刪三本俱作珊○儞下羅下並同間空○哆下阿下婆下並同不間空○底同作儞○囉同作羅○馱下宋元俱無夾註

十元作千

枉三本俱作枉下同○弭下同不間空次同○枉同作枉○意同作顯○喝帝二字明連續下句○底下音註履反三本俱作里切○莎下音註反明作切○囉下念下並三本俱間空○荼同作荼下同○囉明作麗○同下三本俱不間空○般同作槃○喝明作曷○仕三本俱作枉

母。未來諸佛母。現在諸佛母。舍利子。若復有人以十阿僧企耶三千大千世界滿中七寶。奉施諸佛。及以上妙衣服飲食。種種供養經無數劫。若復有人於此陀羅尼乃至一句能受持者。所生之福倍多於彼。何以故。舍利子。此無染著陀羅尼甚深法門。是諸佛母故。時具壽舍利子及諸大衆。聞是法已皆大歡喜。咸願受持

金光明最勝王經如意寶珠品第十四

爾時世尊於大衆中。告阿難陀曰。汝等當知有陀羅尼。名如意寶珠。遠離一切災厄。亦能遮止諸惡雷電。過去如來應正等覺所共宣說。我於今時於此經中。亦爲汝等大衆宣說。能於人天爲大利益哀愍世間。擁護一切令得安樂。時諸大衆及阿難陀。聞佛語已各各至誠。瞻仰世尊聽受神呪。佛言。汝等諦聽。於此東方有光明電王名阿揭多。南方有光明電王名設羝嚕。西方有光明電王名主多光。北方有光明電王名蘇多末尼。若有善男子善女人。得聞如是電王名字。及知方處者。此人卽便遠離一切怖畏之事。及諸災橫悉皆消殄。若於住處書此四方電王名者。於所住處無雷電怖。亦無災厄及諸障惱非時枉死悉皆遠離。爾時世尊卽說呪曰

怛姪他　儞弭　儞弭　儞弭　尼民達哩　窒哩盧迦盧羯儞　窒哩輸攞波儞　曷略叉曷略叉　我某甲及此住處一切恐怖所有苦惱雷電霹靂乃至枉死悉皆遠離莎訶

爾時觀自在菩薩摩訶薩在大衆中。卽從座起偏袒右肩合掌恭敬。白佛言。世尊。我今亦於佛前。略說如意寶珠神呪。於諸人天爲大利益哀愍世間。擁護一切令得安樂。有大威力所求如意。卽說呪曰

怛姪他喝帝　毗喝帝儞喝帝　鉢喇窒體雞　鉢喇底(丁履反)　蜜窒囇　戍提日羝毗末麗　鉢喇婆莎(蘇活反)囇　安荼(入聲)囇般荼囇　稅(平聲)帝　般荼囉婆死儞　喝囇羯荼(引)囇劫畢麗　氷揭羅惡綺　達地目企　曷略叉曷略叉　我某甲及此住處一切恐怖所有苦惱乃至枉死悉皆遠離願我莫見罪惡之事常蒙聖觀自在菩薩大悲威光之所護念莎訶

爾時執金剛祕密主菩薩。卽從座起合掌恭敬白佛言。世尊。我今亦說陀羅尼呪名曰無勝。於諸人天爲大利益。

尼下磨上以下攞下並同不間空○嚑明作麗○呵三本俱作訶下同○甜同作蚶同下音註反明作切○茶三本俱作荼○哩同作里下同○甜同作蚶下同○嚑明作麗○泥同作尼同下元明俱不間空○莎上三本俱間空○他下哩下並同間空○陀宋作抳元明俱作柁○麼三本俱作撻○擻下同有擻字不間空○彌元明俱作儞○健三本俱作撻○旃宋元俱作檀明作梅○茶三本俱作茶○孅同作羅○嚬同作喇○低同作住○麼明作磨○喇宋元俱作剌明作剌次同○枳三本俱作枳○他下三本俱間空○呵同作訶○帝下同不間空○窣同作窣

哀愍世間擁護一切。有大威力所求如願。即說呪曰

怛姪他　毋儞毋儞　毋尼　𠺕末底末底　蘇末底莫訶末底　呵呵呵　𠹷婆以　那悉底帝引　波跛　跛折攞　波儞　惡甜火含反　姪㗚茶上　莎訶

世尊。我此神呪名曰無勝擁護。若有男女一心受持。書寫讀誦憶念不忘。我於晝夜常護是人。於一切恐怖乃至枉死悉皆遠離。爾時索訶世界主梵天王。即從座起合掌恭敬白佛言。世尊。我亦有陀羅尼微妙法門。於諸人天爲大利益。哀愍世間擁護一切。有大威力所求如願。即說呪曰

怛姪他　醯哩弭哩地哩莎訶　跋囉甜魔布𠺕　跋囉甜麼末泥　跋囉甜麼揭鞞　補澀跛僧悉怛𠺕莎訶

世尊我此神呪名曰梵治。悉能擁護持是呪者。令離憂惱及諸罪業。乃至枉死悉皆遠離。爾時帝釋天主。即從座起合掌恭敬白佛言。世尊。我亦有陀羅尼名跋折羅扇儞。是大神呪能除一切恐怖厄難。乃至枉死悉皆遠離。拔苦與樂利益人天。即說呪曰

怛姪他毗儞婆喇儞　畔陀麼彈滯　磨膩儞擻　儞瞿哩　犍陀哩旃荼哩　摩登耆上　卜羯死　薩囉跋囇鞞去　嗢娜末低苔麼嗢多喇儞　莫呼喇儞達喇儞計斫羯囉婆枳　捨伐哩奓伐哩莎訶

爾時多聞天王。持國天王。增長天王。廣目天王。俱從座起合掌恭敬白佛言。世尊。我今亦有神呪。名施一切衆生無畏。於諸苦惱常爲擁護。令得安樂增益壽命。無諸患苦。乃至枉死悉皆遠離。即說呪曰

怛姪他補澀閉　蘇補澀閉　度麼鉢喇呵囇　阿離耶鉢喇設悉帝　扇帝涅目帝　忙揭例窣覩帝　悉哆鼻帝莎訶

爾時復有諸大龍王。所謂末那斯龍王。電光龍王。無熱池龍王。電舌龍王。妙光龍王。俱從座起合掌恭敬白佛言。世尊。我亦有如意寶珠陀羅尼。能遮惡電除諸恐怖。能於人天爲大利益。哀愍世間擁護一切。有大威力所求如願。乃至枉死悉皆遠離。一切毒藥皆令止息。一切造作蠱道呪術。不吉祥事悉令除滅。我今以此神呪奉獻世尊。惟願哀愍慈悲納受。當令我等離此龍趣永捨慳貪。何以故。由此慳貪於生死中受諸苦惱。我等願斷慳貪種子。

他下同間空○諦同作帝次同○弊同作幣○栗同作法○褒下同間空次同○般上同不間空○悉皆同作皆悉

品目宋元俱無之一二字

常三本俱作當○捷明作揵○伎元明俱作技○菖三本俱作昌○蒲宋元俱作蒲○同下夾註跋明作跛○狗三本俱作苟○脂下夾註得元作揭○子下夾註窣宋元俱作箪○松下夾註苦弭宋元俱作苦弭明作弭苦○脂三本俱作咍

卽說呪曰

怛姪他阿折囇 阿末囇阿蜜㗚諦 惡叉褒阿弊褒 奔尼鉢唎耶栗諦 薩婆波跛 鉢喇苦摩尼褒莎訶

阿離褒 般豆蘇波尼褒莎訶

世尊.若有善男子善女人.口中說此陀羅尼明呪.或書經卷受持讀誦.恭敬供養者.終無雷電霹靂及諸恐怖苦惱憂患.乃至枉死悉皆遠離.所有毒藥蠱魅厭禱.害人虎狼師子毒蛇之類.乃至蚊虻悉不爲害.爾時世尊普告大衆.善哉善哉.此等神呪皆有大力.能隨衆生心所求事.悉令圓滿爲大利益.除不至心汝等勿疑.時諸大衆聞佛語已歡喜信受

金光明最勝王經大辯才天女品第十五之一

爾時大辯才天女.於大衆中卽從座起頂禮佛足白佛言.世尊.若有法師說是金光明最勝王經者.我當益其智慧具足莊嚴言說之辯.若彼法師於此經中文字句義.所有忘失皆令憶持能善開悟.復與陀羅尼總持無礙.又此金光明最勝王經.爲彼有情已於百千佛所.種諸善根常受持者.於贍部洲廣行流布不速隱沒.復令無量有情聞是經典.皆得不可思議捷利辯才.無盡大慧善解衆論及諸伎術能出生死.速趣無上正等菩提.於現世中增益壽命.資身之具悉令圓滿.世尊我當爲彼持經法師及餘有情.於此經典樂聽聞者.說其呪藥洗浴之法.彼人所有惡星災變與初生時星屬相違.疫病之苦鬪諍戰陣.惡夢鬼神蠱毒厭魅呪術起屍.如是諸惡爲障難者悉令除滅.諸有智者應作如是洗浴之法.當取香藥三十二味.所謂

菖蒲跋者 牛黃瞿盧折娜 苜蓿香塞畢力迦 麝香莫迦婆伽 雄黃末㮈眵羅 合昏樹尸利灑 白及因達羅喝悉哆 芎藭闍莫迦 狗杞根苦弭 松脂室利薜瑟得迦 桂皮咄者 香附子目窣哆 沈香惡揭嚕 栴檀栴檀娜 零凌香多揭羅 丁子索瞿者 鬱金茶矩麼 婆律膏揭羅婆 葦香捺剌柁 竹黃鶴路戰娜 細豆蔻蘇泣迷羅 甘松苦弭哆 藿香鉢怛羅 茅根香嗢尸羅 叱脂薩洛計 艾納世黎也 安息香窶具攞 芥子薩利殺跛 馬芹葉婆儞 龍花鬚那伽雞薩羅 白膠薩折羅婆 青木矩瑟佗

皆等分以布灑星日.一處擣篩.取其香末.當以此呪呪一百八遍呪曰

怛姪他　蘇訖栗帝　訖栗帝訖栗帝劫摩怛里　繕怒羯囉滯　郝羯喇滯　因達囉闍利膩　鑠羯囒滯
鉢設姪囇　阿伐底羯細　計娜矩覩矩覩　脚迦鼻囇　劫鼻囇劫鼻囇劫毗囉末底(丁里反)　尸羅末底那底度
囉末底哩　波伐雉咩稚囇　室囇室囇　薩底悉體羝莎訶

若樂如法洗浴時　應作壇場方八肘　可於寂靜安隱處　念所求事不離心　應塗牛糞作其壇
於上普散諸花彩　當以淨潔金銀器　盛滿美味幷乳蜜　於彼壇場四門所　四人守護法如常
令四童子好嚴身　各於一角持瓶水　於此常燒安息香　五音之樂聲不絕　幡蓋莊嚴懸繒綵
安在壇場之四邊　復於場內置明鏡　利刀兼箭各四枚　於壇中心埋大盆　應以漏版安其上
用前香末以和湯　亦復安在於壇內　既作如斯布置已　然後誦呪結其壇

結界呪曰

怛姪他　頞喇計　娜也泥(去)　咽囇　弭囇祇囇　企企囇莎訶

如是結界已　方入於壇內　呪水三七遍　散灑於四方　次可呪香湯　滿一百八遍　四邊安幔障
然後洗浴身

呪水呪湯呪曰

怛姪他一　索揭智(貞勵反下同)二　毗揭智三　毗揭茶伐底四　莎訶五

若洗浴訖。其洗浴湯及壇場中供養飲食。棄河地內餘皆收攝。如是浴已方著淨衣。既出壇場入淨室內。呪師教其發弘誓願。永斷衆惡常修諸善於諸有情興大悲心。以是因緣當獲無量隨心福報。復說頌曰

若有病苦諸衆生　種種方藥治不差　若依如是洗浴法　幷復讀誦斯經典　常於日夜念不散
專想慇懃生信心　所有患苦盡消除　解脫貧窮足財寶　四方星辰及日月　威神擁護得延年
吉祥安隱福德增　災變厄難皆除遣

次誦護身呪三七遍。呪曰

〇帝三本俱作計同下同開空〇劫上羝下並同〇囉同作闌〇迦鼻下囉劫眦上囉並同作麗劫鼻上囉宋作麗〇囉三本俱作羅〇底下音註反明作切〇那同作剛〇哩三本俱作里〇雉同作矩末同作秣
囇同作麗下同〇企上同不開空〇莎上同開空
智下明無音註

他下訶下寫下
褒下拖下並三
本俱間空○滯
下同不間空○
荼同作荼同下
音註反明作切
○也三本俱連
續上句下同○
甜同作蚶次同
○囉元作羅○
酸下音註活下
宋元俱有反字
明有切字○覩
三本俱作都○
拖元明俱作柁
○喇下覩明作
都

申同作伸○惟
三本俱作唯○
詞同作辭次同

他下喇下鼻下
囉下鼻下娜下
並三本俱間空
○帝下音註勵
下宋元俱有反
字明無音註○
底下音註里下
宋元俱有反字
明無音註○嚇
三本俱作隷次
同○底同連續
上句○地下同
不間空次同○
曇下夾註去下
明有聲字○只

怛姪他三謎　毗三謎　莎訶　索揭滯　毗揭滯　莎訶　毗揭荼亭耶反　伐底　莎訶婆揭囉　三步多也

莎訶　塞建陀　摩多也　莎訶　尼攞建佗也　莎訶　阿鉢囉市哆　毗嘌耶　也莎訶　呬摩槃哆　三步多也　莎訶　阿儞蜜攞　薄怛囉　也莎訶　南謨薄伽伐都　跋囉甜摩寫莎訶　南謨薩囉酸蘇活底

莫訶提鼻褒莎訶　悉甸覩漫此云成就我某甲　曼怛囉鉢拖莎訶　怛喇覩仳姪哆　跋囉甜摩奴末覩　莎訶

爾時大辯才天女。說洗浴法壇場呪已。前禮佛足白佛言。世尊。若有苾芻苾芻尼鄔波索迦鄔波斯迦。受持讀誦書寫流布是妙經王。如說行者。若在城邑聚落曠野山林僧尼住處。我爲是人將諸眷屬作天伎樂。來詣其所而爲擁護。除諸病苦流星變怪疫疾鬬諍王法所拘。惡夢惡神爲障礙者。蠱道厭術悉皆除殄。饒益是等持經之人苾芻等衆及諸聽者。皆令速渡生死大海不退菩提。爾時世尊聞是說已。讚辯才天女言。善哉善哉。天女。汝能安樂利益無量無邊有情。說此神呪及以香水壇場法式果報難思。汝當擁護最勝經王勿令隱沒常得流通。爾時大辯才天女。禮佛足已還復本座。爾時法師授記憍陳如婆羅門。承佛威力於大衆前。讚請辯才天女曰

聰明勇進辯才天　人天供養悉應受　名聞世間遍充滿　能與一切衆生願　依高山頂勝住所
葺茅爲室在中居　恒結軟草以爲衣　在處常翹於一足　諸天大衆皆來集　咸同一心申讚請
惟願智慧辯才天　以妙言詞施一切

爾時辯才天女。即便受請爲說呪曰

怛姪他慕囉只囉　阿伐帝勵貞　阿伐吒伐底丁里下同　馨遇嚇名具嚇　名具羅伐底　鴦具師末喇只三末底　毗三末底惡近入　喇莫近喇怛囉只　怛囉者伐　底質質哩室里蜜里　末難地　曇去末喇只　八囉拏畢喇褒　盧迦逝瑟丑世反　盧迦失囉瑟恥　盧迦畢喇褒　悉馱跋喇帝　毗麼日企輕利反　輸只折喇　阿鉢喇底喝帝　阿鉢喇底喝哆勃地　南母只南母只　莫訶提鼻鉢喇底近入　喇𠯕火很　拏上南摩塞迦囉　我某甲勃地　達哩奢呬　勃地阿鉢喇底喝哆　婆上跋覩　市婆謎毗輸姪覩　舍悉怛囉輸路迦　曼怛囉畢得迦迦婢耶地數　怛姪他　莫訶喇喇婆鼻　呬里蜜哩呬哩蜜哩　毗折喇覩謎勃地　我某甲勃地輸提

下同不間空○
跐下音註反同
作切下音註皆
同○耻同作耶
○喇三本俱作
唎○昬同作昬
同下酸下並音
註下宋元俱有
反字明有切字
○婆下宋元俱
無夾註上字○
帀三本俱作市
○得同作捋○
呬下同無里字
○熠同作餤○
囉下同註家下
宋元音有反字
明無俱註且不
間空音囉明作
羅○○三本俱
作里哩同○敬
禮同下禮敬

衣明作依
末宋元俱作秣
明作抹

薄伽伐點提毗焰　薩羅酸蘇活點丁焰反羯囉魯家滯雞由　囇雞由囉末底　嚧哩蜜哩呬哩蜜里　阿婆訶耶弭
莫訶提鼻勃陀薩帝娜　達摩薩帝娜　僧伽薩帝娜　因達囉薩帝娜　跋嘍拏薩帝娜　裏盧雞薩底婆地
娜　瓿釤引薩帝娜　薩底伐者泥娜　阿婆訶耶弭　莫訶提鼻　呬哩蜜哩呬哩蜜哩　毗折喇覩　我某甲
勃地　南謨薄伽伐底丁利反　莫訶提鼻薩囉酸底　悉甸覩　曼怛囉鉢陀彌　莎訶

爾時辯才天女說是呪已。告婆羅門言。善哉大士。能爲衆生求妙辯才及諸珍寶神通智慧。廣利一切速證菩提。
如是應知受持法式。即說頌曰

先可誦此陀羅尼　令使純熟無謬失　歸敬三寶諸天衆　請求加護願隨心　敬禮諸佛及法寶
菩薩獨覺聲聞衆　次禮梵王幷帝釋　及護世者四天王　一切常修梵行人　悉可至誠殷重敬
可於寂靜蘭若處　大聲誦前呪讚法　應在佛像天龍前　隨其所有修供養　於彼一切衆生類
發起慈悲哀愍心　世尊妙相紫金身　繫想正念心無亂　世尊護念說教法　隨彼根機令習定
於其句義善思惟　復依空性而修習　應在世尊形像前　一心正念而安坐　即得妙智三摩地
幷護最勝陀羅尼　如來金口演說法　妙響調伏諸人天　舌相隨緣現希有　廣長能覆三千界
如是諸佛妙音聲　至誠憶念心無畏　諸佛皆由發弘願　得此舌相不思議　宣說諸法皆非有
譬如虛空無所著　諸佛音聲及舌相　繫念思量願圓滿　若見供養辯才天　或見弟子隨師教
授此祕法令修學　尊重隨心皆得成　若人欲得最上智　應當一心持此法　增長福智諸功德
必定成就勿生疑　若求財者得多財　求名稱者獲名稱　求出離者得解脫　必定成就勿生疑
無量無邊諸功德　隨其內心之所願　若能如是依行者　必得成就勿生疑　當於淨處著淨衣
應作壇場隨大小　以四淨瓶盛美味　香花供養可隨時　懸諸繒綵幷幡蓋　塗香末香遍嚴飾
供養佛及辯才天　求見天身皆遂願　應三七日誦前呪　可對大辯天佛前　若其不見此天神
應更用心經九日　於後夜中猶不見　更求清淨勝妙處　如法應畫辯才天　供養誦持心無捨

晝夜不生於懈怠　自利利他無窮盡　所獲果報施群生　於所求願皆成就　若不遂意經三月
六月九月或一年　懇懃求請心不移　天眼他心皆悉得

爾時憍陳如婆羅門。聞是說已。歡喜踊躍歎未曾有。告諸大衆作如是言。汝等人天一切大衆。如是當知皆一心聽。我今更欲依世諦法讚彼勝妙辯才天女。即說頌曰

敬禮天女那羅延　於世界中得自在　我今讚歎彼尊者　皆如往昔仙人說　吉祥成就心安隱
聰明慙愧有名聞　爲母能生於世間　勇猛常行大精進　於軍陣處戰恒勝　長養調伏心慈忍
現爲閻羅之長姉　常著青色野蠶衣　好醜容儀皆具有　眼目能令見者怖　無量勝行超世間
歸信之人咸攝受　或在山巖深險處　或居坎窟及河邊　或在大樹諸叢林　天女多依此中住
假使山林野人輩　亦常供養於天女　以孔雀羽作幡旗　於一切時常護世　師子虎狼恒圍遶
牛羊雞等亦相依　振大鈴鐸出音聲　頻陀山衆皆聞響　或執三戟頭圓髻　左右恒持日月旗
黑月九日十一日　於此時中當供養　或現婆蘇大天女　見有鬪戰心常愍　觀察一切有情中
天女最勝無過者　權現牧牛歡喜女　與天戰時常得勝　能久安住於世間　亦爲和忍及暴惡
大婆羅門四明法　幻化呪等悉皆通　於天仙中得自在　能爲種子及大地　諸天女等集會時
如大海潮必來應　於諸龍神藥叉衆　咸爲上首能調伏　於諸女中最梵行　出言猶如世間主
於王住處如蓮華　若在河津喩橋棧　面貌猶如盛滿月　具足多聞作依處　辯才勝出若高峯
念者皆與爲洲渚　阿蘇羅等諸天衆　咸共稱讚其功德　乃至千眼帝釋主　以殷重心而觀察
衆生若有悕求事　悉能令彼速得成　亦令聰辯具聞持　於大地中爲第一　於此十方世界中
如大燈明常普照　乃至神鬼諸禽獸　咸皆遂彼所求心　於諸女中若山峯　同昔仙人久住世
如少女天常離欲　實語猶如大世主　普見世間差別類　乃至欲界諸天宮　唯有天女獨稱尊
不見有情能勝者　若於戰陣恐怖處　或見墮在火坑中　河津險難賊盜時　悉能令彼除怖畏

幡三本俱作幢

女同作妹

成明作或○主元及南藏作王○住三本俱作位

悕三本俱作希○於同作持

主明作王

或被王法所枷縛　或爲怨讎行殺害　若能專注心不移　決定解脫諸憂苦　於善惡人皆擁護
慈悲愍念常現前　是故我以至誠心　稽首歸依大天女

爾時婆羅門。復以呪讚天女曰

敬禮敬禮世間尊　於諸母中最爲勝　三種世間咸供養　面貌容儀人樂觀　種種妙德以嚴身
目如脩廣青蓮葉　福智光明名稱滿　譬如無價末尼珠　我今讚歎最勝者　悉能成辦所求心
眞實功德妙吉祥　譬如蓮花極清淨　身色端嚴皆樂見　衆相希有不思議　能放無垢智光明
於諸念中爲最勝　猶如師子獸中上　常以八臂自莊嚴　各持弓箭刀矟斧　長杵鐵輪并羂索
端正樂見如滿月　言詞無滯出和音　若有衆生心願求　善事隨念令圓滿　帝釋諸天咸供養
皆共稱讚可歸依　衆德能生不思議　一切時中起恭敬

莎訶（此上呪讚是呪亦是讚若持呪時必先誦之）

若欲祈請辯才天　依此呪讚言詞句　晨朝清淨至誠誦　於所求事悉隨心

爾時佛告婆羅門。善哉善哉。汝能如是利益衆生施與安樂。讚彼天女。請求加護獲福無邊。（此品呪法有略有廣或開或合前後不同梵本既多但依一譯後勸者知之）

金光明最勝王經卷第七

讚下三本俱有讚字

脩同作修

見同作觀〇事同作士

訶下夾註誦同作頌見下元無讚字先宋作光明作須

金光明最勝王經卷第八

〔麗食〕〔宋場〕〔元場〕〔明場〕

大唐三藏沙門義淨奉　制譯

大辯才天女品第十五之二

爾時憍陳如婆羅門。說上讚歎及呪讚法。讚辯才天女已。告諸大衆。仁等。若欲請辯才天女哀愍加護。於現世中得無礙辯。聰明大智巧妙言詞。博綜奇才論議文飾。隨意成就無礙滯者。應當如是至誠殷重而請召言。南謨佛陀也。南謨達摩也。南謨僧伽也。南謨諸菩薩衆。獨覺聲聞一切賢聖。過去現在十方諸佛。悉皆已習眞實之語能隨順說。當機實語無虛誑語。已於無量俱胝大劫常說實語。有實語者悉皆隨喜。以不妄語故。出廣長舌能覆於面。覆贍部洲及四天下。能覆一千二千三千世界。普覆十方世界。圓滿周遍不可思議。能除一切煩惱炎熱。敬禮敬禮一切諸佛。如是舌相。願我某甲。皆得成就微妙辯才。至心歸命

敬禮諸佛妙辯才　諸大菩薩妙辯才　獨覺聖者妙辯才　四向四果妙辯才　四聖諦語妙辯才
正行正見妙辯才　梵衆諸仙妙辯才　大天烏摩妙辯才　塞建陀天妙辯才　摩那斯王妙辯才
聰明夜天妙辯才　四大天王妙辯才　善住天子妙辯才　金剛密主妙辯才　吠率怒天妙辯才
毗摩天女妙辯才　侍數天神妙辯才　室唎天女妙辯才　室唎末多妙辯才　醯哩言詞妙辯才
諸母大母妙辯才　訶哩底母妙辯才　諸藥叉神妙辯才　十方諸王妙辯才　所有勝業資助我
令得無窮妙辯才
敬禮無欺誑　敬禮解脫者　敬禮離欲人　敬禮捨纏蓋　敬禮心清淨　敬禮光明者　敬禮眞實語
敬禮無塵習　敬禮住勝義　敬禮大衆生　敬禮辯才天　令我詞無礙　願我所求事　皆悉速成就
無病常安隱　壽命得延長　善解諸明呪　勤修菩提道　廣饒益群生　求心願早遂　我說眞實語

譯號制下元有第五二字
品目宋元俱無第十五三字○二同作餘
詞三本俱作辭下同○謨同作無
唎宋元俱作利明作則
得明作行

我說無誑語　天女妙辯才　令我得成就　惟願天女來　令我語無滯　速入身口內　聰明足辯才
願令我舌根　當得如來辯　由彼語威力　調伏諸衆生　我所出語時　隨事皆成就　聞者生恭敬
所作不唐捐　若我求辯才　事不成就者　天女之實語　皆悉成虛妄　有作無間罪　佛語令調伏
及以阿羅漢　所有報恩語　舍利子目連　世尊衆第一　斯等眞實語　願我皆成就　我今皆召請
佛之聲聞衆　皆願速來至　成就我求心　所求眞實語　皆願無虛誑　上從色究竟　及以淨居天
大梵及梵輔　一切梵王衆　乃至遍三千　索訶世界主　幷及諸眷屬　我今皆請召　惟願降慈悲
哀愍同攝受　他化自在天　及以樂變化　覩史多天衆　慈氏當成就　夜摩諸天衆　及三十三天
四大王衆天　一切諸天衆　地水火風神　依妙高山住　七海山神衆　所有諸眷屬　滿財及五頂
日月諸星辰　如是諸天衆　令世間安隱　斯等諸天神　不樂作罪業　敬禮鬼子母　及最小愛兒
天龍藥叉衆　乾闥阿蘇羅　及以緊那羅　莫呼洛伽等　我以世尊力　悉皆申請召　願降慈悲心
與我無礙辯　一切人天衆　能了他心者　皆願加神力　與我妙辯才　乃至盡虛空　周遍於法界
所有含生類　與我妙辯才

爾時辯才天女聞是請已。告婆羅門言。善哉大士。若有男子女人能依如是呪及呪讚。如前所說受持法式。歸敬三寶虛心正念。於所求事皆不唐捐。兼復受持讀誦此金光明微妙經典。所願求者無不果遂速得成就。除不至心。時婆羅門深心歡喜合掌頂受。爾時佛告辯才天女。善哉善哉。善女天。汝能流布是妙經王。擁護所有受持經者。及能利益一切衆生令得安樂。說如是法施與辯才不可思議得福無量。諸發心者速趣菩提

金光明最勝王經大吉祥天女品第十六

爾時大吉祥天女。卽從座起前禮佛足。合掌恭敬白佛言。世尊。我若見有苾芻苾芻尼鄔波索迦鄔波斯迦。受持讀誦爲人解說是金光明最勝王經者。我當專心恭敬供養此等法師。所謂飮食衣服臥具醫藥及餘一切所須

惟宋作唯次同

大明作天

天龍三本俱作龍天

得同作復
琉明作瑠下同
常明作當

資具皆令圓滿無有乏少。若晝若夜於此經王所有句義。觀察思量安樂而住。令此經典於贍部洲廣行流布。爲彼有情已於無量百千佛所種善根者。常使得聞不速隱沒。復於無量百千億劫。當受人天種種勝樂。常得豐稔永除飢饉。一切有情恒受安樂。亦得値遇諸佛世尊。於未來世速證無上大菩提果。永絕三塗輪迴苦難。世尊我念過去有琉璃金山寶花光照吉祥功德海如來應正等覺十號具足。我於彼所種諸善根。由彼如來慈悲愍念威神力故。令我今日隨所念處。隨所視方隨所至國。能令無量百千萬億衆生受諸快樂。乃至所須衣服飲食資生之具。金銀琉璃車𤦲馬瑙珊瑚琥珀眞珠等寶。悉令充足。若復有人至心讀誦是金光明最勝王經。亦當日日燒衆名香及諸妙花。爲我供養彼琉璃金山寶花光照吉祥功德海如來應正等覺。復當每日於三時中稱念我名。別以香花及諸美食供養於我。亦常聽受此妙經王。得如是福。而說頌曰

由能如是持經故　自身眷屬離諸衰　所須衣食無乏時　威光壽命難窮盡　能令地味當增長
諸天降雨隨時節　令諸天衆咸歡悅　及以園林穀果神　叢林果樹竝滋榮　所有苗稼咸成就
欲求珍財皆滿願　隨所念者遂其心

佛告大吉祥天女。善哉善哉汝能如是憶念昔因報恩供養。利益安樂無邊衆生。流布是經功德無盡

金光明最勝王經大吉祥天女增長財物品第十七

爾時大吉祥天女復白佛言。世尊。北方薜室羅末拏天王城名有財。去城不遠有園名曰妙華福光。中有勝殿七寶所成。世尊。我常住彼。若復有人欲求五穀日日增多倉庫盈溢者。應當發起敬信之心。淨治一室瞿摩塗地。應畫我像。種種瓔珞周帀莊嚴。當洗浴身著淨衣服。塗以名香入淨室內。發心爲我每日三時稱彼佛名及此經名號。而申禮敬。南謨琉璃金山寶花光照吉祥功德海如來。持諸香花及以種種甘美飲食。至心奉獻。亦以香花及諸飲食供養我像。復持飲食散擲餘方。施諸神等。實言邀請大吉祥天。發所求願。若如所言是不虛者。於我所請勿令空爾。于時吉祥天女。知是事已便生愍念。令其宅中財穀增長。卽當誦呪請召於我。先稱佛名及菩薩名字。

一心敬禮。南謨一切十方三世諸佛。南謨寶髻佛。南謨無垢光明寶幢佛。南謨金幢光佛。南謨百金光藏佛。南謨金蓋寶積佛。南謨金華光幢佛。南謨大燈光佛。南謨大寶幢佛。南謨東方不動佛。南謨南方寶幢佛。南謨西方無量壽佛。南謨北方天鼓音王佛。南謨妙幢菩薩。南謨金光菩薩。南謨金藏菩薩。南謨常啼菩薩。南謨法上菩薩。南謨善安菩薩。敬禮如是佛菩薩已。次當誦呪請召我大吉祥天女。由此呪力。所求之事皆得成就。卽說呪曰

南謨室唎莫訶天女　怛姪他　鉢唎脯𠰒拏折囇　三曼頞　達喇設泥(去聲下皆同爾)　莫訶毘訶囉揭諦　三曼哆毘曇末泥　莫訶迦哩也　鉢喇底瑟佗鉢泥　薩婆頞他婆彈泥　蘇鉢喇底哺囇　痾耶娜達摩多　莫訶毘俱比諦　莫訶迷咄嚕　鄔波僧呬羝　莫訶頡喇使　蘇僧逝(入聲)哩呬羝　三曼多頞他　阿奴波喇泥莎訶

世尊。若人誦持如是神呪請召我時。我聞請已卽至其所令願得遂。世尊。是灌頂法句。定成就句。眞實之句。無虛誑句。是平等行。於諸衆生是正善根。若有受持讀誦呪者。應七日七夜受八支戒。於晨朝時先嚼齒木淨澡漱已。及於晡後香花供養一切諸佛。自陳其罪。當爲己身及諸含識迴向發願。令所悕求速得成就。淨治一室。或在空閑阿蘭若處。瞿摩爲壇燒栴檀香。而爲供養。置一勝座幡蓋莊嚴。以諸名花布列壇內。應當至心誦持前呪悕望我至。我於爾時卽便護念觀察是人。來入其室就座而坐受其供養。從是以後。當令彼人於睡夢中得見於我。隨所求事以實告知。若聚落空澤及僧住處。隨所求者皆令圓滿。金銀財寶牛羊穀麥飮食衣服。皆得隨心受諸快樂。既得如是勝妙果報。當以上分供養三寶。及施於我廣修法會。設諸飮食布列香花。既供養已所有供養。貨之取直復爲供養。我當終身常住於此。擁護是人令無闕乏。隨所悕求悉皆稱意。亦當時時給濟貧乏。不應慳惜獨爲己身。常讀是經供養不絕。當以此福普施一切迴向菩提。願出生死速得解脫。爾時世尊讚言。善哉吉祥天女。汝能如是流布此經。不可思議自他俱益

金光明最勝王經堅牢地神品第十八

音下三本俱無王字　喇三本俱作唎○泥下夾註同下明無爾字○諦三本俱作帝次同○哩同作里次同○頞下同不間空○娑同作婆○哺同作脯○逝下夾註入下同無聲字○唎上明間空○羝下三本俱不間空○喇宋元俱作剌明作剌○含明作舍○悕三本俱作希次同○貨宋元及南藏俱作貸○我上三本俱有於我二字

輝同作暉下同

行明作生

爾時堅牢地神。卽於衆中從座而起。合掌恭敬而白佛言。世尊。是金光明最勝王經。若現在世。若未來世。若在城邑聚落王宮樓觀。及阿蘭若山澤空林。有此經王流布之處。世尊。我當往詣其所供養恭敬擁護流通。若有方處爲說法師敷置高座。演說經者我以神力不現本身。在於座所頂戴其足。我得聞法深心歡喜。得飡法味增益威光慶悅無量。自身既得如是利益。亦令大地深十六萬八千踰繕那。至金剛輪際。令其地味悉皆增益。乃至四海所有土地。亦使肥濃田疇沃壤倍勝常日。亦復令此贍部洲中江河池沼。所有諸樹藥草叢林。種種花果根莖枝葉。及諸苗稼形相可愛。衆所樂觀色香具足皆堪受用。若諸有情受用如是勝飲食已。長命色力諸根安隱。增益光輝無諸痛惱。心慧勇健無不堪能。又此大地凡有所須。百千事業悉皆周備。世尊。以是因緣諸贍部洲安隱豐樂。人民熾盛無諸衰惱。所有衆生皆受安樂。既受如是身心快樂。於此經王深加愛敬。所在之處皆願受持供養恭敬尊重讚歎。又復於彼說法大師法座之處。悉皆往彼爲諸衆生。勸請說是最勝經王。何以故。世尊。由說此經我之自身。幷諸眷屬咸蒙利益。光輝氣力勇猛威勢。顏容端正倍勝於常。世尊。我堅牢地神。蒙法味已令贍部洲縱廣七千踰繕那地。皆悉沃壤乃至如前。所有衆生皆受安樂。是故世尊。時彼衆生爲報我恩應作是念。我當必定聽受是經。恭敬供養尊重讚歎。作是念已。卽從住處城邑聚落舍宅空地。詣法會所頂禮法師聽受是經。既聽受已各還本處。心生慶喜共作是言。我等今者得聞甚深無上妙法。卽是攝受不可思議功德之聚。由經力故我等當値無量無邊百千俱胝那庾多佛。承事供養。永離三塗極苦之處。復於來世百千生中常生天上。及在人間受諸勝樂。時彼諸人各還本處。爲諸人衆說是經王。若一喩一品一昔因緣。一如來名一菩薩名。一四句頌或復一句。爲諸衆生說是經典乃至首題名字。世尊。隨諸衆生所住之處。其地悉皆沃壤肥濃。過於餘處。凡是土地所生之物。悉得增長滋茂廣大。令諸衆生受於快樂。多饒珍財好行惠施。心常堅固深信三寶。作是語已。爾時世尊告堅牢地神曰。若有衆生聞是金光明最勝經王乃至一句。命終之後當得往生三十三天及餘天處。若有衆生爲欲供養是經王故。莊嚴宅宇乃至張一傘蓋懸一繒幡。由是因緣。六天之上如念受生。七寶妙宮隨意受用。各各自然有七千天女。共相娛樂。日夜常受不可思議殊勝之樂。作是語已。爾時堅牢地神白佛言。世尊。以是因緣

若有四衆。幷於法座說是法時。我當晝夜擁護是人。自隱其身在於座所頂戴其足。世尊。如是經典爲彼衆生已於百千佛所種善根者。於贍部洲流布不滅。是諸衆生聽斯經者。於未來世無量百千倶胝那庾多劫。天上人中常受勝樂。得遇諸佛速成阿耨多羅三藐三菩提。不歷三塗生死之苦。爾時堅牢地神白佛言。世尊。我有心呪。能利人天安樂一切。若有男子女人及諸四衆。欲得親見我眞身者。應當至心持此陀羅尼。隨其所願皆悉遂心。所謂資財珍寶伏藏。及求神通長年妙藥。幷療衆病降伏怨敵制諸異論。當於淨室安置道場。洗浴身已著鮮潔衣。踞草座上。於有舍利尊像之前。或有舍利制底之所。燒香散花飮食供養。於白月八日布灑星合。卽可誦此請召之呪

怛姪他只哩只哩　主嚕主嚕句嚕句嚕　拘柱拘柱覩柱覩柱　縛訶上縛訶　伐捨伐捨　莎訶

世尊。此之神呪。若有四衆誦一百八遍請召於我。我爲是人卽來赴請。又復世尊。若有衆生欲得見我現身共語者。亦應如前安置法式誦此神呪

怛姪他頞折泥去頞力剎泥室尼達哩訶訶呬呬區嚕　伐囉莎訶

世尊。若人持此呪時。應誦一百八遍幷誦前呪。我必現身隨其所願。悉得成就終不虛然。若欲誦此呪時。先誦護身呪曰

怛姪他儞室里末捨羯撥捺撥矩撥勃地上勃地囇　底撥婢撥矩句撥　佉婆上只里莎訶

世尊。誦此呪時取五色線。誦呪二十一遍。作二十一結。繫在左臂肘後。卽便護身無有所懼。若有至心誦此呪者所求必遂我不妄語。我以佛法僧寶。而爲要契證知是實。爾時世尊告地神曰。善哉善哉。汝能以是實語神呪護此經王及說法者。以是因緣令汝獲得無量福報

金光明最勝王經僧愼爾耶藥叉大將品第十九

爾時僧愼爾耶藥叉大將。幷與二十八部藥叉諸神。於大衆中皆從座起。偏袒右肩右膝著地。合掌向佛白言。世

他下嚕下柱下幷三本倶間空○哩同作里次同○應三本倶作復

他下呬下囉下幷同間空○尼明作尸

他下里下撥下里下三本倶間空○末明作未○只下里同作哩

一下三本俱無切字○詞同作辭○神同作光○植宋元俱作殖○也明作耶下同○蚶下音註反明作切禰下亦同○他下三本俱間空○哩宋元俱作里下同○健上只下並元明俱間空○陀下哩三本俱作里次同○達上明不間空○茶三本俱作茶次同○勸下音註間宋元俱作間明無音註且不間空○第下夾註去下三本俱有音字○栴元明俱作旃○禰元作攝明作檽○囉下夾註上下三本俱有音字○陀同作佗○耶下同不間空○秣明作末○爐同作爐次同

尊。此金光明最勝經王。若現在世及未來世。所在宣揚流布之處。若於城邑聚落山澤空林。或王宮殿或僧住處。世尊。我僧愼爾耶藥叉大將。幷與二十八部藥叉諸神俱詣其所。各自隱形隨處擁護彼說法師。令離衰惱常受安樂。及聽法者若男若女童男童女。於此經中乃至受持一四句頌。或持一句或此經王首題名號。及此經中一如來名一菩薩名。發心稱念恭敬供養者。我當救護攝受令無災橫離苦得樂。世尊。何故我名正了知。此之因緣是佛親證。我知諸法我曉一切法。隨所有一切法。如所有一切法。諸法種類體性差別。世尊。如是諸法我能了知。我有難思智光。我有難思智炬。我有難思智行。我有難思智聚。我於難思智境而能通達。世尊。如我於一切法。正知正曉。正覺能正觀察。世尊。以是因緣我藥叉大將名正了知。以是義故。我能令彼說法之師。言詞辯了具足莊嚴。亦令精氣從毛孔入。身力充足威神勇健。難思智光皆得成就。得正憶念無有退屈。增益彼身令無衰減。諸根安樂常生歡喜。以是因緣爲彼有情。已於百千佛所。種諸善根修福業者。於贍部洲廣宣流布不速隱沒。彼諸有情聞是經已。得不可思議大智光明。及以無量福智之聚。於未來世當受無量俱胝那庾多劫不可思量人天勝樂。常與諸佛共相値遇。速證無上正等菩提。閻羅之界三塗極苦。不復經過。爾時正了知藥叉大將白佛言。世尊。我有陀羅尼。今對佛前親自陳說。爲欲饒益憐愍諸有情故。卽說呪曰

南謨佛陀(引)也　南謨達摩(引)也　南謨僧伽(引)也　南謨跋囉蚶(火含反)摩也　南謨因達囉也　南謨折咄喃　莫喝囉闍喃　怛姪他呬哩呬哩　弭哩弭哩瞿哩　莫訶瞿哩健陀哩　莫訶健陀哩　達羅弭雉　莫訶達羅弭雉　單茶曲勸(驅聞反)第(去)　訶訶訶訶訶　呬呬呬呬呬　呼呼呼呼呼　漢魯曇謎瞿曇謎　者者者者只只只主主主　栴(之涉反)攝　鉢攞　尸揭囉(上)尸揭囉　嗢底瑟陀呬　薄伽梵僧愼爾耶　莎訶

若復有人於此明呪能受持者。我當給與資生樂具飮食衣服花果珍異。或求男女童男童女。金銀珍寶諸瓔珞具。我皆供給隨所願求令無闕乏。此之明呪有大威力。若誦呪時我當速至其所。令無障礙隨意成就。若持此呪時。應知其法先畫一鋪。僧愼爾耶藥叉形像高四五尺手執鉾鑽。於此像前作四方壇。安四滿瓶蜜水或沙糖水。塗香秣香燒香及諸花鬘。又於壇前作地火爐中安炭火。以蘇摩芥子燒於爐中。口誦前呪一百八遍。一遍一燒。

乃至我藥叉大將自來現身。問呪人曰。爾何所須意所求者。即以事答。我即隨言。於所求事皆令滿足。或須金銀及諸伏藏。或欲神仙乘空而去。或求天眼通。或知他心事。於一切有情隨意自在。令斷煩惱速得解脫。皆得成就。爾時世尊告正了知藥叉大將曰。善哉善哉。汝能如是利益一切衆生。說此神呪擁護正法福利無邊

金光明最勝王經王法正論品第二十

爾時此大地神女名曰堅牢。於大衆中從座而起。頂禮佛足合掌恭敬。白佛言世尊。於諸國中爲人王者。若無正法不能治國安養衆生。及以自身長居勝位。惟願世尊。慈悲哀愍。當爲我說王法正論治國之要。令諸人王得聞法已。如說修行正化於世。能令勝位永保安寧。國內人民咸蒙利益。爾時世尊於大衆中告堅牢地神曰。汝當諦聽。過去有王名力尊幢。其王有子名曰妙幢。受灌頂位未久之頃。爾時父王告妙幢言。有王法正論名天主教法。我於昔時受灌頂位而爲國主。我之父王名智力尊幢。爲我說是王法正論。我依此論於二萬歲善治國土。我不曾憶起一念心行於非法。汝於今日亦應如是。勿以非法而治於國。云何名爲王法正論。汝今善聽。當爲汝說。爾時力尊幢王。即爲其子以妙伽他說正論曰

我說王法論　利安諸有情　爲斷世間疑　滅除衆過失　一切諸天主　及以人中王　當生歡喜心
合掌聽我說　往昔諸天衆　集在金剛山　四王從座起　請問於大梵　梵主最勝尊　天中大自在
願哀愍我等　爲斷諸疑惑　云何處人世　而得名爲天　復以何因緣　號名曰天子　云何生人間
獨得爲人主　云何在天上　復得作天王　如是護世間　問彼梵王已　爾時梵天主　即便爲彼說
護世汝當知　爲利有情故　問我治國法　我說應善聽　由先善業力　生天得作王　若在於人中
統領爲人主　諸天共加護　然後入母胎　既至母胎中　諸天復守護　雖生在人世　尊勝故名天
由諸天護持　亦得名天子　三十三天主　分力助人王　及一切諸天　亦資自在力　除滅諸非法
惡業令不生　教有情修善　使得生人上　人及蘇羅衆　并揵闥婆等　羅刹栴荼羅　悉皆資半力

人民三本俱作居人

主三本俱作王

揵同作健○栴元明俱作旃○荼三本俱作茶

蹹明作踏
果宋作菓明作苗
木三本俱作林
噉明作啗下同

父母資半力　令捨惡修善　諸天共護持　示其諸善報　若造諸惡業　令於現世中　諸天不護持
示其諸惡報　國人造惡業　王捨不禁制　斯非順正理　治擯當如法　若見惡不遮　非法便滋長
遂令王國內　姧詐日增多　王見國中人　造惡不遮止　三十三天衆　咸生忿怒心　因此損國政
諂僞行世間　被他怨敵侵　破壞其國土　居家及資具　積財皆散失　種種諂誑生　更互相侵奪
由正法得王　而不行其法　國人皆破散　如象蹹蓮池　惡風起無恒　暴雨非時下　妖星多變怪
日月蝕無光　五穀衆花果　果實皆不成　國土遭飢饉　由王捨正法　若王捨正法　以惡法化人
諸天處本宮　見已生憂惱　彼諸天王衆　共作如是言　此王作非法　惡黨相親附　王位不久安
諸天皆忿恨　由彼懷忿故　其國當敗亡　以非法教人　流行於國內　鬭諍多姧僞　疾疫生衆苦
天主不護念　餘天咸捨棄　國土當滅亡　王身受苦厄　父母及妻子　兄弟幷姊妹　俱遭愛別離
乃至身亡歿　變怪流星墮　二日俱時出　他方怨賊來　國人遭喪亂　國所重大臣　枉橫而身死
所愛象馬等　亦復皆散失　處處有兵戈　人多非法死　惡鬼來入國　疾疫遍流行　國中最大臣
及以諸輔相　其心懷諂佞　並悉行非法　見行非法者　而生於愛敬　於行善法人　苦楚而治罰
由愛敬惡人　治罰善人故　星宿及風雨　皆不以時行　有三種過生　正法當隱沒　衆生無光色
地肥皆下沈　由敬惡輕善　復有三種過　非時降霜雹　飢疫苦流行　穀稼諸果實　滋味皆損減
於其國土中　衆生多疾病　國中諸樹木　先生甘美果　由斯皆損減　苦澀無滋味　先有妙園林
可愛遊戲處　忽然皆枯悴　見者生憂惱　稻麥諸果實　美味漸消亡　食時心不喜　何能長諸大
衆生光色滅　勢力盡衰微　食噉雖復多　不能令飽足　於其國界中　所有衆生類　少力無勇勢
所作不堪能　國人多疾患　衆苦逼其身　鬼魅遍流行　隨處生羅刹　若王作非法　親近於惡人
令三種世間　因斯受衰損　如是無邊過　出在於國中　皆由見惡人　棄捨不治擯　由諸天加護
得作於國王　而不以正法　守護於國界　若人修善行　當得生天上　若造惡業者　死必墮三塗

若王見國人　縱其造過失　三十三天衆　皆生熱惱心　不順諸天教　及以父母言　此是非法人
非王非孝子　若於自國中　見行非法者　如法當治罰　不應生捨棄　是故諸天衆　皆護持此王
以滅諸惡法　能修善根故　王於此世中　必招於現報　由於善惡業　行捨勸衆生　爲示善惡報
故得作人王　諸天共護持　一切咸隨喜　由自利利他　治國以正法　見有諂佞者　應當如法治
假使失王位　及以害命緣　終不行惡法　見惡而捨棄　害中極重者　無過失國位　皆因諂佞人
爲此當治罰　若有諂誑人　當失於國位　由斯損王政　如象入花園　天主皆瞋恨　阿蘇羅亦然
以彼爲人王　不以法治國　是故應如法　治罰於惡人　以善化衆生　不順於非法　寧捨於身命
不隨非法友　於親及非親　平等觀一切　若爲正法王　國內無偏黨　法王有名稱　普聞三界中
三十三天衆　歡喜作是言　贍部洲法王　彼即是我子　以善化衆生　正法治於國　勸行於正法
當令生我宮　天及諸天子　及以蘇羅衆　因王正法化　常得心歡喜　天衆皆歡喜　共護於人王
衆星依位行　日月無乖度　和風常應節　甘雨順時行　苗實皆善成　人無飢饉者　一切諸天衆
充滿於自宮　是故汝人王　忘身弘正法　應尊重法寶　由斯衆安樂　常當親正法　功德自莊嚴
眷屬常歡喜　能遠離諸惡　以法化衆生　恒令得安隱　令彼一切人　修行於十善　率土常豐樂
國土得安寧　王以法化人　善調於惡行　常得好名稱　安樂諸衆生

爾時大地一切人王及諸大衆。聞佛說此古昔人王治國要法。得未曾有。皆大歡喜信受奉行

金光明最勝王經卷第八

有三本俱作友
善成明作成善
寶明作實
常三本俱作當

金光明最勝王經卷第九

〔麗食〕〔宋場〕〔元場〕〔明場〕

大唐三藏沙門義淨奉　制譯

善生王品第二十一

爾時世尊。爲諸大衆說王法正論已。復告大衆。汝等應聽。我今爲汝說其往昔奉法因緣。卽於是時說伽他曰

我昔曾爲轉輪王　捨此大地幷大海　四洲珍寶皆充滿　持以供養諸如來　我於往昔無量劫
爲求淸淨眞法身　所愛之物皆悉捨　乃至身命心無悋　又於過去難思劫　有正遍知名寶髻
於彼如來涅槃後　有王出世名善生　爲轉輪王化四洲　盡大海際咸歸伏　有城名曰妙音聲
時彼輪王於此住　夜夢聞說佛福智　見有法師名寶積　處座端嚴如日輪　演說金光微妙典
爾時彼王從夢覺　生大歡喜充遍身　至天曉已出王宮　往詣苾芻僧伽處　恭敬供養聖衆已
卽便問彼諸大衆　頗有法師名寶積　功德成就化衆生　爾時寶積大法師　在一室中而住止
正念誦斯微妙典　端然不動身心樂　時有苾芻引導王　至彼寶積所居處　見在室中端身坐
光明妙相遍其身　白王此卽是寶積　能持甚深佛行處　所謂微妙金光明　諸經中王最第一
時王卽便禮寶積　恭敬合掌而致請　唯願滿月面端嚴　爲說金光微妙法　寶積法師受王請
許爲說此金光明　周遍三千世界中　諸天大衆咸歡喜　王於廣博淸淨處　奇妙珍寶而嚴飾
上妙香水灑遊塵　種種雜花皆散布　卽於勝處敷高座　懸繒幡蓋以莊嚴　種種末香及塗香
香氣芬馥皆周遍　天龍修羅緊那羅　莫呼洛伽及藥叉　諸天悉雨曼陀花　咸來供養彼高座
復有千萬億諸天　樂聞正法俱來集　法師初從本座起　咸悉供養以天花　是時寶積大法師
淨洗浴已著鮮服　詣彼大衆法座所　合掌虔心而禮敬　天主天衆及天女　悉皆共散曼陀花

妙明作勝
修元作脩
服三本俱作衣

百千天樂難思議　住在空中出妙響　爾時寶積大法師　卽昇高座跏趺坐　念彼十方諸刹土
百千萬億大慈尊　遍及一切苦衆生　皆起平等慈悲念　爲彼請主善生故　演說微妙金光明
王旣得聞如是法　合掌一心唱隨喜　聞法希有淚交流　身心大喜皆充遍　于時國主善生王
爲欲供養此經故　手持如意末尼寶　發願咸爲諸衆生　今可於斯贍部洲　普雨七寶瓔珞具
所有匱乏資財者　皆得隨心受安樂　卽便遍雨於七寶　悉皆充足四洲中　瓔珞嚴身隨所須
衣服飮食皆無乏　爾時國主善生王　見此四洲雨珍寶　咸持供養寶髻佛　所有遺教苾芻僧
應知過去善生王　卽我釋迦牟尼是　爲於昔時捨大地　及諸珍寶滿四洲　昔時寶積大法師
爲彼善生說妙法　因彼開演經王故　東方現成不動佛　以我曾聽此經王　合掌一言稱隨喜
及施七寶諸功德　獲此最勝金剛身　金光百福相莊嚴　所有見者皆歡喜　一切有情無不愛
俱胝天衆亦同然　過去曾經九十九　俱胝億劫作輪王　亦於小國爲人王　復經無量百千劫
於無量劫爲帝釋　亦復曾爲大梵王　供養十力大慈尊　彼之數量難窮盡　我昔聞經隨喜善
所有福聚量難知　由斯福故證菩提　獲得法身眞妙智

爾時大衆聞是說已。歎未曾有。皆願奉持金光明經流通不絕

金光明最勝王經諸天藥叉護持品第二十二

爾時世尊告大吉祥天女曰。若有淨信善男子善女人。欲於過去未來現在諸佛。以不可思議廣大微妙供養之具而爲奉獻。及欲解了三世諸佛甚深行處。是人應當決定至心。隨是經王所在之處。城邑聚落或山澤中。廣爲衆生敷演流布。其聽法者應除亂想。攝耳用心。於時世尊。卽爲彼天及諸大衆。說伽他曰

若欲於諸佛　不思議供養　復了諸如來　甚深境界者　若見演說此　最勝金光明　應親詣彼方
至其所住處　此經難思議　能生諸功德　無邊大苦海　解脫諸有情　我觀此經王　初中後皆善

加明作跏
子同作𢞃
寶三本俱作珠
心下三本俱無
於時二字○於明作施

坐明作座
主元明俱作王
此三本俱作心
主同作王

甚深不可測　譬喩無能比　假使恒河沙　大地塵海水　虛空諸山石　無能喩少分　欲入深法界
應先聽是經　法性之制底　甚深善安住　於斯制底內　見我牟尼尊　悅意妙音聲　演說斯經典
由此俱胝劫　數量難思議　生在人天中　常受勝妙樂　若聽是經者　應作如是心　我得不思議
無邊功德蘊　假使大火聚　滿百踰繕那　爲聽此經王　直過無辭苦　既至彼住處　得聞如是經
能滅於罪業　及除諸惡夢　惡星諸變怪　蠱道邪魅等　得聞是經時　諸惡皆捨離　應嚴勝高座
淨妙若蓮花　法師處其上　猶如大龍坐　於斯安坐已　說此甚深經　書寫及誦持　幷爲解其義
法師捨此座　往詣餘方所　於此高座中　神通非一相　或見法師像　猶在高座上　或時見世尊
及以諸菩薩　或作普賢像　或如妙吉祥　或見慈氏尊　身處於高座　或見希奇相　及以諸天像
暫得覩容儀　忽然還不現　成就諸吉祥　所作皆隨意　功德悉圓滿　世尊如是說　最勝有名稱
能滅諸煩惱　他國賊皆除　戰時常得勝　惡夢悉皆無　及消諸毒害　所作三業罪　經力能除滅
於此贍部洲　名稱咸充滿　所有諸怨結　悉皆相捨離　設有怨敵至　聞名便退散　不假動兵戈
兩陣生歡喜　梵王帝釋主　護世四天王　及金剛藥叉　正了知大將　無熱池龍王　及以娑揭羅
緊那羅樂神　蘇羅金翅主　大辯才天女　幷大吉祥天　斯等上首天　各領諸天衆　常供養諸佛
法寶不思議　恒生歡喜心　於經起恭敬　斯等諸天衆　皆悉共思惟　遍觀修福者　共作如是說
應觀此有情　咸是大福德　善根精進力　當來生我天　爲聽甚深經　敬心來至此　供養法制底
尊重正法故　憐愍於衆生　而作大饒益　於此深經典　能爲法寶器　入此法門者　能入於法性
於此金光明　至心應聽受　是人曾供養　無量百千佛　由彼諸善根　得聞此經典　如是諸天主
天女大辯才　幷彼吉祥天　及以四王衆　無數藥叉衆　勇猛有神通　各於其四方　常來相擁護
日月天帝釋　風水火諸神　吠率怒大肩　閻羅辯才等　一切諸護世　勇猛具威神　擁護持經者
晝夜常不離　大力藥叉王　那羅延自在　正了知爲首　二十八藥叉　餘藥叉百千　神通有大力

王三本俱作主
揵同作乾○大元作人(ー)之南藏作足○羊明作半○支三本俱作犬○娑同作婆
衆同作等
天明作大

恒於恐怖處　常來護此人　金剛藥叉王　幷五百眷屬　諸大菩薩衆　常來護此人　寶王藥叉王
及以滿賢王　曠野金毗羅　賓度羅黃色　此等藥叉王　各五百眷屬　見聽此經者　皆來共擁護
彩軍揵闥婆　菴王常戰勝　珠頸及青頸　幷勃里沙王　大最勝大黑　蘇跋拏雞舍　半之迦羊足
及以大婆伽　小渠幷護法　及以獼猴王　針毛及日支　寶髮皆來護　大渠諾拘羅　栴檀欲中勝
舍羅及雪山　及以娑多山　皆有大神通　雄猛具大力　見持此經者　皆來相擁護　訶那娑答多
及以娑揭羅　目眞嘗羅葉　難陀小難陀　於百千龍中　神通具威德　共護持經人　晝夜常不離
婆稚羅睺羅　毗摩質多羅　母旨苦跋羅　大肩及歡喜　及餘蘇羅王　幷無數天衆　大力有勇健
皆來護是人　訶利底母神　五百藥叉衆　於彼人睡覺　常來相擁護　旃茶旃茶利　藥叉旃稚女
昆帝拘吒齒　吸衆生精氣　如是諸神衆　大力有神通　常護持經者　晝夜恒不離　上首辯才天
無量諸天女　吉祥天爲首　幷餘諸眷屬　此大地神女　果實園林神　樹神江河神　制底諸神等
如是諸天神　心生大歡喜　彼皆來擁護　讀誦此經人　見有持經者　增壽命色力　威光及福德
妙相以莊嚴　星宿現災變　困厄當此人　夢見惡徵祥　皆悉令除滅　此大地神女　堅固有威勢
由此經力故　法味常充足　地肥若流下　過百踰繕那　地神令味上　滋潤於大地　此地厚六十
八億踰繕那　乃至金剛際　地味皆令上　由聽此經王　獲大功德蘊　能使諸天衆　悉蒙其利益
復令諸天衆　威力有光明　歡喜常安樂　捨離於衰相　於此南洲內　林果苗稼神　由此經威力
心常得歡喜　苗實皆成就　處處有妙花　果實竝滋繁　充滿於大地　所有諸果樹　及以衆園林
悉皆生妙花　香氣常芬馥　衆草諸樹木　咸出微妙花　及生甘美果　隨處皆充遍　於此贍部洲
無量諸龍女　心生大歡喜　皆共入池中　種植鉢頭摩　及以分陀利　靑白二蓮花　池中皆遍滿
由此經威力　虛空淨無翳　雲霧皆除遣　冥闇悉光明　日出放千光　無垢焰淸淨　由此經王力
流暉遶四天　此經威德力　資助於天子　皆用贍部金　而作於宮殿　日天子初出　見此洲歡喜

常以大光明　周遍皆照曜　於斯大地內　所有蓮花池　日光照及時　無不盡開發　於此贍部洲
田疇諸果藥　悉皆令善熟　充滿於大地　由此經威力　日月所照處　星辰不失度　風雨皆順時
遍此贍部洲　國土咸豐樂　隨有此經處　殊勝倍餘方　若此金光明　經典流布處　有能講誦者
悉得如上福

爾時大吉祥天女及諸天等。聞佛所說皆大歡喜。於此經王及受持者。一心擁護令無憂惱常得安樂

金光明最勝王經授記品第二十三

爾時如來於大衆中廣說法已。欲爲妙幢菩薩及其二子銀幢銀光。授阿耨多羅三藐三菩提記。時有十千天子。最勝光明而爲上首。俱從三十三天來至佛所。頂禮佛足却坐一面。聽佛說法。爾時佛告妙幢菩薩言。汝於來世過無量無數百千萬億那庾多劫已。於金光明世界。當成阿耨多羅三藐三菩提。號金寶山王如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。出現於世。時此如來般涅槃後。所有教法亦皆滅盡。時彼長子名曰銀幢。即於此界次補佛處。世界爾時轉名淨幢。當得作佛名曰金幢光如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。時此如來般涅槃後。所有教法亦皆滅盡。次子銀光即補佛處。還於此界當得作佛。號曰金光明如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。是時十千天子聞三大士得授記已。復聞如是最勝王經心生歡喜。清淨無垢猶如虛空。爾時如來。知是十千天子善根成熟。即便與授大菩提記。汝等天子。於當來世過無量無數百千萬億那庾多劫。於最勝因陀羅高幢世界。得成阿耨多羅三藐三菩提。同一種姓又同一名。號曰面目清淨優鉢羅香山十號具足。如是次第十千諸佛出現於世。爾時菩提樹神白佛言。世尊。是十千天子從三十三天。爲聽法故來詣佛所。云何如來便與授記當得成佛。世尊。我未曾聞是諸天子。具足修習六波羅蜜多難行。苦行捨於手足頭目髓腦眷屬妻子。象馬車乘奴婢僕使宮殿園林。金銀[琉璃車𤦲馬瑙珊瑚虎珀璧玉珂貝。飲食衣服臥具醫藥。如餘無量百千菩薩。以諸供具供養過去無數百千萬

琉明作瑠次同

惟宋作唯○樹三本俱作地

明元明俱作方

樂三本俱作喜

羸同作羸

壞同作壞○噉明作啗下同○熱三本俱作勢

億那庾多佛。如是菩薩各經無量無邊劫數。然後方得受菩提記。世尊。是諸天子。以何因縁修何勝行種何善根。從彼天來暫時聞法便得授記。惟願世尊。爲我解說斷除疑網。佛告樹神善女天。如汝所說。皆從勝妙善根因縁。勤苦修已方得授記。此諸天子。於妙天宮捨五欲樂。故來聽是金光明經。既聞法已於是經中心生殷重。如淨琉璃無諸瑕穢。復得聞此三大菩薩授記之事。亦由過去久修正行誓願因縁。是故我今皆與授記。於未來世當成阿耨多羅三藐三菩提。時彼樹神聞佛說已歡喜信受

金光明最勝王經除病品第二十四

佛告菩提樹神善女天。諦聽諦聽善思念之。是十千天子。本願因縁今爲汝說。善女天。過去無量不可思議阿僧企耶劫。爾時有佛出現於世。名曰寶髻如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。善女天。時彼世尊。般涅槃後正法滅已。於像法中有王名曰天自在光。常以正法化於人民。猶如父母。是王國中有一長者名曰持水。善解醫明妙通八術。衆生病苦四大不調咸能救療。善女天。爾時持水長者。唯有一子名曰流水。顏容端正人所樂觀。受性聰敏妙閑諸論。書畫算印無不通達。時王國內有無量百千諸衆生類。皆遇疫疾衆苦所逼。乃至無有歡樂之心。善女天。爾時長者子流水。見是無量百千衆生受諸病苦。起大悲心作如是念。無量衆生爲諸極苦之所逼迫。我父長者。雖善醫方妙通八術。能療衆病四大增損。然已衰邁老耄虚羸。要假扶策方能進步。不復能往城邑聚落救諸病苦。今有無量百千衆生。皆遇重病無能救者。我今當至大醫父所。諮問治病醫方祕法。若得解已當往城邑聚落之所。救諸衆生種種疾病。令於長夜得受安樂。時長者子作是念已。即詣父所。稽首禮足合掌恭敬。却住一面。即以伽他請其父曰

慈父當哀愍　我欲救衆生　今請諸醫方　幸願爲我說
云何身衰壞　諸大有增損　復在何時中
能生諸疾病　云何噉飮食　得受於安樂　能使內身中
火熱不衰損　衆生有四病　風黃熱痰癊
及以總集病　云何而療治　何時風病起　何時熱病發
何時動痰癊　何時總集生

時彼長者。聞子請已。復以伽他而答之曰

我今依古仙　所有療病法　次第爲汝說　善聽救衆生
三月是春時　三月名爲夏　三月名秋分　三月謂冬時
此據一年中　三三而別說　二二爲一節　便成歲六時
初二是花時　三四名熱際　五六名雨際　七八謂秋時
九十是寒時　後二名冰雪　既知如是別　授藥勿令差
當隨此時中　調息於飲食　入腹令消散　衆病則不生
節氣若變改　四大有推移　此時無藥資　必生於病苦
醫人解四時　復知其六節　明閑身七界　食藥使無差
謂味界血肉　膏骨及髓腦　病入此中時　知其可療不
病有四種別　謂風熱痰癊　及以總集病　應知發動時
春中痰癊動　夏內風病生　秋時黃熱增　冬節三俱起
春食澀熱辛　夏膩熱鹹醋　秋時冷甜膩　冬酸澀膩甜
於此四時中　服藥及飲食　若依如是味　衆病無由生
食後病由癊　食消時由熱　消後起由風　准時須識病
既識病源已　隨病而設藥　假令患狀殊　先須療其本
風病服油膩　患熱利爲良　癊病應變吐　總集須三藥
風熱癊俱有　是名爲總集　雖知病起時　應觀其本性
如是觀知已　順時而授藥　飲食藥無差　斯名善醫者
復應知八術　總攝諸醫方　於此若明閑　可療衆生病
謂針刺傷破　身疾幷鬼神　惡毒及孩童　延年增氣力
先觀彼形色　語言及性行　然後問其夢　知風熱癊殊
乾瘦少頭髮　其心無定住　多語夢飛行　斯人是風性
少年生白髮　多汗及多瞋　聰明夢見火　斯人是熱性
心定身平整　慮審頭津膩　夢見水白物　是癊性應知
總集性俱有　或二或具三　隨有一偏增　應知是其性
既知本性已　准病而授藥　驗其無死相　方名可救人
諸根倒取境　尊醫人起慢　親友生瞋恚　是死相應知
左眼白色變　舌黑鼻梁攲　耳輪與舊殊　下脣垂向下
訶梨勒一種　具足有六味　能除一切病　無忌藥中王
又三果三辛　諸藥中易得　沙糖蜜蘇乳　此能療衆病
自餘諸藥物　隨病可增加　先起慈愍心　莫規於財利
我已爲汝說　療疾中要事　以此救衆生　當獲無邊果

攲元明俱作欹
蘇明作酥

善女天爾時長者子流水。親問其父八術之要。四大增損時節不同。餌藥方法既善了知。自忖堪能救療衆病。卽便遍至城邑聚落所在之處。隨有百千萬億病苦衆生。皆至其所善言慰喩作如是語。我是醫人我是醫人。善知方藥今爲汝等療治衆病悉令除愈。善女天。爾時衆人聞長者子善言慰喩許爲治病。時有無量百千衆生遇極重病。聞是語已身心踊躍得未曾有。以此因緣所有病苦悉得蠲除。氣力充實平復如本。善女天。爾時復有無量百千衆生病苦深重難療治者。卽共往詣長者子所重請醫療。時長者子。卽以妙藥令服皆蒙除差。善女天是長者子於此國內治百千萬億衆生病苦悉得除差

知明作治

金光明最勝王經長者子流水品第二十五

爾時佛告菩提樹神善女天。爾時長者子流水。於往昔時在天自在光王國內。療諸衆生所有病苦。令得平復受安隱樂。時諸衆生以病除故。多修福業廣行惠施以自歡娛。卽共往詣長者子所。咸生尊敬作如是言。善哉善哉。大長者子。善能滋長福德之事。增益我等安隱壽命。仁今實是大力醫王慈悲菩薩妙閑醫藥善療衆生無量病苦。如是稱歎周遍城邑。善女天。時長者子妻名水肩藏。有其二子。一名水滿。二名水藏。是時流水。將其二子。漸次遊行城邑聚落。過空澤中深險之處。見諸禽獸豺狼狐玃鵰鷲之屬食血肉者。皆悉奔飛一向而去。時長者子作如是念。此諸禽獸何因緣故一向飛走。我當隨後暫往觀之。卽便隨去。見有大池名曰野生其水將盡。於此池中多有衆魚。流水見已生大悲心。時有樹神示現半身。作如是語善哉善哉。善男子。汝有實義名流水者。可愍此魚應與其水。有二因緣。名爲流水。一能流水。二能與水。汝今應當隨名而作。是時流水問樹神言。此魚頭數爲有幾何。樹神答曰數滿十千。善女天。時長者子聞是數已倍益悲心。時此大池爲日所曝餘水無幾。是十千魚將入死門旋身婉轉。見是長者心有所悕。隨逐瞻視目未曾捨。時長者子。見是事已馳趣四方。欲覓於水竟不能得。復望一邊見有大樹。卽便昇上折取枝葉爲作蔭涼。復更推求是池中水從何處來。尋覓不已見一大河名曰水生。時此河邊有諸漁人爲取魚故。於河上流懸險之處。決棄其水不令下過。於所決處卒難修補。便作是念。此崖深峻

走同作起

曝三本俱作暴次同〇婉元明俱作宛〇悕三本俱作希

身明作人
惟明作唯
廐同作厩
餅三本俱作飯下同
爲下同無宣字

設百千人。時經三月亦未能斷。況我一身而堪濟辦。時長者子。速還本城至大王所。頭面禮足却住一面。合掌恭敬作如是言我爲大王國土人民治種種病悉令安隱。漸次遊行至其空澤。見有一池名曰野生。其水欲涸有十千魚。爲日所曝將死不久。惟願大王。慈悲愍念與二十大象。蹔往負水濟彼魚命。如我與諸病人壽命。爾時大王。即勅大臣速疾與此醫王。大象時彼大臣奉王勅已。白長者子。善哉大士。仁今自可至象廐中。隨意選取二十大象。利益衆生令得安樂。是時流水及其二子。將二十大象又從酒家多借皮囊。往決水處以囊盛水象負至池。瀉置池中水即彌漫。還復如故善女天時長者子。於池四邊周旋而視。時彼衆魚亦復隨逐循岸而行。時長者子。復作是念衆魚何故隨我而行。必爲飢火之所惱逼。復欲從我求索於食我今當與。爾時長者子流水。告其子言。汝取一象最大力者。速至家中啓父長者。家中所有可食之物。乃至父母食噉之分。及以妻子奴婢之分。悉皆收取即可持來。爾時二子受父教已。乘最大象速往家中。至祖父所說如上事。收取家中可食之物置於象上。疾還父所至彼池邊是時流水。見其子來身心喜躍。遂取餅食遍散池中。魚得食已悉皆飽足。便作是念。我今施食令魚得命。願於來世當施法食充濟無邊。復更思惟我先曾於空閑林處。見一苾芻讀大乘經。說十二緣生甚深法要。又經中說。若有衆生臨命終時。得聞寶髻如來名者即生天上。我今當爲是十千魚演說甚深十二緣起。亦當稱說寶髻佛名。然贍部洲有二種人。一者深信大乘。二者不信毀呰。亦當爲彼增長信心。時長者子作如是念。我入池中可爲衆魚說深妙法。作是念已即便入水唱言。南謨過去寶髻如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。此佛往昔修菩薩行時。作是誓願。於十方界所有衆生。臨命終時聞我名者。命終之後得生三十三天。爾時流水。復爲池魚演說如是甚深妙法。此有故彼有。此生故彼生。所謂無明緣行。行緣識。識緣名色。名色緣六處。六處緣觸。觸緣受。受緣愛。愛緣取。取緣有。有緣生。生緣老死憂悲苦惱。此滅故彼滅。所謂無明滅則行滅。行滅則識滅。識滅則名色滅。名色滅則六處滅。六處滅則觸滅。觸滅則受滅。受滅則愛滅。愛滅則取滅。取滅則有滅。有滅則生滅。生滅則老死滅。老死滅則憂悲苦惱滅。如是純極苦蘊悉皆除滅。說是法已。復爲宣說十二緣起相應陀羅尼曰

儞下同不間空下同○莎上婆上莎上並同間空○設下宋無儞字○底下三本俱有夾註丁里反下同五字其中反明作切里明作哩○健下三本俱不間空○哩同作里○囇下元明俱間空○囉三本俱作羅○矩下同無矩字○窶同作寠○醫同作翳○悉下同無悉字且間空○沓下音註洽元作治同下宋元俱有反字明有切字○娓元明俱作嫓次同○達上三本俱間空○刺明作剌○詣元作謂○面三本俱作頭

怛姪他　毗折儞毗折儞　毗折儞　僧塞枳儞　僧塞枳儞　僧塞枳儞　毗爾儞　毗爾儞　毗爾儞莎訶

怛姪他　那弭儞那弭儞　那弭儞　殺雉儞　殺雉儞　殺雉儞　颯鉢哩設儞　颯鉢哩設儞　颯鉢哩設儞莎訶　怛姪他　薛達儞薛達儞　薛達儞　窒里瑟儞儞　窒里瑟儞儞　窒里瑟儞儞　鄔波地儞　鄔波地儞　鄔波地儞　莎訶　怛姪他　婆毗儞婆毗儞　婆毗儞　闍底儞　闍底儞　闍底儞　闍摩儞　闍摩儞儞　闍摩儞儞莎訶

爾時世尊爲諸大衆。說長者子昔緣之時。諸人天衆歎未曾有。時四大天王各於其處。異口同音作如是說

善哉釋迦尊　說妙法明呪　生福除衆惡　十二支相應　我等亦說呪　擁護如是法　若有生違逆　不善隨順者　頭破作七分　猶如蘭香梢　我等於佛前　共說其呪曰

怛姪他　呬里謎　揭睇健　陀哩　旃荼哩地囇　騷伐囇石呬伐囇　補囉布囇矩矩末底　崎囉末底達地目契　窶嚕婆母嚕婆　具荼母嚕健提　杜嚕杜嚕毗囇　醫泥悉悉泥沓徒洽下同　娓達沓娓鄔悉怛哩　烏率吒囉伐底　頞刺婆伐底　鉢杜摩伐底　俱蘇摩伐底　莎訶

佛告善女天。爾時長者子流水及其二子。爲彼池魚施水施食。幷說法已俱共還家。是長者子流水復於後時因有聚會。設衆伎樂醉酒而臥。時十千魚同時命過生三十三天起如是念。我等以何善業因緣生此天中。便相謂曰。我等先於贍部洲內墮傍生中共受魚身。長者子流水。施我等水及以餅食。復爲我等說甚深法十二緣起及陀羅尼。復稱寶髻如來名號。以是因緣。能令我等得生此天。是故我今咸應詣彼長者子所。報恩供養爾時十千天子卽於天沒。至贍部洲大醫王所。時長者子。在高樓上安隱而睡。時十千天子。共以十千眞珠瓔珞置其面邊復以十千置其足處。復以十千置於右脇。復以十千置左脇邊。雨曼陀羅花摩訶曼陀羅花。積至于膝光明普照。種種天樂出妙音聲。令贍部洲有睡眠者皆悉覺寤。長者子流水亦從睡寤。是時十千天子爲供養已。卽於空中飛騰而去。於天自在光王國內。處處皆雨天妙蓮花。是諸天子。復至本處空澤池中雨衆天花。便於此沒還天宮殿。隨意自在受五欲樂。天自在光王。至天曉已問諸大臣。昨夜何緣忽現如是希有瑞相。放大光明。大臣答言。大

王當知有諸天衆於長者子流水家中雨四十千眞珠瓔珞及天曼陀羅花。積至于膝。王告臣曰。詣長者家喚取其子。大臣受勅卽至其家。奉宣王命喚長者子。時長者子卽至王所。王曰。何緣昨夜示現如是希有瑞相。長者子言。如我思惟。定應是彼池內衆魚如經所說命終之後得生三十三天。彼來報恩故現如是希奇之相。王曰。何以得知。流水答言。王可遣使幷我二子往彼池所驗其虛實。彼十千魚爲死爲活。王聞是語。卽便遣使及子向彼池邊。見其池中多有曼陀羅花。積成大聚諸魚並死。見已馳還爲王廣說。王聞是已心生歡喜歎未曾有。爾時佛告菩提樹神。善女天。汝今當知。昔時長者子流水者卽我身是。持水長者卽妙幢是。彼之二子。長子水滿卽銀幢是。次子水藏卽銀光是。彼天自在光王者。卽汝菩提樹神是。十千魚者卽十千天子是。因我往昔以水濟魚與食令飽。爲說甚深十二緣起幷此相應陀羅尼呪。又爲稱彼寶髻佛名。因此善根得生天上。今來我所歡喜聽法。我皆當爲授於阿耨多羅三藐三菩提記說其名號。善女天。如我往昔於生死中輪廻諸有廣爲利益。今無量衆生悉令次第成無上覺與其授記。汝等皆應勤求出離勿爲放逸。爾時大衆聞說是已悉皆悟解。由大慈悲救護一切。勤修苦行方能證獲無上菩提。咸發深心信受歡喜

惟同作忖
言同作曰
今三本俱作令

金光明最勝王經卷第九

金光明最勝王經卷第十

〔麗食〕〔宋埸〕〔元埸〕〔明埸〕

大唐三藏沙門義淨奉　制譯

捨身品第二十六

爾時世尊已爲大衆。說此十千天子往昔因緣。復告菩提樹神及諸大衆。我於過去行菩薩道。非但施水及食濟彼魚命。乃至亦捨所愛之身。如是因緣可共觀察。爾時如來應正等覺。天上天下最勝最尊。百千光明照十方界。具一切智功德圓滿。將諸苾芻及於大衆。至般遮羅聚落。詣一林中。其地平正無諸荊棘。名花軟草遍布其處。佛告具壽阿難陀。汝可於此樹下爲我敷座。時阿難陀受教敷已。白佛言世尊。其座敷訖唯聖知時。爾時世尊卽於座上加趺而坐。端身正念告諸苾芻。汝等樂欲見彼往昔苦行菩薩本舍利不。諸苾芻言。我等樂見。世尊卽以百福莊嚴相好之手而按其地。于時大地六種震動。卽便開裂。七寶制底忽然踊出。衆寶羅網。莊嚴其上。大衆見已生希有心。爾時世尊卽從座起。作禮右遶還就本座。告阿難陀。汝可開此制底之戶。時阿難陀卽開其戶。見七寶函奇珍間飾。白言世尊。有七寶函衆寶莊挍。佛言汝可開函。時阿難陀。奉教開已見有舍利。白如珂雪拘物頭花。卽白佛言。函有舍利色妙異常。佛言阿難陀。汝可持此大士骨來。時阿難陀。卽取其骨奉授世尊。世尊受已告諸苾芻。汝等應觀苦行菩薩遺身舍利。而說頌曰

菩薩勝德相應慧　勇猛精勤六度圓
常修不息爲菩提　不捨堅固心無倦

汝等苾芻。咸應禮敬菩薩本身。此之舍利乃是無量戒定慧香之所熏馥。最上福田極難逢遇。時諸苾芻及諸大衆。咸皆至心合掌恭敬。頂禮舍利歎未曾有。時阿難陀前禮佛足。白言世尊。如來大師出過一切。爲諸有情之所恭敬。何因緣故禮此身骨。佛告阿難陀。我因此骨速得無上正等菩提。爲報往恩我今致禮。復告阿難陀。吾今爲汝及諸大衆斷除疑惑。說是舍利往昔因緣。汝等善思當一心聽。阿難陀曰。我等樂聞願爲開闡。阿難陀過去世

加明作跏　踊三本俱作涌　不明作大

大三本俱作太
虛明作虎
亡三本俱作忘

時有一國王。名曰大車。巨富多財庫藏盈滿。軍兵武勇衆所欽伏。常以正法施化黔黎。人民熾盛無有怨敵。國大夫人誕生三子。顏容端正人所樂觀。太子名曰摩訶波羅。次子名曰摩訶提婆。幼子名曰摩訶薩埵。是時大王。爲欲遊觀縱賞山林。其三王子亦皆隨從。爲求花果捨父周旋。至大竹林於中憩息。第一王子作如是言。我於今日心甚驚惶。於此林中將無猛獸損害於我。第二王子復作是言。我於自身初無悋惜。恐於所愛有別離苦。第三王子白二兄曰

此是神仙所居處　我無恐怖別離憂　身心充遍生歡喜　當獲殊勝諸功德

時諸王子各說本心所念之事。次復前行。見有一虎生產七子。纔經七日諸子圍遶飢渴所逼。身形羸瘦將死不久。第一王子作如是言。哀哉此虎產來七日。七子圍遶無暇求食。飢渴所逼必還噉子。薩埵王子問言此虎每常所食何物。第一王子答曰

虎豹豺師子　唯噉熱血肉　更無餘飮食　可濟此虛羸

第二王子聞此語已。作如是言此虎羸瘦飢渴所逼餘命無幾。我等何能爲求如是難得飮食。誰復爲斯自捨身命濟其飢苦。第一王子言。一切難捨無過己身。薩埵王子言。我等今者於自己身各生愛戀。復無智慧不能於他而興利益。然有上士懷大悲心。常爲利他亡身濟物。復作是念。我今此身於百千生。虛棄爛壞曾無所益。云何今日而不能捨以濟飢苦如捐涕唾。時諸王子作是議已。各起慈心悽傷愍念。共觀羸虎目不暫移。徘徊久之俱捨而去。爾時薩埵王子便作是念。我捨身命今正是時。何以故

我從久來持此身　臭穢膿流不可愛　供給敷具幷衣食　象馬車乘及珍財　變壞之法體無常
恒求難滿難保守　雖常供養懷怨害　終歸棄我不知恩

復次此身不堅於我無益。可畏如賊不淨如糞。我於今日當使此身修廣大業。於生死海作大舟航。棄捨輪迴令得出離。復作是念。若捨此身則捨無量癰疽惡疾百千怖畏。是身唯有大小便利。不堅如泡諸蟲所集。血脈筋骨共相連持甚可厭患。是故我今應當棄捨以求無上究竟涅槃。永離憂患無常苦惱。生死休息斷諸塵累。以定慧

力圓滿熏修百福莊嚴成一切智。諸佛所讚微妙法身。既證得已施諸衆生無量法樂。是時王子與大勇猛發弘誓願。以大悲念增益其心。慮彼二兄情懷怖懼共爲留難不果所祈。即便白言。二兄前去我且於後。爾時王子摩訶薩埵。還入林中至其虎所。脫去衣服置於竹上作是誓言

我爲法界諸衆生　志求無上菩提處　起大悲心不傾動　當捨凡夫所愛身　菩提無患無熱惱
諸有智者之所樂　三界苦海諸衆生　我今拔濟令安樂

是時王子作是言已。於餓虎前委身而臥。由此菩薩慈悲威勢虎無能爲。菩薩見已即上高山投身于地。時諸神仙捧接王子。曾無傷損。復作是念虎今羸瘦不能食我。即起求刀竟不能得。即以乾竹刺頸出血。漸近虎邊是時大地六種震動。如風激水涌沒不安日無精明如羅睺障。諸方闇蔽無復光輝。天雨名華及妙香末繽紛亂墜遍滿林中。爾時虛空有諸天衆見是事已生隨喜心歎未曾有。咸共讚言善哉大士。即說頌曰

大士救護運悲心　等視衆生如一子　勇猛歡喜情無悋　捨身濟苦福難思　定至眞常勝妙處
永離生死諸纏縛　不久當獲菩提果　寂靜安樂證無生

是時餓虎既見菩薩頸下血流。即便舐血噉肉皆盡。唯留餘骨。爾時第一王子見地動已。告其弟曰

大地山河皆震動　諸方闇蔽日無光　天花亂墜遍空中　定是我弟捨身相

第二王子聞兄語已。說伽他曰

我聞薩埵慈悲語　見彼餓虎身羸瘦　飢苦所纏恐食子　我今疑弟捨其身

時二王子生大愁苦啼泣悲歎。即共相隨還至虎所。見弟衣服在竹枝上。骸骨及髮在處縱橫。血流成泥霑汙其地。見已悶絕不能自持。投身骨上久乃得蘇。即起擧手哀號大哭。俱時歎曰

我弟貌端嚴　父母偏愛念　云何俱共出　捨身而不歸　父母若問時　我等如何答　寧可同捐命
豈復自存身

時二王子悲泣懊惱。漸捨而去。時小王子所將侍從。互相謂曰。王子何在宜共推求。爾時國大夫人寢高樓上。便

地下三本俱無時諸乃至傷損十二字○痩同作瘠
他元明俱作陀下同
血流三本俱作流血○蘇明作甦下同
復三本俱作得
大元明俱作太

瞤同作瞤

語三本俱作說

辭同作所

椎三本俱作搥下同○牛明作生

於夢中見不祥相。被割兩乳牙齒墮落。得三鴿鶵。一為鷹奪。二被驚怖地動之時夫人遂覺。心大愁惱作如是言

何故今時大地動　江河林樹皆搖震　日無精光如覆蔽　目瞤乳動異常時　如箭射心憂苦逼

遍身戰掉不安隱　我之所夢不祥徵　必有非常災變事

夫人兩乳忽然流出。念此必有變怪之事。時有侍女聞外人言。求覓王子今猶未得。心大驚怖即入宮中。白夫人曰。大家知不。外聞諸人散覓王子遍求不得。時彼夫人聞是語已。生大憂惱悲淚盈目。至大王所。白言大王。我聞外人作如是語。失我最小所愛之子。王聞語已。驚惶失所悲哽而言。苦哉今日失我愛子。即便抆淚慰喻夫人。告言賢首。汝勿憂慼吾今共出求覓愛子。王與大臣及諸人衆。即共出城各各分散。隨處求覓。未久之頃有一大臣前白王曰。聞王子在願勿憂愁。其最小者今猶未見。王聞是語悲歎而言。苦哉苦哉。失我愛子

初有子時歡喜少　後失子時憂苦多　若使我兒重壽命　縱我身亡不為苦

夫人聞已。憂惱纏壞如被箭中。而嗟歎曰

我之三子并侍從　俱往林中共遊賞　最小愛子獨不還　定有乖離災厄事

次第二臣來至王所。王問臣曰。愛子何在。第二大臣懊惱啼泣。喉舌乾燥口不能言竟無辭答。夫人問曰

速報小子今何在　我身熱惱遍燒然　悶亂荒迷失本心　勿使我胷今破裂

時第二臣。即以王子捨身之事。具白王知。王及夫人聞其事已。不勝悲噎望捨身處。驟駕前行詣竹林所。至彼菩薩捨身之地。見其骸骨隨處交橫。俱時投地悶絕將死。猶如猛風吹倒大樹。心迷失緒都無所知。時大臣等。以水遍灑王及夫人。良久乃蘇。舉手而哭。咨嗟歎曰

禍哉愛子端嚴相　因何死苦先來逼　若我得在汝前亡　豈見如斯大苦事

爾時夫人。迷悶稍止頭髮蓬亂。兩手椎胷宛轉于地。如魚處陸若牛失子。悲泣而言

我子誰屠割　餘骨散于地　失我所愛子　憂悲不自勝　苦哉誰殺子　致斯憂惱事　我心非金剛

云何而不破　我夢中所見　兩乳皆被割　牙齒悉墮落　今遭大苦痛　又夢三鴿鶵　一被鷹擒去

今失所愛子　惡相表非虛

爾時大王及於夫人并二王子。盡哀號哭瓔珞不御。與諸人衆。共收菩薩遺身舍利。爲於供養置窣堵波中。阿難陀。汝等應知此卽是彼菩薩舍利。復告阿難陀。我於昔時雖具煩惱貪瞋癡等。能於地獄餓鬼傍生五趣之中。隨緣救濟令得出離。何況今時煩惱都盡無復餘習。號天人師具一切智而不能爲一一衆生經於多劫在地獄中。及於餘處。代受衆苦令出生死煩惱輪迴。爾時世尊欲重宣此義。而說頌曰

我念過去世　無量無數劫　或時作國王　或復爲王子　常行於大施　及捨所愛身　願出離生死
至妙菩提處　昔時有大國　國主名大車　王子名勇猛　常施心無悋　王子有二兒　號大渠大天
三人同出遊　漸至山林所　見虎飢所逼　便生如是心　此虎飢火燒　更無餘可食　大士覩如斯
恐其將食子　捨身無所顧　救子不令傷　大地及諸山　一時皆震動　江海皆騰躍　驚波水逆流
天地失光明　昏冥無所見　林野諸禽獸　飛奔喪所依　二兒怪不還　憂慼生悲苦　卽與諸侍從
林藪遍尋求　兄弟共籌議　復往深山處　四顧無所有　見虎處空林　其母并七子　口皆有血汙
殘骨并餘髮　縱橫在地上　復見有流血　散在樹林所　二兒既見已　心生大恐怖　悶絕俱躃地
荒迷不覺知　塵土坌其身　六情皆失念　王子諸侍從　啼泣心憂惱　以水灑令蘇　擧手號咷哭
菩薩捨身時　慈母在宮內　五百諸婇女　共受於妙樂　夫人之兩乳　忽然自流出　遍體如針刺
苦痛不能安　欻生失子想　憂箭苦傷心　卽白大王知　陳斯苦惱事　悲泣不堪忍　哀聲向王說
大王今當知　我生大苦惱　兩乳忽流出　禁止不隨心　如針遍刺身　煩宛胷欲破　我先夢惡徵
必當失愛子　願王濟我命　知兒存與亡　夢見三鴿鶵　小者是愛子　忽被鷹奪去　悲愁難具陳
我今沒憂海　趣死將不久　恐子命不全　願爲速求覓　又聞外人語　小子求不得　我今意不安
願王哀愍我　夫人白王已　擧身而躃地　悲痛心悶絕　荒迷不覺知　婇女見夫人　悶絕在於地
擧聲皆大哭　憂惶失所依　王聞如是語　懷憂不自勝　因命諸群臣　尋求所愛子　皆共出城外

傍同作旁

曰三本俱作言

失明作夫

上三本俱作中〇樹同作竹

隨明作應〇宛宋明俱作惋元及南藏作寃

各隨處三本俱作隨處而○我同作得○悲同作惱

動同作慟

在同作存下同

重元明俱作鍾○之同作至

各隨處追覓　涕泣問諸人　王子今何在　今者爲存亡　誰知所去處　云何令我見　解我憂悲心
諸人悉共傳　咸言王子死　聞者皆傷悼　悲歎苦難裁　爾時大車王　悲號從座起　即就夫人處
以水灑其身　夫人蒙水灑　久乃得醒悟　悲啼以問王　我兒今在不　王告夫人曰　我已使諸人
四向求王子　尙未有消息　王又告夫人　汝莫生煩惱　且當自安慰　可共出追尋　王即與夫人
嚴駕而前進　號動聲悽感　憂心若火然　士庶百千萬　亦隨王出城　各欲求王子　悲號聲不絕
王求愛子故　目視於四方　見有一人來　被髮身塗血　遍體蒙塵土　悲哭逆前來　王見是惡相
倍復生憂惱　王便舉兩手　哀號不自裁　初有一大臣　忽忙至王所　進白大王曰　幸願勿悲哀
王之所愛子　今雖求未獲　不久當來至　以釋大王憂　王復更前行　見次大臣至　其臣詣王所
流淚白王言　二子今現在　被憂火所逼　其第三王子　已被無常呑　見餓虎初生　將欲食其子
彼薩埵王子　見此起悲心　願求無上道　當度一切衆　繫想妙菩提　廣大深如海　即上高山頂
投身餓虎前　虎羸不能食　以竹自傷頸　遂噉王子身　唯有餘骸骨　時王及夫人　聞已俱悶絕
心沒於憂海　煩惱火燒然　臣以栴檀水　灑王及夫人　俱起大悲號　舉手椎胷臆　第三大臣來
白王如是語　我見二王子　悶絕在林中　臣以冷水灑　爾乃蹔蘇息　顧視於四方　如猛火周遍
暫起而還伏　悲號不自勝　舉手以哀言　稱歎弟希有　王聞如是說　倍增憂火煎　夫人大號咷
高聲作是語
我之小子偏重愛　已爲無常羅刹呑　餘有二子今現在　復被憂火所燒逼　我今速可之山下
安慰令其保餘命　即便馳駕望前路　一心詣彼捨身崖　路逢二子行啼泣　椎胷懊惱失容儀
父母見已抱憂悲　俱往山林捨身處　旣至菩薩捨身地　共聚悲號生大苦　脫去瓔珞盡哀心
收取菩薩身餘骨　與諸人衆同供養　共造七寶窣堵波　以彼舍利置函中　整駕懷憂趣城邑
復告阿難陀　往時薩埵者　即我牟尼是　勿生於異念　王是父淨飯　后是母摩耶　太子謂慈氏

次曼殊室利　虎是大世主　五兒五苾芻　一是大目連　一是舍利弗　我爲汝等說　往昔利他緣
如是菩薩行　成佛因當學　菩薩捨身時　發如是弘誓　願我身餘骨　來世益衆生　此是捨身處
七寶窣堵波　以經無量時　遂沈於厚地　由昔本願力　隨緣興濟度　爲利於人天　從地而涌出

爾時世尊說是往昔因緣之時。無量阿僧企耶人天大衆皆大悲喜歎未曾有。悉發阿耨多羅三藐三菩提心。復告樹神。我爲報恩故致禮敬。佛攝神力。其窣堵波還沒于地

金光明最勝王經十方菩薩讚歎品第二十七

爾時釋迦牟尼如來。說是經時。於十方世界有無量百千萬億諸菩薩衆。各從本土詣鷲峯山至世尊所。五輪著地禮世尊已。一心合掌。異口同音而讚歎曰

佛身微妙眞金色　其光普照等金山　淸淨柔軟若蓮華　無量妙彩而嚴飾　三十二相遍莊嚴
八十種好皆圓備　光明昞著無與等　離垢猶如淨滿月　其聲淸徹甚微妙　如師子吼震雷音
八種微妙應群機　超勝迦陵頻伽等　百福妙相以嚴容　光明具足淨無垢　智慧澄明如大海
功德廣大若虛空　圓光遍滿十方界　隨緣普濟諸有情　煩惱愛染習皆除　法炬恒然不休息
哀愍利益諸衆生　現在未來能與樂　常爲宣說第一義　令證涅槃眞寂靜　佛說甘露殊勝法
能與甘露微妙義　引入甘露涅槃城　令受甘露無爲樂　常於生死大海中　解脫一切衆生苦
令彼能住安隱路　恒與難思如意樂　如來德海甚深廣　非諸譬喩所能知　於衆常起大悲心
方便精勤恒不息　如來智海無邊際　一切人天共測量　假使千萬億劫中　不能得知其少分
我今略讚佛功德　於德海中唯一渧　迴斯福聚施群生　皆願速證菩提果

爾時世尊告諸菩薩言。善哉善哉。汝等善能如是讚佛功德。利益有情廣興佛事。能滅諸罪生無量福

弗三本俱作子
昞同作炳
習同作集

相明作明

頗梨同作玻瓈下同

他元明倶作陀下同

慇三本倶作殷○惟三本倶作唯次同

金光明最勝王經妙幢菩薩讚歎品第二十八

爾時妙幢菩薩卽從座起偏袒右肩。右膝著地合掌向佛。而說讚曰

牟尼百福相圓滿　無量功德以嚴身　廣大淸淨人樂觀　猶如千日光明照　焰彩無邊光熾盛
如妙寶聚相端嚴　如日初出映虛空　紅白分明間金色　亦如金山光普照　悉能周遍百千土
能滅衆生無量苦　皆與無邊勝妙樂　諸相具足悉嚴淨　衆生樂觀無厭足　頭髮柔軟紺靑色
猶如黑蜂集妙華　大喜大捨淨莊嚴　大慈大悲皆具足　衆妙相好爲嚴飾　菩提分法之所成
如來能施衆福利　令彼常獲大安樂　種種妙德共莊嚴　光明普照千萬土　如來光相極圓滿
猶如赫日遍空中　佛如須彌功德具　示現能周於十方　如來金口妙端嚴　齒白齊密如珂雪
如來面貌無倫匹　眉間毫相常右旋　光潤鮮白等頗梨　猶如滿月居空界

佛告妙幢菩薩。汝能如是讚佛功德不可思議。利益一切。令未知者隨順修學

金光明最勝王經菩提樹神讚歎品第二十九

爾時菩提樹神。亦以伽他讚世尊曰

敬禮如來淸淨慧　敬禮常求正法慧　敬禮能離非法慧　敬禮恒無分別慧　希有世尊無邊行
希有難見比優曇　希有如海鎭山王　希有善逝光無量　希有調御弘慈願　希有釋種明逾日
能說如是經中寶　哀愍利益諸群生　牟尼寂靜諸根定　能入寂靜涅槃城　能住寂靜等持門
能知寂靜深境界　兩足中尊住空寂　聲聞弟子身亦空　一切法體性皆無　一切衆生悉空寂
我常憶念於諸佛　我常樂見諸世尊　我常發起慇重心　常得値遇如來日　我常頂禮於世尊
願常渴仰心不捨　悲泣流淚情無間　常得奉事不知厭　惟願世尊起悲心　和顏常得令我見

佛及聲聞衆清淨　願常普濟於人天　佛身本淨若虚空　亦如幻焰及水月　願說涅槃甘露法
能生一切功德聚　世尊所有淨境界　慈悲正行不思議　聲聞獨覺非所量　大仙菩薩不能測
惟願如來哀愍我　常令覩見大悲身　三業無倦奉慈尊　速出生死歸眞際

爾時世尊聞是讚已。以梵音聲告樹神曰。善哉善哉善女天。汝能於我眞實無妄清淨法身。自利利他宣揚妙相。以此功德令汝速證最上菩提。一切有情同所修習。若得聞者皆入甘露無生法門

金光明最勝王經大辯才天女讚歎品第三十

爾時大辯才天女。卽從座起合掌敬禮。以直言詞讚世尊曰

南無釋迦牟尼如來應正等覺。身眞金色。咽如螺貝。面如滿月。目類靑蓮。脣口赤好如頗梨色。鼻高脩直如截金鋌。齒白齊密如拘物頭華。身光普照如百千日。光彩映徹如贍部金。其所言說無有錯謬。示三解脫門。開三菩提路。心常清淨意樂亦然。佛所住處及所行境亦常清淨。離非威儀進止無謬。六年苦行三轉法輪。度苦衆生令歸彼岸。身相圓滿如拘陀樹。六度熏修三業無失。具一切智自他利滿。所有宣說常爲衆生。言不虚說。於釋種中爲大師子。堅固勇猛具八解脫。我今隨力稱讚如來少分功德。猶如蚊子飮大海水。願以此福廣及有情。永離生死成無上道。爾時世尊告大辯才天曰。善哉善哉。汝久修習具大辯才。今復於我廣陳讚歎。令汝速證無上法門。相好圓明普利一切

金光明最勝王經付屬品第三十一

爾時世尊普告無量菩薩。及諸人天一切大衆。汝等當知。我於無量無數大劫。勤修苦行獲甚深法。菩提正因已爲汝說。汝等誰能發勇猛心恭敬守護。我涅槃後於此法門。廣宣流布能令正法久住世間。爾時衆中有六十俱胝諸大菩薩。六十俱胝諸天大衆。異口同音作如是語。世尊。我等咸有欣樂之心。於佛世尊無量大劫勤修苦行。

天明作人

詞三本倶作辭下同○無同作謨○脩明作修○其所乃至謬三本倶作成有言辭皆無謬失

所獲甚深微妙之法菩提正因。恭敬護持不惜身命。佛涅槃後於此法門廣宣流布。當令正法久住世間。爾時諸大菩薩。即於佛前說伽他曰

世尊眞實語　安住於實法　由彼眞實故　護持於此經　大悲爲甲冑　安住於大慈　由彼慈悲力
護持於此經　福資糧圓滿　生起智資糧　由資糧滿故　護持於此經　降伏一切魔　破滅諸邪論
斷除惡見故　護持於此經　護世幷釋梵　乃至阿蘇羅　龍神藥叉等　護持於此經　地上及虛空
久住於斯者　奉持佛教故　護持於此經　四梵住相應　四聖諦嚴飾　降伏四魔故　護持於此經
虛空成質礙　質礙成虛空　諸佛所護持　無能傾動者

爾時四大天王。聞佛說此護持妙法。各生隨喜護正法心。一時同聲說伽他曰

我今於此經　及男女眷屬　皆一心擁護　令得廣流通　若有持經者　能作菩提因　我常於四方
擁護而承事

爾時天帝釋。合掌恭敬說伽他曰

諸佛證此法　爲欲報恩故　饒益菩薩衆　出世演斯經　我於彼諸佛　報恩常供養　護持如是經
及以持經者

爾時覩史多天子。合掌恭敬說伽他曰

佛說如是經　若有能持者　當住菩提位　來生覩史天　世尊我慶悅　捨天殊勝報　住於贍部洲
宣揚是經典

爾時索訶世界主梵天王。合掌恭敬說伽他曰

諸靜慮無量　諸乘及解脫　皆從此經出　是故演斯經　若說是經處　我捨梵天樂　爲聽如是經
亦常爲擁護

爾時魔王子名曰商主。合掌恭敬說伽他曰

若有受持此　正義相應經　不隨魔所行　淨除魔惡業　我等於此經　亦當勤守護　發大精進意
隨處廣流通

爾時魔王。合掌恭敬說伽他曰

若有持此經　能伏諸煩惱　如是衆生類　擁護令安樂　若有說是經　諸魔不得便　由佛威神故
我當擁護彼

爾時妙吉祥天子。亦於佛前說伽他曰

諸佛妙菩提　於此經中說　若持此經者　是供養如來　我當持此經　爲俱胝天說　恭敬聽聞者
勸至菩提處

爾時慈氏菩薩。合掌恭敬說伽他曰

若見住菩提　能爲不請友　乃至捨身命　爲護此經王　我聞如是法　當往覩史天　由世尊加護
廣爲人天說

爾時上座大迦葉波。合掌恭敬說伽他曰

佛於聲聞衆　說我鮮智慧　我今隨自力　護持如是經　若有持此經　我當攝受彼　授其詞辯力
常隨讚善哉

爾時具壽阿難陀。合掌向佛說伽他曰

我親從佛聞　無量衆經典　未曾聞如是　深妙法中王　我今聞是經　親於佛前受　諸樂菩提者
當爲廣宣通

爾時世尊。見諸菩薩人天大衆各各發心。於此經典流通擁護。勸進菩薩廣利衆生。讚言善哉善哉。汝等能於如是微妙經王虔誠流布。乃至於我般涅槃後不令散滅。卽是無上菩提正因。所獲功德於恒沙劫說不能盡。若有苾芻苾芻尼鄔波索迦鄔波斯迦。及餘善男子善女人等。供養恭敬書寫流通爲人解說。所獲功德亦復如是。是

故三本俱作力

鮮宋元俱作辯

故汝等應勤修習。爾時無量無邊恒沙大衆聞佛說已。皆大歡喜信受奉行

金光明最勝王經卷第十

過去現在因果經卷第一

〔麗言〕〔宋辭〕〔元辭〕〔明尺〕

宋天竺三藏求那跋陀羅譯

如是我聞。一時佛在舍衞國。祇樹給孤獨園。爾時世尊。與諸比丘。住於竹林。是諸比丘。於晨朝時。著衣持鉢。入城乞食。還歸所住。食竟澡漱。各攝衣鉢。集在講堂。悉欲共說過去因緣。爾時世尊。以淨天耳超於世間。聞諸比丘語論之聲。卽從座起。到講堂上。於衆中坐。問諸比丘。汝等共集。欲說何法。時諸比丘。卽白佛言。世尊。我等食竟澡漱已訖。故共集此。各欲聞說過去因緣。是時世尊。語諸比丘。汝等樂聞過去因緣者。諦聽諦聽。善思念之。今爲汝說。比丘白言。唯然世尊。願樂欲聞。佛言比丘。過去無數阿僧祇劫。爾時有一仙人。名曰善慧。淨修梵行。求一切種智。爲欲成就此大智故。樂處生死。周遍五道。一身死壞。復受一身。生死無量。譬盡天下草木。斬以爲籌。數其故身。不能窮盡。夫極天地之始終。謂之一劫。而其經天地成壞者。不可稱載也。所以感傷群生。耽惑愛欲。沈流苦海。起慈悲心。欲拔濟之。又作此念。今諸衆生。沒於生死。不能自出。皆由貪欲瞋恚愚癡。樂著色聲香味觸法故。我當決定斷其此病。雖生諸趣。不忘斯念。於諸衆生。怨親平等。以布施攝貧窮。持戒攝毀禁。忍辱攝瞋恚。精進攝懈怠。禪定攝亂意。智慧攝愚癡。如是長夜。增益衆生。普爲一切。而作歸依。於諸如來。恭敬供養。樂欲聽法。亦爲他說。常以四事。奉給衆僧。於佛法衆。尊重守護。如是諸行。不可稱數。爾時有王。名曰燈照。城名提播婆底。其國人民。壽八萬歲。安隱豐樂。極爲熾盛。所欲自在。猶如諸天。時彼國王。正法治世。不枉人民。無有殺戮楚撻之苦。視諸人民。有如一子。時燈照王。始生太子。端嚴無比。威德具足。有三十二相八十種好。初生之日。四方皆明。日月珠火。不復爲用。王見太子有如此瑞。卽召諸臣。共集議言。太子初生。有此奇特。當爲太子。作何等名。諸臣答言。應名太子以爲普光。又召相師。而占相之。相師答言。今覩太子。若在家者。爲轉輪王。統四天下。若出家者。爲天人尊。成薩婆若。王及夫人後宮婇女。聞相師言。於此太子。深生愛念。亦爲天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等。

譯號三本俱無天竺二字下皆同

譬下同有如字

數同作計

召同作現○共宋元俱作兵

修明作脩

夫元作天　詣三本俱作諸　悟元明俱作寤　隨三本俱作緣

供養恭敬。尊重讚歎。是時太子。在於後宮。爲夫人婇女。說種種法。太子年至二萬九千歲。捨轉輪王位。啓其父母。求欲出家。旣不聽已。乃至三請。猶尚不許。太子慈悲。志存拯濟。忍其小違。以成大順。卽便往詣山林樹下。剃除鬚髮。服著法服。勤修苦行。滿六千歲。成阿耨多羅三藐三菩提。爲諸天人及八部衆。轉於法輪。此輪微妙。一切世間。天人魔梵。所不能轉。以三乘法。教化衆生。所可利益。不可稱數。爾時父王。及其夫人。後宮婇女。聞太子普光成阿耨多羅三藐三菩提。心大歡喜。踊躍無量。爾時群臣國內人民。婆羅門等。聞太子道成。心各念言。太子普光。捨轉輪王位。剃除鬚髮。被著法服。出家修道。得成正覺。我等今者。亦當出家。作此念已。悉皆往詣普光佛所。爾時普光如來。卽觀其心。隨其因緣。而爲說法。大臣婆羅門等。有四千人。成阿羅漢。國中人民。及餘四方諸來會衆。有八萬人。亦得無著法忍。爾時普光如來。與八萬四千諸阿羅漢。往詣國界。遊行教化。父王聞已。心大歡喜。卽勅國中。平治道路。香水灑地。懸諸繒綵寶幢幡蓋。散衆名華。如是莊嚴。滿十二踰闍那。又復擊鼓唱令國內。諸有華者。不得私賣。悉輸與王。幷勅人民。不得先我供養於佛。卽遣大臣。幷作伎樂。燒香散華。而往請彼普光如來。爾時善慧仙人。在於山中。得五奇特夢。一者夢臥大海。二者夢枕須彌。三者夢海中一切衆生。入其身內。四者夢手執日。五者夢手執月。得此夢已。卽大驚悟。心自念言。我今此夢。非爲小緣。當以問誰。宜入城內。問諸智者。作是念已。披鹿皮衣。手執水瓶及杖繖蓋。行入城邑。路過外道所止住處。有五百人。而爲上首。善慧念言。我今當以所夢問之。幷得觀其所修之業。卽共諸人。講論道義。破其異見。時五百人。卽便受屈。求爲弟子。於善慧所。深生恭敬。各以銀錢一枚。而以上之。復有五百外道。旣見善慧辯才聰明。亦生隨喜。時諸外道。自共議言。今普光如來。出興于世。善慧仙人。聞斯語已。舉體毛竪。心大歡喜。踊躍無量。便與外道。分別而去。外道問言。師何所趣。答言。我今當往普光佛所。欲施供養。外道白言。師若去者。願樂隨從。善慧答曰。我今有緣。宜應先行。爾時善慧。賫五百銀錢。隨路而去。諸外道衆。悲戀懊惱。辭別而歸。善慧至前。見王家人。平治道路。香水灑地。列幢幡蓋。種種莊嚴。卽便問言。何因緣故。而作是事。王人答言。世有佛興。名曰普光。今燈照王。請來入城。所以忽忽莊嚴道路。善慧卽復問彼路人。汝知何處有諸名花。答言道士。燈照大王。擊鼓唱令國內名花。皆不得賣。悉以輸王。善慧聞已。心大懊惱。意猶不息。苦訪花

耳同作華
言三本俱作曰
乃一同作時乃
纔同作裁
閡同作礙
莖同作華
夾同作來○修元明俱作脩
應下三本俱無供字○伽同作迦

所。俄爾即過王家青衣。密持七莖青蓮花。過畏王制。令藏著瓶中。善慧至誠。感其蓮花。踊出瓶外。善慧遙見。即追呼曰。大姉且止。此花賣不。青衣聞已。心大驚愕。而自念言。藏花甚密。此何男子。乃見我花。求索買耶。顧看其瓶。果見花出。生奇特想。答言男子。此青蓮花。當送宮內。欲以上佛。不可得也。善慧又言。請以五百銀錢。雇五莖耳。青衣意疑。復自念言。此花所直。不過數錢。而今男子。乃以銀錢五百。求買五莖。即問之言。欲持此花。用作何等。善慧答言。今有如來。出興於世。燈照大王。請來入城。故須此花。欲以供養。大姉當知。諸佛如來。難可值遇。如優曇鉢花時乃一現。青衣又問。供養如來。爲求何等。善慧答曰。爲欲成就一切種智。度脫無量苦衆生故。爾時青衣。得聞此語。心自念言。今此男子。顏容端正。披鹿皮衣。纔蔽形體。乃爾至誠。不惜錢寶。即語之曰。我今當以此花相與。願我生生。常爲君妻。善慧答言。我修梵行。求無爲道。不得相許生死之緣。青衣即言。若當不從我此願者。花不可得。善慧又曰。汝若決定不與我花。當從汝願。我好布施。不逆人意。若使有來從我乞求頭目髓腦。及與妻子。汝莫生閡壞吾施心。青衣答言。善哉善哉。敬從來命。今我女弱不能得前。請寄二花以獻於佛。使我生生不失此願。好醜不離。必置心中。令佛知之。爾時燈照王。與其諸子。及衆宮屬。婆羅門等。持好香花種種供具。而出奉迎普光如來。擧國人民。亦皆隨從。是時善慧五百弟子。共相謂言。今日國王及諸臣民。悉皆往詣普光佛所。大師今者亦當已去。我等宜應往彼禮敬。作此言已。即共俱行。在道未遠。逢見善慧。師徒相遇。喜悅無量。即共同詣普光佛所。見燈照王。已到佛前。最得在初供養禮拜。如是次第。至諸大臣。亦各禮敬。幷散名花。花悉墮地。于時善慧。與五百弟子。見諸人衆供養畢已。諦觀如來相好之容。又欲濟拔諸苦衆生。亦欲滿足一切種智故。即散五莖皆住空中。化成花臺。後散二莖。亦止空中。夾佛兩邊。爾時國王。及其眷屬。一切臣民。天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等。見此奇特。歎未曾有。於是普光如來。以無礙智。讚善慧言。善哉善哉。善男子。汝以是行過無量阿僧祇劫。當得成佛。號釋迦牟尼如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。當於善慧受記之時。無量天龍夜叉乾闥婆阿修羅伽樓羅緊那羅摩睺羅伽人非人等。散衆妙花。滿虛空中。而發誓言。善慧將來成佛道時。我等皆願爲其眷屬。是時普光如來。即記之曰。汝等皆當得生其國。爾時如來既授記已。猶見

此上三本俱有以字

善慧。作仙人髻。披鹿皮衣。如來欲令捨此服儀。卽便化地。以爲淤泥。善慧見佛應從此行而地濁濕。心自念言。云何乃令千輻輪足蹈此而過。卽脫皮衣。以用布施。不足掩泥。仍又解髮。亦以覆之。如來卽便踐之而度。因記之曰。汝後得佛當於五濁惡世。度諸天人。不以爲難。必如我也。于時善慧。聞斯記已。歡欣踊躍。喜不自勝。卽時便解一切法空。得無生忍。身昇虛空。去地七多羅樹。以偈讚佛

今見世間導　令我開慧眼　爲說淸淨法　去離一切著　今遇天人尊　令我得無生　願將來獲果
亦如兩足尊

是時善慧。說此讚已。從空中下。到於佛前。五體投地。而白佛言。唯願世尊。哀愍我故。聽我出家。爾時普光如來。答言善哉。善來比丘。鬚髮自落。袈裟著身。卽成沙門。爾時有二貧窮老人。各與親屬一百人俱。覩佛相好。威德巖顯。自傷貧乏無以供養。是時如來。愍其心至。卽化前地。生諸草穢。令二貧人。見地不淨。發歡喜心。而便灑掃。普光如來。而記之曰。汝過無量阿僧祇劫。釋迦牟尼佛。出興於世。汝等爾時當作第一聲聞弟子。爾時普光如來。記貧人已。與八萬四千比丘。及燈照王。幷婆羅門。諸臣民等。前後圍繞。入提播婆底城。時燈照王。與其眷屬。以四事供養普光如來幷及八萬四千比丘。經四萬歲。王卽捨位。以付其子。與其眷屬。及夫人眷屬。各八萬四千人。同於佛法。出家修道。得陀羅尼諸法三昧。善慧比丘。亦隨普光如來。受王供養。滿四萬歲。於諸法中。得深三昧。敎化衆生。不可稱數。爾時善慧比丘。白普光如來言。世尊。我於昔日在深山中。得五奇特夢。一者夢臥大海。二者夢枕須彌。三者夢海中一切衆生。入我身內。四者夢手執日。五者夢手執月。唯願世尊。爲我解說此夢之相。爾時普光如來。答言善哉。汝若欲知此夢義者。當爲汝說。夢臥大海者。汝身卽時在於生死大海之中。夢枕須彌者。出於生死得般涅槃相。夢大海中一切衆生入身內者。當於生死大海。爲諸衆生。作歸依處。夢手執日者。智慧光明。普照法界。夢手執月者。以方便智。入於生死。以淸淨法。化導衆生。令離惱熱。此夢因緣。是汝將來成佛之相。善慧聞已。歡喜踊躍。不能自勝。禮佛而退。爾時普光如來。復經少時。入般涅槃。善慧比丘。護持正法。滿二萬歲。以三乘法。敎化衆生。所利益者。不可稱計。爾時善慧比丘。於彼命終。卽便上生。爲四天王。以三乘法。化諸天衆。盡彼天壽。下生人間。爲

輪下同無聖字
下同〇主明作王
白元明倶作慧
以三本倶作已
毗同作比下同
龍同作人
身同作體〇座宋作坐下同
癡三本倶作疑

轉輪聖王。王四天下。七寶具足。一金輪寶。二白象寶。三紺馬寶。四神珠寶。五玉女寶。六主藏臣寶。七主兵臣寶。千子具足。皆悉勇健。能伏怨敵。以正法治。無諸憂惱。常以十善。化諸人民。於此壽終。生忉利天。爲彼天主。壽終下生。爲轉輪聖王。終其壽命。乃至生於第七梵天。上爲天王。下爲聖主。各三十六反其間。或爲仙人。或爲外道六師。或爲婆羅門。或爲小王。如是變現。不可稱數。爾時善慧菩薩。功行滿足。位登十地。在一生補處。近一切種智。生兜率天。名聖善白。爲諸天主。說於一生補處之行。亦於十方國土。現種種身。爲諸衆生。隨應說法。期運將至。當下作佛。卽觀五事。一者觀諸衆生熟與未熟。二者觀時至與未至。三者觀諸國土何國處中。四者觀諸種族何族貴盛。五者觀過去因緣誰最眞正應爲父母。觀五事已。卽自思惟。今諸衆生。皆是我初發心以來所成熟者。堪能受於清淨妙法。於此三千大千世界。此閻浮提迦毘羅旆兜國。最爲處中。諸族種姓釋迦第一。甘蔗苗裔聖王之後。觀白淨王過去因緣。夫妻眞正。堪爲父母。又觀摩耶夫人。壽命脩短。懷抱太子。滿足十月。太子便生。生七日已。其母命終。既作此觀。又自思惟。我今若便卽下生者。不能廣利諸天人衆。仍於天宮。現五種相。令諸天子。皆悉覺知菩薩期運應下作佛。一者菩薩眼現瞬動。二者頭上花萎。三者衣受塵垢。四者腋下汗出。五者不樂本座。時諸天衆。忽見菩薩有此異相。心大驚怖。身諸毛孔。血流如雨。自相謂言。菩薩不久。捨於我等。爾時菩薩。又現五瑞。一者放大光明。普照三千大千世界。二者大地十八相動。須彌海水。諸天宮殿。皆悉震搖。三者諸魔宮宅。隱蔽不現。四者日月星辰。無復光明。五者天龍八部。身皆震動。不能自禁。是時兜率諸天。見菩薩身已有五相。又復覩外五希有事。皆悉聚集。到菩薩所。頭面禮足。白言尊者。我等今日見此諸相。擧身震動。不能自安。唯願爲我釋此因緣。菩薩卽便答諸天言。善男子當知。諸行皆悉無常。我今不久。捨此天宮。生閻浮提。于時諸天。聞此語已。悲號涕泣。心大憂惱。擧身血現。如波羅奢花。或有不復樂於本座。或有棄其莊嚴之具。或有宛轉迷悶於地。或有深歎無常苦者。爾時有一天子。卽說偈言

菩薩在於此　開我等法眼　今者遠我去　如盲離導師　又如欲渡水　忽然失橋船　亦似嬰孫兒
喪亡其慈母　我等亦如是　失所歸依處　方漂生死流　了無有出緣　我等於長夜　爲癡箭所射

既失大醫王　誰當救我者　滯臥無明牀　長沒愛欲海　永絕尊者訓　未見超出期

爾時菩薩。見諸天子悲泣懊惱。又復聞說戀慕之偈。卽以慈音。而告之曰。善男子。凡人受生無不死者。恩愛合會。必有別離。上至阿迦膩吒天。下至阿毗地獄。其中一切諸衆生等。無有不爲無常大火之所煎炙。是故汝等。不應於我獨生戀慕。我今與汝皆悉未離生死熾火。乃至一切貧富貴賤。皆不免脫。於是菩薩。卽說偈言

諸行無常　是生滅法　生滅滅已　寂滅爲樂

爾時菩薩。語天子言。此偈乃是過去諸佛之所共說。諸行性相法皆如是。汝等今者勿生憂惱。我於生死無量劫來。今者唯有此一生在。不久當得離於諸行。汝等當知。今是度脫衆生之時。我應下生閻浮提中。迦毗羅旆兜國。甘蔗苗裔。釋姓種族。白淨王家。我生於彼。遠離父母。棄捨妻子及轉輪王位。出家學道。勤修苦行。降伏魔怨。成一切種智。轉於法輪。一切世間天人魔梵。所不能轉。亦依過去諸佛所行法式。廣利一切諸天人衆。建大法幢。傾倒魔幢。竭煩惱海。淨八正路。以諸法印。印衆生心。設大法會。請諸天人。汝等爾時亦當皆同在於此會。飡受法食。以是因緣。不應憂惱。爾時菩薩。以偈頌曰

我於此不久　當下閻浮提　迦毗羅旆兜　白淨王宮生　辭父母親屬　捨轉輪王位　出家行學道
成一切種智　建立正法幢　能竭煩惱海　閉塞惡趣門　淨開八正道　廣利諸天人　其數不可計
以是因緣故　不應生憂惱

爾時菩薩。擧身毛孔。皆放光明。諸天子等。聞菩薩言。又復見身。出大光明。歡喜踊躍。離諸憂苦。各心念言。菩薩不久。當成正覺。爾時菩薩。觀降胎時至。卽乘六牙白象。發兜率宮。無量諸天。作諸伎樂。燒衆名香。散天妙花。隨從菩薩。滿虛空中。放大光明。普照十方。以四月八日明星出時。降神母胎。于時摩耶夫人。於眠寤之際。見菩薩乘六牙白象騰虛而來。從右脇入。影現於外。如處琉璃。夫人體安快樂。如服甘露。顧見自身。如日月照。心大歡喜。踊躍無量。見此相已。豁然而覺。生希有心。卽便往至白淨王所。而白王言。我於向者。眠寤之際。其狀如夢。見諸瑞相。極爲奇特。王卽答言。我向亦見有大光明。又復覺汝顏貌異常。汝可爲說所見瑞相。夫人卽便具說上事。以偈頌曰

天上同有諸字
○者同作曰
於彼三本俱作彼已
星同作相
影同作身
豁同作廓

諸同作說

夫三本俱作天

支明作肢

見有乘白象　皎淨如日月　釋梵諸天衆　皆悉執寶幢　燒香散天花　幷作衆伎樂　充滿虛空中

圍繞而來下　來入我右脇　猶如處琉璃　今以現大王　此爲何瑞相

爾時白淨王。見摩耶夫人[諸瑞相已。歡喜踊躍。不能自勝。卽便遣請善相婆羅門。以妙香花種種飲食。而供養之。供養畢已。示夫人右脇幷說瑞相。白婆羅門言。願爲占之。有何等異。時婆羅門。卽占之曰。大王夫人所懷太子。諸善妙相。不可具說。今當爲王略言之耳。大王當知。今此夫人胎中之子。必能光顯釋迦種族。降胎之時。放大光明。諸天釋梵。執侍圍繞。此相必是正覺之瑞。若不出家。爲轉輪聖王。王四天下。七寶自至。千子具足。時王聞此婆羅門言。深自慶幸。踊躍無量。卽以金銀雜寶象馬車乘。及以村邑。而用供給此婆羅門。時摩耶夫人。以其婇女。幷及珍寶。亦以奉施。自從菩薩處胎以來。摩耶夫人日更修行六波羅蜜。天獻飲食。自然而至。不復樂於人間之味。三千大千世界。常皆大明。其界中間幽冥之處。日月威光。所不能照。亦皆朗然。其中衆生各得相見。共相謂言。此中云何忽生衆生。菩薩降胎之時。三千大千世界十八相動。淸涼香風。起於四方。諸抱疾者。皆悉除愈。貪欲瞋癡。亦皆休息。爾時兜率天宮。有一天子。作是念言。菩薩已生白淨王宮。我亦當復下生人間。菩薩成佛。我得在先爲其眷屬。供養聽法。作此念已。卽便下生王舍城中。明月種姓。旃陀羅。及多王家。復有天子。生舍衞國王家。復有天子。生偷羅厥叉國王家。復有天子。生犢子國王家。復有天子。生跋羅國王家。復有天子。生盧羅國王家。復有天子。生德叉尸羅國王家。復有天子。生拘羅婆國王家。復有天子。生婆羅門家。復有天子。生長者居士毗舍首陀羅家。復有五百天子生釋種姓家。有如是等諸天子衆。其數凡有九十九億。下生人間。又從他化自在天。乃至四天王所下生者。不可稱計。復有色界天王。與其眷屬亦皆下生。而作仙人。菩薩在胎。行住坐臥。無所妨礙。又不令母有諸苦患。菩薩晨朝於母胎中。爲色界諸天。說種種法。至日中時。爲欲界諸天。亦說諸法。於日晡時。又復爲諸鬼神說法。於夜三時。亦復如是成熟利益無量衆生。菩薩在胎。[夫人婇女。有來禮拜而供養者。或復有來作是預言。當令得成轉輪聖王。菩薩聞已。心不喜樂。或復有來作是預言。當令得成一切種智。菩薩聞已。心大歡喜。菩薩處胎。垂滿十月。身諸[支節及以相好。皆悉具足。亦使其母。諸根寂定。樂處園林。不喜憒鬧。時白淨王。心自思惟。夫人懷妊。

悉令三本俱作令悉○鳳凰宋作凰鳳元明俱作凰雛○嚴三本俱作飾

二同作四

止元作上

日月將滿。而不見其有生產相。作此念時。會遇夫人遣信白王。我今欲出園林遊觀。時王聞此益懷歡喜。卽勅於
外。令淨掃灑藍毗尼園。更使栽植諸妙花果。流泉浴池。悉令淸潔。欄楯階陛。皆以七寶而爲莊嚴。翡翠鴛鴦。鸞鳳
凰鷺。異類衆鳥。鳴集其中。懸繒幡蓋。散花燒香。作諸伎樂。猶如帝釋歡喜之園。又勅中間所經行處。皆令嚴淨。種
種莊嚴。又勅嚴辦十萬七寶車輦。一一車輦。雕玩殊絕。又復勅外。嚴辦四軍。象兵馬兵車兵步兵。又復選取後宮
婇女。顏容端正。不老不少。氣性調和。聰慧明了。其數凡有八萬四千。以用給侍摩耶夫人。又復擇取八萬四千端
正童女。著妙瓔珞嚴身之具。齎持香花。先往住彼藍毗尼園。王又勅諸群臣百官。夫人去者。皆悉侍從。於是夫人。
卽昇寶輿。與諸官屬幷及婇女。前後導從。往藍毗尼園。爾時復有天龍八部。亦皆隨從。充滿虛空。爾時夫人。旣入
園已。諸根寂靜。十月滿足。於二月八日日初出時。夫人見彼園中有一大樹。名曰無憂。花色香鮮。枝葉分布。極爲
茂盛。卽擧右手。欲牽摘之。菩薩漸漸從右脇出。于時樹下。亦生七寶七莖蓮花。大如車輪。菩薩卽便墮蓮花上。無
扶侍者。自行七步。擧其右手而師子吼。我於一切天人之中。最尊最勝。無量生死。於今盡矣。此生利益一切人天。
說是言已。時四天王。卽以天繒。接太子身。置寶机上。釋提桓因手執寶蓋。大梵天王又持白拂。侍立左右。難陀龍
王。優波難陀龍王。於虛空中。吐淸淨水。一溫一涼。灌太子身。身黃金色有三十二相。放大光明。普照三千大千世
界。天龍八部亦於空中。作天伎樂。歌唄讚頌。燒衆名香。散諸妙花。又雨天衣及以瓔珞。繽紛亂墜不可稱數。爾時
摩耶夫人生太子已。身安快樂。無有苦患。歡喜踊躍。止於樹下。前後自然忽生四井。其水香潔具八功德。爾時摩
耶夫人。與其眷屬。隨所欲須。自恣洗漱。復有諸夜叉王。皆悉圍繞。守護太子及摩耶夫人。當爾之時。閻浮提人。乃
至阿迦膩吒天。雖離喜樂。皆亦於此歡喜讚歎。一切種智。今出於世。無量衆生。皆得利益。唯願速成正覺之道。轉
於法輪。廣度衆生。唯有魔王。獨懷愁惱。不安本座。當爾之時。所感瑞應。三十有四。一者十方世界。皆悉大明。二者
三千大千世界。十八相動。丘墟平坦。三者一切枯木。悉更敷榮。國界自然生奇特樹。四者園苑生異甘果。五者陸
地生寶蓮花。大如車輪。六者地中伏藏。悉自發出。七者諸藏珍寶放大光明。八者諸天妙服自然來降。九者衆川
萬流恬靜澄淸。十者風止雲除空中明淨。十一者香風芬芳從四方來。細雨潤澤。以歛飛塵。十二者國中疾病皆

待三本俱作侍
虛元作盛
鳥元明俱作鬼
病三本俱作疾
伏同作服
嘉同作吉〇疾同作病
入宋作叉〇悚三本俱作怵
今同作令

悉除愈。十三者國內宮舍無不明曜。燈燭之光不復爲用。十四者日月星辰停住不行。十五者毗舍佉星。下現人間。待太子生。十六者諸梵天王。執素寶蓋。列覆宮上。十七者八方諸仙人師。奉寶來獻。十八者天百味食自然在前。十九者無數寶瓶盛諸甘露。二十者諸天妙車載寶而至。二十一者無數白象子首戴蓮花。列住殿前。二十二者天紺馬寶自然而來。二十三者五百白師子王。從雪山出。息其惡情。心懷歡喜。羅住城門。二十四者諸天伎女。於虛空中。作妙音樂。二十五者諸天玉女執孔雀拂。現宮墻上。二十六者諸天玉女。各持金瓶。盛滿香汁。列住空中。二十七者諸天歌頌。讚太子德。二十八者地獄休息。毒痛不行。二十九者毒蟲隱伏。惡鳥善心。三十者諸惡律儀一時慈悲。三十一者國內孕婦。產者悉男。其有百病自然除愈。三十二者一切樹神。化作人形。悉來禮侍。三十三者諸餘國王。各齎名寶同來臣伏。三十四者一切人天。無非時語。爾時諸婇女衆。見此瑞相。極大歡喜。自相謂言。太子今生。有如此等嘉祥之事。唯願長壽。無諸疾苦。勿令我等生大憂惱。作此言已。以天細氎裹抱太子。至夫人所。時四天王。在虛空中。恭敬隨從釋提桓因。執蓋來覆。有二十八大鬼神王。在園四角。守衛奉護。爾時有一青衣。聰慧明了。從藍毗尼園。還入宮中。到白淨王所而白王言。大王威德。轉更增進。摩耶夫人已生太子。顏貌端正。有三十二相八十種好。墮蓮花上。自行七步。舉其右手而師子吼。我於一切天人之中最尊最勝。無量生死於今盡矣。此生利益一切人天。有如是等諸奇特事。非可具說。時白淨王聞彼青衣說此語已。歡喜踊躍不能自勝。卽脫身瓔珞而以賜之。爾時白淨王卽嚴四兵眷屬圍繞。幷與一億釋迦種姓。前後導從入藍毗尼園。見彼園中天龍八部皆悉充滿。到夫人所見太子身。相好殊異歡喜踊躍。猶如江海諸大波浪。慮其短壽。入懷悚惕。譬如須彌山王。難可動搖。大地動時。此山乃動。彼白淨王。素性恬靜。常無歡慼。今見太子。一喜一懼。亦復如是。摩耶夫人。爲性調和。既生太子。見諸奇瑞。倍增柔軟。爾時白淨王。叉手合掌。禮諸天神。前抱太子。置於七寶象輿之上。與諸群臣後宮婇女虛空諸天。作諸伎樂。隨從入城。時白淨王及諸釋子。未識三寶。卽將太子。往詣天寺。太子既入。梵天形像。皆從座起。禮太子足而語王言。大王當知。今此太子天人中尊。虛空天神。皆悉禮敬。大王。豈不見如此耶。云何而今來此禮我。時白淨王及諸釋子。群臣內外。聞見是已。歎未曾有。卽將太子出於天寺。還入後宮。當爾之時。

諸釋種姓。亦同一日生五百男。時王廐中象生白子。馬生白駒。牛羊亦生五色羔犢。如是等類。數各五百。王家靑衣。亦生五百蒼頭。爾時宮中五百伏藏。自然發出。一一伏藏。有七寶藏。而圍繞之。又有諸大國商人。從海採寶。還入迦毘羅旆兜國。彼諸商人。各齎奇寶。而來獻王。時白淨王。問諸商人。汝等入海。採諸珍寶。悉皆吉利。無苦惱不。及諸伴侶。無遺落耶。彼諸商人。答言大王。所經道路。極自安隱。王聞此言。甚大歡喜。卽遣請諸婆羅門等。婆羅門衆皆悉集已。設諸供養。或與象馬及以七寶田宅僮僕。供養畢已。抱太子出。卽便白諸婆羅門言。當爲太子。作何等名。諸婆羅門。卽共論議。而答王言。太子生時。一切寶藏。皆悉發出。所有諸瑞。莫非吉祥。以此義故。當名太子爲薩婆悉達。說此語時。虛空天神。卽擊天鼓。燒香散花。唱言善哉。諸天人民。則便稱曰。薩婆悉達。爾時八王。亦於是日。與白淨王。同生太子。彼諸國王。各懷歡喜。我今生子。有諸奇異。而不知是薩婆悉達之瑞相也。皆集婆羅門。各爲太子。制好名字。王舍城太子。名曰頻毘婆羅。舍衛國太子。名婆斯匿。偸羅拘吒國太子。名拘薦婆。犢子國太子。名優陀延。跋羅國太子。名鬱陀羅延。盧羅國太子。名曰疾光德。叉尸羅國太子。名弗迦羅婆羅。拘羅婆國太子。名拘羅婆。爾時白淨王。普勅群臣。令訪聰明多聞智慧善知占相。爲諸世人所知識者。群臣聞已。四方推覓。時王卽便於後園中。起一大殿。窻牖欄楯。七寶莊飾。爾時群臣。得五百婆羅門聰明知相見諸奇瑞。欲來詣王。會王遣信疾速而至。諸臣白王。知相婆羅門。今者已到。王聞歡喜。卽勅令前請入殿坐。設諸供養。彼婆羅門卽白王言。我聞大王。新生太子。有諸相好奇特之瑞。願令我等悉得見之。時王卽勅抱太子出。諸婆羅門。旣見太子相好威嚴。歎未曾有。王卽問言。今占太子。其相云何。婆羅門言。一切衆生。皆欲子好。大王。今者所生太子。是大珍異。勿生憂怖。卽又白言。所生太子。大王。雖言是王之子。乃是世間人天之眼。王復問言。云何得知。婆羅門言。我觀太子。身色光焰。猶如眞金。有諸相好。極爲明淨。若當出家。成一切種智。若在家者。爲轉輪聖王。領四天下。譬如江河海爲第一。衆山之中須彌最勝。凡諸光明日爲無上。一切淸涼唯有明月。天人世間太子爲尊。王聞此語。心大歡喜。離諸憂惕。彼婆羅門又白王言。有一梵仙名阿私陀。具足五通。在於香山。彼能爲王斷諸疑惑。諸婆羅門說此語已。辭別而去。爾時白淨王心自思惟。阿私陀仙人。居在香山。途逕嶮絕。非人所到。當以何方請來至此。王可作此心念之

蒼宋作倉次同
極明作及
婆三本俱作婆次同○婆元明俱作波○大三本俱作太
子明作一
雖元作離
輪下三本俱無聖字
請元明俱作詣

耶三本倶作也

來同作至

戰同作顫

人宋作又〇平三本倶作立

纖宋元倶作腨纖明作腨纖 拘類三本倶作倶盧

四上同無口字

時。阿私陀仙人。遙知王意。又復先見諸奇瑞相。深解菩薩爲破生死故現受生。以神通力。騰虛而來。到王宮門。時守門者入白王言。阿私陀仙人。乘虛空來。今在門外。王聞歡喜。即勅令前。王至門上。自奉迎之。既見仙人。恭敬禮拜。而即問言。尊者既來。住門不進。爲守門者不聽前耶。仙人答言。無見止者。既來相詣。宜須先白。王便隨從。入於後宮。敬請令坐。而問訊言。尊者。四大常安和不。仙人答言。蒙大王恩。幸得安樂。時白淨王白仙人言。尊者。今日能來下降。我等種族。方大熾盛。從今已去。日就吉祥。爲是經過故來此耶。仙人答言。我在香山。見大光明諸奇特相。又知大王心之所念。以是因縁故來到此。我以神力。乘虛而來。聞上諸天說。王太子必當得成一切種智。度脫天人。又王太子。從右脇生。墮於七寶蓮花之上。而行七步。擧其右手而師子吼。我於天人之中。最尊最勝。無量生死於今盡矣。此生利益一切天人。又復諸天圍繞恭敬。聞有如此大奇特事。快哉大王。宜應欣慶。太子今者可得見不。即將仙人至太子所。王及夫人。抱太子出。欲禮仙人。時彼仙人。即止王曰。此是天人三界中尊。云何而令禮於我耶。時彼仙人。即起合掌。禮太子足。王及夫人。白仙人言。唯願尊者。爲相太子。仙人言善。即便占相。具見相已。忽然悲泣。不能自勝。王及夫人。見彼仙人悲泣流淚。擧身戰怖。生大憂惱。如大波浪動於小船。問仙人言。我子初生。具諸瑞相。有何不祥而悲泣耶。爾時仙人歔欷答言。大王太子。相好具足。無有不祥。王又問言。願更爲我占視太子。有長壽相不。得轉輪王位王四天下不。我年既暮。欲以國土皆悉付之。當隱山林出家學道。所可志願。唯在於此。尊者爲觀必定果耶。爾時仙人又答王言。大王太子具三十二相。一者足下安平平如奩底。二者足下千輻網輪輪相具足。三者手足相指長勝於餘人。四者手足柔軟勝餘身分。五者足跟廣具足滿好。六者足指合縵網勝於餘人。七者足趺高平好與跟相稱。八者伊泥延鹿腨纖好如伊泥延鹿王。九者平住兩手摩膝。十者陰藏相如馬王象王。十一者身縱廣等如尼拘類樹。十二者一一孔一毛生青色柔軟右旋。十三者毛上向靡青色柔軟右旋。十四者金色相其色微妙勝閻浮檀金。十五者身光面一丈。十六者皮薄細滑不受塵垢不停蚊蚋。十七者七處滿兩足下兩手中兩肩上項中皆滿字相分明。十八者兩腋下滿如摩尼珠。十九者身如師子。二十者身廣端直。二十一者肩圓好。二十二者口四十齒。二十三者齒白齊密而根深。二十四者四牙最白而大。二十五者方頰

技宋作伎次同 列同作烈○淨三本俱作流○猗同作綺

車如師子。二十六者味中得上味咽中二處津液流出。二十七者舌大軟薄能覆面至耳髮際。二十八者梵音深遠如迦陵頻伽聲。二十九者眼色如金精。三十者眼睫如牛王。三十一者眉間白毫相軟白如兜羅綿。三十二者頂髻肉成。具有如此相好之身。若在家者。年二十九。爲轉輪聖王。若出家者。成一切種智。廣濟天人。然王太子。必當學道得成阿耨多羅三藐三菩提。不久當轉清淨法輪。利益天人。開世間眼。我今年壽。已百二十不久命終。生無想天。不覩佛興。不聞經法故自悲耳。又問仙人。尊者向占言。有二種。一當作王。二成正覺。而今云何言。決定成一切種智。時仙人言。我相之法。若有衆生。具三十二相。或生非處。又不明顯。此人必爲轉輪聖王。若三十二相。皆得其處。又復明顯。此人必成一切種智。我觀大王太子諸相。皆得其所。又極明顯。是以決定知成正覺。仙人爲王說此語已辭別而退。爾時白淨王。既聞仙人決定之說。心懷愁惱。慮恐出家。卽擇五百青衣賢明多智。爲作嬭母。養視太子。其中或有乳者。或有抱者。或有浴者。或有浣濯者。如是等比。供給太子。皆悉具足。又復別爲起三時殿。溫涼寒暑。各自異處。其殿皆以七寶莊嚴。衣裳服飾。皆悉隨時。王恐太子棄家學道。使其城門開閉之聲聞四十里。又復擇取五百妓女。形容端正。不肥不瘦。不長不短。不白不黑。才能巧妙。各兼數技。皆以名寶瓔珞其身。百人一番。迭代宿衞。於其殿前。列樹甘果。枝葉蔚映。花實繁茂。又有浴池。清淨澄潔。池邊香草雜色蓮花。猗靡芬敷。不可稱計。異類之鳥。數百千種。光麗心目。趣悅太子。太子既生。始滿七日。其母命終。以懷太子功德大故。上生忉利。封受自然。太子自知福德威重。無有女人堪受禮者。故因將終託之而生。爾時太子姨母摩訶波闍波提。乳養太子。如母無異。時白淨王。勅作七寶天冠及以瓔珞。而與太子。太子年漸長大。爲辦象馬牛羊之車。凡是童子所玩好具。無不給與。爾時舉國人民。皆行仁惠。五穀豐熟。風雨以時。又無盜賊。快樂安隱。皆是太子福德力故。時王又以青衣所生是車匿等五百蒼頭。給侍太子。至年七歲。父王心念太子已大。宜令學書。訪覓國中聰明婆羅門善諸書藝。請使令來以教太子。爾時有一婆羅門。名跋陀羅尼。與五百婆羅門。以爲眷屬。來受王請。卽白婆羅門言。欲屈尊者爲太子師。此可爾不。婆羅門言。當隨所知。以授太子。時白淨王。更爲太子。起大學堂。七寶莊嚴。牀榻學具。極令精麗。卜擇吉日。卽以太子與婆羅門而令教之。爾時婆羅門。以四十九書字之本。教令讀之。于時太子見

之三本俱作須

此事已。問其師言。此何等書。閻浮提中。一切諸書。凡有幾種。師卽默然不知所答。又復問言。此阿一字。有何等義。師又默然。亦不能答。內懷慙愧。卽從座起。禮太子足。而讚歎言。太子初生行七步時。自言天人之中最尊最勝。此言不虛。唯願爲說閻浮提書凡有幾種。太子答言。閻浮提中。或有梵書。或佉樓書。或蓮花書。有如是等六十四種。此阿字者。是梵音聲。又此字義。是不可壞。亦是無上正眞道義。凡如此義。無量無邊。爾時婆羅門。深生慙愧。還至王所。而白王言。大王太子。是天人中第一之師。云何而欲令我敎耶。爾時父王聞婆羅門言。倍生歡喜。歎未曾有。卽厚供養彼婆羅門。隨意所之。凡諸技藝典籍議論天文地理算數射御。太子皆悉自然知之

過去現在因果經卷第一

過去現在因果經卷第二

宋天竺三藏求那跋陀羅譯

〔麗言〕〔宋辭〕〔元辭〕〔明尺〕

爾時太子。至年十歲。諸釋種中。五百童子。皆亦同年。太子從弟提婆達多。次名難陀。次名孫陀羅難陀等。或有三十相三十一相者。或復雖有三十二相。相不分明。各閑伎藝。有大筋力。時提婆達多等。五百童子。既聞太子諸藝皆通名徹十方。共相謂言。太子雖復聰明智慧善解書論。至於力膂。詎勝我等。欲與太子較其勇健。爾時父王。又訪國中善知射者。而召之來。令教太子。即往後園。欲射鐵鼓。提婆達多等五百童子。亦悉隨從。時師即便授一小弓而與太子。太子含笑而問之言。以此與我。欲作何等。射師答言。欲令太子射此鐵鼓。太子又言。此弓力弱。更求如是七弓將來。師即授與。太子便執七弓。以射一箭。過七鐵鼓。時彼射師。往白王言。大王太子。自知射藝。以一箭力。射過七鼓。閻浮提中。無能等者。云何令我爲作師耶。爾時白淨王聞此語已。心大歡喜。而自念言。我子聰明。書論算數。四遠悉知。而其射藝。四方人民。未有知者。即勅太子及提婆達多等五百童子。又復擊鼓唱令國界。太子薩婆悉達。却後七日。當出後園。欲試武藝。諸人民中有勇力者。可悉來此。到第七日。提婆達多與六萬眷屬。最先出城。于時有一大象。當城門住。此諸軍衆。皆不敢前。提婆達多問諸人言。何故住此而不前耶。諸人答言。有一大象。當門而立。舉衆畏之故不敢前。提婆達多聞此言已。獨前象所。以手搏頭。即便躃地。於是軍衆。次第得過。爾時難陀又與眷屬。亦欲出城。其諸軍衆。徐步漸前。難陀即問。何故行遲。諸人答言。提婆達多手搏一象。躃在城門。妨行者路。以是故遲。難陀即便前至象所。以足指挑象。擲著路傍。無數人衆。聚共看之。爾時太子與十萬眷屬前後圍繞。始出城門。見於路傍人衆聚看。即便問曰。此諸人輩。爲何所看。從人答言。提婆達多手搏一象。躃在城門妨人行路。難陀次出。以足指挑擲著於此。是故行人悉聚看之。於是太子。即自念言。今者正是現力之時。太子便即以手執象。擲著城外。還以手接。不令傷損。象又還穌無所苦痛。時諸人民。歎未曾有。王聞此已。深生奇特。如是太

至年同作年至
十宋作七○伎
元明俱作技○
膂宋作旅○較
三本俱作校

人宋作之

鍮三本俱作鍮

鍾明作鐘

毗三本俱作比下同
按同作案

子及提婆達多并與難陀。四遠人民。皆悉來集。在彼園中。爾時彼園。種種莊嚴。施列金鼓銀鼓鍮石之鼓銅鐵等鼓。各有七枚。爾時提婆達多。最先射之。徹三金鼓。次及難陀。亦徹三鼓。諸來人衆。悉皆雅歎。爾時群臣。白太子言。提婆達多及與難陀。皆已射訖。今者次第正在太子。唯願太子。射此諸鼓。如是三請。太子曰善。而語之言。若欲使我射諸鼓者。此弓力弱。更覓强者。諸臣答言。太子祖王。有一良弓。今在王庫。太子語言。便可取來。弓既至已。太子卽牽以放一箭。徹過諸鼓。然後入地。泉水流出。又亦穿過大鐵圍山。爾時提婆達多又與難陀。共相撲戲。二人力等。亦無勝者。太子又前。手執二弟。擲之於地。以慈力故不令傷痛。爾時四遠諸人民衆。既見太子有如此力。高聲唱言。白淨王太子。非但智慧勝一切人。其力勇健亦無等者。莫不歎伏。益生恭敬。爾時白淨王。卽命諸臣而共議言。太子今者年已長大。智慧勇健。皆悉具足。今宜應以四大海水灌太子頂。又復勑下餘小國王。却後二月八日。灌太子頂。皆可來集。至二月八日。諸餘國王并及仙人婆羅門等。皆悉雲集。懸繒幡蓋。燒香散花。鳴鍾擊鼓。作諸伎樂。以七寶器。盛四海水。諸仙人衆。各各頂戴。授婆羅門。如是乃至遍及諸臣。悉已頂戴。傳授與王。時王卽以灌太子頂。以七寶印而用付之。又擊大鼓。高聲唱言。今立薩婆悉達以爲太子。爾時虛空。天龍夜叉人非人等作天伎樂。異口同音。讚言善哉。當於迦毗羅旆兜國立太子時。餘八國王。亦於是日同立太子。爾時太子。啓王出遊。王卽聽許。時王卽與太子并諸群臣。前後導從。按行國界。次復前行。到王田所。卽便止息。閻浮樹下。看諸耕人。爾時淨居天。化作壤蟲。烏隨啄之。太子見已。起慈悲心。衆生可愍。互相吞食。卽便思惟。離欲界愛。如是乃至得四禪地。日光昕赫。樹爲曲枝。隨蔭太子。爾時白淨王。四面推求。問覓太子。從人答曰。太子今在閻浮樹下。時王卽便與諸群臣。往彼樹所。未至之間。遙見太子端坐思惟。又見彼樹曲蔭其軀。深生奇特。時王卽前執太子手問言。汝今何故在於此坐。太子答言。觀諸衆生。更相吞食。甚可傷愍。王聞此語。心生憂惱。慮其出家。宜急婚娉以悅其意。卽便呼之。俱共還國。太子答言。願停於此。王聞其語。心卽念言。彼阿私陀。往日所說。太子今者將如其言。王卽流淚重喚還國。太子既見父王如此。卽便隨從。歸於所止。王恐愁憂。不樂在家。更增妓女。而娛樂之。爾時太子。至年十七。王集諸臣。而共議言。太子今者年已長大。宜應爲其訪索婚所。諸臣答言。有一釋種婆羅門。名摩訶那摩。其人有

女名耶輸陀羅。顏容端正。聰明智慧。賢才過人。禮儀備舉。有如是德。堪太子妃。王即答言。若如卿語。便爲納之。王還宮內。即勅宮中聰明有智舊宿女人。汝可往至摩訶那摩長者之家。瞻看其女。容儀禮行。爲何如耶。可停於彼至滿七日。受王勅已。即便往彼長者之家。於七日中。具觀此女。還答王言。我觀此女。容貌端正。威儀進止。無與等者。王聞其言。極大歡喜。即便遣人語摩訶那摩言。太子年長。欲爲納妃。諸臣並言。汝女淑令。宜堪此舉。今欲相屈。時摩訶那摩。答王使言。謹奉勅旨。王即令諸臣擇採吉日。遣車馬乘。而往迎之。既至宮已。具足太子婚姻之禮。又復更增諸妓女衆。晝夜娛樂。爾時太子。恒與其妃。行住坐臥。未曾不俱。初自無有世俗之意。於靜夜中。但修禪觀。時王日日問諸婇女。太子與妃。相接近不。婇女答言。不見太子有夫婦道。王聞此語。愁憂不樂。更增妓女。而娛樂之。如是經時。猶不接近。時王深疑恐不能男。爾時太子。聞諸妓女歌詠園林。花果茂盛。流泉清涼。太子忽便欲出遊觀。即遣妓女。往白王言。在宮日久。樂欲暫出園林遊戲。王聞此語。心生歡喜。而自念言。太子當是不樂在宮行夫婦禮。所以求出園林去耳。即便聽之。勅諸群臣。整治園觀。所經道路。皆令清淨。太子即便往至王所。頭面禮足。辭出而去。時王即便勅一舊臣聰明智慧善言辯者。令從太子。爾時太子。與諸官屬。前後導從。出城東門。國中人民。聞太子出。男女盈路。觀者如雲。時淨居天。化作老人。頭白背僂。拄杖羸步。太子即便問從者言。此爲何人。從者答曰。此老人也。太子又問。何謂爲老。答曰。此人昔日曾經嬰兒童子少年。遷謝不住。遂至根熟。形變色衰。飲食不消。氣力虛微。坐起苦極。餘命無幾。故謂爲老。太子又問。唯此人老。一切皆然。從者答言。一切皆悉應當如此。爾時太子。聞是語已。生大苦惱。而自念言。日月流邁。時變歲移。老至如電。身安足恃。我雖富貴。豈獨免耶。云何世人。而不怖畏。太子從本以來。不樂處世。又聞此事。益生厭離。即迴車還。愁思不樂。時王聞已。心懷煎憂。恐其學道。更增妓女。以娛樂之。爾時太子。復經少時。啓王出遊。王聞此言。心生憂慮。而自念言。太子前出。逢見老人。憂愁不樂。今者云何。而復求出。王愛太子。不忍違異。僶俛從之。即集諸臣。而共議言。太子前者出城東門。逢見老人。還輒不樂。今者已復求出遊觀。吾不能免。遂復許之。諸臣答言。當更嚴勅外諸官屬。修治道路。懸繒幡蓋。散華燒香。皆使華麗。無令臭穢諸不淨潔。及以老病在道側也。爾時迦毘羅旆兜城四門之外。各有一園。樹木花果。浴池樓觀。種種

七宋元俱作十
涼三本俱作淨
免宋作勉
病三本俱作疾

戰同作顫下同

司三本俱作伺

優同作憂下同

莊嚴。皆悉無異。王問諸臣。外諸園觀。何者爲勝。諸臣答言。外諸園觀。皆等無異。如忉利天歡喜之園。王又勑言。太子前出已從東門。今者可令從南門出。爾時太子。百官導從。出城南門。時淨居天。化作病人。身瘦腹大。喘息呻吟。骨消肉竭。顏貌痿黃。舉身戰掉。不能自持。兩人扶腋在於路側。太子卽問。此爲何人。從者答曰。此病人也。太子又問。何謂爲病。答曰。夫謂病者。皆由嗜欲。飲食無度。四大不調。轉變成病。百節苦痛。氣力虛微。飲食寡少。眠臥不安。雖有身手。不能自運。要假他力。然後坐起。爾時太子。以慈悲心。看彼病人。自生愁憂。又復問言。此人獨爾。餘皆然耶。答曰。一切人民。無有貴賤。同有此病。太子聞已。心自念言。如此病苦。普應嬰之。云何世人。耽樂不畏。作此念已。深生恐怖。自身戰動。譬如月影現波浪水。語從者言。如此身者。是大苦聚。世人於中。橫生歡樂。愚癡無識。不知覺悟。今者云何。欲往彼園遊觀嬉戲。卽便迴車。還入王宮。坐自思惟。愁憂不樂。王問從者。太子今出。寧有樂不。從者答言。始出南門。逢見病人。以此不樂。卽迴車還。王聞此語。心大愁憂。慮其出家。時王卽便問諸臣言。太子前者出城東門。逢見老人。愁憂不樂。以此事故。吾勑卿等。淨治道路。無令老病在於巷側。云何今出於城南門。而復致有疾病人耶。又令太子逢値見之。諸臣答言。近受王勑。嚴命外司。勿使有諸臭穢老病在於道側。互相撿覆。無敢懈怠。不知何緣忽有病人。非是我等之罪咎也。爾時王問諸從者言。汝等並見病人在路。何從而至。從者答曰。無有蹤跡。不知何來。時王深於太子生猶豫心。恐其學道。更增妓女。而悅其意。又復欲使於五欲中生戀著心。爾時有一婆羅門子。名優陀夷。聰明智慧。極有才辯。時王卽便請來入宮。而語之言。太子今者。不樂在世受於五欲。恐其不久。出家學道。汝可與之共作朋屬。具說世間五欲樂事。令其心動不樂出家。時優陀夷。卽便答言。太子聰明。無與等者。所知書論。皆悉淵博。並是我今所未曾聞。云何見使誘說之耶。譬以藕絲欲懸須彌。我亦如是。終不能迴太子之心。大王既勑令作朋友。要當自竭我所知見。時優陀夷。受王勑已。隨從太子。行住坐臥。不敢遠離。時王又復選諸妓女。聰明智慧。顏容端正。善於歌舞。能惑人者。種種莊飾。光麗悅目。皆悉遣往給侍太子。爾時太子。復經少時。啓王出遊。王聞此語。心自念言。彼優陀夷。既與太子。共爲朋友。今若出遊。或勝於前。無復厭俗樂出家心。作是念已。卽便聽許。時王又復集諸大臣。悉語之言。太子今者復求出遊。我不忍違。已復聽之。太子前出東南二門。

嗔同作瞋
死下同有人字
物同作人
反三本俱作返

已見老病。還輒憂愁。今者宜令從西門出。我心慮其還又不樂。然優陀夷。是其良友。冀今出還。不復應爾。卿等好令修治道路園林臺觀。皆使嚴整。香華幡蓋。數倍於前。無令復有老病臭穢在道側也。臣受勅已。即語外司。嚴治道路。幷及園林。光麗倍常。王又先送諸妙妓女。置彼園中。又復勅語優陀夷言。若當路側。有不祥事。可以方便誘悅其心。幷勅諸臣。隨從太子。皆令伺察。若有不吉。遠驅逐之。爾時太子。與優陀夷。百官導從。燒香散花。作衆伎樂。出城西門。時淨居天。心自念言。先現老病於二城門。擧衆皆見。令白淨王嗔責從者幷及外司。太子今出。王制嚴峻。我今現死。若皆見者。增王忿怒。必加罰戮枉及無辜。我於今日所現之事。唯令太子及優陀夷二人見耳。使餘官屬不受責也。作此念已。即便來下。化爲死人。四人擧輿。以諸香華。布散屍上。室家大小。號哭從之。爾時太子。與優陀夷。二人獨見。太子問言。此爲何物。而以花香。莊飾其上。復有人衆。號哭相送。時優陀夷。以王勅故。默然不答。如是三問。淨居天王。威神之力。使優陀夷不覺答言。是死人也。太子又問。何謂爲死。優陀夷言。夫謂死者。刀風解形。神識去矣。四體諸根。無所復知。此人在世。貪著五欲。愛惜錢財。辛苦經營。唯知積聚。不識無常。今者一旦捨之而死。又爲父母親戚眷屬之所愛念。命終之後。猶如草木。恩情好惡。不復相關。如是死者。誠可哀也。太子聞已。心大戰怖。又問優陀夷言。唯此人死。餘亦當然。即復答言。一切世人。皆應如此。無有貴賤而得免脫。太子素性。恬靜難動。既聞此語。不能自安。即以微聲。語優陀夷。世間乃復有此死苦。云何於中。而行放逸心如木石不知怖畏。即勅御者可迴車還。御者答言。前出二門。未到園所。中路而反。致令大王深見瞋責。今者豈敢復如此耶。時優陀夷。語御者言。如汝所說。不應便歸。即復前行。至彼園中。香華幡蓋。作衆伎樂。衆妓端正。猶如諸天婇女無異。於太子前。各競歌舞。冀以恣態。悅動其意。太子心安。不可移轉。即止園中。蔭息樹間。除其侍衞。端坐思惟。憶昔曾在閻浮樹下。遠離欲界。乃至得於第四禪定。爾時優陀夷。到太子所。而作此言。大王見勅。令與太子共爲朋友。脫有得失。互相開悟。朋友之法。其要有三。一者見有過失。輒相諫曉。二者見有好事。深生隨喜。三者在於苦厄。不相棄捨。今獻誠言。願不見責。古昔諸王。及今現在。皆悉受於五欲之樂。然後出家。太子云何。永絕不顧。又人生世。宜順人行。無有棄國而學道者。唯願太子。受於五欲。令有子息。不絕王嗣。爾時太子。而答之言。誠如所說。但我不以捐國故

大同作太下同

遂三本俱作逆

開同作閑

爾。亦復不言五欲無樂。以畏老病生死之苦故。於五欲不敢愛著。汝向所言。古昔諸王。先經五欲。然後出家。此諸王等。今在何許。以愛欲故。或在地獄。或在餓鬼。或在畜生。或在人天。以有如是輪轉苦故。是以我欲離老病苦生死法耳。汝今云何令我受之。時優陀夷。雖竭才辯勸奬太子。不能令迴。卽便退坐。歸於所止。太子仍勑嚴駕還宮。諸妓女衆。及優陀夷。愁憂慘慼。顏貌顰蹙。如人新喪所愛親屬。太子到宮。惻愴倍常。時白淨王。呼優陀夷。而問之言。太子今出。寧有樂不。優陀夷言。出城不遠。逢見死人。亦不知其從何而來。太子與我。同時見之。太子問言。此爲何人。我亦不覺答是死人。時王卽復問諸從者。汝等皆見城西門外有死人不。從者答言。我等不見。王聞此語。神意豁然。而自念言。太子優陀夷二人獨見。此是天力。非諸臣咎。必定當如阿私陀言。作此念已。心大苦惱。復增妓女。以娛樂之。日日遣人。慰誘太子。而語之言。國是汝有。何故愁憂。而不樂耶。王又嚴勑諸妓女衆。悅太子意。勿捨晝夜。時白淨王。雖知天力非復人事。愛重太子。不能不言。心自思惟。大子前已出三城門。今者唯有北門未出。其必不久更求出遊。當復莊嚴彼外園林。倍令光麗。勿使有諸不可意事。如所思惟。具勑諸臣。時王又復心自願言。太子若出城北門時。唯願諸天。勿復現於不吉祥事。復令我子心生憂惱。旣心願已。遂勑御者。太子若出。當令乘馬使得四望見諸人民光麗莊飾。是時太子。啓王出遊。王不忍違。便與優陀夷及餘官屬。前後導從。出城北門。到彼園所。太子下馬。止息於樹。除去侍衞。端坐思惟。念於世間老病死苦。時淨居天。化作比丘。法服持鉢。手執錫杖。視地而行。在太子前。太子見已。卽便問言。汝是何人。比丘答言。我是比丘。太子又問。何謂比丘。答言。能破結賊。不受後身。故曰比丘。世間皆悉無常危脆。我所修學。無漏聖道。不著色聲香味觸法。永得無爲。到解脫岸。作此言已。於太子前。現神通力。騰虛而去。當爾之時。諸從官屬。皆悉覩見。太子旣已見此比丘。又聞廣說出家功德。會其宿懷厭欲之情。便自唱言。善哉善哉。天人之中。唯此爲勝。我當決定修學是道。作此語已。卽便索馬還歸宮城。於時太子。心生欣慶。而自念言。我先見有老病死苦。晝夜常恐爲此所逼。今見比丘。開悟我情。示解脫路。作此念已。卽自思惟方便。求覓出家因緣。爾時白淨王。問優陀夷言。太子今出。寧有樂不。時優陀夷。卽答王言。太子向出。所經道路。無諸不祥。旣到園中。太子獨自在於樹下。遙見一人。剃除鬚髮。著染色衣。來太子前。而共言語。言語旣畢。騰

虛而去。竟亦不知何所論說。太子因是嚴駕而歸。當爾之時。顏容歡悅。還至宮中。方生憂愁。時白淨王。既聞此語。心生狐疑。亦復不知是何瑞相。深懷懊惱。而自念言。太子決定捨家學道。又納其妃。久而無子。我今應勅耶輸陀羅。當思方便莫絕國嗣。復應警戒勿使太子去而不知。既作是念。如所思惟。即便勅於耶輸陀羅。耶輸陀羅。聞王勅已。心懷慙愧。默然而住。行止坐臥。不離太子。時王復增諸妙妓女。以娛樂之。爾時太子。年至十九。心自思惟。我今正是出家之時。而便往至於父王所。威儀庠序。猶如帝釋。往詣梵天。傍臣見已。而白王言。太子今者來大王所。王聞此言。憂喜交集。太子既至。頭面作禮。爾時父王。即便抱之。而勅令坐。太子坐已。白父王言。恩愛集會。必有別離。唯願聽我出家學道。一切衆生。愛別離苦。皆使解脫。願必垂許。不見留難。時白淨王。聞太子語。心大苦痛。猶如金剛摧破於山。舉身戰掉。不安本座。執太子手。不復能言。啼泣流淚。噓唏哽咽。如是良久。微聲而言。汝今宜應息出家意。所以者何。年既少壯。國未有嗣。而便委我。會不迴顧。爾時太子。既見父王流淚不許。還歸所止。思惟出家。愁憂不樂。爾時迦毗羅旆兜國。諸大相師。占知太子。若不出家。過七日後。得轉輪王位。王四天下。七寶自至。各以所知。往白王言。釋迦種姓。於此方興。王聞是語。心生歡喜。即勅諸臣幷釋種子。汝聞相師如此言不。皆應日夜侍衞太子。於城四門門各千人。周匝城外一踰闍那內。邏置人衆。而防護之。復勅耶輸陀羅幷諸內官。倍加警戒。過於七日。勿使出家。時王又來至太子所。太子遙見。即往奉迎。頭面禮足。問訊起居。王語太子我昔既聞阿私陀說。及衆相師。幷諸奇瑞。必定知汝不樂處世。國嗣既重。屬當相繼。唯願爲我。生汝一子。然後絕俗。不復相違。爾時太子。聞父王言。心自思惟。大王所以苦留我者。正自爲國無紹嗣耳。作是念已。而答王言。善哉如勅。即以左手。指其妃腹。時耶輸陀羅。便覺體異。自知有娠。王聞太子如勅之言。心大歡喜。當謂太子。七日之內。必未有兒。若過此期。轉輪王位。自然而至。不復出家。爾時太子。心自念言。我年已至一十有九。今是二月。復是七日。宜應方便思求出家。所以者何。今正是時。又於父王。所願已滿。作此念已。身放光明。照四天王宮。乃至照於淨居天宮。不令人間見此光明。爾時諸天。見此光已。皆知太子出家時至。即便來下。到太子所。頭面禮足。合掌白言。無量劫來。所修行願。今者正是成熟之時。於是太子。答諸天言。如汝等語。今正是時。然父王勅內外官屬。嚴見防衞。欲去無從。諸天白

納其同作其納
戒明作誡
至三本俱作一
占同作並
邏同作羅○官三本俱作宮○戒元明俱作誡
繼三本俱作係

惛同作淳

坐同作座

若同作如

惟同作如

被明作鞁下同
〇揵三本俱作犍下同

言。我等自當設諸方便。令太子出。使無知者。諸天即便以其神力。令諸宮屬。皆悉惛臥。爾時耶輸陀羅。眠臥之中。得三大夢。一者夢月墮地。二者夢牙齒落。三者夢失右臂。得此夢已。眠中驚覺。心大怖懼。白太子言。我於眠中。得三惡夢。太子問言。汝夢何等。耶輸陀羅。即便具說所夢之事。太子語言。月猶在天。齒又不落。臂復尙在。當知諸夢虛假非實。汝今不應橫生怖畏。耶輸陀羅。又語太子。如我自忖所夢之事。必是太子出家之瑞。太子又答。汝但安眠勿生此慮。要不令汝有不祥事。耶輸陀羅。聞此語已。即便還眠。太子即從坐起。遍觀妓女及耶輸陀羅。皆如木人。譬若芭蕉中無堅實。或有倚伏於樂器上。臂脚垂地。更相枕臥。鼻涕目淚。口中流涎。又復遍觀妻及妓女。見其形體。髮爪髓腦。骨齒髑髏。皮膚肌肉。筋脈肪血。心肺脾腎。肝膽腸胃。屎尿涕唾。外爲革囊。中盛臭穢。無一可奇。強熏以香。飾以花綵。譬如假借當還。亦不得久。百年之命。臥消其半。又多憂惱。其樂無幾。世人云何恒見此事。而不覺悟。又於其中。貪著婬欲。我今當學古昔諸佛所修之行。急應遠此大火之聚。爾時太子。思惟是已。至於後夜。淨居天王。及欲界諸天。充滿虛空。即共同聲。白太子言。內外眷屬。皆悉惛臥。今者正是出家之時。爾時太子。即便自往至車匿所。以天力故。車匿自覺。而語之言。汝可爲我被揵陟來。爾時車匿。聞此言已。舉身戰怖。心懷猶豫。一者不欲違太子命。二者畏王勅旨嚴峻。思惟良久。流淚而言。大王慈勅。如是之嚴。且又今者非遊觀時。又非降伏怨敵之日。云何於此後夜之中。而忽索馬。欲何所之。太子又復語車匿言。我今欲爲一切衆生。降伏煩惱結使賊故。汝今不應違我此意。爾時車匿。舉聲號泣。欲令耶輸陀羅及諸眷屬。皆悉覺知。太子當去。以天神力。惛臥如故。車匿即便牽馬而來。太子徐前。而語車匿及以揵陟。一切恩愛。會當別離。世間之事。易可果遂。出家因緣。甚難成就。車匿聞已。默然無言。於是揵陟。不復噴鳴。爾時太子。見明相出。放身光明。徹照十方。師子吼言。過去諸佛。出家之法。我今亦然。於是諸天。捧馬四足。幷接車匿。釋提桓因。執蓋隨從。諸天即便令城北門。自然而開。不使有聲。太子於是從門而出。虛空諸天。讚歎隨從。爾時太子。又師子吼。我若不斷生老病死憂悲苦惱。終不還宮。我若不得阿耨多羅三藐三菩提。又復不能轉於法輪。要不還與父王相見。若當不盡恩愛之情。終不還見摩訶波闍波提及耶輸陀羅。當於太子說此誓時。虛空諸天。讚言善哉。斯言必果。至于天曉。所行道路。已三踰闍那。時諸天衆。既從

競元明俱作竟
搔三本俱作騷
身元明俱作娠

太子。至此處已。所爲事畢。忽然不現。爾時太子。次行至彼跋伽仙人苦行林中。太子見此園林。寂靜無諸諠鬧。心生歡喜。諸根悅豫。卽便下馬。撫背而言。所難爲事。汝作已畢。又語車匿。馬行駿疾。如金翅鳥王。汝恒隨從。不離我側。世間之人。或有善心。而形不隨。或運形力。而心不稱。汝今心形皆悉無違。又世間人。處富貴者。競隨奉事。我既捨國。來此林中。唯汝一人。獨能隨我。甚爲希有。我今既已至閑靜處。汝便可與揵陟俱還宮也。爾時車匿。聞此語已。悲號啼泣。迷悶躃地。不能自勝。於是揵陟既聞被遣。屈膝舐足。淚落如雨。車匿答言。我今云何忍聽太子如此言耶。我於宮中。違大王勅。輒被揵陟。以與太子。致令今日來至於此。父王及摩訶波闍波提。失太子故。必當憂惱。宮中內外。亦應搔動。又復此處多諸嶮難。猛獸毒蟲。交橫道路。我今云何而捨太子。獨還宮耶。太子卽便答車匿言。世間之法。獨世獨死。豈復有伴。又有生老病死諸苦。我當云何與此作侶。吾今爲欲斷諸苦故。而來至此。苦若斷時。然後當與一切衆生。而作伴侶。我於卽時。諸苦未離。云何而得爲汝作侶。車匿又曰。太子生來長於深宮。身體手足。皆悉柔軟。眠臥床褥。無不細滑。如何一旦履藉荊棘瓦礫泥土。止宿樹下。太子答言。誠如汝語。設我住宮。乃可免此荊棘之患。老病死苦。會自見侵。車匿既聞太子此語。悲泣垂淚。默然而住。于時太子。卽就車匿。取七寶劍。而師子吼。過去諸佛。爲成就阿耨多羅三藐三菩提故。捨棄飾好。剃除鬚髮。我今亦當依諸佛法。作此言已。便脫寶冠。髻中明珠。以與車匿。而語之曰。以此寶冠及以明珠。致王足下。汝可爲我上白大王。我今不爲生天樂故。亦復非不孝順父母。亦無忿恨瞋恚之心。但以畏彼生老病死。爲除斷故。來至此耳。汝應助我隨喜欣慶。勿於吉祥更生悲愁。父王若謂我今出家未是時者。汝以我語。上啓大王。老病死至。豈有定時。人雖少壯。焉得免此。父王若復而責我言。本要有子。當聽出家。今未有子。云何而去。及出宮時。不啓聞者。汝可爲我具啓父王。耶輸陀羅。久已有身。王自問之。昔勅如此。非爲專輒。往古有諸轉輪聖王。厭國位者。入於山林。出家求道。無有中途還受五欲。我今出家。亦復如是。未成菩提。終不還宮。內外眷屬。皆當於我有恩愛情。可以汝辯爲解釋之。勿使於我橫生憂惱。太子又復脫身瓔珞。以授車匿。而語之言。汝可爲我持此瓔珞。奉摩訶波闍波提。道我今爲斷諸苦本故出宮城。求滿此願。勿復於我反更生苦。又脫身上餘莊嚴具。以與耶輸陀羅。亦復語言。人生於世。愛別離苦。我今爲欲

之下三本倶無所字
懊元明倶作煩
歸三本倶作還
爲元明倶作衣

斷此諸苦。出家學道。勿以我故恒生愁憂。幷諸親屬。皆亦如是。爾時車匿。聞此語已。倍增悲絕。不忍違於太子勅令。卽便長跪。受取寶冠明珠瓔珞及嚴飾具。垂淚而言。我聞太子如此志。願擧身|戰掉。設令有人心如木石。聞此語者。亦當悲感。況我生來奉侍太子。聞此誓言。而不感絕。唯願太子。捨於此志。勿令父王。及摩訶波闍波提。耶輸陀羅。幷餘親屬。生大悲苦。若使決定不廻此意。勿於是處。而復棄我。我今歸依太子足下。終不見有違離去理。設當還宮。王必責我。云何獨委太子而歸。欲令何言上答大王。太子答言。汝今不應作如此語。世皆離別。豈常集聚。我生七日。而母命終。母子尚有死生之別。而況餘人。汝勿於我偏生戀慕。可與|揵陟倶還宮也。如是再勅。猶不肯去。爾時太子。便以利劍。自剃鬚髮。卽發願言。今落鬚髮。願與一切。斷除煩惱及以習障。釋提桓因。接髮而去。虛空諸天。燒香散花。異口同音讚言。善哉善哉。爾時太子。剃鬚髮已。自見其身所著之衣。猶是七寶。卽心念言。過去諸佛出家之法。所著衣服。不當如此。時淨居天。於太子前。化作獵師。身被袈裟。太子既見。心大歡喜。而語之言。汝所著衣。是寂靜服。往昔諸佛之|所幖幟也。云何著此。而爲罪行。獵者答言。我著袈裟。以誘群鹿。鹿見袈裟。皆來近我。我得殺之。太子又言。若如汝說。著此袈裟。但爲欲殺諸鹿故耳。非求解脫而服之也。我今持此七寶之衣。與汝貿易。吾服此衣。爲欲攝救一切衆生。斷其煩惱。獵者答言。善哉如告。卽脫寶衣。而與獵者。自被袈裟。依過去諸佛所服之法。時淨居天。還復梵身。上升虛空。歸其所止。于時空中。有異光明。車匿見此。心生奇特。歎未曾有。今此瑞應。非爲小緣。車匿既見太子剃除鬚髮身著法服。定知太子必不可廻。悶絕於地。倍增|懊惱。爾時太子。而語之言。汝今宜應捨此悲愁。便還宮城。具宣我意。太子於是。卽徐前行。車匿歔欷。頭面作禮。乃至遠望不見太子。然後方起。擧體|戰掉。不能自勝。顧看|揵陟及莊嚴具。嗚咽悲哽。涕泗交流。卽牽|揵陟。執持寶冠嚴身之具。車匿號咷。|揵陟悲鳴。緣路而|歸。爾時太子。卽便前至跋伽仙人所住之處。時彼林中。有|諸鳥獸。既見太子。皆悉矚目。端住不瞬。跋伽仙人。遙見太子。而自念言。此是何神。爲日月天。爲帝釋耶。便與眷屬。來迎太子。深生敬重。而作是言。善來仁者。太子既見諸仙人衆。心意柔軟。威儀庠序。太子卽便前其住處。諸仙人等。無復威光。皆悉同來請太子坐。太子坐已。觀察彼諸仙人之行。或有以草而爲衣者。或以樹皮樹葉以|爲服者。或有唯食草木花果或有一日一食。或二日

太宋作大〇修三本俱作學
加明作迦
忽同作勿
精元明俱作情
絡繹三本俱作駱驛

一食。或三日一食。如是行於自餓之法。或事水火。或奉日月。或翹一脚。或臥塵土。或有臥於水火之側。太子既見如此苦行。卽便問於跋伽仙人。汝等今者修此苦行。甚爲奇特。皆欲求於何等果報。仙人答言。修此苦行。爲欲生天。太子又問。諸天雖樂。福盡則窮。輪廻六道。終爲苦聚。汝等云何修諸苦因。以求苦報。太子卽便心自歎言。商人爲寶故入大海。王爲國土。興師相伐。今諸仙人。爲生天故。修此苦行。作是歎已。默然而住。跋伽仙人。卽問太子。仁者何意。默然不言。我等所行。非眞正耶。太子答言。汝等所行。非不至苦。然求果報。終不離苦。太子與諸仙人。設此議論言語往復。乃至日暮。太子卽便停彼一宿。既至明旦。復更思惟。此諸仙人。雖修苦行。皆非解脫眞正之道。我今不應止住於此。卽與仙人。辭別欲去。時諸仙人。白太子言。仁者來此。我皆歡喜。今我人衆威德增盛。今者何故而忽欲去。爲是我等。失於威儀。爲此衆中相犯觸耶。以何因緣。不住於此。太子答言。非是汝等有如是失。賓主之儀。亦無所少。但汝所修。增長苦因。我今學道。爲斷苦本。以此因緣。是故去耳。諸仙人衆。自共議言。其所修道。極爲廣大。云何我等而得留之。爾時有一仙人。善知相法。語衆人言。今此仁者。諸相具足。必當得於一切種智。爲天人師。卽便俱往詣太子所。而作是言。所修道異。不敢相留。若欲去者。可向北行。彼有大仙名阿羅邏加蘭。仁者可往就其語論。我觀仁者。亦當不必住於彼處。於是太子。卽便北行。諸仙人衆。見太子去。心懷懊惱。合掌隨送。極望絕視。然後乃還。爾時太子。既出宮已。至於天曉。耶輸陀羅。及諸婇女。從眠而覺。不見太子。悲號啼泣。卽便往啓摩訶波闍波提。今旦忽失太子所在。摩訶波闍波提。聞是語已。迷悶躄地。如是展轉。乃至達王。王聞此言。屹然無聲。失其精魄。若喪四體。擧宮內外。皆亦如是。時諸大臣。卽入檢視太子住處。案行宮城。見城北門。自然已開。又復不見車匿揵陟。卽問門司。誰開此者。互相推撿。皆云不知。幷問防人。亦云不解此門開意。于時大臣。心已思惟。北門既開。太子必當從此而出。宜速尋覓太子所在。卽勅千乘萬騎。絡繹四出。追求太子。以天力故。迷失道逕。不知所之。卽便還歸。白大王言。推尋太子。不知所在。爾時車匿。步牽揵陟。及莊嚴具。悲泣鳴咽。隨路而還。擧邑人民。見此驚愕。無不懊惱。悉皆競來問車匿言。汝送太子。置於何處。今與揵陟。而獨還耶。車匿既得諸人此問。倍更悲絕。不能答之。此諸人民。雖見揵陟被帶鞍勒七寶莊嚴。不見太子。猶若死人飾以花綵。於是車匿前

入宮城。揵陟悲嘶。諸廐群馬。一時哀鳴。外諸宮屬。白摩訶波闍波提及耶輸陀羅言。車匿唯與揵陟俱還。聞此言已。宛轉于地。而自念曰。今者唯聞車匿揵陟相隨俱還。而不聞道太子歸聲。摩訶波闍波提。卽作是言。我養太子。至年長大。一旦捨我。不知所在。譬如果樹。結花成實。臨熟落地。又如飢人。遇百味饌。臨欲食之。忽然翻倒。耶輸陀羅。又自言曰。我與太子。行住坐臥。不相遠離。今者捨我。莫知所趣。古昔諸王。入山學道。皆將妻子。不蹔相棄。世間之人。一遇相識。別不相忘。夫婦之情。恩愛之深。而乃反更如是之薄。詰車匿言。寧與智者而作怨讐。不共愚人以爲親厚。汝癡頑人。盜送太子。置於何處。令此釋族不復熾盛。又責揵陟。汝載太子。出此王宮。近去之時。寂然無聲。今者空反。何意悲嘶。爾時車匿。卽便答言。勿責於我及以揵陟。所以者何。此是天力。非人所爲。當於爾夕。夫人婇女。皆悉惽臥。太子勅我。令起被馬。我於爾時。以大高聲。而諫太子。欲使夫人及諸婇女聞此驚悟。及被揵陟。都無覺者。城門每開。聞四十里。當爾之時。自然而開。又無一聲。如此之事。豈非天力。出城之時。天令諸神。手捧馬足。并接於我。虛空諸天。隨從無數。我當云何而能止耶。時天既曉。行三踰闍那。至彼跋伽仙人住處。又復有諸奇特異事。願聽我說。太子既至跋伽仙人苦行林中。卽便下馬。手撫馬背。并勅於我。令還宮城。我於此時。隨從太子。永無歸意。太子見遣。終不聽住。又復就我。取七寶劒。而自唱言。過去諸佛。爲成就阿耨多羅三藐三菩提故。捨於飾好。剃除鬚髮。我今亦當依諸佛法。唱此言已。卽脫寶冠及以明珠。悉付我還。置王足下。又以瓔珞。與摩訶波闍波提。餘莊嚴具。以與耶輸陀羅。我於爾時。雖聞此誨。猶侍左右。無有歸情。于時太子。便以利劒。自剃鬚髮。天於空中。隨接而去。卽便前行。逢於獵者。以身所著七寶妙衣。而與獵人。貿易袈裟。於是虛空。有大光明。我見太子形服既變。深知其意。必不可迴。我卽悶絕。心大懊惱。太子前至跋伽仙人所住之處。我便於彼。辭別而歸。此諸奇特。皆是天力。非復人事。願勿責我及揵陟也。時摩訶波闍波提。及耶輸陀羅。既聞車匿說此事已。心小醒悟。默然無聲。爾時白淨王。悶絕始醒。勅喚車匿。而語之言。汝云何令諸釋種姓生大苦惱。我有嚴制。勅內外官屬。守護太子。畏其出家。汝復何意。輙被揵陟。而與太子。令密去耶。車匿聞已。生大怖懼。而啓王言。太子出城。實非我咎。唯願大王。聽我具說。卽以寶冠及髻中明珠。置王足下。太子令我以此冠珠置王足下。七寶瓔珞與摩訶波闍波提。餘莊嚴具與

飢明作饑

遇三本俱作過

反明作返

有下三本俱無諸字

惱元明俱作懊

娠宋作身下同

年下三本俱無至字

逐元明俱作遲

耶輸陀羅。王見諸物。倍增悲絕。雖復木石。猶尙有感。況乃父子恩愛之深。車匿具以前事。而啓王言。太子勅我。父王若謂本要有子。當聽出家。今未有子。云何而去。臨去之時。又不啓者。汝可爲我具答父王。耶輸陀羅。久已有娠。王宜問之。昔勅如此。非爲專輒。王聞此言。卽便遣問耶輸陀羅。太子云汝久已有娠。實如此不。耶輸陀羅卽答信言。當於大王來此宮時。太子指我。卽覺有娠。王聞其語。生奇特心。憂惱蹔歇。而自念言。我前所以許今有子聽出家者。七日之中。必無子理。轉輪王位。自然而至。不謂七日未滿。而便有娠。深自咎悼。智慧淺短。所爲方便。不能住之。輕作此約。重增悔恨。太子神畧。勅人意表。今日之事。亦復兼是諸大天力。我今不應責車匿也。時白淨王。心自思惟。太子出家。必不可迴。設使更作諸餘方便。亦不能留。雖復棄國出家學道。然已有子。不絕種嗣。我今應勅耶輸陀羅。好令將護所懷之子。時白淨王。愛念情深。語車匿言。我今當往尋求太子。不知卽時。定在何許。其今既已捨我學道。我復何忍獨生獨活。便當追逐隨其所在。爾時王師。及與大臣。聞王欲出尋求太子。二人俱共來諫王言。大王不應自生憂惱。所以者何。我觀太子。見其相貌。過去世中。久已修習出家之業。設復令爲釋提桓因。亦當不樂。況復今者轉輪王位。而能留耶。大王不憶太子初生而行七步擧手住言。我生已盡。是最後身。諸梵天王。釋提桓因。悉來下從。如此奇特。云何樂世。又復白王。阿私陀仙。昔相太子。年至十九。出家學道。必當成就一切種智。今時既到。大王何故而生愁苦。又復大王。嚴勅內外。守護太子。慮恐出家。而諸天來導引出城。如是之事。非復人力。唯願大王。當生歡喜。勿懷愁惱。不須自出。若憶太子猶不已者。我今當與大臣尋求所在。王聞此語。心自念言。我知太子。雖不可迴。未忍便捨。不復追之。今當試令師及大臣更一尋也。卽便答師及大臣言。善哉可去。擧宮內外。心皆苦惱。佇逐速還。於是王師大臣。卽便辭出。追尋太子

過去現在因果經卷第二

過去現在因果經卷第三

宋天竺三藏求那跋陀羅譯　〔麗言〕〔宋辭〕〔元辭〕〔明尺〕

爾時白淨王。發遣王師及大臣已。即以太子瓔珞。與摩訶波闍波提。而語之言。此是太子所服瓔珞。付車匿還。令以與汝。摩訶波闍波提。見瓔珞已。倍增悲絕。而自念言。四天下人。極為薄福。失此明智轉輪聖王。又送餘莊嚴具。以與耶輸陀羅。而語之曰。太子以此嚴身之具。令持與汝。耶輸陀羅。既見此物。悶絕躄地。王又遣人。勅耶輸陀羅。令自愛敬。無使胎子不安隱也。爾時王師。及以大臣。至跋伽仙人苦行林中。除去從人及諸儀飾。便前仙人所住之處。仙人請坐。互相問訊。於是王師。語仙人言。我是白淨王師。今所以來至於此者。彼白淨王。是相太子。厭惡生老病死之苦。出家學道。路由此林。大仙見不。跋伽仙人。答王師言。我近於此見一童子。顏容端正。相好具足。來入此林。共我議論。遂經一宿。不知乃是王之太子。鄙薄我等所修之道。從此北行。詣彼仙人阿羅邏迦蘭。爾時王師大臣。聞此言已。即便疾往彼仙人所。而於中路。遙見太子。在於樹下。端坐思惟。相好光明。踰於日月。即便下馬。除卻侍衛。脫諸儀服。前太子所。坐於一面。互相問訊。於是王師。白太子言。大王見使尋求太子。欲有所說。太子答曰。父王遣汝。欲何所道。王師即言。大王久知太子深樂出家此意難迴。然王於太子。恩愛情深。憂愁盛火。常自燒然。須太子歸。以滅之耳。願便迴駕。還反宮城。雖有物務。不令太子全棄道業。靜心之處。不必山林。摩訶波闍波提。耶輸陀羅。內外眷屬。皆悉沒於憂惱大海。思太子還。而拯救之。爾時太子。聞王師語。以深重聲答王師言。我豈不知父王於我恩情深耶。但畏生老病死之苦。是以來此。為斷除故。若令恩愛終日合會。又無生老病死苦者。我復何為來至於此。我今所以違遠父王。欲為將來和合故耳。父王憂愁大火。今雖燒然。我與父王。唯餘今生有此一苦。將來自當永絕斯患。若如汝言。令吾處宮修道業者。如七寶舍滿中焰火。當有人能止此室。不如雜毒食。設有飢人。終不食之。我既棄國。出家學道。云何令我復還宮城修學道耶。世間之人。在大苦中。為小樂故。尚復躭湎不能

曰三本俱作言
汝下同有來字
〇反同作返下同
大明作太
餘三本俱作除
飢明作饑
耶三本俱作也下同

蹔捨。況我在此極靜寂處。無諸患苦。而能捐棄。還就於惡。古昔諸王。入山學道。無有中路還受欲者。父王若欲必令我歸。便是違於先王之法。爾時王師白太子言。誠如太子今之所說。然諸仙聖。一言未來定有果報。一言定無此。二仙聖尚不能知未來世中必定有無。太子云何欲捨現樂而求未來不定果報。生死果報。尚不可知決定有無。云何乃欲求解脫果。唯願太子。便還宮也。太子答言。彼二仙人。說未來果。一者言有。一者言無。皆是疑心。非決定說。我今終不修順彼教。不應以此而見難詰。所以者何。我今不爲希慕果報而來至此。以目所見生老病死。必應經之故。求解脫免此苦耳。令汝不久見我道成。我此志願。終不可廻。還啓父王。說如此也。爾時大子。作此語已。卽從座起。與王師大臣。辭別北行。詣阿羅邏迦蘭仙人所。于時王師大臣見太子去。啼泣懊惱。一者念太子情深。二者奉受王使。來太子所。而復不能移轉其意。徘徊路側。不能自反。互共議言。既被王使。而無力効。今者空歸。云何奉答。我等當留。所從五人。聰明智慧。心意柔軟。爲性忠直。種族强者。密令伺察。看其進止。作此言已。顧瞻其傍。見憍陳如等五人。而語之言。汝等悉能留止此不。五人答言。善哉如勅。進止去來。當密伺察。卽便辭別。趣太子所。王師大臣。還歸宮城。爾時太子。往彼阿羅邏迦蘭仙人住處。渡於恒河。路由王舍城。既入城已。諸人民衆。見太子顏貌相好殊特。歡喜愛敬。擧國皆悉奔馳瞻覩。如是諠譁。徹頻毘娑羅王。王便驚問。此是何聲。諸臣答言。白淨王太子。名薩婆悉達。昔諸相師。記其應得轉輪王位。王四天下。又復記其若出家記。必當成就一切種智。其人今者來入此城。外諸人民。馳競來看。以是之故。所以諠鬧。時頻毘娑羅王。既聞此語。心大歡喜。踴躍遍身。卽勅一人。令往伺察大子所在。使者受勅。尋求太子。見在般茶婆山。於一石上。端坐思惟。時使卽歸。具白大王。王便嚴駕。與諸臣民。詣太子所。至般茶婆山。遙見太子。相好光明。踰於日月。卽便下馬。除却儀飾及諸侍衞。前坐問訊太子。四大悉調和不。我見太子。心甚歡喜。然有一悲。太子本是日之種姓。累世相承。爲轉輪王。太子今者。轉輪王相。皆悉具足。云何捨之。來入深山。踐藉沙土。遠至此耶。我見是故。所以悲耳。太子若以父王今在故。欲不取聖王位者。當以我國分半治之。若謂爲少。我當捨國盡以相奉臣事太子。若復不取我此國者。當給四兵。可自攻伐取他國也。太子所欲。其不相違。其時太子。聞頻毘娑羅王說此語已。深感其意。卽答王言。王之種族。本是明月。性自高涼。不爲

靜寂同作寂靜　○患苦同作苦患
知明作如
修三本俱作隨
大同作太下同　○語同作言
人下同無所字
而下宋無復字
瞻三本俱作看
密宋作蜜
渡三本俱作度下同　○入宋作大
看同作有
茶三本俱作荼次同
其元明俱作甚　○涼同作良

國下三本俱無也字耶宋作也下同

至此間三本俱作來至此

鄙事。所爲所作。無不淸勝。今發是言。未足爲奇。然我觀王。中情懇至。倍於前後。王今便可於身命財修三堅法。亦不應以不堅之法勸奬餘人。我今既捨轉輪王位。亦復何緣應取王國。王以善心捨國與我。猶尚不取。何緣以兵伐取他國也。我今所以辭別父母剃除鬚髮捨於國者。爲斷生老病死苦故。非爲求於五欲樂也。世間五欲。如大火聚。燒諸衆生。不能自出。云何勸我貪著之耶。我今所以來至此者。有二仙人阿羅邏迦蘭。是求解脫。最上導師。欲往彼處求解脫道。不宜久停在於此也。我既違王初始之言。喜心賜我。勿致嫌恨。王今當以正法治國。勿枉人民。作此言已。太子卽起而與王別。時頻毗娑羅王。見太子去。深大惆悵。合掌流淚。而作是言。初見太子。心大踊躍。太子既去。倍生悲苦。汝今爲於大解脫故。而欲去者。不敢相留。唯願太子。所期速果。若道成者。願先見度。太子於是辭別而去。時王奉送。次於路側。極目瞻矚。不見乃反。爾時太子。卽便前至彼阿羅邏仙人之所。于時諸天。語仙人言。薩婆悉達。棄捨國土。辭別父母。爲求無上正眞之道。欲拔一切衆生苦故今者已來。垂至於此。時彼仙人。既聞天語。心大歡喜。俄爾之頃。遙見太子。卽出奉迎。讚言善來。俱還所住。請太子坐。是時仙人。既見太子。顏貌端正。相好具足。諸根恬靜。深生愛敬。卽問太子。所行道路。得無疲耶。太子初生。及以出家。又來至此。我悉知之。能於火聚。自覺而出。又如大象。於羂索中。而自免脫。古昔諸王。盛年之時。恣受五欲。至於根熟。然後方捨國邑樂具。出家學道。此未足奇。太子今者於此壯年。能棄五欲。遠至此間。眞爲殊特。當勤精進。速度彼岸。太子聞已。卽答之曰。我聞汝言。極爲歡喜。汝可爲我說斷生老病死之法。我今樂聞。仙人答言。善哉善哉。卽便說曰。衆生之始。始於冥初。從於冥初。起於我慢。從於我慢。生於癡心。從於癡心。生於染愛。從於染愛。生五微塵氣。從五微塵氣。生於五大。從於五大。生貪欲瞋恚等諸煩惱。於是流轉生老病死憂悲苦惱。今爲太子。略言之耳。爾時太子。卽便問曰。我今已知汝之所說。生死根本。復何方便。而能斷之。仙人答言。若欲斷此生死本者。先當出家修持戒行。謙卑忍辱。住空閑處。修習禪定。離欲惡不善法。有覺有觀。得初禪。除覺觀定生。入喜心。得第二禪。捨喜心。得正念。具樂根。得第三禪。除苦樂。得淨念。入捨根。得第四禪。獲無想報。別有一師。說如此處。名爲解脫。從定覺已。然後方知非解脫處。離色想。入空處。滅有對想。入識處。滅無量識想。唯觀一識。入無所有處。離於種種想。入非想非非想處。斯處名爲究

老上同無生字
微三本俱作深
坐同作座下同
如汝所修同作汝所修法
纔同作裁

竟解脫。是諸學者之彼岸也。太子若欲斷於生老病死患者。應當修學如此之行。爾時太子。聞仙人言。心不喜樂。卽自思惟。其所知見。非究竟處。非是永斷諸結煩惱。卽便語言。我今於汝所說法中。有所未解。今欲相問。仙人答言。敬從來意。卽問之曰。非想非非想處。爲有我耶。爲無我耶。若言無我。不應言非想非非想。若言有我。我爲有知。我爲無知。我若無知。則同木石。我若有知。則有攀緣。既有攀緣。則有染著。以染著故。則非解脫。汝以盡於麤結。而不自知細結猶存。以是之故。謂爲究竟。細結滋長。復受下生。以此故知非度彼岸。若能除我及以我想。一切盡捨。是則名爲眞解脫也。仙人默然。心自思惟。太子所說。甚爲微妙。爾時太子。復問仙人。汝年至幾而出家耶。修梵行來。復幾許年。仙人答言。我年十六。而便出家。修梵行來。一百四年。太子聞已。而心念言。出家以來。乃如是久。而所得法。正如此乎。于時太子。爲求勝法。卽從坐起。與仙人別。爾時仙人。語太子言。我久遠來。習此苦行。而所得果。正如此耳。汝是王種。云何而能修苦行耶。太子答言。如汝所修非爲苦也。別有最苦難行之道。仙人既見太子智慧。又觀志意堅固不斷。知決定成一切種智。白太子言。汝若道成。願先度我。於是太子。答言善哉。次至迦蘭所住之處。論議問答。亦復如是。太子卽便前路而去。時二仙人。見太子去。各心念言。太子智慧。深妙奇特。乃爾難測。合掌奉送。絕視方還。爾時太子。調伏阿羅邏迦蘭二仙人已。卽便前進伽闍山苦行林中。是憍陳如等五人所止住處。卽於尼連禪河側。靜坐思惟。觀衆生根。宜應六年苦行。而以度之。思惟是已。便修苦行。於是諸天。奉獻麻米。太子爲求正眞道故。淨心守戒。日食一麻一米。設有乞者。亦以施之。爾時憍陳如等五人。既見太子。端坐思惟。修於苦行。或日食一麻。或日食一米。或復二日。乃至七日。食一麻米。時憍陳如等。亦修苦行。供奉太子。不離其側。既見此已。卽遣一人。還白王師及以大臣。具說太子所行之事。爾時王師大臣。俱還宮門。顏貌愁悴。身形萎熟。猶如有人喪其所親。蹉送既畢。抑忍而歸。時守門者。而白王言。師與大臣。今在門外。王既聞已。氣奔聲絕。身首纔動。時守門人。解王此意。卽呼令前。王與相見。悲不能言。如是良久。微聲而問。太子既是我之性命。卿等今者獨作此歸。我之性命。云何而存。王師答言。我奉王勅。尋求太子。便至跋伽仙人住處。訪覓太子。仙人語我太子所在。幷說太子所言之事。我便前行。而於中路。遇見太子。在於樹下。端坐思惟。相好光明。踰於日月。卽向太子。具說大王摩訶波闍

辭同作詞

戰元明俱作顫

按三本俱作案

花下同無花字
○卽明作自
贍得喜宋作捨

波提及耶輸陀羅憂苦之情。太子卽以深重之聲。而見答言。我豈不知父王親戚恩情深耶。但畏生死愛別離苦。爲欲斷除故來此耳。如是種種言辭所說。志意堅固。如須彌山不可移動。捨我而去。如棄草芥。爾時卽便選擇五人隨從給侍伺察所在。所遣人中。有一人還說言。太子當至阿羅邏迦蘭仙人之所。路由恒河。以天神力而得渡水至王舍城。時頻毗娑羅王。來詣太子。方便譬說。不應出家。分國共治。及以金輿。幷欲興兵令伐他國。太子亦復皆悉不受。卽又前行達仙人所。而爲說法。降伏其心。又至伽闍山苦行林中尼連禪河側靜坐思惟。日食一麻一米。爾時白淨王。聞王師大臣說彼使人如此語已。心大悲惱。擧體戰掉。身毛皆竪。卽語王師及大臣言。太子遂捨轉輪王位父母親屬恩愛之樂。遠在深山。修此苦行。我今薄福。生失如此珍寶之子。王卽復以使人所言。向摩訶波闍波提及耶輸陀羅。而爲說之。時白淨王。卽便嚴駕五百乘車。摩訶波闍波提。及耶輸陀羅。亦復相與辦五百乘一切資生。皆悉具足。卽喚車匿。而語之言。汝送太子。遠放深山。今復令汝領此千乘。載致資糧。送與太子。隨時供養。勿使乏少。盡更來請。車匿受勅。卽領千乘。疾速而去。至太子所。見形消瘦。皮骨相連。血脈悉現。如波羅奢花。頭面禮足。悶絶於地。良久乃起。銜淚而言。大王憶念太子。不捨日夜。今故遣我。領此千乘。載資生具。以餉太子。于時太子。答車匿言。我違父母。及捨國土。遠來在此。爲求至道。云何當復受此餉耶。爾時車匿。聞此語已。心自思惟。太子今者既不肯受如此資供。我當別覓一人。領此千乘。還歸王所。我住於此。奉事太子。卽差一人。領車而去。於是車匿。密侍太子。不離晨昏。爾時太子。心自念言。我今日食一麻一米。乃至七日食一麻米。身形消瘦。有若枯木。修於苦行。垂滿六年。不得解脫。故知非道。不如昔在閻浮樹下。所思惟法。離欲寂靜。是最眞正。今我若復以此羸身。而取道者。彼諸外道。當言自餓是般涅槃因。我今雖復節節有那羅延力。亦不以此而取道果。我當受食然後成道。作是念已。卽從坐起。至尼連禪河。入水洗浴。洗浴既畢。身體羸瘠。不能自出。天神來下。爲按樹枝。得攀出池。時彼林外。有一牧牛女人。名難陀波羅。時淨居天。來下勸言。太子今者在於林中。汝可供養。女人聞已。心大歡喜。于時地中。自然而生千葉蓮花。花上有乳糜。女人見此。生奇特心。卽取乳糜。至太子所。頭面禮足。而以奉上。太子卽便受彼女施。而呪願之。今所施食。欲令食者。得充氣力。當使施家得贍得喜。安樂無病。終保年壽。智慧具足。太

得喜元明俱作色得力得捨得喜七字
嚮三本俱作響次同
踊同作涌
震同作動
菩薩同作等諸
加三本俱作跏下同
座明作坐
憔三本俱作慘
坐同作在
須同作煩下同
有同作王
未宋作大

子卽復作如是言。我爲成熟一切衆生故。受此食。呪願訖已。卽受食之。身體光悅。氣力充足。堪受菩提。爾時五人。旣見此事。驚而怪之。謂爲退轉。各還所住。菩薩獨行。趣畢波羅樹。自發願言。坐彼樹下。我道不成。要終不起。菩薩德重。地不能勝。于時步步地爲震動。出大音聲。爾時盲龍。聞地動嚮。心大歡喜。兩目開明。曾見先佛有此瑞應。作是念已。從地踊出。禮菩薩足。時有五百青雀。飛騰虛空。右繞菩薩。雜色瑞雲。及以香風。而隨映拂。爾時盲龍。以偈讚曰

菩薩足踐處　地皆六種震　發大深遠音　我聞眼開明　又見虛空中　青雀繞菩薩　瑞雲極鮮映
香風甚淸涼　此菩薩瑞相　悉同過去佛　以是知菩薩　必定成正覺

於是菩薩。則自思惟。過去諸佛。以何爲座。成無上道。卽便自知以草爲座。釋提桓因。化爲凡人。執淨軟草。菩薩問言。汝名何等。答名吉祥。菩薩聞之。心大歡喜。我破不吉。以成吉祥。菩薩又言。汝手中草。此可得不。於是吉祥。卽便授草。以與菩薩。因發願言。菩薩道成。願先度我。菩薩受已。敷以爲座。而於草上。結加趺坐。如過去佛所坐之法。而自誓言。不成正覺。不起此座。我亦如是發此誓時。天龍鬼神。皆悉歡喜。淸涼好風。從四方來。禽獸息嚮。樹不鳴條。遊雲飛塵。皆悉澄淨。知是菩薩。必成道相。爾時菩薩。在於樹下。發誓言時。天龍八部。皆悉歡喜。於虛空中。踊躍讚歎。時第六天。魔王宮殿。自然動搖。於是魔王。心大懊惱。精神躁擾。聲味不御。而自念言。沙門瞿曇。今在樹下。捨於五欲。端坐思惟。不久當成正覺之道。其道若成。廣度一切。超越我境。及道未成。往壞亂之。爾時魔子薩陀。見父憔悴。而往白言。不審父王。何故憂慼。魔王答言。沙門瞿曇。今坐樹下。其道將成超越於我。今欲壞之。魔子卽便前諫父言。菩薩淸淨。超出三界。神通智慧。無不明了。天龍八部。咸共稱讚。此非父王所能摧屈。不須造惡自招禍咎。魔有三女。形容儀貌。極爲端正。妖冶巧媚。善能惑人。於天女中。最爲第一。熏以名香。佩好瓔珞。一名染欲。二名能悅人。三名可愛樂。三女俱前白其父言。不審今者何故憂愁。父卽寫心。語諸女言。世間今有沙門瞿曇。身被法鎧。執自在弓。鏃智慧箭。欲伏衆生壞我境界。我若不如。衆生信彼。皆悉歸依。我土則空。是故愁耳。及未成道。欲往摧挫壞其橋梁。於是魔王。手執强弓。又持五箭。男女眷屬。俱時往彼畢波羅樹下。見於牟尼。寂然不動。欲度生死三有

勝先宋元俱作先勝明作先聖〇此三本俱作是〇下向同作向下

天人同作人天

侍宋作待〇淫三本俱作婬

杜同作拄

摩上三本俱無此字〇辦同作辯〇愛同作憂

踊明作涌

脅三本俱作愶

爪利牙同作牙利爪〇身明作耳〇努三本俱作怒〇擲同作躑〇嚇宋作喊

之海。爾時魔王。左手執弓。右手調箭。語菩薩言。汝剎利種。死甚可畏。何不速起。宜應修汝轉輪王業。捨出家法習於施會。得生天樂。此道第一。勝先所行。汝是剎利轉輪王種。而爲乞士。此非所應。今若不起。但好安坐。勿捨本誓。我試射汝。一放利箭。苦行仙人。聞我箭聲。莫不驚怖。惛迷失性。況汝瞿曇。能堪此毒。汝若速起。可得安全。魔說此語。以怖菩薩。菩薩怡然。不驚不動。魔王卽便挽弓放箭。幷進天女。菩薩爾時。眼不視箭。箭停空中。其鏃下向。變成蓮花。時三天女。白菩薩言。仁者至德。天人所敬。應有供侍。我等今者年在盛時。天女端正。無踰我者。天今遣我。以相供給。晨昏寢臥。願侍左右。菩薩答言。汝植小善。得爲天身。不念無常。而作妖媚。形體雖美。而心不端。淫惑不善。死必當墮三惡道中。受鳥獸身。免之甚難。汝等今者欲亂定意。非淸淨心。今便可去。吾不相須。時三天女。變成老姥。頭白面皺。齒落垂涎。肉消骨立。腹大如鼓。杜杖羸步。不能自復。魔王旣見如是堅固。心自思惟。我昔曾於雪山之中。射此摩醯首羅。卽便恐懼。退其善心。而今不辦動於瞿曇。旣非此箭。及我三女。所能移轉。令生愛恚。當復更作他餘方便。卽以軟語。誘菩薩言。汝若不樂人間受樂。今者便可上昇天宮。我捨天位及五欲具。悉持與汝。菩薩答言。汝於先世。修少施因。今故得爲自在天王。此福有期。要還下生。沈溺三塗。出濟甚難。此爲罪因。非我所須。魔語菩薩。我之果報。是汝所知。汝之果報。誰復知者。菩薩答言。我之果報。唯此地知。說此語已。于時大地。六種震動。於是地神。持七寶缾。滿中蓮花。從地踊出。而語魔言。菩薩昔以頭目髓腦。以施於人。所出之血。浸潤大地。國城妻子象馬珍寶。而用布施。不可稱計。爲求無上正眞之道。以是之故。汝今不應惱亂菩薩。魔聞是已。心生怖懼。身毛皆竪。時彼地神。禮菩薩足。以花供養。忽然不現。爾時魔王。卽自思惟。我以强弓利箭幷及三女。兼以方便和言誘之。不能壞亂此瞿曇心。今當更設諸種方便。廣集軍衆。以力迫脅。作是念時。其諸軍衆。忽然來至。充滿虛空。形貌各異。或執戟操劒。頭戴大樹。手執金杵。種種戰具。皆悉備足。或猪魚驢馬師子龍頭熊羆虎兕。及諸獸頭。或一身多頭。或面各一目。或衆多目。或大腹長身。或羸瘦無腹。或長脚大膝。或大脚肥腨。或長爪利牙。或頭在胷前。或兩足多身。或大面傍面。或色如灰土。或身放烟焰。或象身擔山。或被髮裸形。或復面色半赤半白。或脣垂至地。或上褰覆面。或身著虎皮。或師子蛇皮。或蛇遍纏身。或頭上火燃。或瞋目努臂。或傍行跳擲。或空中旋轉。或馳步吼嚇。

音三本俱作風　側明作塴　益下三本俱無愁字　電雷同作雷電　暗三本俱作闇下同　之同作住　牙明作芽　日宋作月○燦宋元俱作粲○暝同作瞑

有如是等諸惡類形不可稱數。圍繞菩薩。或復有欲裂菩薩身。或四方烟起。焱焰衝天。或狂音奮發。震動山谷。風火烟塵。暗無所見。四大海水。一時涌沸。護法天人。諸龍鬼等。悉忿魔衆。瞋恚增盛。毛孔血流。淨居天衆。見此惡魔惱亂菩薩。以慈悲心。而愍傷之。於是來下。側塞虛空。見魔軍衆。無量無邊。圍繞菩薩。發大惡聲。震動天地。菩薩心定。顏無異相。猶如師子處於鹿群。皆悉歎言。嗚呼奇哉。未曾有也。菩薩決定當成正覺。是諸魔衆。互相摧切。各盡威力。摧破菩薩。或角目切齒。或横飛亂擲。菩薩觀之。如童子戲。魔益愁忿。更增戰力。菩薩以慈悲力故。令抱石者。不能勝擧。其勝擧者。不能得下。飛刀舞劍。停於空中。電雷雨火。成五色華。惡龍吐毒。變成香風。諸惡類形。欲毀菩薩。不能得動。魔有姊妹。一名彌伽。二名迦利。各各以手執髑髏器。在菩薩前。作諸異狀。惱亂菩薩。是諸魔衆。種種醜身。欲怖菩薩。終不能動。菩薩一毛。魔益憂愁。空中有神。名曰負多。隱身而言。或於今者見牟尼尊心意泰然。無怨恨想。是諸魔衆。起於毒心。於無怨處。而横生怨。是癡惡魔。徒自疲勞。永無所得。今日宜應捨恚害心。汝日乃可吹須彌山。令其崩倒。火可令冷。水可令熱。地性堅強。可令柔軟。汝不能壞菩薩歷劫修習善果。正思惟定。精勤方便。淨智慧光。此四功德。無能斷截。爲作留難。不成正覺。如千日照必能除暗。鑽木得火。穿地得水。精勤方便。無求不得。世間衆生。沒於三毒。無有救者。菩薩慈悲。求智慧藥。爲世除患。汝今云何而惱亂之。世間衆生。癡惑無智。悉著邪見。今設法眼。修習正路。欲導衆生。汝今云何惱亂導師。是則不可。譬如在於曠野之中。而欲欺誑商人導師。衆生墮大黑暗之中。茫然不知所止之處。菩薩爲然大智慧燈。汝今云何欲吹令滅。衆生今者沒生死海。菩薩爲修智慧寶船。汝今云何欲令沈溺。忍辱爲牙。堅固爲根。無上大法。以爲大果。汝今云何而欲攻伐。貪恚癡鏁。縛諸衆生。菩薩苦行。欲爲解之。今日決定於此樹下。結加趺坐。成無上道。此地乃是過去諸佛金剛之座。餘方悉轉。斯處不動。堪受妙定。非汝所摧。汝今宜應生欣慶心。息憍慢意。修知識想。而奉事之。是時魔王。聞空中聲。又見菩薩恬然不異。魔心慙愧。捨離憍慢。即便復道。還歸天宮。群魔憂慼。悉皆崩散。情意沮悴。無復威武。諸鬪戰具。縱横林野。當於惡魔退散之時。菩薩心淨。湛然不動。天無烟霧。風不搖條。落日停光。倍更明盛。澄月映徹。衆星燦朗。幽隱暗暝。無復障礙。虛空諸天。雨妙花香。作衆伎樂。供養菩薩。爾時菩薩。以慈悲力。於二月七日夜。降伏魔已。放大

苦三本俱作歡
孝元作栲明作拷〇洋三本俱作鎔〇沸宋作拷
飢明作饑下同〇上者變成三本俱作身上變爲〇過同作遇〇支元明俱作肢〇布施三本俱作施人
藏明作臟
其宋作具

光明。卽便入定思惟眞諦。於諸法中。禪定自在。悉知過去所造善惡。從此生彼。父母眷屬。貧富貴賤。壽天長短。及名姓字。皆悉明了。卽於衆生。起大悲心。而自念言。一切衆生。無救濟者。輪廻五道。不知出津。皆悉虛僞。無有眞實。而於其中。横生苦樂。作是思惟。至初夜盡爾時菩薩。既至中夜。卽得天眼。觀察世間。皆悉徹見。如明鏡中。自覩面像。見諸衆生。種類無量。死此生彼。隨行善惡。受苦樂報。見地獄中孝治衆生。或洋銅灌口。或抱銅柱。或臥鐵牀。或以鐵鑊。而煎煑之。或於火上。而加沸炙。或爲虎狼鷹犬所食。或有避火依於樹下。樹葉墜落。皆成刀劍。割截其身。或以斧鋸解剔肢體。或擲熱沸灰河之中。或復擲於糞屎坑中。受如是等種種諸苦。以業報故。命終不死。菩薩既見如此事已。而心思惟。此等衆生。本造惡業。爲世樂故。而今得果。極爲大苦。若人有見如此惡報。無復更應作不善想。爾時菩薩。復觀畜生。隨種種行。受雜醜形。或復有爲骨肉筋角皮牙毛羽。而受殺者。或復爲人負荷重擔。飢渴乏極。人無知者。或穿其鼻。或鉤其首。常以身肉。而供於人。還與其類。更相食噉。受於如是種種之苦。菩薩既見。生大悲心。卽自思惟。斯等衆生。恒以身力。而供於人。又加楚撻。饑渴之苦。皆是本修惡行果報。爾時菩薩。次觀餓鬼。見其恒居黑闇之中。未曾暫覩日月之光。還是其類。亦不相見。受形長大。腹如太山。咽頸若針。口中恒有大火熾燃。常爲飢渴之所燋迫。千億萬歲。不聞食聲。設値天雨灑其上者變成火珠。或時過臨江海河池。水卽化爲熱銅燋炭。動身擧步。聲如人牽五百乘車。支體節節。皆悉火然。菩薩既見受如是等種種諸苦。起大悲心。而自思惟。斯等皆爲本造慳貪積財不施故。令今者受斯罪報。若人見彼受此苦痛。宜應惠施勿生悋惜。設使無財。亦應割肉以用布施。爾時菩薩。次復觀人。見從中陰始欲入胎。父母和合。以顚倒想。起於愛心。卽以不淨。而爲己身。既處胎已。在於生熟二藏之間。熏炙身體。如地獄苦。至滿十月。然後方生。初生之時。而爲外人之所抱執。麤澀苦痛。如被刀劍。如是不久。復歸老死。更爲嬰兒。輪轉五道。不能自悟。菩薩見已。起大悲心。而自思惟。衆生皆有如斯之患。云何於中。躭著五欲。横計爲樂。而不能斷顚倒根本。爾時菩薩。次觀諸天。見彼天子。其身淸淨。不受塵垢。如眞琉璃。有大光明。兩目不瞬。或有居在須彌山頂。或復居在須彌四鎭。或復居在虛空之中。心常歡悅。無不適事。奏天美樂。以自娯樂。不識晝夜。四方諸趣。無不絶妙。視東躭著。彌歲忘轉。瞻西躭湎。經年不迴。乃至南北。皆亦如是。飮

食衣服。應念卽至。雖有如此適意之事。猶爲欲火之所煎燋。又見彼天福盡之時。五死相現。一者頭上花萎。二者眼瞬。三者身上光滅。四者腋下汗出。五者自然離於本座。其諸眷屬。見天子身五死相現。心生戀慕。天子亦復自見己身。有五死相。又見眷屬戀慕於己。當爾之時。生大苦惱。菩薩既言彼諸天子有如是事。起大悲心。而自思惟。此諸天子。本修少善。得受天樂。果報將盡。生大苦惱。既命終已。捨彼天身。或有墮於三惡道中。本造善行。爲求樂報。而今所得。少樂多苦。譬如飢人噉雜毒食。初雖爲美。終成大患。云何智者。貪樂此耶。色無色界諸天。見壽命長。便謂常樂。既見變壞。生大苦惱。卽起邪見。謗無因果。以此事故。輪廻三塗。備受諸苦。菩薩以天眼力。觀察五道。起大悲心。而自思惟。三界之中。無有一樂。如是思惟。至中夜盡。爾時菩薩。至第三夜。觀衆生性。以何因緣。而有老死。卽知老死。以生爲本。若離於生。則無老死。又復此生。不從天生。不從自生。非無緣生。從因緣生。因於欲有色有無色有業生。又觀三有業從何而生。卽知三有業從四取生。又觀四取從何而生。卽知四取從愛而生。又復觀愛從何而生。卽便知愛從受而生。又復觀受從何而生。卽便知受從觸而生。又復觀觸從何而生。卽便知觸從六入生。又觀六入從何而生。卽知六入從名色生。又觀名色從何而生。卽知名色從識而生。又復觀識從何而生。卽便知識從行而生。又復觀行從何而生。卽便知行從無明生。若滅無明則行滅。行滅則識滅。識滅則名色滅。名色滅則六入滅。六入滅則觸滅。觸滅則受滅。受滅則愛滅。愛滅則取滅。取滅則有滅。有滅則生滅。生滅則老死憂悲苦惱滅。如是逆順。觀十二因緣。第三夜分。破於無明。明相出時。得智慧光。斷於習障。成一切種智。爾時如來。心自思惟。八正聖道。是三世諸佛之所履行。趣般涅槃路。我今已踐。智慧通達。無所罣礙。于時大地。十八相動。遊霞飛塵。皆悉澄淨。天鼓自然。而發妙聲。香風徐起。柔軟淸涼。雜色瑞雲。降甘露雨。園林花果。榮不待時。又雨曼陀羅花。摩訶曼陀羅花。曼殊沙花。摩訶曼殊沙花。金花銀花。琉璃等花。七寶蓮花。繞菩提樹。滿三十六踰闍那。是時諸天。作天伎樂。散花燒香。歌唄讚歎。執天寶蓋。及以幢幡。充塞虛空。供養如來。龍神八部。所設供養。亦復如是。當爾之時。一切衆生。皆悉慈愛。無瞋害想。歡喜踊躍。如見聖跡。無怖畏情。其心調柔。離憍慢意。亦無慳嫉諂誑之心。五淨居天。離喜樂根亦皆歡悅。不能自勝。地獄苦痛。蹔得休息。生大歡喜。一切畜生。相食噉者。無復惡心。餓鬼飽滿。無飢渴

座同作坐
是三本俱作此
見上同有不字○長下同有短字
霞宋作覆元明俱作雲
根三本俱作相

瞑同作闇

湖三本俱作胡
○往宋作住

王上三本俱無天字。

想。世界之中。幽瞑之處。日月威光。所不能照。而皆大明。其中衆生。悉得相見。各作是言。此中云何忽有衆生。大聖法王。出興於世。以大法光。破非法闇故。令一切皆悉明朗。甘蔗先王。棄國學道。得五通仙。又行十善。得生天者。皆乘神通。到菩提樹。在虛空中。歡喜合掌。而讃歎言。於我甘蔗種族之中。能斷諸漏。成一切智。爲世間眼。甚爲奇特。一切莫不歡喜踊躍。唯有魔王。心獨憂愁。爾時如來。於七日中。一心思惟。觀於樹王。而自念言。我在此處。盡一切漏。所作已竟。本願成滿。我所得法。甚深難解。唯佛與佛。乃能知之。一切衆生。於五濁世。爲貪欲瞋恚愚癡邪見憍慢諂曲之所覆障。薄福鈍根。無有智慧。云何能解我所得法。今我若爲轉法輪者。彼必迷惑。不能信受。而生誹謗。當墮惡道。受諸苦痛。我寧默然。入般涅槃。爾時如來。以偈頌曰

聖道甚難登　智慧果難得　我於此難中　皆悉已能辦　我所得智慧　微妙最第一　衆生諸根鈍
著樂癡所盲　順於生死流　不能反其源　如斯之等類　云何而可度

爾時如來。作此念已。大梵天王。見於如來聖果已成。默然而住。不轉法輪。心懷憂惱。卽自念言。世尊昔於無量億劫。爲衆生故。久在生死。捨國城妻子。頭目髓腦。備受衆苦。始於今者。所願滿足。成阿耨多羅三藐三菩提。云何默然。而不說法。衆生長夜。沈沒生死。我今當往請轉法輪。作是念已。卽發天宮。猶如壯士屈伸臂頃。至如來所。頭面禮足。繞百千匝。却住一面。胡跪合掌。而白佛言。世尊往昔。爲衆生故。久住生死。捨身頭目。以用布施。備受諸苦。廣修德本。始於今者。成無上道。云何默然。而不說法。衆生長夜。沒溺生死。墮無明闇。出期甚難。然有衆生。過去世時。親近善友。植諸德本。堪任聞法。受於聖道。唯願世尊。爲斯等故。以大悲力。轉妙法輪。釋提桓因。乃至他化自在天。亦復如是。勸請如來。爲諸衆生。轉大法輪。爾時世尊。答大梵天王及釋提桓因等言。我亦欲爲一切衆生轉於法輪。但所得法。微妙甚深。難解難知。諸衆生等。不能信受。生誹謗心。墮於地獄。我今爲此故。默然耳。時梵天王等。乃至三請。爾時如來。至滿七日。默然受之。梵天王等。知佛受請。頭面禮足。各還所住。爾時世尊。受梵王等請已。又於七日。而以佛眼。觀諸衆生。上中下根。及諸煩惱。亦下中上。滿二七日。爾時世尊。又復思惟。我今當開甘露法門。誰應在先。而得聞者。阿羅邏仙人。聰慧易悟。又先發願。道成度我。作是念時。空中有言。阿羅邏仙人。昨夜命終。爾時

便元明俱作復
婆三本俱作波下同○㮈同作柰下同○梨同作利
婆同作娑
按宋作案
贍三本俱作捨

世尊。即便答彼空中聲言。我亦知其昨夜命終。又自思惟。迦蘭仙人。利根明了。亦應先聞。空中又言。迦蘭仙人。昨夜命終。爾時世尊。即復答言。我亦知其昨夜命終。爾時世尊。又自思惟。彼王師大臣所遣。憍陳如等五人。瞻視我者。皆悉聰明。又過去世。於我發願應先聞法。我今宜當爲此五人先開法門。又自思惟。古昔諸佛轉法輪處。皆悉在於婆羅㮈國鹿野苑中仙人住處。又此五人。所止住處。亦在於彼。我今應往至其住處。轉大法輪。思惟是已。即從座起。詣婆羅㮈國。爾時有五百商人。二人爲主。一名跋陀羅斯那。二名跋陀羅梨。行過曠野。時有天神。而語之言。有如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。出興於世。最上福田。汝今宜應最前設供。時彼商人。聞天語已。即答之曰。善哉如告。又問天言。世尊今者爲在何許。天又報言。世尊不久當來至此。於是如來。與無量諸天。前後導從。到多謂婆跋利村。時彼商人。既見如來威相莊嚴。又見諸天前後圍繞。倍生歡喜。即以蜜麨。而奉上佛。爾時世尊。心自思惟。過去諸佛。用鉢多羅。而以盛食。時四天王。知佛心念。各持一鉢。來至佛所。而以奉上。於是世尊。而自念言。我今若受一王鉢者。餘王必當生於恨心。即便普受四王之鉢。累置掌上。按令成一。使四際現。爾時世尊。即便呪願。今所布施。欲令食者。得充氣力。當令施者。得色得力。得贍得喜。安快無病。終保年壽。諸善鬼神。恒隨守護。飯食布施。斷三毒根。將來當獲三堅法報。聰明智慧。篤信佛法。在在所生。正見不昧。現世之中。父母妻子。親戚眷屬。皆悉熾盛無諸災怪不吉祥事。門族之中。若有命過墮惡道者。當令以今所施之福。還生人天。不起邪見。增進功德。常得奉近諸佛如來。得聞妙說。見諦得證。所願具足。爾時世尊。呪願訖已。即便受食。食既畢竟。澡漱洗鉢。即授商人三歸。一歸依佛。二歸依法。三歸依將來僧。授三歸竟。因與之別。而便前行威儀庠序。步若鵝王。路逢外道。名優波伽。既見如來相好莊嚴。諸根寂定。歎爲奇特。即說偈言

世間諸衆生　皆爲三毒縛　諸根又輕躁　馳蕩於外境　而今見仁者　諸根極寂靜　心到解脫地
決定無有疑　仁者所學師　其姓字何等

爾時世尊以偈答曰

我今已超出　一切衆生表　微妙深遠法　我今已具知　三毒五欲境　永斷無餘習　如蓮花在水

趣三本俱作赴
坐元明俱作座
達明作爲
惓三本俱作倦
慧識三本俱作智慧
還宋作衆
澆同作燒

不染濁水泥　自悟八正道　無師無等侶　以清淨智慧　降伏大力魔　今得成正覺　堪爲天人師
身口意滿足　故號爲牟尼　欲趣波羅㮈　轉甘露法輪　是天人魔梵　所可不能轉

爾時優波伽。聞此偈言。心生歡喜。歎未曾有。合掌恭敬。圍繞而去。迴顧瞻矚。不見乃止。爾時世尊卽復前行。次到阿闍婆羅水側。日暮止宿。而便入定。當於爾時。七日風雨。時彼水中。有大龍王。名目眞憐陀。見佛入定。卽以其身。圍繞七匝滿七日已。時彼龍王。化爲人形。頭面禮足。而白佛言。世尊在此。七日之中。不至乃甚患風雨耶。爾時世尊。以偈答曰

諸天及世人　所歡於五欲　比我禪定樂　不可爲譬喩

時彼龍王。聞佛此偈。歡喜踊躍。頭面禮足。還歸所止。爾時世尊。卽復前行。往婆羅㮈國。至憍陳如摩訶那摩跋波阿捨婆闍跋陀羅闍所止住處。時彼五人。遙見佛來。共相謂言。沙門瞿曇。棄捨苦行。而還退受飮食之樂。無復道心。今既來此。我等不須起迎之也。亦勿作禮敬問。所須爲敷坐處。若欲坐者。自隨其意。作此語竟。而各默然。爾時世尊。來既至已。五人不覺。各從坐起。禮拜奉迎。互爲執事。或復有爲持衣鉢者或有取水供盥漱者。或復有爲澡洗脚者。各違本誓。猶故稱佛以爲瞿曇。爾時世尊。語憍陳如言。汝等共約。見我不起。今者何故。違先所誓而卽驚起。爲我執事。時彼五人。聞佛此語。深生慙愧。卽前白言。瞿曇行道。得無疲惓。爾時世尊。語五人言。汝等云何於無上尊。而以高情。稱喚姓耶。我心如空。於諸毀譽。無所分別。但汝憍慢。自招惡報。譬如有子。稱父母名。於世儀中。猶尙不可。況我今是一切父母。時彼五人。又聞此語。倍生慙愧。而白佛言。我等愚癡。無有慧識。不知今者已成正覺。所以者何。往見如來日食麻米苦行六年。而今還受飮食之樂。我以是故。謂不得道。爾時世尊。語憍陳如言。汝等莫以小智輕量我道成與不成。何以故。形在苦者。心則惱亂。身在樂者。情則樂著。是以苦樂。兩非道因。譬如鑽火。澆之以水。則必無有破闇之照。鑽智慧火。亦復如是。有苦樂水。慧光不生。以不生故。不能滅於生死黑障。今者若能棄捨苦樂。行於中道。心則寂定。堪能修彼八正聖道。離於生老病死之患。我已隨順中道之行。得成阿耨多羅三藐三菩提。時彼五人。既聞如來如此之言。心大歡喜。踊躍無量。瞻仰尊顏。目不暫捨。爾時世尊。觀五人根堪任受道。而語之言。憍陳如汝等當知。五盛陰苦。生苦。老苦。病苦。死苦。愛別離苦。怨憎會苦。所求不得苦。失榮樂苦。憍

陳如。有形無形。無足一足。二足四足。多足。一切衆生。無不悉有如此苦者。譬如以灰覆於火上。若過乾草。還復燒燃。如是諸苦。由我爲本。若有衆生。起微我想。還復更受如此之苦。貪欲瞋恚。及以愚癡。皆悉緣我根本而生。又此三毒。是諸苦因。猶如種子能生於芽。衆生以是輪廻三有。若滅我想及貪瞋癡。諸苦亦皆從此而斷。莫不悉由彼八正道。如人以水澆於盛火。一切衆生。不知諸苦之根本者。皆悉輪廻。在於生死。憍陳如。苦應知。習當斷。滅應證。道當修。憍陳如。我以知苦。以斷習。以證滅。以修道故。得阿耨多羅三藐三菩提。是故汝今應當知苦斷習證滅修道。若人不知四聖諦者。當知是人不得解脫。四聖諦者。是眞是實。苦實是苦。習實是習。滅實是滅。道實是道。憍陳如。汝等解未。憍陳如言。解已世尊。知已世尊。以於四諦得解知故。故名阿若憍陳如。當佛三轉四諦十二行法輪時。阿若憍陳如。於諸法中。遠塵離垢。得法眼淨。時虚空中八萬那由他諸天。亦離塵垢。得法眼淨。爾時地神。見於如來在其境界。而轉法輪。心大歡喜。高聲唱言。如來於此。轉妙法輪。虚空天神。既聞此言。又生踊躍。展轉唱聲。乃至阿迦膩吒天。諸天聞已。欣悦無量。高聲唱言。如來今日於婆羅㮈國鹿野苑中仙人住處。轉大法輪。一切世間。天人魔梵。沙門婆羅門。所不能轉。爾時大地。十八相動。天龍八部。於虚空中。作衆伎樂。天鼓自鳴。燒衆名香。散諸妙花。寶幢幡蓋。歌唄讃歎。世界之中。自然大明。阿若憍陳如。於弟子中。以始悟所爲第一弟子。時彼摩訶那摩等四人。聞佛轉法輪已。阿若憍陳如。獨悟道跡。心自念言。世尊若更爲我說法。我等亦當復悟道跡。作此念已。瞻仰尊顏。目不蹔捨。爾時世尊。知四人念。即便重爲廣說四諦。于時四人。於諸法中。亦離塵垢。得法眼淨。時彼五人。見道跡已。頂禮佛足而白佛言。世尊我等五人。已見道跡。已證道跡。我等今者欲於佛法出家修道。唯願世尊。慈愍聽許。於時世尊。喚彼五人。善來比丘。鬚髮自落。袈裟著身。即成沙門。爾時世尊。問彼五人。汝等比丘。知色受想行識。爲是常爲無常耶。爲是苦爲非苦耶。爲是空爲非空耶。爲有我爲無我耶。時五比丘。聞佛說是五陰法已。漏盡意解。成阿羅漢果。即便答言。世尊色受想行識。實是無常苦空無我。於是世間。始有六阿羅漢。佛阿羅漢。是爲佛寶。四諦法輪。是爲法寶。五阿羅漢。是爲僧寶。如是世間三寶具足。爲諸天人第一福田

過去現在因果經卷第三

若明作苦
在同作有〇習元明俱作集下同〇以同作已下同〇苦上三本俱有是字
悟道跡同作得悟道
重宋作襄
已宋元俱作色

價下三本俱有之字

渡同作度

聽下同有諦聽二字

當三本俱作應

佛同作足○鬚髮元明俱作髮鬚

過去現在因果經卷第四

（麗言）（宋辭）（元辭）（明尺）

宋天竺三藏求那跋陀羅譯

爾時有長者子。名曰耶舍。聰明利根。極大巨富。閻浮提中。最爲第一。服天冠瓔珞。著無價寶屐。其於中夜。與諸妓女。相娛樂已。各還寢息。忽從眠覺。見諸妓女。或有伏臥。或有仰眠。頭髮蓬亂。涎唾流出。樂器服玩。顚倒縱橫。既見是已。生厭離心。而自念言。我今在此災恠之內。於不淨中。妄生淨想。作是念時。以天力故。空中光明。門自然開。尋光而去。趣鹿野苑。路由恒河。高聲唱言。苦哉怪哉。佛言耶舍。汝便可來。我此今有離苦之法。耶舍聞已。所著寶屐。價直閻浮提。卽便脫之。渡於恒河。往詣佛所。見三十二相。八十種好。顏容挺特。威德具足。心大歡喜。踊躍無量。五體投地。頂禮佛足。唯願世尊。救濟於我。佛言。善哉善男子。諦聽善思念之。如來卽便隨順其根。而爲說法。耶舍。色受想行識。無常苦空無我。汝知之不。是時耶舍。聞說此語。卽於諸法。遠塵離垢。得法眼淨。於是如來。重說四諦。漏盡意解。心得自在。成阿羅漢果。卽答佛言。世尊。色受想行識。實是無常苦空無我。爾時如來。猶見耶舍。著嚴身具。卽說偈言

雖復處居家　服寶嚴身具　善攝諸情根　厭離於五欲　若能如此者　是爲眞出家　雖身在曠野
服食於麤澀　意猶貪五欲　是爲非出家　一切造善惡　皆從心想生　是故眞出家　皆以心爲本

爾時耶舍。既聞如來說此偈已。心自念言。世尊所以說此偈者。正當以我猶著七寶。我今宜當脫如此服。卽便禮佛。而白佛言。唯願世尊。聽我出家。佛言。善來比丘。鬚髮自落。袈裟著身。卽成沙門。爾時耶舍父。既至天曉。求覓耶舍。不知所在。心大懊惱。悲號涕泣。緣路推尋。到恒河側。見其子屐。心自思惟。我子正當從此道去。卽尋其跡。至於佛所。爾時世尊。知其爲子故來至此。若使卽得見耶舍者。必生大苦。或能命終。便以神力隱耶舍身。其父卽便前到佛所。頭面禮足。退坐一面。於是如來。卽隨其根而爲說法。善男子。色受想行識。無常苦空無我。汝知之不。時耶

且明作但○足三本俱作之
殖同作植
諸上同無時字
㮈同作柰下同
提下三本俱無國字
住同作自○加同作跏下同○見宋元俱作如明作知

舍父聞說此言。卽於諸法。遠塵離垢。得法眼淨。而答佛言。世尊。色受想行識。實是無常苦空無我。爾時如來。旣已知其見於道跡。恩愛漸薄。而問之言。汝何因緣。而來至此。其卽答言。我有一子。名曰耶舍。昨夜之中。忽失所在。今且推求。見其寶屣。在恒河側。追尋足跡。故來至此。爾時世尊。攝其神力。其父卽便得見耶舍。心大歡喜。語耶舍言。善哉善哉。汝爲此事眞實快也。旣能自度。又能度他。汝今在此故。令我來得見道跡。卽於佛前。受三自歸。於是閻浮提中。唯此長者。爲優婆塞。最初獲得供養三寶。爾時又有耶舍朋類五十長者子。聞佛出世。又聞耶舍於佛法中出家修道。各自念言世間今者有無上尊。長者子耶舍。聰慧辯了。才藝兼人。乃能捨其豪族。棄五欲樂。毀形守志。而爲沙門。我等今者復何顧戀不出家耶。作是念已。共詣佛所。未至之間。遙見如來相好殊特。光明赫奕。心大歡喜。擧體淸涼。敬情轉至。卽前佛所。合掌圍繞。頭面禮足。諸長者子。宿殖德本。聰達易悟。如來卽便隨其所應。而爲說法。善男子。色受想行識。無常苦空無我。汝知之不。說此語已。時諸長者子。於諸法中。遠塵離垢。得法眼淨。卽答佛言。世尊。色受想行識。實是無常苦空無我。唯願世尊。聽我出家。佛言善來比丘。鬚髮自落。袈裟著身。卽成沙門。爾時世尊。又爲廣說四諦。時五十比丘。漏盡意解。得阿羅漢果。爾時始有五十六阿羅漢。是時如來。告諸比丘。汝等所作已辦。堪爲世間作上福田。宜各遊方敎化。以慈悲心。度諸衆生。我今亦當獨往摩竭提國。王舍城中。度諸人民。諸比丘言。善哉世尊。爾時比丘。頭面禮足。各持衣鉢。辭別而去。爾時世尊。卽便思惟。我今應度何等衆生。而能廣利一切人天。唯有優樓頻螺迦葉兄弟三人。在摩竭提國。學於仙道。國王臣民。皆悉歸信。又其聰明。利根易悟。然其我慢。亦難摧伏。我今當往而度脫之。思惟是已。卽發波羅㮈趣摩竭提國。日將昏暮。往優樓頻螺迦葉住處。于時迦葉。忽見如來相好莊嚴。心大歡喜。而作是言。年少沙門。從何所來。佛卽答言。我從波羅㮈國。當詣摩竭提國。日旣晚暮。欲寄一宿。迦葉又言。寄宿止者。甚不相違。但諸房舍。悉弟子住。唯有石室。極爲潔淨。我事火具。皆在其中。此寂靜處。可得相容。然有惡龍。居在其內。恐相害耳。佛又答言。雖有惡龍。但以見借。迦葉又言。其性兇暴。必當相害。非是有惜。佛又答言。但以見借。必無辱也。迦葉又言。若能住者。便住隨意。佛言善哉。卽於其夕。而入石室。結加趺坐。而入三昧。爾時惡龍。毒心轉盛。擧體烟出。世尊卽入火光三昧。龍見是已。火焰衝天。焚燒石室。迦

葉弟子。先見此火。而還白師。彼年少沙門。聰明端嚴。今爲龍火之所燒害。迦葉驚起。見彼龍火。心懷悲傷。卽勅弟子。以水澆之。水不能滅。火更熾盛。石室融盡。爾時世尊。身心不動。容顏怡然。降彼惡龍。使無復毒。授三歸依。置於鉢中。至天明已。迦葉師徒。俱往佛所。年少沙門。龍火猛烈。將無爲此之所傷耶。沙門借室。我昨所以不相與者。正爲此耳。佛言。我內淸淨。終不爲彼外災所毒。彼毒龍者。今在鉢中。卽便擧鉢。以示迦葉。迦葉師徒。見於沙門。處火不燒。降伏惡龍。置於鉢中。歎未曾有。語弟子言。年少沙門。雖復神通。然故不如我道眞也。爾時世尊。語迦葉言。我今方欲停止此處。迦葉答言。善哉隨意。是時如來。於第二夜。坐一樹下。時四天王。夜來佛所。而共聽法。各放光明。照踰日月。迦葉夜起。遙見天光在如來側。語弟子言。年少沙門。亦事於火。至明日曉。往詣佛所。問言沙門。汝事火耶。佛言不也。有四天王。夜來聽法。是其光耳。於是迦葉。語弟子言。年少沙門。有大神德。然故不如我道眞也。至第三夜。釋提桓因。來下聽法。放大光明。如日初出。迦葉弟子。遙見天光在如來側。而白師言。年少沙門。定事火也。至於明旦。往詣佛所。問沙門言。汝定事火。佛言不也。釋提桓因。來下聽法。是其光耳。于時迦葉。語弟子言。年少沙門。神德雖盛。然故不如我道眞也。至第四夜。大梵天王。來下聽法。放大光明。如日正中。加葉夜起。見有光明在如來側。沙門必定事於火也。明日問佛。汝定事火。佛言不也。大梵天王。夜來聽法。是其光耳。於是迦葉。心自念言。年少沙門。雖復神妙。然故不如我道眞也。爾時迦葉五百弟子。各事三火。於晨朝時。俱欲然火。火不肯燃。皆向迦葉。具說此事。迦葉聞已。心自思惟。此必當是沙門所爲。卽與弟子。來詣佛所。而白佛言。我諸弟子。各事三火。且欲燃之。而火不燃。佛卽答言。汝可還去。火當自然。迦葉便還。見火已燃。心自念言。年少沙門。雖復神妙。然故不如我道眞也。諸弟子衆。供養火畢。而欲滅之。不能令滅。卽向迦葉。具說此事。迦葉聞已。心自思惟。此亦當是沙門所爲。卽與弟子。來至佛所。而白佛言。我諸弟子。朝欲滅火。而火不滅。佛卽答言。汝可還去。火自當滅。迦葉便歸。見火已滅。心自念言。年少沙門。雖復神妙。然故不如我道眞也。爾時迦葉。自事三火。晨朝欲燃。火不肯然。卽自思惟。此必復是沙門所爲。卽往佛所。而白佛言。我朝燃火。而不肯燃。佛卽答言。汝可還去。火自當燃。迦葉便歸。見火已燃。心自念言。年少沙門。雖復神妙。然故不如我道眞也。於時迦葉。供養火畢。而欲滅之。不能令滅。心自思惟。此必當是沙門

伏惡三本俱作惡毒
大宋作故
旦明作日
詣三本俱作至
當自同作自當
言同作之下同

所爲。卽往佛所。而白佛言。我朝燃火。今欲滅之。而不肯滅。佛卽答言。汝可還去。火自當滅。迦葉便歸。見火已滅。心自念言。年少沙門。雖復神妙。然故不如我道眞也。爾時迦葉諸弟子衆。晨朝破薪。斧不肯擧。卽向迦葉。具說此事。迦葉聞已。心自思惟。此必復是沙門所爲。卽與弟子。來至佛所。而白佛言。我諸弟子。朝欲破薪。斧不肯擧。佛卽答言。汝可還去。斧自當擧。迦葉便歸。見諸弟子。斧皆得擧。而自念言。年少沙門。雖復神妙。然故不如我道眞也。迦葉弟子。卽得擧斧。復不肯下。還向迦葉。具說此事。迦葉聞已。心自思惟。此亦當是沙門所爲。卽與弟子。往至佛所。而白佛言。我諸弟子。旦欲破薪。斧既得擧。復不肯下。佛卽答言。汝可還去。當令斧下。迦葉既歸。見諸弟子。斧皆得下。心自念言。年少沙門。雖復神妙。然故不如我道眞也。爾時迦葉。於晨朝時。自欲破薪。斧不得擧。心自思惟。此亦當是沙門所爲。卽詣佛所。而白佛言。我旦破薪。斧不肯擧。佛卽答言。汝可還去。斧自當擧。迦葉既還。斧卽得擧。心自念言。年少沙門。雖復神妙。然故不如我道眞也。迦葉斧既擧已。又不肯下。心自思惟。此亦當是沙門所爲。卽詣佛所。而白佛言。我斧已擧。復不肯下。佛卽答言。汝可還去。斧自當下。迦葉卽歸。斧卽得下。心自念言。年少沙門。雖復神妙。然故不如我道眞也。爾時迦葉。卽白佛言。年少沙門。可止於此共修梵行。房舍衣食。我當相給。于時世尊。默然許之。迦葉知佛許已。還其所住。卽勅日日辦好飲食。幷施牀座。至明食時。自行請佛。佛言汝去。我隨後往。迦葉適去。俄爾之間世尊卽便。至閻浮洲。取閻浮果。滿鉢持來。迦葉未至。佛已先到。迦葉後來。見佛已坐。卽便問言。年少沙門。從何道來。而先至此。佛以鉢中閻浮果。以示迦葉。而語之言。汝今識此鉢中果不。迦葉答言。不識此果。佛言。從此南行。數萬踰闍那。彼有一洲。其上有樹。名曰閻浮。緣有此樹。故言閻浮提。我此鉢中。是彼果也。於一念頃。取此果來。極爲香美。汝可噉之。於是迦葉。心自思惟。彼道去此。極爲長遠。而此沙門。乃能俄爾。已得往還。神通變化。殊自迅疾。然故不如我道眞也。迦葉卽便下種種食。佛卽呪願

婆羅門法中　奉事火爲最　一切衆流中　大海爲其最　於諸星宿中　月光爲其最　一切光明中
日照爲其最　於諸福田中　佛福田爲最　若欲求大果　當供佛福田

佛食已畢。還歸所住。洗鉢漱口。坐於樹下。明日食時。復往請佛。佛言汝去。我隨後往。迦葉適去。俄爾之間。世尊卽

於三本俱作住

以三本俱作已
〇力同作化

便至弗婆提。取菴摩羅果。滿鉢持來。迦葉未至。佛已先到。迦葉後來。見佛已坐。即便問言。年少沙門。從何道來。而先至此。佛以鉢中菴摩羅果。以示迦葉。而語之言。汝今識此鉢中果不。迦葉答言。不識此果。佛言。從此東行。數萬踰闍那。到弗婆提。取此果來。名菴摩羅。極爲香美。汝可食之。迦葉聞已。心自念言。彼道去此。極爲長遠。而此沙門。乃能俄爾。以得往還。覩其神力。所未曾有。然故不如我道眞也。迦葉即便下種種食。佛即呪願

婆羅門法中　奉事火爲最　一切衆流中　大海爲其最　於諸星宿中　月光爲其最　一切光明中
日照爲其最　於諸福田中　佛福田爲最　若欲求大果　當供佛福田

佛食已畢。還歸所止。洗鉢漱口。坐於樹下。明日食時。復往請佛。佛言汝去。我隨後往。迦葉適去。俄爾之間。世尊即便至瞿陀尼。取呵梨勒果。滿鉢持來。迦葉未至。佛已先到。迦葉後來。見佛已坐。即便問言。年少沙門。從何道來。而先至此。佛以鉢中呵梨勒果。以示迦葉。而語之言。汝今識此鉢中果不。迦葉答言。不識此果。佛言。從此西行。數萬踰闍那。到瞿陀尼。取此果來。名呵梨勒。極爲香美。汝可食之。迦葉聞已。心自念言。彼道去此。極爲長遠。而此沙門。乃能俄爾。已得往還。覩其神通。所未曾有。然故如不我道眞也。迦葉即便下種種食。佛即呪願

婆羅門法中　奉事火爲最　一切衆流中　大海爲其最　於諸星宿中　月光爲其最　一切光明中
日照爲其最　於諸福田中　佛福田爲最　若欲求大果　當供佛福田

佛食已畢。還歸所止。洗鉢漱口。坐於樹下。明日食時。復往請佛。佛言汝去。我隨後往。迦葉適去。俄爾之間。世尊即便至鬱單越。取自然粳米飯。滿鉢持來。迦葉未至。佛已先到。迦葉後來。見佛已坐。即便問言。年少沙門。從何道來。而先至此。佛以鉢中粳米飯。以示迦葉。而語之言。汝今識此鉢中飯不。迦葉答言。不識此飯。佛言。從此北行。數萬踰闍那。到鬱單越。取此自然粳米飯來。極爲香美。汝可食之。迦葉聞已。心自念言。彼道去此。極爲長遠。而此沙門。乃能俄爾。已得往還。雖復神通。難可測量。然故不如我道眞也。迦葉即便下種種食。佛即呪願

婆羅門法中　奉事火爲最　一切衆流中　大海爲其最　於諸星宿中　月光爲其最　一切光明中
日照爲其最　於諸福田中　佛福田爲最　若欲求大果　當供佛福田

佛食已畢。却歸所止。洗鉢漱口。坐於樹下。明日食時。復往請佛。佛言善哉。即共俱行。既到其舍。下種種食。佛即呪願

婆羅門法中　奉事火爲最　一切衆流中　大海爲其最　於諸星宿中　月光爲其最　一切光明中
日照爲其最　於諸福田中　佛福田爲最　若欲求大果　當供佛福田

爾時世尊。呪願已畢。即便取食。獨還樹下。食竟心念須水。釋提桓因。即知佛意。如大壯士屈伸臂頃。從天來下。到於佛前。頭面禮足。即便以手指地成池。其水淸淨。具八功德。如來即便得而用之。澡漱既畢。爲釋提桓因。說種種法。釋提桓因。既聞法已。歡喜踊躍。忽然不現。還歸天宮。是時迦葉。於中食後。林間經行。心自念言。年少沙門。今日受食。還歸樹下。我當往彼而看視之。即詣佛所。忽見樹側有一大池。泉水澄淨。具八功德。怪而問佛。此中云何忽有此池。佛即答言。且受汝供。還歸此處。食訖須水。澡漱洗鉢。釋提桓因。知我此意。從天上來。以手指地。而成此池。爾時迦葉。既見池水。復聞佛言。心自思惟。年少沙門。有大威德。乃能如此感致天瑞。然故不如我道眞也。爾時世尊。別於他日。林間經行。見糞穢中有諸幣帛。即便拾取。欲浣濯之。心念須石。釋提桓因。即知佛意。如大壯士屈伸臂頃。往香山上。取四方石。安置樹間。即白佛言。可就石上浣濯衣也。佛復心念。今應須水。釋提桓因。又往香山。取大石槽。盛淸淨水。置方石所。釋提桓因。所爲事畢。忽然不現。還歸天宮。爾時世尊。浣濯已竟。還坐樹下。是時迦葉。來至佛所。忽見樹間。有四方石。及大石槽。即自思惟。此中云何有此二物。心懷驚怪。而往問佛。年少沙門。汝此樹間。有四方石及大石槽。從何而來。於是世尊。即答之言。我向經行。見地幣帛。取欲浣之。心念須此。釋提桓因。知我此意。即往香山。而取之來。迦葉聞已。歎未曾有。而自念言。年少沙門。雖有如是大威神力。能感諸天。然故不如我道眞也。爾時世尊。又於他日。入指地池。而自洗浴。洗浴訖已。心念欲出。無所攀持。池上有樹。名迦羅迦。枝葉蔚映。臨於池上。樹神即便按此樹枝。令佛攀出。還坐樹下。于時迦葉。來至佛所。忽然見樹曲枝垂蔭。怪而問佛。此樹何故曲枝垂蔭。佛即答言。我於向者。入池洗浴。出無所攀。樹神致感。爲我曲之。於是迦葉。見樹曲枝。又聞佛言。歎未曾有。而自心念。年少沙門。乃有如此大威德力。能感樹神。然故不如我道眞也。爾時迦葉。心自念言。明日摩竭提

却三本俱作還
已同作既
淨同作涼
處同作食
上同作中
大同作以
之元明俱作枝

現三本俱作見下同○畢訖同作訖畢○神同作伸

近同作起

力下同有故字○起同作出

王。及諸臣民。婆羅門長者居士等。當來就我作七日會年少沙門。若來在此。國王臣民婆羅門長者居士等。見其相好及以神通威德力者。必當捨我而奉事之。願此沙門。於七日中。不來我所。佛知其意。卽便往詣北鬱單越。七日七夜。停彼不現。過七日已。集會畢訖。國王辭去。迦葉心念。年少沙門。近於七日。不來我所。善哉快哉。我今既有集會餘饌。欲以供之。其若來者。善得時宜。於是世尊。卽知其意。從鬱單越。譬如壯士屈神臂頃。來到其前。于時迦葉。忽見如來。心大驚喜。卽問佛言。汝近七日。遊行何處。而不相見。佛卽答言。摩竭提王。及諸臣民。婆羅門長者居士。於七日中。就汝集會。汝近心念。不欲見我。是故我往北鬱單越。以避汝耳。汝今心念欲令我來。所以今者。故來詣汝。迦葉聞佛說此言已。心驚毛竪。而作此念。年少沙門。乃知我意。甚爲奇特。然故不如我道眞也。爾時世尊。又於他日。心自思惟。優樓頻螺迦葉。根緣漸熟。今者正是調伏其時。思惟是已。卽趣尼連禪河。既到河側。是時魔王。來詣佛所。而白佛言。世尊今者宜般涅槃。善逝今者宜般涅槃。何以故。所應度者。皆悉解脫。今者正是般涅槃時。如是三請。世尊爾時。答魔王言。我今未是般涅槃時。所以者何。我四部衆。比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。未具足故。所應度者。皆未究竟。諸外道衆。悉未降伏。爾時如來。亦復三答。魔王聞已。心懷愁惱。卽還天宮。世尊卽便入尼連禪河。以神通力。令水兩開。佛所行處。步步塵起。使兩面水。皆悉涌起。迦葉遙見。謂佛沒溺。卽與弟子。乘船而來。既至河側。見佛行處。皆悉塵起。歎其希有。而自念言。年少沙門。雖有如是神通之力。然故不如我道眞也。是時迦葉。卽問佛言。年少沙門。欲上船不。佛言甚善。于時世尊。卽以神力。貫船底入。結加趺坐。迦葉見佛從船底入。而無穿漏。歎其希有。心自念言。年少沙門。乃有如是自在神力。然故不如我得眞阿羅漢也。佛卽語言。迦葉汝非阿羅漢。亦復非是阿羅漢向。汝今何故起大我慢。迦葉聞說如此語時。心懷愧懼身毛皆竪。而自念言。年少沙門。善知我心。卽白佛言。如是沙門。如是大仙。善知我心。唯願大仙。攝受於我。佛卽答言。汝既年耆。百二十歲。又復多有弟子眷屬。又爲國王臣民所敬。若欲決定入我法者。先與弟子。熟共論詳。迦葉答言。善哉善哉。如大仙勅。然我內心。非不決定。爲當還與弟子論耳。作此語已。卽還本處。集諸子而。語弟之言。年少沙門。住此以來。見其種種神通變化。極爲奇特。智慧深遠。性又安庠。我今便欲歸依其法。汝等云何。弟子答言。我等所知。皆尊者恩。年少沙門。既爲尊

泝三本俱作逆
披同作被
絕同作斷
學同作修

者之所歸信。豈當有虛。我等亦見有諸奇異。尊者若欲必受其法。我等亦願隨從歸依。于時迦葉。聞諸弟子作是言已。卽便相與俱詣佛所。而白佛言。我及弟子今定歸依。唯願大仙。時攝我等。佛言。善來比丘。鬚髮自落。袈裟著身。卽成沙門。爾時世尊。卽隨所應。廣說四諦。于時迦葉。聞說法已。遠塵離垢。得法眼淨。乃至漸漸成阿羅漢。爾時迦葉。五百弟子。既見其師已爲沙門。心生願樂。亦欲出家。卽白佛言。我等大師。已爲大仙之所攝受。今成沙門。我等亦樂隨大師學。唯願大仙。聽我出家。佛言。善來比丘。鬚髮自落。袈裟著身。卽成沙門。於是世尊。卽爲轉於四諦法輪。時五百弟子。遠塵離垢。得法眼淨。成須陀洹果。漸漸修行。乃至亦得阿羅漢果。爾時迦葉。及五百弟子。以其事火種種之具。悉皆捐棄尼連禪河。師徒相與。隨佛而去。爾時迦葉二弟。一名那提迦葉。二名伽耶迦葉。各有二百五十弟子。在尼連禪河側。居兄下流。忽見其兄。幷及弟子。所事火具。悉逐流來。心大驚愕。而自念言。我兄今者有何不祥。事火之具。今隨水流。將非惡人之所害耶。是時二弟。奔競相就。而共議言。我兄今者若復不爲惡人所害。諸物何緣。從水而來。苦哉怪哉。我等宜速共至兄所。卽便相與。泝流而上。至兄住處。空寂無人。心大悲絕。不知其兄及諸弟子之所在。處處四向推尋。遇見舊人。而問之言。我仙聖兄。及諸弟子不知所在。汝見之不。舊人答言。汝仙聖兄。與諸弟子。棄事火具。皆悉往於瞿曇之所。出家學道。是時二弟。聞此語已。心大懊惱。怪未曾有。又自念言。云何棄於阿羅漢道。而復更求他餘法耶。卽便馳往至其兄所。到已見兄幷及眷屬。剃除鬚髮身披袈裟。卽便跪拜。而問兄言。兄本既是大阿羅漢。聰明智慧。無與等者。名聞十方。莫不宗仰。何故於今自捨此道。還從人學。此非小事。爾時迦葉。答其弟言。我見世尊。成就大慈大悲。有三事奇特。一者神通變化。二者慧心淸徹。決定成就一切種智。三者善知人根。隨順攝受。以此事故。於佛法中。出家修道。我今雖復國王臣民。所見宗敬。世論機辯。無能折者。然非永絕生死之法。唯有如來所可演說。能盡生死。旣値如是大聖之尊。而不自勵。師彼高勝。則是無心。亦爲無眼。二弟白言。若如兄語。決定是成一切種智。我所知得皆是兄力。兄今既已從佛出家。我等亦願隨順兄學。卽各語其諸弟子言。我今欲同大兄。於佛法中。出家學道。汝意云何。時諸弟子。卽答師言我等所以得有知見。皆大師恩。大師若欲於佛法中而出家相。亦願隨從。於是那提迦葉。伽耶迦葉。各與二百五十弟子。至於佛所。頭面禮

座三本俱作坐

足。而白佛言。世尊唯願。慈哀濟度我等。佛言。善來比丘。鬚髮自落。袈裟著身。卽成沙門。時那提迦葉。伽耶迦葉。又白佛言。我諸弟子。今皆欲於佛法出家。唯願世尊。垂慈聽許。佛卽答言。善哉善哉。爾時世尊。便呼善來比丘。鬚髮自落。袈裟著身。卽成沙門。爾時世尊。卽爲那提迦葉。伽耶迦葉。及諸弟子。現大神變。又應其心而爲說法。語言。比丘。當知。世間皆爲貪欲瞋恚愚癡猛火之所燒炙。汝等往昔奉事三火既能絕棄。除此外惑。今三毒火。尙猶在身。宜速滅之。時諸比丘。聞佛此語。於諸法中。遠塵離垢。得法眼淨。世尊又爲廣說四諦。皆悉得於阿羅漢果。爾時世尊。心自念言。頻毗娑羅王。往昔於我。有約誓言。道若成者。願先見度。今日時至。宜應往彼滿其本願。作此念已。卽與迦葉兄弟及千比丘眷屬圍遶。往王舍城。詣頻毗娑羅王所。爾時頻毗娑羅王。昔以聚落。給優樓頻螺迦葉者。既見迦葉及其弟子。悉爲沙門。卽還啓王。說如此事。王與諸臣。既聞此語。心大驚怪。默然無聲。時外人民。聞此語已。各相謂言。優樓頻螺迦葉。智慧深遠。無與等者。年又耆老。已得阿羅漢。云何反爲瞿曇弟子。終無此理。乃可說言沙門瞿曇爲弟子耳。爾時世尊。漸近王舍城。住於杖林。時優樓頻螺迦葉。卽便遣其常所使人。白頻毗娑羅王言。我今於佛法中出家修道。今隨從佛。來至杖林。大王宜先禮拜供養。王聞來信說此言已。方決定知優樓頻螺迦葉。爲佛弟子。卽勅嚴駕。與諸大臣。婆羅門。及人民衆。往詣佛所。至杖林外。王卽下輿。除却儀飾。步至佛前。爾時空中有天。而語王言。如來今者在此林中。是諸天人最上福田。大王宜應恭敬供養。又應宣示國中人民。皆悉令其供養如來。時王既聞彼天語已。心大歡喜。倍增踊躍。便進林中。遙見如來。相好莊嚴。又見優樓頻螺迦葉。兄弟三人。幷其弟子。前後圍繞。如盛滿月處衆星中。步步踊悅。不能自勝。既至佛所。頭面禮足。而白佛言。我是月種摩竭提王。名頻毗娑羅。世尊知不。佛卽答言。善哉大王。於是頻毗娑羅王。却坐一面。時婆羅門。及以大臣。諸人民衆。皆悉就座。爾時世尊。既見來衆皆安坐已。卽以梵音。慰問頻毗娑羅王言。大王四大常安隱不。統理民務。無乃勞耶。王卽答言。蒙世尊恩。幸得安隱。爾時頻毗娑羅王。及餘大學婆羅門長者。居士。大臣人民。既見迦葉爲佛弟子。自相謂言。嗚呼如來。有大神力。智慧深遠。不可思議。乃能伏於如此之人。以爲弟子。爾時復有諸餘人衆。心自念言。優樓頻螺迦葉。有大智慧。普爲世人之所歸信。云何當爲沙門瞿曇。而作弟子。心懷狐疑。爾時世尊。知彼心念。

言三本俱作曰　輪轉同作轉輪　及明作又　言宋作可

卽語迦葉.汝今宜應現諸神變.于時迦葉.卽昇虛空.身上出水.身下出火.身上出火.身下出水.或現大身.滿虛空中.或復現小.或分一身.爲無量身.或現入地.還復踊出.於虛空中.行住坐臥.擧衆見已.歎未曾有.悉皆稱言.第一大仙.爾時迦葉.現此變已.卽從空下.到於佛前.頭面禮足.而白佛言.世尊實是天人之師.我今實是尊之弟子.如是三說.佛卽答言.如是如是.迦葉汝於我法.見何等利.棄捨火具.而出家耶.於是迦葉.以偈答言

我於昔日中　所事火功德　得生天人中　受於五欲樂　恒如是輪轉　沒於生死海　我見此過患
所以棄捨之　又復事火福　得生天人中　增長貪恚癡　是故我遠離　又復事火福　爲求將來生
既已有生故　必有老病死　已見如此事　是故棄火法　施會修苦行　及以事火福　雖得生梵天
此非究竟處　以是因緣故　所以棄事火　我見如來法　離生老病死　究竟解脫處　是故今出家
如來眞解脫　爲諸天人師　以是因緣故　歸依大聖尊　如來大慈悲　現種種方便　及諸神通力
而以引導我　云何而復應　奉事於火法

爾時頻毗娑羅王.及諸大衆.聞優樓頻螺迦葉說此偈言.心大歡喜.於如來所.深生敬信.決定得知如來必成一切種智.審知迦葉是佛弟子.爾時諸天.於虛空中.雨衆天花.作妙伎樂.異口同音唱言.善哉優樓頻螺迦葉.快說此偈.爾時世尊.知諸大衆心意決定無復狐疑.又觀其根皆已成熟.卽爲說法.大王當知.此五陰身以識爲本.因於識故.而生意根.以意根故.而生於色.而此色法.生滅不住.大王若能如是觀者.則能於身.善知無常.如此觀身.不取身相.則能離我及於我所.若能觀色.離我我所.卽知色生.便是苦生.若知色滅.便是苦滅.若人能作如此觀者.是名爲解.若人不能作斯觀者.是名爲縛.法本無我.及以我所.以倒想故.橫計有我.及以我所.無有實法.若能斷此倒惑想者.則是解脫.爾時頻毗娑羅王.心自思惟.若謂衆生.言有我者.而名爲縛.一切衆生.皆悉無我.既無有我.誰受果報.爾時世尊.知彼心念卽語之言.一切衆生.所爲善惡.及受果報.皆非我造.亦非我受.而今現有造作善惡受果報者.大王諦聽.當爲王說.大王但以情塵.識合.於境生染.累想滋繁.以是緣故.馳流生死.備受苦報.若於境無染.息其累想.則得解脫.以情塵識三事因緣.共起善惡.及受果報.更無別我.譬如鑽火.因手轉燧.得有

火生。然彼火性。不從手生及以燧出。亦復不離手及燧鑽。彼情塵識。亦復如是。時頻毗娑羅王。又自思惟。若以情塵識和合故。而有善惡受果報者。便爲常合。不應離絕。若不常合。是則爲斷。爾時世尊。知王心念。即便答言。此情塵識。不常不斷。何以故。合故不斷。離故不常。譬如緣於地水因彼種子。而生芽葉。種子既謝。不得名常。生芽葉故。不得名斷。離於斷常故名中道。三事因緣。亦復如是。爾時頻毗娑羅王。聞此法已。心開意解。於諸法中。遠塵離垢。得法眼淨。八萬那由他婆羅門大臣人民。亦於諸法遠塵離垢。得法眼淨。九十六萬那由他諸天。又於諸法。遠塵離垢。得法眼淨。時頻毗娑羅王。即從坐起。頂禮佛足。合掌白佛。快哉世尊。能捨轉輪聖王之位。出家學道。成一切種智。我昔愚癡。欲留世尊臨治小國。今覩慈顏。又聞正法。力懷慚愧。追悔昔過。唯願世尊。以大慈悲。受我懺悔。我於昔日。白世尊言。若得道時。願先度我。今日始蒙宿願成遂。荷世尊恩。得履道跡。我從今日。供養世尊及比丘僧。當令四事。不使有乏。唯願世尊。住於竹園。令摩竭提國。長夜獲安。佛即答言。善哉大王。久能捨於三不堅法。求三堅報。當令王願得滿足也。時頻毗娑羅王。知佛受請住竹園已。頂禮佛足。辭退而去。王還城已。即勅諸臣。令於竹園。起諸堂舍。種種莊飾。極令嚴麗。懸繒幡蓋。散花燒香。悉皆辦已。即便嚴駕。往至佛所。頭面禮足。而白佛言。竹園僧伽藍。修理已畢。唯願世尊。與比丘僧。哀愍我故。往住彼也。爾時世尊。與諸比丘。及無量諸天。前後圍繞。入王舍城。當於如來蹈門閫時。城中樂器。不鼓自鳴。門狹更廣。門下更高。一切丘墟。皆悉平坦。臭穢塵垢。自然香淨。聾者得聽。瘂者能言。盲者得視。狂者得正。拘癖疾病。普皆除愈。枯木發花。腐草榮秀。涸池增瀾。香風清靡。鳳孔雀翠。鳧鴈鴛鴦。異類衆鳥。繽紛翔集。出和雅音。有如是等。種種祥瑞。既入城已。與頻毗娑羅王。俱往竹園。爾時諸天。滿虛空中。時王即便手執寶缾。盛以香水。於如來前。而作是言。我今以此竹園。奉上如來及比丘僧。唯願哀愍。爲我納受。作此言已。即便捨水。爾時世尊。默然受之。說偈呪願。

若人能布施　斷除於慳貪　若人能忍辱　永離於瞋恚　若人能造善　則遠於愚癡　與具此三行
速至般涅槃　若有貧窮人　無財可布施　見他修施時　而生隨喜心　隨喜之福報　與施等無異

爾時婆羅門大臣。及餘人民。見王奉施如來僧伽藍。皆悉踊躍。生隨喜心。爾時頻毗娑羅王。施僧伽藍已。心大歡

然明作及
坐三本俱作座　覩同作觀○我下同有便字
求下同有於字
已同作始
狹宋作陜
癖元明俱作躄
歡喜三本俱作喜歡

羅下同無王字
波同作婆○揵同作犍下同
誠宋作戒次同
已三本俱作言
正眞同作眞正
便答同作答之

喜。頭而禮足。退還所住。閻浮提中。諸王見佛。頻毗娑羅王。最爲其首。諸僧伽藍。竹園僧伽藍。最爲其始。爾時世尊。與諸比丘。住竹園僧伽藍。于時王舍城中。有二婆羅門。聰明利根。有大智慧。於諸書論。無不通達。辯才論議。莫能摧伏。一姓拘栗。名優波室沙。母名舍利故。擧世喚爲舍利弗。二姓目揵連。名目揵羅夜那。各有一百弟子。普爲國人之所宗仰。二人互共以爲親友。極相愛重。咸共誓言。若先得聞諸妙法者。要相開悟。無得悋惜。爾時阿捨婆耆比丘。著衣持鉢。入村乞食。善攝諸根。威儀庠序。路人見者。皆生恭敬。時舍利弗。忽於路次。逢見阿捨婆耆。善攝諸根。威儀庠序。彼舍利弗。善根既熟。見阿捨婆耆。心大歡喜。踊躍遍身。停步瞻視。不能蹔捨。即便問言。我意觀汝。似新出家。而能如此。攝諸情根。欲有所問。唯願見答。汝今大師。其名何等。有所教誡。演說何法。時阿捨婆耆。即便安庠。而答之言。我之大師。得一切種智。是甘蔗種天人之師。相好智慧。及神通力。無與等者。我既年幼。學道日淺。豈能宣說如來妙法。然以所知。當爲汝說。即說偈言

一切諸法本　因緣生無主　若能解此者　則得眞實道

時舍利弗。聞阿捨婆耆說此偈已。即於諸法。遠塵離垢。得法眼淨。見道跡已。心大踊躍。身諸情根。皆悉悅預。而自念言。一切衆生。悉著於我。所以輪廻。在於生死。若除我想。即於我所。亦皆得離。譬如日光。能破於闇。無我之想。亦復如是。悉能破於我見闇障。我從昔來。所可修學。皆爲邪見。唯今所得。是正眞道。作此念已。禮阿捨婆耆足。還歸所止。時阿捨婆耆。至前乞食。訖還竹園。時舍利弗。還至住處。時目揵羅夜那。善根已熟。見舍利弗。諸根寂定。威儀庠序。顏容怡悅。異於常日。即便問言。我今觀汝。諸根顏貌。與常有異。必當已得甘露妙法。我昔與汝共結誓言。若聞妙法。要相啓悟。汝有所得。願爲我說。時舍利弗。即便答言。我今實已得甘露法。目揵羅夜那聞已。歡喜無量。歎言善哉。時爲我說。舍利弗言。我今出行。逢一比丘。執持衣鉢。入村乞食。諸根寂靜。威儀庠序。我既見已。深生恭敬。既到其所。而問之言。我意觀汝。似新出家。而能如此。攝諸情根。欲有所問。唯願見答。汝今大師。其名何等。有所教誡。演說何法。時阿捨婆耆。即便安庠。而見答言。我之大師。得一切種智。是甘蔗種天人之師。相好智慧。及神通力。無與等者。我既年幼。學道日淺。豈能宣說如來妙法。然以所知。當爲汝說。即說偈言

卽同作則

一三本俱作二

乹同作揵

衣下同有而著二字○金下同無而著二字

此同作是○子同作于

一切諸法本　因緣生無主　若能解此者　卽得眞實道

爾時目揵羅夜那。聞舍利弗說此語已。卽於諸法。遠塵離垢。得法眼淨。爾時舍利弗。與目揵羅夜那。各於佛法。得甘露已。共相謂言。我等已於佛法。各得利益今者宜應共往佛所。求索出家。作此語已。各喚弟子。而語之言。我等今者已於佛法。得甘露味。唯有此法。是出世道。我今欲往求佛出家。汝等云何。諸弟子等。答其師言。我等今者有所知見。皆大師力。師若出家。我悉隨從。於是二人。卽將二百弟子。往詣竹園。既入門已遙見如來。相好莊嚴。諸比丘衆。前後圍繞。心大歡喜。踊躍遍身。爾時世尊。見舍利弗。及目揵羅夜那。與諸弟子。相隨來已。告諸比丘。汝等當知。今此二人。將諸弟子。來至我所。欲求出家。一名舍利弗。一名目揵羅夜那。當於我法中。爲上弟子。舍利弗者。於智慧中。最爲第一。目揵羅夜那者。於神通中。復爲無上。至佛所已。頭面禮足。而白佛言。我於佛法。已得道跡。樂欲出家。願時聽許。爾時世尊。卽便喚言。善來比丘。鬚髮自落。袈裟著身。卽成沙門。時彼二百弟子。既見其師成沙門已。俱白佛言。我等亦欲隨師出家。唯願世尊。垂慈聽許。於是世尊。卽復喚言。善來比丘。鬚髮自落。袈裟著身。卽成沙門。爾時世尊。爲舍利弗及目揵羅夜那。廣說四諦。二人卽得阿羅漢果。又復爲彼二百弟子。廣說四諦。卽於諸法。遠塵離垢。得法眼淨。乃至亦成阿羅漢果。爾時世尊。卽與一千二百五十比丘。皆大阿羅漢。於摩竭提國。廣利衆生。諸比丘中。多有人。名目乹羅夜那世尊故。名此目揵羅夜那。爲大目揵羅夜那。爾時偸羅厥叉國。有一婆羅門。名曰迦葉。有三十二相。聰明智慧。誦四毗陀經。一切書論。無不通達。極大巨富。善能布施。其婦端正。擧國無雙二人自然無有欲想。乃至亦不同宿一室。久於往昔。種善根故。不樂在家受五欲樂。日夜思惟。厭離世間。精勤求訪出家之法。如是推尋不能得。已卽捨家事。入於山林。心念口言。諸佛如來。出家修道。我今亦當隨佛出家。卽便脫去金縷織成珍寶之衣。價直百千兩金。而著壞色納衣。自剃鬚髮。爾時諸天。於虛空中。既見迦葉自出家已。而語之言。善男子。甘蔗種族。白淨王子。其名薩婆悉達。出家學道。成一切種智。擧世號爲釋迦牟尼佛。今者與千二百五十阿羅漢。在王舍城竹園中住。爾時迦葉。聞天語已。歡喜踊躍。身毛皆竪。卽便往趣竹園僧伽藍。爾時世尊。知其當來。而自思惟。觀其善根。宜往度之。作此念已。卽行逆之。到子兜婆。而逢迦葉。時彼迦葉。既見相好威儀特

尊。即便合掌。而作此言。世尊實是一切種智。實是慈悲。濟衆生者。實是一切所歸依處。即便五體投地。頂禮佛足。而白佛言。世尊今者是我大師。我是弟子。如是三說。佛即答言。如是迦葉。我是汝師。汝是我弟子。佛又語言。迦葉當知。若人實非一切種智。而欲受汝爲弟子者。頭則破裂。以爲七分。又復告言。善哉迦葉。快哉迦葉。當知五受陰身是大苦聚。于時迦葉。聞此言已。即便見諦。乃至得於阿羅漢果。爾時世尊。即與迦葉。倶還竹園。以此迦葉。有大威德。智慧聰明。是故名之。爲大迦葉。爾時世尊。告諸比丘。普光如來。出興世時。善慧仙人。豈異人乎。即我身是。緣路所遇五百外道。所共論議。及隨喜者。今此會中優樓頻螺迦葉兄弟。及其眷屬千比丘是。時賣花女者。今耶輸陀羅是。善慧仙人。髮布地時。傍有二人。掃佛前地。及二百人。隨喜助者。今此會中。舍利弗大目揵羅夜那。幷二百弟子比丘是。虛空諸天。見善慧仙人。以髮布地。悉皆隨喜。而讚歎者。我初得道。鹿野苑中。始轉法輪。八萬天子。及頻毗娑羅王。所將眷屬。八萬那由他人。及九十六萬那由他天是。汝等當知。過去種因。經無量劫。終不磨滅。我於往昔。精勤修習一切善業。及發大願心不退轉故。於今者而得成就一切種智。汝等宜應勤修道行。無得懈怠。時諸比丘。聞佛所說。歡喜頂戴。作禮而退

磨 三本俱作摩

過去現在因果經卷第四

佛垂般涅槃畧說教誡經 亦名佛遺敎經

〔麗羔〕〔宋羊〕〔元羊〕〔明食〕

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什奉　詔譯

釋迦牟尼佛初轉法輪。度阿若憍陳如。最後說法度須跋陀羅。所應度者皆已度訖。於娑羅雙樹間將入涅槃。是時中夜寂然無聲。爲諸弟子畧說法要

汝等比丘。於我滅後當尊重珍敬波羅提木叉。如闇遇明貧人得寶。當知此則是汝大師。若我住世無異此也。持淨戒者不得販賣貿易。安置田宅。畜養人民奴婢畜生。一切種殖及諸財寶。皆當遠離如避火坑。不得斬伐草木墾土掘地。合和湯藥占相吉凶。仰觀星宿推步盈虛曆數筭計。皆所不應。節身時食淸淨自活。不得參預世事通致使命。呪術仙藥。結好貴人親厚媟嫚。皆不應作。當自端心正念求度。不得苞藏瑕疵顯異惑衆。於四供養知量知足。趣得供事不應稸積。此則畧說持戒之相。戒是正順解脫之本。故名波羅提木叉。依因此戒得生諸禪定及滅苦智慧。是故比丘。當持淨戒勿令毀犯。若人能持淨戒是則能有善法。若無淨戒諸善功德皆不得生。是以當知戒爲第一安隱功德之所住處

汝等比丘。已能住戒當制五根。勿令放逸入於五欲。譬如牧牛之人執杖視之。不令縱逸犯人苗稼。若縱五根。非唯五欲將無崖畔不可制也。亦如惡馬不以轡制。將當牽人墜於坑陷。如被劫害苦止一世。五根賊禍殃及累世。爲害甚重。不可不愼。是故智者制而不隨。持之如賊不令縱逸。假令縱之。皆亦不久見其磨滅。此五根者心爲其主。是故汝等當好制心。心之可畏甚於毒蛇惡獸怨賊大火越逸未足喩也。動轉輕躁但觀於蜜不見深坑。譬如狂象無鉤。猿猴得樹騰躍跳躑難可禁制。當急挫之無令放逸。縱此心者喪人善事。制之一處無事不辦。是故比丘。當勤精進折伏其心

汝等比丘。受諸飮食當如服藥。於好於惡勿生增減。趣得支身以除飢渴。如蜂採花但取其味不損色香。比丘亦

經題下宋無細註

譯號三本俱作姚秦三藏法師鳩摩羅什譯

殖同作植

曆明作歷

嫚三本俱作慢〇苞同作包〇瑕宋作瘕〇稸三本俱作畜〇犯同作缺

崖元明俱作涯〇陷三本俱作埳

動上明有喩如一人手執蜜器八字〇跳三本俱作踔〇其同作汝

如明作汝

取三本俱作趣
寤宋作悟
摒三本俱作屏
無同作勿次同
能同作則
中下宋有而有二字
已三本俱作以
○謂同作增○心同作身○耶同作也
諸下同無善字

爾。受人供養取自除惱。無得多求壞其善心。譬如智者籌量牛力所堪多少。不令過分以竭其力

汝等比丘。晝則勤心修習善法無令失時。初夜後夜亦勿有廢。中夜誦經以自消息。無以睡眠因緣令一生空過無所得也。當念無常之火燒諸世間。早求自度勿睡眠也。諸煩惱賊常伺殺人甚於怨家。安可睡眠不自警寤。煩惱毒蛇睡在汝心。譬如黑蚖在汝室睡。當以持戒之鉤早摒除之。睡蛇既出乃可安眠。不出而眠是無慚人也。慚恥之服。於諸莊嚴最為第一。慚如鐵鉤能制人非法。是故比丘。常當慚恥無得暫替。若離慚恥則失諸功德。有愧之人則有善法。若無愧者。與諸禽獸相異也

汝等比丘。若有人來節節支解。當自攝心無令瞋恨。亦當護口勿出惡言。若縱恚心則自妨道失功德利。忍之為德持戒苦行所不能及。能行忍者乃可名為有力大人。若其不能歡喜忍受惡罵之毒如飲甘露者。不名入道智慧人也。所以者何。瞋恚之害能破諸善法壞好名聞。今世後世人不憙見。當知瞋心甚於猛火。常當防護無令得入。劫功德賊無過瞋恚。白衣受欲非行道人。無法自制。瞋猶可恕。出家行道無欲之人。而懷瞋恚甚不可也。譬如清冷雲中霹靂起火非所應也

汝等比丘。當自摩頭。已捨飾好著壞色衣。執持應器以乞自活。自見如是。若起憍慢當疾滅之。謂長憍慢尚非世俗白衣所宜。何況出家入道之人。為解脫故自降其心而行乞耶

汝等比丘。諂曲之心與道相違。是故宜應質直其心。當知諂曲但為欺誑。入道之人則無是處。是故汝等。宜應端心以質直為本

汝等比丘。當知多欲之人。多求利故苦惱亦多。少欲之人無求無欲則無此患。直爾少欲尚應修習。何況少欲能生諸善功德。少欲之人則無諂曲以求人意。亦復不為諸根所牽。行少欲者心則坦然無所憂畏。觸事有餘常無不足。有少欲者則有涅槃。是名少欲

汝等比丘。若欲脫諸苦惱。當觀知足。知足之法即是富樂安隱之處。知足之人雖臥地上猶為安樂。不知足者雖處天堂亦不稱意。不知足者雖富而貧。知足之人雖貧而富。不知足者常為五欲所牽。為知足者之所憐愍。是名

若同作欲○閙明作內

而三本俱作無如二字○若下同有有字○集同作習○亂同作散

苦同作者○樹下同無者字○無天同作是肉

若汝宋作汝若

欲三本俱作說○在同作於○憂同作有

導同作道

時上同無爾字

知足

汝等比丘．若求寂靜無爲安樂．當離憒閙獨處閑居．靜處之人帝釋諸天所共敬重．是故當捨己衆他衆．空閑獨處思滅苦本．若樂衆者則受衆惱．譬如大樹衆鳥集之則有枯折之患．世間縛著沒於衆苦．譬如老象溺泥不能自出．是名遠離

汝等比丘．若勤精進則事無難者．是故汝等．當勤精進．譬如小水常流則能穿石．若行者之心數數懈廢．譬如鑽火未熱而息．雖欲得火火難可得．是名精進

汝等比丘．求善知識求善護助而不忘念．若不忘念者．諸煩惱賊則不能入．是故汝等．常當攝念在心．若失念者則失諸功德．若念力堅強．雖入五欲賊中不爲所害．譬如著鎧入陣則無所畏．是名不忘念．汝等比丘．若攝心者心則在定．心在定故能知世間生滅法相．是故汝等．常當精勤修集諸定．若得定者心則不亂．譬如惜水之家善治堤塘．行者亦爾．爲智慧水故善修禪定令不漏失．是名爲定

汝等比丘．若有智慧則無貪著．常自省察不令有失．是則於我法中能得解脫．若不爾者既非道人．又非白衣．無所名也．實智慧者則是度老病死海堅牢船也．亦是無明黑闇大明燈也．一切病苦之良藥也．伐煩惱樹者之利斧也．是故汝等．當以聞思修慧而自增益．若人有智慧之照．雖無天眼而是明見人也．是爲智慧

汝等比丘．若種種戲論其心則亂．雖復出家猶未得脫．是故比丘．當急捨離亂心戲論．若汝欲得寂滅樂者．唯當善滅戲論之患．是名不戲論

汝等比丘．於諸功德常當一心捨諸放逸．如離怨賊．大悲世尊所欲利益皆以究竟．汝等但當勤而行之．若在山間若空澤中．若在樹下閑處靜室．念所受法勿令忘失．常當自勉精進修之．無爲空死後致憂悔．我如良醫知病說藥．服與不服非醫咎也．又如善導者人善導．聞之不行非導過也．汝等若於苦等四諦有所疑者．可疾問之．無得懷疑不求決也

爾時世尊如是三唱．人無問者．所以者何．衆無疑故．爾時阿㝹樓馱觀察衆心而白佛言．世尊月可令熱．日可令

眞實是同作實一字
所上宋有若有二字元明俱有若字○若下宋有有字
憂三本俱作悲
也同作惱
生老病同作老病生

冷。佛說四諦不可令異。佛說苦諦眞實是苦。不可令樂。集眞是因。更無異因。苦若滅者。卽是因滅。因滅故果滅。滅苦之道實是眞道。更無餘道。世尊。是諸比丘於四諦中決定無疑。於此衆中。所作未辦者。見佛滅度當有悲感。若有初入法者。聞佛所說卽皆得度。譬如夜見電光卽得見道。若所作已辦已度苦海者。但作是念。世尊滅度一何疾哉。阿㝹樓馱雖說是語。衆中皆悉了達四聖諦義。世尊欲令此諸大衆皆得堅固以大悲心復爲衆說

汝等比丘。勿懷憂惱。若我住世一劫會亦當滅。會而不離終不可得。自利利人法皆具足。若我久住更無所益。應可度者若天上人閒皆悉已度。其未度者皆亦已作得度因緣。自今已後。我諸弟子展轉行之。則是如來法身常在而不滅也。是故當知。世皆無常會必有離。勿懷憂也。世相如是。當勤精進早求解脫。以智慧明滅諸癡闇。世實危脆無牢强者。我今得滅如除惡病。此是應捨罪惡之物假名爲身。沒在生老病死大海。何有智者得除滅之如殺怨賊而不歡喜。汝等比丘。常當一心勤求出道。一切世閒動不動法。皆是敗壞不安之相。汝等且止。勿得復語。時將欲過我欲滅度。是我最後之所教誨

佛垂般涅槃畧說教誡經

首題宋元俱作四十二章經序明作佛說四十二章經○譯號明作迦葉摩騰共竺法蘭奉詔譯宋元俱無○佛言前行明有爾時乃至二章九十七字卷末出之○道下同有識心達本解無爲法八字○漢下明有佛言二字○之下同有佛言乃至爲道五十九字卷末出之○言下同有剃字○髮下同有而字○道同作佛○法下同有者字○身下同有何者爲十四字○矣同作何能免離四字○吾以同作以吾○有下同有愚字○佛下同有佛字○實宋元俱作寶○禮明作理○不下宋元俱無可字○減宋作滅○若明作如

四十二章經

〔麗言〕〔宋辭〕〔元辭〕〔明璧〕

後漢西域沙門迦葉摩騰共法蘭 譯

佛言.辭親出家爲道.名曰沙門.常行二百五十戒.爲四眞道.行進志淸淨成阿羅漢.阿羅漢者.能飛行變化.住壽命.動天地.次爲阿那含.阿那含者.壽終魂靈.上十九天.於彼得阿羅漢.次爲斯陀含.斯陀含者.一上一還.卽得阿羅漢.次爲須陀洹.須陀洹者.七死七生.便得阿羅漢.愛欲斷者.譬如四支斷.不復用之

佛言.除鬚髮.爲沙門.受道法.去世資財.乞求取足.日中一食.樹下一宿.愼不再矣.使人愚弊者.愛與欲也

佛言.衆生以十事爲善.亦以十事爲惡.身三.口四.意三.身三者.殺.盜.婬.口四者.兩舌.惡罵.妄言.綺語.意三者.嫉.恚.癡.不信三尊.以邪爲眞.優婆塞行五事.不懈退.至十事.必得道也

佛言.人有衆過.而不自悔.頓止其心.罪來歸身.猶水歸海.自成深廣矣.有惡知非.改過得善.罪日消滅.後會得道也

佛言.人愚吾以爲不善.五以四等慈.護濟之.重以惡來者.吾重以善往.福德之氣.常在此也.害氣重殃.反在于彼.有人聞佛道.守大仁慈.以惡來.以善往.故來罵.佛嘿然不答愍之.癡冥狂愚使然.罵止問曰.子以禮從人.其人不納.實禮如之乎.曰持歸.今子罵我.我亦不納.子自持歸.禍子身矣.猶響應聲.影之追形.終無免離.愼爲惡也

佛言.惡人害賢者.猶仰天而唾.唾不汙天.還汙己身.逆風坋人.塵不汙彼.還坋于身.賢者不可毀.禍必滅己也

佛言.夫人爲道務博愛.博哀施德莫大施.守志奉道.其福甚大.覩人施道.助之歡喜.亦得福報.質曰.彼福不當減乎.佛言.猶若炬火.數千百人.各以炬來.取其火去.熟食除冥.彼火如故.福亦如之

佛言.飯凡人百.不如飯一善人.飯善人千.不如飯持五戒者一人.飯持五戒者萬人.不如飯一須陀洹.飯須陀洹百萬.不如飯一斯陀含.飯斯陀含千萬.不如飯一阿那含.飯阿那含一億.不如飯一阿羅漢.飯阿羅漢十億.不如飯辟支佛一人.飯辟支佛百億.

不如以三尊之敎度其一世二親。敎千億。不如飯一佛學願求佛欲濟衆生也。飯善人。福最深重。凡人事天地鬼神。不如孝其親矣。二親最神也

佛言。天下有五難。貧窮布施難。豪貴學道難。制命不死難。得覩佛經難。生値佛世難。有沙門問佛。以何緣得道。奈何知宿命。佛言。道無形。知之無益。要當守志行。譬如磨鏡。垢去明存。卽自見形。斷欲守空。卽見道眞。知宿命矣

佛言。何者爲善。惟行道善。何者最大。志與道合大。何者多力。忍辱最健。忍者無怨。必爲人尊。何者最明。心垢除。惡行滅。内淸淨無瑕。未有天地。逮于今日。十方所有。未見之萌。得無不知無不見無不聞。得一切智。可謂明乎

佛言。人懷愛欲不見道。譬如濁水以五彩投其中致力攪之。衆人共臨水上無能覩其影者。愛欲交錯心中爲濁故不見道。水澄穢除淸淨無垢卽自見形。猛火著釜下中水踊躍。以布覆上衆生照臨亦無覩其影者。心中本有三毒涌沸在内。五蓋覆外。終不見道。要心垢盡乃知魂靈所從來生死所趣向。諸佛國土道德所在耳

佛言。夫爲道者。譬如持炬火入冥室中。其冥卽滅而明猶在。學道見諦。愚癡都滅。得無不見

佛言。吾何念念道。吾何行行道。吾何言言道。吾念諦道。不忽須臾也

佛言。覩天地念非常。覩山川念非常。覩萬物形體豐熾念非常。執心如此得道疾矣

佛言。一日行常念道行道。遂得信根。其福無量

佛言。熟自念身中四大名自有名都爲無。吾我者寄生。生亦不久。其事如幻耳

佛言。人隨情欲求華名。譬如燒香衆人聞其香。然香以熏自燒。愚者貪流俗之名譽。不守道眞。華名危己之禍。其悔在後時

佛言。財色之於人。譬如小兒貪刀刃之蜜甜。不足一食之美。然有截舌之患也

佛言。人繫於妻子寶宅之患。甚於牢獄桎梏鋃鐺。牢獄有原赦。妻子情欲雖有虎口之禍。已猶甘心投焉。其罪無赦

佛言。愛欲莫甚於色。色之爲欲。其大無外。賴有一矣。假其二。普天之民無能爲道者

億下同無不如乃至千億十六字○親○親矣同作二親○制宋元俱作利明作判○難下明有忍色乃至非難七十五字卷末出之○形下同有相字○存宋元俱作在○怨三本俱作惡○人宋作最○見之萌明作甞不見○道下同有者字○攪宋作捁字○影下明無者字○道下同有若人漸解懺悔來近知識十字○踊同作涌○涌宋作踊○三本俱作惡○要在同作存○得無不見明作無不明矣○忽三本俱作忘○萬宋作方○生下三本俱無生字○鋃鐺宋元俱作郎當明作桹檔○二下明有同字

也下同有時有二字○斯元明俱作誑○踰明作愈○洄宋元俱作迴○意下明有汝字○會下同無與字○視宋元俱作見○者下明有以字○爲宋元俱作如○子同作如女二字明作與○唯宋元俱作惟○意同作音同下明無矣字○火三本俱作大○却明作劫○若下同有仕字○道元作逨○鉀明作甲○膽宋作噡○于明作於○甚乃至歸十字明作其聲悲緊欲悔思返八字○恒同作常○絃同作弦次同○如下明有曰字○悲宋元俱作矣明作調○棄明作垂○槃同作異

佛言。愛欲之於人。猶執炬火逆風而行。愚者不釋炬。必有燒手之患。貪婬恚怒愚癡之毒。處在人身。不早以道除斯禍者。必有危殃。猶愚貪執炬自燒其手也。天神獻玉女於佛。欲以試佛意觀佛道。佛言。革囊衆穢。爾來何爲。以可斯俗難動六通。去吾不用爾。天神踰敬佛。因問道意。佛爲解釋。卽得須陀洹

佛言。夫爲道者。猶木在水尋流而行。不左觸岸。亦不右觸岸。不爲人所取。不爲鬼神所遮。不爲洄流所住。亦不腐敗。吾保其入海矣。人爲道不爲情欲所惑。不爲衆邪所誑。精進無疑。吾保其得道矣

佛告沙門。愼無信汝意。意終不可信。愼無與色會。與色會卽禍生。得阿羅漢道。乃可信汝意耳

佛告諸沙門。愼無視女人。若見無視。愼無與言。若與言者。敕心正行。曰吾爲沙門處于濁世。當如蓮華不爲泥所汙。老者以爲母。長者以爲姊。少者爲妹。幼者子。敬之以禮。意殊當諦惟觀。自頭至足自視內。彼身何有。唯盛惡露諸不淨種。以釋其意矣

佛言。人爲道去情欲。當如草見火。火來已却。道人見愛欲。必當遠之

佛言。人有患婬情不止。踞斧刃上。以自除其陰。佛謂之曰。若斷陰不如斷心。心爲功曹。若止功曹。從者都息。邪心不止斷陰何益。斯須卽死。佛言。世俗倒見。如斯癡人。有婬童女與彼男誓。至期不來而自悔曰。欲吾知爾本意。以思想生。吾不思想爾。卽爾而不生。佛行道聞之謂沙門曰。記之。此迦葉佛偈。流在俗閒。佛言。人從愛欲生憂。從憂生畏。無愛卽無憂。不憂卽無畏

佛言。人爲道譬如一人與萬人戰。被鉀操兵出門欲戰。意怯膽弱乃自退走。或半道還。或格鬬而死。或得大勝還國高遷。夫人能牢持其心。精銳進行不惑于流俗狂愚之言者。欲滅惡盡。必得道矣

有沙門夜誦經甚悲。意有悔疑。欲生思歸。佛呼沙門問之。汝處于家將何修爲。對曰。恒彈琴。佛言。絃緩何如。曰不鳴矣。絃急何如。曰聲絕矣。急緩得中何如。諸音普悲。佛告沙門。學道猶然。執心調適道可得矣

佛言。夫人爲道猶所鍛鐵漸深。棄去垢成器必好。學道以漸深去心垢。精進就道。暴卽身疲。身疲卽意惱。意惱卽行退。行退卽修罪

佛言。人爲道亦苦。不爲道亦苦。惟人自生至老。自老至病。自病至死。其苦無量。心惱積罪。生死不息。其苦難說

佛言。夫人離三惡道得爲人難。既得爲人去女卽男難。既得爲男六情完具難。六情已具生中國難。既處中國値奉佛道難。既奉佛道値有道之君難。生菩薩家難。既生菩薩家以心信三尊値佛世難

佛問諸沙門。人命在幾閒。對曰。在數日閒。佛言。子未能爲道。復問一沙門。人命在幾閒。對曰。在飯食閒。佛言。子未能爲道。復問一沙門。人命在幾閒。對曰。呼吸之閒。佛言。善哉。子可謂爲道者矣

佛言。弟子去離吾數千里。意念吾戒必得道。在吾左側意在邪終不得道。其實在行。近而不行。何益萬分耶

佛言。人爲道猶若食蜜中邊皆甜。吾經亦爾。其義皆快。行者得道矣

佛言。人爲道能拔愛欲之根。譬如摘懸珠。一一摘之。會有盡時。惡盡得道也

佛言。諸沙門行道。當如牛負行深泥中。疲極不敢左右顧。趣欲離泥以自蘇息。沙門視情欲。甚於彼泥。直心念道可免衆苦

佛言。吾視諸侯之位。如過客。視金玉之寶。如礫石。視氎素之好。如弊帛

難下同有既値有道之君六字〇佛言同作去一字

在吾左同作若在吾

諸同作王〇過客同作塵隙〇礫石同作瓦礫〇氎同作執〇好同作服〇帛下同有視乃至水八十字卷末出之

四十二章經

佛說尸迦羅越六方禮經

〔麗淵〕〔宋澄〕〔元澄〕〔明福〕

後漢安息國三藏安世高譯

經題下明有長阿含善生經別譯八字其八字宋元俱在譯號下〇譯號安息國三藏三本俱作沙門二字

向天同作仰向

其征伀同作甚怔忪

當同作常次同

善宋作言

卒三本俱作悴

斂明作殮

佛在王舍國鷄山中。時有長者子。名尸迦羅越。早起嚴頭。洗浴著文衣。東向四拜。南向四拜。北向四拜。北向四拜。向天四拜。向地四拜。佛入國分衞遙見之。往到其家問之。何爲六向拜。此應何法。尸迦羅越言。父在時敎我六向拜。不知何應。今父喪亡。不敢於後違之。佛言。父敎汝使六向拜。不以身拜。尸迦羅越便長跪言。願佛爲我解此六向拜意。佛言。聽之內著心中。其有長者黠人能持四戒不犯者。今世爲人所敬。後世生天上。一者不殺諸群生。二者不盜。三者不愛他人婦女。四者不妄言兩舌。心欲貪婬恚怒愚癡自制勿聽。不能制此四意者。惡名日聞。如月盡時光明稍冥。能自制惡意者。如月初生其光稍明。至十五日盛滿時也。佛言。復有六事。錢財日耗減。一者喜飮酒。二者喜博掩。三者喜早臥晚起。四者喜請客。亦欲令人請之。五者喜與惡知識相隨。六者憍慢輕人。犯上頭四惡復行是六事妨其善行。亦不得憂治生。錢財日耗減。六向拜當何益乎。佛言。惡知識有四輩。一者內有怨心。外强爲知識。二者於人前好言語。背後說言惡。三者有急時。於人前愁苦。背後歡喜。四者外如親厚。內興怨謀。善知識亦有四輩。一者外如怨家。內有厚意。二者於人前直諫。於外說人善。三者病瘦縣官爲其征伀憂解之。四者見人貧賤。不棄捐當念。求方便欲富之。惡知識復有四輩。一者難諫曉敎之作善故與惡者相隨。二者敎之莫與喜酒人爲作故。與嗜酒人相隨。三者敎之自守益更多事。四者敎之與賢者爲友故與博掩子爲厚。善知識亦有四輩。一者見人貧窮卒乏令治生。二者不與人諍計校。三者日往消息之。四者坐起當相念。善知識復有四輩。一者爲史所捕。將歸藏匿之。於後解決之。二者有病瘦。將歸養視之。三者知識死亡。棺斂視之。四者知識已死。復念其家。善知識復有四輩。一者欲鬭止之。二者欲隨惡知識諫止之。三者不欲治生勸令治生。四者不喜經道。敎令信喜之。惡知識復有四輩。一者小侵之便大怒。二者有所倩使之不肯行。三者見人有急時避人走。四者見人死亡

書宋作盡
謂三本俱作諸○難同作歎次同
蓋同作善○傅宋元俱作傳○北宋作比○人下三本俱無視字
意同作憶
犯下同無色字
知同作如
著同作者

棄不視。佛言。擇其善者從之。惡者遠離之。我與善知識相隨。自致成佛。佛言。東向拜者。謂子事父母。當有五事。一者當念治生。二者早起勑令奴婢。時作飯食。三者不益父母憂。四者當念父母恩。五者父母疾病。當恐懼求醫師治之。父母視子亦有五事。一者當念令去惡就善。二者當教計書疏。三者當教持經戒。四者當早與娶婦。五者家中所有當給與之。南向拜者。謂弟子事師當有五事。一者當敬難之。二者當念其恩。三者所教隨之。四者思念不厭。五者當從後稱譽之。師教弟子亦有五事。一者當令疾知。二者當令勝他人弟子。三者欲令知不忘。四者諸疑難悉爲解說之。五者欲令弟子智慧勝師。西向拜者。謂婦事夫有五事。一者夫從外來。當起迎之。二者夫出不在。當炊蒸掃除待之。三者不得有婬心於外夫。罵詈不得還罵作色。四者當用夫教誡。所有什物不得藏匿。五者夫休息蓋藏乃得臥。夫視婦亦有五事。一者出入當敬於婦。二者飯食之以時節與衣被。三者當給與金銀珠璣。四者家中所有多少悉用付之。五者不得於外邪畜傅御。北向拜者。謂人視親屬朋友。當有五事。一者見之作罪惡。私往於屏處。諫曉呵止之。二者小有急。當奔趣救護之。三者有私語。不得爲他人說。四者當相敬難。五者所有好物。當多少分與之。向地拜者。謂大夫視奴客婢使亦有五事。一者當以時飯食與衣被。二者病瘦當爲呼醫治之。三者不得妄撾捶之。四者有私財物。不得奪之。五者分付之物當使平等。奴客婢使事大夫亦有五事。一者當早起勿令大夫呼。二者所當作自用心爲之。三者當愛惜大夫物。不得棄捐乞匃人。四者大夫出入當送迎之。五者當稱譽大夫善不得說其惡。向天拜者。謂人事沙門道士。當用五事。一者以善心向之。二者擇好言與語。三者以身敬之。四者當戀慕之。五者沙門道士人中之雄。當恭敬承事問度世之事。沙門道士當以六意視凡民。一者教之布施。不得自慳貪。二者教之持戒。不得自犯色。三者教之忍辱。不得自恚怒。四者教之精進。不得自憍慢。五者教人一心。不得自放意。六者教人黠慧。不得自愚癡。沙門道士教人去惡爲善。開示正道。恩大於父母。如是行之。爲知汝父在時六向拜之教也。何憂不富乎。尸迦羅越卽受五戒。作禮而去。佛說唄偈

鷄鳴當早起　被衣來下牀　澡漱令心淨　兩手奉花香
佛尊過諸天　鬼神不能當　低頭遶塔寺　叉手禮十方
賢者不精進　譬如樹無根　根斷枝葉落　何時當復連
採華著日中　能有幾時鮮

自元明俱作有

命三本俱作今

放心自縱意　命過復何言　人當慮非常　對來無有期　犯過不自覺　命過爲自欺　今當入泥犁
何時有出期　賢者受佛語　持戒愼勿疑　佛如好華樹　無不愛樂者　處處人民聞　一切皆歡喜
令我得佛時　願使如法王　過度諸生死　無不解脫者　戒德可恃怙　福報常隨己　現法爲人長
終遠三惡道　戒愼除恐畏　福德三界尊　鬼神邪毒害　不犯有戒人　墮俗生世苦　命速如電光
老病死時至　對來無豪强　無親可恃怙　無處可隱藏　天福尙有盡　人命豈久長　父母家室居
譬如寄客人　宿命壽以盡　捨故當受新　各追所作行　無際如車輪　起滅從罪福　生死十二因
現身遊免亂　濟育一切人　慈傷墜衆邪　流沒于深淵　勉進以六度　修行致自然　是故稽首禮
歸命天中天　人身旣難得　得人復嗜欲　貪婬於意識　痛想無厭足　豫種後世栽　歡喜詣地獄
六情幸完具　何爲自困辱　一切能正心　三世神吉祥　不與八難貪　隨行生十方　所生輒精進
六度爲橋梁　廣勸無極慧　一切蒙神光

佛說尸迦羅越六方禮經

譯號天竺三藏三本俱作西域三藏沙門○長上同有得字○妐宋作翁元明俱作公○依三本俱作從○日唯宋作唯日○剛上三本俱有一切二字○且同作早○禮節同作婦禮○接宋作犍○迎三本俱作近○見明作照○紫金宋作色紫○暉暉三本俱作煒煒○在同作住○却同作去○姤同作垢○夫明作失○所三本俱作禁○賤身同作下賤○閑同作知○姑妐宋作翁姑元明俱作公姑下同○晩三本俱作後○念夫同作得念○而同作取○欲敎呵同作若訶敎

玉耶經

〔麗思〕〔宋言〕〔元言〕〔明慶〕

東晉天竺三藏竺曇無蘭　譯

聞如是.一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園.佛爲四輩弟子說法.時給孤獨家.先爲子娶婦長者家女.女名玉耶.端正姝好而生憍慢.不以婦禮承事姑妐夫壻.給孤長者夫妻議言.子婦不順不依法禮.設加杖捶不欲行此.置不教訶其過轉增.當如之何.長者曰.唯佛大聖善能化物.剛强弜伏無敢不從.請佛來化.妻言大善.明旦嚴服往詣佛所.頭面著地前白佛言.我家爲子娶婦甚大憍慢.不以禮節承事我子.唯願世尊.明日自屈.將諸弟子到舍中飯.幷爲玉耶說法.令心開解改過行善.佛告長者.善哉善哉.給孤長者聞佛受請歡喜禮佛接足而去.歸舍齋戒供辦中飯.明日佛與千二百五十弟子到長者家.長者歡喜迎佛作禮.佛坐已定.大小皆出禮佛却住.玉耶逃藏不肯禮佛.佛卽變化.令長者家屋宅牆壁.皆如琉璃水精之色內外相見.玉耶見佛有三十二相八十種好.身紫金色光明暉暉.玉耶惶怖心驚毛竪.卽出禮佛頭頂懺悔却在右面.佛告玉耶.女人不當自恃端正輕慢夫壻.何謂端正.除却邪態八十四姤.定意一心是爲端正.不以顏色面目髮綵爲端正也.女人身中有十惡事.何等爲十.一者女人初生墮地父母不喜.二者養育視無滋味.三者女人心常畏人.四者父母恒憂嫁娶.五者與父母生相離別.六者常畏夫壻視其顏色.歡悅輙喜.瞋恚則懼.七者懷姙產生甚難.八者女人小爲父母所檢錄.九者中爲夫壻所制.十者年老爲兒孫所訶.從生至終不得自在.是爲十事.女人不自覺知.玉耶長跪叉手白佛.稟受賤身不閑禮儀.唯願世尊.具說教訓爲婦之法.佛告玉耶.婦事姑妐夫壻.有五善三惡.何等爲五善.一者爲婦當晚臥早起.櫛梳髮綵整頓衣服.洗拭面目勿有垢穢.執於作事先啓所尊.心常恭順.設有甘美不得先食.二者夫壻訶罵不得瞋恨.三者一心守夫壻.不得念邪婬.四者常願夫壻長壽.出行婦當整頓家中.五者常念夫善不念夫惡.是爲五善.何等爲三惡.一者不以婦禮承事姑妐夫壻.但欲美食先而噉之.未冥早臥日出不起.夫欲教呵瞋目

猶同作獨○有上同有復字○婦下同有何等爲七輩五字○解宋作能○不三本俱作無○子宋作母○敬三本俱作教○相上同有相親二字○命同作令○專同作意○分邪同作邪○眄○精同作直○恭悋同作謙○恭○言同作語○敬奉同作奉○敬○婢上同有如字○無同作雖爲二字○忌同作避○可同作肯○狀如同作如狀次同○里宋作理次同○恚三本俱作毒○是同作使○夫同作人○欲三本俱作之○侯王同作王侯○惡同作二○臥起宋作起臥○神三本俱作魄

視夫.應拒猶罵.二者不一心向夫壻.但念他男子.三者欲令夫死早得更嫁.是爲三惡.玉耶默然無辭答佛.佛告玉耶.世閒有七輩婦.一婦如母.二婦如妹.三婦如善知識.四婦如婦.五婦如婢.六婦如怨家.七婦如奪命.是爲七輩婦.汝豈解乎.玉耶白佛.不知七婦盡何所施行.願佛爲解之.佛告玉耶.諦聽諦聽善思念之.吾當爲汝分別解說.何等爲母婦.母婦者.愛念夫壻猶若慈母.侍其晨夜不離左右.供養盡心不失時宜.夫若行來恐人輕易.見則憐念心不疲厭.憐夫如子.是爲母婦.何等爲妹婦.妹婦者.承事夫壻盡其敬誠.若如兄弟同氣分形.骨肉至親無有二情.尊奉敬之如妹事兄.是爲妹婦.何等爲善知識婦者.侍其夫壻愛念懇至.依依戀戀不能相棄.私密之事常相告示.見過依訶令行無失.善事相敬使益明慧.相愛欲令度世如善知識.是爲善知識婦.何等爲婦婦者.供養大人竭誠盡敬.承事夫壻謙遜順命.夙興夜寐恭恪言命.口無逸言身無逸行.有善推讓過則稱己.誨訓仁施勸進爲道.心端專一無有分邪.精修婦節終無闕廢.進不犯儀退不失禮.唯和爲貴.是爲婦婦.何等爲婢婦者.常懷畏愼不敢自慢.兢兢趣事無所避憚.心常恭恪忠孝盡節.言以柔軟性常和穆.口不犯麤邪之言.身不入放逸之行.貞良純一質朴直信.恒自嚴整.以禮自將夫壻.納幸不以憍慢.設不接遇不以爲怨.或得捶杖分受不恚.及見罵辱默而不恨.甘心樂受無有二意.勸進所好不妬聲色.遇己曲薄不訴求直.務修婦節不擇衣食.專精恭恪唯恐不及.敬奉夫壻婢事大家.是爲婢婦.何等爲怨家婦者.見夫不歡恒懷瞋恚.晝夜思念欲得解離.無夫婦心常如寄客.狺狺鬪諍無所畏忌.亂頭墮臥不可作使.不念治家養活兒子.或行婬蕩不知羞恥.狀如犬畜毀辱親里.譬如怨家.是爲怨家婦.何等爲奪命婦者.晝夜不寐恚心相向.當何方便得相遠離.欲與毒藥恐人覺知.或至親里遠近寄之.作是瞋恚常共賊之.若持寶物雇人害之.或使傍夫伺而殺之.怨枉夫命.是爲奪命婦.是爲七輩婦.玉耶默然.佛告玉耶.五善婦者常有顯名.言行有法衆人愛敬.宗親九族並蒙其榮.天龍鬼神皆來擁護使不枉橫.萬分之後得生天上七寶宮殿.在所自然侍從左右.壽命延長恣意所欲快樂難言.天上壽盡下生世閒.當爲富貴侯王子孫.端正聰慧人所奉尊.其惡婦者常得惡名.令現在身不得安寧.數爲惡鬼衆毒所病.臥起不安惡夢驚怖.所願不得多逢災橫.萬分之後魂神受形.當入地獄餓鬼畜生.展轉三塗累劫不竟.佛告玉耶.是七輩

行何同作何行○以同作已○妐宋作翁元明俱作公○過下三本俱有過字○一戒同作戒一○物上同無財字○婬下同有泆犯二字○飮酒同作兩舌○妄語同作飮酒○當信作三字同作信○皆下同無悉字○姑妐同作公姑○玉上同無其字○飮宋元俱作飯○福下三本俱無德字○竟同作訖○噠同作達○耶下同有言字○退同作去

婦汝欲行何.玉耶流涕前白佛言.我心愚癡無智所作.自今以後改往修來.當如婢婦奉事妐姑夫.壻盡我壽命不敢憍慢.佛告玉耶.善哉善哉.人誰無過能改者.善莫大焉.玉耶卽前請受十戒爲優婆夷.佛告玉耶.持一戒者不得殺生.二者不得偸盜取他人財物.三者不得婬他男子.四者不得飮酒.五者不得妄語.六者不得惡罵.七者不得綺語.八者不得嫉妬.九者不得瞋恚.十者當信作善得福作惡得罪.信佛信法信比丘僧.是爲十戒優婆夷法.終身奉行不敢違犯.佛說經已.諸弟子皆悉作禮.給孤長者姑妐大小及其玉耶.盡行澡水供養佛百味飮食.佛告玉耶.當信布施常得其福德.後世當復生長者家.玉耶言諾.佛飯畢竟.噠嚫呪願.五十善神擁護汝身.佛告玉耶.勤念經戒.玉耶言.我蒙佛恩得聞經法.皆前爲佛作禮而退

玉耶經

大正六年十二月二十日印刷
大正六年十二月二十三日發行
大正七年七月二十日再版發行
昭和二年六月二十日三版發行

（岡山製本）

國譯大藏經　經部第十一卷

【非賣品】

編輯兼發行者　國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者　鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者　君島潔
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所　共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　國民文庫刊行會
電話神田一五三五番　一八三八番
振替東京一八五七二番